
天元突破インフィニット・ストラトス

ブルーノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天元突破インフィニット・ストラトス

【Nコード】

N9786V

【作者名】

ブルーノア

【あらすじ】

これは…………… 女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と…………… それに付き従う女達の物語である…………… 色んな方のIS作品に触れている内に、私も書いてみたくなって作ってみました。クロス作品が作品だけに、原作が崩壊どころか、天元突破します。更にこの作品には『螺旋力万能説』、『ゲッター線成分』、『今川だからしょうがない』、『ゴルゴムの仕業』、『そのときふしぎな事が起こった』、『昭和の香り』、『こまけえこたあいいんだよ!』、『ご都合主義』、『超展開』等と言った混沌成分が

含まれます。基本的な流れは、熱血王道路線で行きますが、上記の成分が受け付けない方には、お勧め出来ません。それでも良いという方のみ読んで行って下さい。

第1話『お前の剣は、天を斬り裂く剣なんだよ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第1話『お前の剣は、天を斬り裂く剣なんだよ!!』

俺の名前は織斑 一夏……………

俺には両親が居ない……………

いや、正確に言えば、分からないと言った方が良いかもしれない…

……………

俺の両親は、俺が物心つく前に、俺と俺の姉……………織斑 千冬を捨てたらしい……………

以来……………

俺はずっと千冬姉と2人暮らして来た……………

千冬姉は、そんな俺を気遣ってか、俺を鍛えようとしてくれた……………

でも、まだ幼かった俺には、それが理解出来なくて、千冬姉の事を恨んだ……………

ある日、千冬姉の稽古に嫌気が差した俺は、千冬姉の前から逃げ出した……………

けど、行く当てもなくて、近所をウロウロとしていた……………

後悔で俯いて歩いていた俺は、前に人が居るのに気づかず、そのまままぶっかった……………

「上を向いて歩け、一夏！」

俺がぶつかつた相手は、俯いていた俺にそう言って来た。

「あ、神谷……………」

「神谷じゃねえ！ アニキって呼べ！！」

それは天上てんじょう 神谷かみや……………」

近所に住む、2つ年上の幼馴染だった。

「俺と神谷は兄弟じゃないし……………」

「そういう事じゃねえ！ 魂のブラザー！ ソウルの兄弟って事じゃねえか！！」

神谷は……………アニキは俺と同じで、両親が居なかった……………」

オマケに俺と違って姉や兄も居ない……………」

本当に天涯孤独だった……………」

でも、アニキは1人で逞しく生きていた。

俺と2つしか変わらないなんて思えない程、アニキは堂々としていた。

「……………成程。剣の稽古が嫌で逃げ出したってか」

「千冬姉は厳しいんだよ……………俺は千冬姉みたいになれないよ」

「確かになあ……………お前はアイツにはなれねえ」

「だろ？ アニキだってそう思うよね？」

「そう！ お前はお前だ！ お前にはお前自身の強さがある筈だ！
！」

「ア、アニキ？……………」

「一夏！ お前の剣は、天を斬り裂く剣なんだよ！！」

天を指差し、俺にそう言って来るアニキ。

「……………如何して？」

「俺には分かる！ 理由は聞くな！」

「説明……………できないんだ……………」

アニキは何時も無茶苦茶だった……………

でも……………

不思議と俺は、そんなアニキの言葉が信じられた……………

何時しか俺は、アニキを本当の兄の様に慕う様になっていた……………

そんなある日……………

千冬姉が、アニキを呼び出した……………

アニキは近所や学校では、札付きの不良だと思われていた……………

そんなアニキが俺に近づいているのが許せなかったらしい……………

千冬姉はアニキに、2度と俺に近づくなと言った……

当然アニキは拒んだ……

そして……

2人は何故か夕日の河原で殴り合いを始めた……

自慢じゃないけど、俺の姉さんは強い……

篠ノ之 冪って言う幼馴染の姉・篠ノ之 束が開発したパワードス
ーツ……

『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』の世界大会……
モンド・グロツソで、優勝した事もある……

それにアニキよりもずっと年上だし……

俺はアニキが負けると思っていた……

けど……

アニキはそんな千冬姉と互角に渡り合っていた……

ISを使っただけとは言え、千冬姉をあそこまでボコボコにしたのは、アニキが初めてだった……

勿論、アニキもボロボロにされていたけど……

結局、日が落ちる頃には、2人とも大の字になって力尽きていた……

「へっ、やるじゃねえか……」

「お前こそ……良いパンチだったぞ」

そして、そう言いながら起き上がり、ガツチリと握手を交わした……

……

俺はその日、昔の少年漫画の様な光景を現実で目撃する事となった……

結局……………

千冬姉はアニキの事を認めただけ……………

何かがあると、兎に角俺を連れ出すんで、何時しか頭痛と神経性胃炎を抱える事になった……………

連れ出された俺も俺で……………

色々大変な目に遭わされたりした……………

「アニキ！ 無理だよ！！ 高校生の不良グループを全員叩きのめすなんて！！」

「バカ野郎！ 無理を通して道理を蹴っ飛ばすんだよ！ それが俺達、グレン団のやり方だろうが！！」

「でも……………」

「良いか、一夏！ 自分を信じるな！」

「えっ？……………」

「俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！！」

何時もこんな感じで、俺はアニキの無茶に付き合わされた……………

でも、俺は益々アニキを慕って行った……………

そして……

セカンド幼馴染の凰　鈴音が故郷の中国へ帰国して間も無くの頃のある日……

俺は何者かに誘拐された……

丁度その日は、第2回モンド・グロツソ決勝戦当日であり……

誘拐犯は多分、千冬姉を優勝させたくない連中だったんだろう……

アニキと一緒に、色々な奴と喧嘩を繰り広げて来た俺だったけど、流石にこの時ばかりはもう駄目だと思った……

流石のアニキも今回はかりは無理だと……

でも……

アニキは来た……………

「やいやいやいやいやい！ 人の可愛い弟分を誘拐するたあ、ふてえ野郎だ！！ この泣く子も黙るグレン団の鬼リーダー！ 神谷様が成敗してやるぜ！！」

全身に切り傷や銃傷を負って、血塗れの姿で俺の前に現れ……………

何時もの様に啖呵を切ってみせた……………

如何見ても死に体だった……………

でも……………

その姿は、俺にはどんなヒーローよりもカッコ良く見えた……………

結局、その後に駆け付けて来た千冬姉の助けもあって、俺は無傷で解放された……………

けど……………

その時逮捕された誘拐犯の1人が、アニキを見て妙な事を口走った……………

「貴様……………天上博士の息子が……………」

アニキは珍しく驚きを露わにしていた……

死んだとばかり思っていた父親の名前が、俺を誘拐した連中の口から出た事に……

後で知った話だけど……

アニキの父親は、束さんにも匹敵する天才科学者だったらしい……

それ以上詳しい事は分からなかったけど……

それから少しして……

アニキは突然旅に出ると言ってきた……

理由は、父親を探す為だそうだ……

「親父は生きている……そして何かヤベー事に関わってやがる！
息子の俺には……それを知る義務がある」

突然の事に俺は戸惑った……

必死に行かないでくれとアニキに泣き付いた……………

その頃には、千冬姉はあんまり家に帰らなくなっていて、篝も鈴ももう居なかった俺には……………

アニキまでもが居なくなると言う事に耐えられなかった……………

「バカ野郎！ 何時までも俺の背中を追ってんじゃねえ！！ お前はお前の道に行く時が来る！！ そして！ 俺は俺の道に行く時が来たのさ！！！」

「アニキ……………」

「ホラよ、一夏。コレ、やるよ」

そうやってアニキは、いつも掛けていたV字型の赤いサングラスを俺に手渡した。

「コレ、アニキの……………」

「忘れるなよ、一夏。お前を信じる。俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる……………お前を信じる！！！」

そうやって、アニキは何時もの様に天を指差した。

「俺達の道は、何れ天で再び交わる！！ それが俺とお前の再開の時だ！！ それまで……………あばよ、ダチ公」

「アニキーッ！！！」

こうして……………

アニキは俺の前から去って行った……………

けど……………

俺は立ち止まらなかった……………

立ち止まったら、もうアニキとは2度と会えない……………

アニキは言っていた……………

俺達の道は、何れ天で再び交わる……………

それが俺とお前の再開の時だって……………

その時までには、アニキに恥ずかしくない様な……………

立派な男になると……………

アニキの様な……………

デッカイ男になると……………

どんな事があっても、決して挫けない奴になる……！

……でも、

「アレが織斑　一夏くんよ」

「世界で唯一、男でISを動かしたって言う」

「結構………カッコ良いかも」

俺に突き刺さる何十人もの子の好奇の視線………

アニキ……………

流石にコレはキツイよ……………

うう、う

第1話『お前の剣は、天を斬り裂く剣なんだよ!!』(後書き)

どうも、初めまして。

作者のブルーノアと申します。

色んな方のISの二次創作を見ている内に、自分もハマリ、作ってみました。

短くてすみませんが、2話目からは適切な長さになります。

物書き歴は某サイトで数年続けており、それなりにありますが、文章力があるかは別問題です。

熱血的なノリで行こうと思い、グレンラガンとのクロスを考えました。

原作主人公の一夏のアニキこと神谷が主人公です。

神谷って名前にしてしますが、グレンラガンでのカミナその人だと思っして下さい。

最初は名前もそのままにカミナにしようかと思ったのですが、作者はカミナにはヨーコと思っているので、若干抵抗があり、ちょっと名前を変えさせてもらいました。

ご了承下さい。

また、基本的な流れはIS原作に沿いますが、随所にオリジナル展開を入れ、学園祭以降には殆どオリジナル展開になる予定です。所謂原作崩壊ですので、鑑賞になる際はご注意下さい。

あんまり複雑な話を書くのは得意でないので、基本的にノリと勢いで押して行く作品になります。

ご了承下さい。

では、「意見」「感想をお待ちしております。

第2話『お、俺を誰だと思ってやがる!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第2話『お、俺を誰だと思ってやがる!!』

インフィニット・ストラトス……………

通称『IS』……………

天才科学者、篠ノ之 束が開発したマルチフォーム・スーツ……………

当初は、宇宙空間での活動を想定した、宇宙開発の為の発明であったが……………

ISの発表から1ヶ月後……………

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ……………

2341発以上のミサイルが発射されると言う事件が発生した……………

この在り得ない事態に、各国は日本の最後を予感した……………

しかし……………

その時現れた謎のIS『白騎士』が、全てのミサイルを迎撃した……………

……………

その後、その『白騎士』捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や艦船を送り込んだもの……………

『白騎士』はそれ等を全て退けた……………

しかも、1人の人命も奪う事無くに……………

この事件により、ISは世界最強の兵器として認識された……

しかし、強大な兵器は、世界のパワーバランスを崩す事となる為……

……

ISの軍事利用を禁止する『アラスカ条約』が締結された……

現在ISは、スポーツ競技の一部としている……

だが、それでもISが世界最強の兵器であるという事実は変わらない……

更に、製作者に如何なる意図が有ったのか不明だが……

ISは女性にしか使えないと言う特性を持っていた……

その為、徐々にながらも男女平等を実現してきていた社会は……

一瞬にして女尊男卑の世界となった……

そんな中……

世界で初めて、ISを起動させた男性……

『織斑 一夏』が現れた。

世界が彼の謎を知りたいと思う中……

当の本人は……

IS学園・1年1組の教室……

「……………」

複数の女子の好奇の視線に曝され、冷や汗を流しまくっていた……

（どろどろしてこんな事に……………」

自問自答する一夏。

(私立藍越学園を受験する筈が……間違つてIS学園の試験会場に入つてしまい……偶然間違えて入つた部屋にあつた受験者用のISを起動させてしまうなんて……)

一夏は、IS学園に来る事になつてしまった経緯を思い出す。

しかし、それで状況が変わるワケもなく、相変わらず好奇の視線が突き刺さつて来ている。

「織斑 一夏くんかあ……うん、イケメンだね」

「うんうん、ホントホント」

「まさか男でISを使えるなんて……何か秘密が有るのかな？」
ヒソヒソと小声で話し始める女子達。

「でも……何だろう？ あの背中マーク？」

と、女子の1人が、そう指摘した。

現在一夏が来ているのは、特注されたIS学園の男子用制服である。

しかし……

その背中に、後付けされたと思われる、奇妙なマークが入っていた。

そのマークとは……

『燃え上がる炎に見立てた髑髏が、V字型のサングラスを掛けているマーク』という物だった。

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の『山田 真耶』です」と、そこで……

教壇に立った、小柄ながらも豊富なバストをした、グリーンの一トヘアーで眼鏡を掛けた女性……

副担任の『山田 真耶』が、そう自己紹介をする。

「……………」

しかし、クラス全員の視線は、相変わらず一夏に注がれており、ノリアクションだった。

「あ、え……………きよ、今日から皆さんは、このIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも、放課後も一緒です。仲良く助け合って、楽しい3年間にしましょうね」

真耶はそれに戸惑いながらも、挨拶を続ける。

「……………」

しかし、生徒達は相変わらずノリアクションである。

「じ、じゃあ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で……………」

真耶は若干泣きそうになりながらも、如何にか話を進行させる。

(クソツ！ しっかりしろ、織斑 一夏！ お前は男だろ！！ いや、男だからこそ、この状況が困っているんだが……………いや、そうじゃなくて！！)

そんな中でも、考えが頭の中を堂々巡りする一夏。

(アニキ……………俺……………如何したら……………)

「……………斑くん。織斑 一夏くん！」

「！？ ハツ！？ ハイツ！？」

と、そこで真耶の声が耳に飛び込んで来て、思わず上ずった声を出してしまう一夏。

女子達がクスクスと笑い声を漏らす。

「あの〜、大声出しちゃってゴメンなさい。でも、『あ』から始まって、今『お』なんだよねえ。自己紹介してくれるかな？ 駄目かなあ？」

「いや、その……………そんなに謝らなくても……………」

真耶にそう言いながら、一夏は席を立ち上がる。

「え〜と……………織斑 一夏です。よろしくお願いします」

そして自己紹介をする。

すると……………

クラス全員の視線が、好奇から期待へと変わった。

(グウツ!? こ、こんな時……………アニキだったら……………)

それに戸惑いながらも、如何すれば良いのかと頭を巡らせる。

そして、準備を整えるかの様に、大きく息を吸い込んだ。

クラス全員の期待が、更に高まる。

「……………お、俺を誰だと思ってやがる!!」

一夏はクラス中に響き渡る様に、そう叫んだ!!

「……………」

クラス全員が、啞然とした表情を浮かべた。

正に、『何を言っているんだ? コイツ?』状態である。

「あ、アレ?……………」

思った反応と違い、困惑する一夏。

すると……………

一夏の脳天に、突如拳骨が見舞われた!

「ぐふっ!?……………イツツツ……………!? げえっ!? 千冬姉!」

激痛を感じながら一夏が視線を挙げるとそこには、彼の唯一の肉親である姉、『織斑 千冬』の姿が在った。

しかし……………

千冬は今度は出席簿(角)で、一夏の脳天をブツ叩いた。

「……………っ!?」

悶絶しそうになる痛みが一夏を襲つ。

「学校では織斑先生だ……………全く……………あの男から要らぬ影響ばかり受けおつて……………」

そんな一夏に向かってそう注意する千冬。

「先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

真耶とそう会話を交わすと、彼女と代わる様に教壇に立つ千冬。

「諸君! 私が担任の織斑 千冬だ! 君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

そして、生徒達全員に向かってやや高圧的にそう言い放つ。

「……………で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は？」

するとそこで、千冬は一夏に向き直り、拳を握りながらそう言ってきた。

「い、いや、千冬姉。俺は……………」

それに対して、一夏が何か言おうとしたところ……………

「!?!? うがつ!?!?」

思いつきり頭を机に叩き付けられた。

「織斑先生と呼べ」

「……………ハイ、織斑先生」

(え？ 織斑くんって、あの千冬様の弟?)

(それじゃあ、世界で唯一男でISを使えるっていうのも、それが関係してるって事?)

その光景に、またも生徒達はヒソヒソ話を再開する。

「静かに!?!」

と、千冬がそんな生徒達を一喝する。

「諸君等には、これからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが……………基本動作は半月で身体に染み込ませる。良いか

世界で初めてISを動かした男性である一夏を見ようと他のクラス、そして上級生までもが、1年1組へと詰めかけていた。

(誰かこの状態から助けてくれ……………)

一夏にしてみれば、この状況は苦痛以外の何ものでもなかった……………と、そんな一夏の前に……………

最前列の窓際の席に座って居た長い黒髪とポニーテールが特徴で、平均的な女子の身長でありながら長身を思わせる少女……………

『篠ノ之 箒』が立った。

「ちょっと良いか？」

「えっ？」

一夏は戸惑いながらも、箒に連れられて、好奇の視線が突き刺さってくる教室から抜け出し、屋上へと向かった……………

IS学園・屋上……………

「何の用だよ？」

「うん……………」

一夏の問いに沈黙する箒。

「6年ぶりに会ったんだ。何か話があるだろう」

そんな箒に、一夏はそう言葉を続ける。

「……………」

しかし、箒は何やら照れ臭そうにしており、何かを話そうとしては止めると言う仕草を繰り返す。

「ぶっ……そう言えば」

「な、何だ？」

一夏は後頭部を搔きながら、自分の方から話を始めた。

「去年、剣道の全国大会、優勝したってな……………おめでとう」

「！？ 何でそんな事知ってるんだ!？」

「何でって……………新聞で見たし……………」

「何で新聞なんか見てるんだ？」

「ああ、後……………」

「!？」

箒の頬が朱に染まる。

「久しぶり、6年ぶりだけど、箒ってすぐ分かったぞ」

「えっ?……………」

その言葉に、箒は一瞬、嬉しそうな表情を浮かべる。

「ホラ、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えてるものだな……………」

「いや、忘れないだろ。幼馴染の事ぐらい」

「!!……………」

一夏の言葉に、照れている様な仕草を見せる筈。

「そ、そう言えば……………神谷は如何した? 元気か?」

と、そこで筈は照れ隠しの様に、もう1人の幼馴染で、一夏が最も慕っている人物の名を挙げる。

「ん? ああ、アニキなら、1年位前に旅に出て行ったよ」

「!?!? 何?!?!?」

筈は、一夏のその答えに、驚きの表情を浮かべる。

「何か父親が生きているかもしれないって言うから、探しに行くんだって」

「探しについて……………当てはあるのか?」

「無いさ。当てが有ろうが無かるうが、1度決めたら突き進んで行く……………アニキはそう言う人だったろ」

まるで自分の事を自慢するかの様に筈に向かってそう語る一夏。

「……………そうだな」

その様子に、筈は一転して不機嫌そうになる。

「今頃……何処で何をしてるのかな……アニキ」

しかし、一夏はそれに気づかず、屋上の手摺りに寄り掛かり、思い
出に浸るかの様に、遠くの景色を眺めるのだった……

その頃……

IS学園を目指して進む、1人の男の姿が在った……

その男の姿は、異様と言って良かった……

180近くは有ろうかと言つ長身に、一昔前のロボットアニメの主人公の様な彼方此方がとんがった黒髪の髪型……

上半身は裸で、腹の部分には晒を巻いており、裾がボロボロの紅いマントを羽織っている。

そしてそのマントの背中には、一夏と同じ『燃え上がる炎に見立てた髑髏が、V字型のサングラスを掛けているマーク』が入っていた。長刀を肩で担ぐ様に持ち、V字型の赤いサングラスを掛けている。

……と、男は刀を持っていない方の手に握っていた新聞の1面の記事を見やる。

そこには、世界で初めてISを起動させた男……一夏がIS学園に入学したという見出しが出ていた。

「ちよつくら帰郷がてらに日本に帰って着てみれば……一夏の奴……こんな事になりやがるとはな……どつれ、ちよいと挨拶しに行くとするか」

男はその記事を見てそう言つと、更にIS学園への道を進んで行った。

……その首からは、金色に輝く親指大の小さなドリルが、ペンダントの様に掛けられていた。

IS学園・1年1組……………

授業中……………

「ではココまでで質問のある人」

滞り無く授業が進み、真耶が質問は有るかと生徒に尋ねる。

（このアクティブなんちゃらとか、広域うんたらとか、如何いう意味何だ！？ まさか全部覚ええないといけないのか！？）

全員が質問は無いと言う表情をしている中、一夏は大量の脂汗を顔

中に浮かべていた。

「織斑くん、何か有りますか？」

と、真耶がそんな一夏に声を掛ける。

「あつ！？ えつと……………」

「質問が有ったら聞いて下さいね。何せ私は先生ですから」

自信満々にそう言う真耶。

「……………先生」

「ハイ、織斑くん」

「殆ど全部、分かりません」

「えっ！？ 全部ですか？」

しかし、一夏のその言葉で、戸惑いの表情を浮かべる。

「い、今の段階で分からないっていう人は、どのくらい居ますか？」

真耶は他の生徒にもそう尋ねるが、返って来たのは沈黙だった。

全員分かっている様である。

「織斑……………入学前の参考書は読んだか？」

と、その様子を見ていた千冬が、一夏に近づきながらそう問い質す。

「え〜〜……………あっ！ あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあったらどう？」

「いや〜……………古い電話帳と間違えて掃除の際に捨てました……………グハツ!？」

と、その言葉を聞いた途端、千冬の出席簿攻撃が、一夏の頭にクリーンヒットした。

「後で再発行してやるから、1週間以内に覚える。良いな？」

「いや！ 1週間であの厚さはちょっと……………それに参考書なんて見なくたって、気合で!！」

千冬に向かってそう反論しようとした一夏だったが……………

「……………やれと言っている」

「うっ！?……………ハイ、やります」

殺気すら感じられる千冬の鋭い視線を受けて、額かざるを得なかった……………

「全く……………そんな所まで『あの男』に似なくて良い。そもそもお前は……………」

千冬が一夏に、更に説教をしようとしたところ……………

「失礼します。織斑先生、ちょっと宜しいですか？」

守衛をしている職員が、そう言いながら教室へ入って来た。

「？ 如何かしたんですか？」

「何ですか？ 授業中ですよ」

首を傾げる真耶と、凜とした態度を崩さない千冬。

「すみません……………ですが、今学園の入り口に奇妙な男が来ていて……………織斑 一夏に会わせろって騒いでいるんです」

「奇妙な男？」

「大方、何処かの国の機関のエージェントか、企業のスカウトマンでしょう……………IS学園は如何なる国家や組織の干渉も受けません
追いついて下さい」

「それが……………そう説明したんですけど、頑として聞き入れないんです」

「しつこい奴ですね……………一体どんな奴なんですか？」

千冬は呆れた様な様子を見せながら、騒いでいる男について尋ねる。

「えっと……………結構な長身の方で、昔のアニメの主人公みたいなツ
ンツンした髪型をしていて……………上半身裸で、お腹に晒を巻いて、
ポロポロの紅いマントを羽織った格好をしています」

「……………何……………だと……………?」

男の風体を聞いた千冬は、彼女を知る者からすれば、珍しく驚愕の表情を浮かべ、手に持っていた出席簿を落とした。

そんな千冬の姿に、生徒達もざわめき立つ。

「それって……………まさか……………」

一方、一夏も……………

男の風体を聞いて、1人の人物を思い浮かべていた。

「それから、片手に長刀を持っていて、V字型の赤いサングラスを掛けて……………そうそう、『俺を誰だと思ってやがるっ!!』って口癖みたいに言っていました」

その言葉を聞いた途端……………

一夏は椅子を蹴り飛ばす様に立ち上がり、教室から飛び出して行った。

「!?!? 織斑くん!?!?」

「オイ! 一夏!?!?」

真耶と千冬が呼び止めるのも聞かず、一夏は学園の入り口を目指して全力疾走する。

(間違い無い！ そんな恰好でそんな事を言うのは……………俺の知っている限り、世界に只1人だ！！)

一夏の胸には、高まって行く期待感が溢れていた……………

IS学園・正門……………

「だから、一夏に会わせるっつってんだろっが！！」

「ですから！ 許可無く部外者を学園内に入れるワケには……………」

「部外者じゃねえ！ 俺を誰だと思ってやがるっ！！」

「それが分からないから困ってるんじゃないですかあ！！」

正門で守衛の職員と押し問答を繰り返している紅いマントを羽織った男。

騒ぎが大きくなったので、念の為に警備用のIS部隊も展開しているが、男が一切怯まないのが、如何すれば良いのかと対応に苦慮している。

と、そこへ……

「アニキッ！！」

正門の向こうの方から、そう言う声が聞こえて来た。

「おっ？」

守衛の職員達が困惑しながら振り返る中、男はその声の主を見て、笑みを浮かべる。

「やっぱりアニキだ！ アニキだよな！！」

その声の主は一夏だった。

教室から全力疾走して来たので、息は上がっており、大量に汗も掻いているが、それでも嬉しそうに男の姿を見ていた。

「一夏あ！ 久しぶりじゃねえか！！」

男の方も、一夏を見て、嬉しそうな声を挙げる。

「アニキ！！」

一夏はそう言い、更に男に近づく。

守衛の職員達は状況が分からず、困惑するしかなかった。

「……………」

そんな中、男は目の前に立った一夏の姿を、笑みを浮かべたままジッと見据えている。

「アニキ、俺……………うわっ！？」

すると不意に、一夏の頭に手を置き、ガシガシと乱暴に撫でた。

「背えデカくなったじゃねえか……………良い面構えしてるぜ……………兄弟！」

男は一夏に向かってそう言った。

「ア、アニキ……………」

その言葉に、一夏は嬉しそうな表情を浮かべる。

と、その時……………

「うわあああああああ————っ!?!」

巻き込まれると思い、慌ててその場から離れる守衛の職員と一夏。

「へっ……………」

しかし、男だけはそんな千冬の姿を見て、不敵な笑みを浮かべていた。

そして、千冬のブレードが男に叩き込まれた瞬間!!

凄まじい衝撃波で土煙が舞い上がり、2人の姿を覆い隠した。

「ア、アニキ!?!」

「織斑先生!?!」

一夏と守衛の職員は、惨劇な光景を想像する……………

だが……………

段々と土煙が晴れてきたかと思うと、そこには……………

「……………久しぶりの再会だからって、随分と情熱的な挨拶じゃねえか」

長刀を僅かに鞘から抜き放ち、千冬のブレードを受け止めている男の姿が在った!

「貴様……………」

そんな男の姿を見て、千冬は苦々しげな表情を浮かべる。

「お、織斑先生!？」

「見て！ 千冬お姉様が誰かと戦ってる!!」

「誰!? あの男!？」

とそこへ、千冬を追いかけて来た真耶と生徒達が姿を見せる。

「!?!? あの男は!?!……………」

その中に居た篤は、千冬のブレードを受け止めている男の姿を見て、驚愕の表情を浮かべる。

「ほらよっ!!」

と、そこで男が、千冬を弾き飛ばす。

「チイツ!!」

弾き飛ばされた千冬は、後方宙返りを決めて着地すると、ブレードを男に向けて構える。

「どら! 久々に一戦……………交えてみるかあ?」

男はそう言いながら、長刀を完全に鞘から抜き放った。

鞘を背中に背負う様にしまつと、左手で千冬に挑発を送る。

「舐めるなあ！！」

千冬は叫びながら、男に向かってブレードを振るう。

「おっと！！」

男は千冬の1撃を、長刀で受け止めた。

「あらよっ！！」

そして力任せに弾き返す。

「ぐぐっ！？」

「おりゃああっ！！」

そのままから空きになった千冬の胴に、横薙ぎの一閃を繰り出す。

「何のお！！」

しかし千冬は跳躍してそれを回避。

そのまま男の頭上を飛び越えながら前方宙返りをし、男の背中を斬り付けようとする。

「シエアッ！！」

だが男は素早く反応し、背中に向かって来ていたブレードの刃を、

長刀で防いだ。

「クツ!!」

千冬はブレードを振った際の反動で距離を取る。

「せええいりやあああああ—————っ!!」

すると今度は、男の方が千冬に仕掛けた。

かなり長い長刀を、まるで小枝でも振るうかの様に軽々と扱っている。

その太刀筋は、型の無い喧嘩殺法であるものの、非常に洗練されており……………

言うなれば実戦慣れしている太刀筋だった。

「くうっっ!! 更に出来る様になっただな!!」

予測不能な太刀筋に苦い顔を浮かべながらも、次々に捌いて行く千冬。

「へっ! テメエーが鈍ったんじゃないのか!? こんなところで燻ってやがるからよお!! ブラコンアネキ!!」

「それを言っなああああああ—————っ!!」

男の言葉に怒りを露わにする千冬。

そのまま2人は、更に激しく斬り結ぶ。

「織斑先生と互角に戦っている!？」

「嘘! あの第1回モンド・グロツソの優勝者、『ブリュンヒルデ』のお姉様と!？」

「何なの、あの男!？」

千冬と互角に立ち回る男の姿に、在り得ないモノを見る目で男を見る真耶と生徒達。

「スツゲエ……………相変わらずスゲエぜ、アニキ!」

一方の一夏は、その光景を見て、まるで少年の様に目を輝かせている。

しかも、肉親である筈の千冬よりも、アニキと呼ぶ男の方に肩入れしている様だ。

「オイ、一夏。あの男は……………」

とそこで、一夏の傍に立った筈が、一夏にそう問いかけて来た。

「ああ……………てんじょう天上 かみや神谷……………魂の絆で結ばれた……………俺のアニキだ!！」

すると一夏は、筈に向かって、まるで自慢するかの様にそう語った。

と、その瞬間！！

ガキインツ！！という甲高い音が響いたかと思うと……………

千冬の持っていたブレードと、男……………神谷が持っていた長刀が互いに弾かれ、宙に舞っていた。

回転しながら舞い上がって行ったブレードと長刀は、やがて重力に引かれて落下を始め、2人が居る場所からやや離れた地面に突き刺さった。

「クツ！」

「チイツー！！」

千冬と神谷は、互いに手が痺れている様な様子を見せている。

「あ、相打ち？……………」

「嘘……………」

「千冬お姉様と互角なんて……………」

真耶と生徒達は、またも在り得ない光景を見る様な目で2人を見やる。

「……………」

得物を失った2人は、互いに睨み合いを始める。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その緊迫した風景に、一夏と筭、真耶と生徒達も釣られる様に沈黙し、辺りは緊迫の空気に包まれる。

「……………フ……………フフフ……………」

「……………へへへへ」

と、不意に2人の口から笑い声が漏れ始めた。

「フフフフフ……………ハハハハハハハハハハツ！！」

「ハツハツハツハツハツハツ！！」

やがて、互いに高笑いを挙げ始めた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

突然高笑いを挙げ始めた2人の様子に困惑する真耶と生徒達。

やがて2人は、ガツチリと握手を交わした。

「変わらんな、神谷……………憎たらしい程に」

「オメエはちよいと腕が落ちたんじゃねえか？ ブラコンアネキ」

「だから、それを言うなと言っているだろうが」

ブラコンと言う言葉に怒りを示す千冬。

「な、何なの……………このノリ？」

生徒の1人が、そんな2人のノリに付いて行けず、思わずそう呟くと、他の生徒達もそれに無言で同意した。

「あのノリを見るのも久しぶりだが……………未だに慣れんな……………」

「そうか？ 俺はもう見慣れたけど？」

頭を抱えている筈に、一夏はそう言う。

……………と、その時！！

突如爆発音が聞こえて来たかと思うと、グラウンドの方から火柱が立ち上った！！

「……………！！？」

「！？ 何だ！？」

「何事だ！ 状況を報告せよ！！」

一夏と筈、真耶と生徒達、そして神谷は何が起こったのかと慌てるが、千冬は冷静に通信回線を開き、状況を調べる。

「お、織斑先生！ 大変です！！ グラウンドに、突然謎の集団が現れて、生徒達を襲っています！！」

「何だと！？」

「そんな！？ IS学園を襲撃するなんて！？ 一体誰が！？」

職員からの報告に驚きを露わにする千冬と真耶。

如何なる国家や組織であろうと、IS学園に干渉する事は許されていない。

ましてや襲撃する等、以ての外である。

そんな事をすれば、その国・組織は、国際テロリストの烙印を押され、全世界を敵に回す事になる。

「クッ！！ 教師部隊は直ちにISを装着してグラウンドへ！！ 私もすぐに行く！！ 山田くん！ 生徒達の避難を頼む！！」

千冬は通信回線に向かって怒鳴る様にそう言うと、グラウンドを指して走り出した。

「あ！ 織斑先生！！ えっと……………貴方達はすぐに避難して！ 私が誘導します！！」

一瞬戸惑いながらも、真耶は頼る事になるとは思わなかった緊急時のマニュアルに従い、生徒達を避難誘導させ始める。

「な、何が起こってるんだよ!？」

「一夏! 今は兎に角、避難するんだ!！」

突然の状況に頭が付いて行けてなかった一夏がそう言うと、箒がそう叫ぶ。

「あ、ああ…………アニキ! アニキもすぐに避難を!……………」

その言葉でハツと我に返った一夏が、神谷にそう呼び掛けようとしたが…………

先程まで在った神谷の姿が、何処にも居なくなっていた…………

「ア、アレ? アニキ?」

「神谷!? 何処へ行ったんだ!？」

慌ててその姿を探す2人だったが見つからない。

「!?!? まさか!？」

不意に、ある予感が頭を過ぎった一夏が、グラウンドを目指して駆け出した!!

「一夏!? 待て! 何処へ行く!？」

いや、獣であろうか？

言うなれば…… 『獣人』 とも呼ぶべき輩達が、我が物顔で暴れ回っていた。

兎に角、目に付く物がアレば手に持っている棍棒で破壊し、人間を視界に居ればしつこく追い回すと言う、獣そのものの暴れっぷりであった。

「止まりなさい！！」

「貴方達は完全に包囲されています！！ 大人しく武器を捨てなさい！！」

と、そこでISを装着した教師部隊が現れ、獣人達に向かってそう警告を送った。

「何だと！ 人間のくれに、俺達に意見するのか！？」

「生意気だ！ やっちまえ！！」

しかし、獣人達は大人しくするどころか、ますます暴れ出し、教師部隊にまで襲い掛かり始めた！！

「えっ！？ ちょっ！？ ！！ キヤアアアッ！？」

「く、来るなー！ 来るなー！！」

教師部隊は止むを得ず応戦するものの、人間では無い獣人を相手に、戸惑いが広がってしまい、満足に戦えずに居た。

「は、ハイ!!」

千冬の言葉に、慌てて逃げ出す生徒。

「あああああ……………」

と、その時……………」

千冬が斬り捨てた獣人が息絶えたかと思うと、その骸がまるでコイルターの様な黒い液体に変わり、そのまま白い煙を上げて蒸発してしまった。

「!?! 何だ……………コイツ等は……………」

その異様な光景に、背筋に冷たい汗が流れるのを感じる千冬。

「ああ! 仲間がやられたぞ!!」

「オノレエ!! よくも仲間をお!!」

とそこで、仲間をやられた事に怒った他の獣人達が、教師部隊を押し退け、千冬へと殺到した。

「!!! クウツ!!」

戸惑いながらも、ブレードを振るって、次々に斬り捨てて行く千冬。

「ぐあああっ!?!」

「何だ！？ この女、強いぞ！！ 人間のくせに！！」

「怯むな！！ 俺達の方が数は上だあ！！」

しかし、応戦しているのが千冬1人と言う状況に対し、獣人達は数10人近くおり、如何に千冬と言えど、現役を退いて久しい彼女には、多勢に無勢であった。

(クソツ！ 数が多い！！ このままでは！！)

そう思いながら、目の前に居た獣人に向かって、ブレードを振り下ろす千冬。

「おつとお！！」

しかし、獣人は棍棒でその攻撃を受け止めてしまう。

「！？ 何っ！？」

「隙有りい！！」

その瞬間、驚いて動きが止まってしまった千冬の背後から、別の獣人が棍棒を振り被って殴り掛かる。

「！？ しまっ……………」

慌ててブレードを斬り返そうとする千冬だったが、間に合わない。

あわや絶対絶命か！？

……と思われたその時！！

「俺を誰だと思ってやがるキイイイイイイイイイイイックッ！！」

と言う叫び声が木霊したかと思うと、千冬に殴り掛かるうとしていた獣人に、神谷の飛び蹴りが叩き込まれた！！

「アバアッ！？」

「！？」

千冬が驚いていると……

「そいつを倒すのは俺の役目だパアアアアアアアアアアアンチッ！！」

更に続けて、神谷は千冬のブレードを受け止めていた獣人にパンチを叩き込む。

「おぼあっ！？」

ブッ飛ばされる獣人。

他の獣人達も、突如現れた援軍の前に、戸惑いの色を浮かべて動きを止めた。

「苦戦してるじゃねえか、ブラコンアネキ」

「神谷！？ 何をしている！ 早く避難しろ！！」

「馬鹿言つんじゃねえよ！ 俺を誰だと思つてやがる！！」

神谷はそう言うと、背負っていた鞘から、長刀を抜き放つ。

「おおおおおお！ この人が獣か曖昧野郎共！ 耳の穴かっば
じつて良おく聞きやがれえ！！」

そして、獣人に向かって啖呵を切り始めた。

「世界に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈
の！ あ！ 鬼ライダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

「貴様……………」

「貸しにしとくぜ、千冬」

「……………良いだろう」

そして2人は、並び立って長刀とブレードを構えた。

「ぐううっ！ 人間のくせになまいきなあ！！ 皆！ やっちなえ
っ！！」

「……………おおおおおおおおお……………
……………！！……………」

獣人達は、2人の雰囲気若干押しされながらも、再び襲い掛か
って行く。

「舐めるな!!」

「俺達を誰だと思ってやがる!!」

それに対して、千冬と神谷も、獣人向かって突撃した。

「オイ、一夏、待て！ 待つんだ!!」

「ハア…………ハア…………アニキ!!」

筈の静止も聞かず、グラウンドを指して走り続ける一夏。

そしてとうとう、グラウンドの端まで到着する。

「アニキ!!……………!？」

「一夏!! 如何したんだ!？……………コレは!？」

そして、グラウンドを見た2人は言葉を失った。

「おらおらぁっ！ 束になって掛かって着やがれ!!」

「目だっ！ 耳だっ！ 鼻だっ！！」

そこには、長刀とブレードを振り回す神谷と千冬が、襲い掛かって来る獣人達を片端から斬り捨てていると言う光景が広がっていた。

「……………」

余りの衝撃さに、一夏と箒は呆然と佇んでしまう。

「……………」

最初に駆け付けた教師部隊も、2人が余りにも強いので、手が出せず、如何して良いのかとオロオロとしていた。

「こ、コイツ等！ ホントに人間か!？」

「俺達とココまで戦うなんて……………」

「クソッ！ 話が違うぜ!!」

とうとう残った獣人は、3体だけとなった。

「さうで、残るはお前達だけだな」

「命乞いでもしてみるか？ 許しはしないかな？」

その3体の獣人達に向かって、長刀とブレードを向け、そう言い放つ神谷と千冬。

「ど、如何するんだ？」

「このままじゃヤバいぞ」

「しょうがない……………『アレ』を使うぞ！！」

すると、獣人の1人がそう言いながら、顔の様な形をしたバッジを取り出した。

他の2人の獣人もそれに倣う様に、同じ様なバッジを取り出す。

「？ 何だあ？」

「何をする積りだ？」

と、神谷と千冬が首を傾げた瞬間……………

「『来おおおおおいつ！ 『ガンメン』！！』」

獣人達がそう叫んで、そのバッジを掲げた。

その瞬間、獣人達を光が包み込み……………

その光が弾けた瞬間……………

そこには獣人ではなく……………

巨大な顔から手足が生えているという、不格好な姿をしたマシン達の姿が在った！！

「!? 何っ!?!」

「IS!? いや、違う! あのマシンは一体!?!」

その不格好なマシンを見て驚く神谷と千冬。

「覚悟しやがれ! 人間共!?!」

「こっとなったら俺達はもう止まらねえぞお!?!」

「皆殺しにしてやるぜえ!?!」

不格好なマシン達……『ガンメン』がそう言い放つ。

「喰らええっ!?!」

そして、3体の中心に居たガンメン……ウシ型ガンメン『ゴズー』が、腕の装甲を展開したかと思うと、そこからミサイルを発射して来る!?!

「!? うおっ!?!」

「くっっ!?!」

至近距離に着弾し、爆風で吹き飛ばされる神谷と千冬。

「オラオラッ!?!」

「逆らう奴は殺す!?! 逃げる奴も殺す!?!」

そして、残り2体のガンメン……ドクロ型ガンメン『アガー』と、カエル型ガンメン『ングー』も、教師部隊へと襲い掛かる。

応戦する教師部隊だったが、ガンメン達は殺す積りで来ており、いかに世界最強の兵器のISを装着してしようと、実戦経験……『殺し合い』の経験の無い教師陣は、相手の気迫に圧倒される。

「チキシヨー！ やってくれるじゃねえか！！」

そう言いながら、身体に付いた土埃を落としつつ、ガンメン達を見据える神谷。

「全員、一時撤退しろ！！」

と、その時、千冬が教師陣に向かってそう命令を下した。

「！？ オイ、千冬！ オメエ何言ってやがる！？」

「実戦経験の無い教師陣では無理だ。ココは一旦退いて態勢を立て直すのが……」

「バツキャロウツ！ 男が敵に後ろを見せられるかよ！！」

「神谷！ お前は！！」

思わず言い争いを始めてしまう神谷と千冬。

「ア、アニキ！ 千冬姉！ そんな事してる場合じゃ……」

「んんん！？ まだ人間が居たのか？ お前も死ねえっ！！」

神谷の人生はココで終わってしまうのか……

と、その時!!

神谷が首から下げていた小さなドリルから、緑色の光が溢れ、神谷を包み込んだ!!

ゴズーが放ったミサイルは、その緑色の光に阻まれて、爆発する。

「!?!? ん何い!?!?」

ゴズーが驚きの声を挙げる。

「!?!?!?」

アガーとングーも、驚いて動きが止まる。

「アニキ!?!?」

「神谷!?!?」

「な、何が起こっているんだ!?!?」

一夏、千冬、篝も、その光から目を守りながらも、驚きの声を挙げ
る。

やがて、光が弾けたかと思うと、そこには……

まるで鎧武者の様な姿をした、三日月状の兜を被った、真紅と黒の
カラーリングをしたマシンが佇んでいた。

良く見ると、本来顔があるべき頭部の他にも、ボディにも顔があり、
目の部分に黒いサングラスを装着していた。

「……………ん？……………ん？……………！？　な、何だこりゃあっ！？」

すると、そのマシンから、神谷の驚いた声が拳がった。

「！？　ア、アニキ！？　アニキなのか！？」

「何だと！？」

「神谷！？　その姿は一体！？」

「んなもんコッチが教えて欲しいぜ！ 何なんだ、こりゃあっ！？」
戸惑う一夏達だったが、1番戸惑っていたのは、他ならぬ神谷だった。

「まさか……………それはISか！？ 一夏の他にもISを使う男が！？」

千冬がそう言った瞬間……………

「あ、アレはガンメン！？」

「馬鹿な！？ 如何して人間がガンメンを！？」

ガンメン達から、そんな声が拳がった。

「ええいつ！ 兎に角叩き潰すまでだあ！！！」

と、考える事が面倒になったのか、ングーがそう言いながら、フルスキン全身装甲のIS（？）を装着した神谷に向かって行った。

「ええい！ 何だか分からねえが！ やってやらあぁっ！！！」

神谷はそう言いながら、向かって来たングーに対して、右の拳を突き出した。

その瞬間！！

その右手が、ドリルへと変わり、高速回転しながらングーを貫いた！！

「ぎゃあああああああああ………！？」

ドリルに貫かれたングーは、そのまま爆散した！！

「おおっ！ ドリルか！！ へっ！ いかにも俺向きな武器だぜ！！」

ドリルと化した右手を見ながらそう言う神谷。

「オノレエ！ よくも仲間をお！！」

「貴様あ！ 一体何者だあ！！」

と、残り2体のガンメンが、神谷に向かってそう叫ぶ。

「ん？ そうだな………グレンラガン………そう！ コイツの名は、『グレンラガン』だ！！」

神谷はそう叫び、見得を切る様なポーズを取った！！

「グレン………」

「ラガン………」

その名前を半分ずつ反復する千冬と篤。

「カ、カッコイイ………」

そして、そのカッコ良さに痺れている一夏だった。

そして、その2本のドリルで、ゴズーを突き刺す様にアップパーカッ
トを繰り出した!!

「うぎゃああああああああー……っ!?」

ゴズーは身体に風穴を空けられ、空高く舞い上げられたかと思うと、
そのまま爆散した。

「決まったぜ……」

アップパーカットを出し切ったポーズのまま、神谷はそう呟くのだっ
た。

「スゲエツ! スゲエよ! 流石アニキだ!!」

そんな神谷の大活躍に、一夏は手放して喜んでいる。

(獣人が使っていたあのマシン……明らかにISでは無い……
そもそも獣人とは一体何なのだ? ……それに……グレンラガン)

しかし千冬は、グレンラガンを見ながら、言い様の無い不安を心に
感じていた。

「一体……何が起こっているんだ……」

その千冬の呟きに気づいた者は、誰も居なかった……

UNU

第2話『お、俺を誰だと思ってやがる!!』(後書き)

ここからが本当の始まりです。

IS学園に入学した原作主人公の一夏。

姉の千冬がこの学園で教師をしている事を知り、ファースト幼馴染の篤との再会する。

そして更に……

アニキと呼んでいたっていた男……神谷が学園を訪れた。

そんな中……

突如IS学園を襲撃した謎の存在『獣人』。

千冬と神谷の活躍でその多くが倒されたが、残った獣人3体が『ガンメン』と呼ばれる謎の機動兵器を使い出す。

だが、その最中……

一夏と篤を守ろうとした神谷が、ガンメンと似通った謎の機動兵器

……

『グレンラガン』へと姿を変えた。

圧倒的な力でガンメンを蹴散らすグレンラガン。

果たしてその正体は一体？

そして、IS学園を襲撃した獣人とは何者なのか？

初っ端から結構飛ばしてします。

一体この後如何いった展開になるのか？

もし宜しければ見て行って下さい。

今後は、なるべく週1更新出来る様に頑張りますので。

それと、この作品では千冬さんは基本的苦勞人ポジションになる予定です。

予めご了承ください。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第3話『へっ…………弱い犬ほどよく吠えると言ったもんだぜ』

これは…………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と…………

それに付き従う女達の物語である…………

天元突破インフィニット・ストラトス

第3話『へっ…………弱い犬ほどよく吠えると言ったもんだぜ』

???
.....

その場所には、まるで螺旋を描く様に高くなっている台座があり、その上に設置された玉座の肘宛てに、肘を付いて頼杖をして座って居る巨大な体躯の男が座って居た。

ただ座って居るだけだと言うのに、その身体から発せられている迫力は凄まじく、並みの人間であれば、彼を目にした瞬間に気絶してしまうだろう。

そして、その螺旋を描いている台座の下には、4人の獣人が、片膝を着いて畏まっていた。

「御報告致します……………IS学園に送った獣人達がやられました」
その中の1人……………ゴリラ型の獣人『チミルフ』が、玉座の男に向かってそう報告した。

「……………」

チミルフの報告を受けても、玉座の男は無表情のままであり、何の反応も示さなかった。

「ほうほう？ 奴等には確か、ガンメンも与えて置いた筈。それで失敗したとは……………ブリュンヒルデが出て来たか」

すると、玉座の男に代わる様に、アルマジロの獣人『グアーム』がそう言う。

した。

「その通り……………そして装着者は恐らく……………天上博士の息子かと」
チミルフが、更にそう報告を続ける。

「オノレエ、天上博士め……………」

「我々の元から逃げ出し、我々の計画を散々邪魔したただけでは飽き
足らず、グレンラガンを自分の息子に託すとは……………忌々しい奴」

アディーネとシトマンドラが、苦々しげにそう言う。

「フッフッフッフ……………」

と、そこで玉座の男が笑い声を漏らした。

「？ 螺旋王様？」

「「「「？」「」」」

突然笑い声を挙げた玉座の男に、4人の獣人達……………螺旋四天王は
首を傾げる。

「面白い……………天上……………貴様の息子が何処まで出来るか……………見
せてもらおうか？」

モニターに映るグレンラガンの姿を見ながら、玉座の男……………「螺
旋王 ロージエノム」は、不敵に笑ってそう言い放った。

「どれ………まずは小手調べと行こうか………IS学園に新たなガ
ンメンを送り込め。ついで、織斑 一夏なる小僧の情報も取って来
い」

「……ハッ！ 畏まりました！ 螺旋王様！！！！」

ロージエノムがそう言うと、螺旋四天王は畏まった体勢を取る。

「失礼致します、螺旋王様、四天王様」

するとそこで………

その場に、ネコ科の様な鋭い目付きをし、鮫のような歯と異形な手
をし、右眼を隠すようにした金髪が特徴的で、人間に近い姿をした
獣人が姿を見せた。

「恐れながらその任………このヴィラルに引き受けさせて頂けない
でしょうか？」

ロージエノムと螺旋四天王に畏まりながら、獣人………ヴィラルは
そう申し上げる。

「ヴィラル、貴様！ 我等に意見する気か！！」

シトマンドラが、ヴィラルを叱りつける。

「いえ、その様な積りは………私はただ、そのグレンラガンなるも
のと戦ってみたいと思っただけです」

「フン………お前らしいな、ヴィラル」

そんなヴィラルの態度に、呆れる様な言葉を漏らすグアーム。

「螺旋王様、宜しいですか？」

と、チミルフがロージェノムに向かってそう尋ねる。

「好きにしる……………」

ロージェノムは無表情のままそう答える。

「ありがたき幸せ……………アディーネ様。『ダイガンカイ』をお借り致します」

「構わないよ……………ただし！ 傷つけるんじゃないよ」

「御意！」

アディーネにそう言うと、ヴィラルは一瞬で姿を消す。

「グレンラガン……………我が野望……………止められるものならば止めてみるが良い」

ロージェノムはそう言い、再び不敵に笑うのだった……………

一方、その頃……

神谷がグレンラガンとなり、ガンメン達を倒した日の夜……

IS学園・研究室……

「如何だ？ 山田くん？」

「ハイ…… ISと似通ったところはありませんが…… やっぱりまるで別物です」

「そうか……」

そう言って視線を移す千冬。

その視線の先には、スキャンやら何やらに掛けられているグレンラガンの姿が在った。

あの後……

騒ぎを聞きつけてやって来た野次馬やマスコミ、政府関係者からグレンラガンを隠し通した千冬。

現在、世界の軍事バランスはISの存在によって大きく崩されており……

もしそこへ……

IS並みの性能を持つ新たな兵器が現れたとなれば……

各国は挙ってそのデータを入手したがるだろう……

そう考えた千冬は、グレンラガンの存在を隠し、独自に調査を行った。

なお、学園を襲撃した獣人、そしてガンメンについても、各国に問い合わせたが、どの国も関与を否定していた。

更なる追求をしたかったが、獣人の死体は謎の蒸発で無くなっており、ガンメンは重要な回路等が自爆装置で吹き飛ばされており、確たる証拠が無かった為、それ以上は追及できなかった。

(コレだけのマシンを造れる人物と言えば……………やはり……………)

と、千冬がそう思索していた時……………

「ふわあああああああ……………」

佇んでいたグレンラガンが、大きな欠伸をすると共に、伸びを行った。

「オイ千冬。もういい加減にしてくれよ。退屈でしょうがねえぜ」

そして、神谷の声で話し出すグレンラガン。

「ああ、そうだな……………もう良いぞ、神谷」

「アイヨッ」

千冬がそう言うと、グレンラガンが緑色の光に包まれ、神谷の姿となった。

最初は待機状態の小さなドリル……………『コアドリル』の状態で調べようとした千冬達だったが……………

どのような解析に掛けても、返って来る答えが『解析不能』であった為、起動させて調べようとしたのだが……………

如何いうワケか、グレンラガンは神谷にしか起動させる事が出来なかったのだ。

仕方なく、神谷にグレンラガンを装着してもらい、その状態で調べを進めていたのである。

「神谷……………お前はそれを何処で手に入れたんだ？」

神谷の胸元に光るコアドリルを見ながら、そう質問をぶつける千冬。

「コイツは……………親父から貰ったのさ」

神谷はコアドリルを握りながらそう答える。

「!? 親父!? 会ったのか!? 父親に!? 天上博士に!？」

その答えに、千冬は驚きを示す。

「天上博士って……………あの篠ノ之 東に並ぶ天才科学者と言われていた、あの天上博士ですか!？」

それを聞いていた真耶も、驚きの声を挙げる。

「それで、今何処に居るんだ？」

「……………死んだよ」

「……………えっ？」

「親父は死んだ……………コイツを俺に託してな……………」

神谷は怒りの形相で、コアドリルを握り直した。

「……………如何言う事なんだ？」

「分からねえ……………あの日……………俺は親父が生きているかもしれな
いと言う話を聞いて……………親父を探す旅に出た……………世界中彼方此
方を回って親父の痕跡を探した……………」

(一夏が誘拐された時か……………)

「そしてやっと見つけたと思った時には……………親父は何者かに襲わ
れ、虫の息だった」

語っている神谷の拳が、キツく握り締められる。

「そして、最後の力を振り絞ってこのコアドリルを俺に託し、日本
……………IS学園に行けと言い残した」

「IS学園に？ 何故だ？」

「さあな……………ただ……………自分の償いに俺を巻き込んだまうのが心
残りだ……………最期に親父はそう言っていた」

「償いだと……………」

千冬は表情を険しくする。

「そして、親父の言葉に従ってこの学園来てみりゃ……………あのケダ

モノ野郎共と出くわしたワケだ」

「偶然……とは考え難いな」

「ああ……多分、親父がコイツを造ったのは……アイツ等と戦う為だ。俺はそう思う」

再びコアドリルを見ながら、神谷はそう言った。

「そうか、分かった……ところで、神谷。今後のお前の処遇だが……」

翌日……

1年1組の教室にて……

「え〜……皆さんに編入生を紹介します」

真耶が、若干言葉に詰まりながらそう言う。

「……………」

生徒達も、言葉を失っていた。

「……………」

筈と一夏も、驚きを露わにしており、特に一夏など、目が点になっている。

それもその筈……

真耶が紹介しようとしていた編入生とは……

神谷の事だった。

IS学園の特注した男子用制服に身を包んでいる神谷だったが……

着ているのはズボンと上着だけで、しかも上着の前は全開に開かれており、晒を巻いているだけの上半身が露出していた。

しかも、その制服の上から、トレードマークの1つである紅いマントを羽織っていた。

「えっと……………それじゃあ、自己紹介を……………」

「おおおおおお！ テメエ等！ 耳の穴かっばじって、よく聞きやがれ！！」

と、真耶が神谷に自己紹介を促そうとしたところ、神谷の方からその言葉を切り始めた。

「IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼リーダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

目の前に有った一夏の机の縁に片足を掛けて、右手の親指で自分の事を指差しながら、神谷はクラス中に響き渡る声でそう言い放った。

「…………………………」

再び呆気にとられる生徒達。

「え、え〜と……………」

「……………ハア〜」

真耶は困惑し、千冬は呆れた様な溜息を吐いた。

あの後……………

千冬は神谷を、IS学園に編入させる事にした。

グレンラガンがIS並みの性能を持つ兵器だと言う事を露見させない為、まだ情報公開は行っていないが、彼を世界で2人目にISを起動させた男として、グレンラガンをIS扱いにした。

なお、神谷は17歳の為、本来ならば上級生になる筈なのだが……………

実は神谷は高校に行っておらず……………と言うか、小中学校すらまともに行っていない為、IS関係の知識も乏しかった為、1年への編入としたのだ。

また、自分の目の届くところで監視しておきたいと言う思惑も有ったと思われる。

(2人目の男子……………だけど……………)

(馬鹿だ……………大馬鹿だ)

(何か汗臭そう……………)

(ちょっと不良っぽいかも……………)

(そうかな？ 私は良いと思うけど……………)

(今時珍しい、熱血漢って奴だね)

(アレ？ あのマントに描かれてるマークって……………織斑くんと同じだ)

生徒達の間で、そんなヒソヒソ話が始まる。

女の園であるIS学園に、2人目となる男子の入学であったが……………割とイケメンタイプな一夏と違って、神谷の見た目は所謂男臭さと不良っぽさを感じさせる為、万人に受け入れられるタイプではなかった。

「静かにしろ！……………神谷、お前の席は一夏の右隣だ」

「おう！」

千冬がヒソヒソ話をしていた生徒達を一喝すると、神谷に着席を促す。

神谷は指定された席に行く……………

机の上に両足を投げ出して、腕組みをして座った！！

その態度に悪びれている様子は微塵も無く、寧ろコレが自然体だと言わんばかりに堂々としている。

「…………ハア~~~~…………山田くん、授業を始めてくれ」

「え、ええっ!?! わ、分かりました……………」

神谷を注意する様子を見せない千冬に、真耶は若干混乱しながらも、授業を始めるのだった。

「アニキ……………」

と、一夏が神谷に声を掛けると、神谷は視線だけを一夏に向ける。

「一夏……………色々と積り話も有るが、取り敢えずは後だ。休み時間にゆっくりと聞かせてやるよ」

「あ、ああ……………」

そう言われて正面を向く一夏。

しかし、その顔には何処か嬉しさが浮かんでいた。

(アニキがIS学園に……………しかも同じクラスだなんて……………)

「……………フンッ」

そんな一夏の姿を見て、面白くない様な顔を見ると、窓の外に視線を向ける筈だった。

他の生徒達も小声でそう言い合う。

と、その時……

「……………」

教室の端で待機していた千冬が、出席簿を手に神谷に近づいた。

（あっ！？ 死んだ！！）

（天上くん……………グッドラック！）

（千冬お姉様の前で居眠りなんて……………何て命知らずな）

生徒達がそう思っていた瞬間……………

「！！！」

千冬の持っていた出席簿が、神谷の脳天に思いっきり叩き付けられた！！

バギャツ！！と言う、まるでコンクリートに角材を叩き付けて押し折ったかの様な音が教室内に響き渡る。

「……………！！？」 「……………」

驚愕に包まれる生徒達。

そして、次の瞬間……………

千冬が神谷の居眠りを黙認するワケ……………

それは、幼少の頃からそう言う奴だと言う事を熟知している他に、もう1つ有った……………

神谷が使っているグレンラガンは、建前上はISと言う事になっているが、ISではない……………

その為、運用ノウハウがISとはまるで異なるのだ。

しかも、神谷にしか動かせないとすると、マニュアルもクソもなかった。

なお、神谷に如何やってグレンラガンを動かしたのかと聞いたところ……………

頭の中に直接動かし方が流れ込んで来たとの事である（本人はこの事を、『要は気合ってこつたる！』と称したそうだ）

神谷をIS学園に入れたのは、飽く迄グレンラガンのデータを各国に渡さない為であり、IS操縦者にする積りではない……………

その為、例え授業をまともに受けなくとも、IS学園に居てくれさえすれば良いのである。

休み時間……………

「スゲエよ、アニキ！ まさか千冬姉に居眠りを黙認させるなんて！！」

「当たり前だ！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

先程の偉業を褒め称える一夏と、当然だと言わんばかりの態度の神谷。

「ちよつと宜しくて？」

と、そんな2人に声を掛ける人物が居た……………

「へっ？」

「あん？ なんだよ？」

「まあ！？ 何ですか、そのお返事！？ 私に話し掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

いきなり高圧的な態度で接して来る縦ロールのある長い金髪に透き

通った碧眼を持つ少女。

「あ、いや、その……………」

「おうおうおうおう！ いきなり随分なご挨拶してくれるじゃねえか！！ 何様の積りだ！？」

一夏が何か言おうとしたところ、それを遮る様に、神谷が少女に向かって啖呵を切った。

「なっ！？ 私を知らない！？ 『セシリア・オルコット』を！？ イギリス代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「知らねえな！！ そっちこそ覚えておけ！ IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼リダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

少女…………… イギリス代表候補生『セシリア・オルコット』に向かって、自己紹介の時にした名乗りを挙げる神谷。

「ぐぐっ！？」

その良く分からない迫力に押されて黙り込むセシリア。

「あ、あの…………… ちょっと質問良いか？」

と、そこで一夏が、セシリアに向かってそう言った。

「！？ え、ええ、良いですわよ。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

その言葉で落ち着きを取り戻し、気取った様なポーズを取りながら
そう言うセシリア。

「……………代表候補生って、何？」

「食えんのか？」

ドドドドツ！という音が聞こえて来て、3人の話に聞き耳を立て
ていた生徒達が芸人の様にずっこけた。

「あ、ああああ……………」

セシリアも、呆れで肩を震わせている。

「「あ？」」

「信じられませんわ！ 日本の男性というのは、皆これほど知識に
乏しいものかしら！？ 常識ですわよ！ 常識！…！」

「……………で、代表候補生って？」

セシリアに向かって重ねてそう尋ねる一夏。

その瞬間、セシリアは目を光らせて、自慢げに語り出す。

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリート
の事ですね。単語から想像したら分かるでしょう？」

「そう言われればそうだ」

一夏が驚き、神谷が目覚めます。

「んだよ……………難しい話するから寝ちまったじゃねえか……………」

「ああああ、貴方と言う方は!!」

神谷の態度で、更に怒りのボルテージを上げるセシリアだったが…

……………

そこで休み時間終了を告げるチャイムが鳴った。

「!!! 話の続きは、また改めて! よろしいですわね!!」

セシリアは神谷と一夏を指差すと、自分の席へ戻って行った。

「何だったんだ?」

「さあ?……………」

その後で、2人揃って首を傾げる神谷と一夏だった……………

そして授業が始まるうとした時……

千冬が教壇に立ち、生徒全員を見据える。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

そして、そう話を切り出し始めた。

「クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会の出席等……まあ、クラス長と考えてもらって良い。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

そう言っつて、再びクラス全体を見やる千冬。

「ハイ。織斑君を推薦します」

すると、1人の生徒が、一夏を推薦した。

「えっ!？」

「ハイ。私もそれが良いと思います」

「ええっ!？ お、俺!？」

「他には居ないのか？ 居ないのなら、無投票当選だぞ」

戸惑う一夏を他所に、千冬は一夏をクラス代表に任命しようとする。

「ちょ、ちょっと待った！ 俺なんかじゃとても無理だよ……」

……！ そうだ！ アニキ！！ アニキがやってくれよ……！！」

一夏は立ち上がり、隣の席の神谷を見ながらそう言う。

「バカ野郎！ 一夏！ 推薦されたのはお前だろ！ 弟分の晴れ舞台を横取りするなんて、この神谷様に出来ると思っただか！！」

しかし、神谷は立ち上がると、一夏を見ながらそう言う。

「で、でも……………俺、無理だよ！！」

「無理を通して道理を蹴つ飛ばすんだよ！ それが俺達、グレン団のやり方だろうが！！ 忘れたのか、一夏！！」

「!?!」

その言葉でハッとする一夏。

(全く……………妙なところで良い影響を与えているから性質が悪い……………)

そんな2人の様子を見て、頭痛がするのを感じる千冬。

「わ、分かったよ、アニキ……………俺、やって……………」

と、一夏が決意を固め、そう言おうとした瞬間……………

「納得が行きませんわ！！」

突如声を張り上げる人物が居た。

「!？」

「あん？」

「その様な選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

セシリアだった。

一夏が推薦された事に噛み付いて来ている。

「このセシリア・オルコットに、その様な屈辱を1年間味わえと仰るのですか!？ 大体、文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で……………」

「へっ……………弱い犬ほどよく吠えるとは言ったもんだぜ」

すると、そんなセシリアを見ていた神谷がそんな事を口走った。

「なっ!？ 何ですって!？ もう1度言って御覧なさい!！」

「何度でも言っつてやるぜ。弱い犬ほどよく吠える……………人様の国のこと扱き下ろして、ギャーギャー喚くのがイギリスのやり方かよ。そんなんじゃ高が知れるぜ」

「! 貴方! 私の祖国を侮辱しますの!！」

「先に喧嘩売って来たのはテメエだろうが! 言いたい事があるんだっつたら、拳で語ってみろ!！」

「！！ 決闘ですわ！！」

そこでセシリアは、神谷を指差してそう言い放った。

「へっ！ 最初からそう言やあ良かったんだよ！」

「態と負けたりしたら、貴方を小間使い……………いえ、奴隷にして差し上げますわ！！」

「上等だ！！ 良し！！……………任せたぞ！ 一夏！！」

「え、ええええっ！？ 俺！？」

急に振られて戸惑う一夏。

「なっ！？ 逃げるのですか！？ 卑怯者！！」

「バカ言つな！ この神谷様が逃げるかよ！ テメエがなりてえのはクラス代表だろう！ なら、一夏を倒すのが筋つてもんよ！！」

無茶苦茶な理論を展開する神谷。

「一夏は俺の弟分だ！ 弟分の負けは兄貴分の負け！ もし一夏がお前に負けたら、俺も一夏も好きにして良いぜ！！」

「ちよっ！？ アニキ、勝手に！！……………」

「良いですわ！ 貴方の自慢の弟分……………叩きのめしてあげますわ！！」

「話は纏まったな。それでは勝負は次の月曜……………第3アリーナで行う」

「ちよっ!?!」

一夏の意見を無視して、話が進行して行く。

「織斑とオルコットは其々準備をしておく様に……………」

「何でこうなるんだあああああああ——————
っ!?!」

一夏の叫びが、虚しく木霊するのだった……………

っ
く
っ

第3話『へっ……弱い犬ほどよく吠えると言ったもんだぜ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

いよいよE.S学園に編入となった神谷。

初日からいきなり周りを振り回しています。

やっぱりカミナをモデルにしているキャラなので、振り回されるより、自分で周りを振り回す様な奴じゃないと思ひまして。

さて、次回は序盤の山場、セシリアとの一夏のクラス代表決定戦です。

螺旋王や螺旋四天王、ヴィラルなんかが出ている時点、改変する気満々です。

一体如何なるのか？

それは次回のお楽しみです。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第4話『俺は世界で最高の姉さんと、アニキを持ったよ』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第4話『俺は世界で最高の姉さんと、アニキを持ったよ』

本人の意思とは外れたところで……

イギリス代表候補生のセシリアと戦う事になってしまった一夏……
喉けた張本人である神谷は、根拠無しに『一夏なら勝てる』との一
点張りであった。

戸惑う一夏だったが、退く事を周りの状況が許さず……

また、自分は兎も角、アニキである神谷に恥を掻かせたくないと思
い……

渋々ながらも、腹を括ったのだった……

そして、代表決定戦の開催が決まった次の日の休み時間……

再び千冬が、教壇に立った。

「織斑、お前のISだが……準備まで時間が掛かるぞ」

「へっ？」

突然そう言われて戸惑う一夏。

「予備の機体が無い……だから、学園で専用機を用意するそうだ」

千冬のその言葉に、生徒達がざわめき出した。

「専用機？ 1年のこの時期に？」

「つまりそれって……政府から支援が出るって事？」

「凄いな〜！ 私も早く専用機欲しいな〜」

口々に羨望の声を挙げる生徒達。

「専用機が有るって……そんなに凄い事なのか？」

しかし、まだISの知識に乏しい一夏は、専用機の事について良く分からず、首を傾げるばかりだった。

と、そんな一夏の前に、セシリアが何の前触れも無く立った。

「うわっ!？」

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表決定戦、私と貴方とでは勝負は見えていますけど……流石に私が専用機、貴方が訓練機ではフェアではありませんものね」

自慢げにそう語って来るセシリア。

「お前も……専用機つてのを持ってるのか？」

「御存じ無いの？ よろしいですわ！ 庶民の貴方に教えて差し上げましょう!」

そのままセシリアは、自分が専用機を持っている事……

世界にISが467機しかない事……

その中でも専用機を持つ者は全人類の中でもエリート中のエリートである事を自信満々に語る。

ISの中核を成しているISコアは、開発者である篠ノ之 束にしか作れないブラックボックスである。

しかし、束はコアを一定数以上造る事を拒絶。

更には行方を暗ましている……

国家・企業・組織機関では、割り振られたコアを使用して、研究・開発・訓練を行うしかないのが現状だ。

「本来なら、IS専用機は国家、或いは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意される……理解出来たか？」

そこで千冬が、一夏にそう問う。

「な、何となく……………」

「あの先生……………篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

と、その時……………

ふとその事に気づいた生徒が、そう千冬に尋ねた。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

隠していても何れバレる事だと思ったのか、千冬はそう言うてしま
う。

「……………ええ……………！……………」

クラス中から驚きの声が挙がる。

「嘘！ お姉さんの！？」

「篠ノ之博士って、今行方不明で……………世界中の国や企業が探して
るんでしょう？」

「何処に居るか、分からないの？」

「あの人は関係無い！！」

と、そんなざわめき立つ生徒達を制する様に、篤はそう大声を挙げ
た。

「……………私はあの人じゃない……………教えられる様な事は何も無い」

何処かウンザリとした様な様子を見せながら箸はそう言い、クラスメイト達から目を背ける様に窓の外を見やった。

「……………山田先生。授業を」

「!? ハ、ハイ!!」

そこで、千冬が空気を読んだ様に、真耶に授業開始を促した。

「……………すみません。ちょっと待って下さい」

しかし、ふと教室の一角を見るとそう言った。

「えっ?」

「オイ、織斑……………天上は何処へ行つた?」

困惑する真耶を尻目に、一夏にそう聞く千冬。

そう……………

本来ならば神谷が居るべき席が、空席となっていたのだ……………

「えっ? えっと……………アニキだったら、『天气が良いから屋上で昼寝する』って言って出て行きました」

恐る恐ると言った様子でそう答える一夏。

その答えを聞いた途端に、千冬はワナワナと小刻みに震え出した。

「……………あんのぉ、バカ者わあああああああああ……………」
「……………！？ うぐっ！？」

と、突然千冬は、胃の辺りを押さえて蹲った。

「！？ 織斑先生！？」

「千冬様！？」

「お姉様！？」

突然崩れた千冬に動揺する真耶と生徒達。

「うづう……………胃が……………胃がキリキリと……………」

蹲った千冬は、胃の辺りを押さえながらそう呟く。

（ああ……………千冬姉の神経性胃炎が再発した……………）

そんな姉の姿に、一夏は同情の眼差しを送るのだった……………

一方……

その神経性胃炎の原因である神谷はと言つと……

「空が青いぜえ……ふわあああああ……」

屋上の芝生の上に寝転び、大欠伸をすると、寝息を立て始めたのだ
った……

その後、昼食の時間となり……………

一夏が、箒を強引に昼食へと連れ出し、食堂に来ていた。

向かい合う様に席に座り、黙々と昼食を取っている2人。

「……………なあ、箒」

と、不意に一夏が、箒へと話し掛けた。

「何だ……………」

「ISの事、教えてくれないか？ このままじゃ、何も出来ずにセシリアに負けそうだ」

「あんな男の弟分などやってるからだ！」

「！！ アニキを馬鹿にするな！！」

と、それを聞いた一夏が、激昂した様に大声を挙げ、テーブルを両手で叩いて立ち上がった！

「！？ 一夏！？」

「……………！！？」

箒は驚き、他の生徒も何事かと注目する。

「箒……お前だって、アニキが如何いう男かは知ってるだろう。アニキは決して口だけの男じゃない！ 無茶苦茶で滅茶苦茶だけど、1度口にした事は決して覆さない、真の漢だ！ お前を苛めてた奴等をブチのめしたのだって、アニキだったじゃないか！」

「それは！……確かにそうだが……」

思わず一夏から視線を外す箒。

実は苛めっ子から守ってもらっていた時、箒は一夏の事しか見てなかったので、アニキはややアウト・オブ・眼中だったのだ。

恋する乙女の盲目である。

「箒……頼む！ この通りだ!!」

と、一夏は箒に向かって土下座した。

「!?!? ちょっ!?!? 一夏! 止める!!」

突然の一夏の態度に戸惑う箒。

「織斑くんが土下座してる!?!」

「篠ノ之さん……一体何言っただらう?」

注目していた生徒達も騒ぎ出す。

「止める! 止めるんだ、一夏! 恥ずかしくないのか!!」

「俺が恥を搔くのは良い……………けど！ アニキの顔に泥を塗る様な真似だけはしたくないんだ！ 頼む！ 箒……！」

一夏はそう言って土下座を続ける。

「ぐう……………分かった！ 教えてやる！！ だから頭を上げる……！」

その空気と周りの視線に耐え切れなくなった箒はそう言った。

「……！！ 本当か……！！ ありがとう、箒……！！」

途端に、嬉しそうな顔をして、箒の両手を自分の両手で包み込む様に握る一夏。

「あ、ああ……………」

突然両手を握られて、顔を赤くしながら箒は辛うじてそう返事をする。

「サンキュー、箒！ 流石、持つべきものは幼馴染だぜ……！！」

そんな箒の様子に気づく様子は見せず、一夏は嬉しそうにその声を挙げるのだった。

尚……………

この1件は、暫く学園内で有名な噂話になった……………

『篠ノ之 箒が、織斑 一夏を跪かせた』と……………

そして、アツと言う間に時は流れ……………

クラス代表を決める月曜日が訪れた……………

第3アリーナには、見物の生徒が多数訪れており、一夏とセシリアの試合を、今か今かと待ち構えていた。

既にセシリアの方は、IS専用機を装着して、アリーナの空中に待機している。

一方、一夏の方はと言つと……

ISスーツに身を包み、アリーナのピットで、専用機の到着を待っていた。

傍には箒と、神谷の姿も在る。

更に、アリーナの管制室には千冬の姿が在り、3人の姿を見下ろしていた。

「アレがアイツの専用機か………」

と、一夏がモニターを展開させ、IS専用機を装着しているセシリアの姿を映し出す。

「なあ、箒……大丈夫なのか？ 俺この1週間……ISの事を教えてくれるって言われて、剣道の稽古しかしてないんだけど……」

と、そこで不安そうに箒にそう尋ねる一夏。

「それは………」

「ビビッてんじゃないねえ、一夏！ 箒の奴はつまり、こう言いたかったに違いねえ！……ISの操縦は肉体の延長線だ！ 己の肉体

を鍛える事が、ISで強くなる事に繋がると!!」

何か言おうとした篤の言葉を遮って、神谷がそう叫んだ。

「そっか……つまり、『考えるな！ 感じるんだ!!』って事が!! 成程、そう言う感覚を身に付けさせようとしてくれたんだな！ ありがとう、篤！」

「あ、ああ……そうだな」

真実は違っただが、一夏が嬉しそうにそう言って来たので、言うに言えない篤だった。

「織斑くん！ 織斑くん!!」

とそこで、慌ててアリーナの管制室に飛び込んで来た真耶から声が掛けられた。

「来ました！ 織斑くんの専用IS!!」

「!!」

「おっ！？ 来たか!!」

「へっ！ 弟分の専用IS……どんなもんか拝ませてもらうおっじやねえか」

それに反応する篤、一夏、神谷。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用出来る時間は限られて

いるからな。ブツつけ本番で物にしろ」

続いて千冬がそう言って来たかと思うと、ピット内にあった搬入口が開き始めた。

そしてそこから、1体の鈍い色に光るISが姿を現した。

「コレが織斑くんの専用IS……………」『白式』です!!」

「コレが……………俺の……………」

感慨深そうに、そのIS……………」『白式』を見上げる一夏。

「ほ〜う……………ちよいと地味だが、結構イカスじゃねえか」

神谷も、白式を見てそう感想を呟くのだった。

「すぐに装着しろ。時間が無いから、フォーマット初期化とフィッティング最適化は実戦でやれ」

「……………」

千冬にそう言われながら、一夏は白式に手を触れてみた。

「……………アレ？」

と、そこで違和感を覚える一夏。

「? 如何した？」

「一夏？」

その様子に首を傾げる篤と神谷。

(初めてISに触った時と、感じが違う……………)

入試試験会場で、間違ってISに触れて起動させてしまった時の事を思い出し、そう思う一夏。

「大丈夫ですか？ 織斑くん」

その様子を心配した真耶が声を掛ける。

「あ、ハイ……………(大丈夫だ……………馴染む……………理解出来る……………)
コレが何なのか……………何の為にがあるのか……………分かる)」

それに問題無いと返事を返し、一夏は自分でも分からぬ感覚を感じながら、白式に搭乗し始めた。

「背中を預ける様に……………そうだ、座る感じで良い……………後はシステムが最適化をする」

千冬の声聞きながら、搭乗を完了させる。

「白式……………コレが白式か……………」

「セシリアさんの機体は、ブルー・ティアーズ。遠距離射撃型のISです」

そこで、真耶がセシリアのISについて教えて来る。

「ブルー・ティアーズ……………」

「ISには、絶対防御という機能が有って、どんな攻撃を受けても、最低限操縦者の命は守られる様になっています。ただ、その場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。分かっていますよね？」

「織斑、気分は悪くないか？」

「当たり前だろ！ 俺を誰だと思ってやがるんだ！」

すっかり戦意高揚した様子で、千冬の間い掛けにそう答える一夏。

「クッ……………とったと行け！」

そんな一夏の様子に苦々しい顔を浮かべると、突っぱねる様にそう言う千冬。

「箒、アニキ」

「な、何だ！？」

「おう！」

と、一夏は今度は箒と神谷に話し掛ける。

「行って来る」

「あ、ああ……………勝って来い」

「頑張れよ！ 一夏！！ 忘れるな！ お前を信じろ！ 俺が信じ

るお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる……お前を信じる!!」

「ああ!!」

一夏は自信満々の笑顔で答えると、カタパルトでピットから飛び出して行った……

ピットから飛び出した一夏は、空中でセシリアと対峙する。

「最後のチャンスをおげますわ」

現れた一夏に向かってそう言うセシリア。

「チャンスって？」

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理……今ここで謝ると言うのなら、許してあげない事もなくてよ」

「ふざけるな！俺を誰だと思ってやがる!! 神谷のアニキの弟分、織斑 一夏だ!! 敵に後ろは見せねえ!!」

「そう……残念ですわ。それなら……」

と、セシリアがそこまで言った瞬間、白式が警告を発して来た。

「お別れですわね!!」

そう言う台詞と共に、セシリアは主力武器であるレーザーライフル
……『スターライトmkIIII』を発砲した!!

「!! グアアッ!?!」

咄嗟に防御する一夏だったが、そのまま墜落する。

「!!」

「……」

それにヒヤツとする筈と真耶に対し、千冬と神谷はジツと様子を見据えている。

「!! クウッ!!」

一夏は、地面に叩き付けれる寸前で姿勢を立て直し、何とか着地する。

しかしその後も、次々にスターライトmkIIIIを発砲して来るセシリア。

「クソッ! 俺が白式の反応に追い付けて行けてない!?!」

何かかかっている一夏だったが、それは白式を操縦していると言
うより、白式に振り回されていると言っ様子だった。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティア
ーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}でー!!」

「クッ！ 装備！ 装備は……………」

シールドエネルギーが減少して行くのを確認しながら、武器を検索
する一夏。

しかし、白式が装備していた武器は……………

近接ブレードが1本だけだった。

「コレだけ!? ええい！ 男は度胸!!」

素手でやり合っよりはマシだと思い、一夏はブレードを出現させる。

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘装備で挑もうなんて、笑止です
わー!!」

「うるせえっ！ 無理を通して道理を蹴っ飛ばす！ それが俺達グ
レン団のやり方だ!!」

そう叫ぶと、一夏はブレードを構えて、セシリアのブルー・ティア
ーズに突撃して行った。

その頃……

その戦いをアリーナに居る者以外で見ている者が居た……

IS学園近くの海の底に沈んでいる巨大な影……

エビやサソリ、カブトガニを思わせる異形の怪獣の様な潜水艦……

潜水母艦型ガンメン『ダイガンカイ』だ。

その艦長席に座って居るヴィラルは、モニターに映っている一夏とセシリアの戦いの様子を、興味深そうに見ていた。

「アレが世界で唯一ISを使える男……織斑 一夏か」

そう言って、一夏に視線を集中するヴィラル。

やがて、モニターに映る一夏は、セシリアが繰り出した機体名の由来にもなっているビット型の武器『ブルー・ティアーズ』をブレードで斬り捨て始めた。

「成程……まだ未熟だが、凄まじいセンスを持っているな……

あのブリュンヒルデの弟なだけはある」

その一夏の姿に、ヴィラルは笑みを浮かべる。

それは、獲物を目の前にした獣の攻撃的な笑みだった。

「螺旋王様は織斑 一夏のデータも欲していた……………丁度良い……………その力！ このヴィラル自身が見極めてくれる！！」

と、ヴィラルがそう叫んだかと思うと、突如として彼の姿が艦外へと射出された！！

海の中へと放り出されたヴィラルだったが、そのまま難なく海面まで泳いで行ったかと思うと、海面から水柱を上げて勢い良く飛び出した！！

そして何と！！

そのまま海面を凄まじいスピードで水飛沫を上げながら疾走し始めた！！

「待っている！ 織斑 一夏！！ そして！ 待っている！ グレノンラガン！！ このヴィラルが！ 今行くぞお！！」

そう叫びながら、海面を走って行くヴィラル。

明らかに人間が出来る業ではない……………

一方の一夏は……

遂に周りを飛び交っていたブルー・ティアーズ4基を撃墜し、セシリアに斬り掛かるうとしていた。

「距離を詰めればコッチが有利だ!!」

(掛かりましたわ!)

内心でそう思い、残っていた2基のミサイルを発射するブルー・ティアーズを一夏に見舞おうとするセシリア。

「!!…一夏あ!!…左だあ!!」

と、その時!!

ピットで試合の様子を見ていた神谷が、アリーナのスピーカーを使い、上空の一夏にその声を送った!!

「えっ!?!」

「!?!」

の胸を踏み付けて来て、再び倒した。

「!?!」

やがて土煙が晴れて、その姿が露わになる。

一夏の胸を踏み付けていたネコ科の様な鋭い目付きをし、鮫のような歯と異形な手をし、右眼を隠すようにした金髪が特徴的で、人間に近い姿をした獣人……… ヴィラルだった。

「……………」

獰猛な笑みを浮かべて、一夏を見下ろしているヴィラル。

「な、何だアイツは!?!」

「獣人!?!」

「まさか、この前の奴の仲間か!?!」

その姿を見た篤、真耶、千冬がそう言う。

「な、何アレ!?!」

「今、アリーナのシールドを突き破って来たよね!?!」

「って言うか、生身でISを蹴り飛ばした!?!」

観客として来ていた生徒達も騒ぎ始める。

「お、お前は!?!」

「弱い……………弱過ぎるぞ……………織斑 一夏……………世界で唯一ISを
使える男の実力とは……………この程度のものかあ!?!」

と、ヴィラルは一夏にそう言い放ったかと思うと、その首根っこを
掴んで、アリーナの壁に向かって放り投げた!!

「うわあああああああああ—————!?!」

そのまま弾丸の様にブツ飛んで行った一夏は、遮断シールドを突き
破ってアリーナの壁に叩き付けられ、アリーナの一角を破壊した!!

「……………キヤアアアアアアアアア—————
—————!?!」

そこでやっと、事態の深刻さに気付いた観客の生徒達が、悲鳴を挙
げながら逃げ出し始めた。

客席の防護シャッターも閉じ始める。

「ぐ、う……………クソッ! 一体何なんだ!?!……………!?! うわっ!
?」

とそう言いながら起き上がった一夏の前に再びヴィラルが立ち、連
続で蹴りを叩き込んで来た!!

「ふっ! ふっ! ふっ! ふっ!」

「うわあああああああ—————!?!」

先程までヴィラルに甚振られる一方だった一夏は、ヴィラルの姿を見て、思わず怯えた様子を見せてしまう。

「螺旋王様はデータを取れと仰っていたが……………コレではその価値も無いな……………一思いに殺してやるっ」

そんな一夏に向かってヴィラルはそう言い放つと、ゆっくりと一夏に向かって歩き出した。

「あ、ああ……………」

恐怖に震える一夏は動けない。

「一夏！ 逃げろ！ 逃げるんだ！！」

ピットの筈からそう通信が送られてくるが、一夏の耳には届かない。

「終わりだ……………」

ヴィラルの目つきが更に鋭くなる。

……………と、その時！！

博士にそっくりだな」

と、神谷の姿を見たヴィラルが、そんな言葉を呟く。

「!? テメエ!? 親父の事を知ってんのか!?」

それを聞いた神谷が目の色を変え、ヴィラルにそう問い質す。

「これから死ぬ貴様に教える義理は無い!!!」

しかし、ヴィラルはそう言い放つと、前回学園を襲撃した獣人達が持っていたのと同じ様な、顔の様な形をしたバッジを取り出した。

「来い！ エンキイ!!!」

ヴィラルがバッジを掲げてそう叫んだかと思うと、その姿が光に包まれ……

白と灰色の機体色で、人型に近いフォルムをしているが、頭部には兜が被されているだけで顔が無く、代わりにボディの部分に顔があり、両脇腰に1本ずつ、計2本の刀を携えたガンメンの姿が現れた。

「！ やはり奴もこの間の連中の仲間か!!!」

「で、でも………前のと違って、人型に近い形をしていますよ!？」

ガンメンとなったヴィラルの姿を見て、千冬と真耶がそう言う。

「コレが私のガンメン……『エンキ』だ！ さあ！ グレンラガンを出せ!!!」

反射的に、グレンラガンも右ストレートを繰り出した!!

互いの拳が、相手の頭部の横っ面に叩き込まれた!!

「ク、クロスカウンター!?!」

胸熱な展開に、思わず吠える一夏。

「グウツ!?!」

「チイツ!?!」

エンキとグレンラガンは、お互いに1歩下がる。

「おりゃあああああああー!?!」

先に仕掛けたのはグレンラガン。

再び右の拳を握り、エンキに殴り掛かろうとする。

「甘い!?!」

だが、突っ込んで来るグレンラガンに向かって、エンキは右腕を向ける様に構えたかと思うと、そこからニードルガン………エンキカウインターが発射された!!

「!?!? うおっ!?!」

防御姿勢を取るものの、動きを止められてしまうグレンラガン。

「セアアアアッ!！」

そのグレンラガンに、エンキは両手を組んでのハンマーパンチをお見舞いする!

「ぐあっ!?!」

「フンッ!！」

そして、グレンラガンの下がった上体に、追撃の蹴りを叩き込む。

「おわあっ!?!」

軽くフツ飛ばされるグレンラガン。

「!?! アニキ!！」

「チッ! テメエ……………中々やるじゃねえか」

一夏の悲鳴の様な叫びが木霊する中、フツ飛ばされた際に上がった土煙の中でグレンラガンは立ち上がる。

「だが! まだこれからよ!！」

神谷がその声を挙げると、グレンラガンは胸部の顔の目の部分に装着されていたサングラス……………『グレンブーメラン』を外し、右手に握る。

「面白い……………この俺に剣で挑むか!！」

勢い良く回転しながらエンキに向かって行くグレンブーメラン。

「フンツ……………」

しかし、エンキは高速で迫って来ていたグレンブーメランを、アツサリと弾き返してしまふ。

「クソツッ!！」

悪態を吐きながら、戻って来たグレンブーメランをキャッチするグレンラガン。

「フツ……………如何やら貴様はまだ、グレンラガンの力を使いこなせていない様だな」

「!?!? 何だと!?!」

ヴィラルの挑発する様な言葉に怒りを露わにする神谷。

「グレンラガンを使える人間が現れたと聞いて来てみれば……………この程度か。期待外れも良いとこだ」

「このケダモノ野郎! 好き放題言いやがって!！」

神谷はそう叫ぶと、再びグレンラガンは、エンキに向かって突撃して行く。

「イカン! 神谷! 冷静になれ!！」

「その勢いの良さは……………」

千冬がそう叫ぶが、エンキは突っ込んで来たグレンラガンが繰り出した右拳をかわすと、伸び切った腕を脇で挟んで捕まえる。

「褒めて！ やるよおおおおおおおおおおー……………」
っ！！」

そしてそのままグレンラガンをスイングすると、思いっきりアリーナの壁に向かって投げつけた！！

「おわあああっ！？」

アリーナの壁に勢い良く叩き付けられるグレンラガン。

「アニキイツ！！ このままじゃ、アニキが……………」

助けに行こうとする一夏だったが、先程の恐怖が残っており、身体が震えて言う事を聞かない……………

「だ、駄目だ……………」

思わず諦めかける一夏。

と、その時！！

「何をしている！ 一夏！！！」

ピットに居た筈が、アリーナの射出口へと姿を現した！！

「!?!? 箒!? 馬鹿! 危ないぞ! すぐに戻れ!」

「一夏! お前は何をやっている!」

一夏がそう叫ぶが、箒は聞かずにその言葉を続ける。

「お前が兄と慕う男が、今必死になって戦っているんだぞ!! なのに弟分のお前がその様で如何する!! 立て! 立つんだ、一夏!! 自分を信じる!!」

「!?!?」

箒のその言葉にハッとする一夏。

(お前を信じる! 俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる………お前を信じる!!)

1年前に………そしてアリーナに出る前にも聞いた神谷の言葉が思い起こされる。

「チツ! 煩い人間め………目障りだ!!」

と、そこで箒の存在に気付いたエンキが、頭部の兜の角飾り部分に、赤色のエネルギーをチャージし始めた。

狙いは勿論、箒だ。

「!?!?」

「死ねええつ!!」

中から、白いISを装着した一夏の姿が現れた!!

「!? 何っ!?!」

「一夏!?!」

「へへっ……………漸く終わったみたいだな」

目の間に表示されている『フォーマット、フィッティング完了』の文字を見て、ニヤリと笑いながらそう言う一夏。

「まさか……………ファーストソフト一次移行……………あ、あの人、私との戦いでは初期設定だけの機体で戦っていたと言うの!?!」

それを見たセシリアが、そう驚きの声を挙げた。

「何だか良く分からねえけど……………コレで漸くコレスト白式は俺のモンになっただってワケだ!?!」

そう言う一夏の右手には、先程まで握っていたブレードとは違うブレードが握られていた。

そして目の前に、『近接特化ブレード』雪片式型』使用可能』の文字が浮かび上がった。

しかしその瞬間、エンキは僅かに後退すると、ボディの顔の部分の装甲を展開!!

そこからミサイルや機関銃と言った重火器の発射口が出現する!!

「!?!」

「この至近距離ではかわせまい!!」

そう言つて、全火器をブツ放そうとするエンキ。

だが、その時!!

「俺が居る事を忘れるんじゃないやねえキイイイイイイイックッ!!」

グレンラガンの飛び蹴りが、エンキに炸裂した!!

「ぐあああつ!!?!」

まともに喰らったエンキは、地面の上を転がって行く。

「アニキッ!!」

「すまねえ、一夏。助かったぜ。流星は俺の弟分だな」

一夏に向かってそう言う神谷。

「グウウッ! グレンラガン!!」

投げ飛ばされた一夏も気が気でなく、涙目になってそう叫ぶ。

「バカめ！ そんな攻撃が当たるか!!！」

ウイルスがそう言い、エンキがサイドステップを踏む。

このままでは外れてしまう……

と、その時!!！」

「や、やるしかないでしょうがあああああああ————
——っ!!！」

一夏が覚悟を決めて、何としてもエンキにブチ当たろうとした瞬間

……

偶然にもISのある技が発動した。

その機能とは……

イグニッション・ブースト
『瞬時加速』

ISの後部スラスタ―翼からエネルギーを放出し、それ内部に一度取り込み、圧縮して放する事によって、その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する、という技である。

如何にかしてエンキにブチ当たろうとして、身体がエンキの方へ向いていたので、一夏は空中で直角に曲がる様に軌道修正。

改めてエンキに突撃して行った!!！」

「!?!? 何っ!?!?’

チミルフから、撤退命令が下った。

「!?! チミルフ様！ しかし!!！」

「これは螺旋王の命令である!!！」

「ぐうっ!!……!!……!!」

反論しようとしたヴィラルだったが、螺旋王の命とあっては逆らえなかった。

「おのれ、織斑 一夏！ おのれ、グレンラガン!! この屈辱は何れ晴らしてくれるぞ!!！」

ヴィラルがそう叫ぶと、エンキは再びボディの顔の部分の装甲を展開して重火器を手当たり次第に発砲!!

アリーナ一体が爆煙に包まれた!!

「うわっ!!?!」

「うおっ!!?!」

至近距離にも着弾し、思わず腕で顔を覆う一夏とグレンラガン。

やがて爆煙が治まったかと思うと……

エンキの姿は、何処にも無くなっていた。

「あつ！？ しまった！！」

「逃げられたか……………畜生！！」

地団太を踏む様な仕草を見せるグレンラガン。

(アイツ……………親父の事を知ってやがった……………それに、前に現れた獣人もグレンラガンを知っている様な素振りを見せた……………一体何の関係が有るんだ?)

考えが頭の中で堂々巡りする神谷。

「アニキ！ 大丈夫！？ 怪我してない！？」

とそこへ、一夏が心配した様子を見せながら近づいて来た。

「ん？ あ、ああ、心配要らねえよ。俺を誰だと思ってやがる」

「良かった……………」

神谷が無事で安堵の息を吐く一夏。

「……………一夏、あんがとよ。助かったぜ」

「えっ？」

「お前が来てくれたお蔭で、奴を倒す事が出来た」

「そ、そんな！ 俺、そんなに活躍は……………」

「何言つてやがる！ 今日の戦いはまぎれも無くお前の手柄だぜ！ さっきの口上……………中々胸にガツンツと来たぜ！！」

「アニキ……………」

「夏とグレンラガン（神谷）はそう言い合つて、勝利を喜ぶかのように、拳と拳を合わせ合ったのだった……………」

じ
へ

第4話『俺は世界で最高の姉さんと、アニキを持ったよ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

遂に始まった序盤の山場……………

セシリアと一夏のクラス代表決定戦です。

しかし、突然乱入してきた獣人ヴィラルによって、アリーナは一瞬で混沌の場と化します。

ヴィラルの常識破りの強さの前に恐怖する一夏。

そこへ神谷が駆けつけ、グレンラガンとなって戦いますが……………

ヴィラルのガンメン『エンキ』の前に大苦戦。

だが、第の激励と神谷の言葉を思い出した一夏が奮い立ち、白式をファーストシフト完了させます。

最後は合体技『男の魂完全燃焼キャノンボールアタック』で決めます！

しかし、ヴィラル……………

獣人とは言え、ISを生身で圧倒するなんて……………

如何してこうなったかと言うと……………

『今川だからしょうがない』と思って下さい。

グレンラガン原作でも、ロージェノムが生身でラガンと戦ってましたし……………

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第5話『ココはどーんと胸を借りる積りで着やがれ!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第5話『ココはどーんと胸を借りる積りで着やがれ!』

一夏とセシリアのクラス代表を決める戦いは……

ヴィラルルの乱入により、御流れとなった……

アリーナの損傷も酷かった為、再試合はアリーナの修復が終わってからとなった。

しかし、その後……

セシリアがクラス代表候補から降りると宣言……

その為、自動的に一夏がクラス代表へと就任する事になった。

その夜……

IS学園の食堂にて……

「織斑くん、クラス代表決定おめでとうー!!」

「……おめでとうー!!」「……」

一角の席を借り切り、一夏のクラス代表就任を祝う、ちょっとしたパーティーが行われていた。

「あ、ありがとう……」

「オラ、一夏！ もっと堂々としろ！！ お前はクラスの代表！
言わば、コイツ等のリーダーになったんだぞ！ リーダーがそんな
態度じゃ、子分達は付いて来ねえぜ！！」

恐縮している一夏と、その左隣に座って堂々としろと言っている神
谷。

「……………フンッ」

そして、そんな2人の姿を見て、面白くなさそうな表情を浮かべる
箒。

「でも……………セシリア、本当に良かったのか？ 俺がクラス代表に
なっても？」

と、そこで一夏は、箒の更に隣に座って居たセシリアにそう声を掛
けた。

「うふふ、確かに、あのまま戦っていれば、私の勝ちは確実だった
でしょう」

「んだとお！ 一夏が負けるかよ！！」

「アニキ、押さえて……………」

立ち上がると得意そうにそう語り出すセシリアに、神谷が掴み掛っ
て行きそうになったが、一夏が押さえる。

「ですが、一夏さん」

「あ、ハイ……………」

不意呼ばれて、思わず敬語で返事をしてしまう一夏。

「あの謎のマシンを退けた時の腕前……………正直、感嘆致しましたわ。私、今まで男はだらしなくて駄目で頼りない存在だと思っていましたけど……………」

(それは俺も最初はそう言う風に見られてたって事か?)

セシリアの言葉に、一夏は心の中でそうツツコム。

「ですが、一夏さん……………貴方は違いました。あの敵を相手に逃げずに戦い、勝利した……………あんな度胸がある殿方は初めてみました。あの口上が今でも私の耳に残っていますわ」

「そ、そりゃあ、どうも……………」

褒められているので、悪い気はせず、若干照れた様子を見せる一夏。

「……………」

そんな一夏を見て、箒は更に面白くなさそうな顔をする。

「そして……………神谷さん」

「あん?」

急に話し相手が変わり、神谷は気の無い返事を返す。

「貴方の、あの敵に迷わず向かって行った勇氣にも感嘆させられましたわ。何度打ちのめされても立ち上がるその根性にも」

「へっ、打ちのめされたは余計だよ」

そう言いながらも、ニヤリとした笑みを浮かべている神谷。

「流石は一夏さんの兄貴分なだけは有りますわ。貴方が口だけの人間じゃないという事は良く分かりました」

「高飛車女……いや、セシリア。お前も見る目が有るじゃねえか」

「当然ですわ！ 私を誰だと思っているのです！！」

と、セシリアはそう言って腕組みをしたポーズで仁王立ちした。

その様子に、パーティーに参加していた生徒達が、一瞬呆気に取られる。

「気に行ったぜ！ お前にもグレン団メンバーの称号をやるぜ！！」

「グレン………団？ 何ですの、ソレ？」

「熱い魂の在り処だ！」

「成程………光栄ですわ」

そう言い合って、互いにニヤリと笑い合うセシリアと神谷だった。

（セシリアって、あんなキャラだったけ？）

（天上さんと織斑さんの熱血ぶりが移ったのかな？）

（このまま行くと………クラス全員が熱血漢に！？）

（それはやだな。何か汗臭そう）

（良いな。私もグレン団に入りたいなあ）

そんな様子を見て、そうヒソヒソと話し合う生徒達だった………

翌日……

IS学園・1年1組の教室にて……

今、教室内は1つの噂が話されていた。

「おはよー。ねえ、聞いた？ 転校生の噂？」

「あん？」

「転校生？ 今の時期に？」

教室に着いて、席に座った一夏と神谷に、クラスメイトの1人がそう言うて来た。

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「あら？ 私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

その話を聞いていたセシリアが、相変わらず様になっている腰に手を当てるポーズを取ってそう言う。

「このクラスに転入して来るワケではないのだから？ 騒ぐ程の事でもあるまい」

先程まで自分の席に居た篤が、何時の間にか一夏の傍に来てそう言う。

「どんな奴なんだろうな？」

「へっ、喧嘩を売って来たら返り討ちにしてやるぜ」

時期外れの転入生に興味を抱く一夏と、好戦的な台詞を言う神谷。

「もうすぐクラス対抗戦だもんね。織斑くんには頑張ってもらわないとね」

「フリーパスの為に」

「今のところ専用機持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

と、クラスメイト達がそう言い合っている……

「……………その情報、古いよ」

そう言う声が、教室の入り口辺りから聞こえて来た。

「「「「「？」「」「」」」」

一同がその声に釣られる様に、教室の入り口に目をやると、そこには……………

肩出しの改造制服を着た、小柄でツインテールの少女が佇んでいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから！」

ツインテールの少女は、1組の生徒全員に聞こえる様にそう言い放つ。

「鈴？……お前、鈴か！？」

「おおっ！？ 何だよ、チャイナ娘！ 久しぶりじゃねえか！！」

その少女の姿を見た一夏が驚いた様子で、神谷が懐かしい顔にあったと言う顔で席から立ち上がった。

「そうよ！ 中国代表候補生、ファン鳳 リンイン鈴音！ 今日には宣戦布告に来たってわけ……って、神谷！？ 何でアンタまでこの学園に居るのよ！？」

ビシツと人差し指を立てた右手を1組の教室に向ける様に構えて、高らかにそう言い放つ少女……ファン鳳 リンイン鈴音だったが、神谷の姿を見て、その高らかな態度が1発でフツ飛ぶ。

「フツ……愚問だな！！ 弟分の一夏が居る学園に兄貴分の俺が居る！！ 当然の事だろう！！！」

「説明になってないわよ！！ 何！？ アンタもISを操れるってワケ！？」

そのまま神谷と言い争いに突入する鈴。

……と言つより、鈴が一方的に神谷に突っ掛かっていると云う感じだ。

「だ、誰ですの？ 神谷さんは兎も角、一夏さんと親しそうに……」

「……」

「……………」

その様子に、若干戸惑いを浮かべているセシリアと箒。

「ああ、もう！ 兎に角！！ 一夏！ 今日はアンタに宣戦布告を……………」

と、鈴が改めて一夏に宣戦布告を言い渡そうとしたところ……………

突然後ろから頭を小突かれた。

「！？ イッターツ！？……………何すんの！？……………！？ ふわっ！
？」

振り向いて、小突いて来た人物に噛み付く鈴だったが、その人物……………

……………

千冬の姿を見て表情を変える。

「もうSHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん……………」

「織斑先生と呼べ。サッサと戻れ。邪魔だ」

「す、すいません……………また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！ ついでに神谷！ アンタもね！」

千冬の迫力に圧倒された様に道を譲ると、そう捨て台詞を残して、鈴は去って行った。

「アイツが……………代表候補生？」

「へっ……………面白くなってきたじゃねえか」

若干の戸惑いを浮かべている一夏と、何やらワクワクしている様な様子を見せる神谷だった。

その後、昼食の時間となり……………

一夏、神谷、鈴が、同じ席で昼食を取っていた。

その隣の席では、箒とセシリア、そして同じクラスの生徒達が、その様子を注視していた。

「で？ 何時代表候補生になったんだよ？」

「アンタこそ、ニュースで見た時、ビックリしたじゃない……………神谷が居た事にはもっと驚いたけど」

「当然よ！ 俺を誰だと思っただけやがる！！」

「またそれ！ いい加減、耳に胼胝が出来るほど聞いたんだけど！！」

「バツキヤロウ！ 男の決め台詞ってのは、言わば魂の言葉なんだよ！！」

「だから意味が分かんないって言うてんでしょ！！」

またも神谷に突っ掛かっている鈴。

「アハハハハッ！ こうしていると、あの頃を思い出すなあ……………」

そんな2人の様子を見て、一夏は昔を懐かしむ様に楽しそうな表情を浮かべる。

と、その時！！

「一夏！ 神谷！ そろそろ説明して欲しいのだが……」

「そうですね、一夏さん！ 神谷さん！ その人は誰ですの！？」
と、そこで……

横のテーブルで見えていた筈とセシリアが、そう言いながら一夏と神谷……主に一夏の方に詰め寄って来た。

「ま、まさか、一夏さん！ こちらの方と、っ、つつつ、付き合っ
てらっしやるの！？」

「！？ べ、べべべ、別に私は……」

セシリアの付き合っているのか、という質問に動揺する鈴だったが

……

「そうですね。只の幼馴染だよ」

一夏がアツサリとそう言い放った。

「むっっ……」

それを聞いた鈴は不機嫌そうな顔になる。

「ん？ 如何かしたか？」

「何でも無いわよ！」

一夏は問い掛けると、そう言ってそっぽを向いてしまつ鈴だった。

「幼馴染？」

その言葉に箒が驚いた表情を見せる。

「そついや、箒。お前とは入れ違いに来たんだっけな」

「ああ、そう言えば……………」

神谷の言葉に、一夏も同意する。

「こいつは篠ノ乃 箒。前に話しただろ？ 箒はファースト幼馴染みで、お前はセカンド幼馴染みと言つた所だ」

「ファースト……………」

ファーストと言う言葉に、箒は頬を赤らめる。

「ふ〜ん、そうなんだ……………初めまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ……………」

そう言い合う鈴と箒の視線が交差した瞬間、火花が散つた様に見えた。

「ん、んん！ 私の存在を忘れてもらつては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。一夏さんとは、先日クラス代表の座を掛けて、熱い戦いを……………」

「アンタ、1組の代表になっただって？」

「ああ、まあ……………半ば成り行きみたいなもんだけどな」

セシリアが語り始めているのを無視して、鈴は一夏を会話を続ける。

「へえ、意外ねえ。神谷が居るんだったら、てっきりアンタがなるとか言い出すと思っただけ……………」

「オイオイ、鈴。見くびってもらっちゃ困るなあ。この神谷様が弟分の晴れ舞台を邪魔すると思っただけなのかよ」

「あ、そう……………まあ、別に良いけど……………一夏。良かったらアタシが見てあげようか？ ISの操縦」

「ああ、そりゃ助かる」

「……………って、ちょっとお！ 聞いてらっしゃるのお！？」

とそこで、無視されている事に気づいたセシリアが、鈴に迫る。

「ゴメン……………アタシ、興味無いから」

しかし、鈴はそう言って、バツサリと斬り捨てる。

「言ってくれますわね……………」

「一夏に教えるのは私の役目だ！！」

と、そこで筭もそう言って、鈴に迫った。

「貴方は2組でしょ。敵の施しは受けませんわ!」

「アタシは一夏と話してるの。関係無い人達は引っ込んでてよお」

「むっ!」

鈴の挑発する様な態度に、箒とセシリアは表情を強張らせる。

「ど、如何したんだ?」

「ハハッ、あの生意気な性格も変わってねえな……………」

何やら険悪な雰囲気になっている3人の様子に困惑する一夏と、旧友の変わらぬ様子を懐かしんでいる神谷。

「貴方こそ……………後から出て来て、何を図々しい事を!」

「後からじゃないけどね。アタシの方が付き合いは長いんだし」

「それを言うなら、私の方が早い! 一夏は! 何度もウチで食事している間柄だ!」

「それなら、アタシもそうだけど?」

「!」

と、鈴のその言葉に箒とセシリアの表情が変わる。

が……………

「おう！ そう言やそうだな！ オメェん家の中華料理屋の飯は旨かったからなあ！！！」

神谷が雰囲気を読まないでそう言い放ってしまった。

「ちよっ！ 神谷！ アンタ、余計な事を……………」

「何だ、店なのか……………」

「お店なら、別に不自然な事は何1つありませんわね」

「……………」

安堵する筈とセシリアの様子を見て、不機嫌そうになる鈴。

「そう言えば、親父さん、元気にしてるか？」

と、そこで一夏がそう話題を振った。

「あ、うん……………元気だと思う」

しかし、そう言った鈴には、今までの歯切れの良さが無かった。

「??？」

その事を怪訝に思う一夏だったが、そこでチャイムが鳴った。

「あ！ じゃあ一夏、放課後に……………そっちの練習が終わった頃に行くから。時間開けといてよね」

「ああ……………」

食器を片づけに向かう鈴を見送りながら、一夏はやや生返事を返す。

「相変わらずオメエにべったりだな、アイツも」

「……………」

そんな一夏に、神谷がそう言うと、箒とセシリアが不機嫌そうな表情を浮かべるのだった。

そして午後の授業が開始された……………」

当然、神谷はサボタージュを執行していたが（千冬の胃がストレスでマッハである）……………」

そして時は流れ、放課後……………

修復が完了した第3アリーナにて……………

一夏にISの訓練をさせようと思って来た幕とセシリアだったが…

……………

「神谷さん！ 如何言う事ですの、コレは!？」

「神谷！ 一体如何言う積りだ!!！」

そう声を荒げる2人。

今、2人の目の前には……………

白式を装着している一夏と……………

その一夏と対峙する様に、伝統と信頼のガイナ立ちをしているゲレンラガンの姿となった神谷の姿が在った。

「なぐに、偶には弟分の喧嘩の腕を見てやるのも兄貴分の務めだと思ってな……………と云うワケで、来い！ 一夏!!！」

神谷はそう言い放つと、グレンラガンに構えを取らせた。

「そ、そんな!! 無理だよ! 俺じゃアニキには敵わないよ!!」

一夏はとんでもないという様子で、神谷にそう反論する。

「何言ってるんだ! 昔は良くやっただろうが! 兄貴分が直々に喧嘩の指導してやるってるんだ! ココはどーんと胸を借りる積りで着やがれ!!」

「アニキ……………分かったよ!!」

しかし、アニキの言葉で戦意が高まったのか、雪片式型を实体剣モードで構えた。

(くうっ! 折角の一夏さんとの時間が!!)

(せっかくこの為に『打鉄』の使用許可を取ったと言うのに!!)

そんな2人の様子を見て、やきもきするセシリアと箒だったが、男の友情の熱さに負け、介入出来ずに居た。

「行くぜええええええええええー!!!っ!!」

と、そんな中で、グレンラガンが動いた!!

一夏に向かって、勢い良くダッシュして突撃して行く。

「!!」

身構える一夏。

「おりゃああっ！！」

と、一夏の眼前まで迫ったグレンラガンが、不意に跳躍した。

「！？」

すぐにその姿を目で追う一夏だったが……

跳躍したグレンラガンが太陽を背にした為、太陽光をまともに見て
しまう。

「！？ うわっ！？」

一瞬目が暗む一夏。

「燃える男のお！！」

するとその間に、グレンラガンは空中で前方宙返り決めると、右足
を一夏に向かって伸ばし、突っ込んで行った！！

「火の車キイイイイイイイックッ！！」

炎に包まれたグレンラガンの飛び蹴りが、一夏に叩き込まれる！！

「！？ うわああっ！？」

咄嗟に実体剣モードの雪片式型で受け止めたが、大きくシールドエ
ネルギーを削られる。

「ぐぐつづつ！ でりゃあああああああつ！！」

だが、すぐに気合を入れて、グレンラガンを弾き飛ばす。

「！！ おおつと！！」

グレンラガンは後方宙返りを決めながら着地。

「まだまだ行くぜえ！！」

その後、片手に2本、両腕で計4本のドリルを出現させたかと思うと、それを腕ごと、アリーナの地面に突き刺した！！

そして何と！！

「うおおおおおおおおおつ！！」

アリーナの地面を、巨大な岩石として持ち上げた！！

「うえええつ！？」

まさかそんな事をするとは思っていなかった一夏は、思わず珍妙な声を挙げてしまう。

「喰らええ！ グレンラガン・超・ウルトラ・デラックス・岩石投げえ！！」

その持ち上げた岩石を、一夏目掛けて思いっきり投げつけるグレンラガン。

巨大な影が、一夏に掛かる。

「うわあああつ！？ ちょちょちょ、ちよつとお！！」

慌てながらも、素早く雪片式型をエネルギーブレード状態にし、岩石を斬り裂いた！！

斬り裂かれた岩石はバラバラになり、一夏の周囲に降り注ぐ。

「やるなあ！ 一夏！！なら、コイツは如何だ！！」

神谷はそう言うと、胸のグレンブーメランを取り外した。

「そらよっ！！」

そして、一夏に向かって投擲する。

「何のっ！！」

雪片式型を使い、弾き返す一夏。

「もらったあつ！ レーザーアイ！！」

だが、その直後！

グレンラガンのボディ部分にある顔の目から、一夏目掛けてレーザーが発射された！！

「え！？ うわあつ！？」

そのまま地面の上を滑って行ったが、ある程度滑ってところで、バツク宙する様に起き上がる。

「……………」

そのまま睨み合いとなる2人。

「へへっ……………楽しいな、一夏」

すると、不意に神谷が、一夏にそう呼び掛けた。

「ああ……………俺も楽しいよ、アニキ」

その言葉に、一夏も笑いながらそう返す。

「こっしてやり合っていると……………昔を思い出すぜ」

「ああ……………アニキに喧嘩の稽古をつけてもらって……………そんで他校の不良集団との喧嘩に明け暮れたっけ……………」

「良い思い出じゃねえか」

「俺はちょっと後悔してるけどね……………」

「へっ……………」

「ぶっ……………」

そう言い合って、また笑い合う2人。

「行くぜえ！ 稽古はこれからだあ！！」

「望むところだぜ！ アニキ！！」

そして2人は、また熱くブツかり合う。

「コレが噂に聞く……………日本の男の友情なのですね」

「いや……………違うと思うぞ」

そんな目の前の光景に、若干羨望の眼差しを送っているセシリアと、呆れている様子で突っ込みを入れる篤だった……………

……………結局、神谷の喧嘩稽古は日が落ちるまで続けられ、セシリアと篤は2人の戦いの様子を見物しているだけで終わった。

IS学園・学生寮……

屋上……

「ふう〜……今日は一段と燃えたぜ」

そう言いながら、寮の自分の部屋……

………と言う名の、屋上に置かれたプレハブ小屋へと帰室する神谷。

神谷をIS学園に置く際に、最も困ったのがその住居である。

寮に空き部屋はあるものの、一夏と違って神谷を寮の部屋に入れるのは色々な意味で危険だと千冬は判断。

しかし、監視が行き届く範囲内に留めたい……

一夏と相部屋にする方法も考えたが、そうなると簞の移動先の部屋を早急に考えないといけない……

紆余曲折を経て、寮の屋上にプレハブを建てて、そこに住ませると言う手段を取ったのだ。

あんまりな待遇に思えるが、ちょっと前まで世界中を旅しており、野宿する事も多かった神谷にとっては、住居とは雨風さえ凌げればそれで良いと考えており、特に不平を言う事は無かった。

根無し草生活が長かった為、部屋には私物らしい私物は無く、小ざつぱりとしていた。

「よっ、と」

トレッドマークのマントをスタンドに掛け、ゴミ捨て場から失敬してきた畳の上に敷かれた千冬の唯一の厚意で渡された支給品の布団の上に寝転ぶ神谷。

そのまま、胸に下げていたコアドリルを掴んで、目の前に持つてくると、ジッと見つめる。

「……………」

そこで神谷は、難しい顔となった。

(この間現れた獣人の奴は、親父の事を知っている様な素振りを見せた…………… やっぱり親父は獣人と関わりを持ってたのか？ 償いつてのは一体何々だ?)

彼是と考えるみる神谷だったが、どれも決定的な証拠が無い為に断定できず、考えは堂々巡りした。

「ああ、もう！ 止めだ！ 止めだ！！ 考えたつてしょうがねえ！ アイツ等をブツ倒して行けば、何時か分かんたる！！」

とうとう神谷は考える事を放棄し、そう叫んだ。

と、その時……

「最低っ！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！！ 犬に噛まれて死ね！！」

鈴のものと思われる罵声が、床………下の部屋から聞こえて来た。

「？ 何だあ？」

神谷が困惑しながら半身を起こすと……

「馬に蹴られて死ね！」

今度は箒のものと思われる罵声が聞こえて来た。

「……………何かあったなあ」

神谷はそう言うと、完全に身を起こし、プレハブ小屋の隅の方に行つたかと思うと、床板を外した。

更に、その下にも有った板も外したかと思うと、そこから下の階の部屋……

一夏と箒の部屋の天井から、逆さまに顔を出した。

実は、神谷のプレハブ……

一夏と箒の部屋の丁度真上に立てられており、それを知った神谷は

即座の自室の床と、一夏と箒の部屋の天井を貫通させ、専用通路を作った。

当然、千冬、そして箒からは怒りの声が拳がったが、神谷は何処に吹く風だった。

一夏は喜んでいたが……

「どした、一夏？……って、何だ、その顔？」

部屋の天井から、逆さまになって顔を出した神谷が見たものは、左頬に紅葉を作っている一夏と、不機嫌そうにしている箒の姿だった。

「あ、アニキ」

「神谷……だから、天井から来るのは止めると言ってるだろう」

神谷の存在に気づく一夏と、無駄だと分かっているながらも、一応そう注意してみる箒。

「さつき鈴の罵声が聞こえたが……お前、何かしたのか？」

部屋からロープを垂らし、戻り道が出来る時、一夏と箒の部屋に降りて来てそう尋ねる神谷。

「いや、それが……」

一夏が困惑しながら状況を説明し始める。

曰く、一夏と箒が一緒の部屋になっている事を知った鈴が、箒と部

屋を代わろつと言つて来た。

曰く、案の定言い争いになり、その最中に鈴は一夏に昔交わした約束を覚えているかと尋ねて来た。

曰く、鈴の料理が上がったら毎日酢豚を奢ってくれらるって約束だろつと答えた途端、鈴が怒り出した。

曰く、そのまま売り言葉に買い言葉で、来週のクラス対抗戦で、勝つた方が負けた方に何でも1つ言つ事を聞かせられるという約束を交わしてしまつた。

……………との事である。

「成程な……………」

「全くワケが分かんないだろ？ コツチはちゃんと約束を覚えてたつてに、急に怒り出して……………」

心底不思議そうな顔をしてそう言つ一夏。

……………もし世の男達がコレを聞いたら、間違いなく彼は殴られているだろつ。

(昔っからこういう所は変わらねえなあ……………まあ、あのブラコンアネキのせいで本人は自覚してないが、シスコンが入っているとこるがあるからなあ……………)

そんな一夏の姿を見て、内心でそう思つ神谷。

因みに神谷は、空気は読めない………と言っか、基本読まないが、恋愛ごとに関してはそれなりに機微を理解している。

「(ま、コレばかりは俺がどうこう言って如何にかなる問題じゃねえからな………本人の自覚を待つしかねえか) 一夏」

「? 何だよ、アニキ?」

「取り敢えず、後ろから刺されない様に気を付けとけ」

「何で!?!」

神谷の言葉の意味が理解出来ず、ますます困惑する一夏だった………

一方、その頃……

螺旋王と螺旋四天王は……

????.

「全く！ 何て様だ、ヴィラルー！」

「申し訳ございません……」

厳しく叱りつけて来ているシトマンドラに、只々頭を下げているヴィラルー。

「大口叩いておいてこの体たらくとは……貴様それでも獸人か！」

「その辺にしておけ、シトマンドラ。螺旋王様の御前であるぞ」

更に責め立てようとするシトマンドラを、チミルフがそう言って押さえた。

「チイツ！……」

シトマンドラは不満そうにしながらも、黙り込んだ。

「……………」

一方のロージェノムは、そんな喧噪になど興味が無い様に、ヴィラルが撮って来た、白式を操る一夏の映像を無表情で眺めていた。

「織斑 一夏……………如何やら、私達が思っている以上に厄介な存在かもしれないね……………」

そこでアディーネがそう呟く。

「ふむ……………そういう芽は、早い内に踏み潰しておくに限る……………螺旋王様。『例のアレ』を使う許可を貰えますかな？」

「『アレ』を使うか……………」

グアームがそう言うと、ロージェノムはグアームに視線だけを向けてそう言った。

「ファントム・タスク亡国企業の連中が持ってたあの玩具か？ 使えるのか？」

チミルフが疑問の声を挙げる。

「ISを持ってISを制する……………それはあの篠ノ之 東本人も言っていた事だ。仮に壊されたとしても、我々には何の痛手も無かる
う」

「それもそうだね……………あの女の玩具が幾らか壊れようが、アタシ達にとつちや寧ろ、願ったり叶ったりだね」

グアームの言葉にそう賛同するアディーネ。

「良いだろう、グアーム。その件はお前に任せる……………それと……………
…今宵は、祝いの酒を用意しておけ」

「祝いの酒？……………！？ と仰られますと、つまり！！」

ロージェノムが言った言葉に、シトマンドラが反応する。

他の四天王とヴィラルも、表情を引き締めた。

「そうだ……………いよいよ我等が存在を世に知らしめる時が来た……………」

「おおおっ！ 遂に！！！」

「この日が来たのでございますね……………」

「ふむ、いよいよか……………」

「このシトマンドラ。螺旋王様の為ならば、喜んで働きましょう」

ロージェノムがそう言うと、四天王は一気に高揚した様子を見せる。

「愚かなる人類に変わり……………我等がこの星の頂点に立つ……………それを阻むものは、天上……………貴様の息子であるつと、叩き潰すまでだ」

そう言って、ロージェノムはニヤリとした笑みを浮かべるのだった

……………

UJU

第5話『ココはどーんと胸を借りる積りで着やがれ!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

クラス代表が一夏に決まり、鈴が転校してくる話です。

今回の見どころは稽古ですが、グレンラガンVS白式ですかね。
結構いい勝負になったと思ったのですが、如何だったでしょうか？

さて次回はクラス対抗戦。

ゴーレム？が乱入してくるあの戦いですが、ここからグレンラガン側、そしてオリジナル展開要素が強く出て来る様になりますのでご注意ください。

そして！

次回では遂に!!!

グレンラガン名物の1つ、『合体』が披露されます!!!

何と如何合体するかは、次回のお楽しみで。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第6話『アレ』つつつたら決まってる！ 『合体』だ！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第6話『アレ』つつつたら決まってる！ 『合体』だ！』

一夏と鈴の騒動から1週間……………

遂に、クラス対抗戦の日が訪れた……………

何と2人は1回戦からブチ当たる事となり、試合会場の第2アリーナは、既に通路までもが見物の生徒で埋め尽くされていた。

既に鈴は、アリーナにISを装着して待機している。

一方の一夏は……………

第2アリーナ・ピット内……………

「1回戦から鈴が相手か……………」

ピット内で待機していた一夏がそう言うと、目の前にモニターが展開して、鈴のISの情報が映し出された。

傍らに居た神谷、篝、セシリアも注目する。

「アチラのISは『シエンロン甲籠』。織斑くんの白式と同じ、近接格闘型です」

そして、真耶のそう言う説明が聞こえて来る。

「シェンロンか……どんな願い事も1つだけ叶えてくれるって龍でも出てくんのか？」

「アニキ、それは違うから」

鈴のISの名前を聞いた神谷がそんな事を言い、一夏が突っ込みを入れる。

「私の時とは勝手が違いましたよ。油断は禁物ですわ」

「硬くなるな。練習の時と同じ様にやれば勝てる」

「ああ………」

セシリアと篝の言葉を聞くと、一夏はモニターの映像を切り替え、アリーナの鈴の姿を見やる。

「アレで殴られたら、スゲー痛そうだな………」

「バカ野郎、一夏！ 殴り殴られてこそ喧嘩だろ！ それに殴られた時の心配なんかしてちゃ、勝てる相手にも勝てないぜ！」

「俺はアニキみたいに頑丈じゃないんだよお」

神谷のアドバイスとも知れぬ言葉に、思わず溜息を零す一夏。

「それでは両者、規定の位置まで移動して下さい」

と、アナウンスがそう告げ、いよいよ試合が開始されようとする。

「……………」

それを聞いた一夏は、カタパルトに着く。

「一夏！」

と、そこで神谷が一夏に声を掛けた。

「！」

「とことんやり合って来い。そうすりゃ分かり合える」

そう言っつてサムズアップして見せる神谷。

「……………ああ！ 行って来るよ、アニキ！！」

一夏はそう答えると、ピットから飛び出して行った。

「……………さ、私達は管制室から試合の様子を見ましょう」

「ああ……………」

「おう」

それを見送った後、千冬や真耶と一緒に試合の様子を見守るつと、3人は管制室に移動を始めた。

と、その時……………

「……………ん？」

胸の辺りに違和感を感じた神谷が、ふと目をやると……………

首から下げていたコアドリルが、緑色の光を放って点滅していた。

「？ 何だ？ コアドリルが反応している？」

思わずコアドリルを手に取り、凝視する神谷。

コアドリルは、まるで何かを警告する様に点滅を繰り返している。

「……………」

と、神谷はそのコアドリルを握り締める。

（嫌な予感がしやがる……………頭の後ろがチリチリとする感じだ……………）

そんな予感を感じると、一夏が出て行った射出口を見やる。

（一夏……………気を付けろよ）

そして、鈴と戦う一夏は……………

空中で激しく斬り結んでいた。

だが、鈴の近接武装『双天牙月』に押され気味であった。

(クツ！ このままじゃ消耗戦になる……………そうになると俺が不利だ)

鈴の攻撃を防ぎながら、内心でそう思う一夏。

彼の白式は雪片式型が唯一の武装であり、この雪片式型は、相手のシールドバリアーを斬り裂いて、相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられると特殊能力がある。

その為、1撃入れる事が出来れば、相手は必然的に絶対防御を発動する事になり、シールドエネルギーを大きく削ぐ事が出来るのだ。

しかし、この攻撃は自身のシールドエネルギーを変換して放つ為、下手をすれば自分の方が先に力尽きてしまうと言う諸刃の剣なのだ。
つまり……………

今の一夏にとって、消耗戦を挑まれるのはそれだけで敗北フラグなのだ。

(一旦距離を取って……………)

鈴から距離を放そうとする一夏。

すると……

「甘いつー!!」

鈴がそう言ったかと思うと、甲龍の非固定浮遊部位アンロック・ユニットである棘付き装スパイク甲・アーマーが展開。

その中心に現れた球体が光ったかと思うと、何か見えない塊の様な物が、一夏を掠める様に命中した!!

「のあつ!?!」

バランスを崩して失速する一夏だったが、如何にか空中で持ち直す。

見えない塊は、アリーナの遮断シールドに命中し、爆発した!!

(何だ今のは!?! 見えない砲弾に掠められたみたいだったぞ!?!)

鈴の使った武装の正体が分からず、困惑する一夏。

「今のはジャブだからね」

すると、そんな一夏を見て優越している様な鈴がそう言い放った。

そして、今度は両肩の装甲が展開して光を放った!!

「!?!」

その次の瞬間!!

一夏はまるで鉄球クレーンの直撃を喰らったかのような衝撃を受け、アリーナの地面に墜落。

地面を抉りながら転がった!!

アリーナ・管制室………

「何だ!? 今の攻撃は!?!」

「衝撃砲ね。空間自体に圧力を掛けて、砲弾を撃ち出す武器です」

篝の驚きの声に、真耶がそう答える。

「要するに、トンでもねえ空気銃って事か」

「多少語弊はあるが、まあそんなものだ」

その兵器を空気銃に例える神谷と、呆れながらもそう言う千冬。

「私のブルー・ティアーズと同じ、第3世代兵器ですわね」

セシリアもそう呟く。

と、モニターの先で、漸く起き上がった一夏に、再び鈴が衝撃砲を見舞う。

だが、一夏は直感的に回避。

何とか全てかわす事に成功する。

「良くかわすじゃない！ この『龍咆』は、砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに……………」

そんな一夏に、鈴が得意げにそう語る。

「しかも……………あの衝撃砲は、砲身の斜角がほぼ制限無しで撃てる様です」

「つまり、死角が無いと言う事ですか？」

「そう言う事になりますね……………」

（一夏……………）

真耶の説明に、箒は不安げな表情を浮かべた。

一方、神谷も難しい顔をしているが、それは一夏を心配してでは無かった……………

（段々点滅が早くなってきてやがる……………まるで何か近づいて来てるみたいだ……………）

先程から点滅を繰り返しているコアドリルが、更に激しく点滅する様になっていたからだ。

それと同時に、神谷が感じている嫌な予感も深まって行った……

アリーナ内……

(クソッ！ 益々防戦一方だ！！)

鈴が次々と繰り出す龍咆の攻撃をかわしながら、何か手はないかと模索する一夏。

(と言っても、射撃武器の無い俺の機体じゃ、遠距離戦は出来ない……手詰まりか！！)

思わず一夏の心に諦めの文字が浮かぶ。

だが、その次の瞬間には、神谷の顔が浮かんだ。

(……いや、まだまだ！ こんな事で諦めてたら……アニキに笑

突如、アリーナの上空を覆う遮断シールドが壊され、巨大な爆音が響き渡った！！

そして、遮断シールドを突き破って現れた『何か』が、アリーナの地面に爆発と共に着地した！！

「!?!」

「何っ!?!」

両者は動きを止め、落ちて来たその『何か』を見やる。

「!?! まさか!?!」

一夏は、また獣人やガンメンが乱入して来たのかと思い、身構える。
すると……………

「試合中止！ 織斑！ 凰！ 直ちに退避しろ!?!」

管制室の千冬からそう通信が送られてきたかと思うと、客席の防御シャッターが下り始めた！！

(やっぱり…………… 敵襲!?!)

千冬からの通信とその様子で、一夏は何者かが乱入して来た事を確信する。

「一夏！ 試合は中止よ！ すぐピットに戻って!?!」

そこで鈴からも、その通信が送られてくる。

「鈴！ お前が先に戻れ！ 俺は……………」

と、一夏がそう言い掛けた瞬間……………

目の前に『警告』と書かれたモニターが展開した。

『ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックオンされています』と。

「!?!? IS!?!? 獣人やガンメンじゃないのか!?!?」

相手がISである事を知って驚く一夏。

「一夏！ 何やってるの!! 早くピットに……………」

と、そんな一夏に鈴がそう言いかけた瞬間!!

もうもうと上がる爆煙の中から、桜色のビームが、鈴目掛けて放たれた!!

「!?!?」

「危ない!!」

咄嗟に鈴を抱き抱えて掻っ攫う様にする一夏。

先程まで鈴が居た場所を、桜色のビームが通り過ぎて行く。

「ビーム兵器かよ……しかもセシリアのISより出力が上だ」

一夏は目の前に表示された情報を見ながらそう言う。

「ちよっ！　ちよっど、バカ！　放しなさいよお！！」

と、抱き抱えられていた鈴が、放せと言って暴れる。

「静かにしてろ！！」

「！！」

しかし、一夏の怒鳴り声で大人しくなる。

そしてそこで……

爆心地点にいた謎のISの正体が明らかになった。

深い灰色をしており、手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。

首というものがなく、肩と頭が一体化しているような形をしている
フル・スキン
全身装甲。

腕を入れると2mを越す巨体であり、頭部には剥き出しのセンサー
レンズが不規則に並んでいる。

「（何だコイツ？　コレでもISなのか？）お前は何者だ！！」

内心でそう疑問を感じながらも、その謎のISへそう問い掛ける――

夏。

しかし、謎のISは反応を返さない。

「答える！ お前は何者だ！？ 何が目的だ！？」

再度そう問い掛けるが、その瞬間！！

謎のISは、腕に有ったビーム砲を向け、発砲して来た！！

「！？ チイツ！！ 問答無用ってワケかよ！！」

それを回避すると、鈴を放り出す一夏。

「ちよつ！？ 一夏！？」

「誰だか知らないが！ 売られた喧嘩は買ってやる！！ それがグレン団の魂だ！！」

驚く鈴を尻目に、一夏は謎のIS……『ゴレムI』に突撃して行った！！

アリーナ管制室……………

「織斑くん！ 何をしていますか！！ すぐに逃げて下さい！
今先生達がISで鎮圧に向かいますから！！」

「あのバカ……………教師部隊が到着するまで、鈴と生徒達が逃げる時間を稼ぐ積りか！？」

一夏の様子を見ていた真耶と千冬がそう叫ぶ。

「先生！ 私にISの使用許可を！！ すぐに出撃出来ます！！」

と、セシリアが千冬にそう言う。

「そうしたいのは山々だが……………これを見る」

しかし、千冬はそう言うと、小型モニターを展開させた。

そこには、アリーナの遮断シールドがレベル4に設定されていると報告が映っていた。

「遮断シールドが……………レベル4に設定？」

「しかも、扉が全てロックされて……………あ！？ あのISの仕業」

「その様だ……………コレでは、避難する事も、救援に向かう事も出来ない……………」

筈、セシリア、千冬がそう言い合う。

「……………」

すぐに状況を理解すると、絶叫にも似た怒声を挙げた。

「キヤアツ!? 織斑先生!?!」

「うわっ!? 何ですか、この穴!?!」

「まさか……………神谷!?!」

その絶叫でセシリア、真耶、篝も神谷の姿が無い事に気づき、床に空いた大穴を見て驚きの声を挙げるのだった……………

再び、アリーナ内……………

「でりゃあああああああ……………!?!」

雪片式型で、ゴーレムIに斬り掛かる一夏。

しかし、ゴーレムIはその巨体からは想像も出来ない様な機動性でかわす。

そして、反撃とばかりにビームを放って来る。

「ぐぐっ！！」

一夏は雪片式型で斬り払い、如何にかダメージを防ぐ。

しかし、既にシールドエネルギーの残りは2ケタに近くなっていた。

「クソッ！ デカイ図体して、何て機動性だ！！」

「一夏、何やってんの！！ コレで何度目の失敗なの！！」

と、そこで鈴が援護に龍咆を放つ。

「クッ！ スマン、鈴！！」

その間に一旦離脱する一夏。

と、ゴーレムIはそんな2人に向かって、腕のビーム砲を乱射して来る。

「如何するのよ！ 何か策が無くちゃ、アイツには勝てないわよ！」

「策ならある！！」

「ホント！？ 何よ！！」

「気合だ！ 気合でアイツを倒す！！」

「そう言うのは策って言わないのよ!! 馬鹿!!」

と、一夏のあんまりと言えばあんまりな言葉に、鈴は思わず動きを止めてしまつ。

その瞬間を見逃さず、ゴーレムIが鈴へビーム砲を向けた!!

「!? しまつ……………」

「鈴!!」

一夏は咄嗟に、鈴を庇う様に間に割り込んだ!!

しかし、残り少ないシールドエネルギーでは、あのビーム砲を防ぐのも切り払うのも無理だ。

無情にもビーム砲は一夏目掛けて放たれようとする。

「クウツ!!」

「一夏あつ!!」

鈴の悲鳴にも似た叫びがアリーナに木霊する。

……………と、その時!!

突如、ゴーレムIの足元の地面から腕が生え、その足を掴んだ!!

バランスを崩し、ゴーレムIが発射しようとしていたビーム砲は、

真上に発射され、遮断シールドに当たって爆発した！！

「!?!? 何っ!?!?」

「あの腕は!?!?」

驚く鈴と、その腕に見覚えを感じる一夏。

ゴーレムIの足を掴んでいた腕は、そのままゴーレムIを地中へ引き摺り込もうとする。

引き摺り込まれまいと飛行するゴーレムIだが、腕の力は半端では無く、徐々にそのボディが地中へと引き摺り込まれて行く……………

すると、ゴーレムIは足元の地面に向かって、全ビーム砲を発射した!!!

巨大な爆炎がゴーレムIを包み込み、その足元のアリーナの地面を吹き飛ばす!!!

「おおっと! 危ねえ、危ねえ……………」

と、その爆炎の中から、紅い機体……………グレンラガンが飛び出して来て、アリーナの地面の上に着地した!!!

「アニキ!!!」

「アニキって……………ええっ!?! アンタ、神谷なの!?!?」

喜びの声を挙げる一夏と、グレンラガンとなった神谷の姿を見て驚

く鈴。

「一夏！ 鈴！ コイツは俺に任せろ！！ 叩き潰して、スクラップにしてやるぜ！！」

神谷がそう言い放つと、グレンラガンは両手の指の骨をバキバキと鳴らした。

「神谷！？」

「何で地面に下から！？」

「！ そうか！ 幾らアリーナに遮断シールドが張られているとは言え、それは地上だけの話………地面の下からなら、アリーナに簡単に侵入する事が出来る！！」

「一応地面の中にも、特殊合金を敷き詰めてあった筈だが………アイツめ」

管制室に居る箒、セシリア、真耶、千冬がそんな声を挙げる。

と、次の瞬間！！

ゴーレムIは、最優先標的をグレンラガンへと変えたのか、その巨体を跳躍させ、襲い掛かって来た！！

巨大な右拳が、グレンラガン目掛けて振り下ろされる！！

「あ、危ない！！」

鈴が思わずそう叫ぶが……

「へっ！　しゃらくせええっ！！」

神谷がそう言うと、グレンラガンは迫り来る巨大な拳を迎え撃つ様に、自らも右拳を繰り出した！！

すると、その拳から2本のドリルが出現！！

ゴーレムIの巨大な拳とブチ当たったかと思うと、そのまま粉碎した！！

右腕が砕かれ、ゴーレムIが大きく仰け反る。

「もう1丁！　グレンファイヤーッ！！」

続いて神谷がそう叫ぶと、グレンラガンの胸の顔に掛けられていたサングラスが赤く発光。

そこから熱線が発射された！！

直撃を受けたゴーレムIは、装甲が溶け始める。

しかし、僅かに溶けた辺りで、ゴーレムIは至近距離からレーザーを発射！！

「うおっ！？」

直撃を喰らってブツ飛ぶグレンラガン。

「この野郎！ 小賢しい真似しやがって！！ ミサイルドリル！！」
と、受け身取って立ち上がったグレンラガンは、右腕に再び2本のドリルを出現させると、その右腕を左腕で支える様にして構えた。

すると、右腕の2本のドリルがミサイルとなり、ゴーレムI目掛けで発射された！！

ミサイルドリルは、1発がゴーレムIの頭部、もう1発は腹部へと命中！

巨大な爆発を起こし、ゴーレムIの姿が黒煙で見えなくなった。

「如何だ！！ 見たか！！」

仕留めたと思い、そう言っただけで切れるグレンラガン。

「アニキッ！！」

「神谷！！」

と、そのグレンラガンの元へ、一夏と鈴がやって来た。

「おう、一夏、鈴。無事か？」

「ああ、アニキのお蔭で助かったよ」

「ちょっと！ それがアンタのISなワケ！？ 一体何なのよ、ソレ！！ 大体、武器がドリルって、そんなのアリなの！？」

お礼を言う一夏とは対照的に、鈴は神谷を質問攻めする。

「バツキヤロウ！ ドリルは男の魂なんだよ！！」

「うんうん……………」

「答えになってないわよ！！」

気合満タンにそう言い放つ神谷と、それに頷いている一夏だったが、当然鈴は納得しないのだった……………

と、その時……………

黒煙の中から、ガシャンッ！ と言う音が聞こえて来た！！

「「「！？」」」

その音に身構える一同。

その後も、ガシャンッ！ ガシャンッ！ と断続的に音が聞こえて来たかと思うと……………

ボディと頭部が罅割れ状態となっているゴーレムIが、センサーレズを不気味に発光させながら姿を現した。

「やろう！ まだやるってのか！？」

「そんな！？ アレだけのダメージを受けたら、エネルギーが残ってたとしても、操縦者はもう限界の筈よ！！」

構えを取り直すグレンラガンに対し、鈴がまだ動くなんてありえないと言っ。

と、次の瞬間……………

罅割れていたゴーレムIの頭部が、スパークを発して爆発を起こし、装甲の一部が剥がれ落ちた！！

「!?!」

「なっ!?!」

「な、何よアレ!?!」

その装甲の下に現れたモノを見て驚愕する神谷達。

「「「「!?!」」」」

管制室の千冬達も驚きを露わにしていた。

本来であれば、そこに在るのは装着者の顔である筈だった……………

しかし、ゴーレムIの剥がれた装甲の下から現れたのは……………

コードで繋がれた回路や、光を放っている基盤……………

つまり、無機質な機械だった!!

「アイツ……………まさか機械!?!」

サイルドリルを発射するグレンラガン。

だが、ミサイルドリルは、ゴーレムIが放ったビーム砲を受けて墜落してしまふ。

その後、ゴーレムIは空中を飛び回りながら、3人に爆撃の様にはビームを浴びせようとしてきた。

「!? 危ない!」

「クツ!」

「!?! うおわっ!?!」

鈴と一夏は如何にかかわしたが、神谷のグレンラガンは直撃を受けてしまふ。

「ちょっと! 神谷! アンタもちゃんと飛んで避けなさいよ!」

「へっ……………それが出来りゃあ苦労しねえよ」

鈴の叫びに、珍しく愚痴る様な返事を返す神谷。

「!? アニキ! まさかグレンラガンって……………」

「ああ、飛べねえ」

「ええっ!? 如何言う事よ、ソレ!?!」

ISと互角の性能を持つと言われていたグレンラガンだが、たった

1つだけISに劣っている点があった。

それは、飛行能力の欠如である。

空を飛べる相手と、飛べない相手では、言つまでも無く飛べる方が遙かに有利である。

つまり、現状グレンラガンは、地上戦なら兎も角、空中戦に於いては、ISに勝てないのだ。

と、そんなグレンラガンに向けて、ゴーレムIは全てのビーム砲を向け、一斉に放って来た！！

「！！ チイツ！！」

かわそうとするグレンラガンだが、地上を走つての回避では間に合いません……

「アニキイツ！！」

と、その瞬間！！

一夏がビームとグレンラガンの間に割り込んだ！！

「！？ 一夏！！」

「バカ！ 一夏！！……」

鈴がそう叫んだ瞬間に、ゴーレムIが放ったビームは一夏を直撃した！！

「逃げる?.....そんな事出来るワケないだろう! 此処には.....
...守らなきゃいけない人が居るんだ!!」

一夏はそう叫ぶ様に言った。

「「!?!」」

守らなきゃいけない人、の部分で、鈴、セシリア、篝が反応する。

「良く言っただぜ 兄弟!! こうなったら最後の手段だ! 『アレ』
、やるぞ!!」

「『アレ』? 何だよ、『アレ』って?」

神谷の言う『アレ』というのが分からず、困惑する一夏。

「バカ野郎! 『アレ』つつつたら決まってるだろ! 『合体』だ
!?!」

「『合体』!?!」

「が、『合体』!?!」

「『合体』だと!?!」

「『合体』ですって!?!」

神谷の『合体』と言う言葉に、一夏、鈴、篝、セシリア(台詞順)
が驚きを示す。

「そ、そんな神谷くん……………男同士で合体だなんて……………で、でも！ 男女でも、それはそれで問題で……………」

そして、『合体』と言う言葉に、別のナニかを想像する真耶。

「馬鹿も休み休み言え。そんな事が出来るワケないだろう」

そんな中、千冬が1人冷静にツツコミを入れる。

「やってみなくちゃ分かんねえだろ！ 立て、一夏あー！！」

「お、おうー！！」

神谷に言われるがままに立ち上がる一夏。

すると、グレンラガンが右手をドリルに変え、一夏の背中に正拳突きを仕掛ける様に構えた。

「えっ！？ ア、アニキ！？」

「どりゃあああああああああ—————！！」

戸惑う一夏を無視し、グレンラガンは右手のドリルを、思いっきり一夏の背中へ突き刺した！！

「ぐはっ……………」

一夏の口から、断末魔の様な声が漏れる。

「な、何が起こっているんですの!？」

「山田先生!！」

「お、織斑さんと天上くんが居た場所から、凄まじいエネルギーが観測されています! な、何このエネルギー量!? 既存のどんなエネルギーも上回ってる!？」

管制室に居た筈、セシリア、千冬、真耶からもそう声が挙がる。

やがて、その光が弾けたかと思うと、そこには……………

まるで、『グレンラガンが白式を装着している』様な姿のマシンが居た。

「ん? んん……………!? 何だ!? 如何なつたんだ!？」

と、グレンラガンが白式を装着している様な姿のマシンの、ボディ部分の顔が動き、一夏の声が響いて来た。

「!?!? 一夏!?!? 一夏なの!?!？」

と、その声を聞いた鈴が、近くに寄つて来る。

「鈴? 俺如何なつて……………!?!? って、何じゃあこりゃあああああああああ—————!?!？」

鈴に気づいた後、自分の今の状態を見て、某刑事ドラマの刑事が殉職時に挙げた絶叫を挙げてしまふ一夏(?)

グレンラガンが白式を装着している様な姿のマシンの拳を打ち込まれたゴーレムIの頭部には、更に無数のヒビが入る。

「覚えておけ！ 機械野郎！！ 合体つてのは、気合と気合のぶつかり合いなんだよ！！」

と、神谷がそう言った瞬間！！

グレンラガンが白式を装着している様な姿のマシンは、右手を開き、罅割れていたゴーレムIの頭部を掴んだかと思うと、そのまま握り潰した！！

頭部を握り潰されたゴーレムIは、そのまま仰け反り、仰向きに倒れる。

「男の魂、燃え上がる！ あ、度胸合体！ 『白式ラガン』！！」

すると、グレンラガンが白式を装着している様な姿のマシン………命名『白式ラガン』は、そう見得を切り始めた！！

「俺を誰だと思っていやがる！ 覚えとけ！ コイツの名前は！ 『白式ラガン』だ！！」

「白式………」

「ラガン………」

「まんまね………」

その名前を半分づつ反復する筈とセシリアに、まんまな名前に突っ

ゴーレムI目掛けて思いつきり投げつけた!!

高速回転しながらゴーレムIに向かっていたグレンブーメランが、途中で2つになる!!

2つになったグレンブーメランは、何度もゴーレムIにブチ当たり、その巨体を宙に浮かせたかと思うと、そのままゴーレムIを空中に固定した!!

直後に、白式ラガンが雪片式型を持った右手を掲げる様に構えたかと思うと、雪片式型が展開し、エネルギーの刃が形成される。

だが、そこに形成された刃は、いつもの剣の様な刃では無く……

まるでドリルの様な形状の刃だった!!

「ドリルウウツッ! スラアアアアアアアアッシュツッ!!」

そのドリル状の刃を形成した雪片式型……『雪片突型』を両手で握ると、両肩の白式のスラスターでゴーレムIに向かって急上昇!

ゴーレムIを肉薄したかと思うと、雪片突型を上段に振りかぶり、一気に振り下ろした!!

そのまま、雪片突型を振り切った姿勢で着地すると、雪片突型を閉じて刃を消し、見得を切る様にポーズを決める白式ラガン。

背後の空中で、真つ二つになっていたゴーレムIが爆散!!

その爆発の中から、1つになったグレンブーメランが戻って来て、白式ラガンの胸に再装着された。

「……………やったのか？」

管制室の千冬がそう呟く。

「敵のエネルギー反応ゼロ……………目標、完全に沈黙しました！」

「やりましたわー!!」

「やったぞ!!」

真耶がそう報告を挙げると、セシリアと箒が歓声を挙げた。

「一夏！ 神谷！」

と、地上に仁王立ちしていた白式ラガンに鈴が近づく。

「鈴！」

「やったじゃない！ 一夏!! それにしても……………一体如何やって合体しての？」

一夏にそう言いながらも、白式ラガンの合体の仕組みが気になる鈴。

「そんなの決まってるだろ！ なあ、一夏!!」

「えっ？ えっと……………あ、ああ、そうだね」

「何？ 一体何なの？」

興味深そうにしている鈴に向かって、神谷と一夏は当然の様に言った。

「『気合』だ！！」

「……………」

その答えに沈黙し、呆れた様な顔をする鈴。

「？ 如何した、鈴？」

「んだ？ 埴輪みてえな顔しやがって……………」

「アンタ達は……………ハア~~~~、もうやだ……………」

キョトンとする一夏と神谷に、鈴は心の底から疲れた様な溜息を吐いた。

「にしても……………何だったのかしら、アイツ……………」

燃えているゴーレム？の残骸を見やり、そう呟く鈴。

と、その時……………

『ゴーレムを退けたか……………中々やるな……………小僧共』

「「「！？」「「「」

何処からとも無く、そう言う声が聞こえて来て、神谷達は思わず身構えた。

「だ、誰!？」

「何処に居る!？」

「隠れてないで出て着やがれ!!」

鈴、一夏、神谷がそう言い放つと……………

アリーナの上空に、巨大なモニターが展開。

古代ギリシヤ人の様な白い布の様な服を纏った巨大な体躯で、スキンヘッドで逞しい顎髭を生やした男の姿が映し出された。

「!?!? お前は!?!」

『我が名は螺旋王……………ロージエノム』

空中に出現した大型モニターに映る男……………螺旋王ロージエノムは、まるで宣言するかのように放って来たのだった……………

UJU

第6話『アレ』つつつたら決まってる！ 『合体』だ！』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

クラス対抗戦が開始。

因縁を抱えながら早速激突する一夏と鈴。

だがその勝負の最中……

謎のIS『ゴーレムI』が乱入する。

強大な火力と機動性で一夏と鈴を圧倒。

神谷のグレンラガンが助けに入り、形勢逆転かと思われたが……
無人機だったゴーレムは、過度の損傷を受け暴走！

このままでは、アリーナにいる人全てが危険に晒される。

だが、その時……！

何と……！

一夏の白式と、神谷のグレンラガンがまさかの『合体』……！

『白式ラガン』となって、ゴーレムを圧倒……！

最後は必殺の『ドリルスラッシュ』で見事に撃破……！

『合体』はグレンラガンの名物の1つですからね。

この作品でもやりたいと思い、こんな合体を試みました。
どうやって合体しているのかと言うと……

勿論『螺旋力』です。

さて、最後にロージェノムが神谷達に姿を晒しましたが……

前にも言った通り、ここからオリジナル要素が大分増して行きます。

ご観覧の際には、ご注意ください。

では、「意見」「感想をお待ちしております。

第7話『出来るか如何かじゃねえ……やるんだ』（前書き）

お気に入り登録が100件を突破していました。
皆さん、ご愛読ありがとうございます。

第7話『出来るか如何かじゃねえ……やるんだ』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第7話『出来るか如何かじゃねえ……やるんだ』

IS学園・第2アリーナ……………

「「「……………」」」

神谷、一夏、鈴は、無言でアリーナの上空に展開したモニターを凝視していた。

『……………』

モニターに映る男……………螺旋王ロージエノムは不敵な笑みを浮かべており、まるでモニター越しに神谷達を見下しているかの様だった。

「アレは……………」

「一体……………誰ですの？」

「お、織斑先生……………」

「……………」

管制室に居る篝、セシリア、真耶、千冬も突如現れた男に戸惑いの様子を浮かべている。

「……………聞こえるか、ロージエノムとやら。私はIS学園教員の織斑千冬だ」

と、そこで千冬が、神谷達の前にモニターを展開させ、ロージエノムに向かって話し掛けた。

『……………ブリュンヒルデか。学園に居るとは聞いていたが、まさか教師をしているとは思わなかったぞ』

ロージエノムは不敵な笑みを浮かべたままそう言い放つ。

「その呼び名は余り好きではない……………それよりも答えてもらおう。今回のこの謎のIS……………そして以前の獣人やガンメンと呼ばれる者達の襲撃はお前の仕業か？」

そんなロージエノムに対して、千冬はそう問い質す。

『そうだ……………』

アッサリと白状するロージエノム。

いや、と言うよりも……………

それが如何したとでも言わんばかりの態度だ。

「貴様、正気か？ このIS学園は如何なる国家、企業、組織の干渉を受けない。逆に言えば、この学園に干渉すると言う事は、世界を敵に回す事だぞ」

『それが如何した？』

「なっ!？」

ロージエノムの意にも介していない様子に、千冬は驚きの声を挙げる。

(コイツは何を考えているんだ!? まさか本気で世界中を敵に回す気が!?)

「おうおうおうおう! さっきから聞いてりゃ、上から目線で見下ろしやがって!! 何様の積りだ、テメエ!!」

と、千冬がロージェノムの真意を探りかねていると、白式ラガン姿のままの神谷が、モニターのロージェノムに向かってそう啖呵を切った。

「ア、アニキ……………」

融合している一夏は、若干気後れしている様子を見せている。

『……………貴様が天上の息子か……………成程……………父親同様に勇ましい奴だな……………』

と、ロージェノムは千冬から白式ラガンに視線を移すとそう言い放った。

「!?!? 親父を知ってんのか!?!?」

『ああ、良く知っているよ……………奴はワシの夢にとって、1番の障害だった男だったからな……………しかしまさか……………今度はその息子が立ちはだかつて来るとは思わなかったぞ……………』

「障害?……………!?!? まさか!?!? 親父を殺したのは!?!?」

『そつだ……………天上は……………ワシが殺した』

『……………（ギロリ）』

途端に、ロージエノムは鈴を睨み付けた。

「!?!? ひいつ!?!?」

悲鳴を挙げる鈴。

ロージエノムが放つ迫力と眼力は半端では無く、モニター越しだと言つのに、鈴は心臓を冷たい手で鷲掴みにされた様な感覚に襲われた。

「貴様……………そんな漫画の様な事が本当に出来ると思っているのか？」

と、そこで千冬がロージエノムにそう言い放った。

確かに、世界征服など、空想の中でしか実現できぬ、絵空事である
と考えるのが普通だ。

加えて、この世界には、ISと呼ばれる最強の兵器が存在している。

『勿論だ……………』

しかし、ロージエノムが相変わらず不敵な笑みを浮かべてそう言ったかと思うと……………

彼が映っていた巨大モニターの周囲に、新たな小型のモニターが4つ展開した。

そこには、炎に包まれているオーストラリア、インドネシア、南アフリカ共和国、トルコの様子が映し出されていた。

「なっ!?!」

「「「「「!?!?!?!」」」」」

その光景に驚愕する一同。

やがて小型モニターの映像が切り替わり、螺旋四天王の姿が映し出された!!

『こちらチミルフ。オーストラリア軍、壊滅致しました』

『アディーネです。インドネシア軍は完全に沈黙。残存戦力もありません』

『このシトマンドラの手に掛ければ、南アフリカ共和国軍など赤子も同然!』

『トルコ軍も、このグアームが片付けましたじゃ』

チミルフ、アディーネ、シトマンドラ、グアームから、次々に軍隊を全滅させたという報告が挙げられる。

『御苦労……………ISCコアは回収したか?』

『『『『ハッ! ココに!?!』』』』』

ロージエノムがそう問うと、映像が再び切り替わり、小型モニター

が4つとも、積み上げられたISコアへと変わった。

『ふっ……………』

それを見て、更に不敵に笑うロージェノム。

「そ、そんなバカな……………」

信じがたい光景に、あの千冬さえも言葉を失う。

『これで分かったかな？ ワシが本気だという事を？』

そんな千冬に向かって、ロージェノムは見下しながらそう言い放つ。

『何れは世界が我が手の中に落ちる……………残り少ない平和な日々を……………精々謳歌するが良い』

最後にそう言い残し、ロージェノムと螺旋四天王が映っていたモニターは消えた。

「!?!? 待ちやがれ!!! テメエにはまだ聞きたい事が……………」

と、神谷がそう言い、白式ラガンが前に出た瞬間……………

「「うっ!?!?」」

神谷と一夏から、同時にそんな声が漏れたかと思うと……………

白式ラガンが光に包まれ、グレンラガンと白式を装着した一夏の姿に分離。

更に、グレンラガンは神谷の姿に戻り、一夏の方もISの装着が解除され、アリーナの地面の上に前のめりに倒れた。

「!? 一夏!? 神谷!？」

それを見た鈴が、慌てて傍に寄る。

「!? 救護班!! 第2アリーナだ!! すぐ来てくれ!!」

更に、千冬が慌てながら救護班へと連絡を入れるのだった……

夕刻……………

IS学園・保健室……………

「う……………?」

全身に痛みを感じながら、一夏が目を覚ました。

「おう、一夏。気が付いたか?」

「一夏!」

「一夏さん! 大丈夫ですか!?」

「一夏! 目を覚ましたの!?」

そこで、横から声が聞こえて来たので、その方向へ視線をやると、神谷、箒、セシリア、鈴の姿が在った。

「アニキ……………皆も……………」

一夏はそう言いながら、半身を起こす。

「!?!? うつつ!?!?」

すると、全身を鈍い痛みが走った。

「! 一夏!?!」

「一夏さん！ まだ寝てなくては駄目ですわ！！」

「そうよ！ アンタ、全身筋肉痛なのよ！！」

篤達がそう言って、再び一夏を寝かしつける。

「此処は……………保健室か？……………俺……………どうなったんだ？」

視線だけを篤達の方に向け、そう尋ねる一夏。

「あの後、気を失って倒れたのよ」

「保健の先生の話では、極度の疲労だそうです」

「全身筋肉痛なもの、その影響だ」

「そっか……………合体したせいかなのか？……………！？ アイタタタタ
タタツ！？」

篤達の説明に、一夏がそう返事を返すと、再び身体を鈍い痛みが襲った。

「オイ、大丈夫か？ 一夏」

「イッテエ……………アニキは大丈夫だったの？」

「おうよ！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

「コイツも気絶してたんだけど、保健室に連れて来られた直後に目

を覚ましたのよ……………」

「しかも、身体には一切異常は無しだそうだ……………」

「人間とは思えせんわね」

一夏とは対照的に、ピンピンとしている神谷がそう言い、篤達が呆れの言葉を漏らした。

「ハハツ、流石アニキだ……………！ そうだ！ あのロージエノムと
か言う奴は如何したんだ？」

「「「！？」」「」

「……………」

一夏が続いてそう尋ねると、篤達は言葉に詰まり、神谷も険しい表情を浮かべた。

「？ 如何したんだよ？」

「奴は本気で……………世界を征服する積りだ」

一夏が首を傾げると、そう言う台詞と共に、千冬が真耶を伴って、保健室内に姿を現した。

2人供、険しい表情を浮かべている。

「あ、千冬……………織斑先生」

千冬姉と言い掛けて、慌てて訂正する一夏。

「織斑……………コレから大事な話をする。そのままが良いから、心して聞け」

「あ、ああ……………」

千冬という言葉に戸惑いながらも、心の準備を整えて話を聞く一夏。

しかし……………

千冬の中から語れたのは……………

衝撃的な現実であった……………

第2アリーナをゴーレムIが強襲したのと時を同じくして……

国連非加盟国を含めた204か国全てに……

IS学園を襲ったのと同じ『獣人』と『ガンメン』が多数出現！

都市部に対し、破壊行為を開始した。

各国軍は直ちに出勤。

ISをも投入して、これの鎮圧に当たった。

ISの存在もあり、戦況はすぐに各国の軍側に傾くと思われていた
……

しかし……

各国軍は、獣人とガンメンの部隊の前に、次々に敗北……

ISの撃墜も確認された……

獣人の戦闘力は現代歩兵を、ガンメンの戦闘力は現代のあらゆる兵器を上回っていたが……

単純に比べて、ISはそのどちらもの上に行く性能であった。

……にも関わらず、苦戦を強いられたのは何故か？

それは数の違いである。

ISは、その中核となるコアと呼ばれる部品が、現状467しかないのだ。

それを不公平の無い様に世界各国に振り分け、更に研究用と軍利用に分けた結果……

大国であったとしても、軍事利用されているISは精々10数機と
言う状況だった。

ISは最強の機動兵器ではあったが、無敵でない……

稼働させているエネルギーには限りがあり、エネルギーが尽きれば
只のガラクタと化す。

これはIS以前の現代兵器にも通じる事であり、補給や整備と言っ
た後方支援が有って、兵器は初めて機能するのである。

しかし、それでも……

1機で1つの国の軍事力を賄える程の性能がある。

だが、ISは敗北した……

何故なら、IS1機辺りに対して……

ロージエノム軍は実に、100万體近くの数で戦ったのである。

某機動戦士に出て来る敵国の3男坊も言った通り、結局のところ戦いは数であり……

100万と言う数の波には、ISも抗いきれなかったのだ。

しかもコレはIS1機に倒して向けられた戦力……

各国の軍隊を襲撃したロージエノムの軍勢の数は、小国でも軽く10億を超えていた。

辛うじて、アメリカやロシア、中国、イギリス、フランス、ドイツ等と言った世界の上位国は持ち堪えたものの、大きく戦力を削がれた。

そして、最悪な事に……

467のコアの内……

実に3分の1以上である170のコアが、ロージエノム軍の手によって回収されたのだ。

これにより、只でさえ驚異的な戦力を誇っていたロージエノム軍に、世界最強の兵器の源が多く渡った事になる。

ロージエノム軍は小国の幾つかを壊滅させ、大国にも甚大な被害を与えた後、姿を消した。

そしてその後、各国に向けてIS学園でしたのものと……」

世界征服宣言』を行った。

この瞬間……………

人類は歴史上初めて……………

『共通の敵』と対峙する事になった……………

IS学園・保健室……………

「……………以上が、今現在の世界の情勢だ」

「……………」

一夏は言葉が出なかった……………

気を失う間際、ロージェノムが国を焼いていた描写は見ていたが、それがほんの一部に過ぎない事を思い知らされた。

「世界は混乱の渦に呑み込まれている。無理もない話だが……………最強の兵器だと言われて、信じて疑わなかったISが敗北し、国という存在がまるごと焼かれたんだ」

そう言う千冬の声も、少し震えていた。

「あ、あの、織斑先生……………俺達はコレから如何するんですか？」

と、漸く我に返った一夏が、千冬にそう尋ねた。

「……………現状維持だ」

「えっ？」

しかし、千冬から返って来た言葉が予想だにできなかったもので、一瞬混乱した。

「取り敢えず、クラス対抗戦は中止だ。第2アリーナは修復が終わるまで使用禁止だ。それ以外は通常通り授業を行う……………」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 千冬姉！！ 世界征服を企む連

中が暴れてるんだぞ！ 授業なんかしてる場合じゃ……………」

「お前に何が出来る！！！」

「！？？」

食い掛かって来た一夏を、千冬は一喝する。

「相手は本気世界征服を企む強大な軍勢だぞ……………ただの訓練生に過ぎないお前に、一体何が出来ると言うんだ！？？」

「それは！？……………」

そう言われて言葉に詰まる一夏。

「織斑くんの気持ちは分かりますが、事は極めて国際的な問題です……………私達が出る幕は……………」

真耶が諭す様にそう言って来たが……………

「出来るか如何かじゃねえ……………やるんだ」

神谷が腕組みをしながらそう言って来た。

「！？ 天上くん！？」

「アニキ！？」

「神谷！ 貴様また……………」

「ロージエノムだか何だか知らねえが……あんな奴等を野放しにして良いわけがねえ！ 何が世界征服だ！ 笑わせんじゃねえ！！」
何時もと同じ様にそう言い放つ神谷。

だが、その表情は真剣そのものだ。

「それにアイツ等は親父の仇だ！ 放つて置けるかよ！！」

「だからと言ってどうする積りだ！？ コチラは敵に対する情報は殆ど持っていないんだぞ！ 奴等が何処に居るかも分からないで、一体何をすると言うんだ！？」

「へっ！ 簡単な事よ！！ アイツは俺の事を世界征服の障害と見ていた！ つまり！！ コレからも奴の所から俺に対して刺客が送られてくるに違いねえ！ そいつ等を片っ端から倒していきゃ、痺れを切らして出て来るに違いねえ！！」

「アニキ！ それはそうかもしれないけど……」

神谷の言う事にも一理有る……

しかし、同時にそれは……

果てしなき戦いに身を投じると言う事でもあった……

「無理だよ、アニキ！ そんな事！！……」

「一夏！ 忘れたのか！！ 無理を通して、道理を蹴っ飛ばす！！」

「……」

神谷の言葉にハツとする一夏。

(そうだな……そうだよな……アニキはそういう男だ……やる
と言った事はトコトンやり抜く……それが俺の憧れているアニキ
だ！)

「そう！　それが俺達……」

「グレン団のやり方だ……」

何時の間にか一夏は、身体の痛みを忘れる程に気分を高揚させ、ガ
ツポーズを作りながらそう言い放った。

「あ、あのですね、天上くん、織斑くん……」

そんな2人に向かって、真耶が何か言おうとするが……

「……分かった。好きにしろ」

それよりも早く、千冬がそう言い放った。

「お、織斑先生!？」

「コイツは昔っから、言い出したら聞かない奴だったからな……
ただし、神谷」

「あん？」

「お前は死んでも良いが、一夏だけは守れ」

千冬は何とも身も蓋も無い言葉を、神谷に投げ掛ける。

「ちよっ！？ 千冬姉！？」

「へっ！ 当然だ！！ 一夏は俺の弟分！ 兄貴分が弟分を守るのは当然の事よ！！」

一夏は千冬言葉に抗議しようとしたが、神谷はそう言い放つ。

「はあく、分かってくれば良い……………」

動じない神谷に、千冬は頭痛を感じながら、そう言った。

そんな千冬を尻目に、神谷は夕暮れの窓の外の景色を見やった。

「来るなら着やがれ、ロージエノム……………テムエーの野望はこの神谷様が打ち砕いてやるぜ！！」

???
.....

「螺旋王様、お持ちいたしました…… ISコアです」

山のように積まれたISコアを、ロージェノムに献上する様に畏まっている螺旋四天王。

「これで世界に存在するISコアの内、3分の1が螺旋王様の物となりました」

「……足りぬ」

シトマンドラがそう言うと、螺旋王は無表情でそう言った。

「はっ？」

「この程度では足りぬ……世界中、全てのISコアを人間共から取り上げ…… 奴等を絶望の底へ叩き落としてやるのだ」

アディーネがその言葉の意味が分からずに居ると、ロージェノムは

そう言葉を続けた。

「心得ております。残りのコアも近い内に必ずやご献上致しましよ
う」

するとチミルフが、ロージェノムに向かってそう申し上げた。

「ISさえ取り上げれば、人間共は為す術もありませんからなあ」

グアームが人間を見下している様子でそう言う。

「と、なると……………目下の障害は……………」

「グレンラガン……………そして、天上 神谷」

「織斑 一夏の強さも侮れん……………それにIS学園には、各国の最新鋭機が揃っておる」

「ですが、ロージェノム様。1つ面白い情報を手に入れました。
ご覧下さい」

グアーム、アディーネ、チミルフがそう言うと、シトマンドラがそ
う言って、ロージェノムの前にモニターを展開させた。

そのモニターには、何かの計画書と思われるものが記載されていた。

「『VTシステム』……………か」

「ドイツを攻めた際に、ある隠し研究所から入手しました。しかも、
それを搭載したISが、装着者ごとIS学園に配属になるとかで…

……」

「良からう……シトマンドラ、この件はお前に任せる」

そこまで聞くと、ロージエノムはシトマンドラに向かってそう言った。

「ハハッ！ 螺旋王様の為に!!」

シトマンドラはそう言うと、ナチス式敬礼の様なポーズを取るのであった……

その夜……………

IS学園・学生寮……………

一夏と箒の部屋を、真耶が尋ねて来ていた。

「お引越しです」

「「ハイ？」」

「あん？ 引つ越し？」

部屋の主である一夏と箒、そして当然の様子に入り浸っていた神谷は、首を傾げた。

「部屋の調整が付いたんです。篠ノ之さんは別の部屋に移動です」と、そんな一同に説明する様に、真耶はそう言葉を続けた。

「ま、待って下さい！ それは、今すぐでないといけませんか!？」

と、そこで箒は思わずそう言ってしまつ。

「はっ？」

(確かに……………箒にしてみりゃ、この状況を続けてえよなあ)

そんな箒の心情を相変わらず理解していない一夏と、理解している

が口には出さない神谷。

「それは、まあ、そうですね。何時までも年頃の男女が同室で生活をするとするのは問題ですし、篠ノ之さんもくつろげないでしょう?」

「いや、私は……………」

言葉に詰まり、一夏を見やる箒だったが……………

「俺の事なら心配するなよ。箒が居なくても、ちゃんと起きれるし、歯も磨くぞ」

箒の心情など、これっぽっちも理解していない一夏は、笑顔を浮かべてサムズアップまでしてそう言ってしまう。

「……………!! 先生! 今すぐ部屋を移動します!!」

すると箒は、態度を一変させ、真耶に向かってそう言い放った。

「あ、ハイ……………」

箒の豹変に戸惑いながらも、引越しの手伝いを始める真耶。

「あ、えっと……………俺も手伝おうか?」

「要らん!!……………私がこつまで気に掛けているのにお前という奴は……………」

一夏の手伝いを拒絶すると、箒はいそいそと荷物を纏め、引越して行ったのだった。

(アチャー……………またやったか)

弟分の失態を内心で呆れる神谷。

「ア、アニキ。箒の奴、一体何を怒ってたのかな？」

「それに気づかない内は……………お前は一生半人前だ」

「な、何だよソレ!？」

神谷の言葉にも、一夏は全く理解が及ばないのだった。

「やれやれ……………俺は寝るぜ」

「あ、じゃあアニキ。良かったら此処のベッドを使ってくれよ。快適だと思っぜ」

「そうだな……………偶にはベッドで寝るのも悪かあねえ」

と、そんな事を言い合って、一夏と神谷は就寝しようとしていたところ……………

コンッコンッ、と部屋のドアをノックする音が聞こえて来た。

「? ハイ」

一夏が出迎え様と玄関に近づき、ドアを開けた。

「……………」

そこに居たのは、先程引越して行った筈の筈だった。

腕組みをして、ムスツとしたと表現するのが相応しい顔をして、ドアの前に仁王立ちしている。

「何だよ？ 忘れ物か？」

「は、話が有る……………」

何やら頬を紅潮させながら、筈はそう言い放つ。

「何だよ、改まって？」

「来月の……………学年別個人トーナメントの事だが……………わ、私が優勝したら……………」

そこで言葉に詰まった様な様子を見せる筈だったが、やがて意を決した様に口を開く。

「つ、付き合ってもらおう!!」

「……………ハイ？」

一夏は思わず、間抜けな表情を浮かべた。

(思い切ったなあ、筈……………だが、果たしてその言葉の意味が一夏に正しく伝わってるのか……………怪しいもんだな)

そして神谷は、そんな2人の様子を見ながら、1人内心でそう思っ

ていたのだった……

うん

第7話『出来るか如何かじゃねえ……やるんだ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

今回からグレンラガン側&オリジナル要素が強くなります。

今後のこの作品の基本には、昔のロボットアニメの基本である『世界征服を企む悪と主人公たち正義の味方の対決』という要素が敷かれます。

所謂、勧善懲悪の王道路線です。

ロージエノム達は、原作と違って純粹な悪という存在になります。

あんまり複雑な話を書くのは苦手なので、シンプルに行かせてもらいます。

ご了承下さい。

さて……

シャルロット党員の皆さん！

お待たせました！！

今回はいよいよシャルの登場です！！

この作品でも、彼女がヒロイン張りますので、楽しみに待っていて下さい。

あ、ラウラもチラッと出ますよ。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第8話『ダチ公同士で遠慮なんかすんじゃねえよ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第8話『ダチ公同士で遠慮なんかすんじゃねえよ!!』

ロージェノムによる世界征服宣言がなされてから、数日の時が流れた……………

初戦に於いて、圧倒的な物量によって、多数の小国を滅ぼし……………

世界中に存在するISコアの3分の1以上をその手に納めたロージェノム軍。

現在は、残っていた大国と小規模な交戦を繰り返しており……………

世界は辛うじて均衡状態を保っていた。

この戦いに於ける死傷者は、軍・民間を問わず、世界中で10億人にまで登ろうとしていた……………

各国は今まで以上に新型ISの開発を進め、それと同時に縮小していた通常兵器の再配備を進めた。

ISの数に限りがあり、敵が物量で攻めて来る以上、人類側も物量で対抗しなければならぬのである。

これにより、ISの登場以来、姿を消し始めていた戦闘機や戦車、戦闘艦等が再び数を増やし始め……………

女尊男卑の風潮で軍を退役やクビにされていた男性軍人が、次々に復役し始めた。

世界が変わりつつある中……………

その風は、IS学園にも影響を及ぼしていた。

現在のところ、日本でロージェノム軍の襲撃が確認されたのは、IS学園だけだった。

この事から、ロージェノム軍はIS学園を狙っていると推察された。となれば、通常はIS学園を防衛する為に、戦力を派遣するのが道理だが……

各国軍どころか、運営及び資金調達を行っている日本すらも、IS学園を防衛する戦力を派遣する事を拒否したのだ。

曰く、IS学園防衛の為に戦力を集中させ、その際に本国を攻められる可能性がある為との事であるが……

実際のところは、自国民なら兎も角、他国の生徒や代表候補生も居るIS学園を守るのを嫌ったのである。

他国のIS乗りは将来の危機になる……

ならば今の内に居なくなってくれた方が、各国としても都合が良かったのだ。

愚かにもこんな時にまで、各国は其々の思惑を取り払いきれなかった……

IS学園もIS学園で、親の意向や本人の自主的な退学者が続出していた。

ISが兵器である事は認識していたものの、実際に戦いに出される事になるとは思っていなかった生徒達は、事態の重さに付いて来れなかったのである。

退学者の中には本国へ帰国したり、戦中の様に田舎へ疎開する者まで居た。

IS学園・1年1組……………

そんな中でも様々な思いを抱えて残っている生徒の為に……………

今日もIS学園は平常通りに運行されていた……

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「えっ？ 何の話？」

ロージェノムの世界征服宣言も何処へやら……

1年1組の生徒達は噂話に華を咲かせ、何時もと変わらぬ日常を送っていた。

神経が図太いのか、何も考えていないのか……

「何だあ？ 今日随分と騒がしいな？」

「やっぱり、皆気にしてるんじゃないかな？ ロージェノムの世界征服を？」

自分の席に居た神谷と一夏がそう言い合う。

知らぬが仏、とはよく言ったものである。

「席に着け。HRも始める」

とそこで、真耶を伴った千冬がそう言いながら教室へと入って来た。それを聞いた途端に、生徒達は一斉にお喋りを止め、自分の席へと

着いた。

統率力だけならば軍隊並みである。

「今日は何と！ 転校生を紹介します！」

すると、教壇に立った真耶が、生徒達に向かってそう言った。

「ええっ？」

「転校生？」

「しかもこんな御時勢に？」

転校生という言葉聞いた生徒達がざわめき立つ。

「では、どうぞー！」

「失礼します」

真耶が促すと、1人の生徒が教室に入って来た。

「……………」

それまでヒソヒソ話をしていた生徒達が、一斉に黙り込んだ。

「おっ？……………」

「あっ……………」

「えっ？」

「男子！ 3人目の男子！！！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「同じ宇宙に生まれて良かったあああああ~~~~~」
「~~~~~！！！」

戸惑うシャルルの様子にもお構いなしに騒ぎ立てる生徒達。

「騒ぐな。静かにしろ」

しかし、千冬がそう言うと、一瞬で静まり返った。

……………やはり素晴らしい統率力だ。

「今日は2組と合同でIS実習を行う。各人はすぐに着替えて、第2グラウンドに集合。それから織斑と天上」

「あ、ハイ！」

「おう！」

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ……………では、解散！」

千冬がそう言うと、一夏と神谷を除いた生徒達が、着替えの準備を

始めた。

「君たちが織斑くんと天上くん？ 初めまして、僕は……………」

「ああ、良いから良いから。アニキ」

「しゃーねえな……………移動すつぞ」

シャルルが改めて自己紹介をしようとしたところ、一夏と神谷はそれを遮って席を立った。

「ホラ、モタモタすんな！ 行くぜ！」

神谷はそう言い、シャルルの手を取って、一夏と共に移動を始めた。

「！？ ふわっ!?!？」

手を掴まれた瞬間、シャルルが一瞬赤面した様だったが、2人には分からなかった。

「俺達はアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習の度にこの移動だからな。早めに慣れてくれよな」

「ったくよお、いつその事、一緒に着替えちまえば良いのによお」

「アニキ、それは駄目だよ……………」

堂々とそう言う神谷に突っ込みを入れる一夏。

「う、うん……………」

しかし、相変わらず神谷に手を引かれているシャルルは、若干頬を紅潮させ、落ち着かない様子を見せていた。

「？ 如何した？ そわそわして？」

「便所か？」

「ち、違うよお……………うん？」

と、不意に足を止めるシャルル。

「噂の転校生、発見！！」

「しかも織斑くんと一緒！」

「天上くんが居るのが余計だけど……………」

3人の前方に、別の学年・クラスの生徒達が、行く手を遮る様に現

れたのだ。

「な、何？」

「まったく、急いでるつてのによお」

戸惑うシャルルと愚痴る様に言う神谷。

「居たっ！ こっちよー！！」

「者共！ 出合え、出合え！」

まるでパンダを見に来た客の如く、一夏とシャルル、ついでに神谷に群がる生徒達。

彼女達に捕まれば質問攻めにされ、次の授業に遅れるのは必然である。

「アニキ、如何しよう？……前も後ろも塞がれてるよ」

一夏が神谷にそう言う。

「チツ！ しゃーねえなあ……よつと！」

「うわっ！？」

「おわっ！？」

そう言うがいなや、神谷はシャルルを右肩に、一夏を左肩に担ぐ様に抱えた。

神谷は両足を踏ん張り、着地を決めた！！

3人分の体重を急激に掛けられたコンクリートの地面が、神谷の足の位置を中心に罅割れた。

「んんっ！？ イ、イテエ……………ちょっと高かったかも……………2人供、大丈夫か？」

若干顔を歪ませながらそう呟くと、神谷は担いでいた2人に声を掛けた。

「大丈夫じゃねえよ！ なまら恐かったよ！！」

「きゅっ……………」

思わず大 洋になりながら怒りを露わにする一夏と、可愛い声を挙げて、目を回して気絶しているシャルル。

「兎に角行くぞ。遅れるとあのブラコンアネキが煩いからな」

それを特に気にした様子は見せず、神谷は一夏を下ろすと、シャルルを肩に担いだまま走り出した。

「全くもう……………」

一夏は呆れながらもその後続いた。

「……………ウン」

「天上くんって……人間なのかな？」

取り残された生徒達は、ただ茫然とするだけだった……

アリーナの更衣室……

「ハアア~~~~、ビックリした~~~~……」

漸く目を覚ましたシャルルが、大きく息を吐きながらそう言った。

「すまない、シャルル。大丈夫か？」

「う、うん……………何とか……………」

「ったく！ 情けなねえぞ、金髪！ それでもキ タマ付いてんのか！？」

「キ、キ タツ！？」

神谷の言葉にボボツと赤面するシャルル。

「アニキは無茶苦茶過ぎるんだよ」

「へっ！ 道なんてもんはなあ！ 俺の通った後に出来るモンなんだよ！！」

「い、意味が分からない……………」

「気にしないでくれ。アニキは何時もこうだから」

神谷節に付いて行けないシャルルにそう言う一夏。

「そうなんだ……………」

「それじゃあ、改めて自己紹介させてもらうな。俺は織斑 一夏。一夏って呼んでくれ。で、コツチが……………」

「IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼ライダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

一夏がシャルルに神谷を紹介しようとしたところ、神谷はそれを遮って、お決まりの口上を並べた。

「あ、アハハ……………よ、よろしく……………僕の事もシャルルで良いよ」戸惑いながらも、シャルルはそう返すのだった。

「！ おわっと！ アニキ！ 時間ヤバイよ！！」

とそこで、更衣室に有った時計を見て、授業開始まで時間が無い事に気づいた一夏がその声を挙げた。

「おっと！ そいつはいけねえな！ 良しっ！ パツパツと片付けちまつか！！」

「おっー！」

神谷がそう言つと、一夏が急いで服を脱ぎ始めた。

「！？ うわぁっ！？」

途端に、シャルルは顔を真っ赤にして、目を隠して後ろを向いた。

「？ 如何した？」

「早く着替えないと遅れるぞ？ ウチの担任はそりゃあ、時間に煩い人で……………」

その様子に不思議がる神谷と一夏。

「う、うん、き、着替えるよ……でも、その……アツチ向いて。ね」

「いや、まあ、着替えをジロジロ見る気は無いが……」

「ったりめえだ。どうせ見るんなら、女の着替えの方が良いに決まってる」

「!?!」

「アニキ……そう言う事は思っても言わないでよ」

神谷の言葉に、何やら反応した様な様子を見せたシャルルだったが、2人は後ろを向いていたので気づかなかった。

「何でも良いけど、急げよ」

と、そこで一夏がそう言いながら一夏が再びシャルルの方を向くと……

「な、何かな？」

そこには既にISスーツへ着替えたシャルルの姿が在った。

「……着替えるの超早いな。何かコツでもあるのか？」

「え、いや……別に……アハ、アハハハ」

一夏の問いに、乾いた様な笑いを立てるシャルル。

「コレ、着る時に裸つてのが何か着辛いんだよなあ。引つ掛かって……」

「一夏。そりゃ、お前の男が大きい証拠だぜ」

「ひつ、引つ掛かって!?!……………男が大きい証拠!?!……………ほおお……………」

そこでまたも赤面するシャルル。

「ん? そのスーツ、着易そうだな」

シャルルのISスーツを見てそう言う一夏。

「デュノア社制のオリジナルだよ」

「デュノア? お前の苗字もデュノアだよな?」

「父が社長をしてるんだ。一応、フランスで1番大きいIS関係の企業だと思う」

「何だよ、お前ボンボンか? さぞ良い暮らししてんだろっな」

根っからの雑草な神谷が、シャルルの家の事を聞いてそんな感想を漏らす。

「……………」

しかし、その言葉にシャルルは表情を曇らせた。

「ん？ 如何し……………」

「一夏。何時まで着替えてんだ？ 早く行こうぜ」

と、そこで着替える手が止まっていた一夏に、神谷がそう言ってきた。

その姿は、頭部のみを除いて、グレンラガンとなっていた。

「うわぁっ!?!」

「あ、ゴメン、アニキ!」

グレンラガンの姿になりかけている神谷を見て驚くシャルルと、慌てて着替えを済ませる一夏。

「も、もうISを装着してるの？ 幾ら何でも早過ぎない?」

シャルルはグレンラガンになりかけている神谷に向かってそう言う。

「ああ、俺のは正確言うつとISじゃないからな。ホントのところは、ISスーツ着る必要がねえんだ」

「えっ？ ISじゃないって……………如何言う事?」

「そいつは……………」

「うわぁっ! 駄目だよ、アニキ! それは千冬姉から口止めされてるじゃないか!?!」

思わずグレンラガンの事について話し出そうとした神谷を止める一夏。

前回のクラス代表戦乱入事件で、神谷のグレンラガンに疑問を抱いた一夏達は千冬に問い詰め、その正体について教えてもらっている。

しかし、本来これは秘匿されるべき事であり、一夏達には機密保持が命令された。

だが、当の本人がついポロリツと言ってしまいそうになった事が度々あるので、一夏達は気が気でなかった。

「ああ？ 良いじゃねえかよ、別に。教えたって……………」

「駄目だって！ さあ、早く行くよ！！」

一夏はそう言うと、グレンラガンになりかけている神谷の手を引っ張った。

「お、オイ！ そんなに引っ張んって！！」

「あ、待ってよお！！」

引き摺られる様に連れて行かれるグレンラガンになりかけている神谷と、慌ててその後を追うシャルルだった。

IS学園・第2グラウンド……………

神谷を除いたISスーツ姿の1年1組と2組の生徒達が、白いジャージ姿の千冬の前に整列していた。

「本日から実習を開始する」

「……………ハイッ!!」……………

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！」

「ハイ!!」

鈴とセシリアが揃って返事をする。

「専用機持ちなら、すぐに始められるだろう。前に出る！」

「メンドイな〜……………なんで私が……………」

「ハア〜……………何か、こういうのは見世物の様で気が進みませんわね……………」

あまり気が乗らないでいる2人。

「お前等少しはやる気を出せ……………アイツに良い所を見せられるぞ」とすると千冬は、後半の方は一同には聞こえない様にそう言った。

「やはり此処はイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せる良い機会よね！ 専用機持ちの！」

2人は途端に、180度態度を変えてやる気を見せる。

（如何したんだ？ アイツ等、急にやる気出して？）

その態度の源である一夏は、ただ首を傾げるだけだった。

「それでお相手は？ 鈴さんとの勝負でも構いませんが……………」

「二つちのセリフ……………返り討ちよ」

「慌てるなバカ共。対戦相手は……………」

と、千冬がそう言いかけた時……………

空から落下音の様な音が聞こえて来た。

「わわわあ~~~~~っ！ ど、退いて下さいiiiiiiiiiiii
iiiiiiii~~~~~っ！」

続いて悲鳴が聞こえて来たかと思うと、ISを装着した真耶が落下して来た。

「~~~~~キヤアアアアアアアアアア~~~~~ッ！！」
「~~~~~」

生徒達は慌てて蜘蛛の子を散らした様に逃げ出すが、一夏は反応が遅れた。

真耶は、一夏への直撃コースを落下して来る。

「うわああああああ~~~~~っ！？」

あわや大激突かと思われた瞬間！！

「一夏あ！ 頭下げろお！！」

「！？ アニキ！？」

突如聞こえて来た神谷の声に、一夏は言われるがままに頭を下げた。

その直後、その一夏の傍に、完全にグレンラガンの姿となった神谷

10数分後……

「ハア……ハア……ゴメンなさい。お待たせして」

如何にか帰って来た真耶が、そう言っつて生徒達に笑顔を向けた。

海に落ちたのか、その姿はびしょ濡れで水滴が滴っており、頭の上には昆布が乗っていた。

「山田先生はこれでも元代表候補生だ。侮っていると痛い目を見るぞ」

「昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

「え？ あ、あの……2対1で？」

「や、流石にそれは……」

実力があると言われても、流石に2対1で戦う事を躊躇うセシリアと鈴。

「安心しろ。今のお前達なら、すぐ負ける」

「……」

千冬のその発言に思わずムツとするセシリアと鈴。

「では……始め……」

そう言つて、千冬が右手を振り下ろすと、セシリア、鈴、真耶が、第2グラウンドの上空へと昇つて行った。

やがて、一定高度に達したかと思うと、静止した。

「手加減はしませんわー!!」

「さっきの見る限り、元代表候補生だなんて信じられないしね!」

「い、行きますー!!」

真耶がそう言つと、セシリアと鈴が動いた。

先ず最初に動いたのはセシリア。

ブルー・ティアーズを射出し、次々に射撃を見舞つ。

しかし、真耶は無駄の無い最小限の動きでそれをかわす。

「クウツー!!」

今度は鈴が、肩アーマーを展開させ、龍咆を見舞つた。

真耶は冷静に、1射目をかわすと、2射目を物理シールドで防いだ。

「デュノア。山田先生の使っているISの解説をして見せる」

とそこで、地上に居た千冬が、シャルルにそう問題を出した。

「あ、ハイ! 山田先生のISはデュノア社製『ラファール・リヴ

互いに詰り合いを始めるセシリアと鈴。

「これで諸君にも教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持つて接する様に」

真耶が降りて来る中、生徒達に向かってそう言い放つ千冬。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事。では分かれる！……ああ、そうだ。天上。お前はコッチに来い」

「あん？ んだよ？」

名指しで呼ばれた神谷は、首を傾げながら千冬の傍に寄る。

「くくくく？」「くくく」

他の生徒達も、何故神谷だけが名指しで呼ばれたのが気になる。

「天上……お前、授業に来る前に何かしなかったか？」

神谷に向かってそう尋ねる千冬。

……その声色は恐ろしくなるほど冷たい。

「ああ、別のクラス的女子共に囲まれそうになったが、それが如何かしたのか？」

しかし、神谷は平然としながらそう言い放った。

「貴様、その際に……廊下のガラスを割っただろう」

「ああ、そういやそんな事したなあ」

「……………そのせいで私の所に学年主任から苦情が来たんだ！！お蔭で私は始末書を書く羽目になったぞ！！」

そこで、怒りを爆発させた様にそう言い放つ千冬。

「そっか。そりゃ悪かったな」

だがそれでもなお神谷は、軽い調子で謝罪をした。

「か……み……や……っ！！」

すると千冬は、地の底から聞こえてきそうな声を挙げたかと思うと、着ていた白いジャージを脱ぎ捨てた！！

その下から出て来たのは、ISスーツだった。

更にその次の瞬間！！

千冬は学園で使っている量産型IS・打鉄を展開し、装着した。

「お、織斑先生！？」

「千冬姉！？」

突如ISを展開した千冬に驚く真耶と一夏。

他の生徒達も戸惑いを浮かべている。

「貴様には私が特別に個人指導を付けてやる……………実践形式でな！」

日本刀型の近接ブレードを抜き放つと、切っ先を神谷に付き付けて
そう言い放つ千冬。

その目は完全に本気である。

「へっ！ 面白ええ！！ 返り討ちにしてやるぜ！！」

神谷はそう言うと、露出していた頭部にも装甲を装着させ、完全に
グレンラガンの姿となり、右手に2本のドリルを出現させた。

「ISファイトオッ！ レデイイイイイイイイイイ……………
ーッ！！」

「ゴオオオオオオオオオオオ……………ッ！！」

まるでガ ダムファイトでも開始するかの様な掛け声を発して、2
人は衝突した。

その後はもう、神谷と千冬の戦いに全員が目を奪われ、授業どころ
ではなかった……………

そして時は流れ……

昼休み……

一夏達は、校舎の屋上に集まっていた。

芝生の上に、輪を描く様に座り込んでいる。

「イツツツツツ……チキショー、あのブラコンアネキ……良い
ヤツ入れて着やがって……」

若干腫れ上がっている左頬を押さえながらそう言う神谷。

「大丈夫？ ハイ、コレ、ハンカチ」

それを見たシャルルが、水で濡らしたハンカチを差し出してくる。

「おお、サンキュー……………ああく、冷たくて気持ち良いぜ」

それを受け取ると、腫れ上がった左頬に当ててそう言う神谷。

結局、グレンラガンVS千冬（打鉄）の戦いは、引き分けに終わった……………

当初は、グレンラガンが飛行できない弱点を衝き、ヒットアンドアウェイ戦法で千冬が押していたが……………

ブリュンヒルデである千冬の操縦に、量産型である打鉄が付いて来れず、オーバーヒートを起こしたのだ。

現役時代であればしなかったミスだったが、引退して以来久しいISの操縦であり、尚且つ頭はかなり血が昇って居た千冬は、使っている機体の事にまで頭が回らなかったのだ。

オーバーヒートにより飛行が出来なくなった打鉄で、千冬は止むを得ず地上戦を展開。

だが、地上ならばこっちのものとはかりに、グレンラガンが反撃を開始。

アツと言う間に互角に持ち込まれ、ブレードも折られてしまう。

だが、グレンラガンがトドメを刺そうとしたところへ、千冬は渾身の右ストレートを繰り出した。

グレンラガンも、それに呼応するかの様に左ストレートを繰り出し、2人は互いの顔にクロスカウンターを打ち込む形となって崩れたのだ。

なお、この1件で結果的に打鉄を1機駄目にした千冬には、更なる始末書が追加された。

現在千冬は、職員室で痛む胃を押さえながら始末書を書いている。

合掌……………

「アンタも相変わらずねえ」

「おうよ！ 俺は喧嘩には絶対負けねえ！！」

呆れる様に言う鈴に、神谷は自信満々にそう言い放つ。

「ところで一夏……………如何いう事だ？ 私が食事に誘ったのはお前だけの筈だ」

と、そこで箒が、一夏だけを誘ったのに、セシリアや鈴、拳句に神谷やシャルルまでも居る事にそう突っ込む。

……………不機嫌そうに。

「大勢で喰った方が美味しいだろ？ それにシャルルは転校してきたばっかで右も左も分からないだろうし」

「そ、それはそうだが……………」

箒は一夏のその答えを聞くと、セシリア、鈴と視線を交差させ、火花を散らす。

3人の手元には、其々弁当がある。

如何やら、一夏に食べてもらおうと思って作って来たらしい。

「ええと……………本当に僕が同席しても良かったのかな？」

その空気を察したシャルルが、一夏にそう言うが……………

「いやいや。男子同士、仲良くしようぜ。今日から部屋も同じなんだし」

そんな空気など微塵も感じていない一夏は、笑顔でそう言い放った。

「その通り！ 俺たちちもうダチ公だろ！ ダチ公同士で遠慮なんかすんじゃねえよ！！」

神谷も、シャルルに向かってそう言い放つ。

「ありがとう。一夏って優しいね。神谷も、見た目とは違って良い人なんだね」

「オイオイ、随分はつきり言うじゃねえか……………見た目とは違って、とはな」

「えっ？ あ！ ゴメン！ そんな積りじゃ……………」

先程までの印象もあり、思わず『見た目と違って』などと言う言葉が出てしまった事を謝罪するシャルル。

「だが気に入ったぜ！ シャルル！ お前もグレン団に入れてやる！！」

だが、神谷はニヤリと笑ってそう言い放った。

「グ、グレン団？ 何それ？」

「熱い魂の在り処よ！ お前もコイツ等と同じ様に、俺が命張って守ってやらあ！！」

「ちよっ！？ コイツ等って!？」

「私達もグレン団のメンバーにカウントされているのか？」

『コイツら』と言う神谷の言葉に、鈴と箒は何時の間にか自分達がグレン団のメンバーにされている事に抗議の声を挙げる。

「当たり前だろ！ 昔は俺と一夏に連んで色々やっただろうが！！」

「ああ、そう言えばそんな事もあったっけ。懐かしいなあ」

神谷の言葉を聞いた一夏が、懐かしそうな顔をする。

「私はお前達が無茶しないか見張っていたただけだ!」

「アタシだってそうよ!」

しかし、箒と鈴は納得が行かない様で、その声を挙げる。

「えっ? 箒と鈴って、そんな積りで俺達に付き合ってたのか? それはちよつと悲しいなあ……………」

すると、一夏がそう言いながら、しょんぼりした。

「「うづつ!」?」

その顔を見て罪悪感を感じる箒と鈴。

「し、仕方ないな! 取り敢えずはグレン団のメンバーという事にしてやる!」

「ア、アタシも! 別に構わないわ!」

やがて折れたかの様にそう言った。

「おお! 流石箒と鈴だぜ!」

一夏は屈託無い笑顔を見せながらそう言う。

「「!!」」

その笑顔を見て、顔を赤くする筈と鈴。

「……………一夏って、何時もああなの？」

「ホントに、いつか後ろから刺されないかが心配だぜ……………」

そんな一夏の様子を見て、小声でそう言い合うシャルルと神谷。

「ったく、もう……………コレだから……………」

とそこで、鈴がそう言いながら、弁当の蓋を開けた。

「おお！ 酢豚だ！」

その中身が酢豚である事を確認した一夏がその声を挙げる。

「そう。今朝作ったのよ。食べたいって言ってたでしょ？」

「ん、んん！ 一夏さん。私も今朝は偶々、偶然早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの」

と、そこでセシリアも『偶然』という部分を強調する様に言いながら、持って来ていたバスケットを持ち上げた。

空いている蓋から、中身のサンドイッチが見えていた。

「あ、ああ……………そうか……………」

しかし、それを見た一夏は顔を青くする。

実は、セシリア…………

料理の腕はからっきしなのである。

見た目は美味しそうなのだが、その見た目の為に味が犠牲になっているのだ。

「んだよ、一夏。折角のセシリアの厚意だぞ。男ならありがたく受け取れ！　つーワケで、俺も貰うぜ」

「むっ……………仕方ありませんわね」

若干不満そうにしながらも、神谷にサンドイッチを一切れ渡すセシリア。

「あぐっー!!」

そして神谷は、大きく口を開け、そのサンドイッチを一飲みにした。

「ア、アニキッー!!」

思わず慌てる一夏。

「「!?!」」

事情を知っている筈や鈴も慌てる。

しかし……

「んぐ……んぐ……うん！ 中々面白い味じゃねえか。悪くねえ」

「フフフ、当然ですわ」

（（ええ~~~~~っ!?)））

至って平気な様子の中谷を見て、内心で驚愕する一夏、箒、鈴。

「シャルルさんも如何ですか？」

「あ、じゃあ一つ……」

と、そこでシャルルも一つ受け取り、一口頬張る。

神谷の反応から、不味いとは思っていないらしい。

しかし……

「!?!?!」

食べた途端に、シャルルは顔色を変えた。

（な、何コレ?……）

そんな感想だけがシャルルの頭を埋め尽くす。

神谷には不味いと言う味覚が欠如しているのである。

勿論、美味しいものを食べれば美味しいと言うが、基本的に食べ物は何でも食うタイプであり……………

早い話が悪食なのである。

「如何ですか？」

セシリアが自信満々の笑顔で聞いてくる。

「う、うん……………美味しいよ……………」

若干顔を引き攣らせながら、シャルルはそう答える。

「あ、あははは……………ほ、箒のはどんなのだ？」

一夏は乾いた笑いを挙げながら、これ以上犠牲者を出さない為に、箒へと話を振った。

「わ、私のはコレだ……………」

箒はそう言い、弁当の蓋を開けた。

そこにはシンプルながらも、美味しさを感じさせる献立が並んでいた。

「おお！ 凄いなあ！ どれも手が込んでそうだ！」

「つ、ついでだ、ついで！ 飽く迄、私が自分で食べる為に時間を掛けただけだ」

一夏に褒められ、照れ隠しの様にそう言う筈。

「そうだとっても嬉しいぜ。筈、ありがとう」

「フ、フン！」

素っ気ない態度を取る筈だったが、その顔には笑みが浮かんでいた。

「じゃあ、まあ、頂きまゝす」

一夏はそう言い、筈の弁当から取った唐揚げを食した。

「……………」

その様子をジッと見つめる筈。

「うん！ おゝ、美味しい！ コレって結構、手間が掛かってないか？」

「味付けは、生姜と醤油、おろしニンニク、それと予め胡椒を少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

美味しいと言う一夏の言葉を効いた途端、良い笑顔になって自慢げにそう語る筈。

「~~~~~っ!!」「」

鈴とセシリアが、その様子を睨む。

「本当に美味しいなあ。筈、食べなくて良いのか？」

「失敗したのは、全部自分で食べたからな……………」

「ん？」

「あ、あああ!? 大丈夫だ! まあ、その何だ……………美味しかったのなら良い」

慌てて取り繕う様に言う筈。

「筈も食べてみるよ。ホラ」

と、一夏はそう言うと、唐揚げを箸で掴み、筈の口元に差し出した。

「あああああ~~~~っ!!」「」

鈴とセシリアから羨望の声が挙がる。

「な、何……………」

やられた筈も筈で、戸惑うばかりだった。

「ホラ。食ってみろって」

「そ、そうか……………それでは……………」

再度促されて、箸は照れながらも、眼前に差し出された唐揚げを頬張った。

「良い……………良いものだな」

「だろう。美味いよなあ、この唐揚げ」

うつとりとした表情で言う箸に、分かっている一夏はそう言う。

「唐揚げではないが……………うん、良いものだ」

「ああ！ コレってもしかして、日本ではカップルがするって言う

『ハイ、あ〜くん』っていう奴なのかな？ 仲睦まじいね」

そこで、シャルルが突っ込みを入れる様にそう言った。

「何でコイツ等が仲良いのよ!!」

「そうですね！ やり直しを要求します!!」

勿論、そんな光景に鈴とセシリアは黙っちゃいない。

2人揃って食って掛かる。

「ギャーギャー喚くな。そんなに一夏に食わせて欲しかったら、交

代でやってもらえば良いじゃねえか」

すると神谷が、その場を治める様にそう言った。

「ん？ まあ、俺は良いぞ」

相変わらず分かっていない一夏はそう言い放つ。

「ま、まあ……………一夏が良いって言うならね」

「私は、本来ならばその様なテーブルマナーを損ねる行為は良しとは致しません、郷に入っては郷に従え』、ですわね」

「じゃあ早速！ はい、酢豚食べなさいよ、酢豚！」

「一夏さん！ サンドイッチもどうぞお……！」

「ちよっ！？ 落ち着けて！！」

迫って来る勢いの鈴とセシリアに、戸惑うばかりの一夏だった……………

その夜……………

IS学園・学生寮……………

一夏の部屋にて……………

同じ男子同士という事で、一夏と同じ部屋にされたシャルルは、引越し作業を終えて、一夏が居れた緑茶で一服していた。

「ふう〜、男同士ってのは良いもんだなあ」

この学園に来て以来、気兼ね無く接する事が出来る人物が神谷しがいなかった一夏にとって、シャルルの存在は大きかった。

「紅茶とは随分違うんだね。不思議な感じ……………でも美味しいよ」

一夏の入れてくれた緑茶にそんな感想を言うシャルル。

と、そこで……………

「一夏、邪魔するぜえ」

天井から、神谷のそう言う声が聞こえて来たかと思うと、一部の天井板が外され、ロープが垂れたかと思うと、神谷が降りて来た。

「あ、アニキ」

「うええっ！？ 神谷！？ 何で天上から！？」

平然と迎える一夏と、突然天井から現れた神谷に驚くシャルル。

「ああ、アニキの部屋。この上だから」

「えっ？ でもこの上って、確か屋上……………」

「細かい事は気にすんな！ 一夏！ 俺にも茶くれ！」

「ハイハイ、今入れるよ」

そう言うと一夏は、神谷の分の茶を入れに行く。

「……………神谷って本当に自由だね」

「おうよ！ 俺はいつだって自分に正直に生きてる！ 自分を誤魔化して生きるのは御免だからな！！」

「そっか……………良いな」

そんな神谷の様子を見て、シャルルは若干羨ましそうな感じでそう

言った。

「? どした? 何か暗いぞ?」

「あ!?! ううん!! 何でもないよ!!」

慌てて取り繕う様に言うシャルル。

「そうか……………ま、悩みが有ったら遠慮無く言いな。お前ももうゲレン団の一員だ。団員の悩みを聞くのもリーダーの役目だからな!」

そう言うと、神谷はシャルルの頭をガシガシと乱暴に撫でる。

「アイタタタタ! 痛いよ、神谷あ!」

シャルルは若干痛そうにしながらも、何処か嬉しそうにそう言う。

「アニキー。お茶入ったよ」

とそこへ、一夏が神谷の分の茶を持ってくる。

「おう! サンキュー!」

それを受け取ると、神谷はじつくりと味わい始める。

「そう言えば、一夏と神谷は、いつも放課後にESの特訓してるって聞いたけど……………そうなの?」

「ああ。俺は他の皆から遅れているからな……………クラス代表務めてる奴が弱いんじゃ、恰好がつかないからな」

「僕も加わって良いかな？ 専用機もあるから、役に立てると思うんだ」

「おお！ 是非頼む。アニキも良いよね」

「おう！ 明日からよろしくなあ、シャルル」

「うん、任せて」

こうして、シャルルがやって来た1日目の夜は更けて行ったのだっ
た……………

その翌日……………

IS学園・1年1組……………

朝のHRにて……………

教室はざわめき立っていた。

「えっと……………きよ、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました」

教壇に立っていた真耶が、戸惑いながらそう言う。

そう……………

昨日シャルルが転校してきたばかりだと言うのに、また新たな転校生がこのクラスにやって来たのだ。

「ドイツからやって来た転校生の、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』さんです」

そしてその転校生……………長い銀髪で左目に眼帯をした小柄な少女、ドイツ出身の『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は、教壇の横で目を閉じて仁王立ちする様に沈黙していた。

制服の改造具合と、佇まいから、軍人である事が感じ取れる。

「如何言う事？」

「2日連続で転校生だなんて……………」

「幾ら何でも変じゃない？ あんな事件の後じゃ余計に……………」

2日続けての転校生に、生徒達からも疑問の声が挙がる。

「オイオイ、最近は転校が流行ってんのか？」

神谷もそんな声を挙げた。

「み、皆さん、お静かに！ まだ自己紹介が終わってませんから」

真耶がそんな生徒達を鎮める様に言うが、その間もラウラは沈黙を保ったままだった。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「ハイ、教官」

千冬がそう言うと、初めて声を挙げるラウラ。

(教官？……………って事は……………千冬姉が、ドイツに居た頃の……………)

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ！」

一夏がそう思っていると、ラウラはそう言い放つ。

「……………」

しかし、それ以上の言葉は出て来なかった。

「あ、あの……………以上、ですか？」

「以上だ」

ラウラはそう言ったかと思うと、一夏の方を見た。

「貴様が……………」

「えっ？」

そう呟いたかと思うと、ラウラは一夏の眼前により、右手を振り上げて、逆平手打ちを一夏に放った！

しかし……………

「!?!? うおっ!?!?」

一夏は咄嗟に、ボクシングのスウェーの様に身体を仰け反らして、ラウラの逆平手打ちをかわした！

「!?!?」

かわされた事に驚くラウラ。

「いきなり平手打ちとは……………随分なご挨拶だな。喧嘩売ってんなら……………買ってやるぜ!」

一夏は怒りを露わに立ち上がると、ラウラを見下ろしながらそう言

い放つ。

「貴様……………」

そんな一夏を右目だけで睨み付けるラウラ。

「止めんか、馬鹿者共！ 授業を始めるぞ！！」

一触即発の状態になったが、千冬がそう言って止める。

「チツ！！」

ラウラは不機嫌そうな顔をしながら自分の席へ向かった。

「私は認めない……………貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

去り際にそう一夏に言う。

「随分な言い様じゃねえか。一夏は紛れも無く、あのブラコンアネキの弟だぜ。まあ、その前に俺の弟分でもあるがな」

すると、神谷がラウラに背を向けたままそう言い放った。

「……………そうか……………貴様が天上 神谷か」

足を止めると神谷の方を見ながらそう言うラウラ。

「ほう？ 見ず知らずの女に覚えてもらえてるとは……………俺も有名になったもんだぜ」

「貴様の事も認めない……………教官を墮落させる元凶め」

「だーれが認めろっつったよ」

神谷は更に挑発の言葉を重ねる。

「席に着け!!」

そこで千冬が、更にそう言い、ラウラは不意機嫌顔のまま席に向か
って行った。

(如何やら……………また風が吹きそうだな……………)

そんな事を思いながら、またもワクワクとした様子を見せる神谷だ
った……………

つづく。

第8話『ダチ公同士で遠慮なんかすんじゃねえよ!!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

ロージエノムの世界征服宣言によって、世界が揺れ動く中……………
今日も今日とて平常運転されるIS学園。

そんな中、神谷と一夏のクラスに、フランスからの男子転校生……………
『シャルル・デュノア』がやって来た。
同じ男子同士と言うこともあり、神谷、一夏とすぐに仲良くなるシャルル。
しかし、彼はある秘密を持っていた……………

そして更にその翌日……………
今度はドイツからの転校生『ラウラ・ボーデヴィツヒ』がやって来る。
一夏を異様に憎み、神谷までも目の敵にするラウラ……………
何が彼女をそこまで駆り立てるのか……………

シャルロット党員の皆さん、お待たせしました!
遂にシャルルが登場です!
これで作者のテンションも5割増しつてとこです。
本作での主人公・神谷と、天元突破ラブコメを繰り広げますので、
お楽しみに。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第9話『オメエがどっかに行く必要なんざねえ！ 此処に居やがれ！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第9話『オメエがどっかに行く必要なんざねえ！ 此処に居やがれ
！！』

IS学園……………

シャルルとラウラが転校してきて数日経ったある日の土曜日……………

神谷と一夏、そして箒にシャルル達は自主練の為に、アリーナに集まっていた。

休日には自主練する生徒の為に、アリーナは全開放されるので、彼方此方に他の生徒達の姿も見える。

そんな中で、一夏は彼の实力を見たいと言うシャルルと模擬戦を行った。

これまで箒達に習った事や、神谷直伝の喧嘩殺法を駆使して善戦した一夏だったが……………

シャルルの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』の大容量の拡張領域を活用した……………

事前に武装の呼び出しをせずに戦闘と同時進行で武装を呼び出すシャルルの特技『フレッド・スイッチ高速切替』によって攪乱され、シールドエネルギーがゼロになって敗北した。

「クッソーツ！ 負けたーっ！！！」

負けた事を悔しそうにしている白式を装着したままの一夏。

「そう腐るな、一夏。良い勝負だったぜ」

そんな一夏を慰める様に肩を叩く、頭部を除いてグレンラガンとなつている神谷。

「いや、驚いたよ。一夏って、型に嵌らない戦い方するから………
…シールドを使わずに装甲で攻撃を防いで無理矢理近づいて来たり、
1本しかない得物を投擲してきたりさ」

ラファール・リヴァイヴ・カスタムEIIを装着しているシャルルが
近寄つて来てそう言う。

「ああ、アニキ直伝の喧嘩殺法さ。昔っから喧嘩には結構強かった
からな」

「おうよ！ 一夏はグレン団の斬り込み隊長だからな！！」

「成程、喧嘩殺法かあ………型に嵌まった戦い方をしてくる人にだ
つたら意表を衝いて勝てるかもね」

楽しそうに放す一夏と神谷を見てそんな事を言うシャルル。

「」「」………「」「」

その傍では、箒、セシリア、鈴の3人が、不機嫌そうな様子でそれ
を見ていた。

「でも今後の事も考えると、射撃武器の練習もしいた方が良くないかな？ 射撃武器の特性を知るって事は、近接戦に持ち込み易くなるって事だから」

「そうだな……じゃあ、教えてもらおうかな」

「飛び道具か……面白そうだな。俺にも教えてくれよ」

「うん、良いよ」

シャルル、一夏、神谷はそう言っていると、射撃練習に移った。

遠方に、射撃用のダーツの様な標的が出現する。

「じゃあ、取り敢えず撃ってみて」

シャルルはそう言っていると、自分のISの武器である五五口径アサルトライフル『ヴェント』を差し出す。

「え？ 他の奴の装備って、使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも、所有者が使用許諾アンロックすれば、登録してある全員が使えるんだよ。使用許諾を発行したから試しに撃ってみて」

「へえ〜」

その後一夏は、シャルルに補助してもらいながら、射撃の練習を行った。

そして、無難な点数を叩き出す。

「如何かな？」

「う〜ん……………悪いけど、あんまりしっくり来ないな……………やっぱり俺には喧嘩や剣を振ってる方が性に合ってるよ」

「よし！ んじゃ次は俺だな！！」

と、一夏と代わる様に、完全にグレンラガンの姿になった神谷が、一夏からヴェントを受け取る。

と、その時……………

「ねえ、ちょっとアレ……………」

「見て」

アリーナに居た生徒達がざわめき立った。

「「「??」「」」」

神谷達が何事かと思つて、生徒達の視線を追つと、そこには……………アリーナの射出口に立っている、ISを装着したラウラの姿が在った。

「ウソツ！ ドイツの第3世代型じゃない！」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……………」

「……………」

生徒達のヒソヒソ話が聞こえる中、ラウラは一夏達を見やった。

「ラウラ……………ボーデヴィツヒ」

「何！？ アイツなの！？ 一夏を引つ叩こうとしたドイツの代表候補生って！！」

「くっつー！！……………」

この間の1件もあり、ラウラを警戒するセシリア、鈴、等。

「……………織斑 一夏」

「何だよ……………」

「貴様言っていたな……………喧嘩を売る気ならば買ってやると？」

「ああ、言ったぜ。何だよ、やるつってのか？」

「ちよっ、一夏。落ち着いて」

ラウラに掴み掛って行きそうな一夏を押さえるシャルル。

「……………その通りだ！！」

と、その瞬間！！

ラウラはいきなり、右肩に装備されていた大口径レールカノンを一

夏に向けた!!

「なっ!?!」

まさかいきなり撃ってくるとは思わず、硬直する一夏。

「えっ!?!」

シャルルも驚く。

現在の位置では、彼も巻き添えを喰らってしまう。

「フンッ……………」

だが、ラウラはそんな気にも留めず、大口径レールカノンを発射しようとする。

「一夏! シャルル!」

と、その時!!

シャルルのヴェントを持ったままだったグレナラガンが、咄嗟にそれをラウラに向け、気合を込めて引き金を引いた。

その瞬間!!

バゴオンッ!!と言う、まるで46センチ主砲が火を噴いた様な轟音が鳴り響き、ヴェントから緑色に輝く弾丸が発射された!!

「「「!?!」「」」

思わず耳を塞ぐ筈、セシリア、鈴。

「!? 何っ!?!」

ラウラは迫り来る緑色の弾丸を見て、本能的にその場から飛び退いた!!

緑色の弾丸は、先程までラウラが居た場所を通り抜け、アリーナの
実況席に直撃!!

爆発と共に、実況席を粉々に吹き飛ばした!!

「……………」

あまりの光景に、思わず目が点になる一夏とシャルル。

「おわっ!……………シャルル、コレ危なくねえか?」

神谷自身もその威力に驚き、シャルルにヴェントを返す。

「そ、そんな!?! ヴェントにあんな威力は無い筈だよ!! 何か
したの、神谷!?!」

シャルルはそれを受け取りながらも、明らかにカタログスペックを
上回っているヴェントの威力にそう言う。

「いや、俺は気合入れて撃っただけだぜ……………」

「貴様!! よくも!!」

神谷がそう弁明していると、空中に居たラウラがそう言って、再び
一夏達に襲い掛かるうとするが……………

「その生徒お！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を
言え！」

騒ぎを聞き付けてやって来た教員が、アナウンスでそう呼び掛けた。

「チツ！ この借りは何れ返すぞ……………」

止むを得ず、ラウラは退いて行った。

「へっ！ 一昨日着やがれ！！」

去って行くラウラの背に、神谷はそう投げかけるのだった……………

アリーナの更衣室……………

「つたく！ 何なんだ、あの眼帯女は！」

一夏の着替えを待っている神谷が、先程のラウラの事を思い出し、悪態を吐く様に言う神谷。

「まあまあ、アニキ。押さえて、押さえて……………」

そんな神谷を宥めながら、着替えを続けている一夏。

なおシャルルは先に着替えてくれと言い、今は居ない。

偶には一緒に着替えようと言った一夏だったが、本人が頑なに拒否し、神谷に急ぐぞと言われて先に着替えている。

「しかしよお、一夏。アイツはお前を目の敵にしてやがる。何れは決着を着けなけりゃならないぜ」

そこで真剣な表情になると、神谷は一夏に向かってそう言った。

「……………ああ、分かってるよ、アニキ……………アイツの憎しみの原因が俺に有るとしたら……………それは俺が片付けなきゃいけない問題だ」

「夏も真剣な表情になってそう言う。」

と、その時………

「あー？ 織斑くんかデュノアくん、若しくは天上くんは居ますか？」

更衣室のドアの向こうから、そう言う真耶の声が聞こえて来た。

「はい？ あー、俺とアニキだけは居ます」

その声にそう返事を返す一夏。

「入っても大丈夫ですかー？ まだ着替え中だったりしますかー？」

「大丈夫です。俺もアニキも着替えは終わってます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

そう言うと、真耶は更衣室の中に入って来た。

「どした、メガネ姉ちゃん？ また生徒に苛められたのか？ だしねーぞ」

「なっ！？ 違いますよお！ 天上くん！ 教師をからかったじゃないけません！！」

「ハイハイ、すいませんでした」

あまり反省の色の見えない謝罪をする神谷。

「オホン！ え〜とですね……………今月下旬から、大浴場が使える様になります。結局、時間帯別になると色々と問題が起こりそうだったので、男子は週に2回の使用日を設ける事になりました！」

「本当ですか!？」

風呂好きの一夏は歓喜する。

「ありがてえな、やっと使える様になったのか。あんまり使えねえと、その内にその辺掘って、温泉掘り出してやろうかと思ってたぜ」

(それを言ったから織斑先生が慌てて手を回したんだと思うんだけど……………)

神谷の言葉に、真耶は今回の事に尽力を尽くした千冬の事を思い出す。

……………彼女もこれ以上の胃痛の種を増やしたくなかった様だ。

「うっし、一夏！ 風呂が使える様になったら、久々に男同士！ 裸の付き合いでもするか!!」

「うん！ そうだね、アニキ!!」

「お、男同士の裸の付き合い!! はあ〜!!」

神谷と一夏がそう言って喜びを分かち合っている中、男同士の裸の付き合いと聞いて、またも変な想像を爆発させる真耶。

と、そこへ……………

「……………神谷？ 何してるの？」

そう言うシャルルの声が聞こえて来た。

神谷と一夏が振り返ると、何やら不機嫌そうなシャルルが立っていた。

「おう、シャルル……………んだよ？ 何でそんな不機嫌そうな面してんだ？」

「別に……………それより、何してたの？」

不機嫌な理由を尋ねる神谷だったが、シャルルはそれには答えず、重ねて質問して来た。

「ああ、シャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ」

「そう……………」

嬉しそうに話す一夏だったが、シャルルはまだ不機嫌なままだった。

「ああ、そう言えば織斑さんと天上くんには、もう1件ずつ要件があるんでした」

「へっ？ まだ有るんですか？」

「俺にもか？」

「ハイ。織斑くんは、白式の正式登録に関わる書類をちよつと書いて欲しいのと、天上くんは先程の1件で、織斑先生が職員室まで出頭する様にと……………」

「あ、ハイ。分かりました」

「あくん？ メンドクセエな……………フケちまうか」

素直に頷く一夏と、めんどくさそうにして堂々とそう言う神谷。

「だ、駄目ですよお！ 連れて行かないと私が怒られます〜！」

涙目になった真耶がそう訴える様に言ってくる。

「アニキ、流石に山田先生が可哀そうだよ……………」

「チツ！ しゃーねえなあ……………」

「じゃあ、シャルル。長くなりそうだから、今日は先にシャワー使つてくれよ」

「……………うん。分かった」

相変わらず不機嫌そうなシャルルが、短くそう答える。

「じゃあ、山田先生。行きましようか。ホラ、アニキも」

「分かった、分かった」

そう言い合って、一夏と神谷は、更衣室を後にして行った……

IS学園・学生寮……

一夏とシャルルの部屋……

「……………ハアア……………」

部屋に帰るなり、シャルルは重い溜息を吐いた。

(何をイライラしてるのかな、僕……………)

自己嫌悪する様に、先程の更衣室での態度を反省する。

一夏を交えて、真耶と楽しそうに談笑していた(シャルル視点)神谷の姿を見た途端に、自分の中に自分でも制御し切れない感情が生まれ、あの様な態度を取ってしまったのだ。

そして今も、胸が締め付けられる様に痛かった。

(……………シャワーでも浴びて気分を変えよう)

シャルルはそう思い、クローゼットから着替えを取り出すと、シャワールームへ向かった……………

そして時刻は夕方……………

漸く書類書きと説教から解放された一夏と神谷は（神谷は説教を聞いていなかったが）、寮の自室へと帰宅した。

「ただいまー」

「邪魔するぜえ」

そう言いながら自室へ入る一夏と、当然の様子にお邪魔する神谷。

「ん？ シャルルの野郎は何処行った？」

と、部屋の中を見た神谷が、シャルルの姿が無い事に気づいてそう言った。

すると、シャワールームから水音が聞こえて来た。

「ああ、シャワー中みたいだね」

「そうか……………」

「そう言えばアニキ。部屋の掃除ってしてる？」

「ああ？ そういやしてねえな……………」

「やっぱり………そういう所は千冬姉と似てるんだから」

「俺とアイツを一緒にすんじゃねえ!」

一夏の言葉に、若干怒る様にそう言う神谷。

「しょうがないな………俺が掃除しとくよ」

一夏はそう言うと、天井から垂れ下がっていたロープを掴み、神谷の部屋と移動した。

「お前も相変わらず家事好きだな。良い嫁さんになるぜ」

「やめてくれよ、アニキ。散々それでからかわれたんだから」

一夏の部屋に居たままそう言って来た神谷に、一夏は声だけでそう返す。

神谷は部屋の掃除が終わるまで待とうと、椅子に腰掛ける。

「あ! そうだ! アニキ! 確かボディーソープが切れてた筈だから、シャルルに渡してくれないかな? クローゼットにあるから」

すると神谷の部屋を掃除していた一夏が、神谷にそう言って来た。

「ん? ああ、分かった」

掃除してもらっている恩もあり、それを了承すると、クローゼットからボディソープを取り出し、シャワールームの洗面所に入り込む。

「オイ、シャルル。ボディソープの代え、持って来てやったぞ。ありがたく使……………」

と、神谷がそう言った瞬間……………

シャワー室の扉が開き……………

「えっ?……………」

金髪の『少女』が姿を見せた。

「……………あ?」

これには神谷も、思わず呆然となってしまうた。

「……………」

そのまま数秒、無言で見つめ合う2人。

「!…! キャアツ!…!」

その後我に返った少女が、慌てて両腕で身体を隠す様にした。

「……………おはようございます」

しかし、それで返って胸が強調される形になり、神谷はそう声を挙げた。

「アニキ? 如何し……………って!?! シャール!?!」

と、そこで神谷の部屋を掃除していた一夏が異変に気づき、天井から顔を覗かせたところ、同じ様に金髪の少女の事を目撃してしまい、その声を挙げる。

「あ？ シャルル？」

一夏がそう言ったのを聞いて、神谷は改めて少女の事を見やる。

確かに良く見れば、その金髪の少女は、シャルルその人だった。

「で、出てってよーっ！！」

またも見つめられ、シャルルはそんな悲鳴を挙げる。

「！ ア、アニキ！！ 早く出て！！」

「おわあっ！？」

それを聞いた一夏は、慌てて部屋に降りて来ると、神谷の腕を掴んで、シャワールームから引っ張り出し、扉を閉めた。

「……………」

残されたシャルルは、自分の身体を抱き締める様にして、縮こまっていた。

神谷をシャワールームから引つ張り出したは、部屋の奥へと移動していた。

「……………」

そのまま無言で立ち尽くす2人。

「……………見たか？」

「……………ああ……………見ちゃったよ、アニキ……………如何してシャルルの奴、あんな……………」

「ありや多分くらいあったぞ。いや、ひよつとしたら、もっと……………」

「つて、そこお!？」

見当違いな事を言っている神谷に突っ込みを入れる一夏。

「いやいや!…そこじゃないよ、アニキ!…!」

「何っ!?! それ以外に何を見るってんだ!?!」

「そっじゃなくて!…!」

と、そのまま漫才の様な遣り取りをしていると……………

シャワールームの扉が、音を立てて開いた。

「「!？」」

「あ、上がったよ……………」

2人が振り向くと、ジャージ姿のシャルルが、髪をタオルで拭きながら出て来た。

しかし、その胸には、以前にはなかった膨らみが有る。

「お、おう……………」

「……………」

気まずそうに返事を返す一夏と、黙ってシャルルを見ている神谷。

「……………」

シャルルもシャルルで、気まずそうに沈黙している。

「と、取り敢えず、座れよ」

「! う、うん……………」

一夏がそう言って道を開けると、シャルルは自分のベッドに腰掛けた。

一夏も、自分のベッドに腰を下ろす。

そして神谷は、腕組みをして、壁に寄り掛かった。

「……………」

「えっと……………シャルル、聞いても……………」

「止せ、一夏」

と、シャルルに問い質そうとした一夏を、神谷が制した。

「！？（神谷……………」

「で、でも、アニキ……………」

「確かに色々と聞いてえ事はあるが……………その、何だ……………あんまり人の趣味について突っ込むのはなあ」

何時もと違って、妙に言葉の歯切れが悪い神谷。

「！？ ちよ、ちよっと待って！！ 神谷……………ひよっとして、僕が趣味であんな格好してたと思ってるの？」

「？ 違うのか？」

神谷は本気でそう思っていたという顔でそう聞き返す。

「ち、違うよあー！！」

シャルルは顔を真っ赤にして立ち上がり、神谷に向かってそう叫んだ。

「えっと……………じゃあ、如何して、男の振りなんかしてたんだ？」

神谷が的外れな事ばかり言うので、返って冷静になれた一夏が、シャルルにそう問い質した。

「そ、それは……………」

「ああ、いや。言い難い事だったら……………」

「ううん……………ここまで来たら、もう皆話しちゃうね」

そう言うと、シャルルは覚悟を決めた様な顔となり、再びベッドに腰掛けた。

「僕が男子の振りをしてたのは……………実家の方から言われたからなんだ」

「実家って……………デュノア社か？」

「そう……………僕の父がその社長……………その人からの直接の命令だね」

「親父の命令だあ？ 益々分かんねえな……………一体何で、オメエーの親父はそんな事を言いやがったんだ？」

ワケが分からないと言う様に首を傾げる神谷。

すると、シャルルの口から、衝撃的な事実が語られ始めた……………

「僕はね……………父の本妻の子じゃないんだ……………愛人の子なんだよ」

「!?!」

「……………」

シャルルのその告白に、一夏は驚き、神谷は険しい表情を浮かべた。

「引き取られたのが2年前……………丁度、お母さんが亡くなった時にね、父の部下の人がやって来てね。それで色々と検査をする過程で、IS適応が高い事が分かって、非公式であったけれど、デュノア社のテストパイロットをやる事になってね」

「……………」

「父に会ったのは2回くらい。会話をしたのは数回くらいかな……………普段は別邸で生活してるんだけど、1度だけ本邸に呼ばれてね……………あの時は酷かったなあ。本妻の人に殴られたよ。『この泥棒猫の娘が!』ってね」

(親父だけじゃなくて、お袋までクソツタレじゃねえか……………)

神谷は怒りを湧き上がらせる。

無意識の内に拳を、血が出るまで握り締めていた……………

「参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにな……………それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「えっ? だってデュノア社って、量産型ISのシェアが世界第3位だろ?」

一夏が如何してと言う顔でそう問う。

「そうなんだけど…………結局リヴァイヴは第2世代型なんだよ。現在ISの開発は第3世代型の開発が主流になってるんだ。セシリアさんやラウラさんが転入して来たのも、その為のデータを取る必要からだと思う。それでデュノア社も第3世代型の開発に着手してるんだけど……………」

「出来なかった……………ってところか？」

壁に背中を預けたまま、神谷がそう言ってくる。

「うん……………中々形にならなくて……………しかも、この間のロージェノム軍による騒動の後、更に第3世代の開発が急がれる様になって……………このままだと、開発許可が剥奪されてしまっんだ」

「それとお前が男のふりをしてるのと、如何関係が有るんだ？」

デュノア社が経営危機に陥った経緯は分かったものの、シャルルが男装していた事には結び付かず、そう尋ねる一夏。

「簡単だよ……………注目を浴びる為の広告塔……………それに……………同じ男子なら、日本の出現した特異ケースと接触し易い……………その使用機体と、本人のデータも取れるかも、ってね」

「それって、俺と……………」

「俺の事が」

一夏と神谷がそう言う。

「そう……………一夏と神谷のデータを盗んで来いって言われてるんだよ……………僕はあの人にね……………」

シャルルはそう言って俯いた。

ロージエノム軍の世界征服宣言により、IS学園を獣人が襲撃した事が公になった際、グレンラガンの存在も露見した。

幸い、千冬の情報操作で、新型のISであると言う事にされており、全く違う新兵器だと言う事は露見していない。

だが、装着者が男子である事は知られてしまい、一夏同様、世界からは秘密裏に注目を浴びているのである。

「はあ〜……………ホントのこと話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと……………今までウソをつけていてゴメン」

シャルルはそう言って、神谷と一夏に頭を下げた。

「……………それで？ お前、コレから如何すんだ？」

すると神谷は、そんなシャルルに向かってそう尋ねた。

「如何って……………女だって事がバレたから、きつと本国に呼び戻されるだろうね。後の事は分からない。良くて……………牢屋行きかな」

諦めている様な態度でそう言うシャルル。

その瞬間……

「バツキヤロウ！ 何が牢屋行きだ！ んなもんはクソくらえだ！
！」

神谷がそう怒声を張り上げ、シャルルに近づいた。

「キヤツ！？ 神谷！？」

「良いか、シャルル！ お前はお前だ！！ 親父の道具じゃねえ！
！ お前の生き方は、お前だけのモンなんだよ！！ 誰かに言われ
たままに生きてるなんて……そりゃ生きてるっちゃ言わねえんだ
よ……！」

突然挙げた大声に驚くシャルルに構わず、神谷は彼女の肩を掴んで
そう言い放つ。

「お前だつて！ そんな事はホントはやりたくねえんだろ……！」

「そ、それは……そうだけど……」

「じゃあやる必要なんかねえ！ やめちまえ！！ そのクソ親父が
何か言つて来たら……ブン殴つて追いつ返してやれ……！」

「そんな！ 無理だよ！ 僕にはそんな事出来ないよ……！」

「じゃあ俺がやってやる……！」

「ええっ！？」

神谷のトンでも発言にまたも驚くシャルル。

「テメエのガキを道具にしか思えねえ親父なんか、親父とは言わねえ！ ただのクソヤローだ！！ そんな奴の1人や2人！ この俺がブツ飛ばしてやる！！」

「……………如何して？ 如何してそこまでしてくれるの？」

自分の為にここまで怒りを見せている神谷に、シャルルはそう尋ねる。

「決まってるだろ！ お前はグレン団の一員だ！！ 俺が面倒を見る！！ 俺はお前の為に生命を張る！！ だから、お前の生命は俺が預かる！！」

「む、無茶苦茶だよ……………」

「うるせえ！ 無理を通して道理を蹴つ飛ばす！ それが俺達グレン団のやり方だ！！ だからシャルル！ オメエがどっかに行く必要なんざねえ！ 此処に居やがれ！！」

「神谷……………」

シャルルは自分の胸が熱くなるのを感じた……………

神谷の言っている事は荒唐無稽であり、何の根拠も筋道も無い……………

だが……………

その言葉には、自分を安心させてくれる『何か』が有った……………

「そうだが、シャルル。それにバレたって言っても、俺達にしか分かってないんだから、知らないふりしちまえばそれで済む話さ」

と、そこで更に、一夏もそう言っただけだ。

「一夏……………」

「それに…………… IS学園特記事項第21。本学園における生徒はその在学中に於いて、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない……………つまり、この学園に居れば、少なくとも3年間は大丈夫だ。その間に何か方法を考えれば良い」

何時の間にか手に持っていた生徒手帳を見ながらそう言う一夏。

「良く覚えてたね。特記事項って、55個もあるのに……………」

「こっつ見えても勤勉なんだよ、俺は」

「ま、そう言う事だ……………居ろよ、此処に……………」

神谷も改めてそう言う。

その顔には、優しく、力強い笑みが浮かんでいた。

「神谷……………」

するとシャルルは思わず立ち上がり、そのまま神谷に抱き付いた。

「おっ、と……………」

「ありがとう……神谷……一夏もありがとう」

そしてそのまま、神谷と一夏にお礼を言う。

「いや、俺は大した事はしてないって。アニキがシャルルを引き留めてくれたからだよ」

「何言ってるやがる、一夏。お前も大手柄だぜ」

確かに、神谷だけでは、IS学園の特記事項にまで頭は回らなかっただろう。

一夏が上手く神谷をフォローした形だ。

「……お前のそういう所が、俺を救ってくれるんだ」

「えっ？ 何か言った？ アニキ？」

「いや、何でもねえ！」

呟く様に零れた言葉を誤魔化す神谷だった。

「にしても……悪くねえ、いや寧ろ良い感触だぜ」

「「？」」

と、続いて漏らした神谷の言葉の意味が分からず、首を傾げるシャルルと一夏。

「シャルル……………中々良いもん持つてるじゃねえか」

「えっ？」

そう言われてシャルルは、ふと自分の状態を思い出す。

現在シャルルは、胸を隠すコルセットを着けておらず、そして神谷に抱き付いている。

その為、露わになっている胸の膨らみが、神谷の身体に押し当てられていた。

「！？ うわあっ！？」

慌てて神谷から離れると、腕で胸を隠す様にするシャルル。

「……………神谷のエッチ」

顔を赤くして抗議する様にそう言うシャルルだったが……………

「何言つてやがる！ 男は皆スケベな生き物なんだよ！ なあ、一夏！……」

「お、俺に振らないでくれよ！ アニキ……」

神谷は悪びれた様子も無く、一夏にそう話を振って、呵呵大笑と言った具合に笑っていた。

「……………」

そんな神谷に、熱っぽい視線を向けるシャルル。

と、その時……

部屋のドアがノックされた。

「一夏さ〜ん、いらっしやいますか〜？ 夕食をまだ取られていない様ですが、御加減でも悪いのですか？」

そして、セシリアの声が聞こえて来た。

「あん？ セシリアか？」

「！？ マ、マズイよ、アニキ！！ 鍵掛けるの忘れてた！！ もしセシリアが入って来たら！！」

「あっ！？」

慌てるシャルル。

今のシャルルの状態をセシリアに見られたら、1発で女子だと言う事が分かってしまう。

「チツ！ 一夏！ 出迎えて時間を稼げ！！」

「わ、分かった！」

「シャルル！ 来いっ！！」

「！ うわあっ！？」

一夏がセシリアの出迎えに向かい、神谷はシャルルをベッドに寝か
せると、布団を掛けた。

「一夏さん、入りますわよ」

とその瞬間に、セシリアがドアを開けて、部屋に入ってきた。

「あ、ああ、セシリア。態々どうも」

それを出迎える一夏。

「まあ。お出迎えしてくるなんて、感激ですわ……………ところで、シ
ヤルルさんの姿が見えない様ですが？」

一夏が出迎えてくれた事に感激しながらも、シャルルの姿が無い事
を不審がるセシリア。

「あ、いや、それは……………」

「よう、セシリア。悪いな。シャルルの野郎、如何も風邪引いたみ
てえでな」

すると、神谷がそう言って、部屋の奥から姿を見せた。

「ゴホッ！　ゴホッ！」

奥の方のベッドから、若干ワザとらしい咳が聞こえて来る。

「それはお気の毒ですわね……………一夏さんをお連れしてもよろしい

ですか？」

「ゴホッ！　ゴホッ！　どうぞー！」

「私も偶然夕食がまだなんですよ。御一緒しませんこと？」

若干モジモジしながらそう言うセシリア。

「お、おう……………」

「一夏、先行ってる。俺はもうちょいシャルルの様子を見てから行く」

「わ、分かった」

「神谷さんって面倒見がよろしいんですね。それじゃあ、行きましょう、一夏さん」

セシリアはそう言つと、一夏の腕を取つて、食堂へと向かったのだ。

「……………ふうふう、如何やらバレなかったみてえだな」

一夏とセシリアが居なくなったのを確認するとそう言つ神谷。

「ゴメンね、迷惑掛けちゃって……………」

シャルルがベッドから上半身を起してそう言つ。

「気にすんな。これもグレン団リーダーの務めよ……………取り敢えず

病人が歩き回ってたら不自然だからな。そこで寝てる。飯は持って来てやるよ」

「う、うん、ありがとう……………」

そう言うと、神谷は一夏達に続く様に部屋を後にした。

「……………」

残されたシャルルは、本当に風邪を引いたかのように、若干高くなっている体温を鎮める様に、再びベッドに横になったのだった……………」

尚、神谷が一夏に合流した時……………」

何故か筈まで来ており、一夏は両手に花状態だった事を付け加えておく（本人は歩き難い等と抜かしていたが）……………」

小1時間程して……………

「おう、持って来てやったぜ」

神谷がそう言いながら、食事が乗ったトレイを片手に、一夏とシャルルの部屋へと帰還した。

「あ、お帰り……………アレ？ 一夏は？」

シャルルが身を起こして迎えるが、一夏の姿が無い事に気づいてそう言う。

「食堂で箸とセシリアと鈴相手に四苦八苦してるぜ」

「相変わらずだね……………」

「全く……………アイツの女関係だけは未だに安心出来ねえぜ。此処置くぜ」

愚痴る様に言いながら、持ってきた食事をテーブルの上に置く神谷。
「ありがとう……あ」

シャルルがベッドから起きるとテーブルの方に寄って来たが、トレイの上に乗っていた食事……焼き魚定食を見て、表情を固めた。

「? どした?」

「う、うん……」

神谷の問いに曖昧な返事を返しながら、椅子に座ると、割り箸を割るシャルル。

そして手に持つと、定食に手を付けようとするが、その持ち方と手つきはかなり怪しい……

「んだよ? 箸使えねえのか?」

「練習してはいるんだけどね……」

「まっ、外人じゃしょうがねえか……ちょっと待ってる。フォーでも持って来てやる」

「えっ!?! い、良いよ、そんな……」

「言っただろ。これもグレン団リーダーの務めよ。俺はお前を助ける。だからお前も俺を助ける。それがグレン団よ」

「う、うん……じゃあ、えっと……リーダー……お願いがあ

るんだけど……………」

モジモジしながら、若干まだ遠慮気味にそう言うシャルル。

「おう、何だ？ 遠慮無く言え！」

「えっと……………神谷が食べさせて……………」

古来よりの女子の必殺武器である『上目使いでのお願い』が炸裂した！！

「あん？ 俺が？」

「だ、駄目？」

更に続けて、雨の日にダンボールに入れられて捨てられている子犬の様な目で神谷を見るシャルル。

「いや、駄目っちゃ言わねえが……………ガキみてえな奴だな、お前も」

神谷には利かかなかったものの、願いは聞き入れられて、シャルルは思わず、小躍りしたい衝動に襲われたのだった。

「んじゃ行くぜ。あゝんってな」

「あゝん……………」

シャルルから箸を受け取った神谷は彼女の正面に座り、まるで雛鳥に餌を与える親鳥の様に、シャルルに食事を取らせ始めた。

「如何だ？ うめえか？」

鯖の身を咀嚼しているシャルルにそう尋ねる神谷。

「うん、美味しい」

身を飲み込むと、シャルルは笑顔でそう言った。

「だろう？ やっぱ日本人は焼き魚よ！」

「僕フランス人だけど……………」

「細かい事は気にすんな！」

「アハハハ。神谷、面白い。次は御飯が良いな」

「ハイよ。ほら、口開けな」

「あ〜ん……………」

今度は、御飯をシャルルに頬張らせる神谷。

「おっ？」

と、そこで何かに気づいた神谷が声を挙げた。

「えっ？ 何？」

「飯がついてっぞ」

そう言うと神谷は、シャルルの口の端に付いていた御飯粒をヒョイツと取ると、自分の口に入れた。

「！..！」

それを見て顔を真っ赤にするシャルル。

「？ どした？ ホントに風邪か？」

「.....な、何でもない！！」

神谷に尋ねられて、慌ててそう否定するシャルル。

2人の仲睦まじい光景は、一夏がやっとの思いで食堂から帰って来るまで続いたのだった.....

新ライダー風に)。

シャルの性別バレイイベント。

天元突破でシャルにフラグ立てる神谷。

神谷みたいな突っ走るタイプに、シャルの様なヒロインを付けければ面白くなると思います。

今後のイベントが今から楽しみです。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第10話『よこせ！ 力を！……………比類無き最強を！！』（前書き）

ユニークアクセスが1万人を突破しました。

ご愛読ありがとうございます。

これからも、『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく
お願い致します。

第10話『よこせ！ 力を！……………比類無き最強を！！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第10話『よこせ！ 力を！……………比類無き最強を！！』

神谷と一夏が、シャルルの秘密を知った後日……

再び朝のHR前……

1年1組の教室は、相変わらずある噂で持ち切りだった……

「そ、それは本当ですよ!？」

「ウソついてないでしょうね?」

セシリアと、隣のクラスから来ていた鈴が、そう声を挙げる。

「本当だつてば! この噂、学園中で持ち切りなのよ!」

「今月の学年別トーナメントで優勝したら、織斑くんと付き合える事になってるらしいの!」

そう……

学年別トーナメントでの優勝者は、織斑 一夏と付き合えると言っ噂だ。

「それは、一夏さんも承知していますの?」

「それがねえ……如何も本人は良く分かってないみたい」

セシリアの質問にそんな答えを返す生徒。

「どつ事?」

「女の子の中だけの取り決めって事らしいのよ」

「おはよう!」

「オッス!」

更にヒソヒソ話を続けていたところ、噂の本人である一夏が、神谷シャルルと共に登校して来た。

「何の話してるの?」

「「「「「うわあああああああー!」」」」」

シャルルがそう尋ねると、クラスメイト達は蜘蛛の子を散らす様に散らばって行った。

「じゃあ、アタシ、自分のクラスに戻るから」

「そうですわね。私も席につきませんと……」

鈴とセシリアも、逃げる様に去って行く。

「? 何なんだ?」

「さあ?」

「おかしな連中だぜ」

一夏、シャルル、神谷がそう呟く。

「……………」

そんな中、噂の発端である篤は、複雑そうな視線でその様子を見ていた……………」

その後、SHRが終わり、更に授業が終わった後の休み時間……………」

（何故だ……………何故こうなった……………）

箒は屋上に上がり、手摺りに寄り掛かる様にしながら空を見上げて
そうごちた。

(優勝したら一夏は私と付き合う筈だった……………それが如何して…
……………)

虚空にそう質問を投げ掛けるが、答えは返って来ないままだ。

(と、兎に角だ……………私が優勝すれば良いだけの話だ……………うん！
！)

やがて自分でそう答えを出す箒。

(だが……………専用機の無い私が……………本当に優勝など出来るのだろ
うか……………ん?)

ふとそこで、神谷やシャルルの存在が頭を過ぎった。

(そう言えば、彼等が優勝してしまった場合は如何なるんだ?)

そう思った箒は、思わず……………

(一夏！ 俺と付き合え!!)

(分かったよ！ アニキ!!)

等と言う様な、所謂や いな関係の一夏と神谷を想像してしまう。

「うわあああああ—————っ!?!」

自分で想像しておいて恐ろしくなり、慌てて頭を振ってその想像を振り払う筈。

「それだけは阻止せねば!!」

何時しか想像と現実がこんがらがり、そう闘志を燃やすのだった…

……

その頃……

そんな想像をされていた一夏と神谷は……

学園内のある通路で……

「!?!? うつつ!?!?」

「? どした、一夏?」

「いや、何か急に寒気が……」

原因不明の寒気を感じて、思わず震える一夏。

「気を付けとけよ。もうすぐトーナメントなんだかな」

「分かってるよ……にしても、何でトイレに行くのにこんなに歩かなきゃいけないんだ」

愚痴る様にそう言う一夏。

IS学園は元々女子校なので、男子が使えるトイレが3箇所しかないのだ。

その為、休み時間に行く場合、かなり急がないと次の授業に合わなくなるのだ(サボタージユの多い神谷にはあまり関係無いが)。

「何故こんなところで教師など!」

「やれやれ……」

とそこへ、分岐路の片方から、そういう声が聞こえて来た。

「あん？」

「この声は……ラウラと千冬姉」

その声が聞こえて来た方向を見やると、千冬に何かを知っているラウラの姿が在った。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があると言っているのですか！」

静かに返している千冬に対し、ラウラは感情を露わにそう叫ぶ様に言っている。

「アイツ……」

「一夏は、思わず通路の陰に隠れて様子を覗き見ようとしたが……」

「何だあ？ 随分と険悪な雰囲気じゃねえか」

何と神谷がそう言いながら、堂々とその会話の中へと参加したではないか……！

（ちよっ！？ アニキ！？）

「神谷……」

「！ 貴様は！？……」

声は挙げずに仰天する一夏と、普通に接する千冬。

そして、敵意を剥き出しにして神谷を睨むラウラ。

「へっ……………随分嫌われたもんだな」

だが、そんなラウラの視線を、神谷は軽く受け流す。

「クツ！ 今はお前に構っている暇は無い！ お願いです、教官！ 我がドイツで再びご指導を。此処では貴方の能力は半分も生かせられません」

ラウラは神谷を無視し、千冬にそう言う。

「ほっ……………」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありませんん」

「確かに、コイツに教えてもらおう事なんざあ、別にねえな」

茶々を入れる様にそう口を挟む神谷。

「神谷……………少し黙っている」

と、千冬が真面目な話だと言う様に威圧感を発した。

「ハイハイ……………」

あまり効いてはいなかったが、神谷は敢えて黙り込んだ。

「ご覧になったでしょう、教官！ この男の様に、この学園の連中は、意識も甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。その様な程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど……………」

「……………そこまでしとおけよ、小娘」

とそこで、千冬は神谷に向けていた以上の威圧感を、ラウラへと向けた。

「うっ!?!……………」

「少し見ない間に偉くなったな。15歳でも選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……………」

ラウラはその威圧感に押され、言葉が出なくなる。

「……………さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「ッ!?!……………」

千冬が続けてそう言うと、ラウラは顔を背けて去って行った。

「フンッ、口ほどにもねえ奴だぜ」

「お前が威張るな……………それと、その男子。盗み聞きか？ 異常

性癖は感心しないぞ」

「うえっ！？ バ、バレてた？」

千冬の声で、通路の陰に隠れていた一夏が姿を現す。

「やっぱオメエ絡みなのか？ アイツのあの態度はよお？」

とそこで、神谷は千冬にそう質問を投げ掛けた。

「ああ、そうだ……………アイツはドイツで教官を務めていた時、私の事を最も尊敬していたからな……………」

そのまま千冬は、ラウラに『どうしてそこまで強いのですか？』と尋ねられた事……………

その際に『私にも弟がいる』と答えた事……………

ラウラが真の強さの意味を理解していない事を語る……………

「そう言うわけだ……………」

「アイツ……………そんなに千冬姉の事を……………」

一夏は何か思う所が有る様にそう呟く。

「んだよ……………要するに、そりやお前の教え方が足りなかったって事じゃねえか。その尻拭いを弟にさせようったあ、姉貴が聞いて呆れるぜ」

だが、神谷は千冬の事をバツサリとそう斬り捨てた。

「ぐっつー！………」

反論しようとした千冬だったが、なまじ真実なだけに言い返せない

……

「ア、アニキ………俺は良いから………」

「まつ、心配すんな。オメエの弟はオメエが思ってるよりつえーから、今度の事も立派に解決するだろうぜ。お前は指啜えて見てな。じゃあな」

神谷はそう言つと、千冬の元から去って行った。

「ゴメン、千冬姉。兎に角、ラウラの事は何とかするから………」

一夏も千冬に謝り、神谷の後を追った。

「アイツめえ………！ アイタツ！ イタタタタタツ………」

2人見送った後、またも神経性胃炎が痛み出し、その場に蹲る千冬だった……

そして時は流れ、放課後……

IS学園の入り口にて……

1台のトレーラーが、学園に入ろうとして、守衛に止められていた。

「ですから、許可無く学園に入られるのは困ります」

「硬い事言わないでよお。ちょっと届け物をしに來ただけなんだから」

運転席に居た厚化粧でオネエ言葉の人物が、守衛にそう言う。

「そう言われましても……」

「あんまりしつこいと……愈ぐちゃっわよ」

オカマ特有の得体の知れない迫力を出し、守衛を脅す様に言う人物。

「!? ヒイヒイヒイヒイ……ッ!?」

守衛は慌てて逃げ出した。

「あくら？ ちょっと脅かし過ぎたかしら？ まあ良いわ。早く『コレ』を『グレンラガン』に届けてあげなくちゃね」

そう言うと、トレーラーはIS学園の敷地内へ入って行ったのだった……

一方、その頃……

第3アリーナでは……

「「あ……」「」

鉢合わせしたセシリアと鈴がその声を挙げる。

「奇遇ね。アタシはこれから、学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど?」

「奇遇ですわね。私も全く同じですわ」

互いに奇遇だと言い合う鈴とセシリア。

勿論、急に特訓を始めたのは、あの噂を聞いたからだ。

「丁度良い機会だし。この前の実習の事も含めて、どっちが上かはつきりさせとくつても悪くないわね」

「あら? 珍しく意見が一致しましたわね。どちらの方がより強く、より優雅であるか、この場ではつきりさせましようではありませんか」

そう言い合ったかと思うと、2人はISを展開し、ぶつかり合……

「!?!?」

わなかつた。

突如横から飛んで来た砲弾が、2人の戦いを中止させた。

「フツ……」

砲弾を放った主……ラウラは驚く2人を見て、薄ら笑いを浮かべていた。

「ラウラ・ボーデヴィット……」

「どついつ積り!? いきなりぶつ放すなんて、良い度胸してるじゃない!!」

「中国の甲龍に…… イギリスのブルー・ティアーズか。フツ、デ―タで見た時の方が、まだ強そうではあつたな」

鈴の質問には答えず、ラウラは挑発するかの様な台詞を投げ掛ける。

「何? やるの? わざわざドイツからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね! それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの?」

「アラアラ、鈴さん。コチラの方はどうも共通言語をお持ちでない様ですから、あまり苛めるのは可哀そうですねよ」

そんなラウラに、鈴とセシリアはそう挑発し返す。

「貴様達の様な者が、私と同じ第3世代の専用機持ちとはな…… 数くらいしか能の無い国と、古いだけ取り柄の国は、余程人材不足と見える」

「!!」

だが、ラウラは更に挑発を重ねる。

「この人は! スクラップがお望みみたいよ!!」

「その様ですわね……」

その言葉で、鈴とセシリアは、ISの最終安全装置を解除する。

「フンツ！ 2人がかりで来たらどうだ？ 下らん種馬を取り合う様なメスに、この私が負けるものか！！」

「！ 今なんて言った！！ アタシの耳には、どうぞ好きなだけ殴って下さいって聞こえたけど！！！」

「この場に居ない人間の侮辱までするなんて、その軽口！ 2度と叩けぬ様にして差し上げますわ！！！」

「フツ、とつとと来い」

「「上等！！！」」

そして、一夏が馬鹿にされたのを切欠に、セシリアと鈴は、ラウラに突撃して行った！！

その頃……

IS学園・通路……

神谷、一夏、シャルルが、放課後の訓練に行こうと歩いていた。

「一夏、今日も特訓するよね？」

「ああ。トーナメントまで日が無いからな……」

「そうだね……そう言えば、神谷は特訓とかしたりしないの？」

これまで、一夏を鍛える事はあっても、自分が訓練をしたりするのはあまり見た事がないシャルルが、神谷にそう尋ねた。

「オイオイ、シャルル。虎は何で強いか知ってるか？」

「えっ？ えつと……何で？」

「元から強いからだー!!」

当然の様にそう言う神谷。

「……………」

「傾いてるねえ、アニキ」

若干唾然としているシャルルと、苦笑いしながらそう言う一夏。

と、その時……………」

「第3アリーナで、代表候補生3人が模擬戦やってるって！」

傍を通り抜けて行った生徒達の中に居た1人が、そんな声を挙げた。

「「えっ!?!」」

驚く一夏とシャルル。

「一夏! シャルル! 行くぞ!!」

神谷が、いの1番に駆け出す。

「あ! アニキ!!」

「ま、待ってよお!!」

2人もすぐさまその後を追い、第3アリーナへと向かった。

第3アリーナ………

既に話を聞き付けた多数の生徒が集まっており、アリーナの席はちらほらと埋まっていた。

「喧嘩の場所は此処かあ!!」

とそこへ、神谷達も到着する。

「何が起こっている!」

更に、冨も姿を見せた。

「箒………！？」

一夏がそれに気づいて声を挙げると、アリーナ内で一際大きな爆発が上がった！！

やがて、その爆発の煙が晴れたかと思うと、そこには………

膝を着いているセシリアと鈴に………

そんな2人と対峙して、仁王立ちしているラウラの姿が在った！

「！ 鳳さんとオルコットさんだ！！！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒも」

シャルルと箒がそう声を挙げる。

「何やってるんだ？ アイツ等？」

「こりゃ如何みても喧嘩だろう」

一夏の声に、神谷がそう言う。

「喰らええっ！！！」

と、その瞬間！！

立ち上がった鈴が、龍咆をラウラ目掛けて放った！

「無駄だ！ このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では

な!！」

しかし、ラウラがそう言っただけで右手を前に翳したかと思うと、そこに空間が歪む様なエフェクトが発生し、龍咆が止められて爆散した!

「!?!? 龍咆を止めやがった!！」

その光景に驚く一夏。

「『A I C』だ……………」

「そうか。アレを装備していたから、龍咆を避けようとしなかったんだ!！」

空間が歪む様なエフェクトを見たシャルルと箒がその声を挙げる。

「A、I、C?」

「何だそりゃ?」

A I Cと言う言葉の意味が分からなかった一夏と神谷がそう尋ねる。

「シユヴァルツェア・レーゲンの第3世代型兵器。アクティブ・イナードナル・キャンセラー」

「慣性停止能力とも言っ……………」

「ふ……………」

「分かっているのか!?!?」

気の無い返事をした一夏に幕がそう言う。

「おうよ！ 要するに、スツゲエバリアって事だろ！！」

「うん、まあ、そうなんだけど……………」

余りにもシンプルに言う神谷に、苦笑いを浮かべるシャルル。

その間にも、セシリア&鈴VSラウラの戦いは続いている。

上空へ飛んだ鈴が、龍咆を連射するが、全てかわされ、或いはAI
Cで防がれる。

「クツ！ ここまで相性が悪いなんて！！」

鈴がそう言った瞬間、ラウラは『ワイヤーブレード』を4本射出し
て来た！

先端に刃が取り付けられたワイヤーが、空中に居る鈴に迫る。

回避行動を取る鈴だったが、その内の1本が左足に撒き付き、振り
回される！！

「わあっ！？」

「この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは、笑わせる」

嘲笑うかの様なラウラに、今度はレーザービットのブルー・ティア
ーズからの射撃が見舞われる！

「キヤアッ!？」

そのまま地面に叩き付けられる2人。

アリーナの地面が大きく抉られる。

「く、う……………」

「うっ……………」

絶対防御を貫通して伝わって来たダメージに呻くセシリアと鈴。

「ふん……………この程度か……………」

そんな2人を見下ろしながら、ゆっくりと降下して来るラウラ。

「……………鈴さん……………このまま負けるのと、私と協力するの……………
どっちが癪ですか?」

すると、セシリアが鈴に向かってそう尋ねた。

「……………どっちもお断りよ……………って言いたいところだけど、このま
ま引き下がれないわ」

鈴はそう返事を返す。

「では……………」

「やってやるっじゃない……………」

そして、ヨロヨロとながらも起き上がる。

「何だ？ まだやる気か？ 結果は目に見えていると思うがな……………」

「煩い！ 黙れ！！」

「無理を通して道理を蹴っ飛ばす！ それが私達！ グレン団のやり方ですわ！！」

見下した様に言って来るラウラに向かって、2人はそう言い放ったかと思うと……………」

「^{アタシ}私達を！ 誰だと思っっていますの（んの）！！」「」

神谷がいつも言っている口癖を吠えた！！

「！ アイツ等……………」

「へっ！ それでこそグレン団よ！！」

驚く一夏とフツと笑う神谷。

「貴様等……………」

一方ラウラは、そんな2人の様子に不快感を露わにしていた。

「良いだろう！ 望み通りにここで潰してやる！！」

そしてそう叫ぶと、大口径レールカノンを2人に見舞った！！

弾丸は地面に着弾し、派手に爆煙を巻き上げる。

するとその中から、レーザービットのブルー・ティアーズが向かって来た！

「フツ！ 同じ事を……………」

四方八方から繰り出されるレーザービットのブルー・ティアーズの攻撃を軽々とかわしていくラウラ。

そして、制御の為にまだ爆煙の中に居るであろうと思われるセシリアに、再び大口径レールカノンを見舞おうとする。

だが、その瞬間！！

「おりゃあああああああ—————っ！！」

爆煙の中から鈴が飛び出して来た！！

……………セシリアを肩車して！！

「！？ 何っ！？」

珍妙な姿に一瞬驚くラウラ。

「喰らえっ！！」

そんなラウラに向かって、鈴が龍咆を放つ。

「!!! クウツ!!!」

寸前でA I Cを発動させ、防御に成功するラウラ。

だがその瞬間!!!

背後からレーザービットのブルー・ティアーズが攻撃して来た!!!

「!?!? グハツ!?!?」

レーザーがラウラの背中を直撃する!!!

「鈴さん! 見ました!?!?」

「ええ! やつぱりあのバリア……………1方向か、意識を向けている方向の攻撃しか防げないみたいね!!!」

「左に追い込みます! 攻撃は任せますわよ!!!」

「了解よ!!!」

そう言い合つと、セシリアを肩車したまま移動する鈴。

その間に、レーザービットのブルー・ティアーズが、ラウラを誘い込む様に攻撃を加える。

「クツ! この!!!」

向かって来たレーザービットのブルー・ティアーズを、A I Cで停止させるラウラ。

「貰ったわ!!」

途端に、背後に回り込んでいた鈴が、龍咆を放った!!

「ぐはあっ!?!」

ラウラは再び背中に攻撃を受ける。

「やった!!」

「凄い……ブルー・ティアーズを動かしている間は無防備になる
オルコットさんを鳳さんが抱えて動く事で多面的な攻撃を可能にし
てる」

「無茶苦茶だが、有効な攻撃手段だ」

「よし! セシリア! 鈴! 一気に行けえっ!!」

一夏、シャルル、箒、神谷からそう声が拳がる。

「クウツ! 調子に……乗るなああああああ……
……っ!!」

だが、ラウラがそう叫んだ瞬間!!

シュヴァルツエア・レーゲンに装備されていた全てのワイヤーブレ
ードが伸び、レーザービットのブルー・ティアーズを撃墜した!!

「!?! マズイ!!」

「もしエネルギーが切れ、ISが強制解除されたら、二人の命に関わるぞ!!」

シャルルと箒がそう声を挙げる。

「セシリア！ 鈴！」

「一夏あ！ 行くぞお!!」

と、一夏が慌てていると、神谷がそう叫んだ!!

その手にはコアドリルが握られている。

「！ おうつ!!」

それを見た一夏も、即座に右腕の装着されているガントレット……
…待機状態の白式を構えた!!

次の瞬間には、神谷の姿がグレンラガンに変わり、一夏も白式を装着した状態となる!!

「うおおおおおおおおおお……!!」

エネルギーブレードの雪片式型で、アリーナの遮断フィールドの切れ目を入れる一夏。

「おりゃああああああああ……!!」

そこへ更に、グレンラガンがドリルに変えた右腕で突貫!!

「感情的で直線的……絵に描いた様な愚か者だな……」

しかし、ラウラは既に2人への興味を無くしており、一夏へ侮蔑の視線を向けながらそう言い放つ。

(くっ！！)

「やはり敵では無いな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、有象無象の1つでしかない！消える！！」

ラウラはそう言いながら、一夏に大口徑レールカノンを向ける。

と、その瞬間！！

「ドリルビイイイイイイーームッ！！」

何時の間にか背後に回っていたグレンラガンが、額の部分から出現させたドリルの先端から緑色のビームを放った！！

「！？グハッ！？」

背中に直撃を受け、体勢が崩れるラウラ。

「！動ける！！」

AICも解除され、一夏は離脱する。

「へっ！お前のそのバリアの弱点は、さっき見てんだよー！！」

「貴様！！」

怒りの形相でグレンラガンを睨むラウラ。

「2人とも、大丈夫？」

「え、ええ……………何とか……………」

「クツ……………やられたわ」

その間に、ISを展開したシャルルが、セシリアと鈴を救出していた。

「シャルル！ 2人を頼む！！」

「コイツは俺達が相手をする！！」

「分かった！！」

一夏と神谷がそう言うと、シャルルは2人を抱えて、ピットへと向かった。

「ふん……………他人を気にしている余裕があるのか？ 貴様等の様な屑に……………」

「黙りやがれ！ 良いか！ 良く聞け！！」

再び見下した言葉を吐こうとしたラウラを遮り、神谷がそう叫ぶと

……………

「燃える太陽この手で掴みや、凄く熱いが我慢する！ 意地が支え

の男道！ 神谷様たあ、俺の事だ！！ 覚えておきやがれ！！」

ラウラに向かってそう啖呵を切ったのだった。

「！ 戯言を！！」

その良く分からない迫力に若干押されながらも、ラウラはグレンラガンに向かって、ワイヤーブレードを2本伸ばした！！

「むっっ！？」

グレンラガンがガードの姿勢と取ると、ワイヤーブレードはその両手に巻き付く。

そのままワイヤーブレードを巻き取り、グレンラガンを手繰り寄せようとするラウラ。

だが！！

「舐めんなよ！！」

神谷がそう叫ぶと、グレンラガンの両腕がドリルへと変わり、ワイヤーブレードを細切れにした！！

「！？ くっっ！？」

急に支えを失う形になり、ラウラはバランスを崩す。

「喰らええっ！！」

グレンラガンはそのまま、両腕のドリルを構えて突撃する。

「馬鹿め！ 私にはA I Cが有る事を忘れたか！！」

しかし、ラウラは突撃して来たグレンラガンに手を翳し、A I Cでその動きを止めてしまう。

(グウツ!?)

「死ねえっ!!」

ラウラは動きを止めたグレンラガンに大口径レールカノンに向けてが……

「お前こそ忘れたのか!? 俺達は2人居るんだぞ!!」

その瞬間、一夏がラウラの背後から、雪片式型を振り下ろした!!

「!?!」

咄嗟に直撃は避けたものの、大口径レールカノンが斬り裂かれ、暴発する!!

「ぐっつ!!?!」

「おりゃあああああああ……っ!!」

更に、その際にA I Cを解除してしまったので、グレンラガンが再び動き出し、両腕のドリルを叩き込んだ!!

「!? くあああああああああーーーーーっ!」

まともに喰らってしまい、ぶっ飛ばされるラウラ。

「ゲツ!」

そのまま何度かアリーナの地面をバウンドしたかと思うと、体勢を立て直す!!

そして、両手にプラズマ手刀を出現させる!!

「貴様等あああああーーーーーっ!」

激昂している様子を露わに、グレンラガンと一夏に向かって突撃して行く。

大口径レールカノンがやられたので、接近戦を仕掛ける積りの様だ。

「貴様じゃねえ! 神谷様と!」

「織斑 一夏だっつってんだろがあああああーーーーー
ーーーーっ!」

それに対して、グレンラガンと一夏もそう叫び、ドリルと雪片式型を構えて突撃して行った……

一方、その頃……

IS学園・職員室では……

「第3アリーナで喧嘩！？ 相手は誰ですか!?!」

「ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒと、織斑 一夏……
…それと例の天上 神谷です!?!」

「何いつ!?! またアイツか!?! 何かというと騒ぎの中心に居る
な!?!」

第3アリーナの異変を察知し、教師達が大慌てて対応していた。

再び第3アリーナ……

「ぬああああああああああ……っ!!」

「うおおおおおおおお……っ!!」

ラウラの両手のプラズマ手刀と、グレンラガンのドリルと化した両腕がぶつかり合い、激しく火花を散らしている。

「どりゃああああああああ……っ!!」

やがてパワー差から、ラウラの方が押され始めた!!

「グッ！　このおっ！！」

ラウラはグレンラガンを肉薄した状態から、残っていた4本のワイヤーブレードを射出。

グレンラガンに攻撃しようとしたが………

「させるかよ！！」

グレンラガンの背後から飛び出した一夏が、ワイヤーブレードを全て斬り捨てた！！

「織斑　一夏あ！！」

「余所見してんじゃねえぞ！！」

思わず一夏に視線が向いてしまったラウラに、グレンラガンの喧嘩キックが繰り出される。

「ガフツ！？」

ボディにまともに蹴りが入り、ラウラの上体が下がる。

「むんっ！！」

すると、グレンラガンはそのラウラの下がった上体に、背中側から両腕で掴み掛ると、そのままラウラをイスごと逆さまにする様を持ち上げた！！

ラウラの頭の中に、声が響いて来た……………

（願うか？ 汝、より強い力を欲するか？）

その言葉に、ラウラは一も二もなく頷いた！！

（よこせ！ 力を！……………比類無き最強を！！）

そう答えた途端に、ラウラの眼帯で隠された金色の瞳に、奇妙な文字の羅列が浮かび上がった！！

D a m a g e L e v e l……………D

M i n d C o d i t i o n……………U p l i f t

C e r t i f i c a t i o n……………C l e a r

V a l k y r i e T r a c e S y s t e m……………b o o t

「！？ うわああああああああああ……………
つ……………」

途端に、シユヴァルツェア・レーゲンからスパークの様な青白い稲妻が発せられ始め、ラウラが悲鳴の様な叫びを挙げた！！

異常事態を察し、アリーナの防御シャッターが閉じて行く。

「……………キヤアアアアアアアアアア……………
……………」

まだ見物を続けていた生徒も、慌てて逃げ出して行く。

「!?!」

「何だ!?!」

戸惑う一夏と神谷の前で、シュヴァルツエア・レーゲン……いや、シュヴァルツエア・レーゲンだったものが変化して行く。

金属である筈の装甲が、まるで粘土の様にグニャグニャと変形を始め、ラウラを取り込んで行った。

「ラウラ!?!」

「一体何が起こってやがんだ!?!」

と、神谷と一夏がそう言った瞬間……

粘土のようになっていた機体が、ある形を作り始めた。

それはまるで、ISを纏った女性の様な姿をした『何か』だった。

右手には、雪片式型に似た武器が握られている。

「!?! アレは!?!」

「オイオイ、冗談だろ……」

一夏が驚愕を露わにし、神谷も驚きを隠そうとしなかった。

何故ならそれは……

第1回モンド・グロツソで優勝した時の千冬の姿だった……

う
ぐ

第10話『よこせ！ 力を！……………比類無き最強を！』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

いよいよラウラとの激突です。

原作では正式には学年別トーナメントで激突するのですが、この作品では前倒しさせていただいて、セシリアと鈴を痛めつけていたところで激突します。

セシリアと鈴も、神谷の影響を受けて、原作より奮戦します。しかも結構無茶苦茶なやり方で。

そしてラウラの方も、セシリアと鈴が奮戦して、AICの弱点を見破ったのが効いて、神谷と一夏の兄弟コンビプレーの前に追い詰められます。

しかしそこで、謎のVTシステムが発動。ラウラのISが変貌を遂げる。

そしてその変貌を遂げた姿は……………
かつてモンド・グロツソで優勝した時の千冬そのものだった……………

今回はVTシステムとの戦いですが……………
更にロージェノム軍の介入もあります。
そして学園に侵入した謎のオカマの正体は？
多分、グレンラガンファンならピンツと来ているでしょうね……………
そう……………あの人です。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第11話『火事場泥棒が大層な名乗り挙げんじゃねえか!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第11話『火事場泥棒が大層な名乗り挙げんじゃねえか!!』

IS学園・第3アリーナ……………

グレンラガンとなっている神谷と、白式を装着している一夏は、『シユヴァルツエア・レーゲンだったもの』と対峙している……………

『シユヴァルツエア・レーゲンだったもの』の現在のその姿は……………

第1回モンド・グロツソで優勝した時の千冬の姿そのものである。

「コイツは……………」

「……」

神谷が思わずそう呟いた瞬間、一夏は雪片式型を構えていた。

と、その途端……！

一夏の闘気を感じ取ったかの様に、千冬の姿をした黒いISも、腰を落としたかと思うと……………

一瞬で距離を詰めて、一夏に手に持っていたブレードでの横薙ぎの攻撃を繰り出して来た……！

「……」

「一夏あっ……！」

と、咄嗟にグレンラガンが、一夏を突き飛ばす。

身代わりとなったグレンラガンに、黒いISの横薙ぎが叩き込まれる！！

「！？ うおおおおおおおー！ー！ー！ー！？」

まともに喰らったグレンラガンは、まるで野球ボールの様にぶつ飛び、アリーナの防御シャッターに叩き付けられた！！

防御シャッターが大きくへこんで変形する。

「！？ アニキ！！」

「イッテエ〜〜〜〜ッ！ やってくれたじゃねえか！！」

一夏が叫ぶが、幸い大したダメージは無かった様で、グレンラガンは頭を摩りながらも起き上がる。

「！？ 一夏！ 後ろだぁ！！」

と、グレンラガンがそう叫んで、グレンブーメランを投擲する！！

「！？」

一夏が振り返るとそこには、自分に向かってブレードを振り下ろそうとしている黒いISの姿が在った！！

しかし、振り下ろす直前に、グレンラガンが投げたグレンブーメランがブレードに当たって軌道がずれ、一夏も回避を取っていたので外れる。

「あの剣技！ やっぱり！ 俺が最初に千冬姉に習った最初の技だ
！！」

「やっぱりか……………どっかで見た事あると思ったら、ブラコンアネ
キの技か」

そう言う一夏に、戻って来たグレンブーメランを回収しながら近づ
いて来ていた神谷がそう呟く。

「コイツ……………千冬姉の真似しやがって！！」

思わず頭に血が上る一夏だったが……………

そこでグレンラガンが拳骨を叩き込んだ！！

「アダツ！？」

「落ち着け、一夏。熱くなるのは良い。だが、焦んな……………喧嘩に
勝つには熱いハートとクールな頭脳だ」

痛がっている一夏に向かって、神谷はそう言った。

「アニキ……………」

「良いか、一夏。俺がアイツの動きを止める。その間にお前がアイ
ツに必殺の1撃を叩き込め」

「俺が！？」

「アイツの中には眼帯女が居る。俺の武器じゃ、あの女ごとアイツ

を貫いちまう。アイツを助けられるのはお前だけだ！」

驚く一夏に、神谷はそう言う。

「……………分かったよ、アニキ！」

「よし！ んじゃトドメは任せたぞ！ 兄弟！」

「おう！……………でも、動きを止めるって、如何やって？」

「決まってるんだろ！ 気合でああ！！！」

そう言うと、グレンラガンは黒いISへと突撃して行く！！

「クールな頭脳は何処に有るのお！？」

その姿に、一夏は思わずそんなツッコミを入れてしまふ。

「うおりゃあああああああああ—————っ！！！」

黒いISに向かって行くグレンラガン。

黒いISは、向かって来るグレンラガンに対し、ブレードを横薙ぎに振るう。

「！ おっと！！！」

しかし、グレンラガンはその瞬間スライディング！！

黒いISが振るったブレードは、先程までグレンラガンの頭が在っ

た位置を通過する。

「おりゃあぁっ！ー！」

そして、スライディングを繰り返したグレンラガンは、そのまま黒いISの足に、自分の足を絡ませて、転倒させたー！

「ふんっ！ー！」

転倒させた黒いISのマウントポジションを取ると……

「オラオラオラオラアッ！ー！」

そのまま顔面に連続で拳を繰り返すー！

殴られるままだった黒いISだが、やがてグレンラガンの背中に蹴りを入れ、引き剥がす！

「うおっ！？」「

地面の上を転がりながらも、素早く態勢を立て直すグレンラガン。

そこへ黒いISは、ブレードを上段から更に振り被ったの振り下ろしを繰り返すー！

「おっとー！ー！」

しかし、グレンラガンはそのブレードの刃を両手で挟んでキャッチ！

所謂、真剣白羽取りで止めたー！

「ぬぬぬぬっ!!」

押し込もうとして来る黒いISに必死で抵抗するグレンラガン。

やがて黒いISは力比べを止め、グレンラガンが掴んだままのブレードを素早く横に振った!!

「!?!? うおっ!?!?」

急にブレードを振られて、グレンラガンは横っ飛びする様に飛ばされ、地面の上を滑った!!

チャンスとばかりに、黒いISは倒れたままのグレンラガン目掛けてブレードを振るう!!

「!!! この野郎!!!」

グレンラガンは咄嗟に、迫り来るブレードに向かって蹴りを繰り出した!!

すると!!

その蹴りを繰り出した足がドリルに変わり、黒いISが振り下ろして来たブレードと激突!!

一瞬火花を散らしたかと思うと……

ガキーンッ!!という甲高い音を立てて、黒いISのブレードが弾かれた!!

が押し出される様に出て来た。

「あ……………」

その際に、ラウラの眼帯が外れ、金色の瞳が露わになる。

「お、っと……………」

押し出されてきたラウラを、優しく抱き留める一夏。

黒いISは、まるで泥人形が崩れる様に、形を失って行った……………

「やったな！ 一夏！！」

「ああ……………ありがとう、アニキ。アニキのお蔭だよ」

神谷にそう返し、一夏は自分の腕の中で眠っている様に気絶しているラウラに視線を落とす。

「……………ホントは1発ブン殴ってやるのかなと思ってたんだが……………こんな顔見せられちゃ出来ないな……………勘弁してやるよ」

そんな事を呟き、一夏はフツと笑うのだった。

「アレ！？ もう終わったの！？」

「一夏！！ 無事か！？」

とそこへ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを装着しているシャルルと、打鉄を装着している篤が現れた。

「おう、シャルル！ 見ての通りさ！」

「箒。ああ、俺は大丈夫だよ」

「そうか、良かった……………何故その女を抱き抱えている」

一夏が無事であった事を喜ぶ箒だったが、一夏がラウラを抱き抱えている事に気づくと、途端に不機嫌な顔になった。

「いや、気絶してるんだからしょうがないだろう……………ところで、お前こそ、その打鉄は如何したんだよ？」

いきなり不機嫌になった箒に戸惑いながらも、一夏は逆に、箒が打鉄を装着している事にツツコム。

「こ、コレは……………そ、そうだ！ 非常事態だから失敬して来たんだ！！」

「それって、つまり……………無断使用だよな？」

「うぐっ！？」

シャルルにそう言われて言葉に詰まる箒。

「箒……………お前、アニキに似てきたな？」

「なっ！？ こんな奴と一緒にするな！ 一夏！！」

「こんな奴とは何だ、こんな奴とは！！」

神谷達も気づき、コアを掠め取った影を追う。

影はそのまま、アリーナの実況席の上に着地した。

それは、細身のシユルエットで、まるで鳥を思わせる様な姿をしたガンメンだった。

「ケケケケケケッ！ コイツは頂くぜえ！！」

そのガンメンが、片手にコアを持ちながら、神谷達を見下ろしてそう言い放つ。

「！？ ガンメン！！」

「何時の間に！？」

「野郎！ 火事場泥棒みたいな真似しやがって！！」

その姿を見た一夏、箒、神谷がその声を挙げる。

「シユヴァルツェア・レーゲンのコアを如何する積り！？」

両手にマシンガンを構えて、シャルルは鳥型のガンメンにそう問い質す。

「それは私が教えてやろう！！」

とその時！

そう言う声が響いて来たかと思うと、アリーナ全体に影が掛かり始

めた……………

「？ 何だあ？」

「「「「？？」」「」」

神谷達が空を見上げると、そこには……………

巨大な顔を持つ艦橋部を中心に、内縁に3段式の大形飛行甲板、外縁に2段式の小型甲板を左右1基ずつ、計4基を放射状に配置。

艦底には3連装主砲2基と副艦橋を備える空中空母とも言うべき巨大艦が浮かんでいた！！

「な、何だありやあ！？」

「デ、デカイ……………」

「あんなものが空を飛ぶなんて……………」

その巨大空中空母に驚きを露わにする一夏、箒、シャルル。

「野郎……………この俺に此処までデカイ影を落とすやがったのは、お前が初めてだぜ！」

逆に神谷は、空中空母の姿を見て、闘志を燃え上がらせていた。

と、次の瞬間……………

その空中空母から映像が照射され、空中に巨大なモニターが展開し

たかと思うと、シトマンドラの姿が映し出された！

「!?!? お前は!?!?」

「螺旋王ロージエノム様の忠実なる僕！ 螺旋四天王が1人、シトマンドラ！ またの名を『神速のシトマンドラ』よ!!! そしてこの艦は螺旋王様より頂きし空中母艦『ダイガンテン』!!!」

映像に映っていたシトマンドラが、そう名乗りを挙げる。

「螺旋四天王の1人……」

「神速のシトマンドラ……」

箒とシャルルが険しい表情を浮かべる。

ロージエノムの戦力は未だに良く分かっていないが、四天王などと名乗るからには、相手は幹部クラス。

それが空中空母を率いて現れたのだ。

萎縮してしまうのも無理はない。

「けっ！ 四天王だか、獅子唐だか知らねえが！ 火事場泥棒が大層な名乗り挙げんじゃねえか!!!」

だが、神谷だけは恐れを微塵も見せず、モニターのシトマンドラに向かつてそう言い放つ。

「ケッ！ ほざくな！ 人間如きが!!!」

シトマンドラは露骨に不快感を露わにしてそう言い返す。

「んだとお！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

「神谷！ ちょっと待って！……………さっきの質問の続き！ シュヴ
アルツェア・レーゲンのコアを如何する積り！？」

更に言い返そうとする神谷を制して、シャルルがそう問い質した。

「フンッ！ 決まった事……………我等が螺旋王様の為に役立てるのよ
！！！」

「役立てるだと？……………」

「そう！ このコアに装備されているVTシステム……………これを使
えば、世界最強のIS操縦者の戦力を無限に作り出す事が出来る！
！ その戦力を使えば、螺旋王様の世界征服もより捗ると言つもの
……………」

シトマンドラは得意げに自らの計画を聞かせる。

「！！ そんな事……………させてたまるかよ！！」

当然一夏が噛み付く。

彼にとって、それは許しがたい行為であった。

「ふふふ……………貴様等如きに何が出来る！ ヘブンスソード！ コ
アを持って帰還しろ！！」

「ハハッ！ シトマンドラ様！！」

シトマンドラはそう言い、コアを奪ったガンメン……………『ヘブンスソード』にそう言い放つ。

ヘブンスソードは飛び上がると、空中空母『ダイガンテン』へと帰還しようとする。

「！ 行かせないよ！！」

「コアを返してもらおう！！」

それを追って、シャルルと箒も宙に舞った！！

「アニキ！ ラウラを頼む！！」

そして一夏も、ラウラを神谷に預けると、2人の後に続く様に飛び上がった！

「お、オイ！ 一夏あ！！」

飛べない為に置いてけぼりをくらうハメになった神谷は、ラウラを抱えたまま、上昇して行く一夏達を見上げる。

に突撃。

その両足の鋭い爪で、シャルルを拘束した!!

「あっ!? し、しまった!?……………!? うわあああああああああ
あああ—————っ!!」

へブンズソードは、そのままシャルルを爪で締め上げ始めた!!

「このまま捻り潰してやるぜ!! 八八八八ハッ!!」

「うわあああああああ—————っ!!」

悲鳴を挙げるシャルルを見て、心底楽しそうな笑い声を挙げるへブンズソード。

「シャルル!!」

「待ってる! 今助けに!!……………」

と、体勢を立て直した一夏と箒が、シャルルの救出に向かおうとする。

しかしそこへ……………

ダイガンテンから発進したカトラリーダーとカトラゲイ部隊によるミサイル攻撃が浴びせられた。

「うわあああっ!?!」

「チキシヨウ！俺が飛べさえすれば……………」

1人飛べない自分を情けなく思う神谷。

このままでは一夏達を見殺しにする事になる……………」

神谷にとってそれは、己の死よりも辛い事である……………」

……………」と、そこへ！！

「なら飛ばしてあげるわよ」

「！？何っ！？」

突然聞こえて来た声に、神谷が正面を向くと、そこには……………」

あのトラックに乗っていた、厚化粧でオネエ言葉の人物の姿が在った！！

「何だお前は！？」

「『リーロン・リットナー』よ。ま、今はそんな事は如何でも良いわ……………」グレンラガン、飛びたいのなら呼びなさい……………」貴方の翼を！」

厚化粧でオネエ言葉の人物……………」『リーロン・リットナー』は、神谷に向かってそう言った。

「！？翼だと！？」

リーロンの言葉に驚く神谷。

「グレンラガンは貴方の力……貴方が望めば、その望む形の力が手に入る……そして今貴方は空を飛びたいと願った……ならば呼びなさい！ グレンラガンの翼！ 『グレンウイング』を！！」

「『グレンウイング』……」

「その子は私が預かっておくわ。だから行きなさい……貴方を待つ子達のところへ！」

そう言って、グレンラガンの腕からラウラを受け取るうとするリーロン。

「……ああ、頼んだぜ」

神谷はそう言い、ラウラをリーロンに託した。

普通ならば信じられない光景である……

いきなり現れた見ず知らずの怪しい人物にラウラを預けるなど……

だが、神谷は確信していた。

目の前の人物は自分達の味方であると。

理屈では無い……

神谷は本能で、目の前の人物が敵か味方かを見極めたのである。

神谷の雄叫びが響き渡り、グレンラガンは一気に上昇して行く!!

「うわっ!?!」

白式の左腕の装甲が吹き飛び、一夏が悲鳴を挙げる。

「!?!? 一夏!?!」

「大丈夫だ!?!…………でも…………マズいな」

心配して来る箒に、血が流れる左腕を押さえながらそう答える一夏。

2人の周囲は、完全に飛行型ガンメンによって取り囲まれており、
脱出は不可能だった…………

「クッ! ここまでなのか……………」

「箒……………すまない……………」

諦めの言葉が口に出る箒と、謝罪を口にする一夏。

そんな2人の様子を見た飛行ガンメン隊が、トドメを刺そうと一斉に襲い掛かる!!

………だが、その瞬間!!

緑色の風が、飛行ガンメン隊の中を吹き抜けて行ったかと思うと……

……

飛行ガンメン隊が一斉に爆発!!

一瞬にして全滅した!!

「な、何だ!？」

「!?!? アレは!?!? ……まさか!?!？」

驚く筈と、吹き抜けて行った緑色の風を見やり何かを思い浮かべる一夏。

「うわあああああああああ————————!!」

「へへへ、そろそろ終わりにしてやる……………」

一方、ヘブンスソードは、シャルルにトドメを刺そうとしていた。シャルルを捕まえている両足に力を込める。

「死ねええっ！！」

と、ヘブンスソードがそう叫んだ瞬間！！

その顔に、拳が叩き込まれた！！

「あえっ？……………」

一瞬意識が飛びかけ、シャルルを解放してしまうヘブンスソード。

「あっつ！？……………」

「わりい……………ちょっとモタついちまつたぜ」

解放されたシャルルを、拳を叩き込んだ人物……………グレンラガンの姿となっている神谷が受け止めた。

「！？ 神谷！？」

「と、飛んでやがるだと！？」

ヘブンスソードが、殴られて罅割れ状態になった顔を押さえながら驚愕の様子を見せる。

「馬鹿な！？ グレンラガンが空を飛んでいるだと！？」

ダイガンテンのシトマンドラも、狼狽した様子を見せている。

「後は俺に任せな！！」

「う、うん……………神谷！ お願い！！」

神谷の力強い言葉に若干頬を染めながら、言われた通りに後退するシャルル。

「さあ！ 覚悟しやがれ、この鳥野郎！！ フライドチキンにしてやるぜ！！」

それを確認すると、グレンラガンはヘブンスソードを指差し、そう言い放った！！

「チイツ！ 舐めるなよお！ 俄仕込みの飛び方で！！ この俺様に勝てると思っただか！！」

ヘブンスソードはそう叫ぶと、グレンラガンの周りを高速で飛び始める！！

「如何だ！ 俺の動きが見えるかあ！！ 八八八八ハツ！！」

その状態のまま、空中に静止しているグレンラガンに向かってそう言い放つヘブンスソード。

だが……………

「へっ！ 舐めんよ！ 俺を誰だと思ってやがる！ 早くて捉えられないなら！！」

神谷がそう言い、グレンラガンが力を溜める様なポーズを取ったかと思うと、その身体から緑色の光が溢れ始めた。

そして、全身至る所にあつたドリルの出現口から、無数の小さなドリルのミサイルが出現！！

全方位に向かって、まるでレーザービームの様に放たれる！！

「!?!? な、何いっ!?!?」

ヘブンズソードはかわしきれず、幾つものドリルのミサイルが、その身体を貫いた！！

「ぐあああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!?!?」

悲鳴を挙げていると、その手からシュヴァルツェア・レーゲンのコアが離れた！！

「ぬあっ!?!? しまっ……………」

と、それが空中にある内に、グレンラガンが掠め取った！！

「コイツは確かに返してもらったぜ」

左手に持ったコアを見せながら、そう言う神谷。

「オノレエ!! 喰らええっ!! ハイパー銀色の脚スペシャルウ

ウウウウウウウウウー………ッ!!」

へブンスソードは、グレンラガン目掛けて最強の必殺技を繰り出す。
だが………それは無意味な行為であった。

「終わりだ！ 鳥野郎!!」

神谷がそう叫んだ瞬間!!

グレンラガンは緑色の光を発して、全身からドリルを生やした状態
………『フルドリライズ状態』となった!!

そして、胸のグレンブーメランが独りでに外れたかと思うと、それを
右手に握るグレンラガン。

「必殺!!」

グレンブーメランを、へブンスソード目掛けて投げつける!!

すると、そのグレンブーメランが2つになり、へブンスソードを連
続で斬り付けた!!

そしてそのまま、グレンブーメランはへブンスソードを空中に礫に
する様に拘束した!!

「ギガアツ………!!」

と、グレンラガンが右手を掲げる様に構えたかと思うと………

「螺旋王様！？　しかし！！……」

「我が命令が聞けぬか？　シトマンドラ……この螺旋王、ロージエノムの命が？」

反論しようとしたシトマンドラに、ロージエノムは冷たい声でそう言葉を続けた。

「ぐっつ！　了解しました……覚えていろ！　グレンラガン！！」

シトマンドラはお決まりの台詞を吐くと、そのままダイガンテンを撤退させ始めたのだった……

「野郎！　逃がすか！！」

「待ちなさい。追撃はしない方が良くわよ」

それを追おうとするグレンラガンだったが、リーロンからそう通信が入って来た。

「何だよ、止めんなよ！！」

「まだ空を飛ぶのにそんなに慣れてないでしょ？　それに、シュヴァルツエア・レーゲンのコアをちゃんと返さないと駄目でしょ」

止めるなと言う神谷だったが、リーロンはそう諭す様に言う。

「チツ！　分かったよ……」

その言葉が正論だった為か、はたまた違う理由か、神谷は素直にそれに応じたのだった……

そして時は流れ、夕方……

IS学園・医務室……

「う、あ……」

目を開けたラウラの視界に飛び込んで来たのは、見知らぬ天井だっ

た。

「私は……………」

「気が付いたか？」

すると、左側からその声が聞こえて来た。

ラウラが顔を左に動かすと、隣のベッドに半身を起こしている千冬の姿が在った。

「教官……………何故ベッドに？」

「ああ、いや、コレは……………気にするな」

「??？」

神経性胃炎で倒れたとは言えず、誤魔化す千冬だった。

「……………何が……………起きたのですか？……………」

ラウラは首を傾げたものの、すぐに質問へと移る。

「ふう……………一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。VTシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム……………」

「そうだ。IS条約で、その研究はおろか、開発・使用、全てが禁止されている。それがお前のISに積み重ねていた」

「……………」

ラウラは沈黙する。

「精神状態、蓄積ダメージ、そして何より……………操縦者の意思……………いや、願望か……………それ等が揃うと発動する様になっていたらしい」

「私が……………望んだからですね」

思わずラウラは、布団のシーツを握り締めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「！？ハ、ハイ……！」

急に呼ばれて、ラウラは戸惑いながらも返事を返す。

「お前は誰だ？」

「私は……………」

「誰でも無いなら丁度良い。お前はコレから、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

千冬はそう言いつつ、ベッドから降りて立ち上がった。

「えっ？」

「それから……………」

そして、医務室から出て行くこととしたところで再びラウラの方を振り返る。

「お前は私になれないぞ……………お前は誰でもない……………お前自身になれ……………と、イカンな……………ついアイツの様な事を言ってしまった」

そう言って苦笑いすると、医務室から出て行く。

「……………フツ、フフフ……………ハハハハハ!!」

誰も居なくなつた医務室で、ラウラは笑い声を挙げ始めた……………

IS学園・研究室……

「すまない、遅れた……」

そう言つて千冬が研究室に入つて来ると、そこには……

神谷とシャルル、一夏に篤、真耶、そしてあの謎の人物『リーロン』の姿が在つた。

「揃つたわね。じゃあ始めましょうか……質問タイムをね」

千冬が来たのを見たリーロンが、そう話を切り出した。

「では先ず教えてもらおう……お前は誰だ？」

「如何してグレンラガンをパワーアップさせるパーツを持っていたんですか？」

千冬と真耶が、リーロンにそう質問する。

「そうね……それじゃあ先ず、自己紹介から始めましょうか」

リーロンはそう言つと、一同に向かつて驚きの自己紹介をした。

「私はリーロン・リットナー……かつて天上博士の助手をしてい

う
く
う
う

た
の
「

第11話『火事場泥棒が大層な名乗り挙げんじゃねえか!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

V Tシステムによつて暴走したシュヴァルツエア・レーゲンと対峙するグレンラガンと一夏。

一夏がV Tシステムで作られた千冬を模造した姿に怒りを露にするが、神谷の拳骨で頭を冷やされる。

そして、見事なコンビネーションプレーで、V Tシステムを撃破し、ラウラを救出する事に成功する。

だがそこへ、ロージエノム軍が乱入。

ガンメン・ヘブンズソードがV Tシステムのデータが残っているシュヴァルツエア・レーゲンのコアを回収し、それを量産しようとする。

そうはさせないとヘブンズソードに向かって行くシャルル達だったが、その強さとシトマンドラのダイガンテンから発進した飛行型ガンメンの前にピンチに陥る。

飛ばない為に、その状況を見ているしかなかったグレンラガンの前に、謎のオカマ『リーロン・リットナー』が現れ、グレンラガン用の飛行ユニット『グレンウイング』を授ける。

遂に大空を自在に飛べる様になったグレンラガンは、飛行型ガンメン部隊を蹴散らす!!

ヘブンズソードにも必殺のギガドリルブレイクを決め、見事に撃破!!

シュヴァルツエア・レーゲンのコアも取り返すのだった。

そしてその日の夕方……

謎の人物リーロンから、驚くべき事実が語られる。

前回登場したオカマさんは、やはりリーロンさんでした。

これでグレンラガン側のメカニックが弄り易くなりました。

そして早速その助力で空を飛んだグレンラガン。

弱点発覚から解決までが短いかもしれませんが、ISがデフォルトで飛べる中、グレンラガンだけ飛べないと話に付いて行けなくなるので、適切な処置だと思って下さい。

因みに、ガンメン・ヘブンスソードは、名前の通りGガンダムに出て来たガンダムヘブンスソードがモデルです。

今後も他作品のマシンがガンメンとして出て来るといふ事が多々ありますので、ご了承下さい。

次回、リーロンの口から幾つかの謎が明かされます。

楽しみにしていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第12話『僕を誰だと思ってるの?』(前書き)

PVが10万を突破いたしました。

皆様、ご愛読ありがとうございます。

これからも、『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく
お願い致します。

第12話『僕を誰だと思ってるの?』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第12話『僕を誰だと思ってるの?』

IS学園・研究室……

「!? 何だと!？」

「親父の……助手を？」

リーロンが言った言葉に、千冬と神谷が驚きの声を挙げる。

「驚くのも無理は無いわね。天上博士は世間的にはずっと前に死んだと思われてたんですもの」

リーロンは冷静に言葉を続ける。

「天上博士……姉さんに並ぶ天才と言われていた人……」

天上博士の名を聞いた篤がそう呟く。

「なあ、千冬ね……織斑先生。アニキの親父が天才科学者だったのは聞いてたけど……一体何の研究をしていたんだ？」

とそこで、一夏が千冬にそう尋ねた。

「私も詳しくは知らん。天上博士は他人の研究に協力する事は有っても、自分の研究はあまり語らなかつたそうだ……だが、聞くところによれば、天上博士が研究していたのは生命の進化についてだと言つ話だ」

「生命の……進化？」

千冬の言葉を、シャルルが反復する。

「そう、天上博士は人間……いや、生命が進化しようとするのは、何かしらかの力が働いているからだと思っていた……そして突き止めたの。進化のエネルギー……『螺旋力』を！」

すると、リーロンがそう言い放った。

「『螺旋力』？」

真耶がその言葉を繰り返す。

「そう、生命が持つ『進化しようとする力』、生体エネルギーの一種……その正体は人間の意志で引き出された銀河のエネルギーらしいわ」

「銀河のエネルギー!？」

「何だか急に話が壮大になってきたな……」

篤が驚き、一夏がそんな感想を漏らす。

「それは本当なのか？」

「さあ？ 残念だけど、私が携わっていたのは、その螺旋力を使用するマシンの開発の方だったから……螺旋力が銀河のエネルギー……って事が真実が如何かは分からないわ」

千冬がリーロンにそう尋ねるが、残念ながらリーロンはその答えを持っていなかった。

リーロンはそんな神谷の姿を見てそう言う。

「起きんか、貴様あ!!」

神谷の脳天に拳骨を見舞う千冬。

「んあ!? なんだよ……………俺は難しい話が苦手なんだ。もっと分かり易く言ってくれ」

目を覚ました神谷が、リーロンに向かってそう言う。

「……………!!」

その隣では、千冬が殴った手を痛そうに押さえている。

「そうね。貴方に分かる様に言うと……………要するに、グレンラガンは気合で強くなるって事よ」

「おおっ! 成程!! 最初っからそう言えよ!!」

リーロンがそう言うと、神谷は理解した表情となった。

「そ、それで良いんですか!??」

「概念としては間違っていないわ。螺旋力と気合は表裏一体、と言っても良い代物だしね」

真耶が戸惑った様に言って来るが、リーロンはあっけらかんと返す。

「あの、それで……………天上博士はどうしてグレンラガンを開発した

んですか？ やっぱり、螺旋力の兵器転用を考えて？」

とそこで、今度はシャルルがリーロンにそう質問した。

「いいえ。博士自身は螺旋力を兵器として使おうなんて思ってはいなかったわ。けど、それを許さない連中が居た……………」

「許さない連中？」

「『ファントム・タスク亡国企業』って知ってるかしら？」

リーロンは、千冬と真耶に向かってそう言う。

「『ファントム・タスク亡国企業』……………」

「裏の世界で暗躍する秘密結社……………第二次世界大戦中に生まれ、50年以上前から活動していると言われながら、組織の目的や存在理由、規模などの詳細が一切不明の謎のテロリストですね」

「そう。そして博士はそのファントム・タスク亡国企業に目を付けられ、拉致されたの」

「！？ じゃあ、俺を誘拐した連中がアニキの親父の事を知っていたのは！？」

と、それを聞いていた一夏がそう声を挙げた。

「誘拐だと！？ 何の事だ、一夏！？」

事情を知らない篤がそう尋ねるが……………

「篠ノ之、それは後でゆつくり聞け。ああ、そうだ……あの時お前を攫ったのは亡国企業ファントム・タスクの一味だ」

「そうだったのか……」

一夏は怒りの表情を浮かべる。

自分を攫い、千冬の経歴を傷付ける事となった原因を作り出した連中が分かったのだ。

無理も無い。

「亡国企業ファントム・タスクは博士に螺旋力を兵器転用しろと強要したわ。博士は最初こそ拒んだけど、無差別テロをするって脅されてね……螺旋力を兵器転用せざるをえなかった」

「貴方もそれに？」

「そつ。私も元はちよつとは名の知れた科学者だったんだけどね……それで目を付けられて、奴等に拉致されたわけ。そして天上博士と協力して、グレンラガンの開発を開始したの……けど、その後、亡国企業ファントム・タスクの連中にとって、予想外の出来事が起こったの」

「予想外の出来事？」

「アタシや天上博士の他にも、亡国企業内ファントム・タスクには世界中から拉致されて来た科学者やエンジニアが居ただけ……その中に1人、危険な野心を持つ男が居たのよ」

「危険な野心？」

「そう……………『世界征服』って野心をね!？」

「!?!? まさか!?!？」

『世界征服』と聞いて、とある考えが頭を過ぎる千冬。

「ご察しの通り……………その科学者の名はロージエノム……………今まさにその『世界征服』を実現しようとしている人物よ」

「……………!?!?」

全員が驚きを露わにした。

まさかロージエノムの正体が、ファントム・タスク亡国企業に拉致された科学者である
うとは……………

誰が予想出来ただろうか？

「天上博士とアタシから技術を奪ったロージエノムは、それを元に
戦闘兵器『ガンメン』を建造……………更に専門分野だったクローニン
グ技術を使って『獣人』を生み出し、ファントム・タスク亡国企業に反旗を翻したの」

「と言う事はつまり……………ガンメンに使われている技術は元は天上
博士の技術だったって事ですか？」

「そう言う事になるわね……………」

「それで、その後どうなったんですか!?!？」

「夏がリーロンにそう尋ねるが……」

「ゴメンナサイ。私はその時、他の科学者やエンジニアと一緒に天上博士がドサクサに紛れて逃がしてくれたから……その後の事は分からないわ」

「親父が、アンタを？」

「そう。グレンウイングを託してね。けど、天上博士はこう言っていたわ……『恐らくこの覇権争いはロージエノムが勝つ。だが、それは世界に地獄が訪れるという事になる。奴の作ったガンメンに私の技術が使われているのなら、私はそれを止めなければならぬ』ってね」

「そうか……あの時、親父が言っていた償いってのは、そういう事だったのか……」

手に持ったコアドリルを見ながら、神谷はそう呟く。

「そして天上博士は完成したばかりだったグレンラガンで、ロージエノムに戦いを挑んで行ったわ。多分、天上博士は自分が無理だった時には、誰かにその意思とグレンラガンを託そうと思ったんでしようね……それが自分の息子になるとは夢にも思わなかったでしょうけど」

「親父……アンタはアンタなり……男としてのケジメを着けようとしたんだな……」

そう言って、神谷はコアドリルを握り締める。

「神谷……………」

シャルルが、そんな神谷に視線を送る。

「……………以上で、アタシの知ってる事は全部かしら」

「分かった。ありがとうございます……………リットナーさん」

「リーロン、若しくはロンで良いわよ。あ、なんだったら、ビューティフルクイーンでも良いわよ」

「いえ、それは止めて下さい……………それでリーロンさん。貴方の処遇なのですが……………」

「分かってるわよ。この学園に居てもらってんでしょ？」

千冬言葉を察したリーロンがそう言う。

「ええ、グレンラガンの事を知る人を、どの国の政府に渡すワケにも行かないので……………待遇と身分は保障致します」

「OKよ。私もその積りで来たんだからね。一応、ISの事もある程度は整備や改造ぐらい出来るから……………じゃあ、コレからもよろしくね。と・く・く」

と、リーロンが不意に一夏に近寄った。

「!?!? な、何ですか?……………」

「貴方とは仲良くやりたいわ、織斑 一夏くん。男のなのにISを

動かせるなんて、すごく興味深いわ。それに良く見ると好みかも」

「あ、あの……貴方、男の人ですよね？」

「男の様な女の様な……何だったら確かめてみる？」

「ヒイイイイイイイイイイイ……ッ!？」

一夏は思わず、壁に張り付くほど後ずさった!!

「一夏に近づくな! 変態!!」

箒も、何処からか真剣を取り出し、リーロンに斬り掛かった。

「いや〜ね〜、冗談に決まってるじゃない」

それをクネクネとした動きでかわしながら、リーロンはそう言う。

(目が一瞬本気だった様な……)

そう思いながらも、口には出さない真耶だった。

「はあ……取り敢えず、今日はもう解散とする。VTシステムの事については機密事項に付き口外禁止を言い渡す。それからトーナメントは中止するが、個人データ収集の為に1回戦だけは行う。準備はしておけ」

千冬が呆れた様に溜息を吐き、済し崩し的にその場は解散となったのだった……

リーロンの話が終わった頃には、日はすっかり暮れており……

神谷達は食堂で夕食を取る事にした。

「（ガツガツガツガツ！！）美味しい！ おばちゃん！！ カレーライスとカツ丼！ それからエビフライとオムライス追加で！！」

カウンター席に座り、ハヤシライスときつねうどん、お好み焼きと焼きそばを平らげた神谷が、食堂のおばちゃんに向かってそう追加注文する。

「あいよ！ 良い食いつぶりだね〜！ 作ってる方としても嬉しいよ〜！」

「よ、よく食べるね……………」

食堂のおばちゃんから威勢の良い声が返って来ると同時に、右隣に座って居たシャルルが、神谷の食いつぶりを見て、額に冷や汗を浮かべながらそう言う。

「色々あつて疲れたからよ〜。 たっぷり食つとかねえとな」

「アハハハハ……………」

「……………」

あつけらかんと答える神谷に、左隣に座って居た一夏が乾いた笑い声を漏らし、一夏の隣に座って居る箒は、何故か沈んだ表情になっていた。

「……………ん？」

とその時、後ろから視線を感じた神谷は振り返る。

シャルルと一夏も、釣られる様に振り返ると……………

そこには、数人の女子達の姿が在った。

「優勝……………チャンス消えた……………」

「交際、無効……………」

「うわあああああゝゝゝゝんっ！！」

何やら一夏達の方を見ながら小声で言い合って居たかと思うと、やがて1人が泣き声を挙げ、それに続く様に他の女子達も泣きながら走り去って行った。

「んだ？」

「さあ……………」

わけが分からず、首を傾げるしかない神谷とシャルル。

「……………ん？」

と、そこで一夏が、隣に座って居た篝の表情が沈んでいる事に気づく。

「……………あ、そうだ、篝。この前の約束だけど」

「！？ ふえっ！？」

突然言われて、篝は珍妙な声を挙げてしまう。

「付き合っても良いぞ」

「！？ 何っ！？」

「おっ？」

箒が驚きの声を挙げると、神谷達もその様子に気づき、注目する。

「だから、付き合っても良いって……………」

「本当か!? 本当に、本当なのだな!?!」

そこまで言った瞬間、箒は一夏の制服の上着の襟元を引っ掴み、自分の方に引き寄せた。

「お、おう……………」

「……………何故だ? 理由を聞こうではないか」

そこで頭が冷えた箒は、一夏に改めてそう問い質す。

「お、幼馴染の頼みだからな。付き合おうさ」

乱れた襟元を正しながらそう答える一夏。

「そ、そうか!」

(一夏……………オメエ、遂に……………)

嬉しさを顔中に浮かべる箒と、漸く朴念仁卒業かと思うと神谷だったが……………

「買い物ぐらい」

「フンツ!?!」

(んなわけねえか……………)

続いて出た一夏の台詞を聞いて、箒は一夏の顔面にストレートを決め、神谷も頭を抱えた。

「そんな事だろうと思ったわ!! フンツ!!」

「ぐほあっ!?!」

椅子から転げ落ちて、蹲っていた一夏の腹に、箒は追撃の蹴り上げを喰らわす。

「フンツ!!」

そしてそのまま、一昔前の漫画の様にポンポンと怒りを表しながら、去って行った。

「一夏って、態とやってるんじゃないかって思っ時があるよね……………」

「絶対いつか刺されるぞ……………後ろからバツサリ」

ピクピクと痙攣している一夏を見下ろしながら、シャルルと神谷はそう言い合う。

「織斑くん、デュノアくん、天上くん! 朗報ですよ!……………つて、織斑くん、如何しました?」

とそこへ、朗報と言っ言葉と共に、真耶がやって来たが、痙攣して

いる一夏を見てそう尋ねる。

「い、いえ、大丈夫です……………気にしないで下さい」

一夏は痙攣しながらもそう返した。

「そ、そうですか……………」

「それで山田先生。朗報って何ですか？」

戸惑っている真耶に、シャルルが改めてそう尋ねる。

「あ、そうでした。何とですね！ ついについに、男子の大浴場使用が解禁です！！」

「おおっ！ 遂にか！！」

神谷が歓声を挙げる。

「やったね、アニキ！」

復活した一夏も、神谷にそう言う！

「おうよ！ コレでドラム缶を探してこなくて済むってもんだ！！」

「えっ？ ドラム缶？」

「あ、あの、天上くん？ ドラム缶で一体何をする積りだったんですか？」

真耶が恐る恐ると言った様子で神谷に尋ねる。

「なぐに、これ以上風呂が使えなかつたら、ちよいとドラム缶風呂でも作るうかと思ってな。屋上から夜空を見ながらドラム缶風呂も乙なもんだと思ってよ」

「止めて下さい〜！ 寮で火災を起こす気ですか〜っ！！」

涙目になってそう叫ぶ真耶。

この時彼女は、心底大浴場を使える様にして良かったと思ったそう
だ……………

IS学園・学生寮……

大入浴場……

「あ〜、生き返る〜」

「良い湯だぜ……と、くりゃあっ」

一夏と神谷は、大浴場で湯に浸かっていた。

「やっぱり風呂は最高だね、アニキ」

「ああ、オマケに月も見えるときてやがる」

神谷は、大浴場の窓から見えている月を見上げてそう言う。

「……………」

と、不意に一夏が黙り込んだ。

「？ どした、一夏？」

「なあ、アニキ……………リーロンさん言ってたよな……………亡国企業は
ファントム・タスク
ロージェノムに乗っ取られたって」

「ああ、そういやそんなこと言ってたな……………」

「あの時、俺が誘拐なんかされなければ、千冬姉は大会2連覇が達

成できたし、ラウラもあんな事にはならなかった……………」

無意識の内に、一夏は拳を握り締める。

「自分の無力さも許せないけど、あの事件を起こした連中も許せなかった……………」でも、その連中がもう居ないかもしれないって聞いて……………」何て言うか……………」憤りを感じちゃったと言うか……………」

「一夏……………」

と、神谷は一夏の頭を片手で掴んだかと思うと……………」

そのまま湯船に沈めた!!

「!?! ガボボボボボボツ!?!」

「な〜に小難しいこと考えてやがんだ! お前がそんな柄か、オイ!?!」

「ガボツ! ガボツ!……………」ブハツ!! アニキ!! マジで溺れるって!?!」

漸く神谷の手から逃れると、一夏はそう抗議の声を挙げる。

「テメエは何だ? その何とかタンスとか言う連中に復讐してやりたかったのか?」

それを無視する様に、神谷はそう言葉を続けた。

「ファントム・タスク亡国企業だよ……………」別にそういうわけじゃないけど……………」

「なら良いじゃねえかよ……………なあ、一夏。人はなんで前に目があるか知ってるか？」

「えっ？」

「遠くの景色を見る為にゃあ、前に進むしかないからだ」

「前に進む……………」

「そうだ……………後ろに目があると生まれた故郷が離れていくのしか見えねえ。それじゃあ人は前には進めねえ。目が前にありゃあ、歩いて行けば遠くの景色が近づいて来る。だから人は前に進める」

「アニキ……………」

神谷の言葉を聞き入る一夏。

「今俺達が前に進んでやんなきゃならないのは、あのロージエノムとか言う連中のふざけた野望を阻止する事だ」

「……………そうだな。ゴメン、アニキ。何かちょっとナイーブになってたみたいだ」

「気にすんな。お前が倒れそうになったら俺が支える。だから、俺が倒れそうになった時にはお前が支えてくれ、一夏」

「ああー!!」

一夏は力強く返事を返した。

「じゃあ、アニキ…………俺そろそろ上がるよ」

「おう。俺はもう少しこの風呂を堪能してから行くぜ」

「じゃ、御先に……………」

一夏はそう言っつて湯船から上がり、脱衣所に向かった。

「ふう〜〜……………」

残された神谷は、リラックスした様子で、湯船の端に寄り掛かり、天井を仰ぎ見る様な姿勢を取った。

と、その時……………」

脱衣所に続く扉が、ガラガラと音を立てて開いた。

「ん？ 何だ、一夏？ 忘れもんか？」

一夏が戻つて来たのかと出入口の方を見やる神谷だったが……………」

「お、お邪魔します……………」

そこに居たのは一夏ではなく、スポーツタオルを身体の前に当てているだけのシャルルだった。

「……………」

思わず、シャルルを見たまま固まる神谷。

「あ、あんまり見ないで……………神谷のえっち……………」

「……………」

顔を真っ赤にしてそう言うシャルルだったが、神谷はシャルルの事を凝視する。

「うっうっ……………」

シャルルは恥ずかしそうにして、逃げる様に湯船に身体を沈めた。

入浴剤が入っているので、緑色に濁っている湯で、シャルルの身体が薄らとしか見えなくなる。

しかし、それはそれで扇情的な光景である。

「……………オメエも結構大胆な事するな」

やっとの事で我に返った神谷が、シャルルに向かってそう言う。

「い、言わないですよ……………し、死ぬほど恥ずかしいんだから……………」

「……………」

んじゃ、やるなよ、という言葉が喉まで出た神谷だったが、辛うじて飲み込む。

そのまま神谷は前を向くと、窓から夜空を見やった。

「……………」

そのまましばし沈黙が続く……………

「……………んで、如何したんだ？ 態々男の居る風呂場汲んだりまで来て？」

やがて痺れを切らしたかの様に、神谷がシャルルに向かってそう聞く。

「ぼ、僕が一緒だと……………イヤ？」

「寧ろ大歓迎だ！！」

シャルルの言葉に、神谷はサムズアップし、『良い笑顔』でそう言い放った。

「……………」

その言葉と『良い笑顔』に、シャルルは呆れた様な表情を浮かべる。

「……………フッフ……………アハハハッ！ 神谷ってホント、正直だよね！」

だが、次の瞬間にはそう言って笑い声を挙げた。

「ハア~~~~、何だか変に緊張してたのが馬鹿らしくなっちゃった……………」

「ハハハハッ！ んで？ 如何したんだ？」

緊張が解けた様子のシャルルに、神谷は改めて問い質す。

「うん……………話があるんだ。大事な事だから、神谷にも聞いて欲しくて……………」

「……………」

シャルルのその言葉を聞いて、神谷は沈黙する。

如何やら、聞く姿勢を取った様だ。

「前に言ってた事なんだけど……………」

「ああ……………此処に残るって話か？」

「そう、ソレ……………僕ね……………此処に居ようと思う。神谷が居るから、僕は此処に居たいと思えるんだよ。神谷が此処に居ろって言うてくれたから」

「そうか……………まあ、お前の人生はお前のモンだ！好きにすれば良い！生きるなら自分の思う通りに生きてみんなのが男だろ！」

「ぼ、僕は女の子だよー！！」

抗議の声を挙げるシャルル。

「おっと。そついやそつだったな」

「むじ……………」

神谷のその態度に納得が行かない様子のシャルル。

「神谷……………ちょっとそっち向いて」

「ああ？ んだよ？」

「良いから向いて！」

「！？ お、おう……………ったく、何だっただよ……………」

シャルルがいきなり強い態度に出た為、神谷はブツブツ言いながらも思わず従ってしまう。

「……………」

一瞬、逡巡している様な様子を見せたシャルルだったが、やがて意を決した様な表情になると、神谷の背中に抱き付いた。

「！？」

またも固まる神谷。

「ど、如何？ 女の子でしょ？」

神谷の背中に胸を押し当てて、シャルルはそう言う。

「……………ああ、確かに」

神谷はやっとの事でそう返す。

「「……………」

そのまま2人揃って固まってしまっ。

暫しの間沈黙していた2人であったが……………

「あ、あとそれからね……………もう1つ決めたんだ」

「お、おう！ 何をだ！？」

神谷は思わず、上ずった声が出てしまっ。

「僕の在り方をだよ……………神谷……………僕の事はこれから、シャルロ
ットって呼んでくれる？」

「シャルロット？」

「うん……………僕の名前……………お母さんがくれた本当の名前……………」

「分かったぜ……………」

神谷はそう言っつてフツと笑った。

「神谷……………」

「ま、色々あんかも知れねえが……………これからもよろしく頼むぜ！
シャルル！！」

「ズコッ！？……………だからシャルロットだっつてえ！！」

「ああ、スマンスマン。こっちで呼びなれちまったもんでな。ハハハハッ！」

「もうっ〜……………」

呵呵大笑と言った感じ笑う神谷に、シャルル改めシャルロットは、呆れる様に呟く。

しかし……………

その顔には、屈託無い笑顔が浮かんでいた。

その翌日……………

朝のHRにて……………

「アニキ……………シャルルの奴、如何したのかな？」

「さあな？」

間も無く授業開始だが、教室にシャルル……………

もといシャルロットの姿が無い……………

神谷と一夏とは、朝食を取る時までは一緒だったのだが、その後『先に行つてて』との本人からの言葉を受け、神谷と一夏は先に教室へ向かった。

そして、未だに姿を見せていない。

ラウラの姿も見えないが、こっちは昨日の件での事情聴取だと思われる。

「み、皆さん……………お早うございます……………」

とそこで、矢鱈とフラフラしている真耶が姿を現し、教壇に立った。

「んだよ、メガネ姉ちゃん？ 随分疲れてるみてえじゃねえか？

風邪か？」

そんな真耶の姿を見た神谷がそう言い放つ。

「ち、違いますよお！ え〜と……………今日は皆さんに転校生を紹介
します」

神谷にそう反論すると、真耶はそう話を切り出す。

「えっ？」

「ああ？ またかよ？」

一夏と神谷がそう声を挙げ、クラスの生徒達もざわめき出した。

「転校生と言いますか……………既に紹介が済んでると言いますか、え
えと……………」

何やら言葉の歯切れが悪い真耶。

「じゃあ、入って下さい」

「失礼します」

(アレ？ この声って……………)

「ああ？」

真耶が入室を促すと、扉の向こうから聞こえて来た声に、一夏と神
谷は聞き覚えを感じる。

生徒達のざわめきが大きくなり、一夏と神谷に視線が集まる。

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ってたわよね！？」

と、クラスメイトの1人がそう言った瞬間……

教室のドアが吹き飛んだ！

比喩でも何でもなく、本当に吹き飛んだのである！

「一夏あつ！！ ついでに神谷！！」

立ち上る粉煙の中から現れたのは、甲龍を装着している鈴だった。

「ま、待て、鈴！！ 俺は関係無いんだ！！」

「死ねええつ！！」

慌ててそう叫ぶ一夏だったが、鈴は聞く耳持たずと龍咆を一夏と神谷目掛けて放った！！

（あ、死んだ……………）

一夏はまるで他人事のようにそう感じる。

と、その瞬間……………

一夏の間割り込み、龍咆を防いだ者が居た……………

「大丈夫だった？ 神谷？」

床の穴から這い出して来た神谷に、シャルロットがその声を掛ける。

「ああ、大丈夫だ……にしても、オメエも思い切ったな」

服に付いた埃を払いながら、シャルロットにそう言う神谷。

「えへへ、まあね……僕を誰だと思ってるの？」

シャルロットはそう言いながら笑った。

「……………」

神谷は一瞬呆気を取られた様な表情になったが、すぐにニヤツ笑う。

「それでこそ、グレン団の一員だぜ」

「えへへ……………」

遠くから聞こえる一夏を追い回す幕達の喧騒を聞きながら、2人は互いに笑みを浮かべてたのだった。

U, U, U

第12話『僕を誰だと思ってるの?』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

神谷の父である天上博士の謎と、ロージェノムの正体が明らかになりました。

ですが、まだまだ謎は残っています。

それは徐々に明らかにしてゆく積りです。

ファントム・タスク
亡国企業がロージェノム軍に潰されたという事になりましたが、一応IS原作で登場したオータムが、残党として出る予定です。

ロージェノム軍とは別の意味で、一夏達を苦しめる事になると思います。

それと、エムこと織斑マドカも出ます。

ファントム・タスク
ただし、こちらは大きく設定を変更し、亡国企業側ではなくなりま

す。
キャラも大きく変更する予定なので、予めご了承下さい。

そして今回のメインイベント！

シャルルの風呂乱入イベント！！

いや、書いてて鼻血抑えるのに必死でしたよ……………（コラコラ）

そして遂に性別を皆に明らかにしたシャルルことシャルロット。

一夏のラバーズにもラウラが加わり、ラブコメ度は加速して行きます。

勿論、熱血度もアップして行きますので、楽しみにして下さい下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

「この泥棒猫の娘が!!」

そう言う女性……………デュノア社・社長の本妻の罵声と共に、シャルロットが平手打ちを喰らって殴り飛ばされる。

「……………」

その傍では、デュノア社の社長……………シャルロットの父親が物を見る様な目で見下ろしていた。

(ああ……………またこの夢か……………)

殴り飛ばされたシャルロットはそう思う。

これは何時も見ている夢だと……………

デュノア家に引き取られた時の事……………

シャルロットは時たま、この時の事を悪夢として夢に見る。

最初は苦しんでいたシャルロットだったが、何時しかただの夢だと割り切り、夢から覚めるまで只管耐えると言う諦めにも似た対応を取る様になっていた……………

「立ちなさい！　こんなものじゃ済まされないわよ!!」

本妻がシャルロットを無理矢理立たせて、再び引っ叩こうとする。

「うおわあっ!?!」

神谷は続いて、社長を殴り飛ばした。

社長も夫人と同じく、漫画の様にブツ飛んで行く。

「か、神谷!?!」

戸惑ながらも、シャルロットは神谷へと声を掛ける。

「シャルロット! お前はグレン団の一員だ!! 俺が面倒を見る!! 俺はお前の為に生命を張る!! だから、お前の生命は俺が預かる!!」

神谷はそんなシャルロットに向かって、笑顔でそう言う。

「神谷……………」

「行くぜ! 俺達グレン団の伝説の幕開けだ!!」

と、神谷がそう宣言した瞬間……………

その背後に、グレン団のマークの入った旗がはためいた!!

IS学園・学生寮……

シャルロットとラウラの部屋……

「はわっ!?!?……」

そこでシャルロットの目が覚め、朝日の差し込む自室の天井が視界に入る。

「……………」

少々呆然となりながらも、ベッドの上で身を起こすシャルロット。

「……………ハア~~~~……………変な夢見ちゃったな〜」

やがてそう呟きながら溜息を吐いた。

「でも……………」

とそこで、グレン団のマークが入った旗をバックにポーズと笑顔を決めている神谷の姿を思い出す。

「……………良い夢だったな」

夢の内容を思い出して、シャルロットはうつとりとする。

「うふふふ、でも夢の中まであんな調子だなんて……………まあ、神谷らしいか」

そこでシャルロットは、隣のベッドに居る善の同室になったラウラを見やる。

「アレ？ 居ない？」

しかし、そこにラウラの姿は無く、使われていないと思われるベッドだけが在った。

「何処行っただら？……………まあ、良いや」

ベッドから降りると、シャルロットは着替えを始める。

本日は休日であるが、臨海学校が近くに迫っており……………

水着を持っていないかったシャルロットは、神谷に付き添ってもらって、買い物に出かける予定なのだ。

所謂、デートである。

(えへへ…………断られたら如何しようかと思っただけ…………勇氣を出して誘ってみてよかったあ…………)

昨晚、神谷を誘った時の事を思い出し、またも赤面するシャルロットだった。

同寮内・一夏と神谷の部屋…………

シャルロットが女子である事が露見した事件後…………

またも一夏の部屋割りが組み直され……

晴れて神谷と同室となった。

結局のところ、コレが無難な組み合わせであり、尚且つ問題が出ないからだ。

「うっ……うっ……」

と、寝ていた一夏が、何か違和感を感じて目を覚ます。

そして……

自分に密着している何者かの存在に気づく。

「!?!? うわあああああ……!?!?」

一夏は慌てて飛び起きる。

そして、すぐさま掛け布団を翻して、何者かの存在を確かめる。

「うっ……」

それはまるで猫の様に丸まって、気持ち良さそうに寝ているラウラの姿だった。

更に……

何故かラウラは全裸であり、身に着けているのは眼帯と待機状態のISだけである。

「うわあああああああああああああ——————————
っ！——！」

一夏は絶叫を挙げる。

「うっくん……………何だ……………もう朝か？」

その声でラウラも目を覚まし、寝ぼけ眼を擦りながら、ベッドの上に座り込む様に起き上がる。

「何時の間に入って来たんだ!？」

と、一夏がそう尋ねた瞬間……………

ラウラの身体に掛かっていた掛布団が落ち、ラウラのあられもない姿が露わになる。

「!?!? うわぁっ!?!? 馬鹿馬鹿! 隠せえっ!——！」

「夫婦とは互いに包み隠さぬものだと聞いたぞ」

慌てて手で顔を覆い、そう言う一夏だったが、ラウラは意にも介さない。

「ましてやお前は、私の嫁……………」

「な、何なんだよ! この間から!——！」

「日本では気に行った相手を、『俺の嫁』とか『自分の嫁』とか言

「何故そこで赤くなる!!」

一夏はそう叫んで、如何にかラウラから逃げ出そうとする。

しかし、そこで……

更に状況を悪化させる出来事が起こる。

「私だ、一夏！ 朝稽古を始めるぞ!!」

部屋のドアがノックされたかと思うと、箒のそう言う声が響き渡り、返事も待たずにドアが開いた。

「日曜だからと言って、弛んではイカ……」

そう言いながらズカズカと入って来た箒は、ベッドの上で組み合っている一夏とラウラの姿を目撃する。

「んなあつ!?!」

「あつ!?!」

「うん?」

3人ともそのまま固まる。

「……………」

箒の手から、持っていた竹刀が落ちる。

「不法な奴だな。夫婦の寝室に」

「夫婦くっ!?」

ラウラの一言を聞いた途端、箒の身体から赤いオーラが立ち上り始める。

「待て箒! これは誤解……………」

「天誅~~~~~っ!!」

一夏の言い訳も聞かず、箒は竹刀を拾い直すと、一夏に斬り掛かった!!

「!?」

その瞬間!!

「!? うわっ!?」

一夏は信じられない力でラウラの拘束から逃れ、ベッドの上を転がって箒の1撃をかわす!

「!? 何っ!?」

「うわああっ!?」

かわされるとは思っていなかった箒が驚きで固まっていた間に、一夏はその背後を擦り抜け、部屋の外へと脱出する!

そして、凄い格好で寝ている神谷の姿を発見する。

「うわっ、酷い寝相……………神谷。神谷。起きてよ、神谷」

その寝相に呆れながらも、神谷の傍に寄ると、その身体を揺さぶる。

「んが……………んがんぐ……………」

反応した神谷だったが、まだ目は覚ましていない。

「神谷。今日は買い物に行くって約束でしょ。起きてよ」

シャルロットはそれを見て、今度はやや強く揺さぶる。

すると……………

「んん……………出やがったなあ……………獣人にガンメン野郎……………」

神谷がそんな寝言を呟いたかと思うと、突如自分の身体を揺さぶっていたシャルロットの手を掴み、自分の方へ引き倒した。

「うわっ!?!」

そしてそのまま、抱き締めるかの様に拘束する。

「えっ!?!? ちょっ!?!?」

「喰らえ……………グレンラガン・ブリーカー……………」

そしてそのまま、ベアハッグを掛ける神谷。

しかし、寝ぼけているので、力が余り籠っておらず、精々少し強めに抱き締めている様な状態となる。

「ちよっ!? 神谷!!! 寝ボケてないで起きてよお!!!」

慌てて離れようとするシャルロットだが、ガッチリ捕まっている為、離れられない。

「一夏〜! 居る〜〜!!!」

「一夏さん! 今日のご予約はどうなっていますか?」

するとそこへ……………

一夏をデートに誘いに来た鈴とセシリアが現れる。

「あっ!?!」

「えっ!?!」

お互いの姿を見て固まるシャルロットに、鈴とセシリア。

神谷は現在上半身には晒だけしか巻かれておらず、ほぼ裸の状態である。

そしてシャルロットの方も、神谷から逃れようとしている内に、着衣が少し乱れていた。

十中八九、誤解される光景である。

「「し、失礼しました~~~~っ!!」」

鈴とセシリアはそう言うと、一瞬にしてその場を去って行く。

「ちよっ!? 待って、2人供!! 違うよ~~~~っ!!」

シャルロットが慌ててそう叫ぶが、既に2人には届いていなかった。

「ハハハハ……参ったかあ? ……獣人野郎……」

そんな喧噪があってもなお、神谷はまだ夢の世界に居る。

「神谷! 起きろおおおおお……っ!!」

堪忍袋の緒が切れた様に、シャルロットは如何にか片腕を自由にすると、神谷のにやけた顔目掛けて、平手を振り下ろした!!

小一時間後……

神谷とシャルロットは、目的地であるショッピングモール『レゾナンス』へ向かうモノレールの中に居た。

「おかしいな……何か起きてから妙に顔がヒリヒリすんだよなあ……」

顔に薄らと紅葉を浮かべている神谷が、不思議そうにそう呟く。

「気のせいじゃないの?」

そんな神谷に不機嫌そうな様子でそう言うシャルロット。

「……何でお前はそんなに不機嫌なんだ?」

「……知らない!」

シャルロットはそう言ってそっぽを向く。

「??? 益々分からねえぜ……」

神谷は首を傾げるしかなかった。

(もう！ 神谷ってば……………でも……………やっぱり神谷って男の子なんだなあ……………力は有るし、胸板なんて逞しかったし……………)

と、そこでシャルロットは、神谷に抱き締められた時の感触を思い出す。

(って！？ うわあああつ！？ 何考えてるの、僕は！?)

慌てて手をバタバタとさせて、その感触を振り払う様にする。

「ところでよお、『シャル』」

するとそこで、何の前触れも無く、神谷がシャルロットの事をそう呼んで来た。

「うええっ！？ シャ、シャル!?!」

「? 何驚いてんだよ?」

珍妙な声を挙げて驚いた様子を示しているシャルロットに、神谷はそう言う。

「え、えっと……………そ、その『シャル』って……………僕の事?」

「おうよ、シャルルだが、シャルロットだか紛らわしくて覚えられねえからな。ならいつそシャルで良いだろうと思ってな。これからそう呼ぶぞ」

「う、うん！ 分かったよ！」

シャルロット改めシャルは、嬉しそうな様子を隠そうともせず
にその返事をした。

(シャル……………シャルかあ……………うふふ……………コレって……………ちよ
つとは特別な存在って事だよな)

現在シャルの頭の中はお花畑状態であり、小人さんの様なシャルが
数人で踊っている状態である。

「オイ、シャル？」

「えへへへ……………」

神谷が声を掛けているのにも気づかず、シャルはそのまま緩み切っ
た笑顔を浮かべていたのだった……………

それから暫くして……

モノレールは目的のショッピングモールがある駅に到着した。

休日だけあって、駅内も人で混雑していた。

「わあ、凄い人……」

「オイ、シャル」

その人波の様子に、シャルが驚いていると、神谷が声を掛けて来た。

「ん」

見ると、神谷が左手をポケットに入れ、肘を付き出す様なポーズを取っていた。

「えっ!?! え〜と……」

「何やってんだ? 早く来いよ」

そのポーズの意味を理解したシャルが、一瞬戸惑ったが、神谷が催促をする。

「！う、うん……………」

シャルは恥ずかしそうにしながらも、神谷の手をポケットに入れたままの腕に抱き付いた。

所謂、腕組みというやつである。

「この辺はまだ慣れてねえだろ。逸れると面倒だからな」

「神谷は来た事あるの？」

「ああ、授業がつまんね日なんかには、学校を抜け出してな」

「……………アハハハ、神谷らしいね」

あっけらかんと言う神谷に少々呆れた様な笑みを浮かべるシャル。

2人はそのまま腕組みをした状態でショッピングモールを目指して行く。

尚、混雑していた人波は……………

神谷の異様な風体を見ると、まるでモーゼの十戒の様に割れて行ったのだった……………

そのまま2人は目的地であるショッピングモール『レゾナンス』へと辿り着いた……………

「わああ~~~~」

シャルはレゾナンスの様子に目を輝かせている。

「……………ん？」

すると、不意に神谷が足を止めた。

「？ 如何したの、神谷？」

「アレ、一夏じゃねえのか？ それにアイツ等は……………」

「えっ？」

神谷がそう言ったの聞いて、シャルは神谷の視線の先を見やる。

そこには、見知らぬ赤髪の少女と話している一夏の姿が在った。

更にその傍には、赤髪の少女と似ている一夏と同じくらいの少年の姿も在る。

「あ、ホントだ。でも、あっちの人達は？」

「よう、弾！ 久しぶりだな！ 蘭も元気だったか！？」

シャルがそう言っている間に、神谷はその輪の中へと入って行く。

「あ、アニキ！」

「！？ アニキ！？ 神谷のアニキじゃないか！！」

「えっ！？ 神谷さん！？」

一夏がそう言っていると、赤毛の少年と赤毛の少女が、驚いた様子で神谷を見やった。

「神谷、知り合いなの？」

「ああ、五反田 弾とその妹の蘭。昔馴染みでグレン団の1員だ」

シャルに、神谷はその兄妹……………五反田兄妹を紹介する。

「あ、どうも、初めまして。』五反田 蘭』と言います」

「『五反田 弾』です。一夏や神谷のアニキとは中学からの付き合いです」

「あ、どうも。シャルロット・デュノアです。よろしくね」

『五反田 蘭』、『五反田 弾』と挨拶を交わすシャル。

「って言うかアニキ。日本に帰ってたんなら言ってくれよお。この

間一夏から聞いて驚いたんだぜ」

「いや、ワリイワリイ。色々とゴタゴタとしててよ」

弾の言葉に、神谷は頭を搔く。

「暇があつたら顔出すぜ。お前んとこの定食も久しぶりに食いてえしな」

「ああ、是非来てくれよ。爺ちゃんも喜ぶからよ」

「んで？ 蘭、オメエも相変わらず一夏にホの字……………」

「うわあああああああ——————っ！！」

と、神谷が蘭にそう言いかけた瞬間……………」

蘭の正拳突きが、神谷のボディに叩き込まれる！

「！？ オイ、蘭！？」

「アニキ！？」

「神谷！？」

突然拳を繰り出した蘭に驚く弾と、喰らった神谷を心配する一夏とシヤル。

しかし……………」

「ハツハツハツ！ 良いパンチだぜ！！」

蘭の拳は、神谷の腹筋で止められており、効いていなかった。

「さ、流石アニキ……………」

「無茶するなあ……………」

その様子に、一夏は尊敬の眼差しを送り、シャルは呆れる様に呟く。

（ちよっ！ 神谷さん！ 本人の前でそんな事言わないで下さい！）

拳の効果が無いと知ると、蘭は神谷にそう小声で言う。

（分かった、分かった……………だがアイツを狙うんなら、いつそ正面からガツンツと言った方が良いぞ。只でさえ色んな奴のアプローチを受けて気づかずに居る奴だからな）

（えっ？ 色んなって……………やっぱり一夏さんモテるんですか！？）

（ああ、少なくとも明確に好きだって連中が4人……………あと男がアイツしか居ねえ事もあって殆どの女はアイツに注目してんな）

（うっ、やっぱり……………）

「如何したの？」

「何話してんだ？」

と、小声で話し合う2人の様子を怪訝に思ったシャルと一夏がそう尋ねて来る。

「!?!? い、いえ! 何でもありません!?!」

「気にすんな」

慌てて誤魔化す蘭に対し、神谷は別に如何って事は無いと言う様に返事をする。

「? そうか?」

「……………」

不思議そうにしながらもそれ以上は追及しない一夏と、内緒にする神谷にちよつと不機嫌そうになるシャルだった。

「ところでよお、一夏。お前1人で来たのか?」

「いや、実はこの前の事(学年別トーナメントの約束)の事もあるから、筈を誘って来ようと思ったんだけど……………今朝の一件で台無しになっちまって……………」

困った顔をしてそう呟く。

「んじゃあ、セシリアでも鈴でも誘ってやらあ良かったじゃねえか?」

「いや、アイツ等もう水着持ってるらしいし……………」

(馬鹿野郎……………)

相変わらずの唐変木っぷりに、神谷は頭を抱える。

その後、神谷は弾と少し昔話に花を咲かせた後、一夏とも別れて、シャルと共に買い物へと戻った。

なお、別れた一夏の後ろを、セシリア、鈴、ラウラが追っていたのが見えたが、敢えて見ないふりをしたのだった……………

レゾナンス・水着売り場……

「やっぱりコレだな……」

神谷はそう言つて、『とある物』を手にする。

「すみませうん。コレください」

と、レジの方から聞こえた声に振り向くと、神谷と『同じ物』を購入している一夏の姿が在った。

「えっ！？ ええと……コチラをですか？」

一夏が持つて来た物を見て困惑するレジの女性店員。

「？ 何ですか？」

それに一夏は、真顔でそう返す。

「い、いえ……お、お預かり致します……」

女性店員は恥ずかしそうにしながら、一夏が購入した物を包装し、代金を受け取る。

（へっ！ 分かってるじゃねえ、一夏……男の水着はソレよ！！）

一夏が去つた後、神谷もレジへ向かい、同じ物を購入する。

レジの女性店員は同じ様に恥ずかしそうにしていたが、すぐに包装し、代金を受け取った。

「うっしー！」

「神谷。もう終わったの？」

とそこで、自分の水着を選んで居たシャルが現れる。

「ああ。オメエはもう決まったのか？」

「あ、うっん……………ちょっとね……………神谷に選んでほしいなあって
思ってた」

「？ 俺に？」

シャルの言葉に、神谷は首を傾げる。

「う、うん……………駄目かな？」

「別にわるかねえが……………俺が如何こう言えるもんじゃねえと思っ
んだがなあ」

「そ、そんな事ないよ！ すっごく参考になるよ！」

「そうか？ まあ、分かったよ」

「うん、じゃあ、来て……………」

シャルはそう言つと、神谷の腕を取り、そのまま試着室へと連れ込
んだ。

「？ オイ、シャル？ 何してんだ？」

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないと分かんないし……………ね？」

「は？」

「す、すぐ着替えるから待っててっ！」

そう言つと、シャルはいきなり上着を脱ぎ出す。

「！？」

神谷の顔が驚きで固まる。

(うつつ……………勢いでこんな事しちゃったけど、どうしよう……………)

一方、シャルもシャルで、上着を脱いだ所で手が止まってしまつ。

「オイ、シャル……………」

「うえっ！？ な、何、神……………」

と、シャルがそこまで言つと、神谷がシャルが背にしている試着室の壁に手を付いて、ズイッと顔を近づけた。

「！？！？」

「……………誘つてんのか？」

そのまま真顔でシャルにそう言つ神谷。

「!?!? うえええっ!? えっと、その……………」

その言葉の意味を理解したシャルの脳は一瞬で沸騰し、呂律が回らなくなる。

「……………フツ、冗談だよ……………早く着替えちまえよ」

と、そんなシャルの様子を見ると、神谷はそう言って近づけていた顔を離し、後ろを向いた。

「……………」

そんな神谷の姿に、シャルは一瞬呆気を取られる。

(神谷って紳士なのか、エッチなのか、分かんない時があるなあ……………)

そんな事を思いながら、幾分が緊張が解けたシャルは、着替えを続ける。

(……………持つか?……………理性……………)

だが、神谷は背後から聞こえる布が擦れる音で、そんな事を思っている……………

やはりスケベだ。

「もう、良いよ……………」

と、そこで背後からそう声が聞こえた。

「!?!」

少し驚きながらも振り向くと、そこには……

太陽を思わせるイエローの、セパレートとワンピースの中間に位置し、分離している上下を背中クロスさせて繋げている水着を来たシャルの姿が在った。

「ほう………」

その姿に、神谷は思わず顎に手を当てて唸る。

「変………かな？」

「いやあ、中々グツとくる水着じゃねえか」

恥ずかしそうに聞いてくるシャルに、神谷は顎に手を当てたままそう答えた。

「そ、そう？　じゃあ、コレにするね」

と、その時……

「お客様？」

「うえっ!?!」

「あん？」

突如試着室の外から店員の声が出て、シャルと神谷は思わず声を挙げてしまう。

「……………今の声」

すると、今度は聞き覚えのある声が響く。

そして、試着室のカーテンが開け放たれる。

そこには店員を連れた千冬と真耶の姿が在った。

「うわぁっ!?!?」

千冬の姿を見て、シャルは思わず悲鳴にも似た声を挙げる。

「て、て、て、天上くん!?!? デュノアさん!?!?」

「何をしている、馬鹿者共」

顔を真っ赤にしている真耶と、呆れ顔の千冬。

(マ、マズイよ! このままじゃお説教コース……………)

と、シャルがそう思った瞬間……………

「逃げんぞ! シャル!?!?」

「えっ!?!?……………うわぁっ!?!?」

神谷がそう言ったかと思うと、水着姿のままのシャルをお姫様抱っここで抱き上げ、拾っておいた元の服をその腹の上に乗せる。

そして膝を軽く曲げたかと思うと跳躍し、千冬達の頭上を飛び越える！！

「ふえっ!?!」

「!?!? しまった!?!」

千冬達が慌てて後ろを振り向いた瞬間には、神谷は駆け出していた。

「お、お金! 此処に置きます!?!」

その途中でレジの前を通過した際、シャルが水着の代金を投げ置く。

「神谷! 逃げ切れると思っているのか!?!」

と、千冬がもの凄いスピードで追って来て、2人を捕まえようとする。

「……………思つた」

しかし、それに神谷が不敵に笑いながらそう返したかと思うと……………

その姿が緑色の光に包まれ、グレンラガンへ変わった。

「うええっ!?!」

「!?!? 何っ!?!」

そしてグレンウイングを展開したかと思うと、ブースターを噴射し、そのまま飛行する。

「うわっ！？ 神谷あ！！ 貴様あ！！」

「ハハハハッ！ アバヨ、とっつあくん！！」

「誰がとっつあんだ！！」

まるで三代目の大泥棒の様な捨て台詞を残し、グレンラガンとなった神谷はシャルを抱き抱えたまま、レゾナンスから文字通り飛び出して行った！！

後日、この1件で……………

千冬がまた始末書を書く事になったのは言うまでも無い……………

その後、少しして……

「此処までくりゃあ、もうだいじょぶだろ」

レゾナンスから大分離れた街並みが見下ろせる丘の上に降り立つグレンラガン。

辺りはすっかり、夕暮れになっていた。

「もう、神谷、やり過ぎだよ。後で怒られるよ」

グレンラガンの腕の中から降りると、シャルは来ていた服を抱えながらそう言う。

「そんな時はそんなだ！」

そう言って、グレンラガンの姿から戻ると、神谷は呵呵大笑に笑う。

「はあ、全く……」

「それよりシャル。早く着替えちまえよ」

「えっ？……！？ うわぁっ!？」

と、神谷に指摘されて、シャルは自分が水着姿のままの事を思い出す。

慌てて、近くにあつた茂みの中へ逃げ込む。

「の、覗かないですよ………」

「そう言われると覗きたくなるのが男の性………」

「駄目だって!!！」

堂々と覗きに行こうとする神谷を、シャルは押し止める。

「ハイハイ、分かったよ………」

若干残念そうにしながら、神谷はシャルが居る茂みから離れる。

「もう………」

愚痴る様にそう呟きながら、いそいそと着替えを済ますシャルだった。

「終わったか？」

「うん………」

少しして神谷が声を掛けると、着替え終わったシャルが茂みから出て来る。

「ホント……神谷と居ると、いつも凄い事が起きるよね」

神谷の隣に並び立つと、シャルはそう言ってくる。

「良い事じゃねえか。刺激のねえ人生なんざ、退屈なだけだぜ」

「アハハ、刺激が在り過ぎても疲れそうだけど……」

シャルは苦笑いしながらそう言う。

「あ、そだ……」

と、そこで神谷が、マントの内側をゴソゴソとし出した。

「？ 如何したの？」

「え〜と……お！ 有った、有った！」

少しマントの中をゴソゴソとしていた神谷だったが、やがて綺麗にラッピングされた小箱を取り出す。

「ホラよ、シャル。やるよ」

「うわっ、と!?!?」

神谷はその小箱をシャルに投げ渡す。

「コ、コレ、ひょっとして!?!?……プレゼント!?!?」

「まあそんなもんだ」

腕組みをしながらそう言う神谷。

実はこの小箱……………

弾が去り際にコツソリと神谷に渡してきたの物である。

（アニキ！ 可愛い彼女にはプレゼントの1つもあげないといけませんよ！ コレ良かったら、どうぞ！ ダチに頼まれて買ったんですけど、生憎フラれたみたいで……………）

（弾の奴…………… 氣い使わせちまったか？）

今度弾に会った時にお礼をしなければと神谷が思っている……………

「あ、開けても良いかな？」

「ああ、良いぞ」

シャルがそう言って、小箱の包装を解く。

中から出て来たのは、銀色のブレスレットだった。

「うわあ〜〜〜！」

感激しながらそのブレスレットを取り出すシャル。

銀色のブレスレットが夕日の光を反射し、金色に輝く。

「わあ〜……………」

その様にまたも感激しながら、シャルはブレスレットを左手首に填めた。

「ありがとう、神谷……………大切にするね」

シャルは眩い笑顔を浮かべて、神谷にお礼を言う。

その頬が赤いのは夕日に染まっているからではない……………

「気に入ったんなら良かったぜ……………さて、そろそろ帰るか」

照れ隠しか、少々素っ気なく言いつと歩き出す神谷。

「あ、待ってよ!」

それを追って走り出したかと思うと、シャルは神谷の左腕に抱き付く。

「へっ……………」

神谷はそんなシャルを見て、フツと笑った。

2人はそのまま……

夕暮れの中を……

腕を組んで帰って行ったのだった……

つづく

第14話『俺たちや無敵のグレン団よ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第14話『俺たちや無敵のグレン団よ!!』

「海っ！ 見えたあっ！！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの生徒達が声を挙げる。

臨海学校初日……………

天候にも恵まれ、無事快晴。

窓の外に見える海は、太陽光を反射して煌めいており、窓を開けると潮の香りが漂って来た。

「やっぱり海ってのは良いぜ。いつもデツカくってよお」

「う、うん？ そうだねっ」

神谷がそう言うと、隣に座って居たシャルが若干気の無い返事を返す。

「んだよ？ そんなに気になったのか？」

「えっ！？ あ、うん……………ま、まあ、ね。えへへ……………」

先程からシャルの視線は自分の左手首……………神谷がプレゼントしたブレスレットに注がれている。

「えへへ……………」

再びブレスレットに視線を注ぎ、シャルは夢見心地と言った様子になる。

(こうなると貰いもんだってのが後ろめてえなあ……………)

そんなシャルの様子を見て、神谷は若干申し訳無さを感じる。

一方、一夏は……………

早くも彼のラヴァーズの争奪戦に巻き込まれていたのだった……………

それから程なくして……………

バスは目的地である旅館……

『くろがね屋』へと辿り着いた。

4台のバスから降りた生徒達が整列すると……

「いらっしやいませ〜」

『歓迎 くろがね屋』と言う文字が掛かれた垂れ幕を持った幽鬼の如き長身をポンチョとソンブレロで包んだ男…… 『ジャンゴ』

「ようこそ、くろがね屋へ」

顔面に十字の縫い傷がある禿頭の巨漢…… 『クロス』

「IS学園さん御一行、ご案内〜い」

ティアドロップ型の黄色いサングラスを掛けたヤザ風な男…… 『イタチの安』

「まあまあ、遠い所からようこそ」

短躯の老女…… 『菊ノ助』

「……………」

板長姿の無口な男…… 『先生』

「ようこそ、くろがね屋へ。私、当旅館の女将の『錦織 つばね』

です」

そして最後に、くろがね屋の七代目女将……『錦織 つばさ』が挨拶をする。

「……………」

明らかにカタギでは無い旅館の従業員達の姿を見て、生徒達は沈黙する。

(あ、あの……………織斑先生?)

(何も言つな、山田くん……………私もまさかこんな宿だったとは……………)

と、真耶と千冬が小声でそう話し合っていると……………

「お久しぶりね、女将さん」

リーロンが女将のつばさにそう挨拶を送った。

「ああ、久しぶりだね、リーロン。相変わらず男だか女だかハッキリしないね」

つばさはリーロンにそんな言葉を返す。

「良いじゃない別に。些細な問題だし」

「ふふふ、確かにね……………」

と、そこでつばさが、神谷と一夏の姿を見てそう言った。

「ええ、そうよ」

「天上 神谷と！ その弟分、織斑 一夏だ！ 覚えておきな！」

「よ、よろしくお願いします……………」

強面の従業員達を前にしても、物怖じせずになんか言い放つ神谷に対し、一夏は逆に思いつきりびびっている。

「ふふふ……………威勢が良い様だね……………気に入ったよ」

そんな神谷の姿を見て、つばさは不敵に笑う。

「さて……………それじゃあ皆さん。お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられる様になっていますから、そちらをご利用なさって下さいな。場所が分からなければ、何時でも従業員に聞いて下さいまし」

接客モードへ戻り、生徒達にそう言いつつばさ。

「…………………………」

生徒達は未だに従業員達を見たショックから立ち直れず、無言のままに其々の班ごとに部屋へと向かい出す。

「一夏！ さっさと着替えて海へ行くぜ！」

「お、おう!」

初日は終日自由時間となっており、2人はすぐにでも海へ行きたい気持ちでいっぱいだった。

「ね、ね、ねー。おりむ〜、かみや〜ん」

「えっ?」

「おう、何だ、のほほん」

と、そんな2人に異様に遅いスピードを近寄って来てそう尋ねて来る袖丈が異常に長い制服のクラスメイトの『布仏 本音』、神谷曰く『のほほん』。

数少ない、神谷と普通に接している生徒である。

「おりむーとかみやんの部屋何処〜? 一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないかねえの?」

「俺は断然屋根の上だな! 星空を眺めながら寝るのは気持ち良いぞ〜!」

「わ〜、私もそれが良いな〜」

「オイ、男子共」

と、神谷と一夏が、のほほんとそう話していると、千冬が声を掛け

て来た。

「お前達の部屋はコッチだ。付いて来い」

「あ、ハイ……………じゃあ、また後で」

「またな」

「バイバイ」

袖を振りながら神谷と一夏を見送るのほほん。

そのまま2人は千冬に付いて行くと……………

「此処だ」

千冬は、教員室と書かれた張り紙がしてある部屋の前で立ち止まり、そう言う。

「え？ 此処って……………」

「んだよ、ブラコンアネキ。女共から一夏を取り上げて1人占めか？ 相変わらずのブラコンだな」

「……………最初は個室という意見も有ったが、絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけてくるだろうという事と、神谷……………お前は目を離すと何をし出すか分からないからこうなったんだ」

若干怒りを帯びた口調でそう言う千冬だったが、神谷は意にも介していない。

「ま、んな事がどうでも良い。一夏！ 海行くぞ！！」

「合点だ、アニキ！！」

そして、ズカズカと教員室に入り込むと荷物を置き、海水浴用の荷物だけを持ち出して、別館へと向かって行く。

「……………アイツ等……………！？ イツツツツツツツ！！ く、薬……………」

そんな2人の姿を見た千冬は神経性胃炎に襲われ、バッグから薬を取り出すと、慌てて飲み干すのだった……………

別館へと向かっていた一夏と神谷は、その途中で箒と合流した。

そして改めて別館を目指していたのだが……………

その途中の渡り廊下から見える庭で、『ある物』を見つげる。

その『ある物』とは……………

『地面から生えているウサミミ』だった。

しかも御丁寧に『引っ張って下さい』と書かれた看板まで建てられている。

「久しぶりだな、このパターンも」

神谷は、そのウサミミを見て、懐かしそうな顔をしてそう呟く。

「なあ、コレって……………」

「知らん、私に訊くな。関係ない」

一夏は箒に向かって何か言おうとしたが、箒は突っ慳貪にそう返し、そのままスタスタと行ってしまった。

「あ、箒……………」

「何だ？ アイツ姉貴と喧嘩でもしたのか？」

その様を見た神谷が、一夏にそう尋ねる。

「うん……………如何もそうみたいなんだ。詳しい原因までは分からないけど」

「そうか……………まっ、アイツ等の事だ。すぐにでも仲直りすんだろ！」

そう言って神谷は笑い飛ばす。

「ハハハハ……それじゃあ、抜いてみるね」

一夏はそんな神谷を見て苦笑いすると、地面から生えていたウサミミを引っこ抜こうとする。

「待て、一夏。それじゃまどろっこしいだろ」

「えっ？」

神谷の言葉に一夏が振り返ると、そこには……

グレンラガンの姿となり、右手をドリルにして回転させている神谷の姿が在った。

「ええっ!?!」

「退いてろ、一夏!?!」

驚く一夏にそう言い、グレンラガンは右手のドリルを振り被る。

「!?!? うわあっ!?!」

逃げる様に飛び退く一夏。

そして次の瞬間には、グレンラガンのドリルが、ウサミミが生えていた地面に突き刺さった!!

土が凄いい勢いで巻き上げられる。

「ちよっ！ アニキ！ ストップ！ ストップ！！」

「……………ん？」

一夏が止めると、神谷も違和感を感じてドリルを止めた。

ウサミミが生えていた地面は大きく抉られているが、何かが埋まっていた様子は無い……………

「ア、アレ？」

「んだ？」

「一夏さん？ 神谷さん？ 何をなさっているんですか？」

首を傾げている一夏と神谷に、声を掛ける人物が居た。

海水浴用の道具を携えたセシリアである。

「おう、セシリア」

「いや、東さんが……………」

神谷が挨拶をし、一夏が答えようとしたところ……………

上空から、何かが高速で降って来た！！

「えっ！？」

「な、何ですの！？」

「って言うか、大丈夫かな？ 東さん？」

「あの女がこの程度でくたばる玉かよ」

「……………それもそうだね」

飛んで行った巨大な機械仕掛けの人参を見上げながらそう言い合う
神谷と一夏。

「……………一体全体何ですの？」

セシリアは状況に付いて行けず、そう呟くのだった……………

海岸……………

水着姿のIS学園生徒達が、思い思いに燥いでいる。

まさに男から見れば、今この海岸はパラダイスで有った。

「ねえ、一夏見なかった？」

と、そんなパラダイスビーチの中で、一夏の姿を探している鈴。

「うっん。見てないけど……………」

「そう言えば天上くんも居ないね？」

「一緒にビーチバレーしようと思ったのに……………」

鈴の言葉で、一夏と神谷の姿がビーチに無い事に気づく生徒達。

「全く……………何処で油売ってんのよ、アイツ」

「ホントですわ。折角サンオイルを塗ってもらった予定でしたのに……………」

ビーチパラソルの下に敷いたビニールシートの上に寝そべっていたセシリアがそう愚痴る。

「……………それならアタシが塗ってあげるわよ。それぞれ!!」

と、そんな良い思いはさせないと言う様に、鈴がセシリアのサンオイルを引っ手繰ると、そのまま寝そべっていたセシリアの背に塗り出す。

「キヤアツ！？ つ、冷たい！ や、止めて下さい！ 鈴さん！！」

冷たいサンオイルを塗られて、セシリアは悲鳴を挙げる。

「あ、鈴にセシリア。此処に居たんだ」

とそこで、2人の姿を見つけたシャルがそう言いながら近寄って来た。

「あ、シャルロット……………！？ うえっ！？」

「シャルロットさん？……………！？ キヤアツ！？」

シャルの方を見て悲鳴を挙げる鈴とセシリア。

何故ならその隣に……………

「……………」

全身バスタオルに包まれた、ミイラのような人物が居たからだ。

「だ、誰よ、アンタ！？」

鈴がその人物に向かってそう尋ねる。

「ゴフツ!?……………」

油断していた千冬はまともに喰らってしまい、砂浜に倒れた。

「!? 千冬姉!?」

「織斑先生!?」

「…………お姉様!?」

一夏、真耶、生徒達が慌てて駆け寄る。

千冬の手からは、赤い液体が流れている。

「!!! 千冬姉えっ!!!」

「血、血がこんなに!?!」

「いやあああああああ—————っ! お姉様あああああ
あああああ—————っ!」

途端に生徒達から悲鳴が發せられる。

しかし……………

「…………アレ? コレって…………スイカじゃないですか?」

そこで、シャルがその声を挙げた。

「えっ?」

真耶が驚きながら良く見てみると……………

確かに、千冬の頭から流れていた赤い液体は血では無く……………

スイカの果汁であった。

如何やら、先程千冬に命中した物体の正体は、スイカだった様だ。

その証拠に、飛び散った破片が、辺りに散らばっている。

「と言う事は……………」

生徒の声で、真耶が慌てて千冬の状態をチェックすると……………

「……………ハア~~~~、良かった。気絶しているだけです」

そんな安堵の声を挙げ、生徒達も取り敢えず安心した様子を見せる。

「でも、如何してスイカが?……………」

と、シャルがそう言った瞬間!!

今度はシャル目掛けてスイカが飛んで来た!!

「!?!? うわあっ!?!?」

しかし、シャルに命中する直前で、神谷の手が伸び、飛んで来たスイカをキャッチする!!

「大丈夫か？」

「う、うん……………ありがとう、神谷」

「何でスイカが飛んで来んのよ！！」

そこで、鈴がそうツッコミを入れると……………

「スイカと言えば夏と海の華！ そいつを投げつけるってのは！
喧嘩を売られたって事よっ！！」

「……………はあっ？」「……………」

神谷の無茶苦茶な理論に、シャル達が呆れる様な声を挙げたが……………

「その通り！！」

その瞬間、何処からとも無く、いかにもチャラ男と言った水着の集団が、スイカを携えて現れた！

「この辺の海は俺達の縄張りよ！ 使っんなら許可を取ってもらおうか！！」

「へっ！ 何言ってるやがる！ 海はテメエ等みてえなチャライ奴等のもんじゃないねえ！ 太陽よりも熱い漢の故郷よ！！」

「面白い。ここいらで俺達、スイカ棲鑄寡団に逆らって、生きていた連中ははいねえぜ！！」

瞬く間に喧嘩へと突入する棲鑄寡団と神谷。

「何が棲鋳寡団だ！俺たちや無敵のグレン団よ！！行くぞ、一夏！シャル！セシリア！鈴！ラウラ！ついでにメガネ姉ちゃんもだ！！」

「おう！」

「何だか良く分からないけど……………この人達が邪魔なのは分かるよ」

「ちよつ！？私達もですか！？」

「諦めなさい、セシリア……………ああなつたらもう巻き込まれる事は決定よ」

「教官にスイカをぶつけるとは……………許せん！！」

「え、ええっ！？私もですか！？」

神谷が呼び掛けると、多種多様な返事を返しながら、一夏達も立ち上がった。

「フフフフ、覚悟しろ！！」

「うおおおおおおおおおおー……………っ！！」

そのままグレン団の面々は、棲鋳寡団とスイカの投げ合いを開始したのだった……………（使ったスイカは、後で美味しくいただきました）

そして、時間は夕方まで流れた……

ビーチから少し離れた、切り立った崖の上に佇む1つの人影……

「……………」

それは、水着姿の筈であった。

ただ只管に、夕日が沈む水平線を眺めている筈。

「こんな所に居たのか……………何をしている？」

と、そんな筈に声を掛ける人物が現れる。

「あ、千冬……………織斑先生」

振り返ると千冬の姿が目に入り、思わず昔の様に呼んでしまおうとした筈だったが、すぐに訂正する。

が……………

「……………如何したのですか？ そのコブは？」

千冬の頭には、まるで漫画の様なコブが出来ており、筈は思わずそう尋ねる。

「……………何でも無い。気にするな」

明らかに気にしない事は出来ないレベルなのだが、千冬の顔が不機嫌を現している事を察した筈は、それ以上追及しなかった。

「気もそそると言った様子だな……………何か心配事でもあるのか？」

「それは……………」

千冬の問いかけに、筈は言葉に詰まる。

「束の事か？」

「……………」

「先日、連絡を取っているな？」

そう……

実は箒……

実姉であるISの開発者、篠ノ之 束に連絡を取っていた。

現在各国が精鋭を挙って搜索している束だが、実は実妹である箒、そして親友である千冬とは何時でも連絡が取れる様になっており、本人達の目の前に現れる事も少なくなかった。

相次ぐ一夏と巻き込むトラブルの発生と、ロージエノム軍の襲来に

……

これまで専用機を持たない箒は苦い思いをしており……

このままではいけないと思い、苦肉の策で、現在あまり仲が良いとは言えない姉の束に、専用機の開発を依頼しようとしたのだ。

最も、束は既に箒の専用機を用意しており、すぐにでも届ける積りである。

「ラウラのVTシステムの一件は、無関係だそうだ……最も、ロージエノム軍の作業員の仕業と言う可能性が浮上したがな」

「ハイ……」

千冬にそう言うと、箒は再び夕日の沈む海原を見やる。

「明日は7月7日だ……姿を見せるかもしれんな……アイツ」

「……………」

千冬の言葉に、箒は無言で頷く。

（勿論、用意してあるよ。最高性能にして規格外。そして白と並び立つもの！ その機体の名前はあ！！）

「『紅椿』……………」

束に教えられた自分の専用機の名前を呟く箒だった……………

一方、その頃……

神谷達は……

「チ、チキシヨウ……覚えてやがれえ!!」

棲鏝寡団の頭らしき人物がそう捨て台詞を残すと、スイカの果汁塗れの姿で退散して行く棲鏝寡団。

「へっ! 一昨日着やがれ!!」

「か、勝った……ハア、ハア……」

勝ち誇る神谷の後ろで、一夏は息を切らして座り込んでいる。

「あゝもゝ、ベトベトですわ」

「やだもぅ」

「大丈夫? 2人とも?」

スイカを何発か喰らい、果汁塗れの姿で愚痴るセシリアと鈴に、無傷なシャルが心配そうに声を掛ける。

「……………」

「脈拍、心拍数、正常……………問題無いな」

そして、大量のスイカを浴びて気絶している真耶と、それをシャルと同じく無傷なラウラが診察していた。

「あゝ……………何時の間にか、もう日暮れか……………」

「全く……………何で初日からこんな目に遭わなきゃならないのよ……………」

水平線の向こうへ沈み行こうとしている夕日を見てそう言う一夏と、愚痴る鈴。

「何不満そうにしてやがんだ！俺達は喧嘩に勝ったんだぞ！！もっと誇らしげにしろ！！」

「お蔭で自由行動の時間が潰れてしまいましたわ！！」
不満そうにしている一同に神谷がそう言うが、セシリアがそう反論する。

彼女の言う通り、間もなく自由時間は終わりであり、ビーチに残っていた生徒達は、皆疲れた様な表情をしながら、旅館へと引き上げて行く。

多かれ少なかれ、グレン団と樓鏑寡団の被害を被っており、思い通りの自由時間が過ごせなかった様だ。

「男が細かい事気にすんな！！」

「……女ですわ よ、だよ ……」

「我々も引き上げるぞ」

と、神谷達の中でも、ラウラが最初にそう言い……………

真耶を背負って旅館へと引き上げて行く。

「はあ、もう疲れましたわ」

「温泉入ってゆっくりしよう……………」

もう気力も残り少ない様子で、セシリアと鈴も引き上げて行く。

「さてと……………」

神谷も旅館へ戻ろうとすると……………

「あ、神谷。ちょっと良いかな？」

シャルがそう言って、神谷の事を呼び止めて来た。

「あ？ なんだよ？」

「アニキ。俺、先に戻ってるね」

神谷が立ち止まると、一夏がそう言う。

「ああ、分かった」

「それじゃあ……………（幕の奴、如何したんだらうな？）」

一夏はビーチに姿を見せなかった筈の事を気に掛けながら、旅館へと戻って行く。

何時の間にか、夕焼けに染まるビーチには、神谷とシャルだけが残される。

「んで？ 一体何の用だ？ シャル？」

「え、ええと、その……………」

改めて問い質す神谷だが、シャルは何やら赤面しながら神谷に視線を合わそうとせず、明後日の方向を見やりながら口籠る。

(うっ……やっぱり直視出来ないよ……………)

赤ふん姿の神谷を直視出来ないシャル。

スイカ合戦の間は意識している暇が無かったが、イザ2人つきりとなった瞬間に意識が行ってしまい、思考が定まらなくなっていた。

「んだよ？ ハッキリ言えよ」

「う、うん……………えっとね……………スイカ合戦中に色々と助けてくれたよね？ 改めてお礼を言っておこうと思って……………」

神谷の言葉で、どうにか落ち着きを取り戻したシャルがそう言う。

そう、シャルが無傷だったのは、本人の才能も有るが、危ないところで常に神谷が助けていたからなのだ。

「何だ、んな事が。気にすんな！ 大事な団員を守るのもリーダーの役目よ！」

神谷はサムズアップして屈託無い笑顔でそう言う。

「団員か……………」

と、団員という言葉に、シャルは若干不満そうな様子を見せる。

「？ どした？」

「あ！？ う、ううん！ な、何でも無いよ！！」

しかし、神谷に尋ねられると、そう誤魔化する。

「？ 変な奴だな……………さて、とつとと帰って飯にすっか！」

神谷はそう言うと、シャルに背を向けて旅館の方に歩き出した。

「う、うん……………そうだね」

シャルは少しその場で佇んでいたかと思うと……………

「……………えいつ！」

やがて、先に歩き出していた神谷を追い掛け、その腕にしがみつく。

「つと、何だよ？」

「僕もちよつと疲れちゃった……………連れてって、神谷」

シャルは神谷の腕を抱き締めながら、上目遣いでそう言う。

「ったく、しょうがねえなあ……………」

そう言うと神谷は、シャルに腕に抱き付かれたまま歩き出す。

「えへへ……………」

その状態で、凄く幸せそうな笑みを浮かべるシャルだった……………

つづく

第14話『俺たちや無敵のグレン団よ!!』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

いよいよ臨海学校編。

間も無く銀の福音シルバリオ・ゴスベルが登場です。

ですが今日は初日の様子……
海での自由時間をお送ります。

えっ？

旅館の人達がどこかで見た事ある？

キノセイデスヨ……

それはさておき、海へ行くと皆テンションが上がる様に、やはり神谷達も大はしゃぎです。

しかし、まさか赤ふん姿でビーチは一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図に!?

更に地元の不良集団も現れてもう大変!!

しかし、グレン団の活躍で、見事勝利するのだった。

さて、次回はいよいよ東と紅椿登場します。

更にその次で銀の福音シルバリオ・ゴスベルの登場です。

尚、銀の福音はアニメ版の設定で無人機になりますので、予めご了承ください。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第15話『……ロメンね』（前書き）

注意

千冬さん、および東さんのファンは、注意してお読み下さい。

第15話『……………ゴメンね』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第15話『……………ゴメンね』

それを見た生徒達から驚きの声が拳がる。

「嘘っ！？ 如何やったの！？」

「これ何の手品！？」

「ハッハッハッ！ 相変わらず先生の刃物捌きは素晴らしいね」

「ハ、ハハハハハ……」

イタチの安は先生の腕を褒めるが、一夏は戦慄を覚えていた。

「さあさあ、どうぞどうぞ」

そう言いながら、菊ノ助は生徒のコップに飲み物を継ぐ。

「あ、ありがとうございます……」

「すみませ〜ん！ こっちに飲み物の御代わりお願いします！」

と、そこでやや離れた席に居た生徒が、菊ノ助にそう声を掛ける。

「ハイ、ただいま……」

菊ノ助がそう返事を返したかと思うと、一瞬で飲み物の御代わりを持ってその生徒の前に現れた。

（！？ 今、一瞬で目の前に！？）

急に支えを失い、神谷とクロスは倒れる。

「イテテテテテ……………」

「むっ、こりゃ参ったな……………」

頭の後ろを摩りながら起き上がる神谷と、やられたという顔になるクロス。

「こりゃ、引き分けだな」

審判を務めていたジャンゴがそう判定を下す。

「嫌いぞ！ お前達は静かに食事する事が出来んのか！！」

と、そこで……………」

千冬がそう言いながら、宴会場に乗り込んで来た。

「お、織斑先生……………」

「んだよ、折角楽しんでるところに水差すなよ」

生徒達は沈黙するが、神谷だけはそう反論する。

「神谷……………またお前か。何度騒ぎを起こしたら気が済むんだ」

神谷に向かって説教を始めようとする千冬だったが……………」

「そう叱らないでおくんなせえ、先生」

「遊びに誘ったのはこっちでしてね〜」

「そうですね！ 折角の臨海学校！ 野暮な事は言いつこ無しにしましょうしゃ！」

「そうそう」

クロス、ジャンゴ、イタチの安、菊ノ助がそう弁護して来た。

「うつつ！？………」

強面のくろがね屋従業員の面々に迫られて、流石の千冬も1歩下がる。

「すみませんね〜、先生。ウチの従業員が迷惑をお掛けした様で………」

と、何時の間にか現れた女将のつばさが、そんな千冬にそう言うて来る。

「（！？ 何時の間に！？）い、いえ、別にそんな事は………」

「お詫びと言ってはなんですが………当旅館自慢のお酒を用意させて頂きました。宜しければどうぞ」

「じ、自慢の酒………」

その言葉に、千冬は一瞬笑みを浮かべそうになる。

「……………ハッ!? と、兎に角! 余り騒ぎを起こすな! 鎮めるのが面倒だ!!」

しかし、生徒の前である事を思い出すと、すぐに取り成してそう言い残すと去って行った。

「……………」

残された生徒達は、呆れた様な表情を見せながらも、説教は喰らいたくないと思い、大人しく食事を続ける。

……………神谷以外。

その後……………

食事も終わり、生徒達は其々の部屋で自由時間となっていた。

持って来ていたゲームをする者達……………

恋バナに華を咲かせている者達……………

青春のお約束、枕投げに興じる者達……………

皆、思い思いに自由時間を楽しんでいる。

そんな中……………

教員室へと向かう人物の姿が在った……………

「うっ、うっ……………酷い目に遭いましたわ……………」

セシリアだ。

何やら疲れた様子を見せながらも、教員室……………

即ち、一夏の部屋を目指して行っている。

実は先程の宴会の際……………

セシリアは多大な労力を使い、一夏の隣の席を確保したものの……………

慣れない正座をしていた為、足の痛みが酷く、碌に会話も出来なかったのだ。

すると一夏は、そんなセシリアを不憫に思ったのか、後で自分の部屋に來いと誘ったのである。

男が女を自分の部屋に誘うと言うのは、所謂『そういう意味』にも取れる事なのだが、一夏の事である……

そんな積りは微塵も無いだろう。

だが、それを『そういう意味』だと捉えたセシリアは、ちゃっかり用意して來た所謂勝負用の下着を身に着け、高級な香水をして一夏の部屋へ向かおうとしたのである。

しかし、その直前に同じ部屋の、のほほん達を含めた生徒達にその事を気づかれてしまい、色々と揉みくちやにされたのである。

「でも、これでやっと一夏さんに会えますわ……ん？」

と、教員室の前まで來たセシリアは、あるものを発見する。

「……」

それは、教員室のドアの前に座り込み、聞き耳を立ててると思われる、箒、鈴、シャル、ラウラの姿だった。

「如何なさいましたの？」

思わず集まっていた一同にそう尋ねるセシリア。

「しっ!」

すると、鈴が黙っていると促す。

「千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる?」

そこで、教員室から一夏の声が聞こえて来た。

「そんな訳あるか、馬鹿者……………んっ! す、少しは加減をしろ……………」

今度は千冬の声が聞こえて来る。

「はいはい。んじゃあ……………」こは……………」と

「くあっ! そ、そこは……………やめっ、つうっ!」

「すぐに良くなるって。大分溜まってたみたいだし……………ね」

「あああっ!」

そのまま一夏と千冬の会話が続く。

それはどう聞いても……………

所謂『アレ』な会話だった。

「こ、こ、これは一体、何ですか?」

それを聞いたセシリアは、顔を真っ赤にしながら一同と同じ様に聞き耳を立てる。

「「「「「……………」」」」」」

箒達の顔も真っ赤に染まっている。

そして更に良く聞こうと襖に寄り掛かる。

すると……………

5人分の体重に耐え切れなくなった襖が、中へ向かって倒れた！！

「「「「「わあああああああつ！？」」」」」

当然、襖に寄り掛かっていた5人は、そのまま教員室の中へ雪崩れ込んで行く。

「……………何をしている、お前達？」

そんな5人に怒りの籠った千冬の声が掛けられる。

「……………」

一夏も驚きの表情で固まっている。

……………因みに、一夏が千冬にしていたのは、マッサージだった。

その後、千冬は5人を正座させ、説教を喰らわせていた。

「マッサージだったのですか……………」

「しかし良かった。てっきり……………」

そんな中で、声の正体がマッサージだった事に安堵の息を吐くセシリアとラウラ。

「何やってると思ったんだ？」

「それは勿論、男女の……………」

「…………ストップッ！！」「……………」

一夏の疑問に、ラウラが答えようとしたところ、他のメンバーが慌てて口を塞ぐ。

「べ、別に……………」

「特に何と言っワケでは……………」

付けられていた冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「んぐっ!! 　んぐっ!! 　んぐっ!! 　んぐっ!! 　んぐっ!!」

そして蓋を開けると一気に飲み干す!

「ちよっ! 　千冬姉! 　そんなに一気に飲んだら駄目だよ! 　それに生徒の前で!」

それを見た一夏が慌てて止めるが……

「これが飲まずにいられるか!!」

千冬は聞き入れず、新たな缶ビールを取り出すと、蓋を開けて再び一気に飲み干す!!

「プハーツ!! 　オイ、一夏!! 　女将に言っつて酒を貰っつて来い!!」

「ええっ!?!」

「早くしろ!!」

弟とはいえ、仮にも生徒に自分が飲酒をする酒を持って来いと言っつ千冬に戸惑っつ一夏だったが、千冬は無言を言わせぬ口調でそう言っつ放っつ。

「わ、分かりました!!」

その迫力に負け、一夏は慌てて女将の元へと向かっつたのだっつた。

「んぐっ!! んぐっ!! んぐっ!! んぐっ!!」

「……………」

一夏が去った後も、凄い勢いで缶ビールを飲み干して行く千冬に、
箒達は啞然とする。

「プハーツ! ところでお前等!」

「……………!? ハ、ハイ!」

と、突然話を振られて、箒達は思わず背筋を正す。

「お前等一体、アイツの何処が良いんだ?」

「……………!?」

千冬の問いに戸惑う一同。

アイツとは箒、セシリア、鈴、ラウラにとっては一夏。

そしてシャルにとっては神谷の事に他ならない。

「わ、私は別に……………以前より腕が落ちている不甲斐ない姿が腹立たしいだけです」

「アタシは、腐れ縁なだけだし……………」

「わ、私はクラス代表としてしっかりしてほしいだけですわ」

「じ、自分は……………アイツの中に『漢』というものを見ました」
箒、鈴、セシリア、ラウラがそう答える。

「ふむ、そうか……………ではそう一夏に伝えておこう」

「……………言わなくていいです!!」「……………」

思わず声を揃えてそう言う箒達に、千冬は思いつきり笑いながら、新しいビールを飲み干した。

「……………で、デュノア。お前は如何なんだ？」

「え、ええっ!?! 僕もですか!?!」

「当たり前だ。しかし何だ……………お前の場合、ホントにあんな男の何処が良いんだ？」

千冬は心底不思議そうにそう尋ねる。

「アイツは馬鹿だぞ。オマケに向こう見ずな上に無鉄砲……………アイツのせいで一夏が不良の道に……………」

千冬は手に持っていた缶ビールの空き缶を握り潰しながら愚痴る様に言う。

「神谷はそんな人じゃありません!」

と、そこでシャルが立ち上がり、千冬に向かって抗議した!!

「「「「「!?」「」「」」」」」

シャルの思わぬ反応に千冬と箒達は驚く。

「確かに神谷は何時も滅茶苦茶で無茶苦茶ばかりしてるかもしれないけど……でも！ 神谷は何時だって自分が言った事を曲げない！ それを現実にして来た！！ そう言う漢なんです！！」

そのままシャルは、神谷に付いて熱弁する。

「まあ、確かに……口先だけの男ではないな……」

「アイツに助けられた事って、結構有るわね……」

「あの方と一緒に居ると、時々私達の心まで熱くなる様な感覚が致します……」

「もし奴が只の無鉄砲な奴だとすれば、とつくの昔に死んでいる筈だ……」

そんなシャルの言葉に、箒達も自分達から見た神谷の感じを述べ始める。

「……ハア……、分かった、分かった……悪かった」

その言葉に、千冬は折れた様に謝罪する。

「まあ、確かに……アイツは今時珍しい大した男だ。だがな、デユノア……気を付けろ」

「えっ？」

「ああいう男は一人で勝手に走って行ってしまふ奴だ。待っているだけでは疲れるぞ。追いつけて行くぐらいの気骨で行かんと……」

ニヤリとした笑みを浮かべながら、千冬はそう言う。

「しかしな……そいつの後ろを追い掛けて走っていると……いつの間にか見た事もない景色が見られる様になる」

「……ハイ」

千冬の言葉に思つ所があり、シャルは頷く。

「しかし、まあ、なんだ……お前達もアレだ……まどろっこしい事するくらいなら、いつそのこと押し倒してやったらどうだ？」

「……！？ ええええっ！？」

突然の千冬のトンでも発言に狼狽する筈達。

「馬鹿者おっ！ 女だったら惚れた男は実力でモノにしるお！！ それぐらいできなくて、何が女かあ！？……ヒック」

「……ヒック！？」

良く見れば、千冬の顔が真っ赤に染まっている。

そして足元には、何時の間に空けたのと思う程の、大量の空き缶が転がっていた。

「ただいま………つて、千冬姉！？ 何時の間にそんなに飲んだの！？」

と、そこで酒を持った一夏が帰って来たが、既に出来上がっている様子の千冬を見て驚愕する。

「おお〜、帰ったか〜、一夏………酒寄せ」

開口一番にそう言う千冬。

「だ、駄目だよ！ それ以上飲んだら、飲み過ぎ………」

「煩い！ 良いから酒を寄せ！！」

一夏の忠告も聞かず、千冬は一夏から強引に酒を奪い取る。

結局千冬は、更に酒を飲みながら、延々と愚痴（主に神谷の事）を言い続けた。

一夏と箒達は、千冬が酔い潰れて眠るまで、その愚痴に付き合わざれたのだった………

尚、この過度の飲酒が後に発覚し………

千冬は3ヶ月の減俸処分を受ける事となった………

一方、その千冬がヤケ酒を呷る原因となった神谷は……

「オラオラ！ グレン団の鬼リーダー！ 神谷様が相手だあ！！！」

「「「「「うわああああああー！！！！！！つ！？」「」」」」

「やるね、お兄さん」

「ほっほっほっ、やっぱり若い人は凄いな」

「こりゃ俺達も負けてらんねえな」

「おうよ！ いっちょ派手に行くぜ！！！」

「！！！」

くろがね五人衆と共に、旅館を襲撃に来たヤザ相手に大立ち回りを演じていたのだった……

翌日……

臨海学校2日目……

本日は午前中から夜まで、丸1日を使ってISの各種装備試験運用と、データ取りが行われる。

「よし、全員……うつぶ！……揃ったな……うぶっ！……これより……おぶっ！！……各班ごとに振り分けられた……おえっ！！……ISの装備試験を行う様に……うえっ！！」

何度か吐きそうになりながら、千冬が生徒達にそう言う。

完全に二日酔いで状態である……………

「……………」

そんな千冬の姿に言葉が出ない生徒達。

「……………」

事情を知っている一夏達は目を反らす。

「あ、あの、織斑先生……………大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ……………問題無い……………おぼっ!！」

心配して尋ねて来た真耶にそう返す千冬だが、返事をしただけでも吐きそうになる。

「んだよ、頼りねえな……………ブリュンヒルデの名が泣くぞ、千冬」
事情を知らない神谷は、そんな千冬の姿を見てそう言い放つ。

(誰でせいでこうなっと思ったと思っている!!)

その声を挙げたかった千冬だったが、口を開くと吐いてしまいそうになるので、声に出せずに居た。

「と、取り敢えず、皆さん! 迅速に行動して下さい!」

千冬に代わる様に、真耶がそう言った。

その言葉で、生徒達はそれぞれに行動を始める。

「あ、ああ、そうだ……………篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

「？ ハイ」

打鉄の装備を運ぼうとしていた筈が、千冬に呼ばれて戸惑いながらもそちらへ向かう。

「お前には今日から専用……………」

「ちーちゃ……………んっ！！」

と、千冬が何かを言いかけた瞬間……………

それを遮る様な声が聞こえて来た。

全員がその声が聞こえて来た方を向くと、そこには……………

凄まじいスピードでこちらに向かって来る人影が在った。

まるで世界を縮める最速のアルター使いの男を思わせる速度である。

「……………束」

その人影を見て呆れる様に呟く千冬。

そう……………

しばらくお待ち下さい……………

「……………ゴメンね、ちーちゃん」

洗浄と着替えを終えた束が、千冬に向かってそう謝罪する。

「……………いや、良いんだ……………寧ろ忘れてくれ……………」

同じく洗浄と着替えを終えた、げっそりとした様子の千冬が力無く
そう言ってくる。

「………………………………………」

一夏を含めた生徒達と真耶も、無言で千冬から目を逸らしていた。

「よう、ウサミミ女！ 久しぶりだな！！」

とそこで、空気を読まない神谷が、東に向かってそう挨拶をした。

「あ、ああっ！ かみやん！ 久しぶりー！！」

すると東は、気まずいこの空気を変える様に、陽気な様子に戻ってそう挨拶を返す。

「相変わらずみてえーだな。まあ、逆に安心したぜ」

「うつつふつぷ〜！ この東さんがそう簡単に変わるワケないでしょお！ それよりかみやん！ 昨日はいきなり酷いじゃな〜い！ 折角派手に登場しようと思ったら、問答無用でホームランするなんて！！！」

「馬鹿野郎！ いきなり落ちてきたらホームランすんのが男の道だろっ！！！」

「そっか〜……………男の道じゃあ、しょうがないね〜」

そのまま神谷と東は、2人だけしか分からない会話を展開する。

「……………」

生徒達は全員ポカ〜ンとしており、「何言ってるんだ、コイツ等？」

、「俺に分かる様に説明しろ！！」状態になっている。

と、そこで、束は今度は箒の方を向いた。

「やあ！」

「……………どうも」

フレンドリーに話し掛ける束に対し、箒の態度は何処か他人行儀だった。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ？ おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが……………」

と、そこで束の手つきが怪しくなった瞬間……………

箒は何処かから取り出した木刀で、束をどつく！！

「殴りますよ」

「な、殴つてから言ったあ！ 箒ちゃん酷い！！ ねえ、いっくん酷いよねえ？」

「は、はあ……………」

突然話しを振られた一夏は、戸惑いながら気の無い返事を返す。

「オイ、束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒が困っている」

「あゝ、ハイハイ」

千冬がそう言うと、束は生徒達の方へ向き直った。

「……………?」

その様子に違和感を覚える千冬。

彼女が知る束は、自分の興味の無い事にはとことん無関心になる性格で、それは人間の場合も例外ではなく篤・一夏・千冬・神谷の4人だけに關心を持っていて、後はかろうじて両親を「身内」として判別できるくらいであった。

それ以外の人間には興味がなく、身内以外から話し掛けられると非情に冷淡な態度で明確な拒絶の意思を示す筈だったが……………

目の前の束は、確かに身内にフレンドリーだが、他人を拒絶している様子は無い……………

「どうも〜！ 皆さん初めまして〜！ 私が天才の束さんだよ〜！
ハロ〜〜！……………ハイ、終わり！」

生徒達にそう挨拶する束。

簡潔な内容ではあったものの、そこに他人を拒絶している様な様子は見受けられない。

「束って……………」

「ISSの開発者にして、天才科学者の!?!」

「篠ノ之 束?」

鈴、シャル、ラウラがそう驚きの声を挙げる。

「ふっふん……さあ！ 大空をご覧あれ！！」

するとそこで、束は目を光らせた後、大空を指差してそう言い放つ。

その瞬間……

突如、銀色のクリスタルの様な塊が、一同の眼前に降って来た！！

「……………！？」「……………」

突然の出来事に驚く一同。

「じゃじゃん！ これぞ篝ちゃん専用機こと、『紅椿』！！」

束がそう言つて、リモコンらしき物のスイッチを押すと、そのクリスタル状の物体が展開し、真紅のISの姿となる。

「全スペックが現行ISを上回る、束さんお手製だよ！！」

束は嬉々として、トンでもない事をサラリと説明する。

「何たって、紅椿は第4世代……！？ うっ！？」

とその時……

説明を続けようとした束がフラつく。

「えっ？……」

突然の謝罪に、篝は困惑する。

「私がISを開発したせいで……篝ちゃんにはいつも苦勞を掛けちゃったね……多分私が死んでも……その苦勞はずっと篝ちゃんに付きまとう……」

「姉さん！？何を言っているんですか！？」

「けど心配しないで……紅椿がある限り……篝ちゃんは強いわ！世界一！」

「世界一！？」

「そう！世界一だよ！篝ちゃん！！貴方は紅椿を手に入れたたった今から人間を超える！貴方は超人よ！いや！それ以上の者よ！！」

狂気に憑りつかれたかの様に、束はそう語り出す。

「篝ちゃん！貴方は！……神にも悪魔にもなれる！！」

「か、神にも……悪魔にも……」

「そうよ！神となって人類を救う事も！悪魔となり世界を滅ぼす事も！貴方の自由だよ！貴方が選べる！！」

「わ、私が……世界を……」

「貴方の好き勝手に世界を手玉に取るが良いわ！ ISの怪物！
紅椿が！！ 貴方の望み通りに力を貸してくれるわ！！」

束はそこで立ち上がり、紅椿の姿をバツクに、両腕を広げるポーズを取ってそう箒に向かって語った。

「あゝはっはっはっはっはっ！！ 篠ノ之 箒！！ 世界は貴方の物よお！！……………ぐっ！？」

そこで束は、バタリと倒れた。

「姉さん！！！」

慌てて駆け寄り、助け起こす箒。

「た、只1つの心残りは……………紅椿を操縦する箒ちゃんの勇姿を見れない事……………」

「姉さん！？ 嫌だ！！ 死なないで！！」

「箒……………ちゃん……………」

と、最後にそう呟いて、束は瞳を閉じた……………

「！？ 姉さああああああ……………んっ！！」

「束ええええええええええ……………っ！！」

箒と千冬は、束の死に涙を流して悲しむ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「夏達や他の生徒も、戸惑いながらも沈痛な表情を浮かべている…

……

……と、

「……オイ、もういんじゃないかねえのか？ 束」

神谷が束の亡骸に向かってそう声を掛けた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その言葉に一同が戸惑いの声を挙げた瞬間……

「……そうだね！」

死んだと思われていた束がムクリと起き上がる。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一同の顔が、今度は驚きで固まった！！

「あちゃ〜、着替えたのにまた汚しちゃったなあ〜」

そう言いながら束は、服に付いた吐血の血……いや、血糊を拭く。

「ね、姉さん……」

「束〜」

余りにも質の悪い冗談に、箒と千冬の怒りが頂点に達する。

「おりよ？ 如何したの箒ちゃん、ちーちゃん？ あゝ！ そつか
！！ 私の才能に嫉妬したんだね！！ フツ……………天才は辛いな」
本格的にボコツてみました……………

その後……………

箒と千冬にボコボコにされた束は、ボロボロの姿で、紅椿のフィッ
ティングとパーソナライズを行っていた。

「全く……………ちょっとしたジョークじゃない」

ボコボコの顔でそう愚痴る束。

「ジョークでもやって良い事と悪い事がある」

しかし、千冬がピシヤリとそう言い返す。

「全く……………心配した私が馬鹿だった」

紅椿を装着している筈がそう呟く。

「ゴメンね、筈ちゃん……………ハイ！ フィッティング終了。超速いね。流石私」

束が筈に謝罪すると同時に、紅椿のフィッティングが終了した。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの？ 身内ってだけで」

「だよねえ。何かズルいよねえ」

と、その様子を見ていた生徒達から、思わずそんな声が挙がる。

「……………」

すると、その声が聞こえたのか、束が視線を向ける。

「……………!?」「……………」

思わず身構える生徒達だったが……………

「……………ゴメンね」

束は一瞬、涙が零れそうなくらい悲しそうな顔をしてそう言った。

「……………!?」「……………」

思いも寄らぬ言葉に、驚きを示す生徒達。

「……………そんなじゃあ、篝ちゃん！ 試運転も兼ねて飛んでみてよ！
篝ちゃんのイメージ通りに動く筈だから…！」

しかし、すぐにいつもの明るい調子に戻り、篝にそう言う。

「ええ……………それでは試してみます」

すると篝は目を閉じて、意識を集中させ始めた。

その次の瞬間……………

紅椿は、凄まじい速度で上昇する…！

「おわっ！？」

「ヒューッ」

その際の衝撃波で待った砂から目を守る一夏と、その様を見て口笛を吹く神谷。

「何コレ？ 速い…！」

「コレが……………第4世代の加速……………と言う事は？」

その凄まじい速度に、鈴とシャルがそう呟く。

「どつどつ？ 篝ちゃんが思った以上に動くでしょうっ？」

上空を飛び回っている篝に、束はそう通信を送る。

「え、ええ、まあ……………」

「じゃあ、刀使ってみてよ。右のが雨月あまつきで、左のが空裂からわれね。武器属性のデータを送るよ〜！」

束が空中に指を躍らせたかと思うと、筭は2本の刀を抜き放ち、空中で静止した。

「雨月、行くぞ！ ふっ！！」

そう言っただけで、右の刀・雨月を振るう。

すると、刀身から赤いレーザーが放たれ、そのまま雲を突き抜けて、更に上空へと消えて行った……………

「おお……………」

放った筭自身も、驚きに目を見開いている。

「良いね、良いね！ 次はコレを撃ち落としてみてね！！ は〜いっ！！」

と、束がそう言ったかと思うと、その隣に鉄の箱……………

ミサイルポッドが出現！！

そこから紅椿目掛けて多数のミサイルが放たれた！！

白煙の尾を引いて紅椿を装着した筭に迫るミサイル群。

「エイッ!!」

迫るミサイル群に向かって、空裂を振るう筈。

すると今度は、斬撃がエネルギー波となってミサイル群を直撃。

全てのミサイルを1撃で撃墜した!!

「やるな……………」

「スゲエ……………」

「うっん！ 良いね、良いねえ！ うふふふふ!!」

ラウラと一夏がそんな感想を漏らす中、東は自慢げに笑い声を挙げる。

「……………」

だが、その姿に、千冬は良く分からない違和感を感じていた。

「やれる……………この紅椿なら!!」

筈は紅椿のスペックにそう感嘆の声を漏らす。

と、その時……………

「た、大変です!!」

突然真耶が、そう大声を挙げた！！

「……………!?」「……………」

「如何した?」

「こ、コレを!」

真耶はそう言って、小型端末を千冬に手渡す。

「特命任務レベルA……………現時刻より対策を始められたし……………」

それを見た千冬は厳しい顔となり、真耶と何やら会話を繰り返す。始める。

「何だ?」

「何か事件が起こったっぽいなあ……………」

その光景に首を傾げる一夏と、どこかワクワクしている様子の神谷。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務へと移る! 今日のテスト稼働は中止! 各班はISを片付け旅館へ戻れ! 連絡があるまで各自室内待機する事! 以上だ!」

すると、生徒達の方に向き直った千冬がそう言い放った。

突然の中止命令に、生徒達から戸惑いの声が挙がるが……………

「とつと戻れ! 以後、許可無く室外に出た者は、我々で身柄を

拘束する！！ 良いな！！」

千冬の重ねての一喝で、慌てて片づけを始める。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、凰、デュノア、ボ―デヴィツヒ！ それと篠ノ之も来い！ あと神谷！ お前もだ！！」

「はい！！」

「おう！！」

降りて来た筈と、神谷が威勢良くそう返事を返す。

一夏達も、戸惑いながらも指示に従うのだった。

「……………」

そんな中、只一人……………

束が思い悩んでいる様な様子を見せている束の姿が在ったのだった……………

UJU

第15話『……………ゴメンね』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

全国の千冬さんと東さんファンの皆さん。

大変申し訳ありませんでした！！（土下座）

今回御2人は大分泥を被っていたたく事になりました。

まあ、被ったのは泥じゃなくて（黙れ！！）……………

飽く迄ギャグ演出の1つだと思つて流して下さい。

お願いします。

さて、遂に登場した東さんですが……………

大部改変が入っています。

この作品での東さんは、今川泰宏監督に良く出て来る、『真実を知つてるけど勿体ぶつて話さず、1人で葛藤する博士』的なポジションになります。

一体何を知っているのか？

それはストーリーが進むに連れて明かして行く積りです。

さて、次回はいよいよ銀の福音が登場。

当然ながら、ロージエノム軍も登場しますので、原作よりも激戦になります。

楽しみに待っていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第16話『俺とした事が……………ドジ踏んじまったぜ……………』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第16話『俺とした事が……………ドジ踏んじまったぜ……………』

旅館・くろがね屋……

予定が中止され、専用機持ちと神谷が、旅館の一番奥にある宴会用の大座敷へと集められていた。

座敷の中は、教師陣と様々な機材が運び込まれており、まるで作戦司令室の様になっている。

「では、現状を説明する」

千冬がそう言い、話を切り出した。

照明が消されて、薄暗い部屋の中に、作戦図の様に大型の空中投影ディスプレイが浮かび上がっており、神谷達はその周りに座り込んで話を聞いている。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が入った」

千冬その言葉に、シャル達は緊張した面持ちを見せるが、事情が分からない一夏と篤は戸惑う。

「……………」

一方神谷は、何やらワクワクしている様な様子を見せる。

「情報によれば、無人のISと言う事だ」

「無人……………」

千冬の言葉に、一夏は何時ぞや戦ったゴーレムIの事を思い出す。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2Km先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後……………学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処する事になった」

「お、俺達が!？」

IS乗りとは言え、学生の身分の自分達が、こんな実践に参加させられるとは思ってはいなかった一夏が驚く。

「この件にはロージェノム軍の関与が疑われている……………現在日本に居る戦力で、ロージェノム軍とまともに戦って勝利を得ているのはお前達だけだ。それを見込んでの要請らしい」

「へっ! 分かってるじゃねえか! ケダモノ野郎共が関わってるとなりゃあ、放っとくわけにゃあ行かねえな!!」

千冬言葉に、そう威勢の良い返事を返す神谷。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

「それと、グレンラガンにもね」

教員の中に交じって、大座敷に運び込まれたコンパネ付きのディスプレイの1つに着いていたリーロンがそう言う。

「それでは作戦会議を行う。意見が有るものは拳手する様に」

「ハイ！」

千冬がそう言うと、セシリアが手を上げた。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「うむ………だが、決して口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも2年の監視が付けられる……特に神谷。お前は注意しろ」

「ハイハイ」

千冬は名指しでそう注意するが、当の神谷は分かっているのか、いないのか、そう返事を返す。

そんな神谷の態度の少々辟易しながらも、千冬は銀の福音シルバリオ・ゴスペルのデータを投影する。

「広域殲滅を目的とした、特殊射撃型………私のISと同じく、オールレンジ攻撃を行える様ですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね………厄介だわ」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。連続しての防御は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数だ………偵察は行えないのですか？」

銀の福音シルバリオ・ゴスベルのスペックを見たセシリア、鈴、シャル、ラウラがそれぞれにそう意見を挙げる。

「それは無理だな……………この機体は超音速飛行を続けている。アップローチは……………1回が限界だ」

「それにロージエノム軍が関わっているかもしれないとなると、ガンメンが待ち構えている可能性もあるわ。迂闊に近づいたら待ち伏せを喰らうかもしれないわ」

千冬がそう返し、リーロンがそう捕捉して来た。

「1回きりのチャンス……………と言う事はやはり、1撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしか、ありませんね」

「そうつまり……………」

「……………俺か」

千冬言葉に、一夏が呟いた。

「それとグレンラガンもよ」

「おうー！」

更にリーロンがそう言い、神谷が威勢の良い返事を返す。

「リーロンさん、グレンラガンと銀の福音シルバリオ・ゴスベルが戦った場合の勝率は？」

「五分五分つてところね……神谷の気合が強ければ圧勝かもしれないけど」

「あたりめえだ！ あんなひよろっちい奴なんかには、俺とグレンラガンが負けるかよー！」

「いや、アニキ。アレはアメリカのIS技術の粋を集めた第3世代……」

根拠も無しに自信満々で言う神谷に、一夏がそうツッコミを入れる。

「よし。銀の福音シルバリオ・ゴスベルとの接触までは、グレンラガンが一夏を運んで……」

「待った、待ったあー！」

とそこで、そう言う声が響き渡る。

一同が驚きながら声のした方向を見やると、そこには……

「その作戦はちょっと待ったなんだよー！」

天井裏から逆さまに顔を出している束の姿が在った。

「忍者みてえなやろうだな……」

そんな束の姿を見て、神谷はそんな感想を漏らす。

「とーっつーー！」

束は天井裏から飛び出すと、猫の様に空中回転を決めて着地し、千冬に擦り寄った。

「ちーちゃん、ちーちゃん！ もっと良い作戦が私の頭の中にナウブリーディングウー！」

「……………出て行け」

相変わらず遣りたい放題な親友に、千冬は辟易した様子を見せる。

「聞いて聞いて！ ココはだ〜んぜん、紅椿の出番なんだよー！」

しかし、そんな千冬の様子を無視して、束は高らかにそう言った。

「何？」

「……………!?」「……………」

その言葉に、千冬と一夏達は驚く。

「紅椿に装備されている『展開装甲』を使えば、パッケージ無しで超音速飛行が可能なんだよ！」

「『展開装甲』？」

「うんうん！ 分かり易く言えば、雪片式型が進化した形かな？」

紅椿はそれが全身に装備されているからね！」

「成程……………」

束のその説明に頷く神谷。

「神谷？ 分かってるの？」

シャルがそう尋ねると……………

「全く分かんない！」

神谷はさも当然の様にそう返した。

「だよな〜」

それを見てシャルは、呆れた笑みを浮かべる。

「うむ……………」

千冬は悩む素振りを見せる。

「何が起こるか分からない以上、手数は多いに越した事はないわ。許可してあげたら？」

すると、そんな千冬を後押しする様に、リーロンがそう言って来た。

「……………仕方がない。それで行く。では本作戦では織斑・篠ノ之、そして天上による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。各員、直ちに準備にかかれ！」

千冬が折れた様にそう言うと、一夏達と教師陣は、作戦の為の準備に取り掛かるのだった。

「じゃははははは」

その様を、束は楽しそうな様子で見ている。

すると……

「貴方も辛いわね……」

そんな束に、リーロンがそう言う。

「……うん……でも、自分で選んだ事だから」

すると束は、準備に勤しむ一同には見えない様に、悲しそうな表情を浮かべたのだった……

それから時は流れて……

時刻は午前11時半……

作戦開始の時刻となり、一夏と篤が、出発地点の海岸へ現れた。

「……………」

互いに1度目を見合つと頷く合つ。

「来い！ 白式！！」

「行くぞ！ 紅椿！！」

そしてISを展開。

宙に舞い上がった。

「気合十分みてえーだな！」

すると上空に居たグレンラガンとなった神谷が、伝統と信頼のガイナ立ちポーズで舞い降りて来る。

「アニキ！」

「フツ……………当然」

グレンラガンの姿を見て声を掛ける一夏と、得意げに笑う箒。

「？」

と、神谷はそんな箒の笑みに妙な違和感を感じる。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら、女の上に男が乗るなど、私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

箒がそう言ったのを聞くと、一夏が箒の背中側に移動する。

白式は、銀の福音撃墜シルバリオ・ゴスベルの為に、エネルギーを残して置かなければならず、その為に紅椿を装着した箒が、一夏を銀の福音シルバリオ・ゴスベルの元まで運ぶ方法が取られたのだ。

「良いか、箒。コレは訓練じゃない。十分に注意して……………」

「無論分かっているさ。心配するな。お前は、ちゃんと私が運んでやる。大船に乗った積りで居れば良さ」

一夏の言葉を遮って、箒はそう言う。

「……………」

その姿で、一夏も違和感を感じる。

何と言うか、今の箒は……………」

舞い上がっているかの様に思えた。

やっと専用機を手に入れられた事が、彼女の心に自分でも気づかぬ慢心を生んでいるのだろうか……

「織斑、篠ノ之、天上。聞こえるか？」

とそこで、3人の耳に、千冬からの通信が聞こえて来た。

「！ハイ！」

「良く聞こえます」

「聞こえてるぜ」

「今回の作戦の要は、一撃必殺だ。短時間での決着を心掛ける。打つべきは……シルバリオ・ゴスベル銀の福音……以後、『福音』と呼称する」

3人の返事を聞くと、千冬はそう作戦を復習させる。

「了解！」

「また、天上はロージェノム軍の出現などのイレギュラーが発生した場合、そちらを優先して対処せよ。福音は織斑と篠ノ之が中心となって当たれ」

「任せとけ！」

一夏、箒、神谷が力強く返事を返す。

「織斑先生。私は状況に応じて、一夏のサポートをすれば宜しいですか？」

「そうだな……だが無理はするな。お前は、紅椿での実戦経験は皆無だ。突然何かしらの問題が出るとも限らない」

「分かりました……ですが、出来る範囲で支援をします」

「……………」

その会話で、千冬も筈に違和感を感じた。

「織斑」

「!？ 八、ハイ!!」

「これはプライベート・チャネルだ。篠ノ之には聞かれない」

思わず返事をしてしまう一夏だったが、千冬が通信を送って来たのはプライベート・チャネルの方だった。

「どうも篠ノ之は浮かれてるな。あんな状態では、何かを仕損じるやもしれん。イザという時は、サポートしてやれ」

「分かりました。意識しておきます」

「頼むぞ」

千冬はそう言って、プライベート・チャネルを終了する。

「では！ 初めー!!」

そしてその号令を掛けて、作戦が開始された!!

一夏が箒の方を掴む。

「行くぞ!」

「おう!」

そしてそう言い合った瞬間……

紅椿は、一瞬にして高度300メートルまで上昇した!!

そのスピードは正に桁違いである。

更にそのまま上昇して、目標高度である500メートルに達する。

「ヒューッ………はええじゃねえか………だが！ 俺様も負けちゃ
いないぜ！ グレンブースターッ!!」

と、置いてけぼりを喰らったかのような様なグレンラガンだったが、次の瞬間には背中のブースターから緑色の噴射を挙げて、紅椿にも負けぬスピードでその後を追って行ったのだった。

旅館・くろがね屋……

大座敷（作戦司令室）では……

「始まりましたわね……」

「気をつけなさいよ、一夏……」

「篠ノ之の奴の事も気になるな」

待機しているセシリア、鈴、ラウラがそう呟く。

「」「」……「」「」

千冬と真耶、リーロンも固唾を呑んで作戦の様子を見守っている。

なお、束は紅椿の調整を終えた後、忽然と姿を消しており、此処には居なかった。

「神谷……………」

心配そうに、手を祈る様な形で組むシャル。

すると……………」

突如、パキーンッ！ と言う何か割れる様な音が響き渡った。

「えっ!?!」

シャルが驚きの声を挙げる。

それは……………」

神谷から貰ったブレスレットが、割れた音だった……………」

「そ、そんな!?!」

「如何した?」

「……………?」

シャルの慌てた様子に気づいた千冬や他のメンバーの視線が、シャルに注がれる。

「か、神谷から貰った……ブレスレットが……」

シャルは狼狽しながら割れたブレスレットを見せる。

「……………」

それを見て言葉を失う一同。

嫌な沈黙が、作戦司令室を支配したのだった……

そんな事が起こっていたと露知らず……

一夏と箒、グレンラガンは……

箒が暫時衛星リンクで確認した銀の福音の位置へと向かっていた。シルバリオ・ゴスベル

「！ 見えたぞ、一夏！ 神谷！」

そして遂に……

紅椿のハイパーセンサーが、銀の福音の姿を捉える。シルバリオ・ゴスベル

「アレが銀の福音か……」シルバリオ・ゴスベル

「へえ〜、結構綺麗じゃねえか」

一夏と神谷が、銀の福音の姿を見て、そんな感想を漏らす。シルバリオ・ゴスベル

「加速するぞ！ 目標に接触するのは10秒後だ！！」

箒がそう言くと、紅椿は更に加速した。

「オイ！ 待てよ！！」

グレンラガンも速度を上げてそれを追う。

「クッ！！」

やがて、一夏が飛翔する箒の紅椿の上に立ちあがり、零落白夜を発動させて雪片式型を構えた。

そして、エネルギー刃の雪片式型が銀の福音シルバリオ・ゴスベルに叩き込まれる……………
かと思われた瞬間!!

突如回転しながら飛来した鎌状の物体が、一夏と箒に命中した!!

「!? うわあああつ!?」

「あああつ!?」

「!? 一夏! 箒!」

すぐに2人の元へ向かおうとするグレンラガン。

すると、一夏と箒を弾き飛ばした物体が、まるでブーメランの様に軌道を変えて、今度はグレンラガンに襲い掛かって来る!

「!? チイツ!!」

グレンラガンは、右腕に2本のドリルを出現させると、その鎌状の物体を弾き飛ばす。

「フツ……………久しぶりだな……………ハダカザル!!」

すると、弾き飛ばされた物体は、雲の中に隠れていたガンメンの手にキャッチされる。

そのガンメンは、かつてクラス代表決定戦を襲撃したガンメン……………

ヴィラルのエンキだった！！

「オメエは！？ 何時かのケダモノ野郎！！」

「ヴィラルだ。覚えておいてもらおう…………… 貴様を地獄へ叩き落とす男の名だ！！」

そう言い放つと、改修されエンキ…………… 『エンキドゥ』は、新たな武器…………… ウィラセブンのアスラツガーの様なブーメラン…………… エンキラツガーを振るって来た！！

「チイツ！！」

迎え撃つ様に、グレンラガンも胸のグレンブーメランを外し、エンキラツガーを受け止める。

「アニキツ！！」

一夏がグレンラガンの援護に行こうとするが……………

「来るんじゃない、一夏！！ オメエは俺と一緒にその銀色野郎を倒せ！！」

エンキドゥと鎧迫り合いをしながら、神谷はそう言い放つ。

「でも！！」

「馬鹿野郎！ オメエの目的を履き違えるんじゃない！ お前が倒さなきゃならぬのはそいつだろ！！」

「一夏！ 何をしている!?!」

するとそこで、1人で銀の福音シルバリオ・ゴスベルの相手をしていた筈からそう声が拳がる。

「クツ！ アニキ！ 気を付けて!?!」

一瞬苦そうな顔をしながらも、一夏は筈の救援に向かった。

「余裕だな……その慢心が命取りになるぞ」

「舐めんじゃねえ！ 俺を誰だと思ってやがる!?!」

ヴィラルの挑発に、グレンラガンは力を入れて、エンキラッガーを弾く。

「クウツ!?!」

「でりゃあああつ!?!」

そして、バランスの崩れたエンキドウにミドルキックを叩き込む。

「グアツ!?!」

引き剥がされるエンキドウ。

「そらよっ!?!」

グレンラガンは、そのエンキドウに向かって、グレンブーメランを投擲する。

「チイツー!!」

エンキドゥは一旦エンキラッガーを戻すと、両腰に会った刀を抜き、グレンブーメランを弾く。

「うおおおおおおおー………っ!!」

だがその間に、グレンラガンはエンキドゥ目掛けて突撃して来ていた。

「超電磁パアアアアアアンチツー!!」

電磁纏った右拳が、エンキドゥに繰り出される。

「ぬっつー!!」

刀を交差させて受け止めるエンキドゥ。

「もう一丁! ブーストキイイイイイイイックツー!!」

そこで続けて、グレンラガンは足裏のブースターを吹かしての高速蹴り、ブーストキックを繰り出す。

「グアツー!」

エンキドゥはまたもブツ飛ばされる。

「如何した? ケダモノ大将!! 前より弱くなったんじゃないのか!」

そんなエンキドウに、神谷は挑発を繰り返した。

「クツ！ この男……………以前よりも螺旋力が上がっている!？」

ヴィラルは短期間で大きく腕を挙げた神谷に驚きを示す。

「……………だが、まだまだ甘いな、ハダカザル」

「? 何いつ!？」

「この場に居るのが俺だけだと思ったか？」

「何だと!？……………!？ しまった!！」

グレンラガンとエンキドウが熱戦を繰り広げていた頃……………

銀の福音シルバ・オ・ユースヘルと戦っていた一夏と箒は……………

正に弾幕と言つべき武装……………銀の鐘シルバ・ベルの前に、苦戦を強いられていた。

「おう！！」

動きが止まった銀の福音に、シルバリオ・ゴスベル一夏が雪片式型で斬り掛かる。

「貰ったあつ！！」

完全にそう思った一夏だったが……………

「ヒヤア〜ハツハツハツ！　そうは行かねえなあ！！」

そう言う声と共に、一夏の背後に突然影が現れた！！

「！？」

「ソレエツ！！」

その影が、手に持っていた巨大な両刃の剣を振るって来る。

「うわあつ！？」

「一夏！？……………おわつ！？」

一夏は弾き飛ばされ、シルバリオ・ゴスベル箒も銀の福音からの反撃に遭つ。

「クソツ！　何だ！？」

如何にか姿勢を取り直すと、自分を斬り付けて来た者の正体を見やる一夏。

「ヒヤハハハハハツ！　ざ〜んね〜ん！　もうちょっとでその首、

落としてやれたつてのによお！」

下種な笑いを響かせそう言う新たな襲撃者……………

白いウナギに手足と翼が生えたかのようなデザインをした某汎用人型
決戦兵器の量産機を思わせるウナギ型ガンメン…………… 『ナギーウ』
がそう言っ来て来た。

「！ ガンメン！！」

「まだ居たのか！！」

身構える2人。

「一夏！！ 大丈夫か！？」

そこへ、グレンラガンが合流する。

「アニキ！」

「コレで3対3だな……………」

すると、エンキドゥも現れ、其々に敵・味方に分かれて集結する形
となった。

「クッ！！（マズイ……………もうエネルギーが残り少ない）」

一夏は再び苦い表情を浮かべる。

またも白式の弱点である燃費の悪さが出てしまい、既にエネルギー

の残りは150を切っていた。

零落白夜で攻撃出来るのは、後1撃が限度である。

「如何するハダカザル？ 跪いて許しを請うてみるか？」

「そりゃあ良いぜ、ヴィラルの旦那！！ オイ、ガキ共！ 跪けよ！！
「ヒヤハハハハハッ！！」

ヴィラルの尻馬に乗る様に、ナギーウがそう言っただけで再び下種な笑いを響かせる。

「チツ……………」

そんなナギーウに、ヴィラルは不快感を露にする。

「ふざけんじゃねえ！ この神谷様が許しなんか請うかよ！！」

当然、神谷はそう反論する。

「貴様如きに負ける私達ではない！」

箒もそう言い放つ。

「ヒヤハハハハハッ！ 強気だね、お嬢ちゃん。新しい玩具を手に入れて、強くなった積りかい？」

「！？ 何っ！？」

「お前なんか何を使おうが、この俺には勝てねえっての！！」

「!!! 貴様あああああああ—————っ!!!」

その瞬間、箒は怒りの形相で、ナギーウへ突撃して行った!!!

「!? 箒!?」

「あの馬鹿!!!」

一夏と神谷が慌てるが、時既に遅く……………

「ハアッ!!!」

「おおっと!!!」

ナギーウに斬り掛かる箒だったが、アツサリとかわされる。

するとそこへ、銀の福音シルバリオ・ゴスベルからの銀の鐘シルバー・ベルが放たれる。

「!!! クウッ!!!」

箒は何とかかわす。

「フンッ!!!」

そこへ今度は、エンキドウのエンキラッガーが投擲される。

「ハアッ!!!」

箒は雨月で弾く。

だが……………

「ヒヤハハハハッ！！ 掛かったな！！」

何時の間にか、ナギーウ、銀の福音シルバリオ・ゴスヘル、エンキドゥによって、周りを取り囲まれてしまっていた。

「！？ し、しまった！？」

慌てる筈。

いつもの彼女ならしなかつたであろうミスだが……………

念願だった専用機を手に入れ、自分でも分からぬ心の慢心が生まれ
てしまい、そこを衝かれたのだ。

「筈！ マズイ！！」

「一夏！ 俺が隙を作る！ その間にアイツを連れて逃げろ！！
敵に背え向けんのは癪だが……………仕方ねえ！！」

「分かった！！」

一夏は筈に向かって飛ぶ。

「うおおおおっ！ ドリラッシュュッ！！」

その次の瞬間に、グレンラガンは全身からミサイルドリルを発射。

ナギーウ、銀の福音シルバリオ・ゴスヘル、エンキドウで次々に爆発させ、辺りを爆煙で包み込んだ!!

「うおっ!? オノレエ!!! 何処だ!?!」

エンキドウと銀の福音シルバリオ・ゴスヘルが、箒の姿を探す。

「箒! 一時撤退だ!!!」

その間に、爆煙を突っ切った一夏が、箒と合流する。

「一夏!? 何を言う! 私はまだやれる!!!」

だが、これでは今までと同じではないかと思った箒は、思わず一夏にそう反論する。

「馬鹿! 状況を考えてものを言え!!!」

思わず箒に向かってそう怒鳴る一夏。

と、その時……

「ヒヒヒヒヒ……丸見えだぜえ、お嬢ちゃん、僕ちゃん!」

爆煙の隙間から、2人の姿を確認していたナギーウが、そう言いながら手に持っていた諸刃の剣を投擲した。

すると!!

その諸刃の剣が、粘土の様に形を変え、先が二又に分かれた槍とな

る！！

「「！？」」

2人が気づいた時には、既に至近距離までに槍が迫っていた。

駄目だ、かわせない……………

一夏と箒がそう思った瞬間……………

その間に割り込み、自らの身体を盾にして、その槍を受け止めた者が居た……………

グレンラガンだ……………

槍は背中まで貫通し、グレンラガンは完全に串刺し状態となった。

「ゴフツ！？」……………」

グレンラガンは、口から盛大に血を吐く。

「ア、アニキ……………？」

「神谷？……………」

目の前の光景が理解出来ず、茫然となる一夏と箒。

「馬鹿めえ！ 他人の事なんか庇いやがってよあ……………っ！！」

それを見たナギーウが、グレンラガンにトドメを刺そうとする。

「!? アニキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ーッ!」

「神谷あああああああああああーっ!」

一夏と篤は、慌ててその後を追う。

だが間に合わずに、グレンラガンの姿は海中へと没した……

「アニキイッ!」

「神谷あつ!」

2人は構わず、そのまま海中へ突入する。

「……………グレンラガン」

何やら複雑そうな様子で、その様を見ていたヴィラルが呟く。

「チキショーッ! あの野郎! 許さねえぞお!! お前の仲間にも浮き出て来た瞬間にトドメを刺してやる!!」

と、翼を傷付けられたナギーウが、怒りの様子を露わに、一夏達が浮かび上がって来るのを待ち構えるが……

「……………行くぞ」

そんなナギーウに向かって、ヴィラルがそう言い放つ。

「ああ！？ 何言っただよ！？」

「作戦の第1段階は終了した……………第2段階へと移行する」

「ふざけんじゃねえよ！ まだアイツ等に！！」

と、ナギーウがそう言った瞬間……………

その首筋に、エンキドウの刀が突き付けられた。

「貴様……………部隊長の俺に逆らうのか？」

「ヒイイツ！？ すいませんでしたあ！！」

途端に平服するナギーウ。

「奴等の事など放っておけ。グレンラガンが居なければ……………所詮、
烏合の衆だ。行くぞ、銀の福音^{シルバリオ・ゴスベル}」

ヴィラルがそう言って、エンキドウがその場から離脱を始めると、
銀の福音^{シルバリオ・ゴスベル}がその後続く。

「ああ！ ちょっと！？ 待つてくだせえ！！」

ナギーウも、慌ててその後について行く。

そして3体が完全に去って行った後……………

「プハアツ！！」

「プハッ!!」

グレンラガンの姿から戻った神谷を抱き抱えた一夏と篤が、海面に這い出した。

「アニキ！ アニキ!! しっかりしてくれ!! アニキ!!」

「神谷!! オイ、神谷!!」

必死に神谷に呼び掛ける一夏と篤。

「……………」

しかし、神谷は死んだ様に目を閉じ、グッタリとしてピクリとも動かなかった……………

周囲の海が、彼の血で赤く染まって行く。

「アニキ！ アニキイイイイイイイイイイ……………」

一夏の悲痛な叫びが……………

虚しく海上に響き渡るのだった……………

^UJ U

第16話『俺とした事が……ドジ踏んじまったぜ……』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

遂に登場、アメリカの第3世代I.S、銀の福音。

この作品では、アニメ版の設定で、無人機という事になります。えっ？ 何故無人機かって？

だって、それなら思いつきり壊しちゃっても問題無いじゃないですか オイ！

機体特性を考え、一夏と篤、そして神谷が撃墜に向かったが……

そこに現れたのはロージエノム軍のヴィラル！

改修したエンキドウでグレンラガンに戦いを挑む。

その間に一夏と篤が福音に向かうが、そちらにもウナギ型ガンメン、ナギーウが立ちはだかる、

ナギーウのモデルは、本文中にもあります通り、EVA量産機です。

苦戦する中、篤が己も気づいていなかった慢心を衝かれ、窮地に陥ってしまう。

救助に向かった一夏ともども、ナギーウの槍が貫こうとしたが、間一髪グレンラガンが割って入る。

しかし、槍はグレンラガンの身体を貫通。

神谷は重症を負ってしまう……

果たして、彼は再び立ち上がる事が出来るのか!?

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第17話 『俺を此処から出しやがれ!!』 (前書き)

ユニークアクセスが2万人を超えました。

皆様、ありがとうございます。

これからも、天元突破インフィニット・ストラトスをよろしくお願い致します。

第17話『俺を此処から出しやがれ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第17話『俺を此処から出しやがれ!!』

くろがね屋から近い病院……

その病院の手術室の前に、一夏達が集まっている。

「……………」

しかし、一同の表情は暗く……

会話も出来ない程の重々しい雰囲気が漂っていた。

「神谷……………」

シャルなどは今にも泣き出しそうな様子であり、ジッと顔を伏せている。

「アニキ……………」

だが、それ以上に酷いのが一夏だ……

目からは光が完全に消えており、影が落ちている不気味な無表情は、まるで死人か幽鬼を思わせる……

あの後……………

重傷を負った神谷は、一夏と筭によって運ばれ……………

陸地へ戻ると同時に、待機していた医療班の応急処置を受け、そのままこの病院へと搬送された。

手術室へ運ばれ、緊急手術が開始されたが……

日が傾いて来た今でさえなお、終わっていない……

彼はもう4時間以上経過している大手術だ。

それだけ……

神谷が負った傷が深かった事を物語っている。

と……

そこで点灯しっぱなしだった手術室のランプが、消えた!!

「……………!?」「……………」

一同がビクリと反応すると、手術着を血で染めたままの執刀医が姿を見せる。

「先生!!」

「アニキは!? アニキは如何なんですか!？」

途端に、シャルと一夏が執刀医に詰め寄った。

篤達も集まって来る。

「手術は終わりましたが、まだ予断の許さない状況です……………」

と、執刀医がそう答えると……………

奥の方から、ストレッチャーに寝かされて運ばれてくる神谷の姿が在った。

人工呼吸器が付けられ、点滴まで打たれている。

正に重傷者と言う雰囲気だった。

「！ アニキ！！」

「神谷！！」

「「「「！！！！」」」」

それに気づいた一夏とシャルが駆け寄り、遅れて篤達も集まる。

「……………」

神谷はまるで死んだ様に眠っている……………」

いつものあの大声も聞けない……………」

力強く、爽やかな笑みも無い……………」

信じられない神谷の姿だった。

「アニキ！ 俺だ！ 一夏だ！！ 目を覚ましてくれよ！！」

「神谷！ 起きてよ！ からかっているんでしょ！ 本当はそんな傷

！ 如何って事ないんでしょ！？ そうだって言うてよ！！」

「落ち着いて下さい！ 重症者なんですよ！！」

思わず神谷の身体に手を伸ばそうとした一夏とシャルを止める看護婦。

神谷はそのまま、集中治療室へと運ばれて行った……………

「…………… 天上さんはご家族は居られないのですかね？」

とそこで、執刀医が残された一夏達にそう言って来た。

「…………… ハイ」

一夏がそれだけ返す。

「そうですか…………… では、貴方達に伝えておきます…………… 天上さんの状態は非常に危険です。もし運良く命が助かったとしても…………… 2度と目を覚まさないかもしれません」

「!?!?」

それを聞いたシャルが膝から崩れ、倒れそうになる。

「！ ちよっ！ ちよっと!?!?」

慌てて鈴が駆け寄って支える。

「そ、そんな…………… 嘘だ……………」

「手は尽くしたのですが……残念です」

狼狽する一夏に、執刀医は頭を下げると、そのまま去って行く。

「……………」

残された一同は、ただ茫然とその場に立ち尽くした。

「……………」

拳を血が出んばかりに握り締める一夏。

「い、一夏……………」

そんな一夏の様子を見た箒が、恐る恐る話し掛ける。

神谷を助ける為に海に突っ込んだ際にリボンを無くしており、黒い長い髪を下ろしており、印象が変わっている。

と……………」

「……………お前のせいだ」

「えっ?……………」

「箒! お前のせいだぞ!!」

戸惑いの声を挙げる箒の両肩に、一夏が掴み掛りながらそう叫んだ
!!

その表情は、様々な感情が入り混じったグチャグチャな表情だった。

「あの時、お前が素直に逃げて居れば！ アニキはあんな事にならなかった！！ お前がアニキをあんな目に遭わせたんだ！！」

「!？」

一夏のその言葉に、箒はショックを受ける。

「一夏さん!？」

「一夏！ 言い過ぎだぞ!!！」

セシリアとラウラがそう言って一夏を箒から引き剥がそうとするが

……………

「煩い！ 邪魔だ!!！」

一夏は乱暴に2人を振り払った!!！

「!？ キヤアツ!？」

「おわっ!？」

セシリアとラウラは、床に尻餅を着いてしまう。

「い、一夏……………」

シャルを支えていた鈴が、驚愕の表情を浮かべる。

箒に八つ当たりの様な言葉を吐いたり、セシリアやラウラを乱暴に振り払うなど、普段の一夏からは想像も出来ない様な振る舞いだっ
た。

……………それ程までに、一夏の心は闇に沈んでいたのだ。

「わ、私は……………」

箒の目から涙が零れ始める。

「……………そこまでしておけ。クソガキが」

と、そこで、そう言う声が響き渡る。

「!?!?」

一夏が振り返ると、そこには無然とした表情を浮かべている千冬の姿が在った。

傍には、オロオロとした様子の真耶も居る。

「千冬姉……………」

「全く……………女に当たるとは……………情けないぞ、一夏。何時からそこまで堕ちた」

千冬は、一夏に向かって容赦無くそう言い放つ。

「お、織斑先生……………」

死んでも良いけど、俺の事は守れって」

とそこで、一夏が起き上がりながらそう言って来た。

「……………ああ、言ったな」

一夏に背を向けたままそう言い放つ千冬。

「だからアニキはあんな事をしたんだ……………俺達を庇って自分が……………」

「今度は私に当たる積りか？ いい加減にしろ！ 貴様が不貞腐れていれば神谷は目を覚ますのか！？ とつとと宿に戻れ！！」

「……………」

千冬がそう言うが、その言葉は一夏に届いていない様で、一夏はどこまでも虚ろで、目の焦点も定まっていなまま、フラフラと歩き出した。

「……………」

「篝さん、行きますわよ……………」

それに行く様に、涙目で立ち尽くしていた篝を、セシリアが連れて行く。

「ホラ、シャルも……………」

「……………」

鈴もシャルに肩を貸して歩き出す。

「……………失礼します、教官」

最後にラウラが、千冬に向かって敬礼した後、去って行った。

「……………」

「織斑先生……………」

残された千冬に声を掛ける真耶。

（馬鹿者め……………死ぬんじゃないぞ……………お前はそんな事で死ぬ男ではないだろう……………）

某・海上にて……………

そこに、銀の福音は居た……………

シルバリオ・ゴスペル

海上から200メートルの上空で、まるで胎児の様な姿勢と取ってジツとしている。

「……………」

その更に上空では、エンキドウが腕組みをして空中に仁王立ちしている。

「なあなあ、部隊長さんよ。何時までこうしてりゃ良いんだ?」

と、その近くで浮遊していたナギーウが、エンキドウに向かって退屈そうに言う。

「奴が第2形態に移行するまでだ……………」

ヴィラルは、腕組みをしたままそう答える。

「何でそんなまどろっこしい真似をすんだよお！ このまま街へ行って、人間共を一気に殺しまくってやるうじゃねえか!！」

「貴様……螺旋王様の命令に逆らう積りか？」

ウイルスは、若干声に凄みを効かせてそう言う。

「べ、別にそんな積りはねえさ……分かった。分かりましたよ」

ナギーウは不満そうにしながらも待機を維持する。

（グレンラガン……天上 神谷……よもやお前との決着がこんな形で着くとはな……だが、私は螺旋王様に仕える戦士……個人の決着よりも、螺旋王様の計画を遂行するのが任務だ）

そしてウイルスは、まるで自分自身に言う様に、そんな事を考えていたのだった……

くろがね屋……

夕日がほぼ沈みかけている中、縁側に座り込んでいる者達が居た……

セシリア、鈴、ラウラだった……

「「「……」」」

重苦しい沈黙を続けながら、3人してジッと縁側に座り込んでいる。

「如何………する？」

ふと、唐突に鈴が、2人に向かってそう尋ねた。

「如何………と言われましても………」

セシリアが戸惑った様な返事を返す。

「教官は指示あるまで待機………そう言っていた。ならばそうするべきだ」

軍人のラウラが冷静な様子でそう言う。

「じゃあ、何でアンタ、アタシ達と一緒に居るのよ？」

「そ、それは……………」

しかし、鈴にその事を指摘されると、戸惑った様子を見せる。

「……………」

その後、再び沈黙する3人。

と、そこへ……………」

「あ、皆…………… 此処に居たんだ」

そう言いながら、シャルが姿を見せた。

「!?!? シャルロット!?!?」

「シャルロットさん!?!? 大丈夫なんですか!?!?」

「無理をするな」

シャルの姿を見た3人が、口々に心配する様な言葉を掛けて来るが……………」

「平気だよ。何時までも落ち込んでたら、神谷に笑われるからね」

シャルはそう言って笑みを浮かべる。

しかしそれは……………」

明らかに無理をしている笑顔だった。

「「「……………」」」

だが、3人には今のシャルに掛ける言葉が見つからない……………

「その通りだ……………」

すると、今度はそう言う言葉と共に、箒が姿を見せた。

「!? 箒!」

「負けたまま終われるか……………アイツをあんなにした原因が私なら……………この問題は私がケリを着ける」

箒は、拳を握り締めてそう語る。

こっちの表情も、危うい表情であった。

「……………どの道、このままジツともして居られないわね」

「そうですね。やるなら、トコトンやりましょう」

「その方が気も紛れるというものか」

それを見た鈴、セシリア、ラウラが立ち上がる。

2人が銀の福音シルバリオ・ゴスヘルにリベンジをしようとしているのは目に見えていた。

しかし、こんな危うい2人を放っておくワケにはいかない。

無理矢理入らされた様なものだが、自分達はグレン団……………

仲間なのだ。

こんな時こそ助け合わなければならない。

そう言う気持ちだが、3人の中に燃え上がって来ていた。

皮肉にも、神谷が倒れた事が、彼女達の中に更なる仲間意識を持たせたのだった。

その後、箒達は近くの海岸へ集結……………

箒を除いた一同は、今日の午前中に送られて来ていたISの追加パッケージをインストールし、ISを強化する。

そして、ラウラがドイツの軍事衛星を使って、海上で浮遊している銀の福音シルバリオ・ゴスヘルの姿を発見した。

いざ出陣せんとしたその瞬間……………

「俺も……………その喧嘩……………」

そう言う台詞と共に、一夏が姿を見せた。

「「「「「!?!?」一夏さん!?!?」「「「「「」

突然現れた一夏の姿に戸惑う5人。

「アイツにリベンジするんだろ……………なら俺も連れて行けよ」

そんな5人の戸惑いなど知らず、一夏は淡々とそう言い放つ。

その表情は変わっておらず、どこまでも虚ろで、目の焦点も定まっていないままである。

「「「「「……………」「「「「「」

だが、5人は一夏が付いて来る事を拒否出来なかった。

いや……………

例え拒否したところで、一夏は勝手に付いて来るだろう……………

ならせめて、自分達の目の届く範囲に置いて、何かあればフォローするしかないだろうと考えた。

しかし……………

この考えが……………

どれだけ甘いものだったか……………

この時、彼女達は気づかなかった……………

某・海上200メートル……

銀の福音は、シルバリオ・ゴスヘル相変わらず同じポーズで沈黙を続けている。

「……………」

「あゝ、暇だ暇だ」

それをジッと見守っているエンドウと、露骨に退屈そうな様子を見せているナギーウ。

「……………ん？」

するとそこで、エンキドウが何かに気づいた様な様子を見せる。

「？ どしたあ？」

ナギーウがそう言った瞬間……………

「うわあああああああああああ—————っ！！」

雄叫びと共に突撃して来た、白式を装着した姿の一夏が、エネルギーブレード状態の雪片式型で、銀の福音シルバリオ・ゴスベルに斬り掛かった！！

銀の福音シルバリオ・ゴスベルはブツ飛ばされ、海面に叩き付けられるが、すぐに姿勢を取り直す。

「一夏さん！ 先行し過ぎです！ もつと連帯を！！」

「煩い！ 先手必勝だ！！ アニキならそうする！！」

遅れてやって来た一同の中で、セシリアが一夏にそう言うが、一夏はそれに応じず、銀の福音シルバリオ・ゴスベルを更に追撃しようとする。

「あ〜ん？ アイツ等、性懲りも無くまた来たのか？ しかも今度は団体で？」

「それが人間と言うものだ……………何度踏み潰しても雑草の様に伸びて来る……………螺旋王様がそう仰っていた」

ナギーウが呆れる様に眩き、ヴィラルがそう言う。

「まあ良いさ。それなら……………2度と立ち上がって来れない様に……………此処で殺してやるぜえ!!! ヒヤッハーツ!!!」

すると、ナギーウは世紀末を思わせる叫びを挙げながら、遅れて来ていた箒達に襲い掛かって行く。

最初に狙いを定めたのは、シャルだった。

「!? うわっ!?!」

シャルは、追加パッケージである防御パッケージ『ガーデン・カーテン』……………実体シールド2枚、エネルギーシールド2枚の内、実体シールドで、ナギーウの諸刃の剣を受け止める。

「お前が……………神谷を……………」

と、シャルはナギーウの姿を見て、怒りを露わにする。

「あ〜ん? お前、あの馬鹿な男の恋人かあ? ヒヤハハハハッ!

! そりゃ悪かったな!!! お前もすぐ同じ場所に送ってやるよお!!!」

「!!! 煩い! 黙れえっ!!!」

ナギーウの言葉に激昂し、シャルは諸刃の剣を弾き返すと、レイン・オブ・サタデイを両手に構え、ナギーウ目掛けて発砲した。

「ヒヤハハハハッ!!! 当たらねえよお!!!」

しかし、ナギーウは高速で飛び回って弾丸をかわす。

「シャルロット！……………！？　クウツ！？」

援護に向かおうとした箒を、エンキラッガーが霞める。

「貴様は俺の相手をしてもらおうか……………」

「獣人ヴィラル……………」

「如何した？　怖気づいたか？　まあ、あんな大失態を演じた後では無理も無かるうがな」

「！　貴様ああああああー……………っ！！」

と、箒は怒りを露わにしてエンキドウに斬り掛かって行った。

「ちよつと！？　箒さん！！」

「マズイ……………全員バラバラだ！　連帯が取れん！！」

セシリアがそう叫び、ラウラが苦い顔をしながら言い放つ。

「クツ！　仕方ないわ……………其々にフォローするわよ！　ラウラはシャルロットに！　セシリアは一夏！　アタシは箒にフォローに回るわ！」

と、鈴が咄嗟にそう判断を下す。

「分かりましたわ！」

「了解した!!！」

すぐにセシリアが一夏、ラウラがシャルの元へと飛んだ。

「全く………こんな事になるなんて………」

鈴もそつ眩き、幕の元へと向かう。

くろがね屋・大座敷……

一夏達が再び銀の福音達シルバリオ・ゴスベルに再戦を挑んだのは、すぐにも判明した。

「あ、あの子達!？」

「クツ！ 馬鹿共が……山田くん！ すぐにアイツ等呼び戻せ
!！」

「ハ、ハイ!!」

真耶がすぐに、一夏達へと通信を送ろうとする。

しかし……

「だ、駄目です！ 妨害電波です！！ 通信が繋がりません!!」

「ならば！ 封鎖を行っていた教師部隊を向かわせて……」

「それも無理よ」

千冬の言葉を遮り、リーロンがその声を挙げる。

「今連絡が入ったけど、封鎖を行っていた教師部隊をガンメン達が襲撃してるって。とても手一杯で一夏くん達の方には回れないそう
よ」

「何だと!？」

「そんな!？」

千冬が驚き、真耶が悲鳴の様な声を挙げる。

「クツ！ ころなれば私が出る！！！」

と、千冬がそう言つと、作戦司令室を後にしようとする。

「止めなさい。幾らブリュンヒルデの貴方でも、専用機が無いんじや無理よ」

しかし、リーロンがそう言つて千冬を止めた。

「じゃあ如何すれば良いんだ！？」

千冬は珍しく、焦りと苛立ちの籠った声でそう言つ。

「……………賭けるしかないわね」

「賭ける？ 一体何にだ！？」

「神谷によ……………」

リーロンは、不敵に笑いながらそう言つた……………

???.
.....

「ん？」

神谷が意識を取り戻したかと思うと、周囲全てが暗闇の空間の中に居た。

「何処だ？ 此処は？」

神谷は自分が置かれている状況が分からず、混乱する。

「確か俺は..... 銀色野郎とガンメン野郎達と戦ってて.....」

意識を失う前の事を思い出そうとしている神谷。

「それで、一夏と筭の事を庇って..... ひょっとして..... 俺は死

んだのか?」

そこで神谷は、そういう考えに至る。

「そうか……………やれやれ……………短い人生だったぜ」

神谷は溜息を吐きながらそう呟く。

死んだかもしれないと言うのに、あまり悲壮感や絶望は感じられなかった。

「まっ、悪くはなかったな……………一夏やシャル、色んな連中とも出会えたしよ……………散り際は潔くつてのが男つてもんだ」

フツと笑ってそう言う。

すると……………

『うわあああああああああ—————っ!』

神谷以外誰も居ない筈の空間に、何者かの声が響いて来た。

「!?!? この声は!?!……………一夏!?!」

そこで神谷が驚きの声を挙げると……………

『一夏さん! 落ち着いて下さい! もっと冷静に!』

『煩い! このぐらいアニキならなんとかしてたさ!』

目の前に、一夏とセシリアが銀の福音と戦っている様子が映し出される。シルバリオ・ゴスヘル

しかし、その様子は劣勢そのものだった。

無闇矢鱈と突撃を繰り返す一夏の白式はどんどんボロボロになって行き、フォローしているセシリアのブルー・ティアーズの損傷も酷い。

「あの馬鹿！ 何やってやがるんだ！！ しっかりしろ！ 一夏！」

その様子を見た神谷が思わずその声を挙げるが、一夏には聞こえてないらしく、無謀な突撃を繰り返す。

するとそこで、映像が切り替わり……

今度は、ナギーウとエンキドウに苦戦しているシャル、ラウラ、篝、鈴の姿が映し出される。

「！？ アイツ等まで！ オイ！ お前等！！」

とそこで、神谷がその映像に向かって手を伸ばすと、映像は煙の様に消えてしまい……

神谷の手は、何も無い空中を掴む。

「！？ チキショーッ！ オイ！ 誰か居ねえのか！？ 俺を此処から出しやがれ……！」

神谷がそう騒ぎ立てる。

と、その時……

「……………神谷」

突如として今度は、自分を呼ぶ声を聞こえて来た。

「!?!?」

神谷は驚愕を露わにする。

何故なら……

その声は、自分が良く知る人物の声だったからだ。

「こ、この声は!?!?……………まさか!?!?」

神谷が驚きの声と共に、声が聞こえて来た後ろの方向を振り返ると、そこには……

「神谷……………」

そこには、白衣を来た神谷と良く似た中年位の男の姿が在った。

「お、親父……………」

神谷は驚愕したまま、漸くの思いでそれだけ呟く。

そう……………

今神谷の目の前に居るその男は……

死んだ筈の神谷の父親……

あの篠ノ之 束と並ぶ天才と評された世界的な権威……

『天上 譲二』博士の姿だった……

つづく

第17話『俺を此処から出しやがれ!!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

福音とロージェノム軍によって重傷を負った神谷。

死の瀬戸際に立たされた神谷を見て、一夏とシャル、そしてグレン団は意気消沈する……………

中でも一夏の状態は酷く、仲間に当り散らし、死人の様な表情を浮かべるばかりだった。

だが、グレン団メンバーはこのままでは終われぬと、福音とロージェノム軍に再戦を掛ける。

しかし、一夏は暴走し、シャルと箒も、ロージェノム軍を前に自分の気持ちを抑えられなくなっていた。

チームワーク最悪の状態により、絶体絶命のグレン団。

そんな中……………

生と死との狭間を彷徨い、一夏達の様子を知った神谷の前に現れたのは……………

死んだ筈の父親『天上 譲二』博士だった。

神谷が死に掛けている事で、一夏が暴走です。

状態としましては、カミナを失った直後のシモンですね。

果たして立ち直る事が出来るのか？

そして、生死の狭間を彷徨う神谷の前に現れた父親の思惑は!？

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第18話『ワリイな、親父……もう行くぜ』（前書き）

お気に入り登録件数が200件を突破しました。

ありがとうございます。

これからも、『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく
お願いします。

第18話『ワリイな、親父……もう行くぜ』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第18話『ワリイな、親父……もう行くぜ』

「……っ!!」

まるで何処そのロボットを素手で破壊する師匠の様な台詞を、倒れたままの神谷に向かって言い放つ譲二。

「ぐ、う……このクソ親父！ 何しやがるう!!」

対する神谷も、起き上がるがいなや、ドロップキックで反撃!!

「ぐおおっ!? ええい！ 馬鹿息子があああああああああああああ
あ……っ!!」

すると譲二は、ドロップキックを喰らいながらも、その神谷の両足を掴み、ジャイアントスイングを掛けた!

「おおああああああああ……っ!?」

暫く回された後、放り投げられる神谷。

「クウツ！ クソ親父!!」

「馬鹿息子があ!!」

「クソ親父!!」

「馬鹿息子があ!!」

「クソ親父!!」

「馬鹿息子があ!!」

そして暫くの間、お互いに罵声を浴びせながら、殴り合いを展開するのだった……

「ゼエ…………ゼエ…………ゼエ…………ゼエ…………」

「ハア…………ハア…………ハア…………ハア…………」

やがて互いに力尽き、大の字になって寝転んでいた。

「フフフ…………やるな…………流石我が息子だ」

「うるせえ…………いきなり殴って着やがって…………一体何だっただよ…………」

寝転んだまま不敵に笑ってそう言う譲二に、神谷は呆れた様な言葉を漏らす。

「何だっただよか……………そう言う貴様は一体何をしているんだ？」

「えっ？……………」

「お前の仲間達が危機に陥っているのだぞ。それなのに、そのお前がこんな所で何をしている?」

「それは……………」

神谷は言葉に詰まった。

「早く行け。お前の事を待っている連中が居るだろう」

「……………」

神谷は黙り込む。

その脳裏には、一夏やシャル達の姿が思い起こされる……………

「……………そうだな……………俺は……………こんな所でグズグズしているワケには行かねえんだ!!!」

そう叫びを挙げた瞬間!!!

その姿が緑色の光に包まれて、グレンラガンとなった!!!

そして、閉じていたグレンウイングを展開する!!!

「ワリイな、親父……………もう行くぜ」

「フンッ……………とつと行けと言っているだろうが、この馬鹿息子が」

そう言って来る神谷に、譲二はぶっきら棒にそう言い放つ。

「言ってくれるぜ……………じゃあな、親父」

神谷が苦笑いすると、グレンウイングから緑色の炎を吹き上げ、真上へと飛んで行った。

「……………スマンな、神谷……………お前には苦勞を掛けてばかりだ」

と、グレンラガンの姿が小さくなると、譲二は呟く様にそう言う。

「だが、この世界を守るのは……………お前達しかいないんだ……………頼んだぞ……………息子よ」

上昇して行くグレンラガンを見送りながら、譲二の姿は光に包まれて消えて行ったのだった……………

くろがね屋から近い病院……………

突如として、病院内に振動が走った！！

「キヤアアツ！？」

「何事だ！？」

看護師や医師達が慌てる。

「せ、先生！ 大変です！！ 天上さんが！！」

とそこで、集中治療室に入れられている神谷の担当看護師がその声を挙げた。

「！？ 如何かしたのか！？」

先程の振動で容体が急変したのかと、慌てて集中治療室に駆け付ける担当医師。

すると、そこには……………

ベッドに寝ている筈の神谷の姿が無く……………

集中治療室の壁に、大穴が空いている光景が広がっていた……

「……………」

駆け付けた医師は状況が理解出来ず……

ただ茫然となるしかなかったのだ……

くろがね屋・大座敷……………

「まだ通信は回復しないのか!？」

「だ、駄目です! E C C Mも効果がありません!！」

作戦司令室は相変わらず喧騒に包まれている。

一夏達との通信は相変わらず繋がらず、教師部隊も次々に現れるガ
ンメンの攻撃に曝され、救援に向かえずに居た。

(このままでは、一夏達が……………)

千冬の心にドンドンと焦りが募って行く……………

と、その時……………

真耶が座って居る席の通信機が鳴り響いた。

「あ、ハイ! I S学園……………!?! ええっ!？」

それを受けた真耶が驚きの声を挙げる。

「? 如何した? 山田くん?」

「た、大変です! 織斑先生!! て、天上くんが!! 天上くん
が病院から消えたそうです!!」

「!?!? 何っ!?!」

真耶の報告に、千冬は驚きの声を挙げる。

「馬鹿な！ アイツは動ける様な状態じゃないぞ！！ 消えたと言
うのは如何言う事だ！？」

「わ、分かりません！ 病院からは消えたとだけしか……………」
混乱する千冬と真耶。

「…………… やっぱりね…………… やっぱりあの子は天上博士の息子ね……………
……………」

すると、リーロンが1人冷静にそう呟いた。

「！？ リーロンさん！？」

「何を言っているんだ！？」

「見なさい……………」

戸惑う真耶と千冬に、リーロンは戦略モニターを指差す。

するとそこには……………

一夏達の元へと凄まじいスピードで向かっている1つの光点があった。

IFFには味方と表示され、グレンラガンの文字が浮かんでいる。

「！？ グレンラガン！！」

「まさか！？」

「それで」そ……………螺旋の戦士よ……………」

某・海上の小島……………」

「うわあああああああああ——————っ!?!?」

銀の福音シルバリオ・ゴスヘルの攻撃をまともに喰らった一夏が墜落し、近くにあった小島の海岸へと落下した。

「!?!? 何っ!?!?」

不意打ち気味に繰り出されたその攻撃を、ナギーウはかわせず、顔面に直撃を受ける!!

「!?!? 何っ!?!?」

「やった!?!?」

ヴィラルが驚きの声を挙げ、鈴が思わずその声を挙げるが……

「ぎゅんねゅん」

ナギーウから陽気な声が挙がる。

シャルが放ったブレードの1撃は、ナギーウの歯に挟まれて、止められていた。

「!?!? そ、そんな!?!?」

「フンッ!?!?」

シャルが驚きの声を挙げた瞬間、ナギーウはブレードの刃を噛み砕いてしまう!!

「!?!? あっっ!?!?」

そして更に、諸刃の剣を持っていない左手で、シャルの首を掴んだ!!

「！ シャルロット！！」

「動くな！！」

箒が助けに向かおうとするが、ナギーウが叫んで制する。

「動いたらこの小娘の首……………押し折っちゃうよ」

ナギーウはそう言い、シャルの首を握る力を上げる。

「あ……………う……………」

シャルの顔から、見る見る内に血の気が引き、青褪めて行く。

「く……………う……………」

それを受けて、箒は愚か、他のメンバーまで動けなくなる。

しかし……………

「……………」

そんな中で立ち上がり、ナギーウ達に向かって行く者が居た。

「アニキになるんだ……………俺がアニキになるんだ……………」

一夏だ。

焦点の定まっていない目で、ブツブツと呟いた虚ろな様子で、ドン

ドンとナギーウ達の方へ歩を進めて行く。

「んん？ オイ、お前。今言ったのが聞こえなかったのか？」

「アニキになるんだ……俺がアニキになるんだ……」

そしてそのまま、雪片式型を構える。

「オ、オイ!？」

「!？ まさか!？」

その様子になギーウが狼狽し、ウイルスも驚きを示す。

「!？ まさか!？」

「一夏さん!？」

「一夏!？」

「一夏！ 駄目だあ!!!」

ラウラ、セシリア、鈴、箒からも慌てた声が飛ぶ。

「うわあああああああ……」

しかし、一夏はシャルが居るのにも構わず、雪片式型をナギーウ目掛けて振るおつとした!!

「チイツ！ このイカレポンチがあ!!」

ナギーウはそう言い、シャルを盾にする。

このままではシャルが!?

……と、その時!!

「一夏あつ!!!」

突如、一夏を呼ぶ声が響き渡った。

「……………えっ!?!」

その声に反応した一夏が動きを止める。

「!?! 何っ!?!」

「何だと!?!」

ヴィラルとナギーウも驚きを示す。

「!?! この声は!?!」

「そんな!?! 嘘でしょ!?!」

「ありえん!!!」

「しかし、この声は!?!」

セシリア、鈴、ラウラ、箒も驚愕の様子を示す。

「……………神……………谷……………?」

そして、意識が飛びかけていたシャルがそう呟いた時……………

海面を斬り裂きながらの低空飛行で、一夏達の方へと猛スピードで飛んで来る緑色の光の塊が姿を現した!!

「!?!? 何だ!?!?」

「ああっ!?!?」

その光の塊に慌てるヴィラルとナギーウ。

その間にも光の塊はスピードを上げ、シャルを掴んでいるナギーウと、その眼前で静止していた一夏の元へと迫る。

「えっ!?!? えっ!?!?」

一夏が戸惑いを露わにした瞬間……………

「歯あ食いしばれえっ!?!?」

その光の塊の中から腕が飛び出して来て、一夏を思いっきり殴り飛ばした!!

「!?!? ぶべはあああああああ—————っ!?!?」

何か光る物を撒き散らしながら、錐揉み回転しながら飛んで行く一夏。

「せりゃあああああああああーーーーーっ!!」

更に空かさず、今度は黒い『くの字』物体を握った腕が飛び出して来て、シャルの首を握っていたナギーウの腕を斬り落とす!!

「!?!? ぎゃあああああああああーーーーーっ!?!?」

切断面からオイルと血を撒き散らし、ナギーウは悲鳴を挙げる。

「あ……………」

そして解放されてシャルを、その腕が受け止めた瞬間……………

緑色の光が弾けて、中から……………

グレンラガンが姿を現した!!

「!!! グレンラガン!!!」

その姿を認め、ヴィラルは驚きの声を挙げる。

「! やっぱり!!!」

「まさか!?! ホントに!?!」

「そんな馬鹿な!?!」

「神谷!!!」

鈴、セシリア、ラウラ、箒も驚きの声を挙げる。

「ア、アニキ？……………」

「神谷？……………」

殴り飛ばされた一夏と、その腕に抱き抱えられているシャルなど、驚愕の余り、目が点になっていた。

「おう！ お前等……………待たせたな！」

グレンラガン……………神谷は、そんな一同にそう言い放った後、一夏の方を見る。

「一夏……………目え覚めたか？」

「えっ？」

「お前が迷ったら、俺が必ず殴りに行く。だから安心しろ……………お前の傍には俺が居る！！！」

「！ そうか……………そうだったな……………ゴメンよ、アニキ！ 俺……………如何かしてたぜ！！！」

一夏はそう言うと、不敵に笑いながら立ち上がった。

「か、神谷……………あの……………そろそろ放してくれないかな？」

とそこで、抱えられたままだったシャルがそう言う。

「そうだね……………神谷なんだし……………」

「確かに……………アンタならしかねないわね……………」

「何故か納得してしまいますわ……………」

「信じ難いが……………信じるしかないな……………」

「まあ、神谷だしな……………」

何故かすぐに納得した様子になるのだった。

「テメエ等あ！！ 何時までくっっちゃべってんだあ！！」

とそこで、腕を斬り落とされたナギーウが、そう絶叫を挙げる。

「あん？」

そのナギーウの声に、神谷は気怠そうな様子で答える。

「んだよ？ まだ居たのか？」

「貴様あつ！ 完全に舐めているなあ！！」

激昂するナギーウだったが、神谷は何処に吹く風だ。

「とっと帰れば見逃してやったのによお……………」

「ふざけるなあ！ 何様の積りだ貴様あ！！」

と、ナギーウがそう怒鳴った瞬間……

「ヘッ！ 何様の積りかって？ そんなに聞きたきゃ教えてやるぜ
！！ 行くぜ、お前等！！」

「……………!? おうつ！！」「……………」

突然呼ばれ、一瞬戸惑った一夏達だったが、すぐにグレンラガンの
傍に集まり、仁王立ちした！！

「無茶で無謀と笑われようと！」

「意地が支えのケンカ道！」

セシリアと鈴が叫ぶ！

「壁があつたら殴つて壊す！」

「道が無ければ、この手で造る！」

ラウラと篝も、続く様に吠える！

「心のマグマが炎と燃える！」

「俺たちや無敵の！」

「グレン団！！」

そして、シャル、一夏、神谷がそう見得を切る！！

「俺を！」

「…………俺（私、わたくし、アタシ、僕）達を！！」「…………」

「…………誰だと思っていやがるっ！！」「…………」

最後の全員がそう声を張り上げた瞬間…………

その背後に火山の噴火が見えた気がした。

「…………っ！？」

その迫力の前に、ナギーウは怯む。

無人機である筈の銀の福音も、まるで恐怖している様な様子を見せる。
シルバリオ・ゴスヘル

「フ、フフフ…………ハハハハ…………アハハハハハッ！！」

しかし、只1人…………

ヴィラルだけは、そんなグレンラガンの姿を見て、笑い声を挙げ始めた。

「！？ぶ、部隊長？」

「それでこそだ！ それでこそだぞ、グレンラガン！！ そうでなければ倒し甲斐が無い！！」

戸惑うナギーウを尻目に、ヴィラルは実に楽しそうな様子でそう言

い放つ。

「言ってくれるじゃねえか！ ケダモノ大将！……いや！ ヴィラルー！！ だがな！……俺はテムエー達には絶対に負けねえ！！」
それを聞いた神谷は、ヴィラルに向かってそう言い返す！！

「面白い！ 行くぞお！！ 神谷あああああああー
ー……っ！！」

ヴィラルがそう咆哮を挙げると、エンキドゥは両手に剣を握り、グレンラガンに向かって斬り掛かって来た！！

「上等だあ！！」

神谷もそう叫び返し、グレンラガンは片手に2本つつ、計4本のドリルを出現させ、エンキドゥへ突撃する！！

「うおおおおおおおー……っ！！」

ドリルと剣がぶつかり合い、激しく火花と散らす。

そのままの状態で、グレンラガンとエンキドゥは、真上に向かって上昇し始めた！！

「ええいつ！ こうなりやヤケクソだあ！！ とことんやってやらあ！！ シャクーツ！！」

するとその直後、ナギーウがそう叫んだかと思うと……

それを見て、後続のシャクー軍団が動きを止める。

「此処は私達にお任せを!!」

「アンタ達は神谷の援護に行きなさい!!」

「任せるぞ!!」

そしてそう言いながら、セシリア、鈴、ラウラの3人が、一夏達の前に出た。

「大丈夫なのか!？」

「言った筈ですわよ……………」

「アタシ達を誰だと思ってるの?」

「此処は任せて……………早く行け!!」

一夏がそう言うが、セシリア、鈴、ラウラは不敵に笑ってそう返す。

「! 頼んだぞ!!」

「すまない! 任せた!!」

「気を付けて!!」

それを聞いた一夏、箒、シャルは、神谷とヴィラル達を追って、上昇して行く。

「無駄だつてつつつてんだろ!!」

グレンラガンは、ドリルを出現させた右手で弾く。

「如何かな!？」

しかしそこで、エンキドゥは弾かれたエンキラッガー目掛けてエンキラウンターを発射!

エンキラッガーが弾かれて軌道が変わり、再度グレンラガンへと向かった!!

「!?!? 何っ!?!?.....!?!? おうわっ!?!?」

意表を衝かれ、今度は喰らってしまうグレンラガン。

「へッ! やるじゃねえか.....!?!? ヴィラル!!」

姿勢を取り直すと、口の端を拭う様な仕草を見せて、ニヤリと笑う。

「勝負はまだこれからだぞ! 神谷あああああああああー
—————っ!!」

ヴィラルがそう叫ぶと、エンキドゥが残り一本となった剣を両手で握り、グレンラガンより高度を取ったかと思うと、上段に構えてから一気に急降下して斬り掛かって来た!!

落下速度と合わせた剣撃が、グレンラガンに迫る.....

「……………」

だが、グレンラガンは回避する素振りを見せない。

「!? 何故避けん！ 諦めたか!?!」

ヴィラルは驚きながらも、グレンラガン目掛けて渾身の一振りを繰り出す。

と、その瞬間!!

「! そこだあつ!!」

グレンラガンがそう叫んで、迫る剣の刀身を、両手で左右から挟み込む様に押さえつけて受け止めた!!

真剣白刃取りだ!!

「!? 何いつ!!」

「貰ったぜ!!」

更にその次の瞬間には、両腕をドリルに変えて、刀身をバラバラにする!!

「ぬうあつ!!?」

「ダブルドリルクラアアアアアアアアアッシュッ!!」

体勢を崩したエンキドウに、グレンラガンは両手のドリルを思いっ

だが、銀シルバリオ・ゴスヘルの福音は素早く態勢を立て直すと、一夏に向かって集束させた銀の鐘シルバール・ベルを放つ！！

「！！ どりゃあああつ！！」

眼前まで迫った集束型銀の鐘シルバール・ベルを、一夏は雪片式型で斬り捨てる。

集束型銀の鐘シルバール・ベルは雲散するが、同時に白式もエネルギーが急激に減り、とうとう雪片式型がエネルギーブレード状態を維持出来なくなった。

「クソツ！ またエネルギー切れかよ！！」

悪態を吐く様に一夏が言った瞬間、銀の福音シルバリオ・ゴスヘルが突撃して来る！！

「！？ マズイ！！」

「やらせん！！」

だが、箒が放ったビット攻撃で弾かれる。

その間に、箒が一夏の前に出る。

「箒！」

「私はもう間違えない……………力の使い方を……………今此処でそれを再び誓う！！ そして……………一夏と共に戦う！ 一夏の背中が私を守る！！」

と、箒がそう叫んだ瞬間……………

紅椿が金色の輝きを放ち始めた。

「!?!? コレは!?!?」

箒が驚いていると、目の前にディスプレイが展開して、『絢爛舞踏』
と言つ文字が表示される。

そして、減っていたエネルギーがみるみる回復し、一気に満タンに
なった!!

「エネルギーが回復!?!? 『絢爛舞踏』……………コレが、紅椿の単一^{ワンオ}
仕様能力!?!?……………一夏! 受け取れ!?!?」

箒がそう叫んで、一夏に向かって手を伸ばす。

「!?!? お、おう!?!?」

戸惑いながらもその手を取る一夏。

すると、紅椿を通じて、回復したエネルギーが流れ込んだ!

「!?!? エネルギーが!?!?」

白式のエネルギーが、満タンにまで回復する!!

「凄い……………凄いぜ、箒!?!?」

「当然だ! 私を誰だと思っている!?!?」

と、一夏と箒がそう言っていると……

銀の福音シルバリオ・ゴスベルが再び、銀の鐘シルバー・ベルを発射して来る。

「!?!」

「箒！ 今度は俺が守る番だ!!」

すると一夏が、そう言って箒の前に出て、再びエネルギーブレード化した雪片式型で、銀の鐘シルバー・ベルを掻き消す!!

「そうだよ……昔も言われたっけ……俺はアニキじゃない！
千冬姉でもない！ 俺は俺だ！ 織斑 一夏だ!!」

そして、銀の福音シルバリオ・ゴスベルに向かってそう啖呵を切った。

その瞬間……

今度は、白式が金色に輝き出した……

「一夏!?!」

「うおおおおおおおおおお————っ！ ハアツ!!」

箒が驚きの声を挙げた瞬間、一夏の気合の音が響き渡って光が弾け

……

白式は、第2形態移行セカンド・シフトした姿……『雪羅』へと姿を変えた。

「!?! 第2形態移行!!」

「ハアアアアッ！ ハアッ！！」

そして一夏が気合を入れた瞬間！！

銀の福音シルバリオ・ゴスベルの頭が握り潰された！！

そして残った身体も、連鎖して爆散した！！

残骸が海へと落下して行く……………

雪羅の手から輝きが消え、放熱での湯気が上がる。

「ISファイト国際条約第1条……………頭部を破壊された者は失格となる」

「いや、そんな条約無いぞ……………」

キラッとした表情でそう言う一夏に、そうツッコミを入れる筈だった。

『合体』と言われて戸惑うばかりのシャル。

「来い！ シャル！！」

そんなシャルに向かって、グレンラガンは右手を伸ばした。

「！ うん！！」

それを見たシャルは、迷いを捨て、グレンラガンの右手を取る。

その瞬間……………

グレンラガンとシャルの姿が、緑色の光に包まれた！！

「！？ な、何だあっ！？」

ナギーウが動きを止める。

そしてその光が弾けた瞬間……………

『グレンラガンがラファール・リヴァイヴ・カスタムIEIを装着している』様な姿のマシンが現れた！！

「男の魂、炎と燃えりゃあ！！」

「疾風乱れ、吹き荒れる！！」

「熱風合体！！」

そこで『グレンラガンがラファール・リヴァイヴ・カスタムIEIを

装着している』様な姿のマシンがポーズを取る！！

「『ラファールラガン』！！」

「俺を！」

「僕を！」

「誰だと思っていやがる（るの）！！」

神谷とシャルの叫びが木霊する。

「ぬぐうつ！？」

その気迫の前に、ナギーウは僅かに怯む。

「す、凄い！？ ホントに合体した！？」

『グレンラガンがラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを装着している』様な姿のマシン……『ラファールラガン』のボディの顔の口が動き、シャルの声が発せられる。

「当然だろ！！ 俺とグレンラガンに不可能って文字はねえっ！！」

頭部の顔の口からは神谷の声が発せられる。

「前に一夏からチラツと聞いたけど……まさかホントだったなんて」

まだ信じられない様な様子を見せるシャルだったが……

(…………アレ？ ちょっと待って？…………冷静に考えると…………僕
…………凄い事してる？…………)

やがてそんな考えに至り始める。

(だ、だって！ 僕今…………神谷と…………が、『合体』してるんだ
もん！！)

身体中の血液が一気に沸騰するかの様な感覚に襲われるシャル。

「あう、あう、あう……………」

シャルの口から、意味不明な言葉が漏れ始める…………

「ええい！ ハツタリをおっ！！」

とそこで、ナギーウがそう言って、諸刃の剣で斬り掛かって来る。

「フツ……………」

だが、ラファールラガンは、諸刃の剣の刃を、右の掌で掴んで受け止める。

「！？ 何いつ！？」

「ハツタリか如何か……………今見せてやるぜえ！！」

神谷がそう叫んだ瞬間！！

ラファールラガンの左手に、レイン・オブ・サタデイが出現！！

そして、至近距離から散弾を連射で浴びせた！！

「！？ ぐぎゃ ああああああーーーーーっ！！
？」

忽ち身体中蜂の巣にされるナギーウ。

至近距離で散弾……………しかも弾丸1発1発に螺旋力が籠められているのだ。

堪ったものではない。

「コイツウウウウウウウーーーーーッ！！」

距離が離れたナギーウは、怒りのままに諸刃の剣を投擲する。

諸刃の剣は、二又に分かれた槍へと変化する。

「無駄無駄無駄あああああーーーーーっ！！」

だが、ラファールラガンがそう叫んで右の拳を繰り出すと、その拳がドリルと化し、二又に分かれた槍を粉々にした！！

「ぬがああっ！？」

「シャル！！ トドメ、行くぞお！！」

「！ う、うん！！」

ガッツポーズを取るグレンラガンに、笑顔で答えるシャル。

「アニキ！」

「神谷！」

とそこへ、銀の福音シルバリオ・ゴスベルを片付けた一夏と神谷がやって来る。

更に、シャクー軍団を片付けたセシリア、鈴、ラウラの姿も姿を見せる。

全員が笑顔で頷き合う。

そこで……

日の出が始まり、朝日がグレンラガン達の姿を照らし出し始めた。

「終わったな……」

「ああ……漸くな」

筈と一夏がそう言い合う。

「……うっし……帰るかー！」

「「「「「おっっ！」「「「「「」

そして、神谷がそう言い……

グレンラガンと6機のE.S.達は……

ウイング隊形を組み、白い飛行機雲を引きながら、くろがね屋へと
帰還して行ったのだった……

くろがね

第18話『ワリイな、親父……………もう行くぜ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

生と死の狭間で会合した父親に叱咤され、見事復活を果たす神谷。暴走する一夏をブン殴って目を覚まさせ、シャル達を救出。

堂々の名乗りを挙げて、グレン団完全復活！！

更に、ワンオフ・アビリティの単一仕様能力『絢爛舞踏』を発動させる事に成功。

そして、そのエネルギーを受け取り、吹っ切れた一夏の意味を受け取った白式が第2形態セカンド・シフト移行。

新兵装『雪羅』によって編み出された必殺技……………『シャイニングフィンガー』で福音を見事撃破！！

そして、下衆ながらも高い戦闘力を持つナギーウに苦戦するシャルだったが、そこで何と！！

白式とグレンラガンが合体した様に、グレンラガンとラファール・リヴァイヴ・カスタムEEIが合体！！

ラファールラガンとなった！！

必殺の全弾叩き込みと、ドリルパイルバンカーでの攻撃……………ドリル・テムペート（ドリルの嵐）で見事ナギーウを撃破するのだった。

やっちゃんいました……………

シャイニングフィンガー使っちゃんいました。

いや、一夏の白式がパワーアップして付いた新武装が多機能武装腕なのを見た瞬間……………

『なら、シャイニングフィンガーが使えても良いじゃないか！！』
と思っまして。

そして!!

グレンラガンとISの合体バリエーションの1つ!

ラファール・リヴァイヴ・カスタムIEIとの合体である、ラファールラガンの登場です。

実は合体するのは白式とだけではない事は、最初の方から決めてまして。

これからも、色々なISとの合体が出る予定ですので、楽しみにしていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第19話『俺らしく行動で示させてもらっぜ』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第19話『俺らしく行動で示させてもらっぜ』

くろがね屋……………

玄関前……………

「作戦完了!……………とりたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を起こした」

銀の福音達との戦闘から帰って来た一夏を迎えたのは、千冬の説教だった。

「……………ハイ!!」「……………」

「帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、その積りでいろ」

「……………分かりました!!」「……………」

千冬の姿を真っ直ぐに見据えながら、一夏達は揃って返事を返す。

その様には、反省の色は見えているが、間違った事をしたと言う様な様子は無く、全員が堂々と胸を張っている。

「……………ハア……………悪びれた様子も無しか」

「あゝ、織斑先生。もうそろそろこの辺で……………皆、疲れてる筈ですし」

とそこで、横で様子を見守っていた真耶がそう言って来た。

「……………まあ……………良くやった……………と褒めておいてやるよ。全員、良く帰って来たな。今日はゆっくり休め」

「……………!?!?」「……………」

そこで一夏達が一斉に驚いた顔をする。

「? 何だ?」

それに気づいた千冬がそう言うと、一夏達は後ろを向いて円陣を組む。

(あの千冬姉が人を褒めるなんて……………)

(オマケに優しいわ……………)

(これは何か起こるしれん……………)

ヒソヒソとそんな話を話し合う一夏達。

しかし、その声は千冬に丸聞こえだった。

「何だその態度は!?! 私だって褒めるぐらいの事はする!?!」

「……………すみませんでしたーっ!?!」「……………」

千冬の怒りの声が挙がり、一夏達は一斉に頭を下げる。

「クウツ! ホントにお前等は……………天上から要らん影響ばかり受けおって……………ん?」

その神谷はと言つと……………

「（ガツガツガツガツ！）御代わり！！」

「ハイハイ、ただいま……………」

差し出された神谷の茶碗を取ると、新たに御飯をよそり始める菊ノ助。

（天上くんって確か……………入院してたんじゃ）

（それがもう退院したらしいよ。お医者さんも驚いていてたつて……………）

（気合があれば怪我也治るって言ってたけど……………もうそれ人間じゃないよお）

そんな神谷の姿を見て、同じく朝食を取っていた生徒達は、そんなヒソヒソ話を交わす。

と、その時……………

廊下を何者かが走つて来る音が響いて来た……………

「神谷あああああああ—————っ！！」

そして、怒声と共に大座敷の襖が開いて、怒りの形相を浮かべた千冬が姿を見せた。

「よう、ブラコンアネキ。何やってんだ？ 早くしねえと、オメエの分も食っちまうぞ？」

常人ならば裸足で逃げ出すところだが、神谷はそんな千冬の姿を見ても、堂々としながらそう言い放つ。

「貴様はあああああああああーーーーーっ！！！」

「お、織斑先生！！」

「千冬姉！ 落ち着いて！！！」

今にも暴れ出しそうになった千冬を、後から追い掛けて来ていた真耶と千冬が止める。

「……………」

箒やシャル達は、大座敷の襖からにトーテムポールの様になってその様子を覗いている。

「お前はいつもいつもお！！……………！！？ うっ！！？」

と、千冬がそう叫んだ瞬間……………

突然糸が切れた操り人形の様にガクリとなった。

「！？ 織斑先生！？」

「千冬姉！？」

る……

「ふゃあああああ~~~~~」

神谷は旅館の屋根に上り、そこに寝転んで大きな欠伸をする。

他の生徒達は、再び海へと向かったため、神谷も向かおうとしたところ、全員から泣いて止められたので、仕方なく旅館でのんびりとする事にしたのだ。

「今日も空が青いぜ……」

神谷は空を見上げながらそう呟く。

すると……

「神谷……」

「ん？」

自分と呼ぶ声が聞こえたので、視線を向けると、そこには……

「やあ……」

屋根の縁から上半身だけ出して、神谷の方を見ているシャルの姿が在った。

「おう、シャルか」

「そっち行っても良いかな？」

「おう、良いぜ」

神谷がそう言うと、シャルは屋根の上によじ登り、寝ている神谷の隣に腰を下ろす。

「……………」

そしてそのまま沈黙する2人。

暫くその状態が続く……………

「…………… オイ？ 如何したんだ？ 何か用でもあんのか？」

やがて痺れを切らした様に、神谷が起き上がってそう尋ねた。

「……………」

その言葉で、シャルは神谷の方を見るが、まだ口を開かない。

「シャル？……………！？」

再びシャルの名を呼び……………

神谷は驚愕する。

シャルの目から、ボロボロと涙が零れ始めたからだ。

「な、何だよ、オイ！？」

突然泣き出したシャルに、流石の神谷も慌てる。

「!?!」

と、その瞬間!!

シャルは神谷に抱き付いた!!

「!?!? オ、オイ!?!」

「馬鹿! 神谷の馬鹿馬鹿! 心配したんだからね!?!」

神谷に抱き付いたままそう言うシャル。

「あんな事になって……………死んじゃうかもしれないって言われた時!
! 僕がどんな気持ちだったか分かる!?!」

「……………」

それを聞いた神谷は何も言えなくなる。

「ホント……………ホントにもう……………」

シャルは神谷に抱き付いたまま嗚咽を漏らし始めた。

「……………」

そんなシャルの身体を抱き締める神谷。

「その……………何だ……………スマン」

「……………もう良いよ……………その代わり……………」

「??？」

「暫く……………このままにさせて……………」

「……………」

神谷は了承を現すかの様に、抱き付いているシャルの頭をポンポンと撫でるのがだった……………

暫くして……………

「グスッ……………ゴメンね、急に泣き出しちゃって……………」

落ち着きを取り戻したシャルが、赤くなった目を擦りながらそう言う。

「全くたぜ、勘弁してくれよ……………女の涙ほど苦手なモンはねえぜ」

「へえ……………やっぱり神谷でも女の子の涙には弱いんだね」

気まずそうに後頭部を掻いている神谷に、シャルは笑いながらそう言う。

「まあな……………特に相手がお前の場合だとな」

「えっ!?!?」

その言葉で、シャルの顔が紅潮する。

「そ、それって……………ど、如何言う意味!?!?」

「そりゃあ、お前……………」

と、そこで言葉に詰まる神谷。

「……………」

そしてそのまま、身体がむず痒い様な様子を見せたかと思うと……………

「……………止めだ」

そう言ってまた寝転んでしまった。

「ええーっ!?!? 何で!?!?」

途端に、シャルは不満の声を挙げる。

「柄じゃねえんだよ、そう言うは……………」

「そんな〜！ そんなのないよ〜！！ ちゃんと言ってよ〜！！」
ぶつきら棒にそう言う神谷だったが、シャルは納得が行かず、寝て
いる神谷の身体を揺さぶる。

「オイ！ 止めろって！ 揺らすな〜！！」

「じゃあちゃんと行ってよ〜！！」

両者一歩も譲らず意地を張り合っ。

「あ〜もう！ 分かった、分かった！」

やがて、神谷が折れたかのようにそう言って身を起こして胡坐を掻い
た。

「じゃ、じゃあ、言ってよね……………」

イザとなると、やはり緊張するシャル。

しかし……………

神谷はシャルの予想を上回る事をしでかすのであった……………

「悪いが、やっぱりそういうのを口で言ったりすんのは柄じゃない
んでな……………俺らしく行動で示させてもらっぜ」

「えっ？……………」

神谷の言葉の意味が分からず、シャルが戸惑いを浮かべていた瞬間
……

神谷の手が伸び、シャルの後頭部に当てられたかと思うと、そのままシャルを引き寄せ、唇を合わせ合った。

所謂、キスである。

「!?!?!?」

途端に、シャルは真っ赤になって湯気を上げる。

「……………如何だ?」

そんなシャルから唇を放すと、神谷はそう問い質す。

「!?!? かかかかかか、神谷!?!? いきなり何するの!?!?」

「嫌だったか?」

「い、嫌じゃないけど……………」

逆に問われて、シャルはモジモジとする。

「今のが俺の心だ……………で? お前は如何なんだ?」

そこで神谷がそう問い質す。

「!?!? 僕は……………」

シャルは一瞬逡巡した様な様子を見せたが……

今度は自分の方から、神谷へと口付けた。

「!?!」

神谷は驚きで目を見開く。

「……………僕も行動で示させた貰ったよ」

シャルは照れながらもそう言って、悪戯っ子の様に笑う。

「お前……………やってくれるじゃねえかよ」

呆然としていた神谷だったが、やがてそう言ってニヤリと笑った。

「えへへへ……………」

「フッ……………」

互いに笑い合うと、神谷は再び寝転がり、シャルはそんな神谷を見やりながら、隣に座るのだった……………

そして時は流れ……………

夜……………

くろがね屋からちよつと離れた海に面した崖の上……………

「最初の試練は突破したみたいだね……………セカンド・シフト 篝ちゃんは絢爛舞踏を発動させたし、一夏くんは白式を第2形態移行させた……………」

そこには束の姿が在った。

崖の縁に腰掛け、足をブラブラさせながら、銀の福音との戦いで進シルバリオ・ゴスベル化した紅椿と白式のデータを見ている。

その表情は、何時もと同じ笑みに見えるが……………

何処か影が在る様に思えた。

「グレン団の皆の結束も固まったみたいだし……………何より……………」

と、束がそう言うと、映し出されていた映像が、グレンラガンとラファールラガンの姿へと切り替わった。

「かみやんも、螺旋の戦士としてまた成長した……………新しい合体を編み出す程に……………」

「束……………」

そこへ、千冬が姿を見せる。

「あ！ ちーちゃん！……………如何したの？ 顔色悪いよ？」

千冬が現れた事に喜ぶ束だったが、振り返って確認したその千冬の顔色が悪いのを見てそう尋ねる。

「気にするな……………と言うか、聞くな」

不機嫌そうな様子で、それ以上の質問は許さないと云った雰囲気を出しながら、千冬はそう言う。

「そ、そう……………」

その迫力に押されて、束はそれ以上追及する事はしなかった。

「ところで、一体如何したの、ちーちゃん？ 私に用事？」

何時もの調子に戻ってそう尋ねる束。

「……………束……………お前一体如何した？」

しかし、千冬は真剣な様子でそう束に尋ね返す。

「ふえ？ 何があ？」

「恍けても無駄だ……………私には分かる……………今のお前が、私の知っているお前らしく事ぐらいはな……………」

「……………」

そう言われて束は黙り込むと、千冬から視線を反らし、再び海の方を向いた。

「……………敵わないなあ、ちーちゃんには」

「お前は自分の興味のない事にはとことん無関心になる性格で、それは人間の場合も例外ではない。私と一夏と箒、そして神谷以外に関心を示さなかったお前が、生徒にゴメンなどと言うとは……………如何いっ心境の変化だ？」

「……………」

「まあ、普通ならば別にそれは良い変化だと思うから問題無い……………だがお前は場合は別だ……………ISを世に認めさせる為に白騎士事件を起こした様なお前がな」

束に向かって、千冬はそう言う。

そう……

白騎士事件の際、日本に向かってミサイルを放つ様に、各国の軍事コンピューターをハッキングした犯人は……

世間一般では、謎とされているが……

千冬は、それが東の仕業だと確信していた。

何故なら……

今でこそ最強の兵器として世間に浸透しているISだが……

発表された当初は、宇宙開発用と言う目的もあり、見向きにされていなかったのだ。

だから、千冬は東がISの存在を認めさせる為に白騎士事件を起こした……

そう思っている。

「東………ひょっとして一夏が男でありながらISを動かせた事も、お前が関わっているんじゃないのか？」

「………それは私の仕業じゃないよ」

「本当にか？」

「うん………誓って言っよ………」

「そうか……なら質問を変えよう……一夏がISを動かさせた事について、何か知っているのか？」

「……………」

その問いに束は沈黙したが……

「……………知ってるよ」

やがてそう短く千冬に反応を返す。

「そうか。なら……………」

「ゴメン……………まだ教えられないんだ」

問い質そうとした千冬を制して、束はそう言った。

「束……………」

「ねえ、ちーちゃん……………何で私がISを造ったか……………覚えてる？」

「確か……………無限に広がる星の向こうへ行ってみたい……………そう思ったからだったか？」

「そう……………だから……………今私は……………白騎士事件を起こした事……………後悔してるんだ……………アレは私の罪……………そして罪を犯した者は……………それを償わなきゃいけない」

「何っ？ 如何言う事だ？」

それを聞いた千冬が、顔色を変えて東にそう問い質すが……

「ゴメンね……」

東はそう言うと、何と崖下へと飛び降りた!!

「!?!? 東!?!?」

慌てて崖の縁まで駆け寄ると、断崖を覗き込む千冬。

だが、そこに東の姿は無かった……

「東……」

千冬は断崖を覗き込んだままそう呟く……

一方、その頃……

くろがね屋近くの海水浴場にある岩場にて……

「ふう……………」

一泳ぎ終えた水着姿（赤禪）の一夏が、岩場に腰掛けて、一休みしている。

くろがね屋から抜け出し、こっそりと泳ぎに来ていたのだ。

「い、一夏……………」

「ん？」

声を掛けられた一夏が振り返ると、そこには水着姿の箒の姿が在った。

「箒……………お前も泳ぎに来たのか？」

「あ、ああ……………少し頭を冷やそうと思ってな」

「そうか……………そう言えば、この間の自由時間の時、見かけなかったけど……………」

とそこで、一夏は改めて箒が水着姿なのを思い出し、マジマジと見つめてしまっ。

「あ、あんまり見ないで欲しい……………お、落ち着かないから……………」

「ス、スマン……………」

箒にそう言われて、慌てて視線を反らす一夏。

「……………」

箒は無言のまま一夏の傍に寄り、その傍に腰を下ろす。

「……………」

そのまま2人とも沈黙してしまう……………

箒は最初の作戦で足を引っ張ってしまった事で……………

一夏は神谷が重傷を負った時に箒に当たってしまった事で、気まぎらくなってしまっているのだ。

「……………」

気まぎらい沈黙が続く。

「あ、あのさあ……………」

とそこで、一夏の方がその沈黙を破った。

「な、何だ？」

「そのリボン……………してくれたんだな」

一夏がそう言って、箒がしているリボンを示す。

神谷を助ける際に海に突入した時、リボン無くした箒だったが、本日7月7日は彼女の誕生日であり、一夏から新しいリボンプレゼントされたのである。

「あ、ああ…………お前からのプレゼントだからな」

「正直、貰ってくれないかと思ったよ…………俺…………お前に酷いこと言っちまったからな…………すまない、箒」

「な、何を言うんだ！ 当然の事だ！ 私のせいで神谷は重傷を負ったんだ！！ 私は…………責められて当然だ！！」

そう言つて、箒は表情に影を落とす。

「もう良いつて、箒…………結局アニキも大丈夫だったんだし…………俺が悪かつたんだ」

「いや違う！ 私が！！」

「いや、俺だつて！！」

「私が！！」

「俺が！！」

先程までの沈黙がウソの様に、互いに自分がと言い始める一夏と箒。

「ハア…………ハア…………ハア…………ハア…………」

やがて互いに言い過ぎて、息を切らせる。

「…………フフフフ」

「ハハハハ……………」

そして、どちらからとも無く笑い始めた。

「何か……………馬鹿みたいだな。俺達」

「そうだな……………神谷の馬鹿が伝染したのかもしれない？」

「あ、箒！ そりゃ幾ら何でも……………!？」

と、そこで一夏が急に固まる。

「？ 一夏？」

「ほ、箒……………その……………離れないか？ 当たってるんだが？」

「？……………!？」

と、そこで箒は、一夏にかなり接近していた為、胸を押しつけていた事に気づき、慌てて飛び退く。

「お、お前は!……………」

「えっと……………スマン」

何故だか分からないが、罪悪感を感じた一夏は箒に謝る。

「その……………何だ……………意識するのか？」

と、不意にそこで箒がそう尋ねた。

「？ ハイ？」

その質問の意図が分からず、一夏は首を傾げる。

「だ、だからだな！」

すると箒は、一夏の手を取り、自分の胸の谷間に押し当てた！

「うおっ！？」

「私を……………異性として意識するのかと、訊いているのだ……………」

「あ、ああ……………まあ、な……………」

頬を染めながら、勢いに押される様に一夏は答える。

「そうか……………そう、なのだな……………」

箒は、噛み締めるかの様にそう呟く。

そのまま2人は再び沈黙した……………

月明かりが岩場に座り込む1組の男女の姿を、幻想的に映し出す……………

「……………」

やがて、向かい合っていた2人の内、一夏が箒に顔を近づかせ始めた……………

しかし……

「ん？」

ゴツンッ、と一夏は、自分の額に何か当たるのを感じて顔を上げる。

そこに在ったのは……セシリアのブルー・ティアーズのビットの方のブルー・ティアーズだった。

「!?!? ぬああああっ!?!?」

一夏は仰け反った瞬間、ブルー・ティアーズからビームが放たれた。前髪が少し焼き切れる。

「姿が見えないかと思えば……何をしている、一夏」

「よし……殺そう」

「ふ……ふふふふ……」

何時の間にか、2人の近くの空には、ISを装着したラウラ、鈴、セシリアの姿が在った。

全員、一様に殺気だっている……

特に鈴とセシリアがヤバい……

「男の魂完全燃焼！ キャノンボールスマアアアアアアツシユツ！」

「何のおっ！！ ラファール（疾風）返しいいいいいいいつ！！」

「そらそら！ 兄さんも嬢ちゃんも頑張りなあ！！」

くろがね屋で仲良く、イタチの安に審判をしてもらって、卓球を楽しんでいたのだった……

つづく

第19話『俺らしく行動で示させてもらっぜ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

神谷も復活し、銀の福音の破壊に成功し、ロージェノム軍も退けた
グレン団。

千冬からは罰則を受ける事となってしまったが、自分達の行いを否定する者は居なかった。

そんな一夏達の気概を感じてか、珍しく褒める言葉を言う千冬。

しかし、復活早々、早くも神谷が千冬の怒りを買い、千冬は遂に倒れてしまうのだった。

千冬が倒れてしまった為、予定を変更して自由時間となった臨海学校最終日。

くろがね屋の屋根の上で昼寝をしようとしていた神谷の元を訪れるシャル。

すっかり復活した様子の神谷に、自分がどれだけ心配したかを告げ、堪え切れなくなったのかそのまま泣き出す。

流石の神谷も泣かれるのには弱く、黙ってシャルを抱きしめた。そして神谷らしい告白をし、シャルもそれに答えるのだった。

一方、一夏と篤も、互いに謝り合い、わだかまりを解消する。

そのままいい雰囲気になりかけた2人だったが、残念ながらセシリア達の邪魔が入ってしまうのだった………

そして、何やらグレンラガンや一夏達を気に掛けている束。

彼女が漏らした罪に対する償いとは、一体如何言う事なのか？

さて今回は、原作順で言うと夏休み編ですが、その前に神谷達だけ

をくろがね屋に残して、ちょっとオリ話を挟もうと思います。
内容はギャグで、はっちゃけた神谷と、くろがね屋の活躍が見れま
すので、楽しみにしていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第20話『見てえもんは見てえんだ!』(前書き)

PVが20万を超えました。

皆様、ご愛読ありがとうございます。

これからも、天元突破インフィニット・ストラトスをよろしく願
いします。

第20話『見てえもんは見てえんだ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第20話『見てえもんは見てえんだ!!』

ロージェノム軍による銀の福音強奪未遂シルバリオ・ゴスベルというハプニングがあったものの……………

IS学園の臨海学校は無事終了した……………

生徒達は皆学園に戻り、残り僅かな1学期を過ごして、そのまま青春の夏休みに突入する……………

…………… 筈だった。

何故か、臨海学校は終わった筈なのに……………

神谷達、グレン団の一同と、千冬、真耶は、くろがね屋に残っていた……………

銀の福音シルバリオ・ゴスベルの件で、神谷達は命令違反を犯しており……………

当初千冬は、学園に帰ってから処罰を下す積りでいたが……………

神谷の性格からして、学園に帰った途端にバツクレると踏んだ千冬は、くろがね屋に残って補習を行う事にしたのだ。

一夏達も、ついだと連帯責任と言う事で、補習に付き合わされる。

頭を使う補習は神谷には無意味だと悟った千冬は、身体を使う補習で神谷を扱く積りである。

ドイツ軍で教官をしていた経験もある千冬は、そりゃあもう軍隊さながらの訓練を神谷達に科した。

「な、何故……私がこのような事を……」

「コレも全部神谷のせいよ……」

只でさえ暑い夏の砂浜を、軍隊のフル装備で走っている為、既に滝の様な汗を掻いているセシリアと鈴が、恨みがましそうにそう呟く。

「この感じ……あの頃を思い出す」

ラウラは、千冬がドイツで教官をしていた頃を思い出し、懐かしそうな顔になる。

「い、一夏……流石にコレはキツイぞ……如何にかならないか？」

「無理だよ……千冬姉がああなったら誰にも止められないよ……」

苦しいを通り越して青褪めた表情で訴える筈に、同じ様な表情で力無くそう答える一夏。

「オイ、如何した！？ もっと気合入れろ！！」

「神谷は元気だね……僕もう死にそう……」

体力馬鹿な神谷はピンピンしているが、隣のシャルは死にそんな表情になっている。

「ほう……元気が有り余っているな……よし！ もう100往復追加だ！！」

一方、その頃……

くろがね屋の一室では……

「あの坊や達は如何してる？」

「織斑先生に扱かれてるわ。先生ったら、日頃の恨みとばかりに神谷に厳しい訓練を科してるみたいね」

リーロンがパソコンの様な機械を弄りながら、つばさの問いにそう返す。

「アハハハ、巻き込まれてる生徒さん達は可哀そうだね」

「全くね………けど、何やかんや言って、結局は神谷に付いて行く子達だしね。大丈夫よ」

「そうかい………ところで？ そいつは何だい？」

と、そこでつばさは、今度は先程からリーロンが弄っているパソコンの様な機械に映し出されている『グレンラガンに良く似たマシンの設計図』について尋ねる。

「ああ、コレ？ グレンラガンを元にした量産機の設計図よ」

「ほう……………グレンラガンの量産機かい」

「ええ。世界とロージエノム軍との戦況は今のところ五分五分だけど……………ISの数に限りがある以上、何れはジリ貧よ。ISに代わる兵器を用意しないと」

「それでグレンラガンの量産機を……………って事かい？」

「ええ、そうよ。コレはまだ試作段階だから、神谷程でないにしても螺旋力がある程度無いと駄目だけど、何れは誰にでも使える様にする積りよ」

「造ったら造ったで、また面倒な事が起こりそうだけどねえ……………」

共通の敵を前にしても、未だに纏まりきっていない世界の情勢を顧みて、つばさは皮肉る様にそう言う。

「それで必要な事よ……………もしこの戦いに負ければ、人類の明日は奴隷か絶滅よ……………」

だが、リーロンは真剣な顔で、グレンラガンの量産機のデータを創り上げて行くのだった。

「そうだね……………先ずは人類が生き残らない事には始まらないね」

と、つばさがそう言った時……………

ドタドタという、大人数が廊下を走って来る様な音が聞こえて来る。

「？」

「何だい？」

それを聞いたリーロンとつばさが、廊下の方に視線を向けると……

廊下の襖が蹴破られ、銃を手にしているウサギ型の獣人達が雪崩れ込んで来た！！

「動くな！！」

「大人しくしてもらおうか！！」

銃をリーロンとつばさに付き付け、ウサギ型獣人達はそう言い放つ。

「アララ……」

「騒がしいね、全く……」

しかし、無数の銃口を突き付けられていると言つのに……

リーロンとつばさの顔には……

余裕の笑みが浮かんでいたのだった……

*

そんな事態が起こっているとは露知らず……

神谷達がくろがね屋へと帰還して来た……

神谷と一夏の部屋……

「はあああああ~~~~」……「疲れた~~~~」

部屋に帰るなり、一夏は倒れ込む様に畳の上に倒れる。

未だに來ている迷彩服は汗でびっしょりである。

生徒達は先に帰ってしまったので、現在部屋割りには男子と女子で分けられており、千冬と真耶は女子達の部屋の方で、そちらの方を監視しているという態勢を取っている。

補習まで一夏は兎も角、神谷と同じ部屋に居たくないと言う思いも有ったのかもしれないが……

「如何した、一夏！ 気合が足りねえぞ！！」

疲労困憊な一夏とは対照的に、神谷の方はまだ元気そうであった。

「アニキ……体力有り過ぎるよ……」

倒れたまま神谷に視線を向けながら、一夏はそう言う。

「男は体力だろ！ それぐらいで根を挙げて如何する！！」

そんな一夏に向かってそう言い放つ神谷。

(……こりゃ明日は今日以上の地獄かも)

訓練終了の際に、余り疲れた様子を見せなかった神谷を見て、千冬が悔しそうな表情を浮かべていたのを思い出して、一夏はそう思う。

「はあ……取り敢えず……俺、汗を流したいから、温泉に行くよ」

「そうか。んじゃ、俺も行くとするか……」

そう言い合つと、神谷と一夏は浴衣と代えの下着を持ち、温泉へと向かったのだった……

くろがね屋・温泉……………

男湯……………

「アレ？ 安さんが居ない？」

温泉に入った一夏が、何時も居る筈のイタチの安の姿が無い事に気づいて、その声を挙げる。

「ああ？ 何処行つたんだ？ アイツ？」

神谷もそれに気づいてその声を挙げる。

「…………… まあ良いや。アニキ、俺が背中流すよ」

「おう！ んじゃ頼むぜ！！」

しかし、他の仕事の手伝いをしているのだらうと思い、一夏と神谷は互いに背中を流し合いながら身体を洗うと、湯船に浸かったのだ。

「ああ〜〜〜…………… 生き返る〜」

「年寄りくせえぞ、一夏」

「うつつ！？ 言わないでよ、アニキ」

気にしている事を指摘された一夏が、抗議の声を挙げる。

「……………」

しかし、神谷はそんな一夏の抗議の声など聞こえていないかの様に、湯船の縁に寄り掛かり、天を仰いでいた。

すっかり日は暮れ、空には満月と無数の星々が浮かんでいた。

「？ アニキ？」

「キレイなもんじゃねえか……………なあ、一夏」

首を傾げた一夏に、神谷はそう言う。

「えっ？ ああ、うん……………確かに、此处だと星が良く見えるね……………」

神谷の言葉に、一夏は同じ様に星空を見上げながらそう答える。

「なあ、一夏……………何時かあの星の向こうまで行きてえな」

「？ 星の向こう？ 宇宙？ 幾ら何でも、それは……………」

「馬鹿野郎！！」

と、神谷はそう言っつて湯を波立たせながら立ち上がると、湯船の縁に片足を着いて仁王立ちした。

「無茶を通して通りを蹴っ飛ばすのが、俺達グレン団だろうが。その俺達が、今まで行くと言っつて行けなかった所が在ったか？」

「アニキ……………」

そんな神谷の姿を見た後、再び星空を見上げる一夏。

「そうだね……………うん！ 行こうよ、アニキ！ 何時かあの星の向こうまで……………」

「おう……………」

男2人が、まだ見ぬ果ての景色に思いを馳せていた。

……………と、その時！

「あん！」

「……………」

隣……………女湯から聞こえて来た色っぽい声に、一夏と神谷は反応する。

「ふあ、鳳さん！ ヘンなところに触らないで下さい……………」

「オノレエ！ このデカチチが！ デカチチがあ……………」

「教官………どの様にすれば、教官の様な素晴らしいスタイルになれるのでしょうか？」

「ラウラ、落ち着け………目が据わってるぞ」

「………メロン」

「いえ、スイカですわ………」

「！？ おま、お前達！ 何処を見て何を言っている！？」

それは、女湯に入っている真耶、鈴、ラウラ、千冬、シャル、セシリア、箒の男にとって非常に悩ましい声だった。

「ア、アニキイ！？」

「おおおおお、落ち着け一夏あ！！」

顔を真っ赤にしている一夏と鼻息の荒い神谷。

「も、もう許しませんよお！ えいつ！！」

「キャアツ！？ ちょっと、ちょっと！ 何処揉んでるのよー！！」

「教官、まさか………一夏との所謂禁断の愛で………」

「貴様！ 一体何処からそんな知識を仕入れて来るんだ！？」

「僕も結構あると思うんだけどなあ………」

「わ、私だつて!!」

「だから何処を見て言っている!!」

そんな一夏と神谷の思いなど知らず、更に悩ましい会話が女湯から聞こえて来る。

「ブフツ!? ア、アニキ……………コレ以上はマズイよ! 退散しよう!!」

耐え切れなくなった一夏が鼻血を嘔くと同時に、神谷にそう呼び掛ける。

しかし、その隣に神谷の姿は無かった……………

「? アニキ?」

神谷の姿を探して、一夏がキョロキョロとすると……………

「クソツ! 足りねえ……………オイ、一夏! もっと桶と椅子を集める!!」

風呂桶と座椅子を集め、高い敷居を超えようとしている、腰にタオルを巻き付けた神谷の姿が在った。

「な、何してるの!? アニキ!?!」

「ああん? 決まってるんだろ! 女湯を覗くんだよ!!」

悪びれた様子も無く、神谷は当然の様にそう言い放つ。

相変わらず自分に正直な男である。

悪い意味でも……

「だ、駄目だよ、アニキ！ 覗きは犯罪だよ！！ それに後でどんな目に遭うか……」

当然止めようとする一夏だったが……

「馬鹿野郎！！ 良いか、一夏！ 星の向こうも良いが、その前によ……男が辿り着かにならねえフロンティアが在るだろう？」

そこで神谷は、一夏と肩を組み、そう言って来た。

「男の道つてのはなあ……何だ、一夏？ 山あり谷あり……口マンありだ。違うか？ なあ、見たはねえのかい？ 美しい山やキワどい谷をよお」

神谷は、真面目なかつ真剣な顔でそう語る。

傍から見ればカッコイイのだが、やろつとしている事は結局覗きである。

様は純度100%の下心だ。

「う、美しい山や……キワどい谷……！？ うぐっ！？」

思わず想像してしまった一夏の鼻から、またも鼻血が噴き出す。

「そうだろ、一夏！ 男ならそうだろ！！……………で？ 誰のが1番
楽しみだ？ セシリアか？ ラウラか？ 鈴か？ メガネ姉ちゃん
か？ まさかブラコンアネキって事はねえよな？」

神谷は、早口でそう捲し立てる様に言う。

「ちよっ、ちよっと待ってよ、アニキ！ 俺は……………」

「やっぱり箒か！？」

「！？」

と、神谷の口から箒の名が出た途端に黙り込む一夏。

脳裏に、転校初日に箒と同じ部屋にされた際に見てしまったバスタ
オル1枚だけの姿が思い起こされる。

そして注目点は、同年代の女子と比べて豊満に育っている胸に移り

……………

「うわあああああああ—————っ！？」

そこで一夏は、慌てて手をバタつかせて妄想を振り払う。

「お、俺は！！ 俺は！！……………」

葛藤している様子を見せながら、一夏は黙り込む。

「よし！ 届いたあ！！！」

と、その間に更に風呂桶と座椅子を集めていた神谷は、遂に女湯が覗けそうな位の高さに積み上げる事に成功した！

「いざ行かん！ 約束の地！ 男のフロンティアへ！！」

そして遂に……

神谷は女湯を覗き込む……

と、その瞬間！！

突如激しい震動が走り、くろがね屋の風呂場が崩壊し始めた！！

「な、何だあ！？」

「！？ おわあああああー……っ！？」

その震動で足場が崩れ、神谷は湯船へと落下する。

「アニキ！！」

「お、男のフロンティアが……っ！？」

また言っている……

と……

やがて震動が更に激しくなり、女湯側の地下から、超巨大ガンメン

……温泉型ガンメン『イタミループ』が姿を現した！！

「!? ガンメン!! しかもデカイ!?!」

「プハアツ!! 許さねえぞ、ガンメン野郎!! 男のロマンを粉々にしやがった罪!! 100億万倍にして返してやるああ!! グレンラガン! スピンオン!!」

と、湯船から飛び出した神谷が、恨みの籠った叫びと共に首に下げているコアドリルを掲げる様に構えて吠えた。

その姿が緑色の光に包まれて、グレンラガンとなる!

「クツ! 白式いつ!!」

一夏も白式を呼び出し、白い光に包まれて装着する!!

「行くぞお! ガンメン野郎!!」

「待てえいつ!!」

そしていざ掛かって行こうとした瞬間、イタミループがそう声を挙げた。

「!?」

「コイツ等が如何なっても良いのか?」

思わずグレンラガンと一夏が動きを止めると、イタミループの頭の上に、檻の様な物が現れ、目から映像が投影される。

そこには……

身体の一部をモザイクで隠された箒やシャル達の姿が映し出された。

「!?……………」

「箒!? クソツ! 人質か!？」

それを見て動きを止めるグレンラガンと一夏。

「一夏!！」

「神谷あつ!！」

箒とシャルが2人に向かって叫ぶ。

「何でISが展開出来ないよ!？」

「この檻から奇妙なエネルギー波が出ている……………」

「それがISの展開を妨害しているんです!？」

ISを展開しようとしている鈴だが、如何いうワケか展開せず、ラウラが分析し、セシリアが驚きの声を挙げる。

「お、織斑先生……………」

「クソツ! この私が……………油断した」

完全に狼狽えている真耶と悔しそうな表情を浮かべている千冬。

「女共の命が惜しかったらグレンラガンとISを解除してもらおうか！」

イタミループが、グレンラガンと一夏を指差してそう言い放つ。

「畏だよー!!」

「畏だ一夏！ そんな話に乗るな!!」

「アニキ！ 畏だ！ 如何するの!?!」

あからさまな畏にシャル、篝、一夏がそつ声を挙げる。

「……………」

神谷は少しの間沈黙していたかと思うと……………

「オイ……………もし俺が解除したら……………」

「んん？」

「見えそつで見えねえそのモザモザした奴を外してもらっぜ!!」

「……………」

その瞬間……………

その場に居た誰もが呆れ返った……………

「そ、そんなので良いのか？」

「おつよー!!」

「うん、分かった……………」

戸惑いの声を挙げるイタミループにも、迷わずそう答えるグレンラガン。

「ア、アニキ!? 何言つて……………バツ!?」

思わず傍に寄って来た一夏に裏拳を喰らわせて黙らせる。

「許せ……………兄弟」

そしてそう言ったかと思うと、グレンラガンから神谷の姿へと戻った!!

「さあ解除してやったぞ! そつちも約束を守りやがれえーっ!!」

イタミループを指差し、神谷はそう言い放つ。

「ククク……………良いだろう」

そして、イタミループがそう言って指を鳴らすと、篝達の映像に掛かっていたモザイクが解除される。

そこに映っていたのは……………

身体にタオルを巻いている篝達の姿だった!!

「……………」

暫し呆然とする神谷。

やがて……………」

「ふざけんなあああああああ—————っ!!」
涙まで流してそう絶叫した!!

「許さん許さん許さんぞーっ!! テメエ等全員ギッタギタのバツ
キバキに……………」

神谷が激怒の様子を露わにしていると……………」

「それはこっちの台詞だ! 馬鹿神谷あああああ——
————っ!!」

「そんなのは罫に決まっているだろう!!」

「てゆうか! 何で交換条件がアタシ達じゃなくてモザイクなのよ
!?!」

「脳みそがわいてるのですか! このエロザルモンキー!!」

「神谷! 貴様は最低だ!!」

千冬、箒、鈴、セシリア、ラウラが、神谷にそう非難と罵声を浴び
せて来た。

当然である……………

「て、天上くん！ エッチなのはいけないと思いますー！！」

真耶もどっかのメイドさんの様な台詞を口走る。

「スマン！ お前等！！」

すると神谷は、意外にもすぐに箒達に向かってそう謝罪する。

「……………えっ！？……………」

意外な神谷の反応に驚く箒達だったが……………

「だが！ 見てえもんは見てえんだ！！」

最低な事を一片も恥じる事なく、神谷はそう宣言する。

駄目な方向に凄く男らしい……………

「…………………………」

箒達は再び言葉を失う。

「き、貴様という奴は……………」

怒りで握った拳が震え始める千冬。

する……………

「!? うわああああああー……っ!?」

「うおおっ!?」

為す術も無く、2人はイタミループの足に踏み潰される!!

「一夏あつ!」

「神谷あつ!」

箒とシャルの悲痛な叫びが木霊する。

「アハハハハッ! やったぞ!! グレンラガンを倒したぞおおおおおおおー……っ!」

そんな箒達とは対照的に、勝利の雄叫びを挙げるイタミループ。

と、その時……

神谷と一夏を踏み潰した箒のイタミループの足が、持ち上がり始めた!

「!? 何っ!?」

「ゼエエエエエエエエエー……ッ……ッ!」

イタミループが驚きの声を挙げた瞬間に、そう言う雄叫びが響き渡る。

そのまま更にイタミループの足が持ち上がって行き……

その下から、イタミループの踏み潰し攻撃を受け止めていたクロスの姿が露わになった!!

「!? 番頭さん!？」

「クロス!？」

「大丈夫か? 2人共!!」

クロスは余裕のある笑みで、イタミループの足を支えながらそう言い放つ。

「ば、馬鹿な!? 何て怪力だ!? コイツ!? 人間か!？」

ゴツイ体格をしているとはいえ、人間が巨大な自身を支えているという事が信じられないイタミループ。

するとその瞬間!!

イタミループの身体を、何者かが駆け上がった!!

駆け上がった誰かは、箒達が捕えられている檻の前に躍り出る。

「……………!?」

驚く箒達。

「……………」

それは、口元を布で隠し、和服に袴と言う侍の様な格好をして刀を持った先生の姿だった！！

「！！！」

先生はそのまま、腰に構えていた刀を居合いの様に抜き放ち、箒達を捉えている檻を斬り裂く！！

鋼鉄製の檻が、まるで紙の様に切断される！！

「！！ 今だ！！」

「！！！！！！！！」

箒がその声を挙げた瞬間、専用機持ち達はISを展開。

千冬と真耶を抱えて脱出した！！

「……………」

それを見た先生も離脱する。

「！？ ああっ！？ オノレ、逃がすか！！」

離脱しようとしていた箒達に、イタミループが手を伸ばすが…………

ドゴンッ！！ と言う凄まじい発砲音がしたかと思うと…………

箒達に向かって伸ばされていたイタミループの腕に風穴が空き、火を噴いた！！

「うわおあああああああーーーーーっ!?!?」

「そっちはさせないんだな」

旅館の屋根の上で、対物ライフルを構えたジャンゴがそう言い放つ。

「貴様あ!?!?」

「ホラホラ、油断してるんじゃないよ」

イタミループの視線がジャンゴに向けられた瞬間……………

凄まじいスピードで接近してきた菊ノ助が、イタミループの左腕に、鋼糸を巻き付けた!!

「ホイッ! つと!!」

そして菊ノ助がその鋼糸を引くと……………

イタミループの左腕が、ハムのように輪切りにされた!!

「ぬあああああああーーーーーっ!?!?」

両腕を破壊され、イタミループは悶える。

「無様だね……………ガンメンさんよ」

「人質を取った時点で、貴方の負けは決まっていたのよ」

ISを装着したままの鈴、セシリア、箒、ラウラ、そして何処からか持って来た真剣を構えている千冬がグレンラガンを取り囲む。

「上等!！」

だがグレンラガンの神谷は怯むどころか、その一同に向かってフルドリライズ状態となって突っ込んで行った。

「あわわわわわ……………」

「こ、コレは如何したら?」

「放って置くしかないんじゃないですか……………」

4人の専用機持ち&ブリュンヒルデVSグレンラガンの戦いに、戦慄する一夏と、その様子を見ておたおたする真耶。

そして、呆れながらその光景を眺めているシャルであった。

「元気が良いねえ」

「それが取り柄みたいものだからね」

くろがね屋の屋根の上に居たつばさとリーロンも、そんな事を言い合って笑う。

周りでは、くろがね五人衆も、同じ様に笑い合っている。

結局……………

グレンラガンと千冬達の戦いは夜明けまで続き……

日が昇る頃には、全員疲労困憊で倒れていた……

こうして……

くろがね屋で行われた補習は……

グダグダのまま終わったのだ……

第20話『見てえもんは見てえんだ!!』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

今回はサブタイトルの通り、グレンラガン原作第6話（解放版）のISバージョンをお送りさせていただきました。

ちょっと今回はカッコ悪かった神谷。

彼の良くも悪くも自分に正直な部分が見えた場面だと思います。

それでも色んな意味で男らしいのが神谷です。

そしてくるがね屋の面々も大暴れ!!

飽く迄ゲストですので、活躍はこの場限りになりますが、やっぱり出した以上、今川超人としての活躍は書かないと思ひまして。

さて、次回からは夏休み編ですが……

この作品ではシャルがヒロインですので、原作におけるラウラとのメイド喫茶での話を書くのが筋かもしれませんが……

申し訳ありません。

作者の腕では、あのエピソードを上手く改変させる事が出来なかつた為、4巻での第のイベント、夏祭りに、神谷とシャルのカップルを介入させるという話を書かせていただきます。

更に、そのエピソードの後の夏休み編は、完全なオリジナルの話を書かせてもらう予定です。

作者の力量不足で、皆様にご迷惑をかけてしまう事を深くお詫び申し上げます。

何卒御了承下さい。

かわりと言ってはなんですが、夏祭り編では浴衣姿のシャルを出しますので……

では、「意見」「感想をお待ちしております。

第21話『シャル……………ここは俺に任せておけ』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第21話『シャル……………ここは俺に任せておけ』

くろがね屋での補習が終わり……………

IS学園に帰還した一同は間も無く……………

夏休みを迎えていた。

世界の状況は混沌に包まれているが、そんな状況だからか、家族の無事を確かめる様に帰郷する生徒達も居た。

そんな中、神谷は……………

IS学園・学生寮……………

一夏と神谷の部屋……………

「お祭り？」

「おうよ。箒の奴の生家の神社でな……………毎年この時期に祭りやってんだ」

もう1人の部屋の主である一夏の姿は無く、神谷と彼が招待したシヤルがそんな会話を交わす。

「へえ、そうなんだ……………」

「ではお、シャル。そいつに行かねえか？」

「えっ!?!」

神谷の言葉に驚きを示すシャル。

「そ、それって、ひょっとして……………デートのお誘い？」

「まあ、有り体に言っちゃまえばそうだな」

照れながらそう尋ねるシャルに、神谷はあっけらかんとそう返す。

「昔は一夏や弾の野郎を誘って大暴れしてたんだがな……………弾の奴は用事があるみてえでな。一夏も、今年は祭りの祭事を箒の奴が手伝うらしいからな……………別行動だ」

「2人つきりにさせてあげるの？」

「まあな。他の連中には悪いが、俺はやっぱりアイツには箒の奴が似合いだと思っんでな」

「神谷らしいね」

そう言う神谷の言葉を聞いて、シャルは笑う。

「うん、それじゃあ……………行こうかな」

「決まりだな。んじゃ、今週末に現地集合って事で頼むぜ」

「楽しみにしてるよ、神谷」

互いに笑みを浮かべてそう言い合う神谷とシャルだった。

その夜………

シャルとラウラの部屋にて………

(えへへへ………神谷からデートのお誘い………あゝんもう！
今から胸がいつぱいだよ〜〜！………)

この間ラウラと出かけた際に買った、白猫の着ぐるみパジャマに身を包んだ、浮かれた様子のシャルが、枕を抱き締めたまま、ベッドの上でゴロゴロとしている。

実はこのパジャマを買いに行った際に、とある騒動に巻き込まれたりしたのだが、それは別の話……

「シャル？……何をやっているんだ？」

とそこで、シャワーを終えたラウラが現れ、そうツツコミを入れて来た。

「！？ ラ、ラウラ！？ う、ううん！！ 何でも無いよ！！」

慌てて照れ隠しの様に、シャルはそう取り繕う。

「そうか？ なら良いが……」

ラウラは引つ掛かる様なものを感じながらも、それ以上追及する事はなかった。

「そう言えば……日本ではこの時期には『夏祭り』と言うものが開かれるらしいな」

「えっ？ ラウラも知ってたの？」

お揃いの黒猫の着ぐるみパジャマに着替えているラウラがそう言ったのに、シャルは驚く。

「ああ、クラリツサが教えてくれてな」

「クラリッサって……前に言ってた、ラウラの所属してる部隊の副隊長さん？」

「そつだ。一夏の事を嫁と呼ぶ様に教えてくれたのもアイツだ。本当に頼りになる」

自慢するかの様に誇らしげに語るラウラだが、その人物……『クラリッサ・ハルフォーフ』が得ている日本の知識とは、少女漫画やアニメと言った……

所謂、サブカルチャーの知識なのである。

一般的な知識とは違うのだが、生憎ラウラも教えているクラリッサ本人もそれに気づいていないから困ったものである。

「そ、そうなんだ……」

シャルも日本の事をそれ程詳しく知っているワケではないが、明らかに間違っていると思われるラウラの日本観を聞いて苦笑いを浮かべる。

「それでクラリッサ曰く……『夏祭り』は男女の仲深める定番イベントの1つらしい」

「ひょっとして……一夏を誘う気？」

そこでシャルはラウラにそう尋ねる。

そうなるど、一夏と尊をデートさせるといふ神谷の計画が台無しに

なってしまうと危惧した。

「いや、残念ながら肝心の夏祭りなるものが何処でやっているか分からないのでな……………無念だ。やっている場所さえ分かれば、嫁と一緒に رفتたのに……………」

悔しそうな表情で拳を握りながらそう言うラウラだったが、黒猫の着ぐるみパジャマ姿では迫力が無い。

寧ろ可愛いだけである。

「そうなんだ……………（良かった……………ラウラには悪いけど、今回は筭に譲ってあげないとね）」

心の中でそう思うシャル。

「そう言えば……………クラリツサは、夏祭りには『浴衣』がつきものだとも言っていたな」

「？ 『浴衣』？」

「日本の伝統的な衣装だそうだ。夏祭りにそれを着て行くと、男を喜ばす事が出来るらしい。確か映像データが在った筈だが……………」

クラリツサからの知識を語ると、ラウラは部屋の端末を弄り出す。

「……………有ったぞ。コレが『浴衣』だ」

「どねどね……………」

やがてお目当ての映像を見つけるとその声を挙げ、それに反応したシャルが、その映像を覗き込んで来る。

そこには、夏祭りの場を共に浴衣姿になって練り歩いているカップルの写真が在った。

当然の様に手は繋がれている。

「コレが浴衣……………」

「何とも簡易な服だ。これでは武器を隠し持つ事も出来んぞ」

浴衣に目を奪われるシャルと、ミリタリー点を考察するラウラ。

何とも対照的である。

(夏祭りにそれを着て行くと、男を喜ばす事が出来るらしい)

(僕がコレを着ていたら……………神谷、喜ぶかな?)

先程のラウラの言葉を思い出し、シャルはそんな事を考える。

そして脳内に、妄想が展開して行く……………

(シャル、似合ってたんじゃないか)

(そ、そう? ありがとう、神谷)

(シャル……………)

(えっ？ か、神谷!?)

(もう辛抱堪らん!!)

(キャアツ!!)

(!?!? わあ~~~~っ!?!? 何考えてるの~~~~!?!? まだ早いよ~~~~!
!)

シャルはそこまで妄想して、真っ赤になった顔に手を当ててブンブ
ンと頭を振る。

……………『まだ』?

「オイ、シャル……………大丈夫か?」

ラウラは、突然奇行に走り出したルームメイトを心配そうな目で見
る。

(よし! 明日浴衣を買いに行こう!)

しかし、シャルはそんなラウラの事など気にせず、そう決意を固め
るとグッと拳を握ったポーズを取る。

「……………寝よう」

ラウラは諦めた様にベッドに向かい、そのまま横になった。

そして時はあっと言つ間に流れ……………

夏祭り当日……………

篠ノ之神社・境内前……………

「わああ~~~~っ！ コレが日本のお祭りかあ……………」

鳥居から神社に繋がる通路の両脇に、連なって出店している出店を見て、シャルが感嘆の声を漏らす。

道行く人と出店の店員は皆活気に溢れており、絶えず聞こえる祭り囃子が更に場を盛り上げている。

「如何だ、シャル。良いもんだろ」

祭りの様子に目を奪われているシャルに向かってそう言う神谷。

因みにその格好は……………」

足は地下足袋で、下半身は白いステテコ。

晒だけを巻いた上半身に、背中に『祭』と書かれた真つ赤な法被を羽織り、それを止めている半纏帯の後ろ腰にはこれまた『祭』の文字が書かれた団扇を差している。

トレードマークの赤いV字型のサングラスに加えて、頭には白い捻り鉢巻きを巻いている。

何処からどう見ても、立派なお祭り野郎の恰好だった。

「カツコイイね、神谷」

そんな神谷の姿を見て、シャルは純粹にそついう感想を漏らす。

「サンキューな。お前もその浴衣、似合ってるじゃねえか」

「そ、そう？ あ、ありがとう……………」

神谷にそう言われて、照れるシャル。

今の彼女は、オレンジの布地に、多数のヒマワリが模様としてあしらわれた浴衣を着て、黄色い兵児帯をリボン結びで締めていた。

足元は足袋と草履で決められている。

手には浴衣とお揃いの柄の巾着が握られている。

(頑張って着方覚えて良かった……………)

「しかし、浴衣なんて何時の間に用意したんだ？」

「いや、ホラ、えっと……………日本のお祭りは浴衣で行くのが定番だ
って聞いたから」

「まあ、間違っちゃいねえな……………」

シャルの言葉に神谷は頷く。

「おっし！ 今日心行くまで祭を満喫するぜえっ！…！」

「おーっ！」

神谷がそう宣言すると、シャルもそれに同意する様に手を上げる。

「んじゃ、行くか」

「あ、待って！」

歩き出そうとして神谷の手を、シャルが取った。

「？ 如何した？」

「もう、気が利かないな。こついう時は手を繋ぐものだよ、だつて僕達……こ、恋人同士なんだから」

「そうだったか？」

「か、神谷……！」

「ハハハッ！ 冗談だつて！！ そんな怒んなよ」

「もう……」

シャルはハムスターの様に頬を膨らませる。

「そら、行くぞ」

だがそれに構わず、神谷はシャルの手を引いて、境内へと足を踏み入れた。

「あつ！？」

一瞬慌てながらもすぐに歩き出すシャル。

「さて、先ずは何から行くとするか……………」

神谷は品定めをするかの様に出店をキョロキョロと見回す。

「……………」

その子供の様に無邪気な笑みを浮かべる神谷の横顔を見て、シャルは頬を紅潮させるのだった。

それから2人は、思うがままの祭り楽しみ出した……………

神輿担ぎに神谷が飛び入りで参加したり……………

くじ引きでシャルが特賞を引き当てたり……………

輪投げでどっちが多く景品を取れるか競い合ったり……………（2人供
1歩も譲らず景品をゲットし続けた為、店員が泣きを入れて来て引
き分け終わった）

綿菓子と杏子飴を2人で食べさせ合ったりと……………

心底祭りを楽しんでいた。

そして今は、休憩所で一息吐いていた……………

「アゲツ！ んぐつ！ ガツガツツ！」

焼きそばにタコ焼き、ベビーカーにチョコバナナ、フランクフルトにお好み焼きと、屋台で買い漁った食品を次々に平らげていく神谷。

「うつ！？ 来た！！！」

その隣で、かき氷を食べていたシャルは、アイスクリーム頭痛を起こした頭をトントンと叩いていた。

「んぐつ！ んぐつ！……………プハーツ！ 食った食ったあ！！！」

最後にラムネを流し込み、神谷は満足そうにそう言う。

「神谷。この後は如何しようか？」

「んぐ、そうだな……………まだ花火まで時間があるしなあ……………」

シャルにそう言われて、この後の事を考える神谷。

「おっ！ そうだ！！ —夏達の事でも冷やかに行くか！！！」

そこで、まるで悪戯っ子が悪戯を思いついた様な笑みを浮かべてそう言う。

「ええっ？ 良いの？」

「構わねえよ。どうせ一夏^{アイツ}の事だ。2人つきりだったのに頓珍漢な事やってるに違いねえ」

「うわっ、リアルに想像出来るなあ、それ……………」

その光景が容易に想像出来て、シャルは苦笑いを浮かべる。

「よし！ アイツ等探してみるか！！」

神谷はそう言って、シャルと共に、一夏と篝を探しに行くのだった。

数10分後……………

「……………何で蘭の奴まで居るんだ？」

一夏と篝の姿を発見したものの……………

そこに五反田 蘭の姿までも在る事に困惑する。

「一見すると、両手に花状態なんだけど……………」

「一夏の野郎はそう思ってねえみたいだな」

事実上、浴衣姿の美女を2人も引き連れている一夏。

周りの男から、羨望と嫉妬の入り混じった視線が送られているのだが、一夏は全く気付いていない。

と、その時……………」

一夏の右隣を歩いていた蘭が、通行人にぶつかり、一夏の方へ倒れ掛かった。

一夏はそんな蘭を自分の胸で受け止める。

蘭は一夏の腕の中に居るといふ事態に軽くパニックを起こし、アタフタとし出す。

そして、咄嗟に射的の屋台を指差した。

それを見た一夏は皆で射的をやるうとし出す。

すると……………」

「アレ?……………」ひょっとして、アニキ?」

(!?!? ヤベッ!?!?)

神谷の長身が災いして、一夏に姿を見つけれられてしまう。

(如何するの？ 神谷？)

(逃げたら逃げたで怪しまれる……………しゃあねえ、合流すつぞ)

シャルと小声でそう言い合つと、神谷は止むを得ず、一夏を合流するのだった。

「……………」

合流の際に、箒と蘭が恨めしそうな視線を送つて来る。

(そんな目で見るんじゃないやねえよ……………)

その視線に流石の神谷も、若干居た堪れない思いを感じる。

「ああ、シャルも一緒だったのか。浴衣似合ってるな」

「あ、うん。ありがとう……………」

若干苦笑いを浮かべながらそう答えるシャル。

「ところでよお……………箒は分かるとして、何で蘭まで此処に居るんだ？」

とそこで、合流したならばと、神谷がその疑問を一夏に問い質した。

「ああ、学校の友達と、秋の学園祭でのアイデアを探しに来たらしいんだけど、何か友達は急に帰っちゃって……………ふざけるのが好きな子達だったみたいでさあ」

(そりゃ気を使っただよ……………)

気づけよ、と神谷は心の中でツッコミを入れる。

「オイ、兄ちゃん姉ちゃん達。店の前で話し込まれると困るんだがなあ……………やるのか？ やらないのか？」

とそこで、射的の屋台の大將が痺れを切らした様にそう言って来た。

「あつと、すみません」

「まあ、良いか……………親父、やるぞ」

それを聞いた一夏と神谷達は、射的の屋台の大將に金を払う。

「おっ！ そっちの兄ちゃんは兎も角、坊主、女の方まで払ったあ、甲斐性があるじゃねえか。今時のガキにしちゃあ珍しい……………よし！ オマケは無しだ！！」

「ええっ！？ 何で!?!」

「決まってるだろう！ モテる奴は男の敵だからだ！ ガハハハハハッ!!」

戸惑う一夏に向かって、大將は豪快に笑う。

「……………」

先ず最初にコルク銃を構えたのは蘭。

その表情は真剣そのもので、まるでプロのスナイパーを思わせる。

纏っている空気は、触れれば切れるという事を主張していた……………

(アイツ……………射的得意だっけ?)

しかし、一夏と同じくらい蘭との付き合い神谷は、そんな疑問を感じていた。

(緊張している……………きっと本当は得意じゃないんだ)

射撃戦を得意とするシャルも、蘭の様子からそれを感じ取りそう思う。

そのままの状態が続いていた蘭だったが……………

不意に緊張していた表情が緩み、頬が若干紅潮する。

すると、良い具合に力が抜けて、その瞬間に引き金が引かれた。

放たれたコルク弾は、重そうな鉄の札の支点を捉え、バタリと倒す!

「お

「おお?」

「おおおっ!?!」

一夏、箒、大将からそう声が挙がる。

「えっ？」

だが、撃った本人である蘭は、状況が理解出来ずに困惑する。

「そ、その鉄の札を倒すとは……………！ え、液晶テレビ当たり……
くくっ！！」

「えっ？ えっ？ え？」

如何やら無意識に撃った弾が、最強難易度の景品を落とした様で、
一夏達と大将、観客達が一気に沸き立った。

「すげえな、お嬢ちゃん。絶対に誰にも倒せない様にして……………あ
あ、いや。何でもない」

「は、はあ……………」

若干狼狽し、思わず本音を漏らしかけた大将に、気の無い返事を返す蘭。

「液晶テレビを狙うなんて、すげえな。しかもゲットしてるし。いや、驚いた」

一夏が本当に感心した様に拍手をすると、周囲に居た観客達も拍手を送り始めた。

「がっはっはっ！ 赤字だ赤字！ チクシヨウ、持ってけっ！！」

「ど、どうも……………」

大きめながらもギリギリ持てる大きさの包みを、蘭は大将から受け取る。

「良かったな」

「そうでしょうか……………」

「？」

大金星を挙げたというのに、浮かない顔をしている蘭に、一夏は首を傾げる。

(ありやりや……………)

(運が良いんだか、悪いんだか……………)

その射撃が彼女の本意で無かった事を見抜いていたシャルと神谷は、心の中でそう同情した。

「ぐっ……………」

と、そこで……………

箒の悔しそうな声が聞こえて来て、一夏達がそちらを見やると……………

そこにはコルク弾を全弾使い切った箒の姿が在った。

「箒、相変わらず下手だなあ」

「う、煩い！ ゆ、弓なら必中だ！！」

そう言っただけで来た一夏に、箒が言い返す。

「いや、それ景品壊れるだろ、絶対……………ったく、しょうがねえなあ」

一夏はそう言いながら、自分の残弾を箒に挙げると、既に装填してあったコルク銃も渡す。

「大体、構え方がおかしいんだよ、お前の場合。こうやって、腕を真っ直ぐにしなから、射線に対して真っ直ぐに視線を置いてだな……………」

そう言いながら、一夏は箒の身体を触って射撃姿勢を取らせる。

箒は仏頂面だったが、内心は大慌てだった。

(わああああつ！？ ち、近づ、近いっ！？ て、ててっ、手がっ、体に触れてっ！？ うっうっ、い、息が顔に掛かる……………離れ……………て欲しくは、ないけど)

「アイツ……………」

「一夏ってば、また……………」

ナチュラルに女心をくすぐる事をしている一夏を見て、神谷とシャルが呆れる様に小声でそう言い合う。

「こんな感じだな。うん、如何だ？ 分かったか？」

「う、うむ」

「じゃあ撃ってみるよ。ちゃんと狙えよ」

「わ、分かっている！」

つい語調を強くしてそう言い返した瞬間、引き金に指が触れて、コルク弾が発射された。

「お！ぬいぐるみが当たったな！！」

放たれたコルク弾は、クッションとしても使えそうな、少し大きめの1頭身のデフォルメされたペンギンに命中し、落下させた。

「おー、嬢ちゃんも上手い事やったな。がっはっはっ、今日は大損だ！！」

大将がまたも豪快に笑いながらぬいぐるみを箒に渡す。

「……………隣の達磨が良かったのだが……………」

「うん？」

「いえ、何でも……………」

その際に箒がそう呟いたが、慌てて誤魔化す。

狙っていた景品とは違った様だが、受け取った際の顔は、何だか妙に嬉しそうだった。

(ま……………及第点って、とこか)

そんな様子を見て、神谷はそう思う。

「えいつ！ ああ、駄目か……………」

と、そこで、シャルのそういう声が聞こえて来た。

見れば、コルク銃を構えたシャルが、必死に『とある景品』を落とそうとしている。

それは、イミテーションだと思われるが、ケースに入って本物そっくりの輝きを放っている指輪だった。

「今度こそ……………えいつ！……………ああ、また……………」

ISでは射撃戦を得意とするシャルだが、普通の銃とは違うコルク銃を扱いあぐねている様である。

そうこうしている内に、弾が尽きてしまう。

「ああ……………」

「ハハハハッ！ 嬢ちゃんはイマイチだったみたいだな！」

落ち込むシャルに大将が笑いながらそう言う。

と、そんなシャルの肩に、神谷の手が置かれた。

「シャル……………ここは俺に任せておけ」

そして神谷が力強く微笑みながら、シャルにそう言う。

「神谷……………」

そんな神谷の姿に頬を染めるシャル。

と、そこで……………

何を思ったのか、神谷は自分の分のコルク弾を全部手で握る。

「……………」

それを右手だけでお手玉して弄ぶと、シャルが狙っていたケースの入っている指輪を見据える。

「兄ちゃん？」

「神谷？」

「「「??？」」」

大将もシャルも、そして一夏達も神谷が何をするのか分からず困惑している……………

「……………そりゃっ!!」

何と神谷は、サイドスローで手に持っていたコルク弾を1つ投げ、見事ケースに入った指輪を叩き落とした!!

「んなっ!?!」

「「「「!?!?!」」」」

神谷の常識破りの射的に、大将も一夏達も目を丸くして驚いた。

「よっしやあつ! 大当たりだな!?!」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、兄ちゃん!?! そんなのアリか!?!」

「何だよ? ちゃんとコルク弾を当てて落としたろ? 文句あんの
かよ?」

ツッコんで来た大将に、シレッとそう答える神谷。

「た、確かにルール上は問題無いかもしれないけど……」

「相変わらず常識に捉われん奴だ……」

「スゲエ! スゲエぜ! アニキ!?!」

常識外れの神谷の射的に呆れる蘭と箒に、対照的に神谷に羨望の眼差しを送る一夏だった。

その後………

当たった液晶テレビが、やはり荷物として邪魔になった蘭は、兄の弾に引き取りに来てもらう為に、境内を出たところの道路まで行った。

一夏と方も、途中までそれに付き添って行き、もう少し出店を回ったかった神谷とシャルとは別れたのだった。

「漸く一夏と篤も2人つきりになれそうだな」

一夏と分かれてから暫くして、神谷がそう呟く。

「そっなの？」

その言葉に首を傾げるシャル。

「ああ、多分あのシスコンの弾の事だ。荷物を引き取りに来たところで、蘭の奴を連れ帰るに決まってるさ」

「そうなんだ……………大変だね、その蘭って子も、お兄さんの弾さんも」

「ま、一夏に惚れちまったのが運の尽きってヤツだな……………おっと！ 忘れるところだったな……………ホラよ、シャル」

とそこで、神谷は先程取ったケースに入った指輪を、ケースごとシャルに投げ渡した。

「うわっ、と!?!」

「お望みの品、確かに渡したぜ。この前やったプレスレット、壊れちまったんだろ？ ニセモンで悪いが、改めてプレゼントだ」

「あ、ありがとう、神谷」

照れながらケースを開けて、中に入っていた指輪を見やる。

「……………」

若干頬を紅潮させながら、その指輪をケースから取り出すと、やや躊躇いがちに左手の薬指の填めた。

(……………何時かは……………本物の指輪をこの指に……………!! わあゝ
っ!?!? 何考えてるの僕ゝゝ!?!)

思わずパパパパーンッ！な妄想を展開してしまい、シャルは慌ててそれを振り払う。

と、その時！！

石畳の僅かな段差に足を取られ、シャルの姿勢が前のめりになった。

「！？ あっ！？」

「おっと！！」

だが危機一髪、気づいた神谷が支える。

「大丈夫か？」

「う、うん……………ありがとう……………！ あ！？」

と、神谷に支えられながら足元に目をやったシャルが、何かに気づく。

「？ 如何した？」

それに釣られる様に、神谷がシャルの足元を見やると……………

シャルの右足の草履の鼻緒が切れてしまっていた。

「あゝ、鼻緒があ……………」

「あちゃゝ、やっちゃまったなあ」

「如何しよう……………」

途端に困った顔になるシャル。

すると……………」

「ホラよ」

何と、神谷がシャルの前で背中を向けて座り込んだ。

「えっ？」

「何やってんだ？ 早く乗れよ」

「え、ええっ……………っ!？」

シャルは思わず、驚きの声を挙げてしまう。

それで只でさえ集まっていた通行人の視線が、更に2人へと注がれる。

「ホラ、如何した？」

しかし、神谷はそんな視線など何処に吹く風と言う様に、シャルに重ねてそう言う。

「う、うん……………お、お邪魔します」

微妙に間違っている事を言いながら、シャルは覚悟を決めた様に、

一方、その頃……

一夏と箒は……

神谷の予想通り、蘭は荷物を引き取りに来た弾によって、半ば強制的に帰宅させられる事となり、一夏と箒は再び2人つきりとなっていた。

「おー、変わってないな。此処も」

現在2人は、花火を見る為の秘密の穴場……

神社裏の林の中の一角に来ている。

高い針葉樹の林の中には、1ヶ所だけ天窓の様に開けている場所があり、一夏と箒、千冬に束、そして神谷だけが知る秘密のスポットなのである。

一夏はワクワクしながら花火が始まるのを待っているが、箒はまたもそれどころではなかった……

(い、今は、一夏と私しかない……そ、それに、その、何だ…

……ふ、雰囲気も、良い………)

悶々としている様子で、そう考えている箒。

(こ、こ、これは、こっ、こっっ、告白のっ、チャンスではないだろっかつ!?)

祭りの喧騒も聞こえず、虫の音色しか聞こえないこの場所で、自分の心音がヤケにハッキリと聞こえる様な気がした。

(いや! でも! しかし! もし………もし断られたら………いや! そんな事はない筈だ! しっかりしろ! 篠ノ之 箒!! お前は自分を誰だと思っている!!)

無意識の内に、箒の思考内が神谷の言動の様になり始める。

(箒! 自分を信じる!! 私が信じる、私自身を!! そして!! ……私が信じる………織斑 一夏を!!)

やがてキツと決意を固めた表情となり、一夏を見やる箒。

既にその顔は湯気が出そうなくらい真っ赤っ赤である。

「い、一夏!!」

「ん?」

「わ、私は、お前がっ、すっ………」

好きだ………と箒が言おうとした瞬間!!

ドーンッ！！という、大きな音が轟いた。

「おおっ！？ 始まったな、花火！」

一夏がそう言いながら空を見上げる。

如何やら、打ち上げ花火は始まった様だ。

「す、す……………」

肩透かしを喰らわされてしまった筈は、一気に頭が冷えて行く……………

「ん？ 如何した、筈？」

一夏はそんな筈を怪訝そうな目で見る。

「……………」

それに答えず、筈はただ、両手をギュッと握って俯いた。

(うつうつ……………花火などに邪魔されるとは……………今日は諦めよう……………)

……………はあ〜)

筈は一気に脱力し、心の中で溜息を吐いた。

「あ！ そうだ……………」

するとそこで、一夏が突然、今まで寄った出店等で買ったたり得たりした代物を入れていた紙袋を漁り出す。

「？」

何だ？ と箒が首を傾げた瞬間……

「ハイ、箒」

一夏がそう言っつて、紙袋から取り出した物を、箒に差し出す。

それは、あの射的屋で箒が本当に狙っていた代物……達磨だった。

「!?!? コレは!?!?」

「本当はそれが欲しかったんだろ？ ホラ」

驚く箒の手に、一夏は達磨を握らせる。

「……………如何して？」

「ん？ それは……………っと」

何か言いかけて口を閉じる一夏。

(アニキが実は取ってたんだけど……………その事は言っなくなって言っただけだからなあ……………さて何て言おう……………)

「一夏？」

急に黙つて一夏に、箒は怪訝な目を向ける。

「うん、まあ、何だ……… 箒の事だったら、何でも分かるさ」

そこで一夏は咄嗟にそう答える。

……… 咄嗟でそんな言葉が出て来る辺りが天然誑しの所以だ。

「!?!?!?」

当然、そんな台詞を聞いた箒は、ポツポツポツと言つ音と共に顔を真つ赤に染める。

「あう、あう、あう………」

そのまま意味不明な言葉が口から漏れ出す。

「ほ、箒？ 大丈夫か？」

思わず一夏が心配する様にそう言う。

「い、一夏………」

真つ赤な顔を見せたくない様に、俯いて一夏の事を呼ぶ箒。

「お、おう?」

「その……… ありがとう」

そう言いながら少し顔を上げて、箒は呟く様に言った。

その瞬間に、また花火が天に咲き誇り、その光で頬を上気させた箒

の、はにかんだ上目使いな顔が照らし出される。

「!?(ドキッ!?)」

その顔を見た瞬間、一夏の胸が一際大きく高鳴った。

(ア、アレ!? ほ、篝……………だよな?)

一瞬目の前の少女が篝だと信じられず、一夏は内心で狼狽する。

「き、綺麗だな! 花火!!」

そんな内心の狼狽を鎮める様に、一夏は若干大声を挙げて、花火の方に向き直った。

「ああ……………」

篝も、まだ頬を染めたまま、一夏から貰った達磨を抱き締める様にして花火に向き直る。

(ううっっ!?! 如何しちまったんだあ、俺!?)

未だに狼狽が治まらず、一夏はガシガシと右手で頭を掻く。

すると……………

「……………」

何と篝が大胆にも、一夏の左腕にそっと自分の腕を絡めてきた!!

「!？」

「……………」

硬直する一夏。

箒も箒で、何も言葉が出ずにいる。

結局……………」

2人は花火が終わるまで、無言でその状態を続けたのだった。

一方……………

時間は花火開始の時刻まで戻り……………

草履の鼻緒が切れてしまったシャルを背負った神谷は、帰路に着いていた……………

「おっ？ 始まったか……………」

すると、背後の空で轟音と共に閃光が煌めいたのを見て、足を止めると振り返る。

「わあ……………綺麗だね」

夏の夜空に色取り取りに咲き誇る花火を見て、そう感嘆の声を漏らすシャル。

「だな……………やっぱり夏祭りのシメは花火よ」

神谷も、夜空に咲く一瞬の芸術に感心する。

「あの、神谷……………ホントにゴメンね。僕が慣れない草履なんかで来たせいで迷惑掛けちゃって……………」

「馬鹿野郎。迷惑なんて幾らでも掛けやがれ。幾らでも笑って許してやるよ」

またも申し訳無さそうにするシャルに、神谷は力強く笑ってそう言

う。

「神谷……………」

「それに……………コイツはコイツで結構役得だしな」

「??？」

「うん、柔らけえな」

神谷は何かの感触を確かめる様にそう言う。

「?……………!? あっ!？」

そこでシャルは、神谷が感じているのは、彼の背中に当てている自分の胸の感触である事に気づく。

「か、神谷のエッチ！」

「言っただろ。男は皆スケベな生き物だってな！」

「もっう……………」

頬を膨らませて抗議する様にそう怒るシャル。

「……………」

しかし、すぐにフツと笑うと、神谷の首に手を回して抱き付く。

「……………ありがとう、神谷」

「へっ……………」

耳元で呟かれた言葉に、神谷はニヤツと笑って見せる。

そのまま神谷は、シャルを負ぶったまま花火の明りに照らされて、
帰路に着いて行ったのだった……………

第21話『シャル……………ここは俺に任せておけ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

前回も言った通り、夏休み編エピソード篇に、神谷とシャルのカップルを紹介させていただきました。

この作品は、神谷×シャルですが、一夏×篇も応援してしますので。

浴衣姿のシャル、如何でしたか？

私の考えた浴衣の柄などが皆さんに受け入れられれば良いのですが

……………

さて次回はオリ話となります。

どんな内容になるかと言いますと……………

東映まんがまつりに様な内容になります。

まあ、熱血バトル展開になる事は約束致します。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第22話『このくらげの出来損ない野郎！ シャルを放しやがれ！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第22話『このくらげの出来損ない野郎！ シャルを放しやがれ！』

IS学園の夏休みも中頃まで過ぎた頃……………

太平洋側の日本近海で、異常事態が発生していた……………

日本に輸入する予定だった石油を積んだタンカーが、次々に原因不明の事故に遭ったのである。

そのどれもが、船体が粉々に成る程の強い衝撃を受けており、乗組員の多くが死傷した。

しかし、不思議な事に……………

運ばれていた筈の原油が海に漏れた形跡は無く、綺麗さっぱりになくなっていたのである。

そして、生き残った僅かな乗組員は、皆口を揃えてこう言っていた。

『怪獣に襲われた』……………と。

この怪事件に、日本政府は頭を捻るばかりである。

しかし、手を拱いているワケには行かず、海上自衛隊と航空自衛隊が共同で、日本近海の太平洋の徹底調査に討って出たのだった。

太平洋側の日本近海……

海上自衛隊の海洋観測艦隊と音響測定艦隊が、護衛艦隊に護衛されて、海上及び海中の調査を行っている。

上空には、空自のF-15とF-4の編隊が飛び交っており、海上でも海自の哨戒機及び対潜哨戒機が飛行している。

更に海中にも、潜水艦隊が居り、正に蜘蛛の子1匹見逃さない調査が行われていた。

「こちら護衛艦ひゅうが。各艦、定時報告を行え」

艦隊の指揮をしていたひゅうがの艦長が、通信機で全艦にそう呼び掛ける。

「こちら海洋観測艦わかさ。異常無し」

「音響測定艦はりま。同じく異常は見られず」

「こちらは潜水艦おやしお。異常無し。本日も海は穏やかです」

「哨戒ブラボー1。全く異常は見受けられず」

「対潜哨戒機アイダホ1。レーダー及びセンサーに影は見られず」

調査を行っている艦艇から、次々に異常無しの報告が返ってくる。

「艦長。航空自衛隊も、異常は発見出来ていないそうです」

「うむ……………」

通信士の報告を受けて、艦長は唸る。

(アレだけの事件が起きて……………コレだけの調査をしているのに、何も発見出来ないとあっては、自衛隊どころか日本政府のメンツは丸つぶれになってしまう……………)

そんな危惧が、艦長の心に生まれ始めていた。

と、その時……………

「まきしお！ まきしお！ 如何した、まきしお！？ 応答せよ！」

通信士が突然声を荒げる。

「！？ 如何した？」

「ハッ！ 潜水艦まきしおとの連絡が取れません！」

「何？」

「まきしお、応答せよ！ まきしお！ まきしお！」

艦長に報告すると、応答が無い潜水艦まきしおに向かって更に呼び掛ける通信士。

「一番近くに居る潜水艦は？」

「あ、ハイ！ あらしおが1番近くに居ます！！」

「すぐにまきしおを確認に向かわせる！！」

「了解！！」

艦長の命令をすぐに潜水艦あらしおに伝える通信士だった。

海中……………

潜水艦・あらしお……………

「ただいま深度1500……………間もなく、まきしおの反応が途絶えた地点です」

「うむ、レーダー手。レーダーとソナーに気を配れ」

「了解！！」

あらしおが、まきしおの姿を探して求める。

すると……………

「！？ 左前方30キロ地点に金属反応探知！！」

レーダー手が、その声を挙げた。

「取舵。反応が在った地点に迎え」

「と〜りか〜じ〜!〜!」

艦長の言葉に、操舵手は復唱すると同時に取舵を取る。

そしてそのまま30キロ地点に差し掛かる。

「反応があつた地点です」

「うむ……………海底の映像を出せるか？」

「水中カメラを起動します」

艦長の声に、レーダー手が水中撮影用のカメラを起動させ、海底の様子を映し出す。

合わせてサーチライトも点灯され、暗がりの海底が鮮明に映し出される。

現在あらしおが居る場所の海底は、巨大な岩礁が多く、下手をすれば接触してしまう危険もあった。

「岩礁が多いな……………」

「まきしおは岩礁に衝突したんでしょうか？」

「その可能性もある」

艦長と副長がそう言っている間にも、まきしおの搜索は続く。

すると……………

「!?!? 発見しました!?!」

リーダー手がその声を挙げた瞬間、海底を映していたモニターに、座礁しているかの様なまきしおの姿が映し出された。

「おおっ!?!」

艦長が思わず声を挙げる。

あらしおが座礁していると思われるまきしおへと近づく。

……………と、その時!?!

海底に無数に存在していた岩礁と堆積していた泥を押しつけて、巨大な『何か』が、姿を現した!?!

「!?!?」

「な、何だ、アレは!?!」

突如出現した巨大な『何か』に驚く艦長と副長。

『何か』の姿は、出現した際に舞い上がった泥で、良く確認出来ない……………

すると、その泥の中に居る『何か』から……………

！×7

そんな護衛艦隊を逃がさんとはかりに、怪物達は咆哮を挙げて追いかけて来る。

するとそこで、航空自衛隊の戦闘機部隊が、怪物に向かってミサイルを放つ。

やはり爆発せずに身体の中へ吸い込まれてしまったが、怪物の注意が戦闘機部隊へ向いた。

「今の内に退避を！！！」

戦闘機部隊から、ひゅうがにそう通信が送られる。

「すまない！ 全艦反転180度！ 緊急離脱！！！」

艦長はそれを受けて、全艦に退避を命じる。

「偵察機隊！ 怪物の写真を取れ！！ 恐らくコイツが一連の事件の犯人だ！！！」

「了解！！！」

戦闘機隊の隊長が、偵察機隊にそう命令する。

偵察機RF-4EとRF-4EJ部隊が、偵察用のカメラで、怪物の写真を取り始める。

と、その時……………

7匹の龍の様な怪物達が姿を見せていた海面が大きく盛り上がり…

……

まるで巨大なクラゲの傘の部分の様な姿をした、凶悪な顔つきの怪物が姿を現した！！

良く見れば、龍の様な怪物達の身体は、その巨大なクラゲ状の怪物に繋がっている。

「！？ あの龍の様な怪物は触手だったのか！？」

偵察機のパイロットが驚きの声を挙げながらも写真撮影を続ける。

やがて自衛艦隊が退避完了すると……

怪物は逃げる様に海底に姿を消したのだった……

その後……………

日本の防衛省では……………

日本近海の太平洋に出現した怪物に対しての緊急会議が開かれていた。

「如何ですか？ 教授？」

防衛大臣が、偵察機隊が撮影した怪物の映像を、生物学者の博士に見せている。

「これは……………間違いありません。『ドラゴノザウルス』です」

「『ドラゴノザウルス』？」

「古代に海中に生息していた恐竜の1種です。とつくの昔に絶命したと思っていました。まさか生き残りが居たとは……………」

海上自衛隊幕僚長にそう答えると、生物学者は興味深そうにドラゴノザウルスの写真を眺めている。

「古代の恐竜が生き残っていたなんて……そんな事がありえるですか？」

「確かに驚きの事ですが、ありえない事と断ずる事も出来ません。あのシーラカンスでさえ、現代に生きている事が発見されたのですから」

今度は陸上自衛隊幕僚長の問いにそう答える生物学者。

「その疑問はこの際置いておくとして……問題は何故、ドラゴノザウルスは石油タンカーばかりを狙って襲っているという事です」

「残念ながら、その辺の事は私にも分かりかねます……ただ、個人的意見ですが、ドラゴノザウルスが出現した事と何らかの関係があると考えています」

最後に航空自衛隊幕僚長がそう尋ねるが、その質問は生物学者にも分かりかねるものであった。

「それでドラゴノザウルスは今は？」

そこで防衛副大臣が、幕僚長達にそう尋ねる。

「ハッ！ 調査艦隊を攻撃した後、姿を消したドラゴノザウルスは三陸沖に出現し、航行中だったタンカーを襲撃しました」

「駆け付けた我が航空自衛隊が攻撃を行いましたが、残念ながら目標にダメージを与える事は出来ませんでした」

「このままでは被害が増える一方ですな……」

海上、航空、陸上の幕僚長達が口々にそう言う。

「もしこのまま石油が日本に入って来なければ、何れ日本は燃料不足で干上がってしまう。何としてもドラゴノザウルスを撃破しなければ……」

そう言うのと、防衛大臣は頭を抱えて考え込む。

ドラゴノザウルスを放置すれば、日本の死活問題となる……

しかし、自衛隊ではドラゴノザウルスには歯が立たない……

そのジレンマが防衛大臣の背中に重く押し掛かる。

すると……

「大臣……私から1つ提案があるのですが」

今まで会議の成り行きをジッと傍観する様に黙っていた統合幕僚長が、不意にそう言うって口を開いた。

「提案？」

「ハイ……IS学園にドラゴノザウルス討伐を依頼すると言うのは如何でしょうか？」

「IS学園に？」

統合幕僚長のその提案に、防衛大臣と副大臣、陸海空の幕僚長の視

線が集まる。

「ハイ。IS学園には各国に加え、篠ノ之 束が直接開発した専用機持ちが集結しており、更にはあのグレンラガンも居ます」

「うむ……………」

「何より、コレまでであったロージエノム軍の襲撃を悉く撃退しており、先月の『福音事件』を解決したのも彼等と彼女達です」

唸る防衛大臣に、統合幕僚長はそう言葉を続ける。

「しかしそれでは、日本政府がIS学園に借りを作る事に……………」

「日本の死活問題と比べれば些細な事と考えますが」

「むっっ……………」

更に渋る様な防衛副大臣の言葉をそう言って封じる

「……………至急総理に連絡を。日本政府としてIS学園に正式に任務を依頼して欲しいと」

「大臣！ しかし……………」

「事は一刻を争う。急ぎたまえ」

「！ ハッ！ 了解しました！！」

なお渋る防衛副大臣に、防衛大臣はそう言い放つのであった。

*

数時間後……………

日本政府の依頼を、IS学園側は受諾。

福音事件で活躍した、一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラの専用機持ち。

そしてグレンラガンの装着者である神谷。

更に、指揮官と補佐役として、千冬、真耶、リーロンの3人を加えた一向は、海上自衛隊の輸送用ヘリコプターHCH-101に乗せられ、洋上に居る護衛艦ひゅうがへと向かっていた。

「……………まさか怪獣退治の依頼が来るとは思わなかったな」

ローター音がけたたましく聞こえる機内で、一夏がそう呟く。

これまでロージエノム軍と何度も交戦したが、まさか怪獣の退治をする事になるとは、流石に予想出来なかった様である。

「面白れえじゃねえか！ 我が物顔で暴れ回るその怪獣野郎に見せやろっじゃねえか！ 日本にゃあ、俺達グレン団が居るって事をなあ！…！」

戸惑いの色を浮かべている一夏とは対照的に、神谷はまるで子供の様に燥いでいた。

「怪獣じゃなくて恐竜の生き残りでしょ、全く……………」

「しかし、また私達がこんな任務に関わる事になるとは……………」

「恐らく、福音事件での功績を評価しての事ですね。まあ、私の実力なら当然の事ですが」

燥ぐ神谷にツッコミを入れる鈴と、再びの軍事作戦参加に若干戸惑っている筈。

そして、何故か自慢げな言葉を吐いているセシリアだった。

「ワンダバ、ワンダバ、ワンダバダバダバダ」

「ラウラ？ 何口ずさんでるの？」

「日本では怪獣を対峙しに向かう時、『ワンダバ』と口ずさむのが恒例らしい」

「……………またクラリツサさんって人から聞いたの？」

「そつだ」

そう言つて再び『ワンダバ』を口ずさみ始めるラウラに、シャルは苦笑いを浮かべる。

「お前達！ 遠足に行くのではないぞ！！」

大事な作戦前だと言つのに、緊張感が見られない神谷達を見た千冬がそう叱りつける。

「お、織斑先生！ 穏やかに！ 穏やかに！」

「良いじゃないの。下手の緊張されてるよりは事が進め易いわよ」

真耶が千冬を押さえるが、リーロンの方は今の方が良いと言つ。

「クッ！ 全く……………」

「間も無く、護衛艦ひゅうがに到着します。降りる準備をお願いします」

ち、千冬が愚痴る様に呟いた瞬間、へりの操縦士がそう告げた。

「おおっ！ スゲエ！！ 本物のひゅうがだ！！」

と、窓の外を覗いて、ひゅうがの姿を確認した一夏が歓声に似た声を挙げる。

ミリオタというワケではないが、やはりああいう物は男の子の心を攪る様だ。

「ふむ…………アレが日本の自衛隊のひゅうがか……………」

現役ドイツ軍人であるラウラも興味を示す。

やがてへりは、ひゅうがの甲板へと着陸した。

ローターの回転が治まって行くと、後部のランプ・ドアが開き始める。

ドアが完全に開くと、千冬、真耶、リーロンの教師陣が先だって降り、続いて神谷と専用機持ち達が降りる。

「うん！ あ…………っ！！ 潮風が気持ち良いぜ！！」

長い間狭い機内に閉じ込められていたので、大きく伸びをした神谷が、顔に心地の良い潮風を感じてそう言う。

「お待ちしておりました。IS学園の皆さん。当艦、ひゅうがの艦長です」

とそこで、予め待っていたひゅうがの艦長が、千冬達の姿を見て、敬礼を送りながらそう言っ来て来た。

「どうも、初めまして。IS学園の教諭の織斑 千冬です」

「お、同じく！ 山田 真耶です！！」

「リーロン・リットナーよ。メカや専門的な事を担当してるわ」

それに対し、慣れた様子で挨拶をかわす千冬と、やや緊張している様子を露わにする真耶。

そして、何時もと同じ調子のリーロン。

「……………」

背後に居た一夏達も、艦の責任者と対峙していると言う事で、全員気を付けしていた。

軍人であるラウラに至っては敬礼を返している。

「へえ、アンタがこの船の船長さんか」

只1人、神谷だけは不敵な態度でそう言い放つ。

「神谷！ 貴様！！……………」

「ああ、いえいえ、構いませんよ。今回我々は貴方方をお願いをする立場なのでから」

神谷の不遜な態度を叱りつけ様とした千冬だったが、艦長がそう言うて制す。

「それじゃあ、早速本題に入りましょうか？」

そこでリーロンが、その話を切り出す。

「ドラゴノザウルスの現在位置は？」

「ハッ、先程空自から連絡があり、房総半島沖で再びタンカーを襲撃。空自の攻撃を諸共せず、再び海中に姿を消したとの事です。現在の詳しい位置は、残念ながら分かっていません」

真耶の質問に、艦長はそう答える。

「房総半島沖か……………」

「段々と日本に近づいて来てる感じね」

艦長の言葉に、千冬とリーロンが推察する。

「教官。進言に致します」

とそこで、話を黙って聞いていたラウラが、そう言いながら1歩前に出た。

「何だ、ラウラ？」

「ハッ！ コレ以上の被害拡大を防ぐ為にも、我々も哨戒任務に加えさせて頂けないでしょうか？」

千冬が尋ねると、ラウラは休めの体勢からそう進言を行う。

「確かに………ISのハイパーセンサーなら、海中に潜んでいるドラゴノザウルスを見つけるのもわけないかもしれないかもしれませんね」

真耶も、そう言ってラウラの意見を支持する。

「確かにな………よし、分かった。早速だが、お前達には任務に就いてもらう。各自ISを展開し、ドラゴノザウルスの搜索に当たれ。ただし、目標を発見しても単独で手出しはするな。連絡を行って仲間の到着を待て。コレは命令だ。良いな！」

「………了解!」「………」

「あいよー!」

決して1人で手出しをすると言う千冬の命令を聞き、一夏達はISを展開し、神谷もグレンラガンの姿となった。

そしてそのままひゅうがの甲板から飛び立つ。

「それじゃあ、別れて搜索しよう。その方が効率が良いし」

「そつだな………」

「よっしやあ! 誰が1番最初に見つけるか、競争だな!」

「言っとくけど、神谷。アンタには負けないわよ」

「私の事も忘れてもらっては困りますわね」

「皆、熱くなるのは良いけど、連絡を取り合う事は忘れないでね」

「よし、では行くぞ！」

一夏、箒、神谷、鈴、セシリア、シャル、ラウラはそう言い合って散開。

其々にドラゴノザウルス搜索へと繰り出した。

「頼もしいですな……………流石はIS学園の専用機持ち達と言ったところですか」

「まだまだ未熟な連中ばかりですよ」

その姿を見た艦長がそう言うと、千冬はフツと笑いながらそう返す。

「では、こちらへ……………本艦のCICへご案内致します」

艦長がそう言い、千冬達は一夏達の指揮を執る為、CICへと向かったのだった。

そして、神谷達グレン団がドラゴノザウルス捜索に加わって小1時間余りが経過……………

グレン団の一同が来るまでは、比較的活発に活動していた筈のドラゴノザウルスであったが、突然鳴りを潜めてしまった。

まるでグレン団の面々が来た事を感じたかの様に……………

一夏達の必死の捜索も虚しく、只々時間ばかりが過ぎて行っていた……………

そんな中……………

浦賀水道の入り口付近を捜索していたシャルは……………

「こちらシャルロット。現在浦賀水道入り口付近を捜索中。現在のところ、ドラゴノザウルスの姿は発見できず」

一通り哨戒を終えると、シャルはひゅうがに居る千冬へと通信を送る。

「了解した。他のメンバーからも現在ドラゴノザウルス発見の知らせは入っていない。引き続き捜索を続ける」

「了解」

千冬からの応答を聞き、シャルは更に捜索を続行する。

「ん？ アレは？」

すると、海上に何かを発見したシャルは、望遠を使ってそれを拡大目の前に映し出す。

それは、釣りに来ていたと思われる、個人のクーラーだった。

如何やら、故障を起こしているらしく、燃料が海へと漏れ出しているのが確認出来る。

「個人のクーラーか。故障してるみたいだけど……………」

放っておくワケにも行かず、助けに行こうとシャルは高度を落とす始めた。

すると……………」

故障しているクーラーを、海中から見据えている巨大な影が在る……………」

その影は、海中からドンドンと浮上して来て、やがて海面にその巨大な姿を現した！！

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………」

ドラゴノザウルスだ！！

「！！ ドラゴノザウルス！！」

「!? シャルロットが危ないぞ!!」

更にラウラが、食べられそうになっているシャルの姿に気づき、その声を挙げる。

「シャル!!」

「このくらげの出来損ない野郎! シャルを放しやがれ!!」

一夏と神谷が、ドラゴノザウルス目掛けて突っ込んで行くところですが、

「ちょっと! 2人供落ち着きなさい!!」

「ドラゴノザウルスはその柔らかい身体で、実弾兵器を無力化してしまうのですわ」

鈴とセシリアがそう言って2人を止める。

「となると、ビームやレーザーでの攻撃。若しくは刃物を使ったの切断攻撃しかないか……………」

「兎に角攻撃だ! シャルロットを助けるんだ!!」

ラウラがそう考察していると、箒が雨月から刺突攻撃でレーザーを放出した!!

「喰らいなさい!!」

第22話『このくらげの出来損ない野郎！ シャルを放しやがれ！！』(後書き

新話、投稿させていただきました。

夏休み編、天元突破版ストーリー！。

名づけるなら、『決戦！ ドラゴノザウルス！！』ってところですかね。

東映まんが祭りで、スパロボの先駆け的存在となった映画『グレンダイザー ゲッターロボG グレートマジンガー 決戦！ 大海獣』の敵役『ドラゴノザウルス』に登場してもらいました。

何と言うか……………

夏休みだけに、劇場版的な話にしてみようと思い、こんな対決を思いつきました。

グレンラガン&ISVS大怪獣の戦いって面白そうだなと。

シャルが吞まれてしまいましたが、救出と決着は次回になります。

楽しみに待っていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第23話『アイツの中にはシャルが居るんだぞ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第23話『アイツの中にはシャルが居るんだぞ!!』

突如、日本近海の太平洋に出現した、太古の生物『ドラゴノザウルス』

石油タンカーを目の敵の様に狙い、日本に入る筈だった石油を奪い去った。

自衛隊の攻撃も寄せ付けないドラゴノザウルスに討伐に……

福音事件での功績を買われ……

神谷や一夏達、グレン団が駆り出される。

しかし、そんな中……

ドラゴノザウルスに襲われそうになったクルーザーを助けようとしたシャルが……

ドラゴノザウルスに食べられてしまった。

救出を試みた神谷達だったが、無情にもドラゴノザウルスは……

シャルを飲み込んだまま、海底深くへと姿を消してしまった。

現在、海上自衛隊と航空自衛隊が懸命な搜索を続けているが、未だにその姿は発見出来ていない……

神奈川県・横須賀市……

海上自衛隊の横須賀基地……

その会議室にて……

「……………」

一夏達が、沈痛な面持ちで沈黙している。

皆、ドラゴノザウルスに飲み込まれてしまったシャルの事を思っているのだ。

「まさか……………デュノアさんが……………うっぐ……………」

真耶も悲しみの表情を浮かべ、溢れる涙を拭う。

「チキシヨウがあー!!」

神谷は苛立ちを露わにして、会議室の壁を殴り付ける!!

「……………何時までも悲しんでは居られんぞ。ドラゴノザウルスは未だに健在なんだ。対策会議を始めるぞ」

と、そんな一同に向かって、千冬が冷静そうな様子でそう言う。

しかし、その手は血が出んばかりに握り締められていた。

「シャル……………オメエの仇は必ず俺が取ってやる!!」

動揺を露わにしている一同を鎮める様に、千冬がそう叫ぶ。

「だから生きてるんだってば〜っ!!」

再び、会議室にシャルの声が響き渡る。

「!?! 通信端末から!?!」

自分の傍から声が聞こえた気がした真耶が、通信端末を取り出すと、シャルからの通信を受信している事に気づいた。

「貸せっ!!」

即座に神谷がその通信端末を引っ手繰る!

「シャル! シャル! 生きてたのか!!」

「そうだよ、神谷! 僕まだ生きてるよ〜!!」

神谷が声を荒げて通信端末に向かってそう叫ぶと、シャルの声が返って来た!

「! シャルロット!!」

「無事だったのか!!」

一夏と箒達も、その声を挙げて、神谷の周りに集まって来る。

「デュノア、状況を報告しろ」

と一足遅れて傍に寄った千冬が、シャルにそう問い質す。

「あ、織斑先生。分かりました……………僕は今、ドラゴノザウルスの胃袋の中に居ます。石油やタンカーの残骸がそこかしらに転がっています」

「石油が？」

ドラゴノザウルスの胃の中が石油で満たされているという報告に、千冬が首を捻る。

「まさか……………石油を食ってるワケ？」

「まさか！？ 石油を食用している生物なんて聞いた事ありませんわ」

鈴が思わずそんな事を口走るが、セシリアがそう言っただけで否定する。

「だが、そうだとすれば……………今までドラゴノザウルスがタンカーばかりを狙って襲っていた理由も納得が行く」

しかしラウラが、今までのドラゴノザウルスの行動を顧みて、そう述べる。

「デユノア。そこから脱出出来るか？」

「無理です。胃の中は石油が充満していて、火器やスラスターを使用すれば、引火で大爆発してしまいます……………！？ うわああああっ!?!?」

通信端末はバラバラになり、真耶が涙目で声を挙げた。

……………合掌。

「待ってる、シャル！ 今俺が助けに行くぞ！！」

「神谷、待……………」

「待つてよアニキ！！」

飛び出して行こうとした神谷を、千冬が止めようとしたが、それよりも先に一夏が止めた。

「何で止めやがる！？ 一夏！！」

「落ち着いてよ！ シャルロットを助けたのは俺も一緒だよ！
けど！！ 皆の力を合わせなきゃ、あのドラゴノザウルスは如何にか出来ないよ！！」

「ええいつ！！」

一夏のその言葉で、神谷は押し止まる。

「……………」

神谷を止めそこなった千冬は、行き場の無い怒りに不機嫌そうな表情を浮かべる。

と、そこへ……………

「！ ロージエノム！！」

「ピンポン！ 正解！！」

ロージエノムの事を思い浮かべた神谷を指差し、リーロンはそう言う。

「また奴等の仕業か……………」

「狙いは恐らく、日本の石油を断って、エネルギー問題を引き起こす事でしょうね」

千冬が苦々しげに呟き、リーロンがそう推察した瞬間……………

横須賀基地に警報が鳴り響いた！！

「……………！！？」

「ドラゴノザウルスが浦賀水道に出現！ 現在、東京湾を目指して北上中！！」

一同が驚いた瞬間、そう言うアナウンスが流れる。

「！？ 東京湾だと！？」

「如何やら、タンカーだけでは飽き足らず、東京湾付近にある石油コンビナートにも目を付けたみたいね」

「そんな事をされたら、日本は本当に干上がっちゃう！！」

「皆さん！ 此処でした！！」

と、慌てる一同の元に、今度はひゅうがの艦長が現れた。

「艦長さん！！」

「自衛隊の動きは！？」

「既に航空自衛隊が先行してドラゴノザウルスへ攻撃を開始して
います。我が海上自衛隊も東京湾に集結中。更に沿岸部にも陸上自衛
隊の部隊が展開し、ドラゴノザウルスを東京湾で撃滅する作戦です」

「ちよつと待てよ！ アイツの中にはシャルが居るんだぞ！！」

と、自衛隊の作戦を聞いた神谷が、艦長へと食って掛かる。

「…………… IS1機と1人の人命で日本が助かるなら安い犠牲だ……
…政府はそう判断した様です」

「！！ テメエ！ ふざけんじゃねえ！！」

艦長のその言葉を聞いた途端、神谷は艦長の胸倉を掴み上げた！！

「アニキ！！ 駄目だ！！」

慌てて一夏が神谷を羽交い絞めにする。

「何が安い犠牲だ！！ んな考えクソ喰らえだ！！ 俺はシャルを
助ける！！」

一夏に羽交い絞めにされたままそう言っただけで暴れる神谷。

「……………10分です」

「あんっ!?!」

「えっ!?!」

「……………!?!」「……………」

と、不意に出た艦長の言葉の意味が理解出来ず、首を傾げる神谷達。

「10分間だけ、私が何とか攻撃を遅らせます。その間に貴方方の仲間を救出して下さい」

制服を正しながら、艦長はそう言葉を続けた。

「!?! 艦長さん!?!」

「アンタ……………」

「私は自衛官です。自衛官の使命は……………国を守り……………そして人を助ける事です」

驚く一夏と神谷に向かって、艦長は芸術的で色気すら感じられる見事な敬礼を送る。

「……………ありがとうよ。よし! 行くぞお前等!?!」

「……………おっ!?!」「……………」

艦長にそう礼を言つと、神谷は会議室から飛び出し行き、一夏達もそれに続いた。

「い、良いんですか？」

真耶が心配そうに艦長にそう尋ねる。

確かに、艦長がやろうとしている事は明らかな命令違反であり、良くても降格……………

下手をすれば免職処分も有り得る事である。

「私も昔はやんちゃでしてね……………ああいつ若者を見ると、つい応援したくなるのです」

それに対し、艦長は制帽の唾を下げながら、フツと笑つてそう言つた。

その顔に、後悔や躊躇いの様なものは見えない。

「……………ありがとうございます」

そんな艦長の顔を見て、千冬は頭を下げる。

「さて……………後はあの子達しだいね……………」

そしてリーロンは、飛び出して行った神谷達を見ながらそう言つたのだ。

グレンラガンはグレンウイングを分離させ、ドラゴノザウルスの口内へと飛び込んだ！！

「！？ 飛び込んだ！！」

「アニキ！！」

相変わらず無茶苦茶な行動に出た神谷に、箒と一夏が驚く。

「一夏！ 神谷の奴を信じなさい！！」

とそこで、鈴がそう言って、連結した双天牙月を投擲し、龍の様な姿をした触手を1本切断する！！

「あの方は何時、どんな状況でも、必ず何とかして来た方です！！」

続いてセシリアがそう言い、ドラゴノザウルス本体の顔面にスターライトmkIIIIを撃ち込む！！

「今はアイツに言われた通りに、コイツを足止めするんだ！！」

最後にラウラがそう言い、ワイヤーブレードで龍の様な姿をした触手を2本纏めて斬り落とす！！

「そうだな……………任せたぞ、神谷！！」

「アニキ！ 頼んだよ！！」

それを受けて、箒と一夏も、雨月・空裂と雪片式型を構えてドラゴ

ノザウルスへ向かって行った。

一方………

ドラゴノザウルスの体内へと飛び込んだグレンラガンは………

「おおあああああああああー………っ!?!?」

食道内をゴロゴロと転がりながら、ドンドンと胃の方へと近づいて行く。

「おおあああああああああー………っ!?!?」

やがて胃へと到達し、食道の出口から胃の中に溜まっていた石油の中に落下する。

「プハッ!! あゝ、クソッ! ヌルヌルしやがる………」

油面の上に出ていたタンカーの残骸の上に攀じ登り、身体に着いた石油を払いながら、愚痴る様に神谷はそう言う。

「此処がコイツの胃の中か……油くせえなあ、オイ」

胃の中に充満する油の臭いを嗅ぎながら、シャルの姿を探すグレンラガン。

「シャルーッ！ 何処だーっ！？ 何処に居やがるーっ！！」

大声でそう呼び掛けるが、シャルからの返事は返って来ない。

「まさか溶かされちまったって事はねえだろうな……冗談じゃねえぞ、オイ！！」

一瞬嫌な想像をしてみまい、神谷は焦りながら、油面から出ているタンカーの残骸から残骸へと跳躍し、シャルの姿を探し出す。

「シャルーッ！！ 返事しろーっ！！」

「神谷っ！？」

するとそこで、グレンラガンが居る位置から右前方のタンカーの残骸の中から、シャルの声が聞こえて来た。

「！ そこか、シャルー！！」

すぐさま、グレンラガンはその残骸へと跳躍する。

「シャルー！！ 無事か！？」

「だ、駄目！ 来ないで、神谷ー！！」

神谷がそう言うのと、残骸の陰に居ると思われるシャルから、そんな声が返って来た。

「ああ！？ 何言ってるんだ！？ 早く脱出するぞ！！」

そう言ってグレンラガンは、残骸の陰を覗き込もうとする。

「だ、駄目えっ！！」

「シャル！！」

シャルの制止も聞かず、残骸の陰を覗き込んだグレンラガンが見たものは……………

「み、見ないでっっっ！！」

悲鳴のような声を挙げて縮こまっている、全裸のシャルの姿だった！！

「！？ ブホッ！？」

思わぬサービスシーンに、グレンラガンの鼻から血が噴き出す。

「お、オメエ！ ISとISスーツは如何したんだよ！？」

グレンラガンは鼻血を流す鼻を押さえながら、シャルにそう問い質す。

「エ、エネルギーが無くなっちゃって……………装甲も溶かされる一方だったから、コアが溶かされる前に解除したんだよ。そしたら今度はISスーツが溶かされちゃって……………」

シャルは顔を真っ赤にしながらそう説明する。

「と、兎に角、脱出するぞ!!」

そう言いながらシャルに近づくとグレンラガン。

「駄目！ 近づかないで!!」

シャルは近づいて来たグレンラガンの顔を手で抑える。

「むぐつくっ!?!? んな事言ってる場合か！ 大体、寮の風呂で散々見せただろうが!!」

「あの時とは違っただよ!!」

「ええいつ！ 埒が明かねえ!!」

と、グレンラガンがそう言った瞬間……

その姿が緑の光に包まれて、神谷の姿に戻った。

「神谷？ うわっ!?!」

首を傾げたシャルに、神谷がいつも羽織っていたマントが掛けられる。

「そいつで隠しとけ！ それなら良いだろう!」

「う、うん……」

神谷に渡されたマントを、身体を隠す様に巻き付けるシャル。

「よっし！ 脱出するぞー！！」

そうやって神谷は、再びグレンラガンの姿となり、シャルをお姫様抱っこで抱き上げた。

(……………神谷の匂いがする)

抱き上げられたシャルは、コッソリとマントに染み込んでいた神谷の香りを堪能している。

「確り捕まってるよ、シャル！」

「!? う、うん!! でも、神谷。一体如何やって脱出するの?」

「決まってるんだろ!! ブチ破るんだ!!」

と、シャルにそう答えたかと思うと、グレンラガンの額の部分にドリルが出現。

「行くぜえ、シャル!!」

「うん!!」

そう答えると、シャルはグレンラガンにしっかりとしがみつく。

「ギガドリルトルネエエエエエエエエエエエー……ドッ!

」!

「ウイングクロス!!」

そして空中で十字となり、緑色の噴射を上げて飛翔する。

「待たせたな、お前等!! シャルもこの通り無事だぜ!!」

「皆! 心配掛けてゴメン!!」

一夏達に向かって、神谷とシャルがそう叫ぶ。

「シャルロット! 良かった〜!」

「良くぞ御無事で……………」

「これで遠慮する必要は無くなったな」

それを聞いた鈴、セシリア、ラウラがその声を挙げる。

「神谷! お前はシャルをひゆうがへ連れて来い!! そのままで戦えんだろ!!」

「了解つと!!」

千冬からの通信にそう答えると、グレンラガンはひゆうがへと飛んだ。

「よし! シャルロットを助け出せたんなら、もう容赦しないぜ!!」

「一斉攻撃を掛けるぞ!!」

「クウツー!!」

慌てて離脱しようとする2人だったが、1歩間に合わず、鈴が左足、セシリアが右足を噛み付かれ、掴まえられてしまう。

「!?!」

「しまっ……………」

するとドラゴノザウルスは、2人を掴んだまま振り回し始めた!!

「うわあああああああああ—————っ!?!」

「きゃあああああああああ—————っ!?!」

振り回されている鈴とセシリアから悲鳴が挙がる。

「鈴! セシリア! うおおおおおおお—————
—————!」

一夏は、2人を掴まえている龍の様な姿をした触手を、雪片式型で斬り裂く!!

「きゃあああああああ—————っ!?!」

振り回されていた2人は、そのままブツ飛んで行き、東京湾の波止場に叩き付けられた!!

「2人供! 大丈夫か!?!」

「!? と、飛んでる!?!」

「奴め……………飛行能力まで兼ね備えているのか」

「マズイわね。アイツの中には石油が充満してるんでしょ? もし爆発でもしたら……………」

その様を見た真耶、千冬、リーロンが戦慄した様子を見せながらそう言う。

すると……………

「石油?……………! それだ!」

神谷が何かを思いついた様に大声を挙げた。

「うわっ!?! 如何したの、神谷?」

突然大声を挙げた神谷に、シャルが驚きながら尋ねる。

千冬達の視線も、グレンラガンに集まる。

「奴等の腹が石油でいっぱいなら、そこを徹底的に叩きゃあ、アツと言う間に大爆発して一気にカタが着くってワケだ!」

「! 成程、確かに……………」

神谷のその発想に、千冬も納得が行った様な表情になる。

「で、でも! あんな巨大な生物の胃袋が何処に在るのか、外から

見ただけじゃ……………」

「いえ、例えどんな生物でも、基本的な構造は変わらないわ……………
胃袋は背中には無いわ」

「！　そう言えば！！」

真耶はそう疑問を呈するが、リーロンがそれに答える。

「よおしっ！　見てろよ！　クラゲの出来損ない野郎め！　今にデ
ツケエ花火を打ち上げてやるぜ！！」

神谷がそう叫ぶと、グレンラガンは閉じていたグレンウイングを再
展開。

緑色の噴射を挙げて、空へと舞い上がった。

「あ！　神谷！！　急がないと……………」

それを見て、ISスーツへの着替えを終えたシャルも、急いでエネ
ルギーの補給と予備パーツの組み立てへ向かった。

「山田くん、CICへ戻るぞ。織斑達に作戦の説明をしなければ」

「は、ハイ！」

「ココからが本当の戦いね」

そして千冬達もそう言い合って、ひゅうがのCICへと戻って行く。

「アニキ！ 作戦って!？」

漸く海から上がって来た一夏が、グレンラガンにそう問い質す。

「お前達、良く聞け。これから作戦を説明する」

とそこでタイムリーな、千冬からの通信が送られて来る。

そして、神谷が考えた作戦が、全員に伝えられる。

「……………と言うワケだ。ドラゴノザウルスを東京湾上空から海上へ誘き出せ！ そこで奴の腹へと集中攻撃を行い、撃破するんだ!！」

「了解!！」

「任せとけ!！」

千冬の説明を聞き、一夏達と神谷がそう返事を返す。

「お待たせ!！」

とそこで、エネルギーの補給と予備パーツの組み立てを終えたシャルが駆け付けた。

「アタシ達の事も!！」

「忘れてもらっては困りますわ!！」

更に、波止場へ叩き付けられていた鈴とセシリアも現れる。

「今だ！！」

「皆！ 頼む！！」

「……………うおおおおおおお—————っ！！」
「……………」

神谷と一夏がそう叫んだ瞬間！！

箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラは、その石油が噴き出している部分目掛けて一斉攻撃を見舞った！！

その攻撃で石油が引火！！

更に引火させた火が、腹の中まで到達し、先程セシリアと鈴が呑みこせたガスタンクを爆発させた！！

後は爆発が爆発を呼んで連鎖して行き、ドラゴノザウルスの身体の彼方此方が破れて、火柱が拳がる！！

やがて、一際大きな爆音を響かせて、ドラゴノザウルスは遂に大爆発！！

無数の肉片となって、海中へ没して行った……………

「……………ゼエ……………ゼエ……………ゼエ……………ゼエ……………」
「……………」

大激戦の後で、誰もが乱れた息を整えるのに、必死になっていた。

「やった………のか？」

「ドラゴノザウルスの生体反応ゼロ………完全に沈黙したわ」

「やった！ やりましたよ、天上くん達がやりました！！」

ひゅうがCICに居る千冬達からも、通信機のスイッチを入れっぱなしなのか、そういう声が聞こえて来る。

沿岸に配置していた陸上自衛隊、海上の艦に居る海上自衛隊、そして空に居る航空自衛隊の面々からも歓声が挙がる。

こうして………

石油を食う現代に蘇った怪物………

ドラゴノザウルスは………

神谷達、グレン団の活躍により………

再び海底で眠りに就いたのだった………

その日の夕方……………

神奈川県・横須賀市……………

海上自衛隊の横須賀基地……………

護衛艦の停留港に停泊しているひゅうがの甲板にて……………

「今回、ドラゴノザウルスを倒す事が出来たのは貴方方のお蔭です。本当にありがとうございます」

帰りのへりに乗り込もうとしている神谷達に向かって、ひゅうがの艦長がお礼を言いながら敬礼を送った。

「いえ、我々は与えられた任務を果たしたに過ぎません……………」

「そうそう！ 気にすんなよ！ ロージエノム軍と戦うのは、グレイン団の使命だぜ！！」

千冬が改まって答えていると、神谷がそう口を挟んで来る。

「神谷……………お前は黙っている」

「……………あの、皆さん。実は、今回の作戦に関わった自衛官達が、皆さんにお礼を言いたいと言っていてまして……………」

と、そんな神谷に千冬が辟易していると、ひゅうがの艦長がそんな事を言ってきた。

「えっ？ いえ、我々は別に感謝されたいから戦ったワケじゃ……………」

「そう言わずに受け取って貰えませんか？ 何分、自衛官と言うのは……………堅苦しい連中が多いのですが……………」

「気をつけええええええええええー……………っ！！」

ひゅうがの艦長がそう言った瞬間、港の方から声が聞こえて来た。

「……………！？」 「……………」

神谷と一夏達が驚きながら港を見やると、そこには……………

「此度の件に於いて！ その身の危険も顧みず！ ドラゴノザウルス討伐に尽力を尽くされたIS学園の勇敢なる戦士達に！ 敬礼！」

今回の作戦に参加した海上自衛隊と陸上自衛隊の自衛官達が、神谷

に向かって一斉に敬礼を送って来ていた。

「……………」

その圧巻と言える光景に、一夏達は言葉を失う。

そこで、更に……………

空の方からも轟音が聞こえて来たかと思うと、航空自衛隊の戦闘機が、敬意を示す編隊飛行で飛んで来た。

「へへっ……………ワルかぁねえな」

そんな一連の光景を見て、流石の神谷も、少々照れた様な様子を見せながらそう呟く。

「本当に……………ありがとうございました!!」

最後に、ひゅうがの艦長が再び敬礼を送って来た。

一夏達は戸惑いながらも、その敬礼に自分達も敬礼を返す。

そして、その後……………

一同はへりに乗り、IS学園へと帰還して行った……………

ひゅうがの艦長と、作戦に参加した自衛官達は、そのへりの姿が見えなくなるまで、敬礼を続けていたのだった。

UNU

第23話『アイツの中にはシャルが居るんだぞ!!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

ドラゴノザウルス編、決着です。

ドラゴノザウルスに吞まれたシャルを、決死の覚悟で救出に向かった神谷。

救出は無事成功し、グレン団は改めてドラゴノザウルスの撃破に掛かる。

しかし、驚異的な再生能力を持つドラゴノザウルスの前に苦戦を強いられる。

そこで神谷が一計を案じ、ドラゴノザウルスが石油を主食としている事を逆手にとって、大爆破作戦を決行する。

グレン団一同、一丸となって作戦に掛かり……………

遂にドラゴノザウルスの撃破に成功するのだった。

次回にオリ話を1話挟んだ後、いよいよ2学期……………

学園祭&生徒会長編となります。

この辺から大分オリジナル要素が強くなってきますので、予めご了承下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第24話『集まったかあ！ グレン団の野郎共!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第24話『集まったかあ！ グレン団の野郎共!!』

ドラゴノザウルスの騒動から暫し日が経ち……………

IS学園の夏休みも、残り僅かとなっていた。

生徒達は、残り少ない休みをエンジョイする者と溜めていた宿題を大慌てで片付ける者に分かれ、残る休みを過ごしている。

帰省していた生徒達も、寮へと戻り始めている。

中には帰省して、そのまま退学した者達も少なからず居たが……………

そんな中……………

学園に居る生徒達の間で……………

ある噂が持ち切りとなっていた。

その噂とは……………

IS学園・学生寮……………

食堂……………」

「幽霊船？」

一夏が、冷やし中華を食べている手を止めてそう言う。

「ガツガツ！ んがんが！」

その隣では、10杯目となるカツ丼を平らげようとしている神谷の姿も在った。

因みに、その隣にはシャルが居り、一夏の方も箸を中心にセシリア、鈴、ラウラが集まっている。

「そうなんだよ。私は見た事無いけど、皆は見たって」

その一同と一緒に席に居るのはほんこと本音が、ゆったりとした口調でそう言う。

「わ、私、そう言うお話はちょっと……………」

「ぼ、僕も……………」

その手の話が苦手なのか、セシリアとシャルが怖がっている様な様子を見せながらそう言う。

「どうせ何かの見間違いでしょ？」

「非科学的だ」

対照的に、その噂をそう一刀両断する鈴とラウラ。

「ホントだよ〜！ 私の友達も見たって言ってるし〜！」

（友達が見たっていうのって、怪談話の上等文句だよな……………）

本音は手をバタバタさせながらそう言うが、一夏は内心でそう思っ
てしまう。

「一体どんな噂なんだ？」

とそこで、筈が改めてそう尋ねる。

「え〜とね……………草木も眠る丑三つ時に、IS学園が面している海
の沖合に……………何の前触れも無く霧が掛かって、巨大な船が現れる
そうなの」

「益々眉唾物ね……………」

のほほんは思いつきり怖い迫力を出しながら語るが、その姿は全然
怖くなく、寧ろ鈴から呆れの声が拳がった。

「む〜！ 少しは怖がってよ〜〜！……………あ、そう言えば……………そ
の幽霊船にはスツゴイお宝が積まれてるって噂もあるんだよ」

「……………お宝？」

と、今までマイペースに食事が続けていた神谷が、お宝と言う単語
に反応して、動きを止める。

「？ アニキ？」

「フッフッフッ……………」

首を傾げる一夏の横で、神谷は不気味な笑いを響かせるのだった…

……………

その深夜……………

IS学園が面している海の波止場にて……

「集まったかあ！ グレン団の野郎共！！」

「お、お………」

「……………」

波止場の船止め足に足を掛けている神谷が、集合している一夏達にその声を掛けるが、返事が返って来たのは一夏だけだった。

篤、セシリア、鈴、ラウラは不機嫌そうな表情を浮かべており、シヤルも苦笑いを浮かべている。

「良いかあ！ 不敵にもこのグレン団様が居るIS学園の海に！
幽霊船の野郎が現れやがった！！」

そんな一同の様子も気にせず、神谷は演説する様にその言葉を続ける。

「学園の連中を怖がらせている幽霊船を放つてはおけねえ！！
一丁、俺達グレン団が悪霊退治と行こうぜ！！ ついでに幽霊船のお宝も頂いちまおう！！」

「アンの目的はソッチでしょうが」

お宝と言う単語が出た瞬間、鈴がそう指摘する。

「くだらん……………幽霊など非科学的だ。存在する筈が無い」

「夜更かしは美容の大敵なんですわよ。私、帰らせていただきます」
ラウラとセシリアがそう言い、寮に帰ろうとする。

「ちょちょちょよ！ 待ってくれよ！ ラウラ！ セシリア！」

一夏が慌てて止める。

「一夏！ お前から神谷に何か言っただけでやれ！」

「コッチには夜中に叩き起こされて、いい迷惑なのよ！」

しかし、そんな一夏に箒と鈴が食って掛かった。

「い、いやだって………アニキがあんなったら止まらないのは2人が良く知ってるだろ？」

「だからと言って限度があるぞ！！（わ）（わ）」

「うひいっ！？」

ステレオで怒鳴られ、一夏は思わず竦む。

「シャルロットさん！ 貴方も何か言っただけでやいなさい！！」

「そうだぞ、シャルロット」

「え、えっ………」

セシリアとラウラも、シャルにそう言って同意を呼び掛ける。

シャルは如何したものと困惑する。

すると、その時……

「ピピピピピピ……」

突然、不気味な笑い声が辺りに響き渡った。

「!? ちょっと一夏! 変な声出さないでよ!」

「えっ!? いや、俺何も言っていないぜ?……」

鈴が一夏に抗議するが、一夏は何も言っていないと言う。

「何っ?」

と、箒が驚きの声を挙げた瞬間……

神谷達が居る波止場から見える沖合に……

何の前触れも無く、突然霧が掛かった!!

「……!?」

箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラが驚く。

「ア、アニキ!!」

一夏も狼狽しながら神谷に声を掛ける。

「出やがったな」

只一人神谷は、待っていたと言わんばかりに笑みを浮かべる。

やがて、沖合に立ち込めていた霧の中に……

巨大な船の様なシュルエットが浮かび上がった!!

「……で、出たあああああああ……」

箒、セシリア、鈴、シャルが悲鳴を挙げる。

そして即座に、箒、セシリア、鈴が一夏の後ろ。

シャルが神谷の後ろに隠れた。

「レーダーにもセンサーにも反応が無いだと……馬鹿な……」

一方ラウラは、ISのセンサー部分だけを展開して、霧の中に浮かんでいる船の正体を確かめようとしたが……

こんなにもハッキリとシュルエットが浮かんでいるにも関わらず、レーダーやセンサーには何の反応も浮かんでいなかった。

「ま、まさか……本当に幽霊船が……」

「あの中にお宝が有るのか……よっしゃあつ!」

震えている一夏とは対照的に、神谷はワクワクを100倍にするどパーティーの主役になろうとするが如く、波止場から飛び降りて、下に停めてあった大きめの手漕ぎボートに乗り込む。

「!? 神谷!？」

「ちよっ!?! アニキ!?! 何する気だよ!?!」

シャルと一夏が、慌ててそう問い掛ける。

「決まってるだろ! あ幽霊船の幽霊どもを退治して、お宝を頂戴するのよ!?!」

ボートを係留していたロープを外しながら、神谷はそう言う。

「そんな! 無茶苦茶だよ!?!」

「そうだよ神谷! 本当に幽霊が出て来たら如何するの!?!」

一夏とシャルは、そう言って止めようとしたが……

「決まってるだろ! ブン殴るまでよ! 幽霊と喧嘩が出来るんなら、滅多にねえ機会だから!?!」

神谷は当然の様にそう言い返した。

この男に怖い物なんてあるのだろうか?

「アニキ!?!……ああ、もう!?!」

とそこで、一夏が髪を掻きむしると、神谷の乗っているボートに飛び乗る。

「!? 一夏!」

「一夏さん!」

「一夏!」

そんな一夏の行動に驚く箒、セシリア、鈴、ラウラ。

「俺も行くよ、アニキ。アニキだけ行かしたとあっちゃあ、弟分の名が廃る!」

「そう来ると思ったぜ、一夏!」

一夏と神谷は、そのまま2人で出港準備に入る。

「ええい、全く! お前等という奴は!」

「神谷! 僕も行くよ!」

とそこで、箒とシャルがボートに飛び乗る。

「箒!? シャル!? ああ、もう!」

「わ、私も!」

「嫁が行くのなら、私もだ!」

そして更に続いて、鈴、セシリア、ラウラがボートに飛び乗った。

「おわっ、ととっ！？ 乗り過ぎだよ！？」

次々にボートに乗り込まれた為、転覆しそうになり、一夏が思わずそう言う。

「さあ、行くぜ、一夏！！ グレン団の船出だ！！」

と、船首の片足を掛け、腕組みをしたポーズを取って、神谷がそう言い放つ。

「！ お、おう！！」

それを聞いた一夏は、オールを手に取り、ボートを漕ぎ始めた。

そのまま、沖合に出現した霧の中を目指して行く。

「待ってるよ〜！ 幽霊船！！ グレン団の鬼リーダー！ 神谷様が相手になってやるぜ！！」

海風にマントを棚引かせながら、神谷がそう言う。

「ア、アニキ……………手伝ってよ……………」

と、1人必死にオールを漕いでいる一夏がそう呟く。

「しっかりとしなさい、一夏！ 男でしょ！！」

シャルが叫んだ時、既にボートは、衝突を回避できない距離まで近づいていた。

「チイツ!!……………!? アレだ!!」

と、そこで神谷が、何かを見つけた様に声を挙げた。

その次の瞬間!!

ボートは幽霊船の船首に激突!!

そのまま転覆し、幽霊船に押し潰される様に沈没して行った……………

「……………ふうふう、あつぶねえとこだったぜ」

それを見ていた神谷が、その声を挙げる。

間一髪のところ、幽霊船の錨が、半分降りている事に気づいた神谷が、その錨を繋いでいる鎖目掛けて跳躍し、しがみ付いたのである。

そして、それに倣う様に、シャル達も跳躍して、鎖へとしがみ付いたのだ。

「一夏! この馬鹿者が!」

「ボート沈めちゃって如何すんのよ!!」

「うつ……………ゴメンナサイ……………」

箒と鈴の、ダブル幼馴染の罵倒に、一夏はシユンとなる。

「仕方ありませんわ。帰りはISを使って帰りましょう」

「止むを得ないな。非常事態だ」

帰りの足について、セシリアとラウラがそう言い合う。

「兎に角！ 幽霊船に着いたんだ！！ 早速お宝を探すぜ！！」

と、そこで神谷がそう言って、鎖を乗り始めた。

「あ、神谷！ 待って！」

その下に居たシャルがすぐに神谷を追う。

「取り敢えず、この船に乗り込むか……………」

そして、一夏達もそれに続いて、船に乗り込んで行くのだった。

幽霊船の甲板……………

船体がボロボロな幽霊船は、やはり甲板もボロボロであり、所々に穴が空き、床板が腐っていた。

「へっ！ いかにもな雰囲気じゃねえか」

「ほ、本当にコレ………幽霊船なの？」

ワクワクしている神谷と対照的に、ビクビクしている鈴がそう言う。

「何だあ、鈴？ ビビッてんのか？」

「ビ、ビビッてなんかいないわよ！ ビビッてなんか……！」

神谷のからかう様な言葉に、そう反論する鈴だったが………

「うらめしや………」

そこで一夏が、持って来ていた懐中電灯で、顔を下から照らしてそう言った。

「！？ ぎにやあああああ………！
？」

「キヤアツ！？」

鈴は奇天烈な悲鳴を挙げて、近くに居たセシリアにしがみつく！！

「アハハハハッ！ いや、そんなに驚いてもらえるとはなあ」

それを見た一夏が、満足そうに笑う。

「~~~~~っ!~!~!」

途端に、鈴はセシリアから離れると、一夏の弁慶の泣き所を蹴っ飛ばした!~!

「#\$%&*+@?!~!」

声にならない悲鳴を挙げて、一夏は足を押さえて転げ回る。

「さいつてい! 死ぬ、馬鹿!~!」

「一夏さん、今は感心しませんわよ」

「そつだよ、一夏。女の子を怖がらせるなんて」

「全くだ」

「猛省しろ……………」

鈴、セシリア、シャル、ラウラ、箒から容赦無く罵声が浴びせられる。

「す、すみませんでした……………」

自分に非が有るだけに、反論は出来ず、素直に謝罪する一夏だった。

「オイ、何時までも遊んでないで、さっさとお宝探しに行くぜ」

とそこで、仕切り直す様に神谷がそう言う。

「うむ、宝は置いておくとしても、こんな不審な船を放っておくワケにはいかな。徹底的に調査すべきだ」

軍人であるラウラが、生真面目に考えてそう言い放つ。

「アイテテテ……しかし、コレだけデカイ船となると、手分けして捜索した方が良いんじゃないか？」

と、やっとの事で痛みが引いて来た一夏が、立ち上がりながらそう言う。

「確かにな……よし！ 手分けしてお宝を探すぞ！！」

「いや、アニキ。お宝も良いけど、この幽霊船の正体も調べてね……」

相変わらずお宝探しに燃えている神谷に、一夏はそうツッコミを入れる。

一方、箒達はと言うと……

((((…… 一夏さん 嫁と一緒に！！))))

一夏と一緒にチームになる事という思惑を浮かべていた。

((…… 神谷と一緒に良かったら良いな))

そしてシャルも、そんな期待に胸を膨らませる。

その後……

公平を期す為に、じゃんけんによる組み分けが行われ、結果は……

一夏&箒チーム……

「うっつ……やっぱり不気味だな」

幽霊船の船内を、恐る恐ると言った様子で歩いている一夏。

「一夏。何を怖がっている。それでも男か？」

対照的に、その前に行く箒は堂々としており、微塵も怖がってはいなかった。

「そう言ってもさ……（箒の奴、良く平気だな……こっついうの得意なのか？）」

愚痴る様に呟きながら、一夏はそんな箒の様子に感心する。

だが……

(ま、まさか本当に一夏と2人つきりとなるとは……イカン！
落ち着け！ 落ち着くのだ、篠ノ之 箒！ 何時も通りに振舞えば
良いー！)

実は、内心一夏と2人つきりになれた事が物凄く嬉しくて、舞い上がりた気分なのだが、持ち前の性格がそれを許さず、高揚した気分のまま何時も通りの振る舞いを見せているのだ。

つまり、今の箒の心には、恐怖と言う感情が入る隙が無いのである。

「さあ行くぞ。この船の正体を突き止めるんだ」

そう言うと、そのまま物怖じせず、ズンズンと歩を進め出す箒。

「あ、オイ、箒！ ちょっと待ってくれよー！！」

慌てて一夏がその後を追う。

(しかし、何だ……こう状況では……手、手を繋いだ方が良いのか？)

と、箒が内心でそう思った瞬間……

箒の右手を、冷たい手が握って来た。

(ひゃあっ！？ な、何だ、一夏の奴……分かってるじゃないか)

その冷たい手に驚きながらも、一夏の行動に満足げな笑みを浮かべ

る。

「しかし、一夏。随分と手が冷たいな。冷え症か？」

「えっ？ 箒？ 何言ってるんだ？」

箒がそう指摘すると、後ろから一夏の声が聞こえて来た。

「えっ？……………」

箒が驚きながら振り返ると、一夏は自分の後ろの少し離れた位置に居て、自分と手を繋げる状態ではない。

「で、では……………この手は？」

恐る恐る箒は、自分の右側を確認する。

そこには……………

「……………」

骸骨の様な顔に、青白く丸っこい身体で、足が無い物体……………

所謂、漫画やアニメ等で描かれる幽霊ゴーストの姿が在った。

「……………」

箒と一夏は、一瞬思考が停止する。

「……………」

「「!?!? うわあああああああああ—————!!?!?」

一夏と尊は、悲鳴と共に、暗闇の中へと落下して行く。

「ピピピピピピッ……………」

幽霊は、2人が落ちて行った暗闇を見やりながら、不気味な笑い声を響かせるのだった。

一方、その頃……………」

別の組……………」

セシリア、鈴、ラウラチームは……………」

「ん?」

「如何しました? ラウラさん」

「今、一夏の悲鳴が聞こえた気がしたのだが……………」

突然足を止めたラウラに、セシリアが尋ねると、そういう答えが返って来た。

「一夏さんの？ それって……………」

「んも〜っ！ 如何してアイツが一夏と一緒になのよ〜!!」

セシリアが言葉を続けようとした瞬間、イライラしていた様子の鈴がその声を挙げる。

如何やら、一夏が筈と一緒にのチームになったのが気に入らない様だ。

「あの女々、夏休みになんか距離縮めてって感じがしてたけど……………」

…まさかこの機に乗じて一気に既成事実にまで持ち込む気なんじゃ」

「き、既成事実!？」

「有り得るかもしれんな……………都合な事に、今は2人っきりの状態だ」

鈴がブツ飛んだ考えに至り、狼狽するセシリアを尻目に、ラウラが肯定的な意見を返す。

そんな事は有り得ないのだが、一夏絡みとなると、この3人は目の色が変わる。

「そうだとしたら、のんびりとはしてられないわ！ とつとと捜索なんて終わらせて、一夏を連れ戻すわよ!!」

と、鈴がそう言いながら、手近に有った船室へのドアを開く。

如何やらそこは食堂だった様であり、ボロボロのテーブルクロスが掛かった長いテーブルに、罅割れている食器が置かれっぱなしになっていた。

「此処は食堂みたいですね……………」

セシリアがそう言う中、3人はその船室へと入り込む。

すると……………

突然、セシリア達が入って来たドアが、独りでに閉じられた!!

「!?! ドアが!?!」

「ちょっと!?! 如何なってるのよ!?!」

鈴がすぐに、ドアを開けようとするが、ノブを回す事が出来ない。

「退いている!?!」

すると、ラウラが拳銃を取り出し、ドアノブを破壊しようとする。

その瞬間!?!

突如飛んで来た皿が、拳銃を持ったラウラの手に命中した!!

「!?! ツ!?!」

思わず拳銃を落としてしまつテウラ。

その次の瞬間……………

食堂に置かれていたテーブル、椅子、食器等が、宙に舞い始めた！！

「！？」

「ポ、ポルターガイスト現象！？」

「何っ！？」

宙に舞つた品々は、驚いていた鈴、セシリア、ラウラへと襲い掛かる。

「キヤアッ！？」

伏せたセシリアの頭の上を通り過ぎ、壁にブチ当たつて碎け散る食器。

「ちよっ！？ 冗談じゃ！ ないわよ！！」

弾丸の様に飛んで来る椅子を、鈴は軽業師の様な身の熟しで回避する。

「クウッ！！」

凶器となつて襲い掛かつて来るナイフやフォークを、ラウラはコンバットナイフで叩き落とす。

だが、3人は気づかなかった……

宙に舞っている品々が、自分達を1箇所に集め始めている事に……

「……!?」

やがて飛んで来る物をかわしている内に、1箇所に集められた3人は、背中をブツけ合ってしまう。

その瞬間!!

ボロボロのテーブルクロスが、3人に覆い被さって来た!!

「!? キヤアアツ!？」

「何よ、コレ!？」

「グウツ!？」

急に視界を塞がれ、混乱しながらもテーブルクロスを外そうとするセシリア達だったが、次の瞬間!!

その姿が、パツと消えてしまった!!

暴れていたテーブルクロスが床に落ちて広がる……

「ヒヒヒヒヒヒッ……」

誰も居なくなつた船室に、不気味な笑いが木霊するのだった……

そして……

神谷&シャルチームは……

「うっうっ……」

ビクビクとした様子で、シャルは神谷の腕にしがみ付いている。

「オイ、シャル。歩き難いぞ」

「だ、だってえ……」

神谷がそう言うが、シャルは心細そうな声を発して、神谷の腕から離れようとしない。

「ぼ、僕、こっぴの苦手……」

「何言ってるんだよ。もう何度も獣人野郎を相手に戦ってるじゃねえか」

「ああいうのは怖さのベクトルが違うんだよ」

と、シャルがそう言った瞬間……………

バキッ！と言う音が響き渡った！！

「！？ キヤアッ！？」

シャルは可愛らしい悲鳴を挙げて、更に神谷へ抱き付く。

「何だ？ 何か居るのか？」

一方神谷は、その音がした方向へズンズンと歩いて行く。

「ちよっ！ 神谷！ 確かに行くの！？ 本当に幽霊だったら如何するの？」

「そうだな……………動物園にでも売り飛ばすか！」

ニヤリと笑いながら、神谷はそう言い放つ。

恐いもの知らずとはこの男の為に有る様な言葉だ。

「ちよっ！ 神谷！……………！？ うわっ！？」

すると、神谷の腕に抱き付いたままだったシャルが、突然転ぶ。

「！？ オイ、大丈夫か？ 何で転んだんだ？」

「アイタタタ……………な、何かが足を掴んで……………」

「えええっ!?!」

あまりの光景に、シャルは思わず驚きで目が点になる。

と、バラバラになった骸骨の頭が、2人の傍に落ちて来たかと思うと、そのまま顎をカタカタと鳴らし始めた。

「ひいつ!?!」

「な〜にがカタカタだ、コラ」

その骸骨の頭を、神谷は驚掴みにして持ち上げる。

「オイ、お宝は何処にあんだ?」

神谷の問いに、骸骨は顎をカタカタと鳴らす。

しかし、それは相手を恐怖させる動きでは無く、自分が恐怖している為に出ている動きだった。

「チツ! 喋れねえのかよ……………ったく」

そう言うと神谷は、その頭を無造作に放る。

骸骨の頭はそのまま通路の端に転がった。

「……………神谷って、本当に怖い物知らずだね」

「あつたりめえよ」

呆れながらそう言っ
て来るシャルを立たせてやる神谷。

そのまま2人は、通路を進んで行く。

そして、1つのドアの前に行き着く。

「此処は……………船長室みたいだね」

「船長室か……………お宝の匂いがプンプンするぜ」

神谷は何の躊躇いも無く、船長室の扉を開け放つ。

「あ、待って！」

シャルも慌ててその後に続く。

船長室内も、他の場所と同様にボロボロであり、カビの臭いが漂っていた。

「うっ、カビ臭い……………」

「何処だ？ お宝は？」

カビ臭さに怯むシャルとは対照的に、神谷は船長室内を家探しし始める。

すると……………

「立ち去れ……………」

何処からとも無く、そう言う声が響いて来た……

「!?!? ひゃああっ!?!?」

「あん?」

シャルと神谷がその声が聞こえた方向を向くと、そこには……

「立ち去れ! ……此処から立ち去れ! ……」

額縁に入れられて、壁に掛けられていた絵が、口を動かしながらそう呟いていた。

「え、絵が喋ってる!?!?」

「立ち去れ! ……此処から立ち去れ! ……」

シャルが震えると、額縁の絵は畳み掛ける様にそう言って来る。

「オイ、お宝は何処だ?」

と、神谷がその絵に向かってそう問い質す。

「立ち去れ! ……此処から立ち去れ! ……」

「だから、お宝は………」

「立ち去れ! ……此処から立ち去れ! ……」

「……アチャアーツ!?!」

と、いきなり神谷は、その額縁の絵に向かってパンチを繰り出した
!!

額縁の絵はブチ抜かれ、物理的に沈黙する。

「ちよっ!?! 何やってるの、神谷!?!」

「だってよ、コイツが人を無視して喋るからよお……………」

またも驚くシャルに、神谷は相変わらずシレッとそう言い放つ。

と、神谷が手を引くと、額縁の絵が外れる。

その後ろの隠し棚が有り、宝箱が鎮座していた。

「おおっ!?! コイツは!?!」

「ホントに有ったの!?! お宝!?!」

驚くシャルを他所に、神谷は嬉々として宝箱を棚の中から取り出す。

「へへへ、何が入ってるのかな……………」

そして、そのまま宝箱を開けようとした瞬間……………

「アニキ……………」

一夏の声が響き渡って来た。

「!?!? 一夏!?!?」

「甲板の方から聞こえたよ!」

「チツ! 何かあったのか!?!?」

神谷は宝箱を開けるのを中断すると、それを手に持ってシャルと共に甲板目指して駆け出す。

幽霊船・甲板…………

「一夏!?!? 何処だあ!?!?」

甲板に出るがいなや、そう叫ぶ神谷。

「!?!? 神谷! あそこ!?!?」

するとシャルが、頭上のメインマストを指差す。

「!?!?」

しかし、勢い余ったのか、幽霊船まで吹き飛び始める！！

「！ やっぱっ！ やり過ぎた！？」

「逃げるぞ！！」

「「「「「！？」「」「」」

一夏がそう言つと、神谷がそう叫び、一同は慌てて幽霊船から離れて行った。

IS学園が面している海の波止場……

一夏達が波止場に着陸すると、幽霊船は真っ二つに折れ、そのまま沈没して行った……

「幽霊船が沈む……」

(可哀そうに……アニキの前に現れなきゃ、こんな事にはならなかったのに……)

箒がそれを見ながらそう呟き、一夏が内心で幽霊船の幽霊達に同情する。

「へっへっへっ！ いよいよお宝が拝めるぜ！」

しかし、船の沈める事になった大本の原因である神谷は、沈む幽霊船に全く興味を示さず、宝箱の開封に掛かっていた。

そして、遂に宝箱が開け放たれる。

「よっしゃあ！！」

嬉々として蓋を開ける神谷だったが……

宝箱の中に入っていたのは、黒い小さな粒ばかりだった。

「な、何だこりゃあ!？」

その黒い粒の正体が分からず、神谷は困惑する。

「(ペロツ)……………コレは胡椒だ」

と、その黒い粒を指に付けて、少し舐めてみたラウラがそう言う。

「胡椒っ!?!？」

「そうか……………昔は胡椒が金と同じ価値が有る時代があったから……………」

「何だよ！ 骨の折り損のくたびれ儲けかよ!?!」

IS学園を騒がせた幽霊船騒動は……

何ともお粗末な結果を残して終息したのだった……

つづく

第24話『集まったかあ！ グレン団の野郎共！』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

今回はちよつとギャグに走ってみました。

夏休みの話だったので、時季ネタで怪談話系を。

もっとも、神谷のせいで全然ホラーな感じはしませんでしたかね。
寧ろ冒険話でしょうか？

さて次回はいよいよ2学期編。

あの生徒会長の登場です。

またグレンラガン側からも新キャラを出します。

この辺から大分改変が入るようになりますので、ご了承ください。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第25話 『人間と言ったら人間だ!!』 (前書き)

ユニークアクセスが3万人を超えました。

皆様、ご観覧ありがとうございます。

これからも、天元突破インフィニット・ストラトスをよろしくお願
い致します。

第25話『人間と言ったら人間だ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第25話『人間と言ったら人間だ!!』

???.....

「カナダ戦線に居た部隊より連絡が入りました。カナダの全ての軍事力を無力化したと」

「韓国のISコアも、全て回収しました。間もなくコチラに送られてきます」

「.....」

チミルフとシトマンドラが、螺旋王にそう報告するが、当の螺旋王は興味無さ気に頬杖を付いている。

それもその筈.....

世界征服を志す彼にとって、制圧が上手く行くのは当然の事であり、揺るぎ無い事実だからだ。

しかし.....

そんな事実を悉く覆している者達が居る.....

「螺旋王様。先日東京に送った部隊ですが.....自衛隊にある程度損害を与えましたが、グレン団によって壊滅させられました」

アディーネが恐る恐ると言った様子でそう報告する。

そう.....神谷達が率いるグレン団だ。

「……………」

しかし、ロージェノムはやはり興味無さ気にしている。

「やはりグレン団の連中は厄介だわい…………… 奴等のお蔭で、日本制
圧の作戦だけが遅々として進まん……………」

グアームが苦々しげにそう呟く。

「オノレエ…………… 忌々しいグレン団め……………」

「奴等も最近力を付けて来ている……………」

「例の織斑 一夏ってISを使える男に関しては、愛機を第二形態
移行させたそうじゃないかい…………… 益々手が付けられないよ」

チミルフ、シトマンドラ、アディーネが愚痴る様にそう呟く。

「どれ…………… ココは1つ、搦め手で言ってみるかのう」

すると、グアームが加えていたキセルを吹かしながら、そう言った。

「!? グアーム！ 何か策があるのか？」

「フッフ…………… 正面から攻めて無理ならば内側から攻める…………… 所
謂、獅子身中の虫と言うヤツよ」

チミフルが問うと、グアームが不敵に笑いながらそう呟く。

「!? 成程…………… IS学園にスパイを送り込むのかい」

「その通り。内側から攪乱すれば、どんな連中も脆いものよ……………」

「しかし、一体誰を送り込む積りだ？」

アディーネが策を察し、シトマンドラがそう疑問を呈する。

「フッフッフツ……………そう言った任務に打って付けな奴がある部隊が有るじゃろうが」

「！ 成程……………遊撃部隊のアイツか」

「確かに……………アイツなら上手く人間共の中に溶け込む事が出来るかもしれないね」

「それに失敗したところで、屑を処分出来て、コチラに損害は無しというワケだ」

非常な笑みを浮かべて、四天王はそう言い合う。

「螺旋王様、作戦の許可を貰ってもよろしいですか？」

「……………好きにしる」

グアームの問いに、ロージエノムは素っ気なくそう言い放つ。

「では、早速取り掛かるとするかのう……………」

それを聞いたグアームは、再びキセルを吹かして、作戦の準備に取り掛かるのだった。

長かったIS学園の夏休みも終わり………

2学期が開始された。

ロージェノム軍の世界征服は相変わらず続いているが、今日も今日とで、IS学園は平常運転されている。

(新学期早々飛ばしてるな、アニキ)

そんな神谷の姿を、一夏が尊敬の眼差しで見ている。

「「「「」」」」」

箒、セシリア、シャル、ラウラが呆れた視線を送っているが……

「気、気を取り直しまして……実は皆さんに嬉しいお知らせがあります」

と、真耶は諦めたか開き直ったかの様に、教壇に戻ってそう話し始める。

嬉しいお知らせと言う話に、生徒達はざわめきたつ。

「実は何と！ 2学期から新しいお友達が増えます！！」

「新しいお友達？」

「って事は……」

「また転校生？」

真耶の言葉に、生徒達の間でそんな言葉が飛び交う。

「あ？ 転校生だと？」

すると、寝ていた神谷が目を覚ました。

如何やら、面白そうな匂いを嗅ぎつけた様だ。

「それでは、入って来て下さい」

「ハ〜〜イツ〜!!」

真耶がそう言うと、教室の前側の扉が勢い良く開き……

IS学園の制服に身を包み、褐色の肌をした、茶髪で帽子を被り、首に猫の首輪の様な、鈴が付いたチョーカーを巻いた少女がスキップ気味に入って来た。

「スペインから来ました、『ティトリー・キャッツ』です！ 皆！ ギガンチヨよろしく〜!!」

その少女……『ティトリー・キャッツ』が、元気良く挨拶をする。

「スペインの人なんだ……」

「陽気そうな人だね」

「何で室内で帽子被ってるんだろ？」

ティトリーの姿を見た生徒達は、小声でそう話し合う。

「元気が良いのが転校してきたな。まるで鈴みたいだよな、アニキ」

「夏も、ティトリーのテンションを見て、神谷にそう言っ」

「……………」

しかし神谷は、何やらジッとティトリーの事を見据えている。

「？ アニキ？」

その様子に首を傾げた一夏が、言葉が続けようとしたところ……………

「ね、ね、ね！ 君が織斑 一夏くん？」

教壇の横に居た筈のティトリーが、何時の間にか一夏の前まで来て、
そう話し掛けて来た。

「うわっ！？ あ、ああ、そうだけど……………」

驚きながらも、一夏はティトリーにそう返す。

「うわっ！ 世界で初めてISを動かした男の子！ よろしく！
仲良くしてねー！！」

笑顔でそう言うティトリー。

「あ、ああ、よろしく……………！？」

と、そんなティトリーに挨拶を返した瞬間！！

一夏は、箒、セシリア、ラウラからの殺気を感じた。

更に、2組の方でも、鈴が何かの予感を感じ取っていたらしい。

(！？ ア、アイツ等、何で殺気立ってるんだ！？)

その殺気に縮こまりながらも、一夏は何故殺気を出されているのが皆目見当がつかない。

「……………」

「あ！ コッチは噂のグレンラガンの装着者！ 泣く子も黙るグレン団の鬼リーダー！ 天上 神谷だね！！ ギガンチヨよろしくね
！！！」

「ああ……………」

と、神谷の姿を見ると、ティトリーそちらにも元気良く挨拶をするが、神谷は珍しく、簡単に返事を返す。

(？ アニキ？)

その神谷の様子を、一夏が疑問に思っている……………

「静かにしろ！ 授業を始めるぞ！！ 2学期はもう始まっているんだ！ いつまでも夏休み気分でだらけている奴は容赦しないからその積りで居ろ！！」

怒声に近い声と共に、千冬が教室に姿を見せた。

途端に生徒達は静まり返り、ティトリーも慌てて自分の席へ向かう。

こうして、1人の転校生と共に、IS学園1年1組の2学期は始まったのだった……………

時間は流れ、昼時………

神谷と一夏は、何時ものメンバーにティトリーを加えて、食堂で昼食を取っていた。

「お魚！ お魚！」

幸せそうな様子で、ティトリーは焼き魚定食を頬張っている。

「魚、好きなのか？」

そんなティトリーの様を見た一夏が、そう尋ねる。

「うん！ ギガンチヨ大好き！！」

ティトリーは無邪気な笑顔を浮かべてそう答える。

「それにしても凄いね〜」

「？ 何がだ？」

「だって、此処に集まってるのって、皆専用機持ちなんだよね？」

一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラの事を見回しながら、ティトリーはそう言う。

「ああ、そう言えばそうだな……………」

「良いよね〜、専用機〜。アタシも欲しいな〜」

ニコニコ笑いながらそう言うティトリー。

(……………アレが白式かあ)

その視線が、一夏の右腕に装着されている白式に注がれている事に、一夏達は気づいていない。

「……………」

そんな中、ご機嫌そうなティトリーとは対照的に、箒、セシリア、鈴、ラウラは不機嫌そうな表情を浮かべている。

何故なら、ティトリーがちゃっかりと、一夏の左隣を確保して座って居るからだ。

因みに、右隣は神谷が座って居る。

（うっ！？ さっきから箒達の視線がキツイ……………俺、何かしたかな？）

そして一夏は、相変わらずその視線の意味が理解出来て居ない。

「……………」

一方、何時もなら騒がしい神谷は、如何いうワケか今日は随分と大人しく、まるでティトリーを観察する様に見える。

「？ 神谷？ 如何したの？ さっきからずっとティトリーの事見てるみたいけど？」

「ん？ いや……………何でもねえよ」

シャルにその事を指摘されると、神谷は珍しく誤魔化す様な返事を返す。

「……………（そんなにティトリーの事が気になるの？）」

そんな神谷の様を見て、シャルの中に嫉妬の気持ち生まれ、不機嫌そうな顔になる。

「ところでさあ、ティトリー。ずっと気になってたんだけど……
如何して帽子を被ったままなんだ？」

とそこで一夏は、彼女を見た時から感じていた疑問について本人に
問い質した。

「え？ えっと、それは……………」

するとティトリーは言葉に詰まる。

「？ 如何したんだ？」

「え〜と……………ア、アタシもう行くね！！」

と、一夏が更にそう問い質すと、ティトリーは慌てて席を立ち、食
器を返却すると、逃げる様に食堂から去って行った。

「あ、ティトリー？」

「？ 何よ、アイツ？」

「あからさまに怪しいですわ……………」

「挙動不審だったな……………」

一夏、鈴、セシリア、箒がその声を挙げる。

「うむ……………如何にも奴からキナ臭い感じがするな」

更にラウラは、軍人として磨かれた危機意識が、彼女に対し、何かしらかの警鐘を鳴らしていると訴える。

「……………」

そんな中、神谷は只黙って立ち去ったティトリーの先を見据えていた。

一方、その頃……………

職員室にて……………

「本当ですか？ 織斑先生？」

「まだ物証や確証は無いが……………生徒会長が疑っているそうだ」

真耶と千冬が、ある書類を見ながら、何やら話し合っている。

その間には、不穏な空気が漂っている。

「あの『更識家』が動いているんだ……………全くのシロと言う事は考え難い」

「でも、書類に不審な点はありませんし、何よりスペイン政府も確かだつて証言しているんですよ」

「だが、何か引つ掛かる点がある事も確かだ……………兎に角、この件は『更識家』に任せよう。我々は生徒達に悟られない様にしなければ……………さあ、午後の実習授業に行くぞ」

「あ、ハイ……………」

そう言い合つと、2人は見ていた書類を机の上に放り、午後の授業の準備へと向かう。

その書類は……………

ティトリーの個人情報が書かれた書類だった……………

その頃……

テイトリーは……

「ハア……ハア……危なかったあ」

食堂から逃げる様に飛びだしたテイトリーは、校舎の外端に居た。

「バレてないよね……もしコレ以上失敗したら……アタシ……
…本当に処分されちゃうよ……」

そう呟くティトリーは、それまでの陽気で元気そうな様子がウソの様に、暗い表情を浮かべている。

「っと、イケナイ！ 午後の授業は実習だった！ 早く行かないと……………」

「その前に、私とお話しない？」

「！？」

突然後ろから声を掛けられて、ティトリーは驚きながら振り返る。

「フフフ……………」

そこには、扇子を口元に当てて不敵に微笑む、IS学園の制服を身に纏い、2年生様にリボンを巻いた1人の美少女の姿が在った。

「だ、誰！？」

「このIS学園で最強のIS乗り……………かな？」

不敵な笑みを浮かべたまま、少女はティトリーにそう言う。

「さ、最強のIS乗り？」

「上手く化けたね……………書類の偽造やスペイン政府のデータバンクを改変してまで……………でも、『更識』の目は誤魔化せないよ」

「な、何の事？ 全然分らないんだけど……………」

「アラ？ 惚けるの？ じゃあ、言い逃れ出来ない様にしてあげる」と、少女がそう言った瞬間！

その手に持っていたセンスが、ティトリー目掛けて投げつけられた

！！

「！？ ニヤアアツ！？」

回転しながら迫って来た扇子を見て、ティトリーは猫の様な悲鳴を挙げると、腰砕けになる。

その瞬間！！

少女が投げた扇子が、ティトリーの帽子を弾き飛ばした。

「ああっ！？」

慌てるティトリー。

帽子が弾かれて、露出した頭部からは……………

猫の耳がピョッコリと生えていた。

更に、手が猫の肉球の様な手に変わり、スカートの裾からも、猫の尻尾が飛び出している。

「やっぱり……………獣人だったのね」

「ニヤアツ！？」

だが、次に瞬間！！

ガキインツ！！という甲高い音が響き渡った！！

「！？ なっ！？」

直後に、少女の驚きの声が拳がる。

「？！」

如何したのだと思ってティトリーが目を開けると、そこには……

「…………… テメエ…………… 何してやがる」

何とー！！

何の前触れも無く現れた神谷が、愛用の長刀で少女のISのランスを受け止めていた！！

「！？ 神谷！？」

（な、何故神谷くんが此処に！？ って言うか、ISの攻撃を生身で受け止めた！？）

ティトリーが驚きの声を挙げ、ISを装着している少女も、表には出していないが、内心では驚愕している。

「！？ ハワワワツ！？」

と、そこでティトリーが、獣人の姿のままなのに気づき、慌てて手と尻尾を隠し、帽子を拾って被り直す。

「か、神谷！ 今のは、その……………」

「何やってんだ、ティトリー！ 早く授業に行け！」

「えっ！？」

てつきりバレたと思っていたティトリーは、神谷のその言葉で呆気を取られた様な表情となる。

「次はブラコンアネキの実習授業だぜ。遅れたら大目玉だぞ！」

そんなティトリーに向かって、神谷はニヤリと笑いながらそう言う。

「う、うん！ 分かった！！」

ティトリーは戸惑ながらも、その場から駆け出した。

「！ 待ちなさい！」

「待つのはお前だぜ、辻斬り女」

ISを装着した少女が、慌ててその後を追おうとしたが、神谷が立ちはだかる。

「！？ 何故邪魔をするの！？」

「お前こそ何で邪魔すんだよ？ アイツは真面目に授業に出ようと

してるだけだぜ？ ま、俺は今日はサボる積りだから如何でも良いけどよ」

「あの子は獣人よ！ 貴方も見たでしょ！！！」

神谷に向かってそう言うISを装着した少女だったが……

「何言ってるやがる……アイツは人間だぜ」

神谷は当然の様にそう言い返した。

「！？ 君こそ何を言ってるの！？ 見たでしょ！！ あの子のあの姿を！！！」

「うるせえっ！ 俺が人間と言ったら人間だ！！！」

「貴方にとっても獣人は敵でしょう！ それを如何して!？」

「……………敵ってなんだよ？」

「えっ？」

急に声のトーンが変わった神谷に、ISを装着した少女は戸惑いを浮かべる。

「お前にとって敵ってのは何なんだ？ アイツは獣人だからってだけで敵なのか？」

「それは……………と、兎に角！ そこを退きなさい！ 退かないなら

……………」

と、ISを装着した少女がそう言ってランスを構え直すと……

「ヘッ！ 最初っからそうしろよ………その方が分かり易いぜ！
グレンラガン！ スピンオンツッ！！」

神谷は長刀を納刀し、コアドリルを掲げると、グレンラガンの姿となる！！

「クツ！ この分ならず屋！！」

「うるせえっ！！！！」

2人はそう言い合つと、ランスとドリルに変えた右腕をぶつけ合つ
のだった。

一方、その頃……………

IS学園・第2グラウンドでは……………

「オイ、天上とキャッツは如何した？」

既に千冬の授業が始まっており、神谷とティトリーが姿を見せていない事に気づいた千冬が、一夏にそう問い質す。

「さ、さあ？ 如何したんでしょう？」

一夏は戸惑いながらそう答える。

神谷は昼食の後に分かれたきりであり、その後如何しているかは、彼の与り知るところではない。

(如何したんだろ、アニキ？ 身体動かすのは嫌いじゃないから実習の授業をサボった事は無かったのに……………)

肉体派の神谷が、実習の授業に出て来ない事に、一夏も疑問を感じる。

「まあ、神谷は良いとしても……………キャッツの奴め……………転校早々私の授業をサボるとは……………良い度胸だ」

神谷に関しては諦めているが、ティトリーまでもが居ない様子に、千冬は納得が行かない様な表情を見せる。

すると……………

「すみませ〜ん！ 遅れました〜！」

そう言いながら、ISスーツ姿だが、相変わらず帽子を被ったままのティトリーが姿を現した。

「遅いぞ！ 転校初日から遅刻とは良い度胸だな〜！」

「ア、アハハ、ゴメンなさい！ 勘弁して下さい〜！」

少し引きつった笑みを浮かべながら、ティトリーはそう言う。

「……………まあ良い。それより、ティトリー。神谷を見なかったか？」

とそこで千冬は、念の為にと神谷について尋ねる。

「えっ！？ えっと……………神谷なら……………」

と、ティトリーが言葉に詰まっていると……………

校舎の方向から、爆発音が聞こえて来て、黒煙が上がった！！

「！？」

「な、何事ですか！？」

「クウツー!!」

ISを装着している少女は、水のヴェールでそれを防ぐが、その際にヴェールに使っていた水がドリルによって撒き散らされる!!

「まだまだあつー!!」

着地を決めると、更に追撃を浴びせようとするグレンラガン。

しかし……

「掛かったわね!!」

そう言って、ISを装着している少女が指を鳴らしたかと思うと……

……

グレンラガンの右足に掛かっていた水が、爆発した!!

「!? おうわっ!?」

グレンラガンはバランスを崩して転倒する。

「!? 何だ今の!?」

「グレンラガンの足に掛かっていた水が爆発した!?!」

「あの水…… 只の水ではないぞ」

その光景を見ていた一夏、箒、ラウラがその声を挙げる。

「この野郎！！ 妙な真似を……………うおっ!？」

立ち上がるうとしたグレンラガンが、再度バランスを崩して転倒する。

見れば、爆発した右足の装甲が完全吹き飛び、内部構造がショートして火花を散らしていた。

「それじゃあもう動けないでしょ……………勝負ありよ」

「何が言っただやがる！ たかが足一本くらい使えなくしたぐらいで！ 勝った積りになるんじゃないか！」

神谷がそう叫び、グレンラガンはグレンブーメランを支えにしながら無理矢理立ち上がる。

「強がりな止めた方がよいよ。痩せ我慢は身体に毒よ」

勝利の余裕からか、ISを装着している少女は構えを解いてそう言う。

「へっ！ 痩せ我慢が出来なくて、男が名乗れるかよお！ うおおおおおおおおおー……………っ!」

と、その瞬間！！

グレンラガンから目に見える程の螺旋力が溢れた！

その緑色の光が、損傷した右足を包み込んだかと思うと……………

劣が襲い掛かり、そのまま膝を着いたかと思うと、神谷の姿に戻ってしまう。

「ハア…………ハア…………クソッ！ 情けねえぞ、神谷…………この程度で息切れとは…………」

「！ アニキ！！」

「神谷！！」

滝のような汗を流している神谷に、一夏とシャルが近づくと。

「お、織斑先生！ 如何して更識さんと神谷くんが！？」

「分からん…………私の方が教えて欲しいくらいだ」

困惑しながらそう尋ねる真耶に、千冬は頭痛を感じる頭を押さえながらそう返した。

（アイツめ…………毎度毎度トラブルばかり起こしおつて…………しかし今回ばかりは相手が悪いぞ…………如何する積りだ？ 神谷）

一夏とシャルに助け起こされている神谷の姿を見ながら、千冬は内心でそう思う。

「……………」

一方、困惑している生徒達の中で…………

只一人、ティトリーだけが辛そうな表情を浮かべているのだった…

……

IS学園に転校して来たスペインのIS乗り、ティトリー・キャッツ。

しかし、彼女の正体は獣人のスパイだった。

だが………

そんな彼女を、更識なるIS乗りから守った神谷。

一体彼は何を考えているのか？

そして、更識なるIS乗りの正体は？

U, U
<U, U

第25話 『人間と言ったら人間だ!!』 (後書き)

新話、投稿させていただきました。

いよいよ始まった2学期。

すると、神谷達のクラスにまたもや転校生が。

しかし、何と……

その転校生『ティトリー・キャッツ』は獣人のスパイだった。

そんな彼女に襲い掛かる謎の更識なるIS乗り。

一体彼女は何者なのか？

そして、彼女を獣人と知りながら庇う神谷の真意は？

今回登場したティトリーですが、実はオリジナルキャラじゃありません。

苗字は私が考えましたが、DS版のゲームに出て来るキャラクターなのです。

さて……

実は今回ちょっとアンケートを行う事に致しました。

長くなるので、別投稿しますが、よろしければご協力下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

アンケートにご協力下さい

いつも天元突破インフィニット・ストラトスをご愛読いただき、ありがとうございます。

作者のブルーノアです。

この度、今後の展開についてのアンケートを実施させていただきました。

と言ってもそんな大層なものではなく……

ちよつと考え付いた話をやるかやらないの判断を読者の皆様に仰ぐうと言う話でして……

その話と言うのが……

『作者が書いた別作品の主人公やキャラ達をゲストとして登場させる話』です。

第1話の後書きでも書きましたが、私は某サイトにて数年間、小説書きを続けてきました。

と言いますか、今もこの作品とは別で連載を続けています。

そして、そちらの作品とこの作品両方をご愛読されている付き合いの長い読者様から、

『天元突破ISに、作者が書いた主人公やキャラ達をゲストで登場

させて欲しい』との要望を受けとりまして……………

最初は、幾ら私の作品内とは言え、別サイトで掲載している作品の主人公達を出すのは如何なものかと思ひ、その読者様に送る様に作るうかと思つたのですが……………

構想を練っている内に、段々と他の方にも見てもらいたくなつてしまひまして……………

そこで、ならば読者の皆さんに意見を聞こうと考えました。

やる場合、掲載はIS原作の7巻終了後……………

つまり専用機限定タグマッチ編の後になります。

話の内容は公開出来ませんが、登場させるキャラとそのキャラの登場作品……………

私の過去作ともう1つの連載作品などの簡易的な説明を掲載しますので、ご覧になって下さい。

『機甲兵団ネギま！ 鋼の不死鳥』

作者の処女作。

魔法先生ネギま！とマイナーゲーム『機甲兵団J・PHOENIXシリーズ』のクロス。

『機甲兵団J・PHOENIXシリーズ』とは、かつてタカラが発売していた『アーマド・コア』と似通った対戦ロボットアクションゲームです。

舞台はかなりの未来と言う設定で、惑星Jと言う地球から移民で開発された星で、主人公達は人型兵器『パンツァーフレイム（通称PF）』を駆って、自国である『アルサレア帝国』を、侵略国家『ヴアリム共和国』から守ると言うのが基本的なストーリーです。

『アーマド・コア』と比べると、ケレン味が強いのが特徴です。

キャラクターを多数配する事や、メカデザイナーに大河原邦男を採用する事、特定機体構成時にボーナス的要素を設ける……………

後は武器にハンマーやワイヤーロケットパンチ、ドリルが有ったり、PFの中に勇者ロボやメイド・魔法少女ロボが有ったり等と。

個人的な例えをさせていただくと……………

『アーマド・コア』が『装甲騎兵ボトムズ』だとすると、『機甲兵団J・PHOENIXシリーズ』は『ガンダム』です。

執筆に至った経緯は……ネギま！でロボット物とのクロスがやりたいという思いからです。

結構前の作品であり、まだネギま！が魔法世界編に突入する前に書き始めて完結させたので、現在連載中の魔法世界編以降の設定は反映されていません。

今見返すとアラが多いですが、ご了承ください。

ストーリーはと言いますと……

かつて惑星Jを開発した地球とは別に、異なる歴史を辿っている第2の地球がある、もう1つの太陽系が発見された。

星間ワープの実用に成功していたヴァリム共和国は、その地球を植民地にしようと、部隊を送り込む。

それを察知したアルサレア帝国は、ヴァリムの思惑を阻止すべく……

主人公である神薙 機龍少尉率いる小隊、セイバー小隊を第2地球へと派遣する事を決定。

やがて、事故で単身第2地球へ到着してしまった機龍は、日本の麻帆良学園にP.F.ごと墜落。

そこで、超 鈴音と葉加瀬 聡美に会い、PFの技術を解析させる代わりに整備と情報提供を取引し、この世界に魔法が存在する事を知らされる。

そして、彼女達の情報操作により戸籍を偽造し、麻帆良学園3-A副担任として教師を務める事となる。

ネギま！主人公のネギ・スプリングフィールドの良き兄貴分として、教師としても活躍する中……

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが起こした大停電の日に、ヴァリム軍の部隊が麻帆良を襲撃。

これを愛機であるJフェニックス・カスタムで蹴散らした機龍だったが……

その戦いで、ヴァリムに呪術師が味方に付いている事が判明。

その狙いが様々な魔法関連技術を持つ麻帆良そのものである事が判明する。

機龍は、学園長や魔法先生達に正体を明かし、協力を要請。

事の重大さを知った学園長は彼に全面的に協力。

こうして、ヴァリム軍VSアルサレア軍&魔法使い達の、第2地球を舞台として戦いが展開される事となる。

戦いの最中、ネギと神楽坂 明日菜を始めとし、機龍の正体を知った3-A組の生徒が参加し、惑星Jから漸く到着した小隊メンバー

や増援メンバーも加えて……………

機龍は『機甲兵団ガイアセイバーズ』を結成。

3 - Aの武闘派メンバーも、超とハカセがPFを解析して造り上げた第2地球製のPF……………GFを駆って、戦場に立つ事となる。

そんな戦役の最中……………

機龍は、3 - A組の生徒の1人、龍宮 真名と心を通わせて行く……………

やがて、何時まで経っても第2地球どころか麻帆良を占領できない事に業を煮やしたヴァリムは、大戦力を投入し、決戦を掛ける。

事前の作戦で、機龍がMIAとなり、司令塔を失ったガイアセイバーズは苦戦するが……………

そこへ精霊の力によってパワーアップした『機甲武神ゴッドJフェニックス』を駆ける機龍が奇跡の帰還。

形成は一気に逆転し、遂に第2地球占領に投入されたヴァリム軍を全滅させた。

戦いが終わり、機龍達は任務を解かれ、惑星Jへと帰還する事となる。

去り際に、真名に必ず帰って来ると約束し、機龍は去って行った……………

その後……

惑星Jでは、第2地球占領失敗で国力を大幅に失ったヴァリム共和国内で強硬派が、穏健派のクーデターにより討伐され、新生ヴァリム共和国が設立され、アルサレアと和平協定を平定。

その半年後には、遂に惑星Jを統一する超政府「惑星J統一政府」が結成される。

更に第2地球でも、魔法世界のトップとなったアルビレオ・イマヤナギ・スプリングフィールド達が、各国政府と秘密裏に接触し、徐々に魔法の存在を世界に認識させて行き……

第2地球の統一政府「地球同盟国家」を設立。

基盤を固めた「惑星J統一政府」と「地球同盟国家」は、互いにコンタクトを取り、協定を結ぶ。

人類史上初の星間国家が誕生する。

そして、真名達が高校卒業となった日……

ヴァリム強硬派の残党が麻帆良を襲撃。

迎撃に出たが苦戦するネギ達ガイアセイバーズの前に現れたのは……

……

神薙 機龍のゴッドJフェニックスだった。

こんな感じですよ。

簡易的と言いながら長々としてしまい、申し訳ありません。

続きまして、もう1作の方の紹介です。

『電脳戦記リリカルなのはMARZ』

第2作目。

休載期間も含めて、彼は5年近く書いて来た超大作。

現在もサウンドステージXを下地としたTVスペシャルが終わり、

劇場版を同サイトにて連載中。

魔法少女リリカルなのはStrikerSと電腦戦機バーチャロン
マーズを中心として、多重クロスオーバー作品。

バーチャロン勢は第3次でのパイロットデータ等を元に擬人化されてお
り、バーチャルジャケットと呼ばれる強化服を着て戦う戦士
になっています。

基本的なストーリーは、原作より明確かつ強大な悪となっているジ
ェイル・スカリエッティに、高町なのは達の機動六課と、主人公
であるテムジン・J・マーズ（通称チーフ）達が立ち向かうという
ストーリーです。

前作主人公である神籬 機龍を登場させたり、リリカルなのはが多
次元世界を認めている設定を利用し、様々な作品のキャラクターが
登場したり絡んだりする、お祭り要素の強い作品です。

ヒロインはスバル・ナカジマで、連載当時、彼女がヒロインの作品
が無いなあと嘆いていた経緯から書き始めました。

最終的にはリリカルなのはの組織である時空管理局が壊滅し、なの
はやチーフ達が新たな次元の守り手である組織『Dimensional
Guard Force（通称DGF）』を立ち上げます。

こちらは如何にか簡易的に纏められました。

では更に続きまして、登場させようと思っているキャラ達の紹介です。

名前：神薙 機龍（かみなぎ きりゆう）

CV：神谷 明（機甲兵団ネギま！の頃は杉田 智和）

性別：男

年齢：33歳（見た目は20代前半くらい。機甲兵団ネギま！の頃は18歳）

階級：中将（機甲兵団ネギま！の頃は少尉。電腦戦記リリカルなのはMARZ連載当初は准将）

所属：重要拠点・麻帆良学園都市防衛部隊『機甲兵団ガイアセイバーズ』並びにガイアセイバーズ基地司令官兼教官（機甲兵団ネギま！の頃はアルサレア特別追撃部隊セイバー小隊小隊長兼初代機甲兵団ガイアセイバーズ総隊長）

備考：かつて、第2地球侵略を企てていた旧ヴァリム共和国軍を撃退し、その功績によって『邪悪を断つ剣』の異名を持つ様になった英雄。

惑星J・第二地球星間国家軍首脳部への誘いもあつたが、本人が辞退。

現場で後進を育てたいと希望している為、将官階級にありながら、未だに名前のみを引き継ぎ、星間国家軍の一部隊となつた『機甲兵団ガイアセイバーズ』並びにガイアセイバーズ基地司令官兼教官をしている。

しかし、軍内部に限らず、政治方面でも絶大な発言力を持っており、重要な会議の出席する事もしばしば。

今でも、重大な危機が起これば、真つ先に最前線へと飛んでいく。

後述するチーフとは、とある任務で知り合つてからの友人。

管理局全滅後は、DGF軍の幹部の1人も兼任している。

大戦後に、龍宮 真名と結婚。

双子の姉弟を間に儲ける。

家庭の方も大切にしており、家族円満で妻と子供を大事にしている。争いが無くなった世においても、『治において乱を忘れず』の精神を貫いており、今だに最強のPF乗りの名を保持している。

また、本人自身の強さも、最早ガダムファイターの域に達している。（小型の機動兵器ぐらいなら生身で倒せる）

貫禄が出てきており、声も渋さと叫びの響き具合が増している。

勿論、熱く燃える魂も健在である。

乗機ゴッドJフェニックス

全高：13・0メートル

重量：16・5t

デザイン：Jフェニックスカスタムと比べて、装甲の形状がやや鎧状の鋭利、鋭角なフォルムになっている。また、ウイングが大型化している。

また、胸部にカバーに守られた、精霊が集まってできた精霊石と呼ばれるクリアグリーンの魔石が埋め込まれている。

具体的に言うと、ノーマルのJフェニックスとゴッドガンダムとダ

イゼンガーを全部足して割った感じ。

動力：超魔道転換炉（万物に宿る精霊の力をエネルギーに変換する。そのため、理論上エネルギーは無量大と言える。最高で魔力転換機関の約10倍の出力を誇る。元ネタはゼオライマーの次元転結システム）

装甲：超魔合金Z（通常の魔力防御も出来る装甲・マジックコーティングメタルの約5倍の硬度を誇る。また、多少の損傷なら自己修復してしまう。元ネタはマジンカイザーの超合金ニューZ）

特殊装備：スピリットサーキット（全身にくまなく張り巡らされている精霊の力を伝達する回路。エネルギー値が一定レベルに達するとリミッターが外れ、神霊モードを発動できるようになる。元ネタはガンパレの精霊回路）

独立超電動機システム（関節全てに駆動モーターが内蔵されており、凄まじいパワーを出せる。また、これにより機体の一部が欠損しても全体のパワーは落ちない。元ネタは鉄人28号）

人機一体操縦（操縦者の動きに合わせて機体が動く。その名のおり、操縦者と機体が一体となる。元ネタはGガンモビルトレースシステム）

精霊障壁（精霊によって形成される障壁。魔法、物理に関わらず、全ての攻撃を防ぐ）

神霊モード：ハイパーモードに相当するモード。（元ネタはゴッドガンダムのハイパーモード）

基本カラーリングの赤と白の間に精霊との契約の証である青色がライン状に入り、手の甲と顔にも同色の紋様が浮かび上がる。

胸部カバーが開き、精霊石が露出し、『義』の文字が浮かび上がる。そして、ウイングが精霊エネルギーに包まれ、青白く発光する。

全性能が1.5倍になり、最高飛行速度に至っては、計算上亜光速に達するとされ、慣性の法則を無視した急制動、急旋回ができる（元ネタは真ゲッター）。

基本武装：頭部バルカン（Jフェニックスカスタムと同様の装備だが、弾はエネルギーに変えた精霊なので事実上無限大）

肩部マシンキャノン（Jフェニックスカスタムと同様の装備だが、弾はエネルギーに変えた精霊なので事実上無限大）

精霊銃（後ろ腰携帯。90ミリ・リボルバー式マグナムがゴツイ感じに変化したもの。弾はエネルギーに変えた精霊なので事実上無限大。さらに高いホーミング性能を有する）

無限精霊拳（両手装備。神霊モード時のみの武装。スピリットサーキットを会して精霊エネルギーを腕に集めることで腕部をエネルギー化し、何処までも伸びていく拳で敵を打ち貫く。元ネタはアクエリオンの無限パンチ）

精霊翼（背部装備。神霊モード時のみの武装。精霊エネルギーの宿った翼で敵を切り裂く。元ネタはV2ガンダムの光の翼）

ボルテックキャノン（両肩装備。肩装甲が展開し、出現したレーザー

1 発射口から高密度の精霊エネルギーを放射する。広域放射、範囲指定も思いのままにできる。元ネタはテッカマンブレードのボルトツカ)

スピリット・フラッシュ (神霊モード時のみの武装。自機全体から精霊エネルギーを放射し、半径1キロの敵を殲滅する。元ネタはサイバスターのサイフラッシュ)

フェニックス・ゴーガン (左腕に出現させた炎の弓で、右手で形成した炎の矢を放つ。貫通力が高く、敵が並んでいれば纏めて撃墜することができる。矢を分裂させることも可能。元ネタはライダーのゴッドゴーガン)

アカシック・アルティマ (神霊モード時のみの武装。空中に召喚陣を描き、神霊獣『フェニックス』を呼び出し融合。炎の不死鳥となつて駆け抜ける。元ネタはサイバスターのアカシックバスター)

零式斬魔刀 (両脇腰に1本ずつ携帯。普段の形状は赤い鞘に入れられた2本の刀。神霊モード時には、1本の斬艦刀並の剣に融合することができ、あらゆる物を斬ることができる。元ネタはダイゼンガ1の斬艦刀)

備考：大破したJフェニックスカスタムに万物の精霊達が憑依、転生した機体。

胸部に埋め込まれている精霊石は精霊達との契約の証でもある。

PF独特の機能である、一定のルールで装備を整えると性能が上がるBURNシステムの稼働率が300% (発動時表記『機甲武神』) というとんでもない数値を敲き出している。

そのため、通常モード時でもJフェニックスカスタムのハイパーモード時並の性能を誇る。

一見すると、最強のPFとも言えなくはないが、万物の精霊達に認められた存在でなければ、指1本動かせない。

加えて、機体の80%以上が超とハカセ、アルサレアの科学力を持つとしても解析不可能のブラックボックスで形成されている。

正に、この機体その物が魔法技術の塊と言っても過言ではない。

さらに、人機一体操縦は機体に受けたダメージが操縦者にも伝わってしまうという弊害があるため、操縦者に掛かる負担も半端ではなく、操縦者には強靱な精神力が求められる。

名前：テムジン・J・マーズ（通称・チーフ）

CV：谷晶樹

年齢：23歳（見た目は30半ばか後半に見える。 電脳戦記リリカ

ルなのはM A R Z連載当時は20歳)

役職：D G F軍特捜機動隊長兼特別指導官(電腦戦記リリカルなのはM A R Z連載当時は、時空管理局本局特捜機動隊長兼特別指導官)

所属：D G F軍特捜機動隊(電腦戦記リリカルなのはM A R Z連載当時は、時空管理局本局特捜機動隊 機動六課(協力) 独立遊撃部隊C R E W・M A R Z)

階級：中佐(電腦戦記リリカルなのはM A R Z連載当時は一等特尉)

経歴：元は電腦世界と呼ばれる世界の出身の『電子生命体』

元の世界では、治安維持部隊の隊長だった。

その世界に存在したロストログアによって、大規模な災害が発生し崩壊の危機に陥り、誰もが絶望していく中、ハッター・フェイ等と共に世界の崩壊を救おうと奮闘した。

しかし、健闘虚しく、後1歩で世界が崩壊すると思われた時に、駆けつけた時空管理局員(なのは達)によって世界と自身の命を救われる。

その後、世界と自分の命を救ってくれた管理局に恩返しする為に、仲間のイツシーハッターと、友人であるフェイ・イエン等と共に管理局へと転職した。

そして、戦闘能力に目を付けた本局によって、特別役職である『特別指導官』、そして新設部隊『特捜機動隊』の隊長に任命される。

その後、（特捜機動隊の権限により）機動六課に協力体制を取る。後にあらゆる世界で暴れるスカリエッツィを止める為に、機龍と共に独立遊撃部隊CREW・MARZを設立。

管理局全滅後は、新組織であるDGFの立ち上げにも奔走した。

現在は相変わらずの現場主義で、治安維持の最前線を飛び回っている。

性格：冷静沈着を地で行く真面目な職業軍人。

髪は蒼髪で、瞳の色も蒼眼。

ストイックで、寡黙。

他人に厳しく、自分にも厳しい。

一見、ハードボイルドで堅い人物と思われがちだが、根は優しい男。クールな様だが、内には熱さを秘めており、時折無茶な行動を起こす事もしばしばある。

恋愛事に対しては朴念仁、というより恋愛という観念すら分かっていない節がある。

その為、スバルから寄せられる好意に全く気づいていなかったが、現在は彼女の想いを受け入れ、相思相愛となっている。

喫煙家だが、健康を考え、無害の薬草タバコのみを嗜好としている。

口癖は『指導』

渾名は、『DGFの風紀委員』

戦闘時には、『バーチャルジャケット』を身に纏い、『バーチャロイド・テムジン747J』となり、空・陸を問わず戦う。

生身時でも格闘術、護身術、捕縛術を使って戦う事が出来る。（技術で戦うタイプ）

任務で彼方此方の世界を飛び回っている為、様々な世界に色々な知り合いがいる。

余談だが、落ち着いた言動と物腰、更に渋い声と精悍で彫りの深い貫禄のある顔つきのせいで年輩に見られるが、まだ20代である（本人は特に気にしていない）。

また、サングラスを着用する事があるが、掛けるとかなり強面の顔となる。

テムジン747J：テムジン・J・マーズが『バーチャルジャケット』を纏い、『バーチャロイド』形態となった姿。

近距離戦に特化し、背中のブースターを利用した高速機動戦が得意。

『スライプナー』というランチャーとブレードが一体になったマルチウエポンを使う。

小手先の技としては、先端からエネルギー弾を発射する・刀身にエネルギーを纏わせて斬りつける・半月状のエネルギー波を飛ばす等。なお、サブウエポンとして、ボム（手投げ弾）を装備している。

必殺技

ソードウエーブ・フリーケンシー：半月状のエネルギー波を2つ、十字型に重ねて放つ。

ブリッツ・セイバー：敵に向かってダッシュして、擦れ違い様に斬りつける。

そして、敵が怯んでいるところに、ジャンプキャンセルのターンで後ろからスライプナーを突き刺し、再び斬りつける。

ラジカル・ザッパー：中央から開いたスライプナーを両手で持ち、高密度のエネルギー収束砲を放つ。

調整により、一点集中・広範囲拡散が出来る。

フォーミュラ・アサルト：敵に向かってボムを投げると共に突撃し、ボムを受けて怯んでいる敵を擦れ違つと、後ろからエネルギー弾の連射を浴びせる。

ブルー・スライダー：ボード状に変形したスライプナーの上にサー

フアーの様に乗っかり、先端にエネルギーを纏うと、敵に向かって突撃する。

用語説明

電子生命体：基本的な身体の構造は、人間と変わりが無い。

しかし、『ディスク』を使い、『バーチャルジャケット』と呼ばれるアーマーを身に着ける事によって、高い戦闘能力を誇る『バーチャロイド』へと変身する。

ディスク：『電子生命体』が『バーチャロイド』へと変身する為の道具。

所謂、魔導師でいうところのデバイスに当たる。

バーチャルジャケット：『電子生命体』が『バーチャロイド』形態時に纏うアーマー。

魔導師でいうところのバリアジャケットに当たる。

バーチャロイド：『電子生命体』が『バーチャルジャケット』を纏った姿。

身体能力が大幅に引き上げられ、戦闘に特化できる様になる。

名前：スバル・ナカジマ

CV：斎藤 千和

年齢：18歳（電脳戦記リリカルなのはMARZ連載当時は、15歳）

役職：DGF軍特捜機動隊員（電脳戦記リリカルなのはMARZ連載当時は、機動六課 スターズ分隊フロントアタッカー）

所属：DGF軍特捜機動隊（電脳戦記リリカルなのはMARZ連載当時は、機動六課 独立遊撃部隊CREW・MARZ）

階級：准尉（電脳戦記リリカルなのはMARZ連載当時は、二等陸士）

詳細：魔法少女リリカルなのはStrikersのヒロインの1人。

電脳戦記リリカルなのはMARZではメインヒロイン。

性格などは、Strikers原作に基づくが、空港火災時になのはだけでなくチーフにも助けられており、それ以来彼に恋心を抱いていた。

ミッドチルダ地上本部襲撃事件の際、原作とは異なりギンガの代わ

りにスカリエツティに誘拐され、魔改造とも言える改造を施され、チーフ達の敵として登場。

しかし、チーフの懸命な説得で心を取り戻し、彼によって救出される。

その際にかなりのダメージを負い、戦闘機人と言えど修復不能な状態となったが、当時未来へ帰っていた超 鈴音が持つて来た王者の石により、超進化人類エヴォリユダーとなった。

その後、チーフに告白し、彼がそれを受け入れた事から、相思相愛の仲となる。

後には姉のギンガ・ナカジマから左手のリボルバーナックルを譲り受け、獣拳戦隊ゲキレンジャーの元で修業したり、宿敵・ソウルゲインとの激戦を経て、『超獣神拳』という武術を身に付ける。

常に前線に立つて戦い続けたチーフの隣に立ち、一緒に戦い続けた結果、『次世代のエース・オブ・エース』とまで言われる様になった。

『超獣神拳』

スバルが戦いの最中に倒して宿敵・ソウルゲインから受けついた武術。

基本的にソウルゲインの技に、スバルの魔力、ゲキレンジャーとの修行で身に着けた激気を合わせる事で発動する。

青龍鱗
せいりゅうりん

両手の掌に青い魔力と激気を合わせたエネルギーを収束し撃ち出す。

玄武剛弾
げんぶこうだん

両腕のリボルバーナックルのタービン部分回転させて、竜巻の尾を引く拳型の魔力と激気を合わせたエネルギーを射出。

エネルギー自体と衝撃波で攻撃する。

白虎咬
びゃくこう

魔力と激気を合わせたエネルギーを手に収束させて打撃を繰り出し、さらに至近距離でエネルギーを叩きつける。

舞朱雀
まいすうけ

リボルバーナックルのアームガード部分から魔力と激気を合わせたエネルギーブレードを展開し、それで切り刻んだ後、全体重を乗せて一刀両断する。

麒麟
きりん

両手から拡散させた魔力と激気を合わせたエネルギーを浴びせた後、拳が分裂して見えるほどのラッシュ。

更にアッパーで打ち上げ最後は肘の魔力と激気を合わせたエネルギーブレードで両断する。

基本的にこんな感じですよ。

こんな連中が一体如何やってIS学園にやって来るのか？

また何の為に来るのか？

神谷達と如何絡むのか？

そういったストーリーが見たいか見たくないか、感想にて送って下さい。

長々と失礼致しました。

どうか、ご協力をよろしくお願い致します。

第26話『勝手に決めんじゃねえっ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第26話『勝手に決めんじゃねえっ!!』

神谷と謎のI Sを装着して少女との戦いから、数日が明けた……

一夏達は、あのI Sを装着した少女は誰かと神谷に問い質したが……

……

当の神谷も、正体を知らない為、分からないとしか答えようがなかった。

千冬や真耶が、何か知っている様子だったが、機密事項だと言い、答えてはくれない。

様々な謎を残したまま、一夏達はS H Rと1時間目を使つての全校集会の場に居る。

今月中頃に行われる学園祭について、生徒会長から話があるらしい。

「ふわあああああああ………つたく、メンドクセエ
「なあ、オイ」

生徒達が生徒会長が現れるまでの間に喧しく話し合っている中で、こついつた事が苦手な神谷は、気怠そうに欠伸をする。

「まあまあ、アニキ。仮にも生徒会長の話なんだから、聞いておいた方が良いよ」

一夏が神谷を宥める様にそう言う。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

「ふふっ」

「!?!」

と、目が合ったと思った瞬間に微笑まれ、一夏は動揺する。

「……………!?!」

「……………」

しかし、その傍に居た神谷の姿を見た瞬間には、口元を開いた扇子で隠し、敵対心の籠った目で見据えた。

「へっ……………」

だが、そんな敵対心が宿った視線を受けた神谷は、怯むどころか笑い飛ばす。

「!?!……………さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね」

それを見た生徒会長は、一瞬苦々しげな表情を浮かべたが、すぐに気持ちを切り替え、生徒達への話を始める。

「私の名前は『更識 楯無』。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

生徒達全員に向かって、生徒会長……………『更識 楯無』は、微笑みを浮かべてそう挨拶をする。

その様を見た生徒達の多数から、熱っぽい溜息が漏れる。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容と言うのは……………」

と、楯無がその言葉を続けたかと思うと、空間投影ディスプレイが展開した。

「名付けて、『各部対抗織斑 一夏争奪戦』！」

楯無がそう言った瞬間、展開したディスプレイに、デカデカと一夏の姿が映し出される。

「え？……………ええええっ!？」

一夏が驚きで大声を挙げる。

当たり前だ……………」

この企画、一夏絡みのクセに、当の本人には一切知らされていないのだ。

だが、そんな一夏の叫びは、生徒達全員の叫び声で掻き消されてしまっ。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとに催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組には部費に特別助成金が出る仕組みでした」

騒ぎ出した生徒達を鎮めると、楯無は更にそう説明を続ける。

「しかし、今回はそれではつまらないと思い……織斑 一夏を1位の部活に強制入部させましょう!」

そう言つて、楯無は一夏を閉じた扇子で差した。

「うおおおおおおおっ!」

「素晴らしい! 素晴らしいわ会長!」

「こつなつたらやつてやる……やあああつてやるわ!」

「今日からすぐに準備を始めるわよ! 秋季大会? ほっとけ、あんなん!」

その言葉で、生徒達のテンションは最高潮に達する。

「ちょっと!?! 俺の意思は!?!」

一夏がそう叫ぶが、その叫びは喧騒に掻き消される……

しかし!!

「勝手に決めんじゃねえっ!」

そんな生徒達のけたたましい喧騒も吹き飛ばす程の大声が響き渡つた!!

あまりの音量に、校舎の窓ガラスが次々に割れ、近くに居た生徒達が木の葉の様に宙に舞う!!

「ぐああっ!?!」

「こ、鼓膜が……………」

「あ、あの……………馬鹿……………」

神谷の凄まじい大声を真面に聞いてしまった筈、セシリア、鈴が、ダメージを受けている様子を見せる。

「か、神谷……………」

「何と言う音量だ……………」

「にゃ〜、耳がキンキンする……………」

辛うじて耳を押さえたものの、少々のダメージを受けたシャルとラウラ、ティトリーがそう呟く。

「……………天上 神谷」

と、生徒会のメンバーが吹き飛ばされている中で、唯一平然としていた楯無は、神谷の姿を見て、今度はハッキリと苦々しい表情を浮かべる。

「……………」

すると、神谷がザッと前に出て行く。

「……………」

行く手に居た生徒達がスーツと道を譲る。

その光景はモーゼの十戒の様だった。

「……………」

更に、楯無も檀上から飛び降りると、神谷を待ち構えるかのような態勢を取る。

「……………」

やがて2人は、目と鼻の先と言う程の距離までに近づく。

「……………」

既に激しいメンチの斬り合いが始まっている。

「おう！」

「！」

「おうおうおう！」

「貴方……………」

ドンドン険悪な雰囲気になって行く2人。

生徒達も教師陣もただ困惑するばかりだ。

「あわわわわわ……………」

「全く、アイツは……………アイタタタタ……………」

完全に狼狽えている真耶と、その隣で頭痛がする頭を押さえている千冬。

「……………勝手に決めるな、って如何いう事かな？」

「一夏は既にグレン団のメンバーだ。それを俺に何の断りも無しに強制入部させるたあ、気に入らねえな」

「織斑くんが部活の入っていない事で各部から生徒会には苦情が来てるの……………コレは公平に決めさせる為の平等な提案よ」

「何が平等な提案だ。部活なんざやりてえ奴がやりや良いんだ！人に言われて無理矢理やるもんじゃねえだろ！！」

遂に楯無と神谷は舌戦を始める。

いや……………最早啖呵の斬り合いと言ってもいいだろう。

「これは生徒会として決定よ！！つまり生徒会長権限なの！！」

「何が生徒会長権限だ！ テメエがそんなに偉いのかよ！！」

「当たり前よ！ 私を誰だと思ってるの！？」

「テメエこそ俺を誰だと思ってやがる！ IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼リーダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

「私はIS学園生徒会長！ 更識 楯無なのよ！ 分かっているの！」

「……………子供の喧嘩ね」

と、その様子を見ていた鈴がそう呟く。

箒やシャル達も、呆れた視線を、神谷と楯無に送っている。

結局その後……………

お互いに1歩も引かずに主張をぶつけ合い、そのまま時間切れで全校集会が終わったのだった……………

ところで……………

この騒動の中心に居る筈の一夏は……………

「きゅっ~~~~」……………

神谷が挙げた大声を至近距離で聞いてしまった為、目を回して気絶してたのであった……………

同日の放課後……………

1年1組の教室にて……………

特別HRを開いて、クラスごとの出し物を決めに掛かっていた。

1組の生徒達が提案したものは……………

『織斑 一夏のホストクラブ』、『織斑 一夏とツイスター』、『織斑 一夏とポッキー遊び』、『織斑 一夏と王様ゲーム』、e t
c……………

等といった具合に、殆ど……………と言うよりも全てが一夏絡みの出し物となっていた。

「却下」

途端に……

「あ、えっと………ならいいです」

「織斑くんは兎も角、天上くんも一緒だと………」

「それは寧ろご褒美より拷問だわ………」

「すみません、調子こいてました」

「お前等、失礼だな」

次々に沈黙し始めた生徒達を見て、神谷は憮然とした表情を浮かべる。

「兎に角、もつと普通な意見をだな………」

「メイド喫茶は如何だ？」

と、一夏がそう言うと、何と意外も意外、ラウラがそんな意見を挙げた。

「……………!?」「……………」

クラスの生徒全員と、一夏の視線がラウラに注がれる。

「客受けは良いだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろうか？ それなら、休憩場としての需要も少なからずある筈だ」

淡々と冷静な意見を繰り広げるラウラだったが、キャラ的に似合わない意見に、クラスの一同は神谷を覗いてポカンとしている。

「え、えーと……………皆は如何思う？」

一夏は取り敢えずと生徒達に賛否を尋ねるが、生徒達はまだ状況が理解出来ておらず、茫然としている。

「良いんじゃないかな？ 一夏には執事が厨房を担当してもらえばオーケーだし、神谷も力仕事や客引きなんかについてもらえば良いんじゃないかな？」

するとそこで、シャルが援護する様にそう言う。

クラスの一同は、その言葉……………

特に一夏が執事をするという部分に一気に惹かれた。

「織斑くん執事！ 良い！」

「それでそれで！」

「メイド服は如何する！？ 私演劇部衣装係だから縫えるけど！」

先程までの沈黙がウソの様に、1組生徒達は一気にボルテージを上げる。

（まあ、変わった衣装の喫茶店だと思えば良いか……………）

一夏も、自分が中心で無く皆でやる企画の為、妥協を見せる。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

するとラウラが、またもそんな声を挙げた。

クラス全員が「えっ？」という表情でラウラを見つめる。

「……………ごほん。シャルロットが、な」

すると、流石に照れ臭かったのが、ラウラは咳払いしてシャルに話を振った。

「え、えっと、ラウラ？ それって、先月の？……………」

「うむ」

先月のとは、例の白猫の着ぐるみパジャマを買いに行った時の話である。

実はその時、シャルとラウラはふとした事からメイド喫茶の女店長と知り合い、1日アルバイトをしたのだ。

色々あった波乱のバイトとなったが、まあそこは今は関係無いので割合する。

「き、聞いてみるだけ聞いてみるけど、無理でも怒らないでね」

「……………怒りませんとも！……………」

シャルの不安げな声に、クラスの生徒達は声を揃えてそう言う。

かくして、1年1組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まり……………

「ちよつと待ったあつー!」

かに思われたが、そこで神谷がちよつと待ったコールを掛けた。

「!?!? アニキ!?!」

「神谷!?!」

まさかちよつと待ったコールが出るとは思わず、一夏とシャルが困惑する。

他の生徒達も、空気読めよという視線を送っている。

「何だ、神谷? 貴様メイド喫茶に不満があるのか?」

提案者であるラウラが、不機嫌そうにそう言うが……………

「いや、メイド喫茶自体に問題はねえぜ。寧ろ大歓迎だ!」

相変わらず欲望丸出しで神谷はそう言う。

「じゃあ、何が……………」

「だがな! 今時只のメイド喫茶なんざあ、在り来りってもんだぜ!?!」

ラウラの言葉を遮り、神谷はそう言い放つ。

「何？」

「それじゃイマイチパンチがねえ！ そう此処は……………」

神谷はそう言つて、言葉を溜める様な様子を見せる。

「……………」

クラス全員の視線が、神谷に注がれる。

その瞬間！

神谷はクワツと目を見開いたかと思うと……………」

「プラス猫耳で、猫耳メイド喫茶で如何だあ！！」

お馴染みの点を指差すポーズを決めて、堂々とそう言い放った！！

「えっ！？」

その提案にティトリーが驚く。

「……………」

しかし、他の生徒達は、神谷に冷たい視線を向ける。

「いや、アニキ……………流石にそれは……………」

「一夏はやり過ぎだと言おうとしたが……………」

「馬鹿野郎！ 良いじゃねえか！ 猫耳の1つや2つ！ 減るもんじゃねえだろー！」

神谷は頑として退く様子を見せない。

「で、でも……………」

何とかして説得を試みる一夏だったが……………」

「わ、私は良いと思うよー！」

そこで、ティトリーがそう声を挙げた。

「！？ ティトリー！？？」

「か、神谷の言う通り、良いんじゃないかな？ 猫耳の1つや2つくらい……………」

若干挙動不審でそう言うティトリー。

(ティトリー……………まさか、ティトリーも神谷の事を……………)

すると、その様子を見て、勘違いを起こしたシャルが……………」

「僕も良いと思いますー！」

血迷った様に賛成の意見を挙げる。

職員室前の廊下……………

「失礼しました」

出し物が決まった事を、千冬に報告し終えた一夏が、職員室から出て来る。

なお、千冬は出し物が『猫耳ご奉仕喫茶』に決まった事を、神谷が絡んでいると見抜いたが、クラス生徒が大半参戦していると言う事実もあって反対できず、苦々しげな表情で了承のサインを書いていた。

（千冬姉の気持ちも分かるな）

神谷が強引なのはいつもの事だが、今回はいつにも増してゴリ押しであった事を、一夏も僅かに疑問を感じている。

すると、そこへ……………

「やあ」

何の前触れも無く、楯無が現れ、一夏へ声を掛けた。

「!?!? 貴方は!?!?」

突然目の前に現れた楯無を見て、一夏は飛び退く様に距離を取ったかと思うと、構えを取る。

更に白式を、何時でも呼び出せる状態にまでしている。

「……………そこまで露骨に警戒されると流石にへこむんですけど」

「……………」

楯無はへこむ様な様子を見せてそう言うが、一夏は警戒を解かない。

「ハア……………嫌われちゃってるねえ。お姉さんは悲しいよ」

「……………何か御用ですか？ 生徒会長さん」

と、楯無が殺気を見せないのので、一夏は警戒したままながらも、そう尋ねる。

「え〜とね……………織斑 一夏くん。今度の学園祭の事んだけど……………」

「ああ、俺を景品にするあの話ですか？ 別に良いですよ。そつちが勝手にやって、勝手に盛り上げれば良いじゃないですか。俺は一切関知しませんから」

「あ〜、いやね。流石にそれは悪いかなど思ってるんだよ。だからね……………交換条件として、これから当面、私が君のISSコーチをしてあげる。それで如何？」

「生憎ですが、間に合ってます……………じゃあ、失礼します」

一夏は楯無の言葉をバツサリとそう叩き斬り、立ち去ろうとする。

「うーん、そう言わずに。私はなにせ生徒会長なのだから」

「はっ？」

「アレ？ 知らないのかな？ IS学園の生徒会長って言うと……………」

と、楯無がそう言いかけた瞬間……………

「覚悟おおおおおおおおおおおつ！！」

一夏が立ち去ろうとしていた方向から、粉塵を上げる勢いで走ってきた生徒が、手に持っていた竹刀で楯無に斬り掛かった！

だが……………

「迷いの無い踏み込み……………良いわね」

楯無は余裕の笑みを浮かべて、扇子を取り出したかと思うと、その扇子で竹刀を受け流し、生徒の首元に左手で手刀を叩き込む！

と、その直後！！

今度は傍にあつた窓ガラスが破裂！！

楯無の顔に向かって、次々に矢が飛んで来る！！

見れば、隣の校舎の屋上に、和弓を射る袴姿の生徒の姿があり、矢は彼女が射たものらしい。

「ちよつと借りるよ」

すると楯無は、飛んで来る矢をかわしながら、先程倒した生徒が使っていた竹刀を足で蹴り上げ、キャッチすると同時に投擲。

割れた窓から飛び出した竹刀は、弓女の眉間にヒット。

弓女はそのまま倒れた。

「もらったあああああああ——————っ!!」

その直後!!

今度は廊下の掃除用具入れのロッカーから、両手にボクシンググローブを填めた生徒が飛び出し、猛ラッシュを繰り出して来た。

「ふむん。元気だね……織斑 一夏くん」

その猛ラッシュを余裕でかわしながら、再度一夏に話し掛ける楯無だったが……

「……………」

一夏は既に、遠くの方まで立ち去っていた。

「!?!? ちよつ!?!? 待って! 織斑 一夏くん!! ああ、もう

！ 邪魔！！」

その光景を見て、楯無は初めて慌てた様な様子を見せると、ボクシング女にランスの様なソバットをお見舞いし、再び掃除用具入れのロッカーにボツシユートする。

「待って！ 待ってつてばあ！！」

「……………まだ何か用が有るんですか？」

一夏はウンザリしている様子を隠そうともせずになんげ言う。

(うぐっ！ 手強い子ね……………こんな子は始めてだわ……………)

楯無は、表面上は冷静を装いながらも、内心で今まで相手にした事がないタイプである一夏を扱いあぐねていた。

彼女は、天性のカリスマと才能で、他人を自分のペースに巻き込む事が得意な性分である。

生徒会長の座に就いているのも、その才能による恩威が大きい。

が、今回ばかりは相手が悪かった。

一夏は既に、幼少期から圧倒的カリスマの持ち主である神谷との付き合い合っており、弟分にもされている為、他人のカリスマには余り反応しなくなっており……………

更には、楯無が神谷と戦っていた事で、彼女に対し強い不信感を抱いている。

オマケに、神谷が唯我独尊な性格な為、弟分の一夏も少なからずその影響を受けていたのだ。

幾ら楯無が流れを掴もうとしても、そもそも一夏はその流れに乗っておらず、自分のペースで、自分の思う様に進んでいる。

会話が成立しないのは、ある意味当然の事であった。

「さ、さっきの子達は、何で私を襲って来たのか、知りたくない？」

「いえ、別に……………」

「聞いてよ！！」

一夏があんまりにもつつけんどんな態度を取るのか、とうとう楯無は地団太を踏んでそう叫ぶ。

「ハア〜〜……………分かりました。で？ 何ですか？」

仕方なく、一夏は楯無にそう尋ねる。

「フッフ、それはねえ……………生徒会長、即ち全ての生徒の長存在は、最強たれ。つまり、IS学園において、生徒会長という肩書きは、ある1つの事実を証明しているんだよね」

「へえ〜〜」

あまり興味が無さそうにそう返事を返す一夏。

「それでね。最強である生徒会長は何時でも襲って良いの。そして勝ったなら、その者が生徒会長になるの」

「凄いですね」

「……………真面目に聞いている？」

「夏の態度があんまりなものであり、楯無は思わずそう言っ

「聞いてますよ……………アレ？　って事は？」

「？　如何したの？」

「貴方確か……………アニキと戦って負けてましたよね？」

「！？　うぐっ！？」

思わぬ点を指摘され、楯無は言葉に詰まった。

「って事は……………生徒会長の座はアニキに？」

「あ、アレは違うよ！　寧ろ天上　神谷くんは私の仕事を邪魔したんだよ！！」

「でも負けたのは事実ですよね？」

「うつつ！？　わ、私のシマじゃノーカンだから！　アレ！！」

「貴方は何処のブロンティストですか？」

このままでは学園内での自分の立場が悪くなると思い、慌てて楯無に謝る。

「ヒツグ……………じゃあ、ちょっと生徒会に来てくれる？」

「行きます！ 行きますから泣き止んで下さい！！」

涙目でそう尋ねる楯無に、一夏は反射的にそう答えてしまう。

「OK！ じゃあ行こうか！！」

すると、楯無は一瞬にして泣き止み、一夏に向かって笑顔でそう言った。

「……………」

その様に呆気にとられた様な表情となる一夏。

「ん？ 如何したの？」

そんな一夏を見て、楯無は春風のように微笑みながらしれっとそう言い放つ。

(や、やられた！！ クソッ！ まさかウソ泣きに掛かるとは！！……………)

内心で迂闊であった自分を責める一夏だったが……………

良く見れば、楯無の目が紅くなっていた。

(……………あ、マジ泣きだったんだ)

如何やら、生徒会長殿は切り替えが早い様である。

「それじゃあ、行こうか？」

そう言つて、楯無は歩き出す。

(！ どちらにせよ、マズイ！ このままじゃ、終始この人のペースだ！！)

泣かれた手前、素直に付いて行こうとは思う一夏だが、このまま楯無にペースを握られては碌な事にならないと思い、必死に脳をフル回転させる。

「あ、あの！ 生徒会には行きますけど、1つ条件があります！！」

「ん？ 何かな？」

「えっと……………」

そして、一夏が思いついた案とは……………

「」……「」

お互いにメンチを斬り合ったまま歩いている神谷と楯無。

彼はずっとこのままであり、雰囲気は険悪そのものである。

(……何故こんな事に……って言うか、俺のせいなんだけど……)

その後ろを歩いていた一夏が、頭を抱えてて自己嫌悪している。

その後……

生徒会に顔を出す条件として、一夏は神谷も同行させる事を求めた。

楯無は渋面をしたが、一夏を引っ張る方が重要だったのか、渋々ながらも承諾。

そして、現在に至るのである。

「……………」

2人は顔を合わせてからずっとメンチ切りを続けており、互いに一言も言葉を交わしていない。

(く、空気が重いつてレベルじゃないぞ、コレは……………)

この時初めて……………

一夏は千冬の思いを僅かに理解した。

「あ、あの！ 此処じゃないんですか！？ 生徒会室！？」

とそこで、生徒会室の前を通りかかったのに、気づかずそのまま歩き続けそうになっていた2人に、一夏がそう言う。

「……………そうね。どうぞ、一夏くん……………ついでに天上 神谷くんも」

「おう……………邪魔するぜ」

露骨に嫌な顔をしてそう言う楯無に、神谷も露骨に敵対心を見せながら、生徒会室に入って行く。

「お帰りなさい、生徒会……………長……………」

帰って来た楯無を、メガネを掛けて髪を三つ編みにしていると言う、

一昔前の漫画に出て来る委員長タイプの生徒が迎えたが、神谷と険悪な雰囲気である事を見て、閉口する。

「わ〜……おりむーとかみやんだ〜……」

すると、その後ろに居たのはほんが、2人の険悪な雰囲気など気にせず、そう話し掛けて来た。

「アレ？」

「んだよ？ のほんじゃねえか？」

一夏と神谷は、およそ生徒会と言う仕事には不向きそうなのほんの姿が在るのを見て、若干首を傾げる。

「まあ、そこに掛けなさい。お茶はすぐに出すわ……貴方にもね」

「客に茶出すのは当然だろうが……」

そう言つて来た楯無に、神谷はそう言い返すと、近くに在った椅子を引いて座り、会議室等になる長テーブルの上に、足を組んで投げ出し、腕組みをした！！

「！……」

神谷の態度に若干怒りの様子を滲ませながらも、如何にか平静を装って定位置に座る楯無。

(やっぱり、アニキ呼んだのはマズかったかな？)

一夏は2人の険悪な雰囲気を見て、益々自分の判断を後悔する。

「ど、どうぞ……………」

そんな楯無と神谷、そして一夏の前に、メガネを掛けた髪を三つ編みの少女が、おっかなびっくりと言う様子で紅茶を置いた。

「あ、どうも……………」

「サンキユ」

畏まってお礼を言う一夏とは対照的に、神谷はふてぶてしい態度のまま礼を言う。

「い、いえ……………」

メガネを掛けた髪を三つ編みの少女は、逃げる様に神谷の傍を離れる。

「お姉ちゃん。怖がり過ぎだよ。かみゃんは不良だけど、良い人なんだよ」

そんな少女の姿を見て、のほほんがそう言う。

「ふ、不良なのに良い人って、微妙に矛盾してない？」

「アニキは不良って言うより、ツツパリとか番長タイプだと思うけど……………っていつか、お姉ちゃん？」

2人の会話にツツコミを入れる一夏だったが、そこでのほほんが、

メガネを掛けた髪を三つ編みの少女をお姉ちゃんと呼んでいた事に気づく。

「あ、ああ、初めまして、織斑 一夏くん。妹が何時もお世話になってるわね。私は『布仏 虚』。本音の姉よ」

するとそこで、メガネを掛けた髪を三つ編みの少女……………『布仏 虚』がそう自己紹介した。

「（のほほんさんの本名って、布仏 本音だったのか）えっ？ 姉妹で生徒会に？」

内心で微妙に失礼な事を思いながら、一夏はそう疑問を呈する。

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。うちは、代々「生徒会長は最強でないといけないけど、他のメンバーは定員数になるまで好きに入れて良いの。だから、私は幼馴染の2人をね」

すると、のほほんがそう言い、楯無がそう説明して来た。

「お嬢様にお仕えするのが私共の仕事ですので」

虚が礼儀正しい態度でそう言う。

その姿は、まるで秘書かメイド長を思わせる。

「さて……………じゃあ、話をさせてもらっても良いかな？」

一夏と神谷を見据えながら、楯無がそう言うて来た。

「ハイ……………」

「早く始めるよ」

改まっている一夏とは対照的に、神谷は出された紅茶を飲みながら、ふてぶてしくそう言う。

「……………全校集会の時も思わず口走っちゃったけど、一夏くんが部活動に入らない事で色々と苦情が寄せられているの。それで生徒会としては君を何処かに入部させないとマズイ事になっちゃったのよ」

その態度に嫌悪感を露にする楯無だが、グツと堪えて話を始める。

「そうですか……………ですが、申し訳ないんですけど、俺は部活に入る気はありません。まだ自分の特訓で精一杯ですし、女子しかないこの学園の部活に入るには無理があると思います」

一夏は冷静にながらも、自分の意見を主張した。

「まあまあ、そう言わずに……………だからその代わりに、これから学園祭までの間、私が鍛えてあげるのよ。ISも、生身もね」

「別に要りません。コーチは沢山いますから、コレ以上増やす積りはないですし、アニキも居てくれますから」

「そういつこった」

楯無の提案を、やんわりながらもキツパリと断る一夏に、それを見

てニヤリと笑う神谷。

「くうっ！ でもあなた弱いじゃない!!」

「ええ、確かに俺は弱いですよ。だから日々強くなるうとしています。それをいきなり横からしゃしゃり出て来て、強くしてやるなんて、何様の積りですか？」

「それは!?!.....」

「大体、貴方アニキに負けてたじゃないですか？ アニキより弱い人に教わる事なんて無いと思いますけど」

「うぐうっ!?!」

楯無は言葉に詰まる。

やはり、この間、グレンラガンに敗北した姿を見られたのが足を引っ張っている様だ。

「.....」

そんな楯無の姿を見て、神谷はニヤニヤと笑っている。

(.....ムカつく!!!)

「え〜っ!?! 会長負けちゃったの〜?」

「そんな!?! ホントですか!?!」

そんな神谷の姿を見て、楯無が内心で腹を立てていると、のほほんと虚が驚きの声を挙げる。

「と言う事は、学園規則に則り……………天上さんが生徒会長に!？」

「うわ〜！面白そう〜！」

狼狽している虚とは対照的に、のほほんは楽しそうな笑みを浮かべている。

「ま、負けてないわ！負けてないもん!！」

(もん、って……………)

「見苦しいぜ。生徒会長さんよお。素直に負けを認めたら如何だ？」
子供の様な口調になった楯無に呆れる一夏と、勝ち誇った笑みを浮かべてそう言う神谷。

「な、なら！私と勝負よ!！」

するとそこで、楯無は一夏を指差してそう言い放つ。

「貴方が私に有効打を一撃でも入れられたら、今回の件は全て諦める！でも！私が勝ったら、今回の件を全て受け入れてもらうわ!！」

「……………だとよ？如何する、一夏?」

神谷は紅茶を飲みながら、隣の一夏に尋ねる。

「良いですよ……喧嘩ならあらゆる事が万事解決するってもんだ」
絶対有り得ないが、一夏はそう確信している目でそう言い放った。

「後悔しないでよ」

「その台詞……リボンでも付けて返してあげますよ」

苦々しい顔を浮かべている楯無に、一夏は神谷と同じ様に不敵な笑みを浮かべてそう言う。

「何か面白い事になってきたね」

「本音……今日ばかりは貴方の性格が少し羨ましいわ……」

ワクワクしているのほとんど対照的に、虚は頭を抱えていた。

「オイ、茶菓子ねえのか？」

そして、そんな空気など知った事かと言う様に、マイペースの紅茶を啜り、拳句に茶菓子を要求する神谷であった。

UNU

第26話『勝手に決めんじゃねえっ!!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

遂に一夏達の前にその姿を現した生徒会長、更識 楯無。
案の定、神谷とは互いに反目してしまいます。

そして一夏も、原作では彼女には終始振り回されっぱなしでしたが、神谷の影響を受けている此処の一夏は、ある程度対抗します。そして結局、勝負して分かり合えの展開へと発展します。

原作では合気道で対決でしたが、ここではIS同士でも本格的な模擬戦を行います。

一体一夏は、学園最強の生徒会長を相手に、どう戦うのか？

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第27話『それでこそ倒し甲斐が有るってものだ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第27話『それでこそ倒し甲斐が有るってものだ!!』

IS学園・第3アリーナ……………

その空中では、楯無が自分の愛機……………『ミステリアス・レイディ（霧纏の淑女）』を装着した状態で浮かんでいた。

観客席には例によって、一夏と楯無が戦うと言う情報を入手した生徒達が、ギャラリーとして集まっている。

「さ〜て、面白い事になったぜ……………」

そんなギャラリーの中に混じっていた神谷は、購買で購入したポツプコーンを片手に、試合が始まるのを待っていた。

「アハハ……………何でこんな事になっちゃったんだろうね？」

ちゃっかりその隣に腰掛けているシャルが、苦笑いを浮かべながら同じ様に集まって来ていた篤、セシリア、鈴、ラウラに向かってそう言う。

「あのバカが……………」

「一夏さんったら、もう……………」

「アイツ、最近益々神谷に似て来てる気がするわ……………」

「全くだ……………」

篤達は、一夏の無謀とも言える行為に、儼然とした表情を浮かべていた。

「フツ!!」

弾丸を全て斬り落とすと、雪片式型を右手に構え直し、楯無に向かおうとしたが……

「!?!? いない!?!?」

先程まで楯無が居た場所、楯無の姿が無く、一夏は慌ててハイパーセンサーをチエックする。

だが……

「遅い!!」

楯無のそう言う声が響いたかと思うと、一夏の背中に衝撃が走った!!

「!?!? ぐああっ!?!?」

一夏が悲鳴を挙げると、シールドエネルギーが減少する。

「くっ!!」

反射的に、後ろを振り向きながら雪片式型を振るう。

「よっ、と」

しかし、楯無は軽々とかわしてしまふ。

「やるわね……………」

「学園最強の名は伊達ではないと言つ事が……………」

箒、セシリア、鈴、ラウラが、その様子を見てそう呟く。

「へえ〜、やるじゃねえか、生徒会長の奴」

しかし神谷は、呑気にそう言いながら、相変わらずポップコーンを頬張っていた。

「神谷、やっぱり無茶だったんじゃない？ 生徒会長は学園最強なんだし……………」

シャルが、一夏の事を心配して、そんな事を言うが……………

「馬鹿野郎！ 相手が最強だとか名乗ってるんなら！ そいつを乗り越えて進むのが漢つてもんよ！！」

神谷はそう反論する。

「でも……………」

「それに俺が勝てたんだ！ 弟分の一夏が勝てねえ筈がねえ！！」

「如何言つ理論！？」

相変わらずの神谷節に、思わずツッコミの声を挙げるシャル。

「ま、そう心配すんなって……………食つか？」

カッカカツカツと言った具合に笑うと、神谷は持っていたポップコーンをシャルに差し出す。

「あ！ 頂きまーす！」

すると、後ろの席に居たティトリーから手が伸びて、ポップコーンを掴んだ。

(むづっ……………)

それに若干ムツとしながらも、シャルも神谷からのポップコーンを頂いた。

……………若干、ティトリーより多めに。

その間にも、一夏と楯無の攻防は続いている。

(クソッ！ 攻撃が全て往なされる！ 何て人なんだ！！)

楯無に斬撃を出し続けながらも、一夏は内心で戦慄する。

先程から、一夏の攻撃は全て、蒼流旋で受け止められては逸らされ、場合によってはキックで逸らされる事もあった。

「フフフ、一夏くん。コレで分かって貰えたかな？ IS学園生徒会長の強さが？」

そんな一夏に向かって、楯無は勝ち誇る様に言って来る。

「ああ、認めるよ……………貴方は強い……………」

楯無に向かつて攻撃を繰り返しながら、一夏はそう呟いた。

「なら!……………」

「それでこそ倒し甲斐が有るってものだ!…」

だが、何か言おうとした楯無を遮って、一夏はそう呟える。

「……………」

そんな一夏の言葉に、楯無は苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべる。

「生意気な子は……………お姉さん、嫌いだよ!…」

そして、不意打ち気味に、一夏に向かつて前蹴りを繰り返した!!

「!?!? グハッ!?!…」

楯無の繰り返した前蹴りが腹に命中し、一夏は大きく後ろにブツ飛ぶ。

「ゲホッ! ゲホッ! クソッ!…」

咳き込みながら、如何にか静止し、体勢を立て直そうとする一夏。

「せやあああああああ……………!…」

「このまま押し切る!!」

楯無が驚いたのを見て、一夏はそのまま押し切るうとする。

「くっつ！ 神谷くんと言い、君と言い！ 本当に驚かせてくれるね!!」

だが、楯無はそう言うと、両手で握っていた蒼流旋から左手を離し、その手に蛇腹剣……ラストイー・ネイルを出現させる!!

「せやあつ!!」

そして、押し合っていた一夏に、不意打ち気味に伸ばした刃を叩き込んだ!!

「ぐはっ!?!」

火花を散らしてぶっ飛ばされる一夏。

「クウツ!!」

そのままアリーナの地面に叩き付けられそうになったが、回転して着地する。

「けど、そんな戦い方して、シールドエネルギーは大丈夫かな？ 私にはまだ有効打を入れられてないけど？」

「クツ!!」

楯無の言葉を聞いた一夏が、苦い表情を浮かべる。

彼女の言う通り、白式のエネルギーは既に残り少なくなっていた。

セカンドソフト
第二形態移行し、パワーアップした一夏の白式だが……………

雪羅の使用や、スラスタ増設による副作用で、益々エネルギー消費が悪くなっている。

只でさえ、零落白夜が自機のエネルギーを攻撃に転用する技なだけに、燃費については以前より悪くなったと言っても良いかも知れない。

(エネルギーは残り僅か……………何としても楯無さんに有効打を入れないと……………けど、有効打を与えるには零落白夜を使うしかない……………楯無さん、それを知ってたか、まるつきり隙を与えてくれない……………)

一夏は冷静に今の状況を分析する。

神谷が熱さに任せて突っ走るタイプな為、そんな神谷のフォローに回る事が多かった一夏は、本人も知らぬ内に冷静な思考と分析力が身に付いていた。

(……………待てよ?……………有効打って事は、別に零落白夜を使わなくても……………まともな1撃を喰らわせれば良いって事だよな?……………)

ふと一夏の脳裏に、そこでそんな考えが思い浮かぶ。

(何か……………何か手は?……………)

そこで、一夏は白式の機能について再チェックを掛ける。

(!?!? コレは!?!?)

すると、とある機能に目が行く。

「ボーツとしてて良いのかな!?!?」

とそこで、痺れを切らしたかのように、楯無が突っ込んで来た!?!

ラストイー・ネイルを戻し、再び蒼流旋に水の螺旋を纏わせての突撃!?!

「!?!?」

一夏は驚きながらも、先程の機能の事を思い出す。

「……………一か八かだ!?!」

すると、一夏はその場で仁王立ちする!?!

「!?!? 一夏!?!?」

「何をやっていますの!?!?」

「アイツ! 気でも狂ったの!?!?」

「避ける! 一夏!?!」

それを見た筈、セシリア、鈴、ラウラが慌てて叫ぶ。

「アイツ……………何かする積りだな」

しかし、神谷だけは分かっているかの様にそう呟いた。

「神谷！？ 一夏は何を考えてるの！？」

「神谷は分かるの！？」

シャルとティトリーが、そう尋ねて来るが……………

「まあ、黙って見てな」

神谷はそんな答えを返す。

「せやあああああああ—————っ！！！！」

一夏目掛けて迫り来る蒼流旋。

「……………」

それを見ても、なお仁王立ちを続ける一夏。

「諦めたの！？ だったら終わりにしてあげるよ！！」

その瞬間に、楯無はイゲンニッション・ブースト瞬時加速を発動。

残っていた距離を一気に詰めた！！

蒼流旋が一夏に命中する！！

「!?!? 今だ!?!」

……かと思われたその瞬間!?!

一夏は僅かに身体を左へとずらす。

蒼流旋は直撃せず、一夏の右脇腹を抉る様に命中!?!

シールド状で火花を散らす!?!

「ぐあああつ!?!」

シールドで防がれてはいるが、衝撃は一夏の身体に伝わり、悲鳴が出る。

「!?! うおおおおつ!?!」

だが、一夏はそれをやせ我慢し、蒼流旋を右腕と脇で挟み込む様に抑え込んだ!?!

激しく火花を散らしていた蒼流旋だが、やがて完全に止められ、楯無の動きが止まる!?!

「!?!? 嘘つ!?!? けど、シールドエネルギーは大きく削られた筈!?! その状態じゃ、零落白夜は……」

「零落白夜なくても……俺にはコレが有る!?!」

楯無は驚きながらもそう言うが、一夏はそう叫んで拳を握った雪羅

を楯無に向ける!!

その瞬間、轟音が響いたかと思うと……

楯無の身体がブツ飛ばされ、地面に倒れた。

「……………」

アリーナに居た観客に生徒達は、何が起こったのか分からず呆然となる。

「……………!?!?」

箒達も、何が起こったのか分かっていない。

「一夏の野郎……………中々燃える事してくれるじゃねえか」

しかし、神谷は一夏が何をしたのか見えていた様で、そんな事を呟く。

その視線の先には……………

アリーナの地面に拳の部分を突き刺す様に埋まっている……………

雪羅の姿が在った。

では、その瞬間を今一度見てみよう……………

それは、一瞬の出来事だった!!

白く、堅く、強い！！

その威風堂々たる巨大な拳が、全てのケリを着けた！！

誰もが思いもしなかった出来事……………

ISの基礎機能の応用！！

一夏がそれに気づいた瞬間！！

白き騎士は構えた……………

己が左腕を……………

楯無生徒会長が驚く！

だが、時既に遅し！！

何故なら、まだ未熟な一夏の、本人も知らぬ未知なる力が、無意識にその巨体を構えさせた！！

そして！

放たれる1撃！ 必殺の力！！

その名を！

その名を！！

その名を！！！！

ツポーズを決めながら叫びを挙げる。

「ちょ、ちよつと待って！ そんなの有り！？ パーツパージ機能を攻撃に使うなんて!？」

喰らった楯無も呆然としていたが、一夏の叫びを聞いて、慌ててそう言っ来て来た。

そう、実は一夏の使ったロケットパンチ……………

本来は攻撃用ではない機能を使つての攻撃だったのである。

ISは、万が一量子化システムが故障し、装着者がISを装備したままの状態となつてしまふという事態を想定し、パーツを其々にパージする事が出来る機能が有るのだ。

本来ならば、緊急時の非常用措置としての機能なのだが、一夏はこれを攻撃に転用したのである。

当然の事だが、パーツをパージすれば、そのパーツが担っていた機能は使えなくなるし、射出したパーツが破壊されてしまふと言う恐れもある。

普通の人ならば、思いついたとしても先ずやらない行為である。

しかし、一夏は普通では無かつた。

神谷と一緒に喧嘩に明け暮れ、勝つか死ぬかのロージエノム軍との戦いを経験してきた一夏にとって、思いついた手段は即座に実行するものである。

命の遣り取りの中で迷って居ては、命が幾つあっても足りないからだ。

「何言ってるんですか？ パーツパージ機能を攻撃に使用してはならないってルールはありませんでしたよ？」

一夏はシレッと楯無にそう言い放つ。

「そ、それはそうだけど……………」

「取り敢えず、楯無さんに1撃喰らわせたから、勝負は俺の勝ちって事で良いですね？」

何とか言い包め様とした楯無だったが、何か言う前に一夏がそう言葉続けた。

「い、いや、でも……………」

「アレ？ まさか生徒会長ともあろう方が、約束を違えるんですか？」

「づぐづぐ！？」

言葉に詰まる楯無。

暫しの間沈黙していたかと思うと…………

「……………分かったわ……………ルール上……………私の負けね」

「凄かったねえ、ティトリー」

シャルも驚きを露わにしたまま、ティトリーに話し掛ける。

しかし、先程までいた筈のティトリーの姿は、何処にも無かった…

……

「アレ？ ティトリー？」

「何時の間に？」

「アイツ……時々唐突に姿を消すわよね」

シャル、ラウラ、鈴がその声を挙げる。

「……………」

そんなシャル達を見ながら、神谷は何やら考えている様な顔をしていた。

一方、その頃……

そのティトリーはと言つと……

アリーナの裏手、人気の無い場所で……

「首尾は如何だ？」

「中々難しいよお。一夏も神谷も、他の専用機持ちも、中々隙を見せないし……」

チョーカーに付いた鈴に向かって何やらボソボソと話していた。

如何やら、鈴が通信機になっている様だ。

「そうか、分かった。お前はそのまま任務を継続しろ。くれぐれも獣人だとばれない様にな」

通信先の相手がそう言って来る。

「う、うん……分かってるよ」

ティトリーはその言葉に、若干詰まりながら返事を返す。

何せ既に楯無に見破られており、神谷にも知られているのだ。

「？ 如何した？」

「えっ！？ う、ううん……何でも無い……」

それに気づかれて、ティトリーは慌てて誤魔化す。

(でも……………如何して神谷はアタシを獣人と知りながら、庇ってくれるんだろ?……………)

心の中に、そう疑問が湧き上がる。

「ティトリー……………」

すると再び、通信先の相手から声が響いて来た。

「えっ!?! な、何っ!?!」

ティトリーは若干慌てながら返事をする。

「この任務、何としても成功させるんだぞ。そうすれば、螺旋王様も四天王様もお前を処分しようと言っるのは思い留まって下さる筈だ」

「! う、うん……………分かってるよ」

通信先の相手からその話を聞いた途端、ティトリーは表情を曇らせた。

「では、余り長話をしていたも怪しまれるな。これで定時報告は終えるぞ」

「了解……………」

通信先の相手とそう言い合い、ティトリーは通信を切断した。

「……………」

そのまま、曇った表情のままですらんと立ち尽くしているティトリー。

「やるしかないんだ……………だって、アタシは……………獣人なんだから」

そしてその表情のままですらう眩き、その場から立ち去ったのだった

……………

その夜……………

IS学園・学生寮……

神谷と一夏の部屋……

「やるじゃねえか、一夏！ 生徒会長の奴のあの悔しそうな顔つたらなかったぜ！！」

神谷は改めて、楯無に勝利した一夏を褒めていた。

「いや、アレは運が良かったんだよ。俺の実力じゃ……」

「何言ってるやがる！ 運も実力の内！ 流石は俺の弟分だぜ！！」

「アニキ……」

神谷に褒めちぎられ、一夏の気分は最高潮まで達しようとしている。

「よっしゃあつ！ 今夜は飲めや歌えやの大宴会だ！！」

「いや、それはマズイよ。千冬姉に怒られる」

しかし、止める所は止めるのであった。

「何だよ、ノリワリいなあ……」

「アニキは何でも無いかもしれないけど、千冬姉に怒られる事ほど、俺に取って憂鬱な事は無いんだよ」

幼き頃から千冬の折檻を受けている一夏にとって、千冬は尊敬する

姉であると同時に、恐怖の対象である。

「まったく、情けねえなあ……………分かったよ、取り敢えず、祝いは後だな」

「ゴメンね、アニキ。その代わりに、今日は先にシャワー使って良いから」

「おっ！　そうか、すまねえな！　じゃあ遠慮無く……………」

一夏にそう言われて、神谷は着替えとバスタオルを用意すると、シャワールームへ入って行った。

「フウ〜〜……………」

残った一夏は、椅子に腰掛けると、備え付けの机の方向に向き乗る。

（それにしても……………そもそも如何して楯無さんはアニキと戦ったんだ？　それに、俺にあんなに拘りを見せて……………）

そこで、楯無についての疑問を思い浮かべる。

戦いにこそ勝ったものの、結局は多くの謎が残されており、釈然としない気持ちだが、一夏の心を埋め尽くしていた。

（正直、戦ってみて分かったけど、楯無さんがそんなに悪い人だとは思えない……………けど、アニキは理由も無く喧嘩を売る様な男じゃない……………一体、2人の間に何があつたんだ？）

考えを巡らせるが、堂々巡りであり、答えが見つけれられない。

(うづうづん、一体何が……)

それでも必死に頭を回転させ、答えを見つけようとしている一夏。

(不良と生徒会長の対立……ってな感じじゃなかったしな)

「だ〜れだ？」

するとそこで不意に、一夏の視界が塞がれ、そう言う声が聞こえて来た。

「うわっ！？ た、楯無さん！？」

「ピンポ〜ン！ 正解！！」

一夏はその声を聞いて、楯無の物であると判断したものの、楯無は正解だと言いながらも、一夏の視界を塞いだままである。

「もう、一体何ですか、楯無……さ〜んっ！？」

視界を塞いでいる楯無の手を外しながら、一夏は振り返り、そのまま叫びを挙げた。

「なあに？ 一夏くん？」

楯無はそんな一夏に向かって微笑みながらそう言う。

「何じゃありませんよ！ 何って格好してるんですか！？」

一夏は慌てながら更に叫ぶ。

現在の楯無の恰好は……

所謂、『裸エプロン』の姿だったのだ。

「うふふ……」

すると、楯無は微笑んだまま、一夏に背を向ける。

「うわあっ!?!」

益々慌てる一夏だったが……

「じゃん! 水着でした」

楯無はケラケラと笑ってそう言う。

その言葉通り、裸エプロンかと思われた楯無の恰好は、実は水着エプロンだった。

……それはそれで素晴らしいが。

「……………」

「んふ。残念だった?」

「そ、そんなワケないでしょう!」

「あは。顔赤いわよ?」

「うっ……い、一体何の用ですか!？」

徐々に楯無のペースに持って行かれそうになり、一夏は慌ててそう尋ねた。

「……………」

それを聞いた楯無は、真面目な表情になると、再び一夏の方に向き直る。

「一夏くん。神谷くんは何を考えているの?」

そして、一夏にそう尋ねて来た。

「えっ?」

「神谷くんは獣人のスパイ……………ティトリー・キャッツを庇ったわ。一体何の考えが有ってそんな事をしたの?」

「!?!? ティトリーが獣人のスパイ!?!」

楯無の言葉に、一夏は驚きを示す。

「そうよ。巧妙な偽装がされていて、書類上でも見破れなかったけどね……………でも私は確かに見たわ。あの子が獣人だって事を。そして……………神谷くんもね」

「……………」

「でも彼は彼女を庇った。一体如何して!? 彼にとっても獣人は憎むべき敵の筈よ!」

「確かにロージエノムはアニキの父さんの仇さ。でも……………アニキは憎しみだけで戦ってるんじゃないと思う」

「えっ?」

一夏の思わぬ言葉に、今度は楯無が驚きを露わにする。

「上手く言えないけど……………アニキはどんなに大変な目にあったって、いつも笑ってた。何ていうか、アニキは……………」

「底無しの馬鹿って事?」

「……………そうかも知れないな。けど、馬鹿ってのは許せないな」

楯無を若干睨みながらそう言う一夏。

「だから獣人と知ってても庇うって言うの? 彼女を信じるって言うの? 有り得ないわ」

「確かにそうだ。でも……………アニキはそう言う男だ。そして……………アニキが信じるなら、俺も信じる。テイトリーは俺達の友達だ」

「……………兄弟揃って本当に馬鹿ね! そんな甘い考えが通じると思ってるの!?!」

今度は楯無が一夏を睨みながらそう言うが……………

「た、楯無さん!?!」

「あ? 何で生徒会長が居るんだよ?」

慌てる一夏とは対照的に、神谷は不思議そうに首を傾げている。

「ア、アニキ! 取り敢えず、パンツを!!!」

「一夏! 神谷! 何だ今の悲鳴は!?!」

一夏が慌てながらそう言おうとしたところ、今度は玄関の扉の向こうから、箒の音が響いて来る。

稻荷寿司を作ったので、一夏に食べてもらおうと持ってきたところ、楯無の悲鳴を聞いてしまった様だ。

「ほ、箒!? だ、駄目だ! 今は入るな!!!」

そう叫ぶ一夏だが、時既に遅し!

扉は開かれ、慌てた様子の箒が飛び込んでくる!!!

「一夏!」

「よお」

そして、部屋に飛び込んだ箒が最初に見たものは……

シャワールームから全裸で出て来ていた神谷と、その股間の巨大なドリルだった。

「# \$ % & ¥ @ + * ? !」

声にならない悲鳴を挙げて、箒もそのままバタリと倒れてしまつた。

「わあ~~~~っ!?!? 箒~~~~っ!?!?」

「何だつてんだよ? 2人して……………」

「アニキーツ! 兎に角パンツを穿いてくれ~~~~っ!?!」

ワケが分からずキョトンとしている神谷に向かって、一夏は疲れた様子を見せながらそう叫ぶのだった……………

後日……………

余りにショックな出来事だった為か……………

楯無と箒の記憶から、この1件はポロリと消え去っており……………

無理に思い出そうとすると酷い頭痛に見舞われる様になったそうだ。

まあ………

それが彼女達にとって、一番良いのかも知れない………

つづく

第27話『それでこそ倒し甲斐が有るってものだ!!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

遂に一夏と楯無の直接対決。

技術面で格段に劣る一夏だったが、奇想天外な戦法で如何にか勝利を納める。

そしてティトリーは何か獣人の作戦を抱えている様子……………

果たして彼女はこの先如何するのか？

次回からはいよいよ学園祭です。

ちよい役だったあのキャラにもかなりのスポットが当たったりしますので、楽しみにしてして下さい。

これからも、よろしくお願いします。

第28話 『お前等さあ、それでも男か？ カッコ悪いぞ』 (前書き)

PVが30万人を突破しました。

皆様、ご観覧ありがとうございます。

これからも、『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく
お願いします。

第28話『お前等さあ、それでも男か？ カッコ悪いぞ』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第28話『お前等さあ、それでも男か？ カッコ悪いぞ』

ティトリーや楯無の騒動から時は流れ……………

とうとうE.S学園の学園祭が開催された。

一般公開はされていないので、花火は上がらないが、生徒達の盛り上がりっぷりは半端では無かった。

そして、神谷と一夏が居る1年1組の出し物……………

『猫耳ご奉仕喫茶』だった。

「嘘！？ 1組であの織斑くんの接客が受けられるの！？」

「しかも執事の燕尾服！」

「プラス犬耳！！」

「それだけじゃなくて、ゲームもあるらしいわよ？」

「しかも勝ったら写真を取ってくれるんだって！！ ツーショットよ、ツーショット！！ これは行かない手はないわね！！」

いや、正確にはそこで働く一夏が人気なのである。

何せ一夏は学園に2人しか居ない男の片方なうえ、顔はそれなりにハンサムだ。

それが執事姿で接客してくれるのである。

しかも、ネコ耳喫茶ながら、一夏にはコッチの方が似合つと犬耳に
されている

女子として、こんなチャンスを放って置く手は無かった。

「いらっしやいませニヤン！　こちらへどうぞ、お嬢様」

接客担当班の中で、一際楽しそうにしているシャル。

何せ彼女は、以前成り行きから、メイド喫茶のアルバイトをした事
があるのだが……

男装が似合つと言う理由で、執事服を着させられてしまい、メイド
服を着れなかったのである。

幾ら男装が似合つと言っても、シャルも女の子。

可愛いものが好きな女子として、メイド服には憧れが有つた。

それが念願叶って切られたのである。

喜びも一入だった。

「ティトリーちゃんの猫耳、すっごく良く出来てるね？」

「ホントホント、何処で買ったの？」

そして、猫耳メイドの姿が一番良く似合っているティトリーには、
クラスメイトや客から質問が飛んでいた。

「え、えつと……………これはその……………自前で……………」

「あゝ、自前なんだあ」

「ティトリーちゃんってこだわり派だったんだね」

「ニヤ、ニヤハハハハ……………」

クラスメイト達の声に苦笑いを浮かべるティトリー。

勿論、この耳は本物である。

だが、周りには自分と同じ猫耳の少女が沢山居る為、結構手が込んでいる作り物として見られており、本物だと気づく人物は居なかった。

(ティトリー……………)

楯無から事情を聞いていた一夏を除いて……………

(まさかアニキ……………ティトリーの為に、猫耳メイド喫茶にしようなんて……………)

一夏がそんな事を考えていると……………

「おゝい、繁盛してるかあ？」

客引きに出ていた、当の神谷が戻って来た。

その恰好は、下半身は裾がボロボロになっているドカン、足には下

駄。

上半身は晒を巻いた上に、袖が肩口から無くなっている長ラン。

頭にはつばがギザギザになっている学帽を被って、その上にどら猫の様なボロボロのネコ耳を付け、口には先の方に葉っぱが付いた茎を啜えていると言う………

ネコ耳の部分を除いて、まるで漫画からそのまま飛び出して来た様な『番長』の恰好をしていた。

「あ、アニキ！ お疲れ！！」

「おう。繁盛してるみてえだな」

「アニキが客引きしてくれてるお蔭だよ、きつと」

繁盛している様子を見てそう言う神谷に、一夏はそう返す。

出し物を決めた際に、神谷は接客など出来そうにないというクラス全員の意見と、本人の弁もあり、接客では無く客引きの仕事に付いていた。

実際、神谷の恰好が目立つものであったのと、神谷自慢の強引な誘いで、客引きはそれなりに上手く行っている。

「しかし、何でお前は番長スタイルなのだ？」

「知らねえよ。衣装を届けに来た奴が俺を見るなりこっちの衣装を寄越しやがったんだ。まあ、気に入ったけどな」

ラウラに尋ねられて、神谷はそういう返事を返す。

「良いなり、アニキ。俺もそっちが良かったなあ」

と、一夏がポツリとそう漏らすと……………

「……………それだけは絶対に止めて!!」「……………」

1組の生徒達と、客として来ていた他のクラスの生徒達が、声を揃えて一斉にそう言って来た。

「うわっ!?!?」

その声に一夏は驚く。

(神谷くんは似合ってるし、本人も気に入ってるから別に良いけど……………)

(一夏くんのあんなダサイ格好なんてみたいないわ!!)

困惑する一夏を尻目に、小声でそう話し合う生徒達だった。

「何だっつてんだよ?……………」

「ちよっと、その執事。テーブルに案内しなさいよ」

すると、そんな一夏に、そういう声が掛けられた。

「おう、鈴………何してるの、お前？」

振り返った一夏は、鈴の姿を見てそう言う。

鈴の現在の恰好は、チャイナドレスを纏った姿だったからだ。

「う、う、嫌い！　　うちは中華喫茶やってんのよ！！！」

「そうなのか。飲茶って奴だな」

「アタシがウエイトレスやってるってのに、隣のアンタのクラスのせいで、全然客来ないじゃない！　　って言うか、何よネコ耳ご奉仕喫茶って！？　　誰よ、こんな馬鹿な企画考えたの！！！」

「馬鹿とは何だ、馬鹿とは！？　　前衛的なサービスに溢れた独創的な店じゃねえか！！！」

鈴の発言に、神谷が噛み付く。

「神谷！？　　アンタなの！？　　とうとう脳がイカレちゃったの！？」

「んだと、コラア！？　　やんのかあ！？」

「上等じゃない！　　掛かって来なさい！！！」

すると、鈴は何処からともなくヌンチャクを取り出し、構えを取る。

「吐いた唾飲むんじゃねえぞ！！！」

神谷も神谷で、何処からとも無く愛用の長刀を取り出した。

「ちょっと！ アニキ、ストップ！！ 鈴も止めるって！！」

慌てて止めに掛かる一夏だったが……

「良いぞ良いぞ〜！」

「やれやれ〜！！！」

「ええっ！？」

如何やら客は、店の演出と誤っている様で、無責任に囃し立て始めている。

「ど、どうすれば？………」

「ホラホラ、鈴。折角来たんだから、座って座って。神谷も一休みに来たんでしょ？ 今お茶淹れるから待ってね」

一夏が戸惑っていると、シャルがそんな2人の雰囲気など気にせず、そう言ってきた。

「ちょっと！ 邪魔しないでよ、シャルロット！！」

「まあまあ、鈴………」

治まりが効かなそうな鈴だが、シャルはそんな鈴に近づき……

() 『執事にご褒美セット』を頼むと、一夏が食べさせてくれるサービスがあるよ)

(!?)

それを聞いた鈴は……

「一夏！ 何やってんの！？ 早く注文聞きに来なさい！！」

「！？ 何時の間に！？」

何時の間にか席に着席し、一夏に注文を最速したのだった。

「一夏！ 早く！！」

「わ、分かったよ！ 今行くよ！！（シャルロットの奴………何言っただんだ？）」

一夏は、どうやってシャルが鈴を治めたのか気になりながらも、鈴の注文を伺いに行く。

「チツ！ 何だよ、拍子抜けさせやがって………」

「まあまあ、神谷。今日はお祭りなんだからさ」

不完全燃焼で、イマイチ煮え切らなかつた神谷は、長刀を背の鞘に戻しながらそう呟き、そんな神谷をシャルが宥める。

「それもそうだな………」

「と、ところでさあ、神谷」

「ん？」

「ぼ、僕のこの恰好……………如何……………かな？」

シャルは自分が着ているメイド服と、装着しているネコ耳について神谷に尋ねる。

「ふむ……………」

神谷は、ジッとシャルを足の爪先から頭頂部まで観察する様に見ると見る。

「ど、如何？」

「良いじゃねえか。このまま持って帰りたくなっちまうぜ」

「ふえええっ！？ お、お持ち帰りい！？」

神谷のその発言に、シャルは顔を真っ赤に染める。

「そ、そんな、神谷……………駄目だよ。僕達まだ高校生なのに……………」

照れながらそう呟くシャルだったが……………

「ねえねえ、神谷！ アタシは如何かな！？」

「おう！ オメエもスゲー似合ってるぜ！ ハマリ役だな！」

「ニヤハハハッ！！！」

シャルが驚き、神谷がうんざりした様な表情を浮かべる。

「楯無さん！？ 何でメイド服！？」

と、一夏もその姿を見つけ、楯無がメイド服姿である事をつっ込む。

「気にしない、気にしない。あ、私にもお茶くれる？」

そんな一同の視線を華麗に無視すると、楯無はそう言いながら席に腰掛けた。

「……………手伝う気は無いんですね。分かりました」

一夏が呆れた様に呟きながら、楯無からの注文を受け付ける。

と、そこへ……………

「どうもー！ 新聞部でーす！ 話題の織斑執事を取材しに来ましたー！！」

そう言いながら、新聞部のエース『薫 薫子』が店内に姿を見せる。

「あ、薫子ちゃんだ！ やっほー」

「わお！ たっちゃんじゃん！ メイド服も似合うねー。あ、どうせなら、織斑くんとツーショット頂戴」

「いえい！」

薫子がそう言うと、楯無は既に立ち上がり、一夏の傍に行き、ピースサインを決めていた。

しかし……………

それが呼び水になったかの様に……………

一夏のラヴァーズが、挙って自分も一夏とツーショットを取りたいと言い出し……………

店内は一時、撮影所状態となる。

最初に権利を得たのはセシリア。

他の一同に見せつけるかの様に、腕を絡ませたのツーショットを撮影してもらった。

続いてはラウラ。

身長差がそれなりにある為、抱っこして欲しいと一夏に強引に強請り、漸く抱っこしてもらった際には、実に幸せそうな表情となり、その瞬間を見逃さずにシャッターが切られる。

続いては鈴。

その場に言わせたので、勢いで一緒に取って貰える事になったのである。

ポーズについては、彼は揉めた末……………

一夏の背中に飛び付いた瞬間を撮影して貰い、実に満足げな表情を見せた。

そして、最後は箒である。

「……………」

「如何したんだ？ さっさと写真撮っちまおうぜ」

何やら沈黙していた箒に、一夏がそう声を掛ける。

「こ、この様な恰好の写真が残るのは避けたいのだが……………」

如何やら、メイド服＋ネコ耳姿の写真を撮られる事に抵抗がある様だ。

「何だよ。俺だって似た様なもんなんだから……………」

「似ていない！ 全然違う！ 大体お前は……………」

「はいはい、分かったから。お店も忙しいし、早くやっっちゃおうぜ」

何か言おうとした箒を遮り、一夏は箒の手を取る。

「て、て、手を握るなっ！」

いきなり手を握られた箒は、振り解こうと暴れる。

「あ、暴れるなよ!!！」

「うっ、嫌い！ 嫌い！」

激しく抵抗する箒。

すると……

握っていた一夏の手がすば抜け、支えを失った箒の身体が倒れそうになる。

「あっ? ……」

「! 箒!!！」

その瞬間、一夏は自分でも驚く程の反応とスピードで、倒れそうなになっていた箒の傍に寄ると、そのまま背に左腕を回し、浮き上がりかけていた足のひざ裏に右腕を差し込んで、お姫様抱っこで抱き上げた。

「「……………えっ!?!」」

「シャッターチャンスッ!!！」

一夏と篤が同時に驚きの声を挙げた瞬間、薫子がカメラのシャッターを切った。

「ありがとう、一夏くん。お蔭で良い写真が撮れたよ」

「え、あ、ああ、そうですか……………」

「ちょ、ちょっと待って下さい!!」

呆然としている一夏に対し、トンでもない写真を撮られた篤は、慌てて薫子に詰め寄る。

「大丈夫、大丈夫。校内新聞には使わないであげるから」

「そういう問題じゃないんです！今の写真は無しです！消して下さいー!!」

篤は、必死に薫子からカメラを奪おうとするが、薫子は華麗に回避する。

「それじゃあ、次はシャルロットちゃん、行ってみようかあ？」

色んな意味で疲れ果てた篤を尻目に、薫子は今度はシャルロットにその声を掛けた。

「あ、ハイ。えっと……………僕は、神谷とで良いですか？」

「えっ？神谷くんと？……………ま、まあ、シャルロットちゃんがそれで良いなら良いけど……………」

「ハイ！ 神谷、お願い！」

「おうよ！ そんなじゃ、ポーズはこんなんで如何だ？」

「！？ うわあっ！？」

と、そう言うがいなや、神谷はシャルを抱き上げたかと思うと、そのまま右肩に座らせて担いだ。

「まあっ！？」

「何とっ！？」

セシリアとラウラが驚きの声を挙げる。

「相変わらず無駄に馬鹿力ね……………」

「全くだ……………」

鈴と箒は呆れる様な声を漏らす。

「スゲエ！ 流石だぜ、アニキ！！」

只一人、一夏は相変わらず尊敬の眼差しで神谷を見ていた。

「おおっ！？ これは迫力有るねえ！ それじゃ、ハイ、チーズ！
」！

「ブイッ！！」

「あつじつ……」

ノリノリでVサインを出す神谷と、終始照れた顔を浮かべるシャル。

「いや、思った以上に良い写真が撮れたよ。じゃあ、最後はテイトリーちゃんね」

「あ、あの……」

薫子がそう言つと、テイトリーは何か言いたげな表情をする。

「ん？ 如何したの？」

「ア、アタシはその………ツーショットとかより、皆と一緒に写真を撮りたいなあ……」

遠慮しがちにそう言つテイトリー。

「あ、成程ね。うん、それも良いね。じゃあ皆！ 集ま……」

すぐさま薫子は神谷達にそう呼び掛ける。

「貴様、退けえ……」

「貴方こそお退きなさい……」

「ちよっ！？ お前等、引つ張るな……」

一夏の隣を争つて、一夏を左右から引つ張り合う筈とセシリア。

「ちょっと！ 何デレデレしてんの!？」

「お前は私の嫁だろうが!!！」

更に後ろからはチヨークスリーパーを掛ける様に鈴がしがみ付いて来て、ラウラも前から抱き付いて来る。

「ぐづづううう………」

色んな意味で限界な状況に、一夏の顔が青褪めて行く。

「ハ〜イ。織斑くんが限界になる前に、皆さんポーズをお願いしますね〜」

しかし、薫子は笑顔を浮かべたまま撮影準備を整える。

「ホラ、オメエも来い、生徒会長!」

「あ、ちょっと!？」

「ティトリー！ オメエはそこで生徒会長とだ!！」

「ええっ!？」

そして神谷は、何を思ったのか楯無とティトリーを並べている。

「ア、アハハ………どうも」

「……………」

苦笑いしているティトリーに対し、楯無は複雑そうな表情を浮かべる。

「ホラ、シャル。もっと寄れ。写らねえぞ」

「う、うん………」

そして、喉けて置いて放置し、自分はシャルを傍に寄せていた。

「それじゃ行くよーっ！ハイ、チーズ！！」

そしてそのまま、カメラのシャッターは切られのだった。

その後、楯無が手伝いをするのと名乗り出てくれたので、一夏は少し休憩を取り、招待券で招待した悪友の弾を迎えに行く。

神谷も、再び客引きへ行く序にと付いて行く。

「ちょっと良いですか？」

すると、そんな一夏に声を掛ける人物が居た。

「はい？」

「失礼しました。私、こういう者です」

一夏が若干戸惑いながら振り返ると、スーツ姿の女性が名刺を差し出して来る。

「えっと……………IS装備開発企業『みつるぎ』涉外担当・巻紙 礼子……………さん？」

「ハイ。織斑さんに是非、我が社の装備を使っただけないかと思ひまして」

（ああ……………またこつという話が……………）

一夏は平静を装いながらも、内心で「またか」という気持ちになる。

世界で唯一ISを動かせる男性である一夏の元には、宣伝の為に自社の製品を使って欲しいと言う依頼が殺到しているのだ。

なお、グレンラガンはISであると世間には公表してる神谷にも同じ事が言えるかもしれないが……………

そちらへの取り次ぎは、全て千冬が（物理的にも）シャットアウトしている。

まだグレンラガンがISでないと世界に知られるワケにはいかないのだ。

しかし、白式のコアが、後付けの武器を拒絶している為、実質武器の装着は不可能なのである。

雪羅は、以前一夏がシャルのライフルを借りて射撃を行った経験か

ら、白式が独自に作り出したものであると推測されている。

「いや、あの……………」

「何やってんだ、一夏！ 弾の奴が待ちくたびれちまうぞ！！」

一夏が何か言おうとしたところ、神谷が一夏の腕を掴んで強引に連れ始めた。

「うわぁっ！？ す、すみません！！」

「あ、ちょっと！……………」

礼子が呼び止める間もなく、一夏と神谷は去って行ってしまふ。

「……………チッ」

すると、2人の姿が見えなくなった後……………

礼子は苦々しげな表情で舌打ちをしたのだった。

IS学園・正面ゲート前……

「ふ、ふ、ふっ……………」

弾は、込み上げそうになる笑いを必死に押し殺していた。

「遂に、遂に、遂にっ！ 女の園！ IS学園へと……………キタッ！！」

どこぞのスイッチで変身する宇宙ライダーの様な声を挙げる弾。

実は遡る事、3日前……………

弾は一夏から、外部の者がIS学園の学園祭に参加する事が出来る招待券を貰っていたのである。

招待券を貰えると一夏から言われた際の弾は、正に天元突破せん程のテンションとなっていた。

精一杯決めた恰好をして、今は正体してくれた一夏を待っている。

「しっかし……………」

弾はふと、ゲートから学園内を見やる。

「……………」

数人の生徒と目が在ったが、その内の何人かがサツと逃げ出す様な態度を取った。

「……………何か俺、変なのかな？」

その様子が気になり、自分の恰好をチェックする弾が、特におかしな所は見当たらない。

……………いや。

本人は全くおかしくないと思っているが、1つだけ生徒達が彼を敬遠する理由を作っているモノがあった。

それは……………

私服の背中に堂々と刻まれている、グレン団のマークである！

IS学園の不良として名を通らせている神谷は、入学からかなり経った今でも、その容姿や言動、行動から嫌っている生徒がかなり多い。

その為、彼と同じマークをしている弾を警戒しているのだ。

「はあ〜、何かへこむな〜……………」

弾は肩を落として溜息を吐く。

「いい加減にして下さい!！」

するとそこで、凜とした声が聞こえて来た。

「??？」

弾が、その声が聞こえて来た方向を見やると、そこには……

「い〜じゃねえかよ〜、ちよつとぐらい」

「招待券の無い人を学園内に入れるワケには行きません!！」

「固い事言つなよ〜、姉ちゃん」

正面ゲートで入場客の受付をしていた虚が、6人ぐらいの不良かチンピラと思わしき男達に絡まれていた。

如何やら、招待券が無いにも関わらず、学園に入れるといちやもんを付けているらしい。

(アツチャ〜、最近また増えたよなあ〜、ああいう連中……………)

その連中を見ながら、弾が内心でそんな事を思う。

ISの登場で女尊男卑の風潮が広まっていたこの世界だったが、口

「ジェノム軍の登場でISが何度も撃墜され、通常兵器の再配備と男性軍人の復帰が進むと、勘違いして幅を利かす男が出始めていた。

「じゃあよ、姉ちゃんが俺達の相手してくれよ。それで勘弁してやるぜ」

「ぶざけないで下さい！ いい加減にしないと警察を呼びますよ！」

不良達のいちやもんや誘いにも、凜とした態度を崩さない虚。

「まあまあ、そんな事言うなよ」

と、不良の1人がそう言いながら、虚の腕を取る。

「！ 触らないで下さい！！」

そこで我慢が限界に達したのか、虚はその手を振り払うと、そのままその不良に平手打ちを見舞った！

「イテツ！？」

「あつ！？」

やってしまったから、「しまったっ！？」と後悔する虚だったが、時既に遅し。

「1Jの……クソアマアツ！！」

逆上した不良は、拳を振り被って、虚を殴り付けようとする。

「キヤアッ!？」

虚は思わず目を閉じる。

「グアアッ!？ イデデデデデッ!？」

「? えっ!？」

しかし、衝撃が来るかと思われたが、来たのは不良の悲鳴であり、驚いた虚が目を開けると………

「お前等さあ、それでも男か? カッ」悪いぞ

弾が、虚を殴ろうとしていた不良の腕を掴んで、後ろ手に捻っていた。

「な、何だ、テメエは？」

「お前等こそ、俺を誰だと思ってやがる? 俺はグレン団の特攻隊長、五反田 弾様だぜ」

痛みながら問い質す不良に、弾はそう言う。

「えっ!？ グレン団!？」

グレン団と言う単語を聞いた虚が驚きを示す。

「離れてて下さい。危ないですよ」

「くばあつ!?!」

投げ飛ばされた不良は、ぶつけられた不良と折り重なって倒れる。

「うがあああああー……っ!」

「!」

最後の不良が掴み掛ろうとして来たが、弾は跳躍すると、月面宙返りを決めながら、不良の肩の上に肩車される様に着地。

「そらっ!」

そのままフランケンシュタイナーで地面に叩き付ける。

「ガフツ!?!」

「何だ、もう終わりか? 齒応えがねえなあ……」

首の骨を鳴らしながら、倒れている不良達に向かって、弾はそう言い放った。

「テ、テンメエ……」

すると、虚を殴ろうとしていた不良が、ポケットから折り畳み式ナイフを取り出した!!

「! 危ない!」

何とー!!

弾はナイフの刃を素手で掴んで受け止めていた!!

当然、受け止めている右の掌が切れて、血が流れているが、弾は痛がっている様子は見せていない。

「う、うわああああああー……っ!!」

と、自分で刺しておいて恐ろしくなったのか、逃げ出す不良。

「へ、ヘッドオツ!!」

「待ってくだせえ!!」

弾にやられた不良達も次々に起き上がり、逃げた不良の後に続く。

「やれやれ………ビビるんなら、最初から凶器なんか使っんじゃねえよ」

握っていたナイフを捨てると、弾は愚痴る様にそう言う。

「あ、あのー!!」

そこで、虚が弾に声を掛ける。

「ん？ ああ、大丈夫でしたか？」

「それはコッチの台詞です!!」

弾が笑顔で虚にそう言つと、虚からそう言つツツコミが帰つて来た。

「ああ、もう！　こんなに血が！！」

「大丈夫ですよ、唾付けとけば治りますから」

「そんな怪我じゃないでしょう！　取り敢えず、コレで……………」

と、虚はポケットからハンカチを取り出すと、血を流していた弾の手に巻き付ける。

「あ、いや、そんな事をしてもらう必要は……………」

「ちょっとジツとして下さい！」

弾の声を聞き流し、虚はしっかりとハンカチを包帯代わりに巻き付けて行く。

(うわっ……………良く見ると、この人……………スツゲエ、美人……………いや、可愛い！)

結果的に虚の顔を至近距離で見ることになってしまった弾は、虚の美しさで可愛らしさを見て、思わず頬を染める。

「これでよし。後は保健室で……………」

と、そこで虚が弾の顔を見て、赤くなっている事に気づく。

「？　如何したんですか？……………あ？」

そう尋ねた瞬間、自分が弾の手を握ったままなのに気づく虚。

「す、すみません!!!」

「ああ、いや、こちらこそ!!!」

虚が慌てて飛び退き、互いに謝罪し合う形となる2人。

「え、えっと、その……………あ、ありがとうございます……………」

「あ、いや……………何て事無いツスよ、アレくらい」

そのまま、虚は顔を伏せたまま、弾は左手で頭を掻く。

と、そこへ……………

「おい、弾!」

「何あつたのか?」

騒ぎを聞き付けたかの様に、一夏と神谷が姿を見せた。

「あ、一夏! アニキも!」

「アレ? 虚さん?」

「あん? オメエ、確かのはほんの……………」

と、そこに虚の姿までが在って、一夏と神谷は驚く。

「ど、どうも……………」

一方の虚は、神谷の姿を見た瞬間、若干退く。

「それで、何があつたんだ？」

「いや、馬鹿な不良が居たから、ちょいと捻つてやつただけど……油断して怪我しちゃつてさあ」

一夏の問いに、右手に巻かれたハンカチを見せながらそう言う弾。

「オイオイ、大丈夫か？」

「大した事無いって」

「何言つてるんですか！ さ、来てください！ 保健室へ案内しますから！」

そこで虚が、思い出した様にそう叫び、弾を保健室へ連れて行くこととする。

「あ、いや、ちょっと待つてもらえませんか！？ 一夏とアニキに……………」

「弾。俺は良いから、ちゃんと治療してもらって来い」

するとそこで、神谷が弾にそう言う。

「アニキ。でも……………」

「良いから、良いから……………」

と、神谷はそう言っていると、弾の耳元に近づき……………」

(折角のチャンスじゃねえか。その女、しっかりとものにしてみな)

(!?!? アニキ!?)

そう言われて、弾は驚いた表情で神谷を見やる。

「フツ……………」

神谷は不敵に笑って、虚からは見えない様にサムズアップする。

「……………ありがとう、アニキ」

「おう!」

弾は神谷に礼を言っていると、虚に連れられて保健室へと向かったのだ。た。

「弾の奴、ついてないな……………折角IS学園の学園祭に来たつのに、イキナリ保健室行きだなんて……………」

「それでもねえさ。あの野郎、良い思いしてんじゃねえか」

弾を憐れむ一夏だったが、神谷はそう言い返す。

「えっ? 如何言う事、アニキ?」

「そいつは自分で考えな。自分と……あと、箒達の為にもな」
首を傾げる一夏に、神谷は学ランの裾を翻すと、そのまま正面ゲートから立ち去り始めた。

「ちよっ！？ 待つてよ、アニキ！ 如何言う事なのさー！！」

ワケが分からないまま、アニキの後を付いて行くのだった。

つづく

第28話 『お前等さあ、それでも男か？ カッコ悪いぞ』 (後書き)

新話、投稿させていただきました。

いよいよ開始された学園祭。

リクに答えて、一夏は犬耳にしてみました。

しかし、これ誰得？

そして今回、意外な大活躍を見せた弾。

彼も神谷の影響を受けており、熱い男になっています。

そんな彼が、今後如何物語に絡んでくるのか、注目しておいて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

アンケートの結果について

いつも天元突破インフィニット・ストラトスをご愛読いただき、ありがとうございます。

作者のブルーノアです。

先日のアンケートの結果をお知らせさせていただきました。

結論から言うと……………

本編に出すのは反対だという意見が多数を占めた為、本編での登場は取りやめさせていただく事になりました。

しかし、番外編でなら見たいという声も頂きましたので、この作品を完結後に、番外編として書こうと思います。

沢山のご意見、誠にありがとうございます。

これからも、天元突破インフィニット・ストラトスをよろしくお願
い致します。

第29話『良く言っただぜ！ 生徒会長さんよお！！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第29話『良く言っただぜ！ 生徒会長さんよお！！…』

神谷や一夏と一緒に、IS学園の学園祭を一緒に見て回る予定であった弾が、トラブルで保健室行きとなってしまうた。

最も……………

本人は虚とフラグを立てられた様で、御満悦の様子であったが……………

その後、ネコ耳ご奉仕喫茶から、一夏が居ないと言つ苦情が続出しているとの連絡が入る。

一夏が居なくなった後、ヘルプで手伝ってくれていた楯無が、生徒会の仕事があると、急に立ち去ってしまったらしい。

何とも無責任な話である。

止むを得ず、一夏は店へと戻り、神谷は再度の客引きに向かう事にしたのだった。

IS学園・敷地内……………

「1年1組名物！ ネコ耳ご奉仕喫茶だ！ 寄って行って損はねえぜ！ 今なら特別サービスをしてやらねえ事もねえぞ！！」

若干怪しげな宣伝文句を言いながら、看板を片手に客引きをして回っている神谷。

「あ、あの！ それって、織斑くんもネコ耳を付けてるんですか！？」

と、1人の生徒が、神谷に恐る恐ると言った様子でそう聞いて来る。

「いや、一夏は犬耳だぜ」

神谷は、そんな生徒の様子を気にする事も無く、そう答える。

「行きます！ すぐ行きます！！」

それを聞いた生徒は、そう言うがいなや、1年1組の教室まで走り出したのであった。

「やれやれ、時々アイツのモテっぷりは異常じゃねえかと思っぜ」

走って行った生徒を見送りながら、神谷は客引きを続ける。

その後も似た様な事を聞いてくる生徒が続出し、その度に走って1年1組の教室を目指して行ったのだった……

ティトリーは、そと神谷の傍に近づいてくる。

その視線は神谷の胸元……………

首から下げられているコアドリルに注がれている。

(…………… コレを螺旋王様に届ければ…………… アタシは処分されずに済む……………)

そう思いながら、ティトリーはコアドリルへと手を伸ばす。

しかし、いざコアドリルを掴もうとした瞬間、手が止まってしまふ。

「……………」

複雑そうな表情で、ティトリーは神谷を見やる。

(でも……………でも、神谷は……………)

楯無から自分を庇ってくれた神谷の姿が脳裏に甦る。

と、そこへ……………

「神谷ッ！」

「!?!」

神谷を呼ぶ声が聞こえて、ティトリーは慌てて再び茂みの中へ隠れた。

「神谷！ 駄目だよ、こんな所で寝てたら！」

声の主のネコ耳メイド服姿のシャルは、寝ている神谷の姿を発見すると、身体を揺さぶって起こそうとする。

「ん？ んん〜……………ああ、何だ、シャルか……………」

目を覚ました神谷が、シャルの姿を見てそう呟きながら起き上がる。

「もう、駄目だよ。こんな所でサボっちゃ」

「ちよいと休憩だよ。お前こそ店は如何したんだよ？」

「こつちも休憩。ずっとお客さんラッシュだったからね。1時間ほど休憩して、体勢を立て直すんだって」

「そっか……………んじゃ、どうせだし、2人で学園祭を見回るか」

「うん、良いね！ 行こう、行こう！」

それを聞くがいなや、シャルは神谷の手を取って、やや強引に引っ張り出した。

「お、オイ、シャル！ 落ち着けて！！」

そんなシャルの浮かれ具合に若干苦笑いを浮かべながらも、神谷は連れられて行く。

「……………ギガンチヨ失敗しちゃった」

2人の姿が見えなくなった後、茂みから出て来たティトリーがそう
呟く。

「仕方ない……………一夏の方を狙ってみよう」

そう言うと、神谷達が向かった方向とは反対の方向に歩き出す。

その顔は残念がっている様にも……………

安堵している様にも見えた。

一方、学園祭デートへ洒落込み始めた神谷とシャルは……………

料理部の出し物を見に来ていた。

「料理部か……………何か美味しいもんでも食わしてくれるのか？」

「パンフレットによると、日本の伝統料理を作ってるらしいよ。折
角だから、作れる様になりたいなあ」

「そりゃ良い。やっぱり何だかんだで日本食が1番つめえからな」

「そう言えば、神谷世界中を旅してたって言ってたよね。やっぱり、彼方此方の料理食べたりしてたの？」

「まあな。どつちかってえと、サバイバルして野草や野生動物を仕留めて食ってた事の方が多かったけどな」

「そ、そうなんだ……………」

神谷のワイルドな旅の様子を想像し、シャルは思わず苦笑いを浮かべる。

そんな事を言い合いながら、2人は料理部が使っている調理室へと入って行った。

「あ！ 1度は男子だったと噂のデュノアさんと……………ゲツ！？
天上 神谷！？」

料理部部长がシャルを見て笑みを浮かべた後、神谷の姿を見て驚愕する。

「何ですって！？ 天上 神谷！？」

「い、命ばかりはお助けをお！！」

「お父さん、お母さん……………先立つ不孝をお許し下さい……………」

他の部員達も、次々に慌てふためき出す。

「ハハハ！ モテる男は辛いぜ！」

「この状況見て良くそんな事が言えるね、神谷」

呵呵大笑する神谷と、そんな神谷に呆れた様な声でツツコミを入れるシャル。

「あ、あの！ これ良かったらどうぞ！！」

すると、料理部部长は、許しを請う様に販売していた惣菜を差し出して来た。

「おっ！ くれんのか！？ あんがとよ！！」

「あの、後でお金払いますね」

神谷はそれに遠慮無く手を付け始め、シャルがフォローを入れる。

「ガツガツ、モグモグ………カーツ！ うめえな、オイ！」

肉じゃが、おでん、煮物に焼き物、和え物が乗っている大皿が、凄い勢いで空になって行く。

「……コレ何て手品！？」「……」

その光景を見た料理部の部員達が、思わずそんなツツコミを入れる。

「あ、ホント、美味しい………」

その隣でちゃっかりと自分も手を付けていたシャルが、そう感想を

漏らす。

「！ デュノアくん！ 良かったらウチに入らない！？ もっと色々美味しい料理の作り方とか教えてあげるよ！！」

と、そんなシャルの姿を見た料理部部长が、隙を見逃さずと言った具合に勧誘してくる。

「料理部かぁ……………ね、ねえ、神谷？ 神谷は僕の料理が美味しいと嬉しい？」

隣で相変わらず次々に惣菜を平らげている神谷に、シャルはそう尋ねる。

「ああ？ 当たり前だろ、そんなもん！」

神谷は手は止めずに惣菜を頬張りながらそう返事を返す。

「そ、そう。そうなんだ。そっかぁ……………へへへ」

それを聞いて、シャルはニコニコとし出す。

（（（……………リア充、爆発しろ）））

そしてそんな2人の様子を見て、内心でそう邪念を飛ばす料理部の部員達であった。

その後、すっかり惣菜を平らげた（主に神谷が）2人は、そろそろ休憩時間も終わりと言う事で、教室へと戻る。

しかし、大盛況だった筈の1年1組は、すっかり客が居なくなつて静まり返っていた。

見れば、接客を担当していた一夏達の姿が居なくなっている。

「何だあ？ 豪く寂れちまつてるじゃねえか？」

「何があつたの？」

神谷とシャルが、残っていた生徒にそう尋ねる。

「ああ、デユノアさん……………それがね……………」

「また生徒会長が突然やつて来て、織斑くん達を掻っ攫つて行つちやつたの……………」

「生徒会の演劇に出すんだって……………」

残っていた生徒が、一夏を持って行かれたショックからか、意気消沈した様子でそう答える。

「んだよ、またあの生徒会長か？」

「生徒会の演劇って……何処でやってるの？」

神谷が呆れた声を挙げ、シャルが続けてそう尋ねる。

「確か……第4アリーナだって言ってたよ」

「ったく、仕方ねえ……取り返しに行くか」

それを聞いた神谷は、楯無から一夏を取り返そうと、第4アリーナへ向かう。

「僕も行くね、神谷」

シャルもそんな神谷に付いて行く。

「……頑張つて〜!!」「」「」「」

一夏を取り返してくれるという事から、普段神谷を敬遠している生徒までもが、背中に向かってその声を掛けるのであった。

演目はシンデレラであり、一夏は王子様役を任される。

そこまでは問題無い……………

原因はこの後である。

「昔々、あるところに、シンデレラと言う少女が居ました」

ナレーションを務める楯無がそう言い、劇が開始されたのだが、その直後！！

「否、それは最早名前では無い。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵を薙ぎ倒し、灰燼を纏う事さえ厭わぬ地上最強の兵士達。彼女等を呼ぶに相応しい称号……………それが『灰被り姫』シンデレラ！！」

等と言う、とても一般人が知るシンデレラとは思えぬナレーションを楯無は開始。

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！」

最後にそう言った瞬間……………

舞台上に現れた一夏は、飛刀を構えた鈴、スナイパーライフルを携えたセシリア、タクティカル・ナイフを両手に握ったラウラ、そして日本刀を構えた篤という、物騒極まりないシンデレラ達に追い回される事になった。

普段から何かと一夏には攻撃的な彼女達だが、この時は更に殺気立っている。

それもその筈……………

実は劇が始まる前に楯無より、生徒会長権限で……………

『一夏が被っている王冠をゲットした者に、一夏との同室同居の権利を与える』

という、彼女達からしてみれば、正に夢の提案とも呼ぶべき賞品が提示されたのだ。

勿論、一夏本人には何も知らされていない。

箒達は、互いに鎬を削りながら、一夏の王冠の奪取を狙う。

だが、この王冠……………

頭から離れると電流が流れる仕組みになっており……………

一度箒達の狙いに気づき、一夏が王冠を捨てて逃げようとしたところ、電流で黒焦げになりかけるといふ事態が起こっている。

止むを得ず、一夏は王冠を被ったまま、事情を知らない殺気立つ4人のシンデレラから逃げ回るしかなかったのだ。

「何故僕がこんな目にあうのママン！ 何も悪い事してないのに、皆が僕を苛めるよママン！！」

ヤーと言った近代兵器までバラエティ豊かに装備した獣人達が、生徒へ襲い掛かる。

「アイツ等!!！」

「そうはさせん!!！」

一夏と篤達は、すぐに自分のISを展開しようとする。

するとそこで……

「止めなさい! この汚らしい獣人共!!！」

アリーナ内に設置されたスピーカーを通して、楯無のそう言う声が響き渡った。

見れば、楯無は何時の間にか片手にマイクを握っており、それを通してアリーナ全体に自分の声を響かせたらしい。

「何だあ? 人間のクセに生意気な……」

「貴様から先に始末してやる!!！」

注目を集めてしまった楯無に、獣人達が殺到する。

「楯無さん!!！」

「「「「!?!?!」」」」

「折角の学園祭を邪魔して! 何様の積り!! さっさと消えなさい」

い！！ このケダモノ共！！」

慌てる一夏達だったが、当の楯無は獣人達に群がられても凜とした態度を崩さず、そう言い放つ。

「な、何だ、コイツ！？」

「お、俺達の事が怖くないのか！？」

全くビビる様子を見せない楯無に、獣人達の間戸惑いの色が浮かぶ。

「貴方達！ 私を誰だと思っているの！？」

そんな獣人達に向かって、楯無は啖呵を切る様にそう叫ぶ。

「私は更識 楯無！！ 更識家17代目当主であるIS学園最強の生徒会長！！ この学園の生徒は皆私の大切な人！！ それを傷付けさせはしないわ！！」

IS学園生徒会長としての彼女のプライドが、獣人への恐怖を大きく上回っているのだ！！

「良く言っただぜ！ 生徒会長さんよお！！」

するとそこへ、楯無とは別の勇ましい声が聞こえて来る。

「！？ 此の声は！？」

「！？ 天上 神谷！？」

思わぬ展開に、一夏達は口を大きく開けて驚きを露にする。

「あ、貴方……………」

「天に煌めく星々に！ 誓った夢こそ違えども！ 同じ星見るその瞳…………… あ！ 守って見せよう、男意地！ 天下に轟くグレン団の神谷様たあ、この俺の事よ！！」

驚いている楯無を尻目に、神谷は口上を述べる！

「シャル！ のほほん！ もっと俺にスポットを集める！！」

「ほい！ でゅっちー、そっちの照明、もうちよっと右ね」

「あ、うん…………… 何でこんな事やってるんだらう？」

神谷がそう言うと、ステージの上に居たのほほんとしてシャルが、神谷に照明を集める。

「やいやい、獣人共！ 刀の錆になりたい奴から、掛かって来い！！」

「ぬっつっ！？ 奴が噂のグレンラガンか！？」

「ええい！ ビビるな！！ 数なら俺達が上だ！！」

神谷の啖呵に、獣人達は怯む様な様子を見せるが、数の有利もあって踏み止まる。

だが……………

「そうはさせるか！ 白式！！」

「紅椿！！」

「ブルー・ティアーズ！！」

「甲龍！！」

「シュヴァルツエア・レーゲン！！」

そこで一夏達が、其々に自分のISを起動。

光に包まれたかと思うと、ISを装着した状態で獣人達の前に立ち
はだかる。

「こ、コイツ等！？ 専用機持ちか！？」

「マズイ！ 本当にマズイぞ！ IS専用機の強さは一騎当千だ！
！」

「ええい！ 一旦退くぞ！！」

すると獣人達は忽ち分が悪くなったと感じ、アリーナから撤退を始
めた。

「へっ！ 口程にもねえ奴等だぜ！」

「貴方……………如何して？ 私の事を嫌ってたんじゃないの？」

それを見た神谷がフツと笑い、楯無がそう言う。

先日は獣人の少女のティトリーを自分から庇い、そして今は自分を獣人から庇っている。

神谷の行動理念がまるで理解出来ず困惑する。

「別に嫌ってなんざいねえさ」

「えっ？」

そこで、神谷から齎された意外な言葉に、楯無は目を丸くした。

「オメエも俺と同じだろ。俺はグレン団のリーダーだ。団員達の命は死んでも守ってみせる。お前にとっては、この学校の生徒達全員がそうなんだろ！ 楯無！！」

そこで神谷は初めて、楯無の名前を口にす。

「天上……………神谷」

楯無もそう言われて、フツと笑みを浮かべた。

「如何やら貴方……………私が思っている以上に馬鹿で……………大きな男だったみたいね」

「へっ！ 馬鹿は余計だつての」

「神谷！」

余っている袖をブンブンと振るのほほんに、楯無は笑みを返すと、神谷達と同じ様に学園中に散らばっている獣人達の排除に向かうのだった。

IS学園・西方面……………

森林地帯……………

「セリヤアアッ！…！」

巻紙 礼子の姿が在った。

「!? 巻紙さん!？」

意外な人物の登場に、一夏は驚きを露にする。

「危ないですよ！ 今この学園はロージエノム軍の襲撃されてるんです！ こんな所で何やってるんですか!？」

一夏は慌てながら、礼子を避難させようとする。

「ええ……………これを機会に、白式を頂こうと思ひまして」

「えっ?……………!？」

礼子と言った言葉の意味が分からず困惑する一夏だったが、続いて発せられた殺気を感じて、慌てて飛び退く!!

すると、先程まで一夏が居た場所の地面が抉れた!!

「チツ！ ガキのクセに良い感してるじゃねえか!!」

礼子はそれを見て、蛇を思わせる切れ目を、邪悪な風に歪める。

何時の間にかその姿はISを纏ったものとなっており、背中から蜘蛛の様な8つの装甲脚が生えていた。

「お前！ 何者だ!! ロージエノム軍か!？」

雪片式型を油断無く両手で構え、一夏は礼子にそう言う。

「ロージエノム!? あんなクソ生意気な連中と一緒にすんじゃねえ!!! 私ファントム・タスクは亡国企業のオータム様だ!!!」

ロージエノムの名を聞いた礼子改め、オータムは逆ギレした様な様子をを見せて、一夏に向かってそう言い放った。

「!? 亡国企業!? そんな馬鹿な!? 亡国企業はロージエノム軍に乗っ取られた筈じゃ!?!」

相手が亡国企業であると聞いて、一夏は驚く。

「うるせえ! あんなケダモノ野郎共に乗っ取られたままで終わる亡国企業だと思ったのか!!! 今一度同志と戦力を集めて、奴等に復讐を果たす!!!」

「要するに残党って事か……………」

「うるせえっ! ガキが生意気又力すんじゃねえっ!!!」

オータムはそう言うと、自分が装着しているIS……………『アラクネ』の背中に装着されている8つの装甲脚の砲門から、実弾射撃を見舞って来た!!!

「チツ!!!」

一夏は上昇し弾丸の雨をかわす。

「逃がすかあ!!!」

一夏は離脱に成功する。

「ムンツッ!!」

すると一夏は、近くにあった大木を根本から切断。

「うおおおおおおおー……っ!!」

それを掴むと、オータム目掛けて投げつける。

「効くかぁ！ そんなもん!!」

飛んで来た大木を、装甲脚で破壊するオータム。

「クソッ！（あの装甲脚が厄介だな………慎重に行かないと………）」

それを見て、再び雪片式型を構え直すと、オータムを見据える。

「へえ、意外と臆病だな。あん時は結構抵抗してくれたのによぉ」

「？ あの時？」

オータムがふと言った言葉に、一夏は反応する。

「オイオイ、忘れちゃったのか？ 第2回モンド・グロツソ決勝戦の時の事だよ！」

「!?!?」

「ぐあああああああ………！？」

悲鳴を挙げる一夏。

すると、その身体が光に包まれ……

白式が解除された、ISスーツだけの状態となる。

「ガハツ！？………し、白式が！？………」

一夏は、先程の電流のダメージが大きかったのか、そのまま俯せに倒れて、苦しそうにしながらそう呟く。

「お前の探し物は此処に有るぜ！」

と、そう言うオータムの手にはひし形をしたクリスタル………白式のコアが在った。

「な、何で………」

「さっきの装置はなあ！ 『剥離剤』^{リムバー} つつうんだよ！ ISを解除出来るって秘密兵器だぜ！ 生きている内に見れて良かったなあ！」

辛うじて動く首を動かしてそれを見やり驚く一夏に、オータムは得意げにそう言い放ち、トドメを刺そうと装甲脚の1本を振り被る。

「クツ………ソオ………」

一夏の口から悔しそうな声が漏れた瞬間、装甲脚が振り下ろされる！

しかし、続いて聞こえて来たのは……………

金属が柔らかい肉を貫く音では無く……………

金属同士がぶつかり合った様な甲高い音だった。

そして……………

一夏を貫こうとしていた装甲脚の先端が宙に舞い、やや離れた地面に突き刺さる。

「!? 何っ!？」

「?……………」

オータムも一夏も、何が起こったのか理解出来ない。

すると……………

再び甲高い音が響いて、別の装甲脚が、今度は根本から切断された
!!

「!? 何だってんだ!？」

そこでオータムは、装甲脚を破壊したと思われる物を発見する!

それは、緑色の小さな円盤に、黄色と黒の突起がくの字状に付けられているブーメランだった!

そのブーメランが、まるで意思が有るかの様に飛び、オータムと倒れている一夏の間割って入って来たかと思うと、オータム側を向く様にして空中で回転。

やがてその回転が止まったかと思うと、何も無い空間に人間のものらしき目が浮かび上がった！！

ブーメランは、その目の上にあり、まるで角の様になっている。

そして、そこに……

「この雑魚めが……」

カーキ色の軍用風のトレンチコートを纏い、黒・赤・金のドイツ国旗の色をした覆面をした少女が現れた！！

「!?!」

「デメエ!? 何モンだあ!?!」

一夏が驚き、オータムがそう問い質す。

「我が名は……『シュバルツ・シュヴェスター』」

覆面の少女……『シュバルツ・シュヴェスター』は、静かにその名乗るのであった。

^UJ U

第29話『良く言っただぜ！ 生徒会長さんよお！！』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

神谷がシャルと学園祭デートに洒落込んでいた間に、原作通り、一夏達が生徒会の劇へと連れて行かれます。

しかしそこでロージエノム軍が強襲。

生徒を守る為、楯無が獣人に立ち向かった時、神谷が推参する！
気合の啖呵と一夏達のフォローで獣人達を追い返す。

そして、そのまま獣人やガンメン達を各個撃破に向かって神谷達だったが……

単独行動が仇となり、一夏が亡国企業の残党に狙われる。
だが、そこに現れたのは『シュバルツ・シュヴェスター』と名乗る謎の覆面少女だった。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第30話『俺の弟分の物を取り上げるたあ、ふてえ野郎だ!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第30話『俺の弟分の物を取り上げるたあ、ふてえ野郎だ!』

IS学園・西方面……

森林地帯……

「だ……誰……？……」

一夏は薄れ行く意識の中で、突如現れた謎の覆面の少女……

『シユバルツ・シユヴェスター』を見ながらそう呟く。

「織斑 一夏。この場は私に任せろ」

しかし、シユバルツは一夏の疑問には答えず、アラクネを装着しているオータムを見据えながらそう言う。

「う……あ……」

まだ何か言おうとした一夏だったが、そこで遂に気絶してしまう。

「このクソガキ！ 私に逆らおうってのかい！！」

「その積りだ……」

威圧する様に言うオータムの言葉にも、微塵も恐怖する様子を見せず、シユバルツはそう返す。

「ハッ！ ふざけんじゃねえ！ テメエに何が出来るってんだよお！！」

生身でISの前に立ちほだかったシュバルツを嘲笑い、オータムは残っていた装甲脚のうち2本を、シュバルツ目掛けて振り下ろす!!
だが、次の瞬間……

オータムは驚くべき光景を目撃する事となる……

「むんっ!!」

「!?!? ん何いつ!?!」

目を見開くオータム。

シュバルツは何と……

繰り出された装甲脚を……

素手で受け止めたのだ!!

そのままISのパワーに拮抗するシュバルツ……

いや、それどころか……

逆にオータムを押し返し始めた!!

「馬鹿な!?!? コイツ、人間か!?!」

(このままでは一夏が巻き添えを食ってしまう……もう少し離れなければ……)

驚愕しているオータムを、シュバルツはドンドン押して行く。

「チキシヨウがあ！ 調子に乗るなあ！！」

しかし、ある程度押されたところで、オータムはマシンガンを取り出し、そのまま至近距離でシュバルツに弾丸を浴びせた！！

「！？？」

全身を穴だらけにされて、シュバルツはバタリと倒れる。

「ヘッ！ 死ぬ事は死ぬのか……………化け物め、驚かせやがって……………」

そう言いながら、オータムは蜂の巣となったシュバルツの死体を蹴って、仰向けにする。

しかし、それはシュバルツではなく、シュバルツと同じコートを着せられた藁人形だった。

「！？ 何っ！！」

「ハッハッハッ！ 変わり身の術だ！！」

驚くオータムの耳に、得意げな笑い声が聞こえて来たかと思うと、前方に木の葉が舞い散って、シュバルツの姿が現れる。

「こんのお！ 奇妙な真似しやがって！！」

オータムが怒りの声を挙げながら、装甲脚を2本向け、実弾を放と

うとする。

「しえあつ！！」

だが、発砲しようとしたその瞬間！

シュバルツが装甲脚の銃口目掛けてクナイを投擲！！

クナイは銃口にスツポリと治まり、装甲脚が暴発する！！

「うおおおつ！？」

「隙有り！！」

その瞬間、シュバルツはオータムの右手を狙って手裏剣を投げつける。

手裏剣は、オータムが握っていた白式のコアを弾き飛ばした！

遙か後方の地面の上に落ちる白式のコア。

「！？ あつ！ しまった！！」

「させんわあ！！」

慌てて拾いに行こうとしたオータムだったが、そこでシュバルツが先に分銅が付いた鎖を伸ばし、オータムを縛り上げる！！

「ぐあつ！？ チキシヨウがあ！！」

すると上空から、何時ぞやの無人IS……ゴレムIが3機現れた！！

「無人ISだと!？」

「クツ！ おせえーぞ、お前等あ！！」

身体に纏わり付いていた鎖を外しながら、ゴレムI軍団に向かってそう言うオータムだが、無人ISのゴレムIは何も返さない。

「チツ！ まあ良い………そいつを足止めしろ！ 私はその間に白式を回収する！」

オータムがそう命じると、ゴレムI達はシュバルツを囲む様に布陣する。

「クツ！」

覆面で伺えないが、シュバルツは苦そうな表情を浮かべる。

「精々そいつ等と遊んでな。さて、白式を………」

オータムはそう言って、地面に転がっていた白式を回収しようとするが………

先程まで後方の地面に落ちていた筈の白式のコアが無くなっていた。

「!?!? 何っ!?!? 何処だ!?!? 白式のコアは何処へ行った!?!?」

シュバルツの姿が煙の様に消えてしまう。

ゴーレムIが慌てて索敵を開始すると……………

「此処だあ！！」

足元の地面から飛び出して来たシュバルツが、シュピーゲルブレイドを両腕に展開し、ゴーレムIの両腕を肩口から斬り飛ばした！！

ゴーレムIは、切断面から激しく火花を散らして悶える。

「トドメだあ！！」

するとシュバルツは、シュピーゲルブレイドを展開したまま、両腕を交差させる様にして左右水平にブレイドの切っ先が飛び出す姿勢を取ったかと思うと……………

そのまま駒の様に高速回転し始めた！！

「シュトウルム！ ウント！ ドランクウウウウウウウウー
—————ッ！！」

そう叫ぶと、腕の無くなったゴーレムIに突撃して行く。

高速回転するシュバルツが、ゴーレムIに触れた瞬間……………

ゴーレムIの身体が細切れになって行く！！

そして遂に、完全にバラバラとなった！！

「よし！ オータムを追わねば……しかし、一夏を……」

それを確認すると、ISを解除し、オータムを追おうとするシュバルツだったが、倒れたままの一夏を放って置く事も出来ず、逡巡する。

すると、そこへ……

「一夏！？ 如何した！？」

偶然上空を通り掛かった箒が、倒れている一夏を見て、慌てて降りて来た。

「篠ノ之 箒か。良いところへ来た」

「な、何だお前は！？ 見るからに怪しいぞ……」

シュバルツがそう言うが、箒はシュバルツの見るからに怪しい風体を見て警戒する。

「そんな事は如何でもいい！ 一夏を頼んだぞ……」

しかし、そんな箒を他所に、シュバルツは一方的にそう言って、オータムの後を追って行った。

「お、オイ！ 待て……」

「う……う……」

「！？ 一夏！？ ええい……」

慌ててシュバルツを追おうとした筈だったが、一夏が呻き声を漏らしたのを聞いて、止むを得ず彼の救助を優先したのだった。

一方、その頃……

白式のコアを持ち去ったメイド服姿の少女……

ティトリーは……

「やった！ 遂にやった！！ コレを持って帰れば……私は……」

白式のコアを持って、必死に走っている。

その顔は、思い詰めている様にも見える。

と、その時！！

走っていたティトリーの足元に、銃弾が撃ち込まれた！！

「ニヤアツ!？」

驚いて足を纏れさせ、ティトリーはそのまま転んでしまう。

「見つけたぜ、クソガキ！ よくも大事なISコアを掻っ攫ってくれたな……………」

追い付いたオータムが、ティトリーの前に降り立ちながらそう言い放つ。

その顔には激怒の様子が浮かんでいる。

「ヒイツ!?!」

そんなオータムの顔を見て、顔を引き攣らせると、慌てて白式のコアを隠す様にするティトリー。

「ほう、そうかい。大人しく渡す気は無いつてか……………なら」

そんなティトリーを見て、オータムはそう言うと、手にマシンガンを出現させ、ティトリーへと向ける。

「殺して奪い取るとするか!?!」

「ヒイツ!?!」

ティトリーは思わず目を瞑る。

その瞬間!?!

回転しながら飛んで来たグラスン型のブーメランが、オータムの丁度顔を捉え、命中した！！

「ぐがつ！？」

仰け反る程の衝撃を受け、オータムはぶっ飛ばされる。

「えっ！？」

ティトリーはそのオータムの声で目を開け、何が起こったのかを確認する。

「そこまでだ！ この悪党！！」

そこで、そう言う声が響いて来たかと思うと、上空からグレンラガンが現れ、着地する。

そして、オータムに当たったグレンブーメランを回収し、再び胸に装着する。

「まさか生き残りが居たとはね……………亡国企業」

更に、楯無も現れて、オータムの姿を見ながらそう言う。

「か、神谷！？ コ、コレはその……………」

グレンラガンの登場に、一瞬安堵の表情を浮かべたティトリーだったが、すぐに自分が白式のコアを持ったままである事に気づき慌てる。

だが……

「ティトリー！ 誘導作戦、御苦労だったな！！」

「えっ！？」

突然神谷が言った言葉の意味が理解出来ず、ティトリーは困惑する。

「後は俺に任せておけ！ そいつは俺が預かっておくぜ！！」

神谷は構わずそう続けると、ティトリーから白式のISSコアを取る。

「あ！ 神谷！」

「良いから、早く逃げる！」

「！ う、うん！！」

そう言われてティトリーは、神谷達から離れて行った。

「貴方……」

「理屈じゃねえんだよ……理屈じゃ」

何か言おうとした楯無に、神谷はそう言う。

「……………そうね。理屈じゃ説明出来ない事もあるわね」

それを聞いて、楯無はフツと笑った。

「さて……俺の弟分の物を取り上げるたあ、ふてえ野郎だ！この神谷様が一夏に代わって成敗してやるぜ！ 覚悟しやがれえ！！」
そしてそこで、神谷はオータムに向き直り、ビシッと指を指すと、
そう言い放つ。

「チイツ！ 次から次に邪魔しやがって……まあ、良い。噂のグレ
ンラガン！ お前も頂くぞ！！」

顔を押しさえながら立ち上がったオータムは、グレんラガンを見ながら
らそう言い返す。

「覚悟しろ！ 私の顔を傷付けた代償は大きいぜ！！」

「何言つてやがる。大した顔でもねえくせに」

オータムのその言葉に、神谷は挑発する様にそう言い放つ。

「！！ 殺す！！」

途端に、オータムは激怒した様子を見せ、マシンガンを構え、発砲
する。

「おっと！」

そこで楯無がグレんラガンの前に出ると、水のヴェールでマシンガ
ンの弾丸を受け止める。

「おらぁっ……！！」

「クソがあー!!」

悪態を吐くオータムだがかわせそうにない。

と、その時!!

「!! あぶねえ! 避けるお!!」

突然グレンラガンが、楯無に向かってそう叫んだ。

「えっ?」

楯無がその言葉の意味を理解出来ず、首を傾げた瞬間……

凄まじい火炎攻撃が、オータムと楯無を包み込んだ!!

「ぐあああああああああー……っ!?!」

「きゃあああああああー……っ!?!」

悲鳴を挙げるオータムと楯無。

「楯無! 大丈夫か!?!」

火炎が治まると、グレンラガンはすぐに倒れそうになった楯無に駆け寄り支える。

「え、ええ、何とか……」

ドリルとブツかった鉄球は、粉々に砕け散る。

全ての武器を失ったゴーストファイアーV9。

「ぐうつ!?……………」

しかし、グレンラガンの方も無理が祟ったのか、膝を着いてしまう。

そこで、武器を無くしたゴーストファイアーV9が、最後の手段とばかりに、体当たりを敢行して来る。

膝を着いたグレンラガンは避けられない……………

だが!!

「頼んだぜ……………楯無」

グレンラガンがそう言った瞬間……………

「OK!」

楯無が、ラスティ―・ネイルでゴーストファイアーV9を縛り付け、動きを止めた!!

「特別大サービス! 遠慮せずに! 全部持って行って良いよ!!」

そして、残っていたアクア・ナノマシンを、全てゴーストファイアーV9に吹き付ける!!

「清き熱情ツ!!」
クリア・パッション

楯無がそう言って、指を鳴らした瞬間……………

ナノマシンが発熱し 水を瞬時に気化。

その衝撃や熱で大爆発が起こり、ゴーストファイアーV9は粉々に消し飛んだ！！

辺り一面に、ゴーストファイアーV9の部品が降り注ぐ。

「ゴ、ゴーストファイアーV9がやられた!？」

「うわああっ!?! 逃げろお!!！」

それを見た獣人達は、忽ち逃げ出し始める。

「ハア……………ハア……………危なかった……………」

その直後に、楯無がへたり込む。

既にアクア・ナノマシンは底を突き、シールドエネルギーも2ケタまで減っていた。

「大丈夫か？ 楯無」

と、若干無理矢理立ち上がったグレンラガンが、楯無の傍に寄り寄り手を差し出す。

「貴方こそ……………随分無茶したじゃない」

「へっ！ この程度！ 如何って事ねえよ！！」

「強がっちゃって……………」

そう言いながらも、楯無はグレンラガンの手を取って立ち上がるのだった。

「フツ……………如何やら要らぬ心配をしてしまった様だな」

その光景を、やや離れた高い木の天辺に片足立ちして見ているシュバルツ。

「だが、一夏……………お前の方はまだまだ未熟だ……………その腕では仲間どころか己の身さえ守れん……………それを理解するのだな……………」

そしてそう呟いたかと思うと、シュバルツの身体が旋風に包まれる。

その旋風が止んだかと思うと……………

シュバルツの姿は忽然と消えていたのだった……………

数時間後……………

グレンラガンと専用機持ち、学園教師・上級生部隊の反撃を受けた
ロージエノム軍は大損害を被り、完全に撤退。

IS学園には再び静寂が戻っていた。

そんな学園の校舎前にて……………

「ホラよ、一夏」

神谷がそう言って、白式のコアを一夏に投げ渡す。

「白式！ 良かった……………」

受け取ったコアを大事そうに握り締める一夏。

すると、コアが光を放って、再びガントレットの形になり、一夏の右腕の装着される。

「ティトリーに感謝しとけよ、一夏。コイツがお前の白式を守ってくれたんだからな」

そついう神谷の隣には、彼が半ば強引に連れて来たティトリーの姿が在った。

「ありがとう、ティトリー！ お蔭で助かったよ！！」

「う、うん……………」

ティトリーの手を取って感謝の意を伝える一夏だったが、対するティトリーは何処か気まずそうであり、視線を合わせていない。

しかし、白式を取り戻した嬉しさからか、一夏はそんなティトリーの様子に気づいてない。

「……………」

そして、自分に殺気の籠った視線を送っている筈、セシリア、鈴、ラウラの存在にも……………」

「織斑先生から連絡が入ったよ。残っていたガンメンは全て撤退したって」

そこで楯無が、千冬からの通信を受け、改めてそう報告する。

「そうか……………コレで一安心だな」

「それにしても……………一夏を助けた覆面の女性って……………一体誰なんだろ？」

安堵の息を吐く一夏だったが、そこでシャルがそう疑問を挙げた。

「見るからに怪しい奴だったのは確かだな……………」

シュバルツの恰好を思い出し、筭がそう呟く。

「確か……………『シュバルツ・シユヴェスター』って名乗ってた気がする」

一夏がおぼろげ記憶を如何にか思い出しそう言う。

「『シュバルツ・シユヴェスター』？」

「ドイツだな。意味は……………『黒い姉妹』だ」

鈴が首を傾げ、それがドイツ語である事に気づいたラウラがそう訳す。

「黒い姉妹？」

「ひよつとして……織斑先生？」

セシリアが首を傾げ、シャルがもしかしてとそう発言する。

「そう言えばあの声……千冬姉に似てた気が……」

一夏も、おぼろげな意識の中で聞いた声が、千冬のものに似ていた事を思い出す。

「ええ、まさか……千冬さんってそんな趣味があったの？」

「きよ、教官が……」

鈴が呆れる様な声を漏らし、ラウラがショックを受けた様な様子を見せる。

「いや、私は直接姿を見たが、千冬さんとは身長が違ったぞ」

「それに織斑先生はずっと学園の職員室で指揮を執っていたわ。山田先生も一緒だったし」

しかし、箒と楯無がそう反論した。

「じゃあ、アレは一体？……」

一夏は首を傾げる。

ロージエノム軍は退けたものの、また新たな疑問が出て来ていた。

「ま！ 良いじゃねえか！ そいつのお蔭でお前は助かったんだし、白式も何とかタンストか言う連中に渡さずに済んだ！！ それで良いじゃねえか！！」

しかし、神谷が細かい事は気にするなと言い、そのまま呵呵大笑に笑う。

「神谷……………」

「神谷、アンタはもう……………」

「フフフ……………神谷らしいね」

そんな神谷の姿に呆れる篤と鈴、そして笑みを零すシャル。

「それもそうね……………それじゃあ、学園祭の仕切り直しといきましようか！！」

とそこで、楯無がそう宣言する。

「ええっ！？ 学園祭……………続けるんですか！？」

その言葉に、一夏が驚く。

「当然よ！ 今回の襲撃で生徒の皆は恐怖に震えているわ。そして獣人達は自分達が大きな戦果を挙げたと思っている……………そんな生徒達の恐怖を払拭し、獣人達に私達が何とも思っていない事を示す意味でも！ 学園祭は最後までやるわ！！」

楯無はそう啖呵を切る様に叫ぶ。

「言うじゃねえか、楯無。流石はIS学園最強の生徒会長だな！」

「フッフ、貴方の活躍も素晴らしかったわよ……………グレン団の鬼リーダー」

「へッ！」

「フッフ……………」

神谷と楯無は、互いに顔見合わせて笑い合った。

「……………如何なってるのコレ？」

「何時の間にか仲良くなっている……………」

鈴と箒が、啞然としながら驚きの言葉を漏らす。

知りうる限り、険悪な雰囲気であった筈の2人が、この数時間で何があったのか、凄まじく仲良くなっている。

「多分、アリーナの一件で、お互いを認め合ったんだよ。アニキは本気で頑張ってる人が好きだから」

「成程……………神谷らしいね」

一夏がそう言うと、シャルが納得が行った様な表情となる。

「さあ！学園祭のやり直しよ！皆で思いっきり盛り上がりましょー……………」

「……………また王子役は勘弁して下さい」

生徒会の劇が再開される事を懸念した一夏が、懇願する様に楯無に
そう言ったが……………

「ふふふ、如何しようかな？」

「ちよっ！ マジ勘弁して下さいっっっっ！」

微笑む楯無に、一夏の心からの叫びが炸裂するのだった。

くっく

第30話『俺の弟分の物を取り上げるたあ、ふてえ野郎だ!』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

亡国企業の残党、オータムによつて白式を奪われた一夏。だがその前に、謎の人物『シュバルツ・シュヴェスター』が現れる。生身でISと互角に戦える力を持つ超人である彼女は、一体何者なのか？

一方、隙についてオータムが奪った白式を掠め取るティトリーだったが、オータムに気づかれ絶体絶命の危機に陥る。

だがそこへ、グレンラガンと楯無が登場!!

ティトリーを逃がし、2人でオータムの相手をする。

だが、そこへ獣人達が乱入。

新戦力『機械獣』の前に苦戦を強いられるグレンラガンと楯無だったが……

気合で勝利をもぎ取る!!

全ての獣人達を退けた楯無は、学園祭のやり直しを始めるのであった。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第31話『グレン団を我が校の正式な部活として認める事にしました！！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第31話『グレン団を我が校の正式な部活として認める事にしました！！』

波乱の学園祭から3日が過ぎ……………

生徒達が落ち着きを取り戻した頃……………

生徒会からの重大な知らせがあるとの事で、緊急の全校集会が行われる事となった。

集合場所に全校生徒が集まり、生徒会長である楯無の登場を待っている。

一夏達も、1組の生徒と共に集合し、楯無を待っているのだが……………

「オイ、一夏。神谷の奴は如何したんだ？」

「それが、何か用があるから先に学校へ行けって言われて、寮で別れたきりなんだ」

篤と一夏が、小声でそう言い合う。

そう、1年1組の列の中に、神谷の姿が無いのだ。

遅刻自体は、彼がそういった行為の常習犯である為、然程気にする事でもない事だが……………

一夏の話によれば、用事が有って一夏を先に登校させたと言つのが気になる。

「あ！来た！」

と、クラスメイトの1人がその声を挙げると、楯無が壇上に立った。ヒソヒソ話がピタリと止み、全校生徒の視線が楯無に集まる。

「さあ、皆。お早う。昨日はよく眠れたかな？」

楯無は生徒達の緊張を解す様に、微笑みながらそう挨拶をする。

「さて、早速本題に入らせてもらっけど……この間の学園祭は大変だったねえ」

その言葉を続けると、生徒達は互いに顔を見合わせる。

「けど、獣人達の攻撃にも負けず、私達は祭を続けた。何故だと思っう？ それは学園祭を中止する事が、私達の真の敗北だからだよ」

楯無がそう言うと、生徒達がざわめき始めた。

「ロージエノム軍は今も世界各国で猛威を振るってる。こうしている間にも、新たに戦火が広がっている場所が出ている……けど！ 人類は決して敗北したワケじゃない！！ 決してロージエノム軍に屈したりはしない！！」

段々と言葉に熱が入り始める楯無。

まるで演説をしているかのような熱気が、この全校集会の場にはあった。

「そして！ 我がIS学園も、決してロージエノム軍に屈したりは

しないわ！ 人類は必ず勝利する！！ その時まで！ この学園の平和は、この私！！ IS学園生徒会長！ 更識 楯無が守ってみせるわ！！」

そう楯無が宣言した瞬間、全校生徒達から歓声と共に拍手が巻き起こる。

「楯無さん……………」

「……………」

そんな楯無の姿に、一夏と篤達が見惚れる。

すると……………」

「さて……………」実は今日皆に集まって貰ったのは大事な話があるからなんだ」

そこで楯無は、先程までの熱の入った態度とは違い、楽しそうな笑みを浮かべてそう言ってきた。

「……………」?」

突然変わった楯無の様子に、全校生徒は首を傾げる。

「実はね……………」さっきは私がこの学園を守るなんて言っちゃったけど……………」正直に言っと、私1人じゃキツイと思うんだよね」

そして、先程の宣言を打ち消すかのような弱気な言葉に、全校生徒達は更に困惑する。

全校生徒達の顔に、驚愕と共に絶望の色が浮かぶ。

「彼は元々グレン団の団員であり、そのグレン団の活動が部活動の一環として認められた以上、そこに所属するのは自明の理です」

「フーワケだ！ ワリイな、お前等！ 一夏はグレン団の団員だ！
！ ま、如何してもって言う奴が居たら、俺に頼み込めば貸してやらない事もないぜ！！」

そんな生徒達に向かって楯無と神谷はそう言い放つ。

「！ 頼み込めば貸してくれる！？」

「いや、でも、それって、あの天上 神谷に直接言わなきゃいけないでしょ？」

「正に虎穴に入らずんば虎子を得ずね……………」

途端に生徒達はざわめき立つ。

一夏は是非とも借りたい……………」

だがその為には、あの神谷にお願いしなければならない……………」

何とも言えない葛藤が、生徒達の心の中で渦巻いていた。

「なら、早速だけど、生徒会に貸してくれないかしら？ 副会長の椅子を用意してるんだけど？」

するとそこで楯無が、何の躊躇も無く、神谷にそう頼み込んだ。

「ほう？ 悪くねえな……………良いぜ、貸してやるよ」

「ちよつ！？ アニキ！？」

自分を無視して勝手に進んで行く事態に、一夏が声を挙げるが、それは生徒達の喧騒の中に掻き消される。

「天上 神谷……………コレからは共に守って行きましょう！ この学園の平和を！！」

「フツ、そいつは違うぜ、楯無。俺達は……………世界の平和を守るのさー！！」

「成程……………目標は大きくって事ね！」

「そう言うだった！！」

そして、楯無と神谷はそう言い合い、ガツチリと握手を交わす。

「あわわわ！？ 何だか勝手に話が……………良いですか？ 織斑先生！？」

「アツツツツツ……………く、薬……………」

勝手に色々な事が決まって行き、慌てる真耶が千冬に声を掛けるが、当の千冬は、痛むの胃を押さえながら、必死に胃痛の薬を飲み込もうとしていた。

斯くして、この全校集会にて……………

グレン団はIS学園の正式な部活として承認され……………

名実共にIS学園の守り手となった！！

そして……………

一夏も生徒会副会長への就任が決まったのだった……………

その日の放課後……

IS学園・生徒会室にて……

「それでは！ グレン団の正式な部活への承認並びに、織斑一夏くんの生徒会副会長就任を祝いまして……乾杯！」

「乾杯……っ！！」

「……か、乾杯？」

楯無の音頭に、ノリノリで答える神谷とのほほんに、やや戸惑いを浮かべながら合わせる一夏達。

「それぞれ！ 飲め！ 食べ！ 歌え！ 騒げ……！！」

「じゃあ私、歌うね！ 『続く世界』！！」

神谷がそう言うと、のほほんがカラオケ機のマイク（楯無が生徒会運営費用で購入）を手に取り、歌い始める。

「ヒューッ！ ヒューッ！ 良いぞ良いぞー！！」

そんなのほほんを、楯無が囁し立てる。

「………何故こんな事に？」

馬鹿騒ぎの中、一夏は困惑を隠せずにそう呟いた。

「あら、一夏くん。如何したの？ まさか副会長の椅子じゃ不服だ

とか？ 流石に生徒会長の椅子は渡せないわよ」

そんな一夏の姿を見た楯無がそう言って来る。

「い、いや……………アニキと楯無さんが仲良くなったのは良いけど……………昨日の今日でこんな共謀をされるとは……………」

「共謀だなんて心外だな。私は神谷くんの事を対等だと認めたら、今回の措置を取ったんだよ」

「そうだけ、一夏！ これからは生徒会長さんのお墨付きで暴れられるってんだ！ 良い事じゃねえか！！」

「まあ、あんまり派手に暴れられ過ぎても困るけどね」

以前の険悪な雰囲気は何処に行ったのやら……………

神谷と楯無は、ノリノリな様子でそう会話を交わしている。

「何か今の楯無さんって、神谷に似てる様な気がするね……………」

「結局は似た者同士の衝突だったわけね……………」

「ぶつかり合って意気投合か……………まるで漫画だな」

シャル、鈴、篤が、そんな神谷と楯無の姿を見てそう呟く。

「実質、神谷が2人になった様なものか……………」

「私、ちょっと眩暈がして来ましたわ……………」

ラウラとセシリアは、これからも2人に振り回されるであろう光景を想像し、深い溜息を吐いた。

「俺は早くも大変だよ……………いきなり生徒会の副会長を務めなきゃいけないなんて……………」

一夏も深い溜息を吐き、用意されていた紅茶を啜る。

「心配すんな、一夏！ お前はグレン団の斬り込み隊長！ その事は変わっちゃいねえよ！！」

「いや、そう言う問題じゃないんだけど……………」

相変わらず的外れな事を言って来る神谷に、一夏は苦笑いを浮かべる。

「まあ……………仕方ないか……………」

だが、神谷がこうなってはもう如何にもならない事は良く知っている為、諦めたかの様に、今の自分の立場を受け入れるのだった。

「あゝ！ もう！ こうなりゃ自棄よ！！ ジャンジャン持って来なさい！！」

「飲んでないとやってられませんわ！！」（注：飲んでるのは紅茶です）

と、いい加減困惑しっぱなしと言うのにも飽きたのか、鈴とセシリアがその声を挙げ、無理矢理騒ぎ始める。

「えっと………箒、こんな時どうすれば良いのかな？」

「……………笑えば良いと思うぞ」

「ハア〜」……………」

無理矢理テンションを挙げて騒いでいる鈴とセシリアを見て困惑して箒に尋ねるシャルに、力の無い回答を返す箒。

そして、ラウラは深い溜息を吐く。

「……………」

そんな中、このカオスな生徒会室の中で、一人上の空な虚の姿が在った。

「……………ハア〜」

彼女は何やら、生徒会室の窓から徐々に秋となり、高くなって行く空を見上げながら、溜息を吐く。

「？ 虚さん？ 如何したんですか？」

そんな虚の様子に気づいた一夏が声を掛ける。

「！？ えっ！？ ああ、ううん！ 何でも無いわ！」

「お姉ちゃんね〜。この間の学園の時に助けてくれたおりむーの友達の話がね〜。好きになっちゃみたいなの〜」

取り繕おうとした虚だったが、のほほんの暴露でそれは無駄な努力に終わった。

「ちよっ！ 本音！？」

「アラアラ〜！ そうなの〜！ 詳しく教えてよ〜！！」

慌てる虚に、いの一番に食いついた楯無がそう問い質してくる。

「お、お嬢様！ 私は、その……………」

「もう〜！ お嬢様は止めてって言うてるでしょう〜！ で、如何なの！？ その子良い男なの？」

「当たり前だぜ！ 何グレン団の特攻隊長の弾だぜ！ 気に入らねえワケがねえだろ〜！！」

戸惑う虚を楯無が更に問い詰めると、それを聞いていた神谷がそんな事を言っただけ来た。

「えっ？ 何！？ 虚先輩、あんな奴に惚れたの？ 信じられないわね……………」

と、一夏と神谷の他に弾を知る鈴が、信じられないと言う表情を浮かべて虚を見やる。

「……………」

良く見ると、筭やシャル達も、何時の間にか虚に視線を集中させて

いた。

やはりこの年頃の女の子は、自分の恋愛の他に、他人の恋愛にも興味津津の様である。

「そ、そんなに注目しないで下さい！」

「さあさあ！ 正直に白状しちゃいなよ！ 良い男なの！？」

赤面する虚に、楯無が更に迫る。

「う、うう……………何を持って良い男と言うか如何かは分かりませんが………少なくとも、強くて優しい人だとは思いました……………不良に絡まれた私を、自分が怪我をしてまで助けてくれました……………獣人の襲撃が有った時も、ずっと私を守ってくれましたので」

「あの弾が！？ 益々信じられないわね……………」

「馬鹿野郎！ 弾は一夏と同じく俺の弟分！ その俺が認めた兄弟分が情けねえ奴のワケがねえだろ！！」

虚の話の聞いて、鈴がまたも信じられないと言うが、神谷がそう言うつて鈴の言葉を否定する。

「ふ〜ん、そうなんだ……………それで？ その子とは？」

「えっと……………分かれ際に携帯の番号とメールアドレスを交換しまして……………その……………こ、今度の休みに一緒に出掛けませんか？ つて誘いを受けました」

「おお〜！マジイ！？デートのお誘いじゃん！凄いや、虚ちやん〜！」

「べ、別にデートと言うワケでは……………ただ休日と一緒に出掛けてその日を共に過ごすだけです！」

「世間じゃそれをデートって言うんじゃないかな〜」

楯無の台詞に慌てる虚に、追い打ちを掛けるかの様にのほほんがそう言う。

「ほ、本音え！！いい加減にきなさい！！！」

「わあ！お姉ちゃんが怒った〜！！！」

「待ちなさ〜い！！！」

生徒会室の中で、のほほんを追い回す虚。

「アハハハハッ！！！」

「オラオラ、のほほん、頑張れえ！追い付かれるぞお！！！」

その光景を見て、楯無は大爆笑し、神谷は嘸し立てる。

「へえ〜、虚さんが弾とか……………上手く行くと良いな。親友として、恋の成就を祈つとくか」

（（（お前は先ず、私 アタシ、わたくしの思いに気づけきなさい、いて下さい（（（（（

そして呑気に親友の恋の成就を祈る一夏と、そんな一夏に先ず自分の事を如何にかしると心の中でツツコミを入れる篤達。

「？ アレ？……………ティトリーは？」

ふとそこで、シャルが先程までいた筈のティトリーの姿が無い事に気づく。

「？ そう言えば……………」

「つい先程まで居らっしゃった筈ですが……………」

その言葉で、他の一同もティトリーの姿が無い事に気づく。

「なぐに、便所にも行ってらんだろ。暫くしたら戻ってくるぞ」

「アニキ、それセクハラ……………」

そんな一同に向かって神谷はそう言い、そんな神谷にツツコミを入れる一夏だった。

IS学園・校舎……………

屋上……………

太陽が水平線の向こうに沈みそうになっている中、ティトリーは人気の無い屋上で、作戦失敗の報告を行っていた。

「そうか……………失敗したか……………」

「ご、ゴメンナサイ……………でも！まだやれるよ！次こそはグレ
ンラガンか専用機を！！……………」

「いや、次は俺が出る」

「え、ええっ！？」

通信先から聞こえて来た言葉に、ティトリーは驚きを示す。

「ま、待って！！ 『ジギタリス』のおっさん！！」

「心配するなティトリー。別に今回の作戦が失敗した事の咎では無い……………寧ろ、四天王様からは、バレていないのなら任務を続ける、とのご命令が来ている」

「……………えっ？」

作戦に失敗した自分が処分されるとばかりに思っていたティトリーは、通信先の相手…………… 『ジギタリス』と呼ばれた相手の話を聞いて戸惑った。

「コレは俺の個人な行動だ……………噂のグレンラガン……………そして天上 神谷と言う男に興味湧いてな」

「で、でも……………」

「安心しろ。お前の任務の邪魔はせん……………俺は俺の意思でグレンラガンと戦いたいのだ」

「『ジギタリス』のおっさん……………」

「……………長話し過ぎたか。確かパーティーの途中だと言っていたな？ あまり場から離れていても怪しまれる。そろそろ戻れ」

「う、うん……………」

ティトリーはそう返して通信を切ると、未だに神谷達が騒いでいる生徒会室へ引き上げて行くのだった……………

???
.....

「.....ティトリー.....お前はもしや.....」

何処ぞと知れない場所で、ティトリーが通信を交わしていた相手.....
.....ジギタリスが唸っていた。

「いや、仮にそうであったのならばそれでも構わん.....それがお前の生き方だと言うのならばな.....」

独り言の様にそう呟いていると、やがて眼前にモニターを展開し、グレンラガンと神谷の姿を映し出す。

「グレンラガン……………天上 神谷……………貴様がどれ程の男か……………この獣人遊撃部隊の戦闘隊長であるジギタリスが見極めてやるう！」映像のグレンラガンと神谷に向かって、ジギタリスはそう宣言するのだった。

神谷と楯無の蟠りは氷解し……………

学園祭の開催中を衝かれたロージェノム軍の襲撃。

そして亡国企業の残党をも退けたグレン団。

しかし、ティトリーの上司であるジギタリスが……………

グレンラガンと神谷を狙い、牙を研いでいた。

そして、謎の覆面IS乗り……………

『シュバルツ・シュヴェスター』とは何者なのか？

グレン団とロージェノム軍の戦いは、まだ果てしなく続く！

つづく

第31話『グレン団を我が校の正式な部活として認める事にしました！』

(後

新話、投稿させていただきました。

学園祭が終わり、神谷と楯無の蟠りも解けた。

そして楯無は、グレン団をIS学園の正式な部活として認めるという発表を行った。

名実ともに学園の守り手となったグレン団は、今後は楯無の率いる生徒会とも協力し、益々激しくなるロージエノム軍との戦いに備える。

一方……

スパイとして学園に潜入していたティトリーの上司……

ジギタリスが、次なる刺客となり、グレンラガンを狙っていたのであった。

1271

次回からは原作6巻、キャノンボール・ファスト編になります。

例によってオリジナル展開が多くなりますので、予めご了承下さい。

では、ご意見・御感想をお待ちしております。

第32話『考えるのだ！ 己のISの名に込められた意味を！』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第32話『考えるのだ！ 己のISの名に込められた意味を！』

IS学園・食堂……

「えっ？ 一夏の誕生日って今月なの？」

夕食を取っていた、神谷、一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、ティトリーのグレン団メンバーの中で、シャルがそう声を挙げた。

「ああ……」

「そっいや、そうだったな……もうそんな時期か」

一夏が返事を返し、神谷も思い出したかのようにそう言う。

「何時？」

「9月の27日だよ」

「おお！ 御誂え向きに日曜じゃねえか！」

神谷が食堂の壁に掛かっていたカレンダーで確認し、そう声を挙げた。

「一夏さん、そういう大事な事はもっと早く教えてくださらないと困りますわ」

とそこで、一夏の隣に座ってビーフシチューを食べていたセシリアが、パンを置いて話し掛けて来た。

「い、いや、自分の誕生日なんか教えたら、何かあからさまにプレゼントが欲しいって言うてるみたいで、心象悪いかなあと思って……」

「水臭えこと言ってるんじゃないよ、一夏！俺たちやグレン団！……魂の絆で結ばれた仲間だろうが！……その仲間に、遠慮なんかすんじゃないよ……」

そう言う一夏の肩を掴み、神谷はそう言うて来る。

「アニキ……」

「そうそう！仲間として誕生日を祝うのは当然っしょ！」

感激している一夏に、ティトリーもそう言うて来る。

「しかし、知っていて黙っていた連中も居る様だな……」

「……」

嬉々として、純白の革手帳の予定表の9月27日の欄に、2重丸を描いているセシリアの横で、ラウラが箒と鈴をジト目で見ながらそう言う。

当の箒と鈴は、ラウラの視線を受けて固まる。

「べ、別に隠していたワケではない！聞かれなかっただけだ！」

「そ、そうよそうよ！聞かれもしないのに喋るとKYになるじゃない……」

「いや、すまねえなあ！ てつきり俺は、そんな事とつくに問い質してると思ってた言ってなかったぜ！」

やや言い訳染みだ事を言う筈と鈴に対し、神谷も後頭部を掻きながら、あまり悪びれた様子も無くそう言ってきた。

「兎に角！ 9月27日！ 一夏さん、予定を空けておいて下さいな！」

「あ、ああ……………あ、でも、当日ってアレがあるから……………夕方から夜からだな」

「『キャノンボール・ファスト』か……………」

『キャノンボール・ファスト』……………

言うなればISを使ったレースである。

本来は国際大会として行われるものだが……………

IS学園では、市との特別イベントとして開催されるモノに参加する形となる。

勿論、専用機と訓練機では性能差が在り過ぎるので、其々に分かれて行われる。

「ん？　そう言えば、明日からキャノンボール・ファストの為の高機動調整を始めるんだよな？　アレって具体的には何をやるんだ？」

「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式には無いだろう」

「その場合は、駆動エネルギーの配分調整とか、各スラスターの出力調整とかかなあ？」

首を傾げた一夏に、ラウラがプチトマトを頬張りながら、シャルが白身魚のフライを齧りながらそう言う。

「ふうん。確か、高機動パッケージっていうと、セシリアのブルー・ティアーズには有るんだったよな？」

「ええ！　私、セシリア・オルコットの駆るブルー・ティアーズには、主に高機動戦闘を主眼に据えたパッケージ『ストライク・ガンナー』が搭載されていますわ！」

一夏がそう言うのと、セシリアはお決まりの腰に手を当てるポーズを決めながらそう語る。

（最近、何か元気なさそうだったけど、問題は解決したのだろうか？）

そんなセシリアを見ながら、一夏は内心でそう思う。

実はその原因が、一夏自身に有るとは夢にも思っていないだろうが

.....

元々白式は、エネルギー兵器を無効化する能力を持っており、第2セカンド・シフト形態移行してからはそれが防御にも使える様になり、ビーム兵器主体のセシリアのブルー・ティアーズは、模擬戦に於いて負け越している。

他の者がそれなりの戦いを繰り広げる中、自分だけは置いて行かれている様に思えたセシリアのプライドは、酷く傷ついていた。

イギリス本国に実弾兵器を送って欲しいとも陳情したが、元々ブルー・ティアーズはBT兵器の実働データのサンプリングを目的に建造された為、敢え無く却下されている。

BT兵器の稼働率が最大になれば、ビーム自体を自在に操れるらしいが、現在の稼働率は37%前後……

最大稼働など、夢のまた夢であった。

セシリアは毎日皆が帰った後も特訓を続け、BT兵器稼働率を上げようと頑張っているのだが、結果は芳しくなかった。

「それだとセシリアが有利だよな。今度超音速機動について教えてくれよ」

「……申し訳ありません。それはまた今度。ラウラさんをお願いして下さる」

一夏の願いを微笑みながらも断るセシリア。

今はまだ、自分の事で手一杯の様だ。

「そっか……………分かった。じゃあラウラ、教えてくれ」

「良いだろう。最近はその女にかまけてばかりいるお前を、私が教育してやるっ」

あの女とは、楯無の事である。

学園祭の1件以来、楯無は神谷とすっかり意気投合しており、そんな彼女を神谷がグレン団に入れるのに時間は掛からなかった。

それに伴い、楯無は忙しい時間を裂いてまで、放課後のグレン団による一夏の特訓に顔を出す様になる。

学園最強のIS乗りの教えは分かり易いものだったが、特訓内容は他の誰よりも厳しい。

必然的に一夏は楯無から多く教えを受ける様になり、それが箒達をやきもきさせる事になった。

「つつか、有利だって言うならアンタも同じでしょうが。白式のスベック、機動力だけなら高機動型に引けを取らないわよ。ま、それを言うのなら、紅椿もだけどね」

鈴がそう言うと、話題はそのまま、キャノンボール・ファストに向けて、其々のISを如何調整するかに入る。

セシリアと鈴は、高速機動パッケージを装着する。

一夏と箒は、機体出力を調節。

シャルとラウラは、スラスターを増設する調整を行うと言い合った。

そして、神谷は……

「アニキは……」

「俺は勿論！ 気合で勝つに決まってるだろ！！」

「……………だよな」

当然の様にそう返した神谷に、一夏は苦笑いを浮かべる。

グレンラガンはISでない為、パッケージの装着はおろか、スラスターの増設をする事も出来ない。

となると機体出力の調整を事になるのだが……………

前にも言った通り、グレンラガンの動力は神谷自身の螺旋力である。

つまり神谷の気合しだいで上下するので、理論上、神谷が気合を出せば出す程、機体速度も上がる事になる。

「前から思ってたけど、アンタの機体ってホント便利よね……………取り敢えず気合さえあれば、細かい調整なんて一切要らないんだから」

「何言ってるやがる！ お前等だってもっと気合を出せば強くなれるぜー！！」

「いや、アニキ。ISは気合じゃ強くないから」

羨ましがるように言ってきた鈴に、神谷はそう返し、一夏が冷静なツッコミを入れるのだった。

「良いな、専用機持ちは」

と、ティトリーが更に羨ましそうにしている発言を繰り返す。

「あ、そっか。ティトリーは量産機での部門だっけ」

「細かい事は気にすんな！ それにお前だって何時かは自分の相棒が持てる日が来る！ 俺が保障してやる！..!」

(相変わらず根拠も無いに自信満々だ……………)

一夏が思い出したかのように言うと、神谷がそうティトリーを励まし、シャルが内心で神谷お決まりの根拠無い自信にツッコミを入れる。

「そう言えば、一夏。結局『あの話』、如何だったの?」

「? 『あの話』って?」

「アンタを他の部活に貸し出すって話よ」

鈴が言っているのは、先日グレン団がIS学園の正式な部活として、楯無から認可を受けた時の事である。

あの時神谷は、一夏を貸して欲しければ直接俺に言い来いと良いっていた。

当初は、神谷の見た目や噂を怖がり、頼みに来る様な者は居なかったのだが…………

ここ最近になって、覚悟を決めた猛者が現れる様になったのだ。

皆そんなに一夏を自分が居る部活へ誘いたいのだろうか？

まあ、女の園の学園に神谷を除いて1人しかいない男である。

しかも結構なイケメンで朴念仁である事を除けば性格も悪くない。

優良株である事は間違いないだろう。

「ああ、今生徒会の方で抽選と調整をしてくれるそうだから」

「生徒会が？」

「ああ……………」

何故生徒会が一夏の貸し出しの調整をするのかと疑問に思った鈴だが、一夏はそんな鈴の思惑を察したのか、耳打ちする様に小声で言ってくる。

（アニキに任せてたらスケジュールが破綻するだろうから、生徒会の方で調整してあげるって、楯無さんが言ってくれてな）

（成程ね……………）

それを聞いた鈴が納得の行った顔になる。

確かに、神谷がスケジュールや予定を立てる様な人物には見えない。適当に貸し出す部や順番を決めたら、決死の思いで頼み込んで来た生徒達に申し訳が立たない。

そう思つての判断だろう。

「そう言えば、皆部活に入つたんだよな？」

そこで一夏が、また思い出した様にそう言う。

「私は最初っから剣道部だ」

当然とも言える筈だが、当初の頃は一夏の特訓に時間を裂いており、幽霊部員状態であつた。

学園祭で、一夏と一緒に周っていた時に、一夏が強引に剣道部へ連れて行った事で、部長に幽霊部員な事を釘刺され、今はよく顔を出す様になつたらしい。

「アタシはラクロス部ね。入部早々期待のルーキーなんて言われて、参っちゃうわ」

イメージからして運動が得意そうな鈴は、期待通りに運動系の部活である。

専用機持ちな為、身体能力も他の生徒と比べて一線を画しているの
で、早速活躍している様だ。

「僕は、その……………料理部に」

シャルは頬を染めて、神谷の事をチラリと見ながらそう言う。

部長に誘われたからというのもあるが、一番の理由は、やはり神谷に美味しい手料理を食べさせたいからだ。

頑張れ、恋する乙女。

「私は英国が生んだスポーツ、テニスですわ。一夏さん、よろしければ今度ご一緒に如何ですか？ 私が直接教えて差し上げてほしいですわよ？」と、特別に「

一夏を見て、微笑みながらそう言うセシリア。

この時ばかりは悩みの事を忘れている様だ。

「因みに私は、茶道部だ」

日本文化好きであり、しかも顧問が千冬である。

ラウラが入らない理由はなかった。

「あゝ、アタシはまだ何処にも……………」

1人、まだ部活に入っていないティトリーが気まずそうにそう呟くが……………」

「何言つてやがる、ティトリー！ お前はグレン団だろ！！」

神谷がそんなティトリーにそう言う。

「えっ！？ で、でもアタシ、専用機持ちじゃないし……………」

「馬鹿野郎！ 専用機持ちだとかそんな事は関係ねえ！ 熱い魂を持ってりゃ、そいつはもうグレン団の一員だ！！」

戸惑うティトリーに、神谷は続けてそう言う。

「お前等も分かってんな！？ お前達の一の所属はグレン団だ！ 学園と世界を守る正義の軍団だ！！ 助っ人の部活に託けて、グレン団の活動を蔑ろにするんじゃないぜ！！」

そこで神谷は、今度は一夏達の方を見ながらそう言った。

「分かってるよ、アニキ！！」

「ア、アハハハ……………」

「……………」

一夏は素直に返事をし、シャルは苦笑いを浮かべ、篝、セシリア、鈴、ラウラは慚然として黙り込む。

その後も、神谷が会話でも一同を振り回し、楽しい夕食の時間は過ぎ去ったのだった……………」

IS学園・第5アリーナ……………

学園内に建設されているアリーナ内で、唯一夜間も使用可能なアリーナに、1人の人物が姿を見せる。

好き好んで夜間戦闘訓練を行う者はこの学園には少ない。

その理由は……………

「寝不足はお肌の大敵だから」

と言う、何とも女子らしい理由だ。

だが、今宵この場に現れたのは、そんな事も気にしない者である。

「…………ブルー・ティアーズ！」

静かに愛機…………ブルー・ティアーズを呼び出すセシリア。

そして、射撃用のターゲットを出現させたかと思うと、ビット連動の高速ロール射撃を開始する。

(曲がりなさい！)

射撃の度に、撃ったレーザーに曲がれと念じるが、レーザーはただ直進するばかりだった。

「くっつ！ まだ駄目ですよ！？」

悪態を吐く様にそう言いながらも、セシリアはBTフレキシブル偏向制御射撃の特訓を続ける。

意識を集中し、水のイメージを連想して、引き金を引くが、やはりビームは真っ直ぐ進むだけであり、一向に曲がる気配を見せなかった。

「ハア…………ハア…………駄目ですわ……………」

徐々にセシリアに、疲労と共に焦燥が募って行く。

「何故ですの…………何故上手く行かないんですの……………」

「知りたいか？ セシリア・オルコット」

と、不意に眩きを漏らした瞬間、アリーナ内にセシリア以外の声が響き渡った。

「!?!? 誰ですの!?!?」

慌ててアリーナ内を見回すセシリア。

しかし、アリーナ内には自分以外は見当たらない……………

だがそこで、曇りであった空が晴れ始め、月明かりがアリーナを照らし始めると……………

実況席の上の方に、妙な影が映っている事に気づく。

「!?!?」

慌ててセシリアが実況席を見上げると、そこには……………

「漸く気づいた様だな……………」

腕組みをして悠然と佇む、シュバルツ・シュヴェスターの姿が在った。

「!?!? 貴方は……………シュバルツ・シュヴェスター!?!?」

一夏から聞いていた人物像と目の前の人物の恰好が一致し、セシリアが驚きながらも身構える。

(ハイパーセンサーに全く反応が無い!? こんなにハッキリと姿を捉えているのに!?!?)

「セシリア・オルコットよ。お前は自分のISの名前に込められている意味を考えた事が有るか？」

そんなセシリアの戸惑いの様子など気にせず、シュバルツはそう問い掛ける。

「えっ？ 名前の………意味？」

シュバルツの質問の意味が分からず、セシリアは更に困惑する。

「それが分からぬ内は幾ら特訓を重ねたところで、フレキシブルBT偏向制御射撃を使う事など、出来はせんぞ」

「なっ！？ いきなり現れて、何を偉そうに………」

「考えるのだ！ 己のISの名に込められた意味を！！ そして解き放て！ 螺旋の魂を！！」

いきなりの叱咤に、セシリアは反論しようとしたが、それよりも早くシュバルツがセシリアに向かってそう叫んだ。

「名に込められた意味………螺旋の魂………」

何故かその言葉が心に響いて来て、セシリアは反復する。

「その意味が分かった時………お前のISは真の意味でお前の物となる」

「真の意味で？ 如何言う事ですか！？」

「それは已で考える事だ……さらば！」

肝心な質問には答えず、シュバルツは煙と共に消えてしまう。

「あつ!? ちょっと!?!」

セシリアは困惑するしかなかったが、するとそこで……

「よう! 調子は如何だ?」

今度は、良く聞いた声が、アリーナに響き渡る。

「!?!」

セシリアが驚きながら振り向くと、そこには当然の様に佇んでいる神谷の姿が在った。

「神谷さん!? 何故此処に!?!」

「特訓してるんだろ? 俺も手え貸してやるよ」

「!?! ど、如何してそれを!?!」

「オイオイ、俺を誰だと思ってやがる! グレン団の鬼リーダー、神谷様だぜ! 団員の悩みが分からねえ様じゃ、リーダーなんざやつちやいねえぜ!」

ニヤリと笑いながら、神谷はセシリアにそう言う。

「で、ですが、コレは私の問題で……………」

「何言ってるやがる！ お前の問題はグレン団の問題！ それを解決するのはリーダーである俺の役目ってもんだ！！」

「……………」

そこでセシリアは、神谷をジッと見やる。

「……………フッフ、貴方と言う方は……………ホントに不思議な方ですね」

やがてそう言いながら笑みを零した。

「さっ！ とつとと特訓を始めるぜ！！」

そこで神谷は、グレンラガンの姿となる。

「ええ、よろしく願いますわ！」

セシリアはそう答え、神谷と共に特訓を再開したのだった。

アリーナ外の林の中……………

「これで当面の心配は要らんか……………若き獅子達は、共に己を鍛え合っのが一番……………」

目の前に投影されているアリーナの映像を見ながら、木陰に隠れているシュバルツはそう呟く。

「さて……………天上 神谷よ……………お前は今度の試練を如何乗り切る？ じっくりと見させてもらっぞ」

そしてそう言ったかと思うと、その姿は忽然と消えるのだった……………

数時間後……………

IS学園・学生寮の廊下……………

「ふう〜……………良い汗掻いたぜ」

セシリアとの特訓を終え、アリーナのシャワールームでシャワーを浴びるセシリアと分かれ、神谷は寮に戻っていた。

「しかし、セシリアの奴……………結構悩んでやがったかと思っただが、意外と元気だったな……………何かあったのか？」

シュバルツから叱咤を受けていた事を知らない神谷は首を捻る。

すると……………

「あ！ 神谷！！」

後ろから声がして振り返ると、風呂帰りと思われるシャルがコチラに向かって駆けて来ていた。

まだ若干湿っている髪と、ほんのりと赤くなっている肌が、何とも色っぽい。

「おう、シャル！ 風呂帰りか？」

「うん、神谷は如何したの？」

「何、ちよいと身体動かしてきただけさ」

セシリアの心境を考え、神谷はホントを事は伏せる。

「そっか……………」

と、そこでシャルは、何やらモジモジとし始める。

「？ どした？」

「え、えつと、その……………」

そのシャルの態度に神谷は首を傾げるが、シャルは相変わらずモジモジとしたままだ。

「んだよ？ 言いたい事があるならハッキリ言え」

そう言った煮え切らない態度が嫌いな神谷が、急かす様にそう言う。

「！？ う、うん！！ ちょ、ちょっと待ってね！ す……………」

……………はあ……………」

シャルはそこで深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。

「えつとね、神谷……………今度の週末に、一緒に駅前に行かない？」

「駅前？」

「う、うん……………ホラ、一夏の誕生日がもうすぐでしょ？一緒に
選ばうかなと思って」

「成程な……………」

そう言われて、神谷は顎に手を当てた。

「だ、駄目かな？」

不安そうに、神谷を上目遣いで見やるシャル。

「別に駄目とは言っちゃいねえぜ」

しかし、神谷はそんなシャルの不安を吹き飛ばす様に笑う。

「ホント！？良かった……………じゃあ、約束だよ」

そう言つとシャルは、小指を立てた右手を神谷に差し出す。

「ん？」

その手の意味が分からず、神谷が首を傾げていると……………

「ホラ、指切りだよ」

シャルがそう説明して来た。

「あ！なるほど……………しかし、オメエも子供っぽい事すんなあ」

「むづ……………せめて恋人同士の微笑ましい光景とか思つてよ」

「ハハハ！ ワリイワリイ」

神谷は笑いながら謝罪する。

「もう……………まあ良いや。それじゃ約束だよ」

「おう！ 男は約束事は死んでも守るぜ！！」

そう言っつて神谷は、シャルの手の小指に、自分の手の小指を絡ませる。

「指切りげんまん、嘔吐いたら……………」

「ドリルでどてつばらに風穴空ける！！」

「ええっ！？」

クラスター爆弾吞ますと言おうとしたシャルは、神谷のトンでもない罰に驚きの声を挙げる。

……………クラスター爆弾と言っつのもかなり物騒だが。

「約束も守れねえ奴はそうなっつて当然だろ」

「う、うん……………そうだね」

当然の様にそう言っつ神谷に、シャルは苦笑いするのだった。

UJU

第32話『考えるのだ！ 己のISの名に込められた意味を！』 (後書き)

新話、投稿させていただきました。

今回からキャノンボール・ファスト編に入ります。

こちらでも大きく変更が入りますので、予めご了承下さい。

悩めるセシリアとそれを叱咤するシュバルツ。

果たして彼女は一体何者なのか？ (笑)

そして神谷は、一夏への誕生日プレゼント選びを口実に、シャルとデートの約束をするのだった。

では、ご意見・御感想をお待ちしております。

第33話『ゲレンラガンは何処に居る?』(前書き)

ユニークアクセスが4万人を突破しました。

皆様、ご愛読ありがとうございます。

これからも、天元突破インフィニット・ストラトスをよろしく願
いします。

第33話『グレンラガンは何処に居る？』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第33話『グレンラガンは何処に居る？』

時はアツと言う間に流れて週末……………

IS学園・学生寮……………

「さて、行くか」

お馴染みの赤いマントを翻し、自室から出て来る神谷。

因みに弟分の一夏は、キャノンボール・ファストに向けて白式を調整中である。

元より彼の誕生祝いのプレゼント選びの為、詳しくは言っていないが、神谷は悟られない様に外出した。

と、そして階段に差し掛かったところで……………

「アラ、神谷さん。お早いですね」

今日も今日とで特訓に明け暮れようとしていたセシリアと出くわす。

「おう、セシリアか。ちょいと用事が有ってな。オメエは今日も特訓か？」

「ええ。今日こそBフレキシブルT偏向制御射撃をものにして見せますわ」

セシリアは、グツと拳を握って決意を示す。

「そうか。ワリィが、今日は手え貸してやれねえからな」

「お気遣いありがとうございます。ですが、何時までもリーダーに頼りつきりでは団員として申し訳ありませんから。今日は私1人で十分ですわ」

「そうか……………ま、頑張れよ」

「ええ。それではご機嫌よう……………」

そう言うとセシリアは階段を下りて行き、アリーナへと向かったのだった。

「思い詰めちゃあいない様だな……………ま、一安心ってところか」

セシリアの様子を見て、神谷はそう判断すると、再びシャルと待ち合わせをしている駅前へと向かう。

駅前……………

(髪、変じゃないかな？ もう1回見ておこう)

約束の45分も前に到着していたシャルは、そわそわとした様子で、12回目となる前髪のチェックを行う。

手鏡を見ながら、前髪を右へ左へとちょんちょんと弄る。

その仕草はとても可愛らしく、何人かの通行人が思わず通りがかりに見やる程だった。

(でも流石に早く来すぎたかなあ？)

腕時計を確認すると、約束の時間までまだ40分以上もある。

すると……………

「ねえねえ、カーノジヨっ」

「今日ヒマ？ 今ヒマ？ どっか行こうよっ」

いかにもチャラ男と言った風体の2人が、シャルにそう声を掛けて来た。

「俺の女に手え出すとは……………良い度胸してんなあ、お前等」

人影……………神谷がチャラ男を持ち上げたままそう言い放つ。

「神谷！」

神谷の姿を見たシャルが、嬉しそうな表情を露わにする。

（凄い！ 王子様みたい……………てのは流石に無理があるか。神谷だし……………でも……………お、俺の女って……………）

先程の神谷の台詞を思い出し、頬を赤く染めるシャル。

「か、神谷！？……………！？ まさか！？ あの天上 神谷か！？」

「何っ！？ 天上 神谷！？ 不良高校で有名だった黒進高校の不良共を1日で全員叩きのめし、200人の暴走族チームをたった1人で潰した、あの！？」

「この辺り一帯を仕切ってる銀狼会を壊滅させて、中国マフィアにも喧嘩を売ったって言う、あの天上 神谷！？」

と、神谷の名を聞いたチャラ男達が、そんな事を話し始める。

「へっ！ 俺も有名になったもんだぜ……………」

「ええっ！？ ホントなの！？」

神谷のトンでも武勇伝を聞いて、シャルが驚きの声を挙げると、神谷はチャラ男達を解放する。

「さて……………お前等、覚悟は出来てるんだろっな？」

神谷がそう言っ指の骨を鳴らすと……………

「…すいませんでしたーっ！！」

チャラ男達は芸術と思える程に綺麗な土下座を決めて、神谷に謝罪したのだった。

「……………何も金目の物を置いて行かなくても」

あの後、チャラ男達は必死になって持っていた金目の物を掻き出し、神谷の前に置いたかと思うと、慌てて車に乗って逃げて行ったが………

先程、チャラ男達の車が走り去って行った方向からサイレンが聞こえて来ており、如何やら慌てて逃げようとして事故った様である。

「ご愁傷様とはこの事である。」

「神谷、如何するの？」

「しゃーねえ。交番にでも届けるか」

流石にそんなシャバイ金に手を付ける気にはなれず、神谷は近くの

交番へと落とし物として届けたのだった。

「さて、気を取り直して、今日は如何すんだ？」

チャラ男達が勝手に置いて行った金目の物を落とし物だと言って交番に届けた神谷は、改めてシャルにそう尋ねる。

「えっと……取り敢えず、駅前のショッピングモールを周って見て、一夏へのプレゼントを見つけようか」

「だな……んじゃ行くか」

神谷はそう言うと、自然な動作で、シャルに向かって手をポケットに突っこんだままの腕を差し出した。

「あはっ！」

シャルは嬉しそうに、その神谷の腕と自分の手を組む。

そしてそのまま、ショッピングモールを目指して歩き出したのだった。

その頃……

IS学園・第3アリーナにて……

「集中……集中……」

念じる様にそう呟きながら、スターライトmkIIIIでの射撃を繰り返しているセシリア。

しかし、相変わらずレーザーは曲がる気配を見せない。

「クウッ！ まだ駄目ですの……」

その様子を見て、セシリアは若干落ち込む様な素振りを見せる。

しかし、その獣人は、スターライトmkIIIを突き付けられていると言っているのに、まるで動じる様子を見せず、悠然と佇み続けている。

(！？ 何ですの！？ コイツ！？)

その獣人の様子に、セシリアは得体の知れない恐怖を感じる。

「……………何処に居る？」

すると、そんなセシリアに向かって、獣人がそう問い質して来た。

「えっ？」

「グレンラガンは何処に居る？」

突然の質問に首を傾げたセシリアに、獣人は重ねてそう問い質す。

「！？ グレンラガンに何の用ですの！？」

「知れた事……………グレンラガンは我等が王、螺旋王ロージエノム様の敵……………故に倒しに来たまでよ」

「そう……………なら残念ですわね……………グレンラガンより先に私が貴方を片付けて差し上げますわ!!」

セシリアはそう言うがいなや、スターライトmkIIIを獣人目掛けて発砲した。

ビームが一直線に獣人へと向かう。

だが……………

「ふん……………」

迫り来るビームを、獣人は鼻で笑ったかと思うと、片手を掌を翳す様に構えた。

そしてビームが、その掌に当たると、拡散して雲散してしまう。

「!? そんな!?!」

まさか生身で防がれるとは思っていなかったセシリアが、驚愕を露にする。

すぐに反撃に備えるセシリアだったが……………

「貴様では話にならん…………… グレンラガンを出せ! それまで此処で待っててやる……………」

何と獣人は、そのままその場へと腰を下ろすと、胡坐を掻いて座り込む。

「えっ? ええっ!?!」

獣人の思わぬ行動に、セシリアは困惑して、如何して良いか分からなくなったのだった。

時は少し戻り……

グレンラガンこと神谷は……

駅前のショッピングモールで、一夏への誕生日プレゼント選びに勤しんでいた。

「こんなのは如何だ？ シャル」

神谷がそう言って見せたのは、黒地に真っ赤な色で『漢』と筆字でプリントされているTシャツである。

「そ、それはちょっと……」

「んじゃこっちの方が良いか？」

シャルが苦笑いを浮かべると、神谷は今度は、プリントの字が『魂』と書かれたバージョンのTシャツを見せる。

「そ、それも如何かな？」

「え〜？ 何が駄目なんだよ？」

(色々ただと思うけど……)

自分のセンスに駄目出しされて不満げな神谷に、シャルは相変わらず苦笑いを浮かべるしかなかった。

「え〜と……あ！ そうだ！ 小物なんて如何かな？ 例えば腕時計とか？」

神谷に任せていては埒が明かれないと思ったシャルは、必死に頭を回転させると、そういう答えを導き出す。

「腕時計か……睡眠薬が入った針が飛び出す奴か？」

「いや、そう言うのじゃなくても、普通のだよ」

どっかの小学生にされた高校生の探偵が使うバーローな腕時計を思いつく神谷と、そんな神谷にツッコミを入れるシャル。

「取り敢えず、時計店へ移行よ」

「そだな……………」

2人はそう言い合つと、服屋を後する。

すると……………」

「アッ！ アニキ！！」

「デュノアさん？」

店を出たところで声を掛けられ、神谷とシャルが振り返ると、そこには……………」

弾と、私服姿の虚の姿が在った。

「おっ！ 弾じゃねえか！」

「虚さん？ 如何して此処に？」

平然としている神谷に対し、シャルは意外な人物に出くわして軽く驚いていた。

「あ、えつと……………」

「ホラ、今月一夏の誕生日があるじゃないっすか。それでプレゼントを選びも兼ねてデートをと思ってさあ」

「だ、弾くん！！」

小1時間後……………

暴走しかけた神谷と弾を如何にか押さえ、如何にかまともな一夏へのプレゼントを買ったシャルと虚だったが……………

その際に、神谷と弾がチンピラ達に因縁を付けられてしまい……………

現在絶賛喧嘩の真っ最中である。

仕方なくシャルと虚は、喧嘩が終わるまで近くのベンチに腰掛け、自販機で購入していたジュースを啣っていた。

「全くもう……………神谷ってば、何時もあなんだから……………」

「大変ね、デユノアくん」

喧嘩の様子を遠目に見ながら、シャルが愚痴る様に言うと、虚が慰めるかの様な言葉を言って来る。

「もう結構慣れちゃいましたけどね……………やっぱり、その……………神谷の事、好きだから……………虚さんもそうでしょう?」

「え、ええ……………」

と互いの恋人の事を話し始めると、赤面し合う2人。

「神谷ってば、何時も突っ走ってばかりで、それで無茶苦茶で…………でも、そんな神谷だから……………僕は好きになっただんです」

「……………私も、弾さんの勢い任せなところに戸惑ってしまっけど…………でも、それ以上に優しく、強いあの人が好きよ」

「……………」

そう言い合うと、シャルと虚はお互いに手を取り合う。

「お互い、頑張りましょうね、虚さん」

「ええ、そうね。デュノアさん」

そしてニコリと笑い合っそう言うのだった。

「待たせたな、シャル！」

「すみません、虚さん。お待たせしちゃって」

とそこで、神谷と弾が帰って来る。

「あ、神谷」

「弾くん、終わったの？」

「ああ、やっと片付いたぜ」

「しつこい連中だったぜ」

そう言い合う神谷と弾の背後には、伸されたチンピラ達が、漫画の様に積み上げられていた。

「うわぁ……………」

その光景を見て、思わず苦笑いを浮かべるシャルと虚。

「しかし、アニキ！ アニキの螺旋パンチは相変わらず凄かったぜ
！！」

「何言つてやがる！ お前の飛竜三段蹴りのキレも中々のもんだっ
たぜ！！」

そんな2人の様子など知らず、神谷と弾は互いに奮戦を称え合っ
ている。

「あ、そうだアニキ！ 実はちょっと相談があるんだけど……………」

と、そこで弾が、不意に相談を持ち掛けて来る。

「何だ？ 遠慮無く言えつて！ 俺とお前の仲だろ！！」

「ホラ、今度の一夏の誕生日の日って、確か……………キャノンボール・
ファストってイベントの日だろ？」

「ああ、そう言やそうだったな」

「それでさあ、アニキ……………蘭の奴にそのチケットって貰えないかな？」

「ああ？ 蘭に？」

そこで首を傾げる神谷。

「いや、俺は虚さんからもらったんだけど……………蘭の奴が俺だけが学園祭に行った事を知った途端、豪い剣幕で襲い掛かって来てさあ」

「成程な……………それで今度は蘭の分もって事か」

「出来るかな？ アニキ？」

「任せておけ！ 俺を誰だと思ってやがる…！」

神谷はそう言って、ドンと胸を叩く。

「サンキュー、アニキ！ これで蘭に殺されなくて済むぜ！」

「じゃあ話も纏まったところで、そろそろ行きましようか」

と、虚がそう言って腰を上げた瞬間……………

突如として、神谷が非常時の連絡手段として千冬に持たされていた携帯電話が鳴った。

「あ？ なんだよ……………ハイ、もしもし？」

「神谷か？ 今何処に居る？」

神谷が気怠そうに受信ボタンを押すと、千冬の声が響いてくる。

「んだよ、ブラコンアネキ？ 今日には休みだぞ？」

「そもも言っていられん事態が発生した……………先程第3アリーナに獣人が現れた」

「！？ 何っ！？」

獣人と聞いて顔色を変える神谷。

「……………」

傍で聞いていた3人も、思わず聞き耳を立てる。

「それで如何言うワケだか、お前を出せと喚いて座り込んでいる」

「へえ……………俺に名指して喧嘩売ろうってのかい？」

「ワケが分からん奴だが……………セシリアの報告によれば、素手でピームを掻き消したらしい。並みの相手じゃないぞ」

「何処の誰で、どんな奴だろうと関係ねえ！ 売られた喧嘩は買うのがグレン団の流儀よ！！」

「兎に角、すぐに戻って来い！」

そう言うと千冬は電話を切った。

「ワリいな、シャル。デートはココまでだ」

「うん！ 獣人が出たんなら、放って置けないね」

神谷がそう呼び掛けると、表情を引き締めたシャルがそう返して来る。

「ゴメンね、弾くん。念の為に、私も戻らないと」

「良いですよ。気にしないで下さい」

虚も、弾とそう言い合う。

「行くぞ！ シャル！！」

「うん！！」

「今度また埋め合わせするから！」

そう言うと、神谷、シャル、虚の3人は学園に向かって走り出した。

「…………… やっぱり激しいんだな…………… ロージエノム軍との戦いは…………… チキシヨウ…………… 俺にもアニキや一夏みたいな力が有れば……………
……………」

残された弾は、こういう時に役に立てない自分の身に、歯痒さを感じる。

再びIS学園・第3アリーナ……………

突如現れ、グレンラガンを出せと言って座り込んだ獣人……………

ファーストコンタクトで、セシリアの攻撃が防がれた事から、教師部隊に加えて、専用機持ち達も集合して、獣人を取り囲んでいるが……………

獣人はセシリアの攻撃を防いで以来、ただジツと座り込んでいるだけ、何の動きも見せなかった。

この奇妙な獣人を、教師部隊も専用機持ち達も扱いあぐねる。

やがては逃げ出した生徒達が、獣人を間近で見ようとアリーナの客席に集まり出す始末だった。

「……………」

そんな中でも、獣人は動きを見せず、ただジッとグレンラガンを持っている。

「アイツ……………如何言う積りなんだ？」

その獣人の周りを取り囲んでいた教師部隊と専用機持ちの中で、一夏がポツリと漏らした。

「ずっとああして座ってるだけじゃないの」

それに返事を返す様に、鈴がそう言う。

「やはり、グレンラガン……………神谷を待っているのか？」

「態々敵地へ乗り込んで来てか？ 奇怪な……………」

篤がそう言うと、ラウラが否定的な言葉を返して来る。

と、そこで……………」

「お待たせ！」

「待たせたなあ！！」

そう言う声と共に、アリーナのピットからISを装着したシャルと、グレンラガンが飛び出して来た！！

「！シャルロットさん！ 神谷さん！」

「待ってたよ！ 神谷くん！！」

セシリアと楯無がそう言っていると、シャルは包囲網の中に加わり、グレンラガンは獣人と対峙する。

「……………貴様がグレンラガンか」

と、グレンラガンの姿を確認した獣人が立ち上がる。

「……………!?」

それを見た一夏達と教師部隊が一斉に警戒する。

「態々俺に名指しで喧嘩売るたあ良い度胸だな……………何もんだ！！」

と、グレンラガンが獣人に向かってそう問い質すと……………

「良くぞ聞いてくれたものよ！ そのちっせえ耳の穴かっぼじって、よ……く聞きやがれえ！！」

獣人は大声でそう口上を言い始めた！

「親兄弟も知らずに生まれ、育った故郷の想いも捨てて、残すは体の傷跡一つ！ それがケモノの漢道おとし！！ 黙る子も思わず泣く獣人

遊撃部隊長！！ ジギタリスたあ！！ 俺様の事だあっ！！」

獣人………… 『ジギタリス』が声を張り上げる度に周りの空気が震え、一夏達は衝撃波に襲われる。

「ほう…………… 良いねえ。獣にしちや良い啖呵だ！ ならこつちの名もよく覚えておいてもらおうか！！」

だが、グレンラガンはその啖呵を聞いて、衝撃波を受けても怯まず、逆に名乗り返し始めた。

「IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼リーダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

「成程…………… 流石は音に聞こえたグレンラガンの天上 神谷…………… 良い気風だな」

ジギタリスは、そんなグレンラガン（神谷）の姿を見て、感心する様な素振りを見せる。

「これまで悉く我等ロージエノム軍の軍勢を打ち倒し、ヴィラルさえ退けただけの事はある」

「何だ、お前…………… ヴィラルの仲間か？」

「仲間…………… と言う程のものではないが…………… 我等遊撃部隊は独自の任務遂行権を与えられたその名の通り遊撃部隊。噂のグレンラガンを片付けに来たまでだ」

「面白れえ…………… 返り討ちにしてやるぜ！！」

グレンラガンはそう言つと、構えを取る！

(あ、アレは！？ 間違いない……………ジギタリスのおっさん！！
まさか本当にグレンラガンと！？)

と、ギャラリーの生徒の中に混じっていたティトリーが、ジギタリスの姿を見て内心で驚愕する。

(ど、如何しよう！？ ギガンチョヤバい！！)

そのまま引き続き内心でアタフタするティトリーだったが、それで状況が変わる筈もなかった……………

「では行くぞ！ おおおおおおおおー……………
！！！」

そう言うがいなや、ジギタリスはその巨体からは想像も出来ないスピードで、グレンラガン目掛けて突っ込んで行く！！

(！？ はええっ！？)

「むんっ！！！」

そしてそのまま、グレンラガンにタックルを喰らわせる！！

「うおおおっ！？」

そのままグレンラガンは、ジギタリスに押されて行く。

「なっ!?!」

グレンラガンはそう言って、ラウラを制した。

「コイツのご指名は俺だ。俺が相手をする」

「貴様! ふざけているのか!?! コレは喧嘩ではないんだぞ!?!」

「うるせえっ! 手えだしやがったら、テメエの方からボコッてやるからな!?!」

軍人として対応するラウラを、グレンラガンはそう一喝する。

「全員そのまま待機しろ」

すると、申し合わせたかのようなタイミングで、千冬からそう通信が入って来た。

「!?! 教官! しかし……………」

「本人がやると言っているんだ。やらせてやれ」

食い下がるラウラだったが、千冬は重ねてそう言い放つ。

「神谷……………引き受けるからには必ず勝てよ」

そして、グレンラガンの方にもそう通信を送った。

「任せておけっ! 俺を誰だと思っただけやがる!?!」

「貰ったあああああああーーーーっ！！」

バランスを崩したグレンラガンに、ジギタリスが飛び掛かる。

「何のおっ！！」

だがグレンラガンは、ジギタリスが眼前に迫った瞬間に、自ら仰向けに倒れて行き、ジギタリスの両腕を掴み、そのまま片足を腿の付け根に当てて、巴投げで投げ飛ばす！

「ぬっっっ！！？」

だがジギタリスは空中で姿勢を整え、着地を決める。

「うおおおおおおおーーーーっ！！」

着地を決めたジギタリスに、グレンラガンは左ストレートを繰り出す。

「甘い！！」

ジギタリスは繰り出された左ストレートに自分の右腕を横から押し当てる様にして逸らしてかわす。

だが！！

「どっちがあ！！」

左ストレートがかわされた瞬間、ジギタリスの眼前まで接近してい

キツイな」

と、ジギタリスはそう言ったかと思うと、顔の様な形をしたバッジ
……………ガンメンバッジを取り出した。

「こっから本気って事か？ 良いぜ……………全力で着やがれ！！」

「その言葉……………後悔するなよ！！」

ジギタリスはそう叫ぶと、ガンメンバッジを掲げ、光に包まれたの
だった……………

つづく

第33話『グレンラガンは何処に居る?』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

一夏への誕生日プレゼント選びの為、シャルと街へ繰り出した神谷弾と虚のカップルと出くわし、ハチャメチャを巻き起こしながらも楽しい一時を過ごす。

だが、そんな中……………

ティトリーの上司であるジギタリスがIS学園を強襲。

グレンラガンに一騎打ちを申し込んで来た。

生身でも凄まじい戦闘能力を誇るジギタリスだが、グレンラガンの前に遂にガンメンの使用を決意する。

果たして、恐るべき戦闘能力を持つこの獣人のガンメンは、どんな姿なのか？

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第34話 『目が真つ赤だぞ?』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第34話 『目が真つ赤だぞ?』

突如としてIS学園に現れ、グレンラガン……………

神谷に名指して戦いを挑んだ獣人『ジギタリス』

その心意気に答えるかの様に、グレンラガン（神谷）は単独で相手を務めていたが……………

グレンラガンの実力を認めたジギタリスは本気となり……………

遂に自分のガンメンを持ち出した。

果たして、素の状態でもグレンラガンと互角に戦って見せたジギタリスのガンメンとは……………

どんな物なのか？

「来るかあ！」

ジギタリスを包み込んだ光が弾けるのを待ち構えるグレンラガン。

「あの獣人のガンメンって……………どんなの何だ？」

「分からん……………だが、素の状態でさえ、あのグレンラガンと互角に戦って見せた奴のガンメンだ」

「相当の高性能機である事は間違いありませんね」

「神谷……………油断しないで」

その光景を見ていた専用機持ちの中で、一夏、箒、セシリア、シャルがそう呟く。

「！ 出るわよ！！」

と、鈴がそう言った瞬間、光が弾け……………

ジギタリスのガンメンの姿が露わになった。

それは……………

「あっ！ 燃ゆるハートは天真爛漫！！」

白と赤のカラーリングに……………

「んっ！ 誰が呼んだか通り名は！！」

黄色2つの大きな目と……………

「はっ！ 修羅の遊撃部隊長！！」

2本の長い耳が特徴的なガンメン……………

「そのジギタリス様が愛機！！」 『ザウレック』の雄姿！！」

『ウサギ型』のガンメンだった！！

「ラウラ?」

その呟きを聞いた一夏とシャルがギャグ汗を流す。

「何が恐ろしいか! このウサピョン野郎! 何が恐怖の象徴だ!
! 可愛さで言えばキ○イちゃんのためはってるじゃねえか?!」

グレンラガンの口からも、若干ヤバい言葉が漏れる。

「何おう!? このザウレグを捕まえて!! 事もあるつか『可愛
い』などと!! 獣人にとってこれ以上の屈辱はない!!」

ザウレグは怒りの声を漏らすか……

「可愛いわよね?」

「ええ……可愛いですわ」

見物していた鈴とセシリアも、小声でそんな事を言い合っていた。

「そこになおれ!! 成敗してくれる!!」

「望むところだ!! テメエに少しでも男気を感じた俺が馬鹿だつ
た!! 純な俺のハートを踏み躪りやがって!! 許さん!! ぎ
つたんぎつたんのにのしてやる!!」

「……………何だ、コレは?」

目の前で繰り広げられようとしている珍妙な戦いに、筈は思わずそ

「うおっ！？」

「ぬっっ！？」

そして互いの攻撃が相殺され、両者は弾かれる様に距離を取った。

「……………成程な……………如何やら見かけと違って中身はあるみてえだな」

「ふん！ 漸く気づいたか」

「悪かったな！ さっきの言葉は訂正するぜ！ 確かにオメエのガンメンは恐ろしい！！」

「！？ アニキが……………間違いを認めた？」

「……………」

一夏が驚きの声を挙げ、篝やシャル達も信じられないモノを見る様な目でグレンラガンを見ている。

「だがな……………それでも勝つのは俺だ！！」

しかし、すぐにそう言い、構えを取り直した。

「フッフ……………それでこそだ、グレンラガン……………そうでなければ……………倒し甲斐が無い！！」

と、ザウレックはそう吠えたかと思うと、耳の間に電流が迸り、グレンラガン目掛けて発射される！！

更に続けて、グレンラガンはドリラッシュを繰り出す！

多数のドリルミサイルがザウレックに襲い掛かる。

「小癪なあ！　でやあああああああ————
っ！！」

と、ザウレックは迫り来るドリルミサイルに向かって目からの怪音を浴びせる。

怪音を浴びたドリルミサイルは、コントロールを失って、ザウレックの周りの地面に突き刺さり、爆発した。

その際に発生した爆煙で辺りが覆われる。

「ぬっつ！　しまった！！」

これでグレンラガンが何処に居るのか分からないザウレックは小刻みに向きを変えて全方位を警戒する。

しかし……

「何処見てやがる！　俺は此処だあ！！」

そう言う台詞が響いたかと思うと、ザウレックの足元から、右腕のドリルで地面の中を掘り進んでいたグレンラガンが姿を現す。

そしてそのまま、ザウレックにドリルの右腕でのアッパーを喰らわせる！

「ココまでとは……………恐るべし、グレンラガン」

「へっ！ 今更気づいても遅いんだよ！！」

グレンラガンの実力を認識し、ザウレッグがその声を挙げると、グレンラガンは得意そうにそう言う。

「如何やら……………アレを出すしかない様だな」

「？ アレ？ 何だアレって？……………へ、へんなモン出すんじゃないぞ！」

「何を言っている貴様！ アレと言ったら決まっているだろう！
見て驚け！ 聞いて驚け！ 地獄の炎で焼かれた赤き、まなこ！！
これがザウレッグの！！ レッドアイモードだ！！」

と、そう言った瞬間！！

ザウレッグの黄色かった瞳が、真っ赤に染まった！！

「！？ 目の色が変わった！？」

「益々ウサギっぽくなったわね……………」

軽く驚く一夏と、冷めた感じにそう言い放つ鈴。

「オイオイ、目が真っ赤だぞ？ それが何だって……………」

と、グレンラガンがそう言いかけた時……………

突如その身体に衝撃が走った！！

「ぐほっ！？」

肺の空気が一気に押し出され、グレンラガンはアリーナの壁に叩き付けられた！！

「えっ！？」

「くくくくく！？」「くくくく」

一夏は元より、箒やシャル達も、何が起こったのか理解出来ない。

やがて、先程までグレンラガンが居た場所に……

白い湯気が立ち上っている拳を構えたザウレグ（レッドアイモード）の姿が在る事に気づく！

「！？ 何時の間に！？」

「まさか！？ 今のはアイツの攻撃か！？」

ラウラと箒がその声を挙げると……

「ゲホッ！ ゴホッ！ チキショー！ 何だっただ……」

咳き込みながら、グレンラガンが立ち上がる。

その途端！！

先程まで遠くにいた筈のザウレッグは、一瞬にして間合いを詰め、グレンラガンの至近距離に出現する。

「!?!」

驚くグレンラガンに、ザウレッグのアップercutが叩き込まれる!

「ガハッ!?!……この野郎!?!」

激痛を堪えながら、反撃の右パンチを繰り出すグレンラガン。

しかし、ザウレッグは左手だけでそのパンチを受け止める。

「まだまだあつ!?!」

グレンラガンは続け様に左パンチを繰り出す。

しかし、そのパンチもザウレッグの右手で受け止められてしまう。

「ぐうっ!?! コイツウツ!?!」

そのまま力比べへと移行する両者だったが……

「うおっ!?!? ぐああつ!?!?」

グレンラガンがパワー負けし、腕を捻られる。

「!?!? そんな!?!? グレンラガンがパワー負けしてる!?!?」

「如何やら、あのレッドアイモードって、ただ目の色が変わってるだけじゃないみたいね」

シャルが驚きの声を挙げ、楯無がそうザウレックを分析する。

「クソオ〜！ 舐めんじゃねえぞおー！」

と、グレンラガンはザウレックの不意を衝く様に、頭突きを繰り返した！！

「ぬっつ！？」

不意を衝かれてまともに喰らったザウレックは、頭を押さえて後ずさる。

「とりゃああつ！ ニークラツシャアアアアアアアアアアアアアアアアア
—————ツ！！」

グレンラガンは飛び上がり、左膝からドリルを出現させると、そのドリルを向けてザウレック目掛けて降下した！！

「！……」

だが、ザウレックはサイドステップを踏んで回避。

「喰らええっ！！」

そしてそのまま、耳からの電撃を見舞う！！

「！？ ぐあああああああ—————っ！！」

電撃が直撃し、全身から黒煙を上げるグレンラガン。

「ぐづっ!?!」

そのまま片膝を地に着く。

「神谷さん!!」

「もう見てらんない! 助太刀するわよ!!」

セシリアが叫ぶと、鈴がそう言って、ザウレックに向かって行く。

「俺も!」

「僕も!!」

一夏とシャルがそれに続き、他の一同も続いた。

しかし……

「来るんじゃない!!」

「!!!!!!!!!!?!」

神谷がそう言って、一同を制した!!

「アニキ! 何言っただよ!!?」

「そつだよ、神谷! それ以上はもう無理だよ!!」

「馬鹿にすんな！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

一夏とシャルが叫ぶが、グレンラガンはお決まりに台詞を返す。

「コイツは俺が買った喧嘩だ……俺がケリを着ける！」

そしてそのまま、気合を入れながら一気に立ち上がる。

「見上げた心意気だ……だが！ それだけではこの状況は好転せんぞ！！」

だが、ザウレックは無情にも再び一瞬でグレンラガンとの距離を詰めると、拳を叩き込んで来た！！

「ぐはっ！？」

グレンラガンの口から吐血が飛ぶ。

「！？ 神谷あ！！」

シャルから悲痛な叫びが拳がる。

しかし！！

「まだ！ まだあ！！」

倒れそうになったグレンラガンは踏み止まり、額にドリルを出現させる。

「!?!? うおおおおおおお……」

「ぬおおおおおおお……」

キャロットボンバーが爆発し、両者はその爆風によって引き剥がされて倒れる。

「チキシヨウが……」

装甲が融解しかかった状態で上体を起こすグレンラガン。

「よもはやココまでとは……如何やら見ていたのは俺の方だった様だな……」

その反対側で、ザウレッグもそう言いながら、フラフラと立ち上がる。

「まあ良い……今日のところはこのくらいにしておいてやる!」

「テメエ！ 逃げんのか!」

「決着は何れまたの機会だ！ それまで首を洗って待っておけ！
さらばだ!」

と、ザウレッグがそう言った瞬間!!

装甲の隙間から、煙幕が放射された!!

その量は半端では無く、アリーナ内一体を覆い尽くしてしまう。

「キヤアツ!?!」

「ちよっ!?! 煙幕!?! 勘弁してよ!?!」

「奴は!?! 奴は何処へ行った!?!」

セシリア、鈴、ラウラがその声を挙げる。

やがて煙幕が晴れて来たかと思うと……

ザウレグの姿は、もうアリーナの何処にも無かった……

「!?! 居ない!?!」

「教師部隊の皆さん! すぐに手分けして学園一体の封鎖を!?!」

篤が驚きの声を挙げ、楯無が教師部隊にそう指示を出す。

教師部隊は慌てて、学園の彼方此方に散らばって行った。

「決着はまたの機会だと……ふざけやがって……ぐっ!?!」

とそこで、立ち上がるうとしていたグレンラガンが崩れ落ち、神谷の姿へと戻る。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

全身汗まみれであり、息苦しそうな様子の神谷。

「アニキ!」

「神谷!」

慌てて一夏とシャルが傍に寄り、ISを解除すると、神谷を両側から担ぎ上げる様にする。

「すまねえな、一夏、シャル」

「気にしないでくれよ、アニキ」

「それより、神谷。あの獣人、また来るって……」

「へっ! そしたら今度こそアイツの言う通りに決着を着けてやるまでよ!」

心配そうに言うシャルに、神谷はニヤリと笑いながらそう返すのだ。

リーロンの研究室……

夏休みの間を利用して、リーロンが（私的に）建造したこの研究室では、学園全体の様子をモニター出来る、まるでアニメか特撮の秘密基地の様な設備が備え付けられていた。

「如何やら、今回も無事に逃げられたみたいね」

「はあ、良かった……」

「全く……相変わらず危なっかしい戦い方をしておって……」

グレンラガンとザウレグの戦いの様子を見ていたリーロン、真耶、千冬がそう声を漏らす。

「それにしても、あのガンメン……目が赤くなった途端にパワーアップしたわね……あの目はエネルギータンクみたいなものかしら？」

「それが気がかりだな……おっと、失礼……」

と、3人が話し合っていると、千冬の通信機が鳴り、2人に断りを入れて、千冬は受信ボタンを押した。

「私だ……そうか……分かった。全員引き上げて下さい」

「さっきの獣人……取り逃がしちゃったの？」

千冬の会話を聞いていたリーロンがそう言って来る。

「如何やらその様です」

「また来るって言ってましたよね？」

「うむ……………」

真耶の言葉に、千冬は珍しく不安そうにする。

「心配ないわよ。神谷なら何があっても、最後にはきっと勝つわ」

それを察したリーロンがそう言って来る。

「そうだな……………」

その言葉で千冬の顔から不安は消える。

（それにしても気になるわね。あのガンメン……………何か足りてない気がするって言うか……………）

リーロンはザウレグの事を思い出し、そんな事を感じるのであった……………

UJU

第34話 『目が真つ赤だぞ?』 (後書き)

新話、投稿させていただきました。

遂にジギタリスのガンメン……………

『ザウレッグ』がその姿を見せた!!

可愛らしい見た目とは裏腹に、高い戦闘能力を誇るザウレッグ。

更に、謎のレッドアイモードを発動され、グレンラガンは絶対絶命のピンチに陥る。

だが、捨て身の戦法で如何にかザウレッグを撤退させる事に成功する。

ザウレッグは再戦を予告しており、神谷は再び対決を心待ちにするのだった。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第35話 『男と男の真剣駆けっこ!!』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第35話 『男と男の真剣駆けっこ!!』

獣人ジギタリスと彼の操るガンメン・ザウレックとの襲撃から数日が過ぎ……………

遂にキャノンボール・ファストの日が訪れた。

会場である市のISアリーナには、多くの見物客が詰めかけている。

しかし、空いている席もチラホラと目立っている……………

本来ならば、この大会にはIS産業関係者や各国政府関係者も来る予定になっていたのだが……………

日に日に激化するロージエノム軍との戦いで、政府関係者は自国を離れられず、または国自体を壊滅させられたところも少なくない。

IS産業関係者は新たなIS・武装の開発等に追われ、不参加という状況だ。

なお、プログラムとしては……………

まず2年生のレースが行われ、その後に1年生の専用機持ちのレース。

次に1年生の訓練機によるレースで、最後に3年生によるエキシビジョンレースとなっている。

「へへっ！ 盛り上がってんじゃねえか」

観客席を眺めながら神谷がそう言う。

元からお祭り騒ぎが好きな彼は、この大舞台に気分が高ぶっている様だ。

(そう言えば蘭の席って何処だっけ？ 弾の奴も来てるんだよな？)

ふと一夏は、弾や蘭が来ている事を思い出し、観客席にその姿を探すが……………

「!? いててててててっ!?」

突然耳を引っ張られる。

「一夏！ 何をやっている！ さっさと準備をしろ!!」

耳を引っ張っている相手…………… 箒は一夏にそう言い放つ。

「ほ、箒！ ストップ！ ストップ!! 耳が千切れる!!」

「早く来い！ お前が来ないと私が叱られるんだからな!!」

そう言うと一夏を解放し、ピットへと向かう。

「いててて…………… 全く、箒の奴……………」

一夏も愚痴る様に呟きながら、渋々と言った様子でピットへと向かった。

「神谷。僕達も行こう」

「おう、そうだな……………」

神谷もシャルに連れられ、ピットへと向かう。

一方、その頃……………

「夏が探していた五反田兄妹はと言つと……………」

「えっと、Fの45……………Fの45……………」

「この先だな。ホラ行くぞ」

チケット片手にマップと睨めっこしている蘭を尻目に、弾はドンド
ンと進んで行く。

「あ！ ちょっと待ってよ馬鹿兄貴！ ホントに分かってんの!？」

「当たり前だ！ 男なら悩む前に行動だ!！」

「それ分かってないって事じゃない!！」

弾の言葉にそうツッコミを入れる蘭だったが、弾が進んで行った先の席は自分達の席だった。

「嘘……………」

「見たか！ 男は黙って感頼りよ！！」

啞然とする蘭を尻目に、弾は自分の席に座る。

「……………何か納得行かないんだけど」

蘭も愚痴りながらも、自分の席へと着く。

（ま、いつか……………生でISを使ってる一夏さんが見れるんだから）

そして、最初の2年生のレースが終わり……………

いよいよ神谷や一夏達、1年生専用機持ちのレースとなった。

「へっ……………フリィが、お前等……………優勝はこの神谷様が頂くぜ」

高ぶる気持ちを抑えるかの様に準備運動をしていた、頭を除いてグレンラガンの姿となっていた神谷が、一夏達に向かってそう言う。

「アラ？ 残念ですが神谷さん。優勝は私が貰いましたよ」

高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装着したブルー・ティアーズを展開しているセシリアが、微笑みながらそう言い返す。

「何言ってるのよ。アタシが優勝すんに決まってるでしょ！」

それを聞いた高速機動パッケージ『風』^{フヘン}を装着した甲龍を展開している鈴がその声を挙げる。

「フツ……………悪いがそれは無いな。優勝するのは……………この私だ」

背部に3基の増設スラスタを装備したシュヴァルツェア・レーゲンを展開しているラウラも、負けじとそう言い放つ。

「僕だって負けないよ」

ラウラと同じく3基の増設スラスタを、両肩と背中に装着した状態のラファール・リヴァイヴ・カスタムEIIを展開しているシャルもそう言ってくる。

「一意専心……………最早私の目には優勝以外無い」

展開装甲を展開している筈もそう宣言する。

「俺だって負けないよ、アニキ！ 男と男の真剣勝負だ！！」

(それは即ち……………)

(一夏とのデートも思いのままって事!!)

(いや、デートだけではなく！ あ、あんな事やこんな事も!!)

()()(何が何でも優勝してみせる!!)()()

一夏への想いが、只でさえ高ぶっていた彼女達の闘争心を、燃え尽きんがばかりにまで燃え上がらせる!!

(何でも命令できる権利か……………僕だったら……………)

そしてシャルも、妄想を展開して行く……………

「!?!?!?」

何を妄想したのか、一瞬にして茹蛸の様に真っ赤になり、頭から湯気を上げた。

(キャア~~~~ッ！ やだもつ~~~~!!……………絶対に優勝する!!)

そして、篝達と同じ様に、密かに闘争心を更に燃え上がらせる。

「皆さん、準備は良いですか? スタートポイントまで移動しますよ」

そこで、真耶の若干のんびりとした声が響いて来て、一同はスタート位置へと着く。

「いよいよだな……………」

頭部も装甲で覆い、完全にグレンラガンの姿となった神谷が、クラウチングスタートの姿勢を取ってそう呟く。

「……………」

一夏達もスタート態勢を取りながら、緊張した面持ちとなる。

「それでは皆さん！　続きまして、1年生専用機持ちによるレースを行います！！」

そう言うアナウンスが響いたかと思うと、一同はスラスターに火を入れる。

そして、シグナルが点滅を始める。

3……………」

「……………」

2……………」

一同の緊張感は極限にまで達する。

1……………」

そして、遂にスタートの合図が告げられようとした時に……………」

ゴ……

『そいつ』はやって来た!!

突如として風切り音を響かせた物体がアリーナの上空に現れ……

そのままスタートを切ろうとしていたグレン団の一同の前に派手に粉煙を巻き上げて着地した!!

「!?」

「うわっ!?!」

「な、何いつ!?!」

突然の事に、スタートを切ろうとしていた一夏達は身構える。

やがて、舞い上がっていた粉煙が徐々に治まって来たかと思うと……

……

そこには……

「天上 神谷! 何時ぞやの決着! 着けに来てやったぞ!」

堂々とそう言い放つ、ザウレッグの姿となっているジギタリスの姿が在った!!

「!? あのガンメンは!?!」

「確か……ジギタリスのザウレッグ!」

「良い度胸だ！ それでこそ俺様が見込んだ人間！！ だがしかし！！ 貴様は『速さも負けない』と豪語したな！！ それをこのザウレツグの前で口にするとはな……………笑止千万！！」

「うるせえ！ テメエみてえなドンくせえガンメンに、俺とグレンラガンが負けるかよ！！……………何なら、競争してみるか！？」

「！？ アニキ！？ 何言ってるの！？」

そこで一夏がグレンラガンにツッコミを入れる。

「御誂え向きに、此処はキャノンボール・ファストのレース会場だ！ 速さ比べにはもってこいだぜ！！」

しかし、グレンラガンはそれを無視して、ザウレツグに更にそう言葉を続ける。

「ぬぬぬぬ！ 言わせておけば！！ 良いだろう！！ ならばこの競技場をどちらが先に1周するかで勝負だ！！ 先にゴールした方が勝ち！！ それで如何だ！！」

「……………良いぜ！ 乗った！！」

「ちょっと！ ちょっとちょっと！！」

「何でこう馬鹿げた展開になる！！」

グレンラガンとザウレツグとの間で勝手に話が進んで行き、シャルと箒がツッコミを入れる。

「うるせえ！ 女は引っ込んでろ！ これは……………男と男の真剣駆けっこ！……………なんだよ！！」

そんなシャルや箒を、グレンラガンは一喝する。

かくして……………

IS学園と市のイベントであったキャノンボール・ファストは……………

何故かグレンラガンとザウレックによる……………

男と男の真剣駆けっこ勝負となったのだった。

「え、それでは、これより……………神谷のアニキと、獣人ジギタリスによる、男と男の真剣駆けっこ勝負を始めたいと思います」

「おう！」

「ふふふ……………」

スタート役をしている一夏の声に、威勢の良い返事を返すグレンラガンと、不敵な笑いを零すザウレック。

「……………何よコレ？」

「理解出来んな……………」

ギャラリーに徹している鈴とラウラはすっかり呆れ顔だ。

「何でも命令出来る権利が……………」

「……………クツ」

セシリアと篤は、ザウレックの乱入のせいで勝負が無効になり、敗者に何でも命令できる権利を失った事を心底悔しがっている。

「神谷！ 頑張つて〜！〜！」

そしてシャルは、神谷に向かって激励を送っている。

「それでは、位置に着いて……………」

一夏がそう言つて右腕を上げると、グレンラガンはクラウチングスタートの姿勢を取り、ザウレックはスタンディングスタートの姿勢を取る。

「よ〜い……………ドンッ！〜！」

「……………うおおおおおおおおおおお……………」
「……………」

再び付かず離れずの状態となる!!

(チイツ! 差が詰まらねえ!!)

前を走るザウレックを見ながら、グレンラガンはそう思う。

(クツ! 差が拡げられん!!)

しかし、その前方を走るザウレックもそう思っていた。

正に両者互角の勝負である。

「行けーっ!! アニキーツ!! 負けるなーっ!!」

すっかり避難が終わり、ガランとしていた観客席に、唯一残っていた弾がグレンラガンに声援を送る。

「ちよっ! 馬鹿兄貴! 何やってんのよ! 早く逃げるわよ!!」

蘭がそう言っつて、弾の服を引っ張るが……

「うるせえ! アニキが男の勝負をしてるっつのに、俺だけ逃げられるかよ!! 俺は最後まで見届ける!!」

弾は挺子でも動かないと言う様にドツカリと座り込んでいた。

「あゝ、もう! 如何して私の周りの男って、一夏さん以外皆こんななのお!!」

蘭が愚痴る様にそう叫ぶ。

「何事だ!?!」

一夏と箒が驚きの声を挙げる。

やがて、舞い上がって来た粉煙が治まって来ると……………

「ふふふふ……………」

抑揚が無い不自然な声色の笑い声を響かせている、巨大な2つの盾を左右に装備した円盤状のバックパックを背負って、死神の様な鎌を持った人型に近いガンメンが姿を現した!!!

周囲には、カノン・ガノンやホーダインマックスと言った、砲撃戦型のガンメン達の姿も在る。

「!?!? 援軍!?!?」

「コラ、お前! 卑怯だぞ!!! タイマン勝負だとか言っておいて、援軍を呼ぶなんて!?!」

シャルが驚きの声を挙げると、一夏がザウレグに向かってそう叫ぶ。

「ち、違う! 俺は援軍など呼んでいない! お前達! 如何いう積りだ!?!」

ザウレグは慌てた様子で、砲台型ガンメンを引き連れた、人型ガンメン……………『フォビドゥン』にそう問い質す。

「……………うぜえな」

「何!?!」

「うぜえんだよ……………くだらねえ事ばかりしてやがって……………何が男の駆けっこ勝負だ……………人間共は有無を言わせず皆殺し……………それが……………獣人の掟だろうがぁ!」

と、フォビドゥンはそう言い放つと、グレンラガン目掛けて両腕内蔵の大口径機関砲・アルムファイヤーを放つ。

「! チイツ!!!」

グレンラガンは舌打ちすると、右腕をドリルに変え、そのドリルを傘の様に開いて銃弾を防ぐ!!

「行け、お前等……………ただし、俺の邪魔はするな」

「ハッ!」

「専用機持ちを叩き潰せ!!!」

そこで更に、周囲に控えていた砲台型ガンメン達も、一夏達へ襲い掛かる。

「キヤアツ!?!」

「蘭! 逃げるぞ!! 流石にコイツはヤベェ!!!」

アリーナのシールドに流れ弾が当たり、流石にヤバい空気を感じ取った弾は、蘭を抱えて避難する。

「クツ！ 結局こうなるのか！！」

「獣人なんて、やっぱケダモノね！！」

ラウラと鈴は、悪態を吐きながらも、砲台型ガンメン達を迎え撃つ。

「一夏！ 私達も！！」

「おう！！」

箒は一夏に呼び掛けると、砲台型ガンメン達の中へ突っ込んで行くとする。

しかし……………

「貴様達の相手は私だ！！」

そう言う声が響き渡ったかと思うと、アリーナの地面を突き破って、巨大な4足歩行型で、4門の砲門と2本の長く巨大な角を携えたガンメン……………『グランド』が姿を現した！！

「うおっ！？」

「くっ！ またか！？」

「喰らえっ！！」

驚く一夏と箒に、グランドは2本の角の間に発生させた電撃・グラウンドサンダーを見舞って来る！！

「一夏さん！ 篝さん！」

「お前は俺の相手してくれよ」

援護に向かおうとしたセシリアに、フォビドウンが手に持つ巨大な鎌・重刎首鎌じゅうぶんしゅれん「ニーズヘグ」で斬り掛かる！！

「！？」

咄嗟に滅多に使わない近接ショートブレード・インターセプターを呼び出し、ニーズヘグを受け止めるセシリア。

「セシリア！………！？ キャアツ！！」

セシリアの援護に行こうとしたシャルには、砲台型ガンメン達からの砲撃が襲い掛かる！！

「テメエ等！ シャルに何しやがる！！」

それを見たグレンラガンが、シャルに砲撃を行っていた砲台型ガンメンの部隊の中に飛び込み、フルドリライズで一気に刺し貫いた！！

しかし、直後！！

「！？ うおっ！？」

別の砲台型ガンメンの部隊の砲撃を浴びせてしまう。

「距離を取れ！！ グレンラガンは近接戦闘を得意とする！！ 絶

対に近寄せせるな!!」

部隊の部隊長はそう言い放ち、グレンラガンに絶え間ない砲撃の雨を浴びせる。

「クソツ！ 動けねえ!!」

凄まじい砲撃の前に動きを封じられるグレンラガン。

すると…………

「キャロットボンバー!!」

その砲撃を見舞っていた砲台型ガンメンの部隊に、ニンジン型の爆弾が投げ込まれた!!

「ぬおおおっ!?!」

突然の爆発に、砲撃が中止される。

「き、貴様！ 如何いう積りだ!?! 螺旋王様を裏切る積りか!!」

その攻撃を加えた者…………ザウレックをそう怒鳴りつけるガンメン部隊長。

しかし…………

「俺は奴と男の勝負していたのだ……………奴とのケリは俺が着ける！ 貴様等に邪魔はさせん!!」

ザウレッグは怯む事なくそう言い張った。

「ジギタリス……………」

「天上 神谷よ…………… 貴様に貴様の誇りが有る様に…………… 俺にも俺の誇りが有る！ 貴様との決着は！ この様な形であってはならない！！！」

驚いていたグレンラガンに向かって、ザウレッグはそう言う。

「ええい！ 何が誇りだ！ 邪魔をするならば貴様も纏めて消し飛ばしてくれる！！！」

そこで部隊長がそう言い放ち、グレンラガンとザウレッグに部隊の全砲門を向ける。

「へっ！ 上等！！ 行くぜ、ジギタリス！！！」

「俺に命令するな！！！」

グレンラガンとザウレッグはそう言い合うつと、砲撃型ガンメンの部隊の中へ突っ込んで行くのだった。

UJU

第35話『男と男の真剣駆けっこ!!』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

遂にキャノンボール・ファストの日を迎えた神谷達。

其々に闘志を燃え上がらせる神谷達だったが………

何とこのタイミングでジギタリスが再戦を仕掛けてきた。

場所がキャノンボール・ファストの会場であった為か、何故か駆けついで勝負を始めるグレンラガンとザウレツグ。

しかし、2人は真剣そのものだった。

だが、そんな男の勝負に水を差す様に、ロージエノム正規軍が出現。ジギタリスは己の誇りから、神谷達を協力して戦い始めるのだった。

今回登場したガンメン、フォビドウンとグランドは、SEEDとGのガンダムが元ネタです。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第36話『私とした事が、グレン団の魂を失念してありましたわ』

これは……………

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……………

それに付き従う女達の物語である……………

天元突破インフィニット・ストラトス

第36話『私とした事が、グレン団の魂を失念してありましたわ』

市のISアリーナ……………

キャノンボール・ファストの日に、ザウレックことジギタリスが神谷とグレンラガンに再戦を仕掛けて来た。

紆余曲折の末、何故か駆けっこ勝負をする事になった両者。

互いに全力疾走し、互角の勝負を繰り広げたが……………

突如として、ジギタリスの意思とは関係無い獣人達の増援部隊が出現する。

止むを得ずグレンラガンと一夏達はコレを迎え撃つが、その最中……

……………

自らの誇りを傷付けられたジギタリスは、増援に現れた獣人部隊を攻撃するのであった……………

セシリアVSフォビドゥン……………

「喰らいなさい……!」

セシリアはフォビドゥンに向かって、ストライク・ガンナーパツケー「ジ時の主力武装・大出力BTライフル「ブルー・ピアス」を放つ。

「クウツッ!」

姿勢を取り直しながら、再びブルー・ピアスを発砲するセシリアだが、そのビームは全て、フォビドウンのゲシュマイディツヒ・パンツァーによって反らされてしまう。

「無駄だつて……………」

相変わらず抑揚の無い声でフォビドウンがそう言ったかと思うと、バクパク両側に設置された可動式レールガン「エクツァーン」を放つ。

「クウツッ!」

またも辛うじて回避するセシリアだったが、内心で手詰まり感を感じていた。

現在、彼女のISであるブルー・ティアーズは、高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」を装着している状態であり、この状態ではビットのブルー・ティアーズは全て推進力に回されており、使用出来ないのだ。

つまり彼女は今の状態では、ブルー・ピアスとインターセプターしか使う事が出来ないのだ。

だが、仮にビットのブルー・ティアーズを使えたとしても、相手はビームを屈折させるシールド持っているのだ。

光学兵器主体の彼女のISとは、トコトン相性が悪いのだ。

「それでも……引き下がるワケには行きませんわ!！」

しかし、セシリアは自分を奮い立たせる様にそう言い、ブルー・ピ
アスを発砲する。

「ウゼエ……………」

だが、その攻撃も、ゲシュマイディッヒ・パンツァーで反らされて
しまう。

「いい加減落ちろよ」

フォビドゥンはそう言い、両腕内蔵の大口径機関砲「アルムファイ
ヤー」を放つ。

「そう簡単に……………このセシリア・オルコットはやられませんわ!
!」

それをバレルロールの様な動きで回避しながら、セシリアはフォビ
ドゥンに接近し、インターセプターで斬り掛かる。

「チイツ!！」

フォビドゥンはニーズヘグで受け止め、そのまま鏢迫り合いとなる
のだった。

何と!!

グラントは後ろの足で立ち上がり、前足を腕に変形させ、2足歩行形態となった!!

「むっつっつっんっ!!」

気合を入れる様に雄叫びを挙げ、足を踏み出すグラント。

自重でアリーナの地面がへこむ。

「コイツ!? 人型にもなれるのか!?!」

一夏が驚いていると、グラントの2本の角・グラントホーンの間
に電流が迸り、一夏目掛けて発射された!!

「!?!」

一夏はすぐに立ち会がると、雪片式型を实体剣モードに戻し構える。
グラントの電撃・グラントサンダーは、その实体剣モードの雪片式
型の刀身に落ち、帯電する。

「むっつっ!?!」

「返すぜ! ホラよ!!」

そして、一夏がその帯電していた雪片式型を振るうと、帯電してい
た電撃が、グラントへと放たれる。

そんな2人を低い唸り声の様な声を挙げて見据えるグラウンド。

「何て奴だ……………」

「だが見た目通りに機動力は無い。速さならコチラに部が有る。そこを衝くぞ、一夏」

「ああ、分かったぜ、箒」

一夏と箒はそう言い合つと、スピードを活かしてのヒットアンドアウェイ戦法へと戦い方を切り替えるのだった。

再び、セシリアVSフォビドウンの戦いの場では……………

「エイッ!…」

「無駄だつて言ってるだろう……………」

セシリアが放つたビームを、ゲシュマイディッヒ・パンツァーで反らしたフォビドウンは、セシリアに向かってそう言い放つ。

「クッ！」

セシリアの心に焦りが募る。

ビームによる射撃は反らされ、接近戦でも得物の差で圧倒される…

……

戦いは終始フォビドウンの優勢で進んでいた。

(このままでは……せめて、あの盾が無い場所から攻撃出来れば……)

セシリアはそう思うと、スラスターとして使用されているビットのブルー・ティアーズを見やる。

(やはり……この手しかありませんわね……)

そして、意を決した様な表情を見せる。

「お前ウザいな……殺しちゃうよ？」

「どうぞ。出来るものでしたらね！」

と、そう言った瞬間、セシリアは瞬間加速イグニッション・ブーストを発動。

一気にフォビドウンの懐に飛び込んだ！！

「！？」

「貰いましたわー!!」

そう言っつて、インターセプターを振るうセシリア。

「おっと……………」

だが、フォビドゥンはニーズヘグの柄で、インターセプターの刃を受け止めしまう。

「残念……………」

嘲る様にそう言うフォビドゥンだったが……………

「まだですわ! ブルー・ティアーズ!!」

セシリアがそう叫ぶと、スラスターとして使われていたビットのブルー・ティアーズが、一斉にビームを発射!!

スラスターとして固定していた部品を吹き飛ばし、起動した!!

「!?!」

驚いて一旦距離を取ろうとしたフォビドゥンだったが……………

「逃がしませんわ!!」

セシリアがインターセプターとブルー・ピアスを投げ捨て、フォビドゥンの両腕を掴んで引き留める。

(お願い! ブルー・ティアーズ!!)

ビットのブルー・ティアーズは、そのままゲシュマイディッヒ・パンツァーが周らない位置から攻撃しようとする。

……しかし!!

「ウゼエんだよ!!」

初めて抑揚の付いた声を発したかと思うと、バックパックを一旦背中に戻すフォビドゥン。

そしてそのまま、フレスベルグを放つ。

すると、ゲシュマイディッヒ・パンツァーから磁場が発せられ、フレスベルグが湾曲。

ブルー・ティアーズを撃ち落とそうとする。

「!?!? 危ない!?!?」

セシリアは咄嗟にブルー・ティアーズをばらけさせ、回避させる。

しかしそれは、フォビドゥンに反撃を与える隙を作ってしまう事となった。

「死ねッ!!!!」

フォビドゥンは至近距離で、セシリアにエクツァーンを連射する!!

「!?!? ああああああああ—————っ!?!?」

全弾まともに喰らってしまったセシリアは、ビットのブルー・テイアーズを無理矢理起動させたせいで半壊していたISのパーツを撒き散らしながら墜落し、地面に背中から叩き付けられる！

「！？ セシリア！！ クソツ！！ シャル！ ジギタリス！ 此処は任せるぞ！！」

と、その様子を目撃したグレンラガンが、砲台型ガンメンの相手を近くに居たシャルとザウレックことジギタリスに任せ、セシリアの救援に向かった！！

「任せて！ 神谷！！」

「貴様の命令を聞く積りは無いが……………良いだろう」

シャルとザウレックはそう言い、グレンラガンを追撃しようとする砲台型ガンメンを阻止する。

「ぐ、うっ……………」

一方、地面に叩き付けられたセシリアは、痛む身体を無理矢理起こそうとするが……………

「ふんっ……………」

そんなセシリアに向かって、フォビドゥンはニーズヘグを投擲。

ニーズヘグは、刃の部分をセシリアの右の二の腕と地面に突き刺し、柄でセシリアの身体を固定した！！

「ああああああああああー……っ!?」

耐え難い苦痛に、セシリアの口から悲鳴が挙がる。

「お前……消えちゃえよ」

フォビドゥンは再びバツクバツクを被ると、セシリアにフレスベルグの砲口を向ける。

「……お願い……ブルー・ティアーズ……」

と、セシリアは朦朧とした意識の中、辛うじて動く左手をフォビドゥンへと向ける。

すると、セシリアの心の中で、蒼い雫が落ちた。

水面に落ちた雫は、静かに波紋を広げる……

(!? コレは!?)

(考えるのだ! 己のISの名に込められた意味を!! そして解き放て! 螺旋の魂を!!)

その瞬間、セシリアの脳裏に、シュバルツ・シュヴェエスターの言葉が甦って来る。

(ああ、そうか……そうでしたの……ブルー・ティアーズとは、つまり……)

何かを悟り、セシリアはゆっくりと微笑みを浮かべた。

「……………バーン」

そして、左手で銃の形を作ると、フォビドゥンに向かって撃つ様な仕草を見せる。

すると!!!

今まで操作を受信していなかった為、空中を漂っていたビットのブルー・ティアーズが突然息を吹き返し、フォビドゥンに向かってビームを放った!!!

「!?!? 悪あがき!!!」

しかし、フォビドゥンは驚きながらも、ゲシュマイディッヒ・パンツァーでビームを反らす。

だが……………

反らされたビームが軌道を変えて、再びフォビドゥンへと襲い掛かった!!!

「なっ!?!? ぐああああっ!?!?」

流星のフォビドゥンも、この攻撃を防ぐ事は出来ず、遂にビームの直撃を受ける!!!

BTエネルギー高稼働率時にのみ使えるフレキシブル偏向射撃。

セシリアはこの土壇場で物にしたのである。

「この……屑野郎おおおおお……」

しかし、流石にその1撃だけでフォビドゥンを倒す事は出来ず、フォビドゥンはセシリアに向かってフレスベルグを放つ。

(これまでですわね……でも、一矢報いましたわ)

潔い諦めの顔をするセシリア。

しかし……

「ドリルシールド!!」

その間に割って入ったグレンラガンが、ドリルを傘の様に開いたドリルシールドで、フレスベルグを受け止めた!!

「!?!」

「!?! 神谷さん!?!」

その姿を見て、セシリアの飛びかけていた意識が急激に覚醒する。

「何満足した顔してやがる! セシリア!?!」

と、グレンラガンはセシリアを押さえ付けていたニーズヘグを外しながらそう言う。

「えっ？……」

「まだアイツに勝ってねえだろ！ お前もグレン団の一員なら、一矢報いたぐらいで満足すんじゃないやねえ！！ 岩に噛み付いてでも勝利を奪い取りやがれ！！ それがグレン団魂だ！！」

グツと拳を握ったポーズを取りながらそう言い放つグレンラガン。

「……………」

すると、それを聞いていたセシリアの心に、再び闘志が燃え上がる。

「申し訳ありません、リーダー……………私とした事が、グレン団の魂を失念しておりましたわ」

セシリアは今度は不敵な笑みを浮かべて、血を流す右腕を押さえながら立ち上がる。

その姿は如何見ても満身創痍だが、とても美しく見えた……………

「ウザイ……………ウザイウザイウザイ……………ウザイんだよーっ！ー！」

とそこで、フォビドウンが痺れを切らしたかの様に、2人へと襲い掛かる。

「行くぜ！ セシリアー！！」

「ハイ！ 神谷さんー！！」

とグレンラガンとセシリアはそう言い合い、腕を交差させた!!
すると!!

緑色の光が、グレンラガンとセシリアを包み込む!!

「!?!? うわっ!?!?」

その眩しさに思わず動きを止めるフォビドゥン。

「!?!? コレは!?!?」

「まさか!?!?」

「嘘っ!?!? まさかセシリアとも!?!?」

それを目撃したシャル、ラウラ、鈴が驚きの声を挙げる。

やがて光が弾けると、そこには……

『グレンラガンがブルー・ティアーズを装着している』様な姿のマ
シンが在った!!

「紅蓮の炎が空を焦がし!!」

「蒼き雫が水面を打つ!!」

「『水炎合体!!』」
すいえん

『グレンラガンがブルー・ティアーズを装着している』様な姿のマ

シンは、そこでポーズを取る。

「『ラガンティアーズ』!!!」

「俺を！」

「わたくし私を！」

「誰だと思っていやがる おりますの !!!」

『グレンラガンがブルー・ティアーズを装着している』様な姿のマ
シン…………… 『ラガンティアーズ』から、神谷とセシリアの叫びが木
霊する。

「……………ウザイって言ってんだろ!!!」

だが、そんな名乗りも聞いていないかのように、フォビドゥンはニ
ズヘグを拾い上げると、ラガンティアーズに斬り掛かる。

「フンッ……………」

だが、ラガンティアーズはそのニズヘグの刃を片手で受け止める
!!!

「!?!」

「ウザイ、ウザイだ、馬鹿の1つ覚えみたいに言いやがって……………
熱い魂の分からねえテメエに……………」

「負けはしませんわ!!!」

神谷とセシリアの声が、再び響き渡ると、ラガンティアーズはニーズヘグの刃を握り潰した！！

「なっ！？」

「オラアッ！！」

驚くフォビドゥンに、ラガンティアーズは喧嘩キックを叩き込む！！

「グハッ！！」

「行くぜ！ ブルー・ティアーズ！！」

と、神谷のそう言う叫びが響き渡ったかと思うと、ラガンティアーズからビットのブルー・ティアーズが分離した！！

「効かないんだよ！！」

偏向させてやろうと、ゲシュマイディッヒ・パンツァーを構えるフォビドゥン。

しかし何と！！

ラガンティアーズから放たれたビットのブルー・ティアーズは、自らゲシュマイディッヒ・パンツァーへとぶつかって来た！！

「！？ 何っ！？」

フォビドゥンが驚きを示した瞬間……………

ビットのブルー・ティアーズが高速回転！！

ドリルとなってゲシユマイディツヒ・パンツァーに減り込んで行き、遂には粉々に打ち砕いた！！

「嘘だ！？ ビットにそんな使い方なんて!?」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

驚愕していたフォビドゥンに、ラガンティアーズの拳が叩き込まれる！！

「ガフツ!?」

「「「「「「「「「「「「」

ラガンティアーズは拳を叩き込んだ瞬間に腕のドリルを出現させる必殺パンチ『スカルブレイク』を炸裂させ、フォビドゥンのボディの装甲を粉碎する！！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「神谷さん！ 一気に決めますわ!!」

「おっしやあっ!!」

と、セシリアと神谷の声が響き渡ると、ラガンティアーズの胸に装着されていたグレンブーメランが外れ、ラガンティアーズの右手に納まる。

で果敢に攻める一夏を箒。

しかし、相手の装甲の厚さもあり、余りダメージを与えられずに居た。

「クツ！ まだ倒れんのか!?!」

「クソ！ もうエネルギーが……………箒！ 絢爛舞踏だ！ エネルギーの補給を頼む!?!」

と、エネルギーが残り少なくなっていた一夏が、箒に向かってそう叫んだ!?!

「!?! ま、待ってくれ、一夏！ アレはそう簡単には使えんのだ!?!」

それを聞いた箒が焦った様な声を挙げる。

機体のエネルギーを増幅させる紅椿の単一仕様能力だが、箒は未だにその力を扱いあぐねっていた。

ワンオフ・アビリティ

使えないワケではないのだが、まだ自由自在に発動出来るまでには至っていないのである。

「絢爛舞踏を使うには、まだ全ての意識を集中させねばならん。今の状況では……………」

「なら！ 俺がその集中の時間を稼ぐ！ その間に頼む!?!」

「!?! 馬鹿な!?! 危険過ぎる!?!」

「舐めるなよ！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

危険だと言う筈に、一夏はそう言い返す。

「……………分かった。頼む一夏！」

「任せとけ！ さあ来い！ ウスノ口野郎！ 俺はコツチだ！！」

一夏はグランドの周りを飛び回り、注意を惹く。

「……………」

それを見た後、筈は目を閉じて意識を集中させ始める。

(あの時と同じ気持ち……………私は……………私は一夏と共に戦いたい……………力になりたい……………応えろ！ 紅椿！！)

と、まるで念じる様に心の中でそう呟いた瞬間！！

紅椿が金色の光を放ち始めた！！

「！ 良し！！ 一夏あつ！！」

「待ってたぜ！ 筈！！」

筈の声を聞くと、一夏はグランドの顔に、荷電粒子砲を撃ち込んで隙を作る！

「ぬっっっ！！？」

「箒いつ!!」

「受け取れ! 一夏!!」

一夏が箒に向かって手を伸ばしながら飛び、箒も一夏へ手を伸ばしながら飛ぶ。

そして、あとちょっとでその手が触れ合おうとした瞬間……

2人に、巨大な影が覆いかかった。

「?」

一夏と箒が上空を確認すると、そこには……

自分達目掛けてその巨体を落として来るグランドの姿が在った!!

「なっ!?!」

2人が驚きの声を挙げた瞬間に、4足歩行形態となっていたグランドの前足が、一夏と箒を押し潰す様に押し掛かる!!

「うわあああああああ……っ!?!」

「あああああああ……っ!?!」

「ぬっっっっっっんっ!?!」

そのまま自重を掛け、一夏と箒を押し潰そうとするグランド。

絶対防御で守られているが、凄まじい圧力が2人の身体に襲い掛かる。

「ク、クツソオツ!!」

「い、一夏……………手を……………」

しかし、そんな状況で、箒は一夏にエネルギーを供給しようと必死に手を伸ばして来る。

「!?!? 箒!!」

それに気づいた一夏も、必死に箒へと手を伸ばす。

「! めづつづつづんっ!!」

それに気づいたグランドは、一気に2人を押し潰そうと更に自重を掛ける。

「ぐああああああああー……………っ!?!?」

「い、一夏ああああああああ……………っ
!?!」

悲鳴を挙げながらも、2人は必死に相手へと手を伸ばす。

そして、遂に触れ合える距離まで迫った瞬間……………

「あ……………」

遂に耐え切れなくなったのか、箒が気を失い、寸前まで伸びていた手がダラッと落ちる……

「!? 箒!」

ギリギリのところでもその手を掴み、箒へと呼び掛ける一夏。

「……………」

しかし、気を失った箒は返事を返さない。

「!?」

その瞬間に、紅椿のエネルギーが白式へ流れ込んで来たが……

それと同時に、一夏の中で、『何か』が切れた……

「うわあああああああああああ—————
ーっ!」

凄まじい雄叫びを挙げたかと思うと、信じられないパワーでグラウンドの前足を押し始める一夏!

そして何と!!

そのままグラウンドを持ち上げたではないか!!

「!? めっっっっ!」

流石のグラウンドも、その状況に驚きを隠せなかった。

「でりゃあああああああああーーーーーっ!!」

一夏はそのまま、グラウンドをアリーナの観客席目掛けて投げ飛ばす
!!

「うおおおおっ!?!」

グラウンドはアリーナのバリアを突き破って観客席に叩き付けられる
!!

「ちよっ!?! 何事!?!」

「何が起こった!?!」

「一夏!?!」

鈴、ラウラ、シャルがそれで一夏達の様子に気づく。

「はあああああああああっ……………!!」

と、一夏が気合を入れるかの様な声を立てていると……………

白式から、まるで絢爛舞踏を発動させた紅椿の様に金色の光が放た
れ始める。

「……………っっ……………!?! 一夏!?!」

その光で目を覚ました筈が、一夏の状態を見て驚きの声を挙げる。

「許さない……………お前だけは……………絶対に！　許さなああああああああああー……………いつ……………」

グラウンドを睨みながら、一夏は怒りの咆哮を響かせる。

その瞬間！！

白式の装甲部分の彼方此方が展開し、金色の粒子を放ち始めた！！

「！？　アレはまさか！？　展開装甲！？」

驚きの声を挙げる筈。

その機能は、紅椿の展開装甲と酷似している。

更に変化は続き、ISスーツが紺色から彼の怒りを表すかのような赤色へ……………

そして白式のアーマー自身も、金色に染まり出した！！

「うおわあああああああああー……………っ！　ふんっ！　ふんっ！　トアアアツ……………」

雪片式型にエネルギーの刃を展開すると、一夏は演武の様な動きを取り、ポーズを決める。

彼の凄まじい怒りの力に反応し、白式が見せた新たな姿……………

『白式・スーパーモード』だ……………！！

白式のスーパーモードの力に、箒は軽い戦慄を覚える。

やがて、フォビドゥンとグラウンドがやられたのを見た残りのガンメン達は撤退を開始。

すっかりボロボロになったアリーナに、漸く静寂が戻ったのだった

……

第36話『私とした事が、グレン団の魂を失念しておりましたわ』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

フォビドゥンと交戦するセシリアだったが、フォビドゥンの持つビームを曲げる盾・ゲシュマイディッヒ・パンツァーに苦戦するセシリア。

一夏と箒も、圧倒的パワーと装甲を誇るグラントに手を焼かされる。

追い詰められたセシリアだったが、土壇場でフレキシブル偏向射撃を物にする。

更に、神谷の激を受けて、満身創痍ながらも立ち上がる。

そして！！

グレンラガンと合体し、新たなる合体形態『ラガンティアーズ』となる！！

接近戦と遠距離戦両方を熟すラガンティアーズの前に、フォビドゥンは撃破される。

1421

一方、グラントと戦っていた一夏と箒の方でも……………

箒がやられ、そのよって生じた一夏の激しい怒りが、白式の『スーパーモード』を発動させる！

必殺のシャイニングフィンガーソードで、グラントを1撃の名の撃破するのだった。

では、ご意見・御感想をお待ちしております。

第37話『ならばその強さ………試してやろう!』 (前書き)

PVが40万アクセスを超えました。

皆様、ご愛読ありがとうございます。

これからも、『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく
お願いします。

第37話『ならばその強さ……試してやるっ！』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第37話『ならばその強さ……試してやるっ！……』

キャンボール・ファストの日の夜……

一夏と千冬の家……

即ち織斑家のリビングにて……

「せーのっ!!」

「一夏、お誕生日おめでとっ!!」

シャルの声を合図に、一夏の誕生日を祝いに駆け付けた一同は、一斉にクラッカーを鳴らした。

「お、おう。サンキュ……でも、この人数は何事だよ……」

若干照れた様子を見せる一夏だが、かなり集まった人数に思わずそう呟く。

因みに、今居る人物は神谷、篝、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、楯無、のほほん、虚、弾、蘭等など……

それ程広くないリビングは、パンク寸前だった。

「馬鹿野郎! 一夏!! 折角お前の誕生日を祝おうと集まってくれた連中だぞ!! 先ず礼を言うのが先だろうが!!」

と、そんな事を呟いた一夏に、神谷がそう言い放つ。

「あぁと、そうだった……皆、今日は本当にありがとう」

そう言われて一夏はハツとし、皆に向かって深々と頭を下げる。

「もう、一夏さん。主役がそんなに頭を下げないで下さい」

そんな一夏の姿を見たセシリアがそう言って来る。

「ああ、ワリイ……………ところでセシリア。本当に怪我は大丈夫なのか？」

「ええ、この通り大丈夫ですわ」

服の袖を捲ると、傷1つ付いてない右腕を見せてそう言うセシリア。

「そっか……………なら良かった」

そう言うと、一夏は安心した表情を見せる。

フォビドゥンとの交戦中に負傷したセシリアだったが、ラガンティアーズから分離した際に、何故が怪我が治っていたのである。

それだけでは無く、激しく損傷していた筈のブルー・ティアーズも、まるで新品同様に修復されていた。

リーロン曰く、グレンラガンと合体した際に螺旋力を浴びた影響だと思われる、との事である。

「それにしても……………まさか獣人の捕虜が出るなんて、思いも寄らなかったな」

「確かにそうだな……………」

一夏の呟きに、ラウラが同意する。

実は昼間の襲撃の後……………

ジギタリスがグレン団に投降したのである。

曰く、誇りの為とは言え、自軍に刃を向けたケジメだそうだ。

千冬や真耶は困惑し、当初は日本政府に引き渡す事も考えたが……………

「アイツを如何にかするんなら！ この天上 神谷様に断わってからにしてもらおうか！！」

と言う神谷が強引に押し通し、止むを得ずリーロンが特設した檻に鎖で拘束して放り込む事にした。

「これですりでもロージェノム軍の情報が得られると良いんだけど……………」

シャルがそう呟くと……………

「オイオイ、お前等！ 今日は誕生日なんだぞ！！ そんな話は置いておけ！！ 今日は兎に角騒ぐぞお！！！」

神谷が誕生日会で何小難しいこと話してやがると言う様に、そう言うて来た。

「か、神谷あ……………」

「ま、確かにそうだな。昼間大変だったし、それを忘れる意味でも騒ごうか。皆ー！今日は無礼講で行こうー！」

「「「「「おーっ！！」「」「」」」」」

そのまま一同は、昼間の騒ぎを忘れるかの様に騒ぎ始める。

そして馬鹿騒ぎが盛り上がって来たところで、一同から一夏へのプレゼントが送られ始めた。

蘭からは、手作りケーキ。

鈴からは、手作りラーメン。

セシリアからは、イギリス王室御用達のメーカー『エインズレイ』の高級ティーセットと彼女が普段から愛飲している一等級茶葉。

シャルからは、神谷と一緒に選んだゴールドホワイトのフルスペース腕時計。

ラウラからは、彼女が愛用していた軍用ナイフ。

弾からは、戦国スタイリッシュゲームの最新作。

楯無からは、お姉さんの抱擁（他のメンバーに嫉妬の目で睨まれたのは言うまでも無い）

そして算からは、（こっそり自分とお揃いにした）着物をプレゼントされた。

と、用意されたプレゼントが渡されたと思った瞬間……

「一夏！ 実は俺も独自にプレゼントを用意して置いたんだ！ 受け取れ！！」

神谷が、シャルと共同で選んだ腕時計の他にも、コッソリと用意しておいたサプライズを渡して来た。

「えっ？ アニキから！？」

「神谷が！？（だ、大丈夫かな？）」

驚き一夏と、彼のセンスを知っている為若干心配になるシャル。

一夏がプレゼントの包装を解いてみると、中から出て来たのは……

「！？ コレ！！ アニキのマント！？」

出て来たのは、神谷が普段から身に着けている背中にグレン団のマントが入った炎を思わせる模様をした紅蓮のマントだった。

「おうよ！ 作れるって仕立て屋を見つけたのには苦労したぜ！！」

「ほ、ホントに良いの！？ アニキ！？」

思いがけないプレゼントに、一夏は思わず小刻みに震え出す。

「あたりめえだろ！ 一夏！ お前は自分を誰だと思ってやがる！！」

「ありがとう！ アニキ！！ 本当に嬉しいよー！！」

一夏は今までのどのプレゼントよりも喜びを露わにする。

「」「」……「」「」

そんな一夏を、篝、セシリア、鈴、ラウラ、蘭は、ジト目で睨みつけるのであった。

一方、その頃……

IS学園・地下にて……

「……………」

鎖で縛られ、特設された檻に入れられたジギタリスは、薄暗い中でまるで瞑想しているかの様に目を閉じている。

と、そこへ……

「オッサン！」

そう言う声が響いたかと思うと、獣人の状態のティトリーが姿を現した。

「……………ティトリーか」

それに反応し、目を開けるジギタリス。

「何だよ、オッサン！！ 何やってんだよ！！」

「見ての通りだ……………俺は誇りの為にロージエノム様への背信行為を行った……………そのケジメを着けたまでだ」

「な、何言ってるんだよ！ そんなのオッサンと神谷の勝負に割り込んで来たアイツ等が悪いんじゃないか！！ あの勝負だってオッサンが……………」

「いや……………あのまま戦っていても、俺は負けていただろう」

「ええっ!?!」

ティトリーはジギタリスの言葉に驚きを露にする。

「天上 神谷……………四天王様が懸念されていた通りの奴……………そして敵ながら見事な心意気を持った男だ。お前が惹かれているのも分かる」

「なっ!?! ア、アタシは別に……………兎に角! そんな檻! オツサンならすぐ出れるだろう! 監視とはアタシが何とかしといたから、早く逃げて!?!」

「……………逃げて如何する?」

「!?! ど、如何するって……………」

「どの道、ザウレグではグレンラガンに歯が立たん。今は機を待つとしよう……………お前の『メガヘッズ』が完成するまでな」

「!?! 『メガヘッズ』が!?!」

『メガヘッズ』と言う言葉を聞いたティトリーの顔色が変わる。

「『メガヘッズ』と……………あの機能』が完成すれば……………グレンラガンにも対抗できるやもしれん。今は耐えるのだ……………さ、もう行け」

「オツサン……………クッ!」

ティトリーは一瞬複雑そうな表情を浮かべると、ジギタリスの前から去って行く。

「……………益々人間の様になっ たな、ティトリー」

そんなティトリーの事を見送ったジギタリスの表情も、嬉しさと寂しさが入り混じった複雑な表情であった……………

(えーと、楯無さんが缶コーヒーで筍がお茶。鈴がウーロン茶でシヤルがオレンジジュース。ラウラがスポーツ飲料でセシリアが紅茶。そんでアニキと弾が牛乳つと……………)

一夏が、足りなくなったジュースを補給している。

当初は主役にそんな事はさせられないと他の面子が行こうとしていたが、幾ら主役でも一方的に世話になるのは男としてのプライドが許さなかった一夏は、自主的に志願したのだ。

「よし、こんなモンかな」

一通り飲み物を買って、家へ戻ろうとする一夏。

「……………織斑 一夏よ」

するとそこで突然、自分を呼ぶ声が聞こえて来る。

「!? 誰だ!?!」

一夏は驚きながら周りを見回すが、何処にも人影は見えない……………

「? 誰も居ない?……………」

「此処だ、織斑 一夏」

と、再びそう言う声が響いたかと思うと、自販機の明りで出来ていた一夏の影の中から、シュバルツ・シュヴェスターが現れた!

「うわあっ!?! シュ、シュバルツ・シュヴェスター!?!」

とんでもない場所から現れたシュバルツに、一夏は驚愕する。

「織斑 一夏……………お前は今日の戦いで、新たなる力を目覚めさせたな」

しかし、そんな一夏の驚きなど知らず、シュバルツはそう問い質してくる。

「お、おう……………アンタも見てくれたのか？ 凄かったろう、俺のスーパーモード」

一夏は自慢げにそう言う。

本人の才能に加え、様々な実戦経験や箒達の特訓もあり、ISを使い始めてまだ半年も経っていないと言うのに、一夏の腕はそんなじよそこらのIS乗りよりも上がっていた。

だが……………

「愚か者が！ あの様な力！ 力とは呼べんわ！！」

シュバルツは得意げになっていた一夏に向かってそう言い放つ。

「なっ！？」

思わぬシュバルツの言葉に、一夏が驚いていると……………

「只怒りに任せ力押しする……………そんな事は猪にでも出来る！！」

舐められている事に、一夏の心には怒りが湧き上がって来る。

「むんっ！！」

と、その隙を衝き、シュピーゲルは両腕のシュピーゲルブレードを交差させる様に振るい、一夏の胸を×の字に斬り付けた！！

「！？　ぐああっ！？」

「如何した！？　隙だらけだぞ！！」

挑発するかの様にシュピーゲルがそう言い放ったかと思うと、飛び蹴りを繰り出して来る。

「！？」

咄嗟に防御姿勢を取り、腕で防ぐ一夏だったが……

「ウラララララララララー……ッ！！」

シュピーゲルはそのまま両足での連続蹴りを繰り出して来る。

「うわあああっ！？」

腕に鈍い痛みが連続で走り、一夏は後ろへ押されて行く。

「らああっ！！」

と、シュピーゲルは最後の蹴りを一夏の横っ面に叩き込む！！

「??？」

「見る！ 一夏！！！」

何をする気だと一夏が首を傾げていると……………

シュバルツはその日本刀を居合いの様に一閃。

そして再び鞘に納め、独特の音を立てて納刀したかと思うと、何と！！

彼の前に有った街路樹の幹が切断され、地面に倒れた！！

「!？」

「己の腕がどれ程のものか、この刀に尋ねるが良い。私の言葉が誤りだと思うのなら、何時でも向かって来い。相手になってやる」

そう言うと、シュバルツはその刀を一夏に投げ渡し、その場から去り出す。

「ま、待て！！！」

一夏が後を追おうとしたが、シュバルツは煙と共に姿を消してしまふ。

「クウツ！！……………」

「一夏！！！」

「オイ、何があつた!!」

と、そこで……

騒ぎを聞き付けた箒や神谷達が、慌てて駆け付けて来た。

「!? コレは!?!」

「一夏さん! 一体何がありましたの!?!」

「……………」

ラウラが驚きの声を挙げ、セシリアがそう尋ねて来るが、一夏はシユバルツが残した刀を見ながら、惘然とした表情を浮かべている。

「クソ! クソ! クソオツ! アイツは一体……………何だつてんだあ!?!」

とそこで、自棄になつたかの様に、刀を鞘から抜くと、シユバルツが倒した街路樹の隣に在つた街路樹へと斬り掛かつて行つた。

だが、一夏の振るつた刀は、僅かに街路樹の幹に食い込んだだけで止まってしまふ。

「なっ!?!」

一夏が驚きの声を挙げる。

それもその筈。

何故なら、シュバルツが残したその刀の刃は……

錆付いている上に刃毀れしてボロボロだった!!

「何？ その刀？」

「そんな刃では木どころか大根も斬れはせんぞ」

それを見た鈴と篤がそう言うて来る。

「ア、アイツは…… アイツは本当にこんな刀で……」

シュバルツの底知れぬ实力を知り、一夏は戦慄する。

「一夏？」

「一体全体如何したってんだよ？」

シャルや神谷の問い掛けにも答えず、一夏はただ、ボロボロの刀を持って立ち尽くしていたのだった……

UJU

第37話『ならばその強さ………試してやろう!』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

キャノンボール・ファストは中止され、ジギタリスは初の獣人の捕虜となる。

そんな中で、昼間の騒動を忘れるかの様に、神谷達は一夏の誕生パーティーで盛り上がる………

しかし、その最中………

突如現れたシュバルツが一夏に襲い掛かった!

スーパードモードで応戦しようとした一夏だったが、何故か発動させる事が出来ず、シュバルツに負けてしまう………

シュバルツはボロボロの刀で大木を斬って見せ、一夏にもやってみると言って去って行った。

果たして、シュバルツの真意は何か?

さて、いよいよ次回からは専用機タッグマッチ編。

別名、更識 簪編です。

例のよって、大幅な改変が入ります。

特に簪ちゃんには+ の様子が加わる予定ですので、予めご了承下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第38話『その……妹をお願い!!』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第38話『その……妹をお願い!!』

キャノンボール・ファストが行われた日……

そして、一夏の誕生日の翌日の夕方……

「シュバルツ・シュヴェスターに襲われただと!？」

「ああ、如何もそうらしいな」

寮の食堂で夕食を取っている一夏を除いた一同の中で、一夏から昨日何があったのかを聞いた神谷から事情を聞いた篤が、そう驚きの声を挙げる。

他の一同も大なり小なり驚きを露わにしていた。

「如何言う事よ! アイツ味方じゃなかったの!？」

「いや、抑々正体不明に奴だ……信用する方が間違っていたのだ」

鈴が意味が分からないと言う様に声を挙げ、ラウラは声に若干殺気を帯びる。

「ですが……私にはあのお方が理由も無く一夏さんを襲う様な真似をするとは如何しても思えません」

だが、シュバルツから助言を受けているセシリアは、信じられないと言う意見を挙げる。

「それに、シュバルツさんは別に一夏の命を取る様な事はしなかったんだよね？」

シャルもそう意見を言って来る。

「それは……………そうもかしれんが……………」

「それで、肝心の一夏は？」

ラウラが言葉に詰まっていると、ティトリーがそう尋ねて来た。

「シュバルツの野郎から渡されたポロポロの刀で木を斬ろうと躍起になってるぜ。完敗したのがよっぽど応えたみてえだな」

「早朝や昼休みにも同じ事やってたよ……………お昼ご飯も食べないで」

神谷がそう言うのと、シャルも思い出した、そして心配する様な声を挙げる。

「こうしちゃ居られないわね……………アタシも一夏の特訓を手伝って来るわ！！」

「！ な、なら私も！！」

「私もだ！！」

と、鈴、セシリア、ラウラが、食事も半ばに一夏の特訓を手伝いに行こうとする。

「止めとけ」

だが、神谷がそれを止めて来た。

「!?!? 神谷さん!?!?」

「何故だ!?!?」

「そうよ、如何してよ!?!? 大体アンタも、兄貴分のクセに知らんぷりしてるって如何いう事よ!?!?」

それを聞いたセシリア、ラウラ、鈴は、神谷に向かって抗議の声を挙げるが……

「男にやなあ………どんなに不利でも、1人で戦わなきゃならねえ時がある………今一夏は自分自身と戦ってるんだ。他人が如何こう言っつてやれる問題じゃねえ。少し吹っ切れるまでは放っつておいてやれ」

神谷は夕食の牛丼を頬張りながらそう返す。

「「「「「」」」」」」

しかし、篤、セシリア、鈴、ラウラは理解はしたが納得はしていない表情となる。

「……………」

と、そんな中で、ふとティトリーが食事の手を止めて、ポーツと出ます。

「? ティトリー? 如何したの?」

「ニヤツ!? な、何が!？」

シャルに声を掛けられて、ティトリーは驚きの声を挙げる。

「いや、何かボーツとしてみたいだったけど」

「べ、別に! な、何でも無いよ! ニヤハハハハツ!!」

ティトリーは明らかにバレバレの誤魔化しをする。

「……………そう。なら良いんだけど」

しかし、その姿にシャルは男装していた頃の自分の姿を重ね、深くは追及しなかったのだった……………

そして夕食が終わり……………

篤達は特訓から帰って来た一夏をもて成そうと、其々に手料理を作
って、彼と神谷の部屋に集まって、一夏の帰りを待っていたが……………

夜の10時を回っても一夏は帰って来ず、仕方なく手料理を備え付

「内容次第だな。お前の頼みつつと碌な事じゃない気しかしねえからな」

止むを得ず、神谷に話そうとする楯無だったが、これまでの事を踏まえ、神谷はそう釘を刺して来た。

「もう！ 真面目な話なんだよ！ お願いだから聞いて!!！」

その言葉に怒る様な様子を見せる楯無だったが、それでもお願いと言って話している辺り、如何やら本当に真剣な話の様である。

「…………… 一体どんな話だ」

それを感じ取った神谷は、話を聞く姿勢を取った。

「実はね、その……………」

何やら言葉に詰まる楯無。

何時もの神谷と同じ唯我独尊な彼女らしくない。

「？ なんだよ？ ハッキリ言え」

煮え切らない楯無の態度に、神谷は急かす様にそう言う。

「その…………… 妹をお願い!!！」

「ハッ？」

そして、漸く楯無から出た言葉を聞いて、神谷は首を捻るのだった
……

「へえ、オメエに妹が居たのか？」

「そう。名前は『更識 簪』。あ、コレが写真ね」

互いに椅子に座って向かい合いながらの状態に移った神谷と楯無の内、楯無がそう言って、携帯電話の写真を神谷に見せて来た。

そこには、楯無に良く似ているが、特徴的な髪飾りを付けて、メガネを掛けた、何処と無く陰りのある少女が写っている。

「へえ？ 流石姉妹、似てるな………で？ その妹が如何したんだ？」

まどろっこしい話は苦手な為、神谷はスパッと本題に入る。

「実はね………昨日のキャノンボール・ファストでの襲撃を受けて、各専用機持ちのレベルアップを図る為に、今度全学年合同のタッグマッチを行うのよ」

「へえ……………楽しそうじゃねえか」

イベント好きな神谷は、その話を聞いてワクワクしているかの様な様子を見せる。

「それでね……………そのタッグマッチで、一夏くんか神谷くんが簪ちゃんと組んで欲しいの」

「俺が一夏が？ 何でだよ？」

「その、えっとね……………実はその、私の妹って……………」

楯無はまたも言葉に詰まる。

と言うよりも、言葉を選んでいる感じた。

「性格がちよっとネガティブって言うか……………暗いのよ」

「本当にお前の妹なのか？」

楯無の性格からはイメージ出来ない彼女の妹の性格に、神谷は思わずツッコミを入れる。

「いや、その……………そうだったのにはワケがあるって言うか……………」

「ワケ？」

神谷が首を傾げると、楯無はボソボソと語り出し始める。

「あの子ね…………私にコンプレックスを感じてるみたいで？」

「コンプレーク？」

「そうそう、牛乳掛けて食べると美味しい……………って違うう！
コンプレックス！ 劣等感よ！ 劣等感！」

1人ボケ、1人ツッコミをする楯無だが…………

「劣等感……………って何だ？」

そこで更に神谷はボケ倒す。

「……………まあ、貴方そんなモノ感じた事なさそうだもんね」

呆れる様に、楯無は溜息を吐きながら頭に手を当てた。

「まあ、何て言うか……………私って何でもそつなく熟すし、才能もあるでしょう？ それで姉と比べて自分は駄目な子だって思ってるのよ」

「くだらねえな。楯無は楯無、妹は妹じゃねえ」

「それはそうだけど……………世の中、神谷くんみたいに芯の強い人ばかりじゃないのよ」

あっけらかんと言う神谷に、楯無はそう返す。

「……………」

そこで、神谷は何やら考える素振りを見せる。

そして……………

「OK、良いぜ。取り敢えず、一夏に方は明日話してからだが、俺の方は引き受けた」

「ホント！？ ありがとう。流石グレン団の鬼リーダー……………」

「但し！ 1つ条件が有るぜ！！」

「えっ？ 条件？」

引き受けてくれた事に感謝する楯無だったが、神谷がすぐにそう言ったのを聞いて、驚いた表情になる。

「オメエも妹に歩み寄る努力をしな」

「えっ？」

「当たり前だろ。要するにオメエは拗れてる妹との仲を改善したいと思ってるんだろ？ ならお前が直接出るのは当然だろ」

「で、でも、私には生徒会や更識としての仕事……………」

「今までにそれに感けてたから妹との仲が拗れたんじゃないのか？」

「うぐっ！？」

核心を付いた神谷の正論に、楯無は何も言えなくなる。

「嫌なら、この話は無かった事にするぜ……………」

神谷はそう言うのと横を向き、机の上に足を投げ出して、両手を頭の後ろで組む姿勢を取る。

「……………」

楯無は、暫く思い悩む様な様子を見せていたかと思うと……………」

「……………」分かったわ。その条件を飲むわ」

やがて観念したかの様にそう言う。

「交渉成立だな」

「全く……………」IS学園の生徒会長を手玉に取るなんて、貴方ぐらいなものよ」

「当たり前だ！ 俺を誰だと思ってやがる！！」

呆れる様にそう言う楯無だったが、神谷からはお決まりの台詞が帰って来た。

「じゃあ、話はコレでお終いな。ふあああ……………」流石に夜更かしし過ぎたわね。それじゃあ、明日一夏くんに宜しくね」

時刻は既に深夜2時を回ろうとしている。

コレ以上は流石に明日の授業に響くと思った楯無は、そう言う引

翌日……………

すっかり寝過ぎ、大遅刻をしてしまった神谷と一夏は、千冬からこっぴどい説教を受ける事になる。

縮こまる一夏に対し、神谷は説教中にも爆睡。

千冬の胃を、ストレスで更に痛めつけたのだった……………

2時間目の休み時間……………

「やつほー。織斑くん。篠ノ之さん」

1組の教室に、薫子が姿を見せる。

「あれ、如何したんですか？」

2組からやって来ていた鈴を含めた何時ものメンバーで屯っていた一夏達の内、一夏が薫子の姿を認めると、そう尋ねて来た。

「いや、ちよつとね……織斑さんと篠ノ之さん……それとデ
ユノアさんと天上さんに頼みたい事があって」

「頼み？ 私と一夏にですか？」

「僕と神谷にも？」

自分と一夏に頼みと聞いた筈とシャルがそう尋ね返す。

(何だか妙に頼み事されるな……)

そして神谷は、昨日の楯無の一件を思い出し、内心でそう思う。

「うん、実はね……私の姉って出版社で働いているんだけど、専用
機持ち達と噂のグレンラガンに独占インタビューさせてくれないか
な？ あ、コレが雑誌ね」

そう言うと薫子は、姉が務めている出版社が発光しているティーン
エイジャー向けのモデル雑誌を取り出し、一夏達に見せて来た。

「えっと、あのー……この雑誌、ISと関係なくないですか？」

「ん？ ひよつとしてこういう仕事初めて？」

「如何いう事だよ？」

神谷がまどろっこしい言い方してないでスパツ言えとの感じで言う。

「えっとね、専用機持ちって普通は国家代表かその候補生のどちら
かだから、タレント的な事もするのよ。国家公認のアイドルってい

うか、主にモデルだけど。あ、国によっては俳優業もするみたいだけど」

「そうなのか？ 篝」

「わ、私に聞くな！ 知らん！」

お互いに芸能関係には疎い一夏と篝はそう言い合う。

「そう言や、前にセシリアが国でモデルしてるって話したなあ」

と、そこで神谷が思い出す様に、セシリアの方を見ながらそう言う。

「ええ、コレも代表候補生の務めの一環ですわ」

「うむ、私も広報課にポスターのモデルにされた事があるぞ」

セシリアが答えると、ラウラもそう言うて来た。

「はあ、良い御身分なこって……………シャル、オメエはそう言うのがあるのか？」

「あ、ううん。僕はホラ、性別を偽って代表候補生になってたから、そう言うのはやらなかったんだ」

「そうか……………」

あんまり話したくない話だろうと思いい、神谷はそこで会話を打ち切る。

「何よ、一夏。モデルやった事ないワケ？ 仕方ないわね、アタシの写真、見せてあげる」

「いや、いい」

「何だよ！！」

鈴は自分がモデルを務めた写真を一夏に見せようとしたが、即座に断られて、思わず一夏の頭を引つ叩いた！！

そして、携帯を開き、自分がモデルを務めた写真を見せようとする。

「でも、日本出身で何処の代表候補生でもない一夏や篤、それに神谷の取材は兎も角、フランスの代表候補生の僕にも取材したいって言うのはちょっと……………」

と、それを横目で見ながら、シャルが薫子にそう言う。

「あ、デュノアさんと神谷くんには、それはもっと上の方からの要請が来てるの？」

「もっと上？」

その言葉に首を傾げるシャル。

「うん、日本政府と国連から」

「ええっ！？」

薫子の口から語られた上の方が言うのが、まさか日本政府と国連だ

つたとは思っていなかったシャルは、驚きの声を挙げた。

「いや、ホラね……………世界中彼方此方、今もロージエノム軍との戦いが続いているじゃない？ 一応戦況は今のところ五分五分らしいけど、長期戦になったら人類側は不利だって言われるのよ」

今まで、IS学園延いては日本を襲撃してきたロージエノム軍は、神谷達グレン団の活躍で倒されている。

しかし……………

世界全体の戦況は膠着状態であり、長期化した場合、人類側が圧倒的に不利だと推察されている。

その為、近頃では軍・民間を問わず、不安が蔓延し、一部では土気崩壊や暴動を起こしているらしい。

「それで、ロージエノム軍相手に連戦連勝しているグレンラガンの事をもっと知らせて、不安を和らげようとしてみたい」

「それは分かりましたけど……………益々何で僕まで選ばれたのかが分からないんですけど……………」

「アラ？ デュノアくん知らないの？ グレンラガンの後ろ盾さん」

「グレンラガンの後ろ盾？」

薫子の口から出た聞きなれない言葉に、シャルはまたも首を捻る。

「デュノアくんって、結構有名なのよ。何時もグレンラガンの背中

を守って戦ってるから、そんな何時の間にかそんな渾名が付いてるのよ。他にも守護天使だとか、盾の女神だとか言われてるわよ」

「て、天使！？ 女神！？ 僕が！？」

あまりと言えばあまりな持ち上げぶりに、シャルは照れた様な様子を見せる。

「天使に女神か……成程な。お似合いだぜ、シャル」

一方の神谷はそれを聞いて、ニヤニヤと笑いながらシャルにそう言う。

「か、神谷まで！ もう止めてよー！！」

益々顔を赤く染めて照れまくるシャル。

「ハイハイ、御馳走様。そういうワケなんだけど、協力してくれるかな？」

と、薫子がそう言った瞬間に、休み時間終了を告げるチャイムが鳴り響く。

「あ、もう時間か……ゴメンね！ 放課後でまた聞きに來るから、考えといて……じゃー！！」

そう言い残すと、薫子は颯爽と去って行った。

その後、一夏に写真を見せるのに夢中になっていた鈴が千冬に引っ叩かれ、神谷に天使や女神の名がお似合いだと言われたシャルは、

その言葉が脳内で延々とリピートされ、授業にならなかったのだ。

その放課後……………

薫子は、取材を受けてくれたら報酬に豪華1流ホテルのディナー招待券（ペア用）を用意していた。

当初は、今は修行に忙しいから断わろうとしていた一夏だったが、ペアのディナー招待券と言う報酬に簿が飛び付き、神谷や千冬にも煮詰め過ぎるのは良くないと言われた為、半ば無理矢理参加させられる事になる。

勿論、神谷とシャルも特に断る理由が無かった為、引き受けたのだ。

その翌日……

専用機持ちの全学年合同タッグマッチの事が、SHRで正式に発表された。

その日の4時間目が終わっての昼休みに……

「神谷！　一夏！　食堂行こう！」

シャルが昼食に神谷と一夏を誘う。

「あ、悪い、シャルロット」

「今日はちよいと野暮用が有るんでな」

しかし、簪を専用機限定タッグマッチのパートナーに誘いに行く予定だった2人は断る。

「えっ？ そうなの？ 何野暮用って？」

「それがなあ……………」

「ちよっ！？ アニキ！ 話しちやうの！？」

事情を説明しようとし始めた神谷に、一夏が驚きながらそうツツコミを入れる。

「別に良いだろう。口止めされてるワケでもねえし」

「あ、それもそうか……………」

しかし、神谷のその言葉で、一夏も別に口尾止めされていない事を思い出し、シャルに簡単に事情を説明するのだった。

「楯無さんの妹と……………」

「そうなんだ。だから、これから誘いに行こうと思って」

「ふ〜ん……………」

一夏とそう遣り取りすると、神谷の方に向き直るシャル。

「神谷……………本当に楯無さんに頼まれたから、その妹さんと組むの？」

「ま、しゃーねえだろ。あの生徒会長が頭下げて頼んで来たんだ。引き受けなかつたら男が廃るってもんだぜ」

ティトリーの事もあり、若干浮気の気を疑っていたシャルは、神谷にそう問い質すが、神谷は堂々とそう返す。

その言葉に他意は感じられなかった。

「あ、うん……………そうだよね……………」

その言葉で、シャルは逆に神谷を疑った自分に自己嫌悪する。

「……………ゴメン」

「あ？ 何で謝るんだ？」

突然謝られて、神谷は首を傾げる。

「いや、その……………何となく」

「んだよそりゃ？ ま、いつか……………ああ、そうそう。簪って奴には俺が一夏の内どちらかが組めば良いんだ。向こうさんが一夏と組みたいって言ったら、俺はシャルと組むぜ」

「えっ！？ 本当！？」

「ああ。お前も一夏と同じで、俺が安心して背中を預けられる奴だからな」

神谷はニヤリと笑って、シャルにそう言い放つ。

(安心して背中を預けられる!! 神谷はそんなに僕の事を!!)

その言葉に、シャルは天にも昇る様な気持ちとなった。

「えへへへ……………」

「アニキ、そろそろ……………」

「おっと、そうだな。じゃあ、シャル。悪いが、俺たちちやもう行くぜ」

「うん……………頑張つてね……………」

若干惚けた顔でそう言い、教室を出て行く神谷と一夏を見送るシャル。

「はわ……………」

「でゅっちー。一緒にお昼行かない?」

とそこで、のほほんがシャルを昼食に誘う。

「はわ……………」

「でゅっちー?」

返事が無かったので、再度のほほんはシャルへと声を掛けるが……………

「はわ……………」

シャルは、惚けた表情のままポーツとしており、のほほんが目の前で手を振っても、全く反応を示さなかった。

「ありやりやゝ、まゝた自分の世界に入ってるのかな？」

それを確認したのほほんがそう呟く。

良く有る事なので、のほほんはそのまま友達と一緒に食堂へと向かう。

結局……………

シャルが正気に戻ったのは、それから10分後だった……………

一方、神谷と一夏は……………

途中で一夏をパートナーにしようとした鈴に出くわすと言うトラブルに見舞われながらも……………

シャルと同じ様に事情を説明して切り抜けようとしたものの、シャ

ルとは違い、鈴は承服しかねた。

だが、神谷が強引に押し通し、結局半ば強行突破する形で、如何にか1年4組の教室へ辿り着く。

「ふう。やっと4組に着いた」

と、一夏がそう漏らすと……………

「ああっ！ 1組の織斑くんだ!!」

「え！ 嘘々！ 何で!?!」

「よ、4組に御用でしょうか？」

途端に、その姿を発見した4組の生徒達が群がって来るが……………

「よう!」

「…………ゲエーツ!? 天上 神谷!?!」

神谷の姿を見るがいなや、蜘蛛の子を散らす様に踵を返して行った。

「俺は悪魔超人か何かか？」

「まあまあ、アニキ……………」

無然となる神谷に、一夏が宥める様に言う。

「あ、あのさ……………更識さんって居る？」

「……えっ!?!」「……」

一夏が若干遠巻きになって見ていた生徒達にそう尋ねると、生徒達は驚きの声を挙げた。

「更識さん、って……」

「『あ』?」「」

と、その瞬間に、一夏と神谷の進路を空ける様に生徒達は左右に広がり、クラスの1番後ろ、窓際の席が見える様になる。

「……………」

楯無と良く似ているが、若干幼さがあり、特徴的なアクセサリーとメガネを見に付けた生徒……………簪の姿がそこには在った。

購買で買ったパンを端に置き、空中投影ディスプレイを見ながら、一心不乱にキーボードを叩いている。

「へえ……………アイツか」

(暗い子だって聞いてたけど……………何だ。結構活動的じゃないか)

その姿を確認してそう呟く神谷と、内心で若干失礼な事を考える一夏。

「えっと……………もしかして、朝のSHRで説明された、専用機持ちのタッグマッチの相手として、更識さんを選んだ……………とか?」

「へッ！ 陰口なんて叩く奴は俺は大嫌いなんだよ！ 言いたい事があんなら正面から堂々と言や良いじゃねえか！！」

若干慌てる一夏だったが、神谷は平然とそう言い放ち、残っていた簪へと近づいて行く。

「あ！ アニキ！」

一夏も慌ててその後を追う。

「よっ！」

そう言いながら、簪の正面の席に後ろ向きに座る神谷。

「……………」

しかし、簪は無視してキーボードを叩き続ける。

「じ、ごんにちは……………」

「……………」

続いて一夏が右隣の席に座って話し掛けるが、やはり反応は返って来ない。

「おうおう。いきなり無視してくれるたあ、良い度胸じゃねえか」

「アニキ！ それじゃ喧嘩腰みたいだよ！」

若干言葉使いに問題が有ると思い、神谷を止める一夏だが……………

「……………」

やはり簪の反応は無い。

彼女からは独特の雰囲気を感じられる……………

まるで盗まれた過去を探し続けて、見知らぬ街を彷徨う感じた。

もしくは、炎の匂いが染み付いて、むせる様なのである

「あ、あのさ……………せめて返事ぐらいはしてくれないかな？」

そこで一夏が、簪の肩を掴む。

「!?!? キャアツ!?!?」

すると簪は、可愛らしい悲鳴を挙げて、椅子から滑り落ちた!

「!?!? ちよっ!?!?」

「オイオイ? 大丈夫か?」

慌てて立ち上がり、倒れた簪の姿を確認する2人。

「……………だ……………誰?……………何時の前に?……………」

簪は倒れたまま2人を見上げてそう尋ねて来る。

「えっ?」

「ひょっとして……今まで気づいていなかったのか？」

一夏と神谷が呆れる様な表情になる。

如何やら、作業にあまりにも没頭していた為、一夏と神谷の存在に気づいていなかった様だ……

コレが私と織斑 一夏と天上 神谷との初めて出会い……

そしてこの日を境に……

私の運命は劇的に変わって行く事となる……

その時私は、頭の片隅でそんな予感を感じていた……

今はまだ予感に過ぎない……

けどこの2人に付いて行けば、きっと行き着く……

私はそれを信じる事にした……

UJU

第38話『その……妹をお願い!!』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

いよいよ専用機タッグマッチ編。

簪ちゃんの登場です。

前回の後書きでも言った通り、うちの簪ちゃんには+の要素が入っています。

何かはもうお分かりですかね？

先へ進むごとに、段々とその要素が濃くなっていきますので、予めご了承ください。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第39話『俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第39話『俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！』

IS学園・1年4組の教室……

「……………」

神谷と一夏の存在に気づいて驚いた後、簪は再び机に座り直し、再びキーボードを叩く作業に没頭し始めていた。

「えっと……………改めて自己紹介するけど、初めまして。俺、1組の織斑 一夏。で、コッチが……………」

「IS学園に悪名轟くグレン団！ 男の魂、背中に背負い！ 不撓不屈の！ あ！ 鬼リーダー！ 神谷様たあ、俺の事だ！！」

一夏が改めて自己紹介し、神谷を紹介しようとしたところで、神谷はお馴染みの天を指差すポーズを取って、お決まりの口上を述べる。

「ア、アハハハ……………」

「……………」

何時もの事とは言え、思わず苦笑いする一夏に対し、簪は相変わらず涼しい顔で作業を続けている。

「……………知ってる」

と、そこで作業の手を止めずにそう呟く。

「……………」

しかし、それだけ言っただけで、後は再びの無言であった。

(か、絡み難い……………)

取り付く島も無しな簪の態度に、一夏はギャグ汗を浮かべる。

「よし！ それなら話ははええ。更識 簪！ 今度の専用機持ち
タッグマツチで、俺が一夏と組め!!」

だが、唯我独尊な神谷は、そんな簪の態度など気にせず、単刀直入
にそう言う。

「イヤ……………」

(うわ、即答……………)

簪は即座に断わり、一夏はまたもギャグ汗を浮かべる。

「遠慮すんな！ 俺が一夏と組めば、優勝は間違いなしだぜ！」

神谷は気にせずになんか言葉を続ける。

「……………嫌よ。それに貴方達、組む相手には……………困っていない……………」

「俺と一夏はお前と組みたいと思ってんだよ」

そんな2人の話し合いは、思いつきり平行線だった。

「……………如何して?……………ひょっとして……………姉さんに頼まれたの……………」

「？」

とそこで、簪は睨み付けるかのような視線を2人に向ける。

「そ、それは……………」

「まあ切欠はそうだな」

口籠る一夏だったが、神谷はアツサリとバラしてしまう。

「!?!」

それを聞いた途端、簪は怒っている様な表情となり、椅子を倒しながら立ち上がる。

「ちょ！ アニキ!!」

「帰って……………私は貴方達の……………『あの人』の力は借りない……………」

静かだが、ハッキリとした言い方でそう言う簪。

(姉さんを『あの人』呼ばわりか……………やっぱり姉妹中悪いんだな……………)

そんな簪の姿に、一夏は筭の姿を重ねる。

「まあ、話は最後まで聞け。楯無の野郎はお前と仲直りしたいと思ってるんだ。だが、切欠が掴めなかったもんだから、先ず俺達を使って、お前が姉貴の事を如何思ってるか探ろうとしたワケだ」

しかし、神谷はそんな簪の態度も気にせず言葉を続ける。

「……………嘘」

「嘘なんもんかよ。あの楯無の野郎が態々頭下げてまで頼んで来たんだぜ」

「……………もし……………仮にそうだったとしても……………貴方達とは組まない……………」

簪はハッキリと拒絶の意思を示す。

「そりゃそうだな。お前、姉貴の事……………嫌いなんだってな」

それでも尚、神谷は引き下がる様子を見せない。

「……………」

そう言われて、簪は再び黙り込んだ。

「何でも、楯無の野郎が優秀過ぎるからコーンフレークを感じてるとか……………」

「アニキ、コンプレックスだよ」

神谷の言葉の間違いにツツコミを入れる一夏。

「んなくだらねえ事は良いんだよ」

「！くだらない？……」

その言葉を聞いた簪の表情が、更に怒りに染まる。

「貴方に何が分かるの？……物心付いた時から何時も目の前に居て……何をして比較され……私の行く先行く先で幻の様に付き纏う……ただあの人の妹に生まれたという理由だけで……」

静かだが、ハッキリを怒気を含んだ声で、簪はそう言う。

(簪……)

それを聞いた一夏は、簪に対し同情の様な思いを感じる。

彼もブリュンヒルデである姉・千冬を持ち、コンプレックスとまでは行かないが、何かと比較される様な事は何度も有った。

最初は気にしていた事もあった一夏だが、神谷の影響もあり、今では笑い飛ばせる様な些細な事である。

だが、もし神谷と出会っていないければ、自分も簪の様になっていたかも知れない……

そんな思いが湧き上がる。

「簪……楯無さんが優秀なのは俺も良く知ってるよ。けど、簪は簪だろ？楯無さんじゃない」

気が付くと、一夏は簪に向かってそう言っていた。

(！一夏……………)

それを聞いた神谷は、一瞬驚いた様な表情をしたが、すぐに笑みを浮かべる。

弟分の成長を喜んで……………

「それに楯無さんになんて出来ない事もある。逆に、簪にしか出来ない事だってある」

「そんな……………綺麗事……………」

「綺麗事じゃない！」

そこで一夏も、簪と視線を合わせる様に椅子から立ち上る。

「俺には分かる……………簪には素晴らしい力が有る！！！」

「わ、私には……………そんな力は……………」

一夏が余りにも自信満々な態度な為、先程までの勢いは何処へ行ったのやら、簪は萎縮し始める。

「馬鹿野郎！ 良いか、簪！ 自分を信じるな！！！」

「えっ？」

「俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！！！」

簪に向かって、一夏は自分を親指で指しながらそう言い放つ。

それは、かつて……

一夏が神谷に言われた言葉だった。

「……………」

当の本人は、一夏がその言葉を言った事にニヤリツとした笑みを浮かべている。

「……………」

簪は、当然と言えば当然だが、呆気を取られた様な表情で固まっていた。

とそこで、昼休み終了間近を告げるチャイムが鳴る。

「あ！ もうこんな時間か……………」

見れば、逃げ出していた4組の生徒がチラホラと戻り始めており、教室の出入り口に固まっておっかなびっくり様子を窺っている。

「アニキ、一旦引き上げよう」

「しゃーねえな……………また来るぜ」

一夏と神谷はそう言う座って居た席を立ち、教室から出て行った。

出入り口に居た生徒達は、ササツと道を譲る。

「……………」

残された簪は、呆然とその場に立ち尽くしていたのだった……………」

その日の放課後……………」

IS整備室にて……………」

「……………」

簪は1人で黙々と、自分の専用機を組み立てている。

元々彼女の専用機は、日本の倉持技研が開発を進めていたのだが……

一夏と言うISを扱える男子が登場した途端、急遽白式を建造する事となり、開発やデータ収集に全ての技術者を盗られてしまったのだ。

その為、彼女はまだ組み立てられてもいなかった自分の専用機の部品を全て学園に送ってもらい、自分で組み立てる事にしたのである。

彼女の姉である楯無も、機体データを元に1人で今使っているミステリアス・レイディを組み上げており、彼女も自分1人で自分の専用機を組み上げる事で、コンプレックスを解消しようとしている。

だが、それはとても困難な道であった……

実は白式に取られたのは技術者だけでなく、部品もだったのである。

一夏の専用機があればほど早く完成したのは、簪の専用機から部品を貰っていたからでもあるのだ。

組み上げる為には圧倒的に部品が足りない……

だが、代替りの部品の発注は滞っている……

ロージェノム軍の影響で、毎日の様に軍属のISが損傷しており、部品は全てそちらに優先されて配送されているのである。

現在の戦況を考えれば、仕方の無い措置とも言えるが……

「……駄目……やっぱり部品が足りない……」

と、簪は不意に組み立ての手を止めるとそう呟く。

(でも……新しいパーツは入って来ない……如何すれば……)

悩む簪だが、今の彼女に如何にか出来る問題では無かった。

「……今日はココまでにしよう」

結局、今日に作業をココまでだと打ち切り、帰宅しようとする自分の専用機に背を向ける。

と、その時……

「へえ、コイツがオメエの専用機か？」

「打鉄やラファールに似てるけど、色々違うなあ」

「!?!」

後ろからそう言う声が聞こえて来て、驚きながら振り返ると……

自分の専用機をペタペタと触っている神谷と、それを見ている一夏の姿が在った。

「な、何してるの!?!」

簪は一瞬吃りながらも、2人に向かってそう叫ぶ。

「やあ、簪」

「ちよいとオメエの専用機がどんなモンか気になってな……………しかしこりゃ、色々と物が足りてねえんじゃねえか？」

片手を上げて簪に挨拶する一夏と、相変わらず簪の専用機をペタペタと触っている神谷。

「！ 触らないで！！」

簪はそう声を挙げると、神谷と自分の専用機の間割って入り、神谷を引き剥がす。

「とと……………何だよ。いいじゃねえか、別に。減るモンじゃねえし」

「……………」

そう言う神谷に、簪は睨み付ける様に視線を送る。

「やれやれ……………」

しかし、それを受けても、神谷は対して気にした様子も無く、肩を竦めるだけだった。

「コレ……………自分1人で組み立ててるのか？」

とそこで、簪の専用機を見ながら、一夏がそう尋ねる。

「……………だつたら……………何？」

「いや、凄いなあとと思って……………自分のISを1から組み立てるなんて、俺には真似出来ないしさ」

「この程度の事……………あの人もやってた……………」

「あの人って……………楯無さんも？」

「……………」

無言で肯定の意を返す簪。

(そう言えば、前にそんな事を聞いたな……………)

以前本人から聞いた事があつた事を、一夏は思い出す。

「しかつしコリヤ、全然出来てねえ様に見えるがなあ」

神谷が碌に組み立てられてもない簪の専用機を見て、ズケズケとそう言う。

「なあ、良かったら手伝おうか？ そしたら、タッグマッチで俺かアニキと組んでくれよ」

するとそこで、一夏がそんな事を提案した。

「要らない……………この機体は……………私1人で組み上げる……………」

だが、簪はそうキツパリと拒絶する。

「遠慮すんなって。こまけえ事は分からねえが、力仕事なら手伝えるぜ」

だが、神谷は相変わらず気にした様子も無くそう言う。

「要らないって言うて……………」

「まあまあ。そう言わないでよ、簪ちゃん」

「!?!?」

突然背後から聞こえて来た声に、簪は驚きながら振り返る。

「や、やあ……………どうも……………」

「やつほぐ、かんちゃん」

「こんにちは、簪様」

そこには若干気まずそうにしている楯無と、陽気そうに挨拶をするのほほん、そして何時もと変わらぬ態度の虚の姿が在った。

「……………何か用？」

簪は楯無を冷たい目で睨みながらそう言う。

「……………」

「かんちゃんのISの組み立て、手伝ってあげようと思って!?!?」

その視線を受けて、楯無は若干怯んだ様な様子となるが、のほほんが気にせずになんか言う。

「……………施しの積り？」

だが、簪は楯無を睨み付けたままそう言い放つ。

「うっ！……………」

「簪様、違います！ お嬢様は純粹に簪様の事を手伝おうと……………」

「……………」

楯無は更に怯み、虚は決してそんな事では無いと言うが、簪は楯無を睨み付けたままである。

「簪ちゃん……………」

実妹にそんな態度を取られて、流石の楯無の目にも涙が……………

「コラコラ！ 姉貴に向かってそんな顔する奴があるか！！」

浮かび上がりかけた瞬間！！

簪の背後に立った神谷が、簪の両頬を手で摘まんて軽く引っ張った！！

「！？ ふみゆ！？」

「ああ！ 素手でアニキを殴るなんて、無謀な！！」

それを見た一夏が、慌てて駆け寄り、簪の手を握って状態を見る。

「!?!?!」

イキナリ手を握られて、簪は赤面する。

「うん……………赤くなってるけど、対した事はないな。うん、大丈夫だ」

そんな簪の様子など気にせず、一夏は手の状態を見てそう言う。

「は、離して！！」

と、簪は強引に一夏に掴まれていた手を放す。

「うわっ、と!?!」

「……………」

そして、赤面した表情のまま一夏を睨み付ける。

「? どしたんだ? 顔赤いけど……………風邪か?」

しかし、その心情を一夏が理解出来る筈も無く、そんな言葉を投げ掛ける。

「!?!……………何でも……………無い……………」

「??？」

簪はプイツと顔を背け、一夏は益々ワケが分からないと言った具合に首を傾げるのだった。

「ま、兎に角…………… タッグマッチまで時間がねえんだぞ。参加する積りなら、急いで組み上げちまった方が良いだろう」

とそこで神谷が、簪に向かってそう言う。

「それは……………」

神谷の言葉は曲がり形にも真実を衝いている為、簪は反論出来ずに黙り込む。

「簪、一先ず俺かアニキと組むって話は置いてくれて良いからお前だつてタッグマッチに出たいだろ？ 今までのイベントだつて、ずっと出れず終いだつたんだし……………」

そこで一夏も、神谷を援護する様にそう言うて来る。

「……………」

簪は黙り込み、考え込む様な様子を見せた。

「簪ちゃん……………」

「簪様……………」

楯無と虚が、そんな簪の様子を固唾を呑んで見守る……………

そして……

「……………分かった」

やがて簪は、諦めた様に大きく息を吐き、肩を落としてそう言った。

「じゃあ!?!」

「やったー! かんちゃんのお手伝いができる〜!」

「やりましたね! お嬢様!?!」

「うん!?!」

喜びの様子を示す一同。

「けど!」

だがそこで、簪は楯無を睨み付ける。

「貴方の手だけは……………借りない」

「えっ!?!……………」

簪の言葉に、楯無は驚きを露にする。

「!?! 簪様!?!」

「オイオイ! へそ曲がりも大概にしるよ!?!」

そんな簪の態度に、虚と神谷が抗議をしようとしたが……

「……………うん、分かったよ」

楯無は諦めたかの様な笑みを浮かべてそう呟いた。

「！ お嬢様！！」

「オイ、楯無！！」

「良いよ、別に。私の事は気にしないで」

虚と神谷が何か言おうとしたが、楯無自身がそれを遮る。

「お嬢様……………」

「楯無……………」

「じゃあ、邪魔者は消えるね……………皆、後はよろしくお願いするわね」

そのまま楯無は、しょんぼりとした様子で、整備室を後にする。

「楯無さん……………」

「……………」

一夏は残念そうな顔をするが、簪はスツと踵を返し、再び自分の専用機の傍に寄った。

(……………「りゃ、仲直りさせるのは一筋縄じゃ行きそうにないな)

神谷は頭を掻き、更識姉妹の仲の修復が簡単には行かない事を悟る。

(仕方ねえ……………のんびりとやるか)

そして、長期戦になる事を密かに決意するのだった。

「取り敢えず、何から始めれば良い？」

「やはり、部品集めでしょうか？」

と、そこで既に一夏と虚は、簪の専用機の組み立てに入っている。

「でも、確か今、ISの部品って、前線で使われている方に優先的に回されてて、学園のとかのは発注が滞ってるんだよね？」

「……………」

のほんがそう言うと、簪も分かっているので専用機の前で沈黙している。

「部品か……………！ そうだ！ 良い手が有るじゃねえか！！」

と、それを聞いていた神谷が、ポンツと手を打って何かを思いついた様に言う。

「？ アニキ？ 良い手って？」

「まあちよいと待ってる。すぐ戻るからな」

と、尋ねて来た一夏に返事もそこそこで、神谷は整備室から出て行った。

「あ、かみちゃん！」

「如何したのかしら？」

突然出て行った神谷を、のほほんとして虚は首を傾げて見送る。

その後……………

残された簷、一夏、のほほん、虚は……………

4人で簷の専用機の組み立てを進めていたが……………

やはり部品が足りない事には如何にもならず、作業は僅かに進んだだけでまた止まってしまった……………

「やっぱり部品がないと駄目か……………」

「……………」

愚痴る様に一夏が吹き、簀も悔しそうな表情を浮かべる。

と、そこへ……………」

「オーイ！ 待たせたなー！！」

そう言いながら、整備室から姿を消していた神谷が戻って来た。

その手には縄が握られており、その縄は神谷の背後に在った移動用のローラー付きのコンテナに結ばれている。

「あ！ かみやくん！！」

「何処へ行つてたんですか？」

手を余っている袖ごとブンブンと振るのほほんと、そう尋ねる虚。

「ホラよ、持って来てやったぜ」

それに答える様に神谷はそう言うと、コンテナを一同から見える位置へと置く。

神谷が引いて来たコンテナの中には……………」

溢れるばかり積み重ねられたISのパーツが有った！！

「！？」

「うわ〜！ いっぱい有るね〜！」

それを見た簪が驚きを露わにし、のほほんがそう声を挙げる。

「アニキ！ コレ如何したの？」

「良く見れば専用機用の特注パーツまで……………！？ まさか盗んで来たんじゃない？」

一夏がそう尋ね、虚が持って来た部品の中に専用機で使われている特注パーツがあるのを見て、そんな事を思い浮かべる。

「へッ！ ゴミを持って来たところで、誰も怒りゃあしねえよ！」

「ゴ、ゴミ？……………」

神谷から出た言葉の意味が分からず、困惑する虚だったが……………

「アレ？ 何か此処に在る部品って……………古臭い様な……………」

「それに壊れてるのもいっぱい有るよ〜」

とそこで、神谷が持って来た部品を良く見ていた一夏とのほほんが、そんな事に気づく……………

「……………ひょっとして、コレって……………廃棄部品？」

「その通り。スクラップ置き場からチョイと失敬して来たのさ」

気づいた簪の事を指差しながら、神谷はそう言う。

「！ 廃棄部品！ つまり……………捨てられてた部品って事！？ アニキー！！」

「どうせ要らないって思われて捨てられたモンだ。俺達が如何使おうが勝手だろう」

驚く一夏にそう言いながら、神谷は廃棄部品をコンテナから出し始める。

「それはそうかも知れないけど……………」

「でも！ スクラップからISを組むなんて、聞いた事ありません！」

一夏が戸惑い、虚がそう声を挙げる。

「なら、コイツはその第1号になるワケだ」

だが、神谷はあっけらかんにそう返す。

「神谷さん！！」

「虚さん……………良い……………」

と、更に抗議の声を挙げようとして来た虚を、簪が制した。

「！ 簪様！ でも……………」

「もうこの際…………動かせる様になれば…………それで良い…………」
簪はそう言つと、自らスクラップ部品を手に取り、自分の専用機の方に運ぼうとする。

「うっ！……………」

しかし、予想以上に重かった様で、途中で床に付けてしまう。

「ああ、もう、無理するなよ。コレからは俺達も手伝うんだからなっ？」

見かねた一夏が、代わってスクラップ部品を取り、運ぶ。

「よし！ それじゃあ一丁！ やりますか！！」

「全く…………スクラップからIS…………しかも専用機を組み立てようなんて…………前代未聞ね」

ノリノリで作業に掛かるのほほんと、愚痴りながら作業に入る虚。

「……………」

簪はそんな一同の様子をジッと見ていた。

自分でも焼きが回ったと思うと……

スクラップからIS専用機を造ろうなんて……

けど、私の機体を完成させるにはもうこの手しかない……

こんな機体……最早ISとは呼べない……

呼ぶならば、そう……

『ボトムズ（最低野郎）』だ……

つづく

第39話『俺を信じる！ お前を信じる俺を信じる！』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

今回で完全に明らかになったこの作品での簪の+の要素。

それはズバリ、『装甲騎兵ボトムズ』です。

原作において、彼女が専用機を自分で組み立てている場面を見て、ザ・ラストレッドシオルダーでのスコープドッグ・改(スパロボでいうところのTC-LRC)を組み立てていたシーンを思い出しましして……………

それで、簪をむせさせたら面白いかもと思いつきまして。

ザ・ラストレッドシオルダーよろしく、スクラップから組み立てるところも再現して。

流石に完成した機体は、打鉄式ではなくりますので、予め御了承下さい。

何になるかというと、ボトムズの代名詞である『あの棺桶』です。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第40話『つたく、動き難くてしょうがねえぜ……』(前書き)

新年あけまして、おめでとございます。

今年も『天元突破インフィニット・ストラトス』をよろしく願います。

第40話『つたく、動き難くてしょうがねえぜ……』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第40話『つたく、動き難くてしょうがねえぜ……』

簪の領域へ、お馴染みの強引さで踏み込んで行った神谷。

そんな神谷に影響されていた一夏も、かつて神谷に言われた言葉を、そのまま簪へと投げ掛けた。

まだタッグマッチのパートナーとしては認められていないが、簪の心に大きな影響を与える事に成功している。

そして、かつて姉がそうした様に、1人で自分の専用機を組み立てていたのを手伝いに入る。

相変わらず、姉である楯無には拒絶の意思を示しているものの、神谷は長期戦を承知し、時間を掛けて簪の心を変える事を密かに決意する。

部品の発注が滞り、深刻な部品不足となっていた簪の専用機を組み上げる為に……

神谷は何と！

スクラップから使える部品を流用すると言う手段に出る。

この型破りな方法に戸惑う一夏だったが、簪自身がそれを受け入れた事により……

世界でも類を見ないスクラップを使ったIS専用機の組み立てが開始されたのだった……

その作業が続く中、とある休日……………

以前、薫子が受けていた取材の仕事の日取りが決まり、一夏と筈、そして神谷とシャルは、薫子の姉が務める編集部へと向かっていた

……………

「うーん、国連と国からの取材があゝ……………緊張するなゝ」

私服姿のシャルが、緊張している様子でそう言う。

専用機持ちとしての取材のされ方は、デュノア社に居た頃に一通り受けていたが、依頼主が日本政府と国連とあつては、流石に緊張せざるを得なかった。

「気にすんなシャル！ 相手が何処の誰だろうが、俺達は無敵のゲレン団！！ おそるるに足らずだ！！」

一方の同じく私服姿（と言っても、素肌の上に晒を巻いて同じマントを羽織っている状態）の神谷は、相変わらずの根拠の無い自信を炸裂させている。

「神谷ゝ……………ハアゝ、ホント、神谷見ると、細かい事で悩んでいたのが馬鹿らしくなるよ」

呆れる様な溜息を吐きながらも、シャルは笑顔を浮かべてそう言う。

神谷の根拠の無い自信程、頼りになる物はないのだ。

「ハツハツハツ！ 昔っから言うだろ！ 細かい事は気にすんなって！……」ところで、取材って何すんだ？ 美味しいモンが食えたりすんのか？」

「ええっ？ 其処から！？」

ノリノリで引き受けた割に、取材の事に関して一切分かっていなかった神谷に、シャルは1から丁寧に教える。

……因みに、2人は現在、ナチュラルに腕を組んで居る。

(アイツ等……平気で腕など組みおつて……)

その後ろで、私服姿の一夏と横並びになって歩いていた私服姿の箒は、羨ましそうな視線を送っている。

「箒？ 如何したんだ？ 何かさっきからアニキとシャルロットの事を睨み付けるみたいだけど……」

そんな箒の様子に、一夏がツッコむ様に言ってくる。

(お前は分からののか！？ 一目瞭然だろうが！！)

一夏の方に向き直ると、若干理不尽な思いを浮かべる箒。

恋する乙女とは多かれ少なかれ理不尽なものである。

(いや……相手はあの一夏なのだ……やはりココは私から動かなければ……)

だが、何とか思考回路を冷却し、そういう考えに至らせる。

「い、一夏!」

「ん?」

「きよ、今日は、な、何だか冷えるな!」

「ああ、そう言えばそうだな。取材の時間まではまだ余裕あるし、あそこのコーヒーショップで何か買うか?」

箒のその言葉を聞いた一夏は、近くに在ったコーヒーショップを指差しながらそう尋ねる。

「い、いや! そうではなくてだな……………」

「じゃあ何だよ? ハッキリ言えよ」

(貴様は……………っ!)

そんな一夏の態度に、箒は心の中で理不尽な怒りを募らせて行く。

「さ、さ、寒いならば、て、て、手を繋げば良い!」

決心したかの様にそう言う箒だったが、直後に恥ずかしさで赤面し、俯き加減となる。

「ああ、それは良いな。んじゃ、そうしよっ」

だが、そんな篝の心情などこれっぽっちも理解出来ていない一夏は、ヘラヘラと笑いながら篝の手を取る。

「!?!」

篝は驚き、無言となる。

「さ、行くうぜ」

一夏はそんな篝の様子も知らず、手を引いて行く。

(アイツ……………)

(一夏……………篝が可哀そうだよ……………)

そんな一夏の姿を振り返りながら見ていた神谷は呆れ、シャルは篝への同情を感じるのであった。

一同は地下鉄を利用し、漸く薫子の姉が務める雑誌『インフィニット・ストライプス』の編集部へ辿り着き、取材用の部屋へと通される。

「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプス』の副編集長やっている『薫 渚子』よ。今日はよろしくね」

薫子の姉……………『薫 渚子』が、一夏達に向かってそう挨拶する。

「あ、どうも、織斑 一夏です」

「篠ノ之 篝です」

「初めまして、シャルロット・デュノアです」

3人が渚子に向かって挨拶を返す。

「そして俺が言わずと知れたグレン団の鬼リーダー！ 天上 神谷様よー！！」

最後に神谷が、自分の事を親指で指して、ピシッとポーズを決めながらそう言った。

「おおっ！ シャッターチャンスー！！」

すぐにそのポーズの写真を撮る渚子。

「ア、アハハハ……………」

「ま、こうなるよね」

「……………」

神谷の予想通りの態度に、一夏は苦笑いを浮かべ、シャルは何処から悟った様な顔になり、箸は憮然として黙り込む。

「と、ゴメンなさい。天上くんがあんまりにも良いポーズしてくれるものだから、つい写真を撮っちゃったけど、先にインタビューから始めさせてもらうわね。写真撮影はその後」

と、そこで渚子は一旦カメラをテーブルの上に置くと、ペン型のICレコーダーを取り出し、手の中でクルンと1回転させる。

「じゃあ、先ず織斑くんから。女子校に入学した気持ちは？」

「いきなりそれですか……………」

「だってえ、気になるじゃない。読者アンケートでも君への特集リクエスト、すつごく多いのよ？」

呆れる様な一夏に、渚子は重ねて問い質す。

「え〜と……………使えるトイレが少なくて困ります」

「ぷっ！ あは、あははは！ 妹の言ってた事、本当なのね！ 異性に興味の無いハーレム・キングって！！」

「は、ハーレム・キング？」

「アハハハッ！ 因みに、天上くんはどんな気持ちですか？」

ひとしきり笑うと、渚子は今度は神谷にも同じ事を問う。

「悪かあねえな。右を見ても左を見ても女ばかりだからな。良い目の保養だぜ」

「そ、そう……………」

一夏と違い、露骨な神谷には、流石の渚子も少し戸惑う。

「むう〜！ 神谷！ 何時の女の子の事、そんな目で見てたの!？」

途端に、シャルは嫉妬の声を挙げるが……………

「何だ、シャル？ 焼いてんのか？」

神谷はニヤリと笑いながらそう返す。

「べ、別に、僕は……………」

「ハッハッハッ！ 今のお前も良い目の保養だぜ!」

赤面するシャルに向かって、神谷はそう言い放つ。

「も、もう〜！ 神谷〜!」

「ハッハッハッ!」

（（……………余所でやってくんないかな））

当の本人達は楽しげだが、見せつけられている3人は堪ったモノじゃない。

「あゝ、えっと……………じゃあ、次は篠ノ之さんに質問ね」

やがて耐え切れなくなった様に、渚子は箒へと質問を振った。

「えっと、篠ノ之さんにはお姉さんの話を……………」

と、渚子がそう言った瞬間、箒は座っていた椅子をガタツと鳴らして立ち上がる。

やはり姉の事に関して触れられたくないらしい。

「……………ディナー券あげないわよ」

「うっ！」

しかし、渚子のその言葉を聞くと、少し逡巡する様子を見せた後、諦めたかの様に椅子に座り直す。

「良い子。うふふ、素直な子って好きよ……………それで、お姉さんから専用機を貰った感想は？ 何処かの代表候補生になる気はないの？ 日本は嫌い？」

「紅椿は、感謝しています……………今のところ、代表候補生には興味ありません。世界の情勢が情勢ですから……………日本は、まあ、まあ、生まれ育った国ですから、嫌いではないですけど……………」

矢継ぎ早にされた質問を、丁寧に1つずつ答える箒。

(そう言えば……………姉さん……………あの時……………生徒達にゴメンって……………)

ふとそこで、紅椿を貰った時、束が生徒達に謝罪していた姿を思い出す。

あの時は紅椿を貰った事と、束の悪戯芝居に怒っていた事もあって深く気に掛けなかったが、今にして思えば、信じがたい光景だった……………

箒と一夏、千冬に神谷以外の人間にはまるで興味を持たなかった束が、見ず知らずの他人である生徒達に謝罪する……………

彼女の知る束の性格からは考えられない光景である。

良く思い出せば、あの時の束は、とても悲しそうな顔をしていた……………

(姉さんは……………変わろうとしているのか?……………)

「ふむふむ、成程……………ありがとうね。それじゃあ、次は天上くんに質問ね」

「おう！ 待ちかねたぜ!!」

と、箒がそんな事を考えていると、今度は神谷が渚子に話を振られ、待ってましたと言っような様子を見せる。

「知っての通り、今年の春頃に出現したロージエノム軍は世界征服

宣言をして、各国に攻撃を仕掛けたわ。小国の幾つかは滅ぼされ、
大国との戦闘は膠着状態。日本も自衛隊が少なからずの被害を受け
ているわ」

これまでのロージエノム軍の動きを振り返る様に、渚子は解説する。

「そして貴方達が居るIS学園も襲われている。でも！ そんなロ
ージエノム軍の快進撃と食い止めたのが……………」

「この俺！ 天上 神谷様とグレンラガンよ！！」

と、そこで神谷は椅子から立ち上がると、テーブルの上に片足を乗
つけて、ビシッと右手の親指で自分を指差す。

「うんうん、良いね良いね。今まで日本を襲ったロージエノム軍
の殆どがグレンラガンと、貴方が言うグレン団のメンバーが撃退し
てるけど…………… 根本的な質問で申し訳ないけど、グレンラガンって
何処の誰が作ったISなの？」

「何言つてやがる？ グレンラガンは……………」

「…………… わっつ！ わっつ！ わっつ！！……………」

と、何か言いかけた神谷の口を、一夏、箒、シャルが一斉に塞ぐ。

「な、何！？ 如何したの！？」

その様子に驚く渚子。

「い、いや〜！ 何でも無いです！ アハハハハ！！」

(駄目だってアニキ!!)

(グレンラガンの情報は機密扱いだと言っのを忘れたのか!?)

シャルが誤魔化す様な笑いを挙げ、一夏と篤が神谷に小声でそう言う。

(ああ、そっぴやそっぴやだったな……すっかり忘れてたぜ)

神谷は悪びれた様子も無く、あっけらかにそう言い放つ。

(千冬さんが懸念する筈だ……)

そんな神谷の姿に、篤は千冬に同情する。

本来ならば、グレンラガンや神谷に対する取材などは、IS学園……と言っよりも千冬がブロックしているのだが、日本政府は兎も角、国連からの要請は断れず、神谷に取材を受ける事を許可した。

勿論、千冬は心配からまた胃を痛めている……

「えっと、グレンラガンは……あ！　そうそう東さん……もと
い篠ノ之博士が作ったんです」

とそこで、一夏がそうフォローを入れる。

「篠ノ之博士が？」

「ええ、実はアニキは篠ノ之博士とも幼馴染で、仲が良かったんで

す。それで博士が直々に……………」

「成程ね。篠ノ之博士って人付き合いが嫌いな事で知られてるけど、仲の良かった幼馴染だったって言うなら納得かな。」

渚子は手帳を取り出すと、メモを取る。

「さて、次はデュノアさんに質問ね……………今更かも知れないけど、天上 神谷との関係は？」

「ええっ!?!」

渚子の質問に、シャルは赤面する。

「え、えっとその……………う、うう、うう……………恋人同士です」

そしてモジモジしながら、呟く様にそう言う。

「やっぱりね……………それじゃあ、付き合う様になつた経緯は？ 告白はどつちから？」

「えっと、経緯はちょっと込み入った事情があるので言えませんけど……………告白は……………神谷の方から」

「因みに、どんな告白のされ方だったのかな？」

「そ、それ本当にインタビューする内容なんですか!?!」

まるでゴシップ記事のネタでも聞かれている様な気分になり、シャルはそう言う。

「勿論よ。まあ、半分は私の趣味も入ってるけどね」

「な、渚子さん!」

「ハイハイ。あんまり弄ると可哀そうだから、この辺にしておきましようか」

「もーっ」

悪びれた様子の無い渚子に、シャルは頬を膨らませて抗議するのだった。

その後も一夏達への質問は続き、一夏達は時折機密事項をアツサリと話してしまいそうになる神谷に慌てながらも、如何にかインタビューを終了。

いよいよ写真撮影へと入る為に、男女に分かれ、スポンサーの服に着替えに行く。

「……………」

「箒、早く着替えないと……………撮影スタッフの人達が待つてるんだよ」

「わ、分かっている！ 分かっているが……………」

箒は、用意された衣装を前に、1人苦悩している。

用意されていた衣装と言うのが、かなり大胆に胸元が開いたブラウスに、フリルが可愛らしいミニのスカート、それにショート丈のジーンズアウターという一式である。

普段の箒ならば絶対に着ない服であり、箒は如何するべきかと固まっていた。

因みに、シャルは既に同じ衣装の色違いに着替え終えている。

「覚悟を決めなよ。それに良い機会かも知れないよ。一夏にそういう服も似合うんだってのを教えてあげたら如何かな？」

「い、一夏に!?!……………」

シャルのその言葉を聞いた箒は、きっかり2分間ほど考えている素振りを見せていたかと思うと……………

「よし！ 着るぞ!!！」

まるで戦いに赴くかの様にそう決意したのだった。

「やれやれ……………」

着替えている筈に見えない様に、シャルは両手を広げて肩を竦める。

10数分後……………

撮影場所で、化粧をされ、準備が整った筈とシャルが、一夏と神谷を待っていた。

（い、一夏はまだか？ この恰好、スースーして落ち着かないのだが……………）

「筈。少しは落き着きなよ」

居心地が悪そうにしている筈に、シャルがそう言う。

しかし、彼女の気持ちも良く分かった。

着飾った美女2人の前にして、アシスタントカメラマンを含めた男性スタッフが、先程から何度も熱っぽい溜息を吐いているのである。

(あゝ、神谷早く来ないかな？……………)

(い、一夏が褒めてくれたら、今日の夕食は外で一緒に取ろう。わ、私から誘うんだ。私から……………私から……………)

神谷の登場を待ち焦がれているシャルと、内心でそんな計画を立てている筈。

すると……………

「すみませーん！ 遅れましたー！ 織斑 一夏くん！ 天上 神谷くん！ 入りまーすー！！」

通路のメイク室から、スタジオスタッフのそういう声が響いて来た。

(い、一夏が来る！……………一夏が来る！……………)

(神谷達はどんな恰好なんだろう？……………)

筈はそれに胸を高鳴らせ、シャルは神谷達の恰好がどんなものかを気にする。

「うーん、何かコレ変じゃないですか？」

「まったく、動き難くてしょうがねえぜ……………」

すると今度は、一夏と神谷の声が聞こえて来た。

「ぜーんぜん！ 超似合ってるわよ！ 10代の子のスイーツ姿って

いうのも良いわね。それと天上くん。それでもかなり妥協したんだからね。文句言わない」

続いて、渚子のそう言う声が聞こえて来る。

（ス、スーツだと！？）

（神谷にスーツ？ ファッションモデルにジャージ着せるぐらいにスマッチだよ）

一夏がスーツ姿であると言っのを聞いて、益々動悸を早まらせる筈と、若干失礼な事を考えるシャル。

そして、遂に本人達が姿を現す。

カジュアルスーツをキッチリと着こなしている一夏と、対照的に上着どころかシャツのボタンも全開にして晒を巻いた上半身を露わにしており、拳句に袖を肘の辺りまで捲ると言うワイルド系な着こなし方をしている神谷。

共通して言えるのは……………

どちらも似合っていてカッコイイと言う事だ。

「い、一夏……………」

「お、おう。待たせたな、筈」

「う、うむ……………」

箒と一夏は、お互いに言葉に詰まる。

(うわ……………箒……………すっげえ可愛い……………)

だが一夏は、普段の彼女なら絶対にしないであろう服装を見て、そんな思いを抱いていた。

「に、似合っているな……………そ、その何だ。わ、悪くないぞ」

「お、おう。サンキユ。箒も、その……………可愛いぞ」

「か、かわっ……………!?!」

そこまで言うと、2人は互いに黙り込んでしまう。

「神谷」

「おう、シャル。中々グツと来る恰好じゃないか」

「ありがとう。神谷もスーツって聞いた時は無理があると思ったけど、そういう着方なら案外似合ってるね」

「そうかあ？ 俺としちゃあ、動き難くてしょうがねえぜ……………」

一方、シャルと神谷は自然に会話しており、神谷は慣れないスーツに窮屈さを感じてた。

「はい、それじゃあ撮影を始めるわよー。時間押してるから、サクサク行っちゃいましょう」

とそこで、渚子が手を叩きながらそう指示を出し、いよいよ写真撮影に入る。

神谷、シャル、一夏、箒の4人はポーズを変え、立ち位置を変え、時には写る人数と組み合わせを変えて、次々に写真を撮られて行く。

(さっきはびっくりしたなあ……………まさか、箒があんなに変わるとは……………メイクって凄いな)

そんな中、一夏は箒の姿が脳裏に焼き付いており、撮影中、箒を見ない様になっていた。

(いつもの箒なら絶対に着なさそうだよ……………何だろう？ いつもと違って大人びているって言うか、その……………駄目だ。適当な言葉が見当たらない)

「織斑くん。篠ノ之さんともっとくつついて。もっと」

と、一夏がそんな事を悶々と考えていると、不意に渚子からその声を掛けられた。

「えっ！？ あ、は、ハイ！ こうですか？」

と、一夏は思わず若干高い声を出してしまったが、すぐに取り繕って指示に従う。

「あー、ダメダメ。もっと、もっと！」

「えー！？ いや、その、これ以上は……………」

「一夏、何やってんだ？ 男だったらドーンと決める！！」

煮え切らない態度の一夏に、神谷からそんな声が飛ぶ。

そんな神谷は、現在……………

シャルを右腕だけで片腕抱きして持ち上げていると言つ、何ともワイルドなポーズを決めている。

「……………」

抱き抱えられているシャルは、顔を真っ赤にして照れ捲っている。

(ア、アニキ……………)

そんな神谷の姿に、一夏はギャグ汗を掻く。

その後、怒っているであろうと予想していた筈の様子を確かめるが

……………

「……………」

筈は、怒るところか、顎を引いた弱弱しい上目遣いで、懇願する様に一夏の事を見つけていた。

(うっ！?)

そんな筈の様子に、一夏は内心で狼狽する。

気持ちを如何にか落ち着かせながら、一夏は筈の更に傍に座り直す。

「あつ……………」

と、その際に腕が僅かに触れ合い、箒が普段からは信じられないくらいに可愛い声を出す。

(…!! ぐあああああああ—————っ!!)

自分でも良く分からない衝動に襲われながら、一夏は必死に気持ちを落ち着かせようとする。

「うーん、何か並んで座ってるだけって絵にならないわね!。織斑くん、篠ノ之さんの腰を抱いて」

と、そんな一夏の行為を台無しにするかの様に、渚子はそんな事を言ってくる。

「……………は?」

「こ・し・を・だ・い・て。早く!」

「は、ハイ!!」

渚子の剣幕におされ、一夏は思わず何も考えずに箒の腰に手を回して、自分の方に抱き寄せた。

「!?!?」

突然腰に手を回された箒と、ふと我に返った一夏が、思わず顔を見合わせ合う。

「「……………」」

そのまま、僅か10センチ足らずの距離で見つめ合い、互いに顔を赤面させる2人。

「うわぁ……………」

「ひゅー……………」

それを見たシャルは自分も再び赤面し、神谷は冷やかす様な事を言ってくる。

と、その瞬間にカメラのシャッターが切られた。

「んん〜。良い絵が撮れたわ。ナイスリアクションよ、2人供」

「「!……………」」

渚子の言葉で、2人は漸く自分達の状況を理解し、パツと距離を取り合う。

「ハイ！ お疲れ様！ じゃあ4人供パツと着替えちゃって。あ、服はそのままあげるから、持って帰っちゃって」

「は、はぁ……………」

「わ、分かりました……………」

「やれやれ……………漸くこの恰好から解放されるぜ」

「お疲れ様でした」

一夏達は多種多様な返事をしながら、撮影の疲れを感じる。

「えーと、デイナー券は携帯電話にデータ転送してあげるから、帰る前にアドレス教えてね。それじゃあお疲れ!!」

渚子はかなり軽いフットワークで、既にカメラから画像データを抜き出して、携帯端末で確認しながらそう言っていた。

「ん! あ~~~~! さて、帰るか……………」

「うん、そうだね」

神谷が伸びをするとそう言い、シャルが返事を返す。

「……………」

一方、一夏と篤はまだ若干呆然としていた。

「オイ、一夏。何やってんだ?」

「篤、行くよ」

そんな2人に、神谷とシャルは呼び掛ける。

「あ、ああ……………」

「今行く……………」

力無く返事を返すと立ち上がり、互いに無言のまま、其々の更衣室へと向かう一夏と尊。

「「……………」」

そんな2人を見送ると、神谷とシャルは顔を見合わせ、呆れた様に肩を竦め合うのだった。

その後……………

取材と撮影を終えた一同の中で、箒は一夏に夕食を外食で済ませよ
うとの誘いを出す。

特に深い意味で考えなかった一夏はそれを了承。

そのまま所謂、『恋人同士のディナー』を楽しもうとしたが……

神谷は用が有ると言い、学園への帰路に着いた。

神谷が帰ると言う事で、シャルもそれに付き合い、一夏と箒は2人
で夕食を楽しもうとしたのだが……

色々あって、箒は撮影での幸せが吹っ飛んでしまう様な思いをした
のである……

一方……

学園へと帰った神谷の用とは……

ジギタリスへの尋問だった。

グレン団に投降し、IS学園に監視された状態で拘束されているジ
ギタリスだが……

未だにロージエノム軍に関する有益な情報は得られていない。

彼が遊撃部隊隊長と言えども、獣人の中では末端に近い事もあり、詳細を知らされていないと言つのも有るが、それ以上に彼が尋問に口を割らなかつたのである。

投降したのはケジメを着ける為であり、貴様達の元に下つたのではないと言つのが彼の言い分である。

千冬やリーロンは辛抱強く何度も尋問を行ったが、ジギタリスの態度は変わらない。

そこで千冬は、今回は彼と直接勝負を繰り広げた中である神谷も交えての尋問を行う事にした。

IS学園・地下施設の一角……

「如何しても情報を教える積りは無いのか？」

「くどい……俺が此処に居るのはケジメの為だ。ロージエノム様への忠節まで売った覚えは無い」

千冬の問題に毅然としてそう返すジギタリス。

「お手上げね……」

リーロンはお手上げのポーズを取る。

「……………」

今回その尋問に同席した神谷は、そんなジギタリスの姿をジッと見ていたが……………」

「なあ、ジギタリスよお……………」何でそんなにあの禿親父に義理立てんだ？」

不意に、ジギタリスに向かってそう質問を投げ掛けた。

「ロージエノム様への侮辱は許さんぞ！……………」俺達獣人はロージエノム様が創られたモノ。つまり、我等獣人にとって螺旋王様は創造主……………」創造主に逆らおう者など居るか……………」例えば、神谷よ……………」石を持った手を離したら、石は如何なる？」

「まあ、下に落ちるな」

「そうだが……………」だが……………」石が下の落ちる事に……………」それ自体に理由が有るか？」

「……………」

その言葉を聞いて、神谷は沈黙する。

「俺達獣人にとって、螺旋王様に忠誠を尽くすと言う事は……………」その石が落ちる事に近い」

「つまり……………」当たり前だと言う事か？」

そこで千冬がそう口を挟む。

「そうだ……………石は落ちる……………獣人は螺旋王様に尽くす……………ただ、それだけだ……………」

ジギタリスは諦めにも似た感情が混じった声でそう返す。

「……………何だか良く分からねえ話だな。まあ良い！俺のドリルは天を衝く！一夏の剣は天を斬り裂く！そして……………無理を通して通りを蹴っ飛ばす！それが俺達グレン団なんだよ！！」

とそこで、神谷が何時もの様に啖呵を切り始めた。

「石ころが地面に落ちる事が道理だったとしても……………関係ねえ！」

「……………」

ジギタリスは黙って、その啖呵を聴き入っている。

(やはりこの男の言う事……………ロージエノム様の御言葉と並ぶ程の価値を感じる……………ティトリーよ……………それがお前がこの男に惹かれる理由か？)

「アラ？何か考え事？」

今度はジギタリスの方が黙り込み、リーロンがそんな言葉を投げ掛ける。

「まあ……………そんなところだ……………」

「そう………今日はこれぐらいにしましょ」

「そうだな………」

と、リーロンは今度は千冬に向かってそう言い、今日の尋問はこれで終える事となる。

「ふあああ………ねみいから俺はもう寝るぜ」

神谷も大きく欠伸をすると、気怠そうにしながら、ジギタリスの前から去って行った。

「全くアイツは………」

「まあまあ、怒らない怒らない。じゃないとまた胃に穴が空くわよ」

「それを言わないで下さい………」

リーロンと千冬も、愚痴を言いながら去って行く。

「……………」

1人残されたジギタリスは、静かに目を閉じると、まるで瞑想しているかの様なポーズを取り、そのままジッと動かなくなるのだった

……………

UJU

第40話『つたく、動き難くてしょうがねえぜ……』(後書き)

新話、投稿させていただきました。

今回は簪・キュービイー！？の話は一旦お休みして……
以前神谷達が受けた取材の依頼での場面を書かせていただきました。
相変わらずシャルと堂々とイチャつく神谷と、初々しい様子を見せる一夏&箒。

最後の方ではジギタリスへの尋問。
創造主であるが故に螺旋王へ忠節を尽くす獣人。
そんなジギタリスにとって、道理も無茶も蹴っ飛ばす神谷は、今まで出会った事のない存在だった。

次回からはまた『むせる』感じの話をお送りします。
楽しみにしていて下さい。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

第41話『……ターンピックが冴えないわね』

これは……

女尊男卑の定められた世界の運命に風穴を空ける男達と……

それに付き従う女達の物語である……

天元突破インフィニット・ストラトス

第41話『……ターンピックが冴えないわね』

神谷と一夏が、簪と出会ってから1週間が経過した……………

タッグマッチのタッグ申込みは目前にまで迫っている。

にも関わらず……………

2人は相変わらず、虚とのほほんと共に、簪の専用機の組み立てを続けている……………

IS学園・IS整備室……………

「お姉ちゃん。この配線は何処へ繋がれば良いの？」

「もう、本音。さつき教えたでしょ。その配線はB回路へよ」

内部の配線の組み立てをやっていた虚とのほほんがそう言い合う。

「アニキ、そっちを押さえて貰える？」

「おう！ 任せておけ!!」

神谷は装甲版を持ち上げて押さえ、その隙に一夏が溶接で装甲版同士を繋ぎ合わせる。

「……………」

そして簪は黙々と機体制御用のOSを組んで居た。

「本音、コネクターを切り替えて」

「どれ？」

「もう早くして。電源の傍よ」

「だからどの電源？」

「アニキ、あのパーツを持って来て貰えるかな？」

「ホイ来た」

そんな簪の前で、虚にのほほん、一夏に神谷は和気藹々と言った感じに組み立てを続けている。

「……………」

ふと簪は、OSを組む手を止めて、その光景を見やる。

神谷達の協力により、漸く基礎が組み上がった簪の専用機だが、その見た目はかなり歪だった……………

使っているパーツは元はスクラップであり、しかも様々なISの部品である。

その為、見た目は思いつきアンバランスであり、打鉄のパーツが有るかと思えば、ラファールのパーツが有ったり、他人の専用機パ

「ツも有れば、まるで見た事もないパーツまで有る……」

例えるならば、その姿はフランケンシュタインの怪物である。

(ま……………私にはお似合いかもね……………)

そんな自らの専用機の姿に、簪は心の中で1人ごちた。

「う〜ん……………如何するかなあ……………」

「困ったね〜」

と、そうしている内に、一夏達の作業の手が止まり、何か悩む様な様子を見せている。

「……………如何したの？」

「簪様、それが……………」

「バーニアの出力が足りないんだよ〜」

簪の問いに、虚が答え難そうにしていると、のほほんが代わる様にそう言う。

「足りない？……………」

「ええ……………元がスクラップの部品ですから……………機体を飛行させるまでの出力が得られないんです……………」

「これじゃあ、飛べたとしても、精々ジャンプが良いとこだな……………」

…」

簪の専用機のバーニアを見ながら一夏がそう言う。

「そう……………」

簪は、自分の専用機に近づくと、バーニア部を撫でる様に触る。

「如何する、簪？」

そこで一夏がそう尋ねる。

「……………仕方がない……………飛行能力を……………捨てる……………」

「「えっ!?!」」

「なっ!?!」

簪の言葉に、虚とのほほん、そして一夏は驚きの声を挙げた。

IS同士の戦いの場合、当然ながらそれは空中戦となる。

だが、簪は飛行能力を捨てると言った。

それはつまり、完全な陸戦用のISを組み上げると言う事である。

局地戦を目的として開発するのなら兎も角、普通に考えればデチェインでしかない。

空を自在に飛べる者と、地上を動くしかない者では、空を飛べる方

が圧倒的に有利であるからだ。

「ちょっと待ってくれ、簪。それじゃあ……………」

「空を飛べる事は……………有利になると言う事だけど……………勝利の絶対条件では無い……………」

何か言おうとした一夏に、簪はそう返し、機体から飛行機能を司るパーツを取り外し始める。

「いや、ちょっと……………」

「ならコイツを代わりに使うかあ？」

と、そう言いながら神谷がISの脚部パーツ持って来る。

しかし、それは只の脚部パーツでは無く、足の裏のローラーとキヤタピラの様な推進装置が付いている脚部だった。

「アニキ？ そのパーツは？」

「スクラップの中に混じってたぜ」

「……………じゃあ……………その脚部パーツに……………換装して……………」

簪はそのパーツを少しの間だけ見ていたかと思うとそう言う。

「アイヨ！」

「それと……………機動性を重視したいから……………装甲をギリギリまで

削って……………」

「簪様！ それは危険過ぎます！！！」

虚がその声を挙げる。

如何にISが何があっても操縦者を守る絶対防御を備えているとは言え、そのシールドはエネルギーに依存している。

エネルギーが無くなれば絶対防御も無くなり、ISはガラクタと化す。

全身装甲フルスキンとまでは行かないでも、装甲にはある程度は厚さを持たせたのを多めに装着するに越した事はないのだ。

「良いからやって……………」

しかし、簪は譲らぬ様子でそう繰り返す。

「簪様！！！」

「まあ、良いじゃねえ。コイツの専用機なんだ。コイツが造りてえ様に造らせてやるうぜ」

虚が食い下がろうとするが、今まで付いていた脚部パーツを外し、ローラーダッシュ機能の付いた脚部パーツを新たに取り付けに掛かっている神谷がそう言う。

「……………分かりました」

虚は根負けしたかの様にそう言い、工具を持つと、簷の専用機の装甲を削って薄くして行き、軽量化して行く。

「……………」

その様子を見ながら、簷は再び機体のOS組みに掛かるのであった。

小1時間後……………

「かんちゃん！ 基礎組みが終わったよー！！」

「そう……」

のほんがそう声を挙げた瞬間に、簪も機体用のOS組みを終えた。

「……………」

そして、改めて基礎組みが完了した自分の専用機を見やる。

相変わらず全体的なフォルムは少々歪だが、神谷達が塗装をくれたお蔭で、大分見栄えは良くなっている。

緑色と象牙色の組み合わせは、質実剛健であり、正に兵器と言った感じを出していた。

「……………悪くない」

「簪様……………今一度尋ねますが、装甲を限界まで落としましたけど、本当に宜しいのですね？」

「そうだよかんちゃん。最大でも14ミリって、幾ら何でも薄過ぎない？」

虚が食い下がる様にそう言い、のほんも心配そうにそう言う。

彼女の注文通りに機動性を重視する為、装甲を薄くして行ったところ……………」

最大でも何と14ミリと言う、紙の様な装甲となってしまうのだ。

下手をすれば拳銃で撃たれても貫通するレベルである。

「構わないわ……………」

と、簷は冷めた様子でそう言い、専用機を待機状態のクリスタルの指輪に変えると、右手の中指に填めた。

「それがお前のISの待機形態か……………そう言や、ソイツの名前は
何てんだ？」

「名前？……………」

そこで簷は、まだ自分の専用機の名前を考えていなかった事を思い
出す。

「……………」

少しの間、右手の中指に填めた待機状態の専用機を見ていたかと思
うと……………

「……………ドッグ」

「あん？」

「ドッグ……………『スコープドッグ』……………それがこの子の名前よ」

一同に聞こえる様にそう言った。

「スコープ？」

「ドツグ？」

顔を見合わせるのほほんと虚。

「へえ、可愛い名前だな」

一夏はそんな感想を言う。

「……………アリーナで試運転してみる……………」

と、簪はそう言つと、整備室を後にしようとする。

「あ、オイ、待てよ！」

慌てて一夏がその後を追って行く。

「俺達も行くか」

「ほい」

「そうですね……………」

それに続く様に神谷、のほほん、虚も整備室を後にする。

と、ピットの出入り口で、クリップボードを手に、記録を取っていたテイトリーからそう声が拳がる。

「？ アレ？ 神谷に一夏だ」

「！？ 何！？」

「「「「！？」」「」「」」

と、テイトリーが向かい側のピットの出入り口に目を遣った瞬間に、神谷達の姿を発見してそう言ったかと思うと、箒達が一斉に動きを止めて反応。

同じ様に一夏と神谷……………

そして箒と布仏姉妹の存在も確認する。

「箒ちゃん……………」

箒の姿を見て、楯無は表情を曇らせる……………

「えっ？ じゃあ、アレが楯無さんの妹さん？」

それを聞いたシャルが、視線を神谷から箒へと移す。

他の一同も同じ様に、視線を一夏から箒へと移した。

「……………」

だが、箒はそんな箒やシャル達、そしては楯無の事も、まるで最初

から居ない様に思っているかの様に気にせず、無言でスコープドッグを呼び出す。

緑色と象牙色の迷彩を思わせるカラーリングに、様々なISのパーツを継ぎ接ぎした様なデザインのスコープドッグは、他のISに比べて、かなり無骨であった。

その中でも目を引くのは、目の部分に付けられたバイザー状のパーツであり、そこにはスリットが入っており、そのスリット上を移動する回転ターレット式3連カメラが装着されている。

その視界補助カメラ・ターレットレンズが回転すると光が灯る。

「白式！」

と、それと同時に、その隣に居た一夏が、白式を呼び出して装着する。

「……………完成したんだ……………簪ちゃんの専用機……………」

楯無がそう言った瞬間、スコープドッグを装着した簪が、ピットの出入り口から飛び降りた。

そのままアリーナの地面に着地するが、その際に衝撃を緩和する為、脚部を変形させて装着者の身体の前方に沈み込む姿勢……………
『降着姿勢』を取り、少し土煙を巻き上げる。

一夏も宙に舞い上がると、アリーナの地面の上に降りた簪の傍に寄る。

神谷と布仏姉妹は、ピットの出入り口から、そんな2人を見守っている。

「……………」

と、キュイイイイイイインツ！　と言う耳障り……………いや、心地良い音が聞こえて来たかと思うと、簪の足元から火花が散り始め、機体が前進する。

そのままローラーダッシュで、アリーナ内を自在に走り回る簪。

「？　おかしいですね？」

「ちよつと……………アイツなんで飛ばないのよ？」

その様子を見ていたセシリアが違和感を感じ、鈴がそう声を挙げた。

「トラブルか？」

「オイ、一夏。聞こえるか？」

ラウラがそう呟くと、耐えかねた簪が一夏に尋ねようと通信を送る。

「あ、簪」

「あ、簪、じゃない。その……………簪だったか？　何故ソイツのISは飛行しないのだ？」

「何かトラブル？」

箒が一夏にそう尋ねると、シャルもそう口を挟んで来た。

「いや、トラブルじゃなくて………箒のISは、最初から飛べない様になってるんだ」

「何っ!? 如何言う事だ!?!」

「そんな!? ISは基本空戦兵器だよ!! それを完全な陸戦使用にするなんて………デチエーンもいいところじゃない!?!」

一夏からの回答を聞いた箒が驚きの声を挙げ、横でコツソリと聞いていた楯無も、思わず口を挟んで来る。

「いやでも………箒の奴がそうするって聞かなくて………」

「何を考えてるのよ、ソイツ?」

「織斑 一夏………」

と、鈴がそう言った瞬間、今まで黙々と機体の動作チェックをしていた箒が、通信回線に割り込んで来た。

「……………!?!?」

「うわあっ!? な、何だ、箒!?!」

「火器管制のテストも………平行して行いたい………仮想標的を………出してくれる?」

突然通信回線に割り込んで来た箒に、箒達と一夏は驚くが、箒は特

に気にもせず、一夏にそう要望する。

「あ、ああ、分かった……………今やるよ」

一夏は若干焦りながら、アリーナに仮想標的を出現させた。

「……………」

簷はローラーダッシュ移動で攪乱する様な機動を取りながら、手近な仮想標的に接近。

そして右腕を構えたかと思うと、ローラダッシュでの突撃と共に仮想標的に向かって突き出す。

その瞬間！！

右腕装甲から炸裂音が聞こえたかと思うと、右腕が伸びて、仮想標的に命中。

まるで杭打機のように、仮想標的を破壊した！！

「……………『アームパンチ』……………問題無し……………」

薬莢が排出されて、右腕が元に戻ると、簷は手を閉じたり開いたりしてチェックを終了する。

「……………」

続けて簷は、その右手にスコップドッグの基本武装……………レーザー照準器付きアサルトライフルを拡大した様な形状のGAT-22・

30mmベウイマシンガンを出現させる。

ターゲットレンズを再び回転させると、先ずは足を止めての射撃を開始。

単射で正確無比な狙いで、仮想標的を撃ち抜いて行く。

そして、不意にローラーダッシュをし始めたかと思うと、今度は移動しながらの射撃を開始。

止まっていた時と変わらない精密射撃で、仮想標的が次々に減って行く。

「す、凄い……………」

「何と言う正確な射撃だ……………」

まるでマシンの様な簷の戦いぶりに、シャルとラウラが舌を巻くと、移動しての射撃を繰り返していた簷は、アリーナの壁に接近していた。

「……………」

簷は脚部パーツの踝の部分に付いている可動式のスパイク・ターンピックを起動させ、地面にスパイクを撃ち込むと、急激に向きを変えようとす。

だが……………」

「!?……………」

ターンピックは打ち出されたものの、地面には浅くしか埋まらず、ターンの軌道が狂う。

途端に簷はバランスを崩し、背中からアリーナの壁に突っ込んだ!!

アリーナの壁は破壊され、簷は瓦礫に埋まる。

「!? 簷!!」

「簷ちゃん!!」

「……………!?」

一夏と楯無が慌てて倒れた簷に近寄り、遅れて箒達も近寄り、神谷もピットの出入り口から飛び降りて、簷の元へと向かった。

「……………」

簷は無言のまま、自分の上に乗っていた瓦礫を退かして起き上がる。

衝突したせいで、装甲の薄い簷のスコップドッグは、所々がひしゃげてグチャグチャになっていた。

「大丈夫か!? 簷!?」

「簷ちゃん!!」

一夏と楯無がそう言って来るが……

「……………ターンピックが冴えないわね……………それに制御系もおかしいみたい……………」

簪は淡々と、スコープドッグの問題点を記録し始める。

「あ……………大丈夫そうだな」

「やれやれ、元気な野郎だぜ……………」

こんな時でも淡々とした様子の簪に、一夏と神谷が呆れる様な声を挙げる。

「……………」

それを聞き流しながら、簪はピットへと戻ろうとする……………

「ちょっと待ちなさいよ！」

と、その簪を鈴が呼び止めた。

「……………」

簪は足を止めると鈴の方を振り返る。

「アンタねえ、一夏達が心配してるのに、その態度はないでしょ！今回の事情は知っているから、アンタと一夏が組む事になっても別に恨みはしないけど……………それでもその態度は如何なのよ！！！」

胸の内に抱えていたモノを吐き出す様に、鈴は簪に向かってそう言い放つ。

「そうだぞ！ 折角人の嫁を貸し出してやってると言うのに……………」

「ちょっとラウラさん！ 前々から言いたかったのですけど……………」

「一夏さんは貴方のお嫁さんではありませんわよ！」

「そうだぞ！ 一夏は男だぞ！！！」

そこへ、ラウラ、セシリア、箒が参加して来て、話は何時の間にか簪から一夏の事へと移っていた。

「一夏！ やはりタッグマッチでは私と組め！！！」

「一夏さん！ タッグマッチの件、どうか御再考を！！！」

「やっぱりアタシと組みなさい！ 一夏！！！」

「やはりお前のパートナーは私しか居ない様だな」

「ちよっ！ ちょっと待ってくれよ！！！」

すっかり楯無との約束の事など忘れ、タッグマッチで自分と組めと一夏に詰め寄る箒達。

「説明しただろう。今回俺は簪と組む事になるかも知れないって」

「皆、お願い……………私からも頼むわ」

一夏がそう返し、楯無もそう言って頭を下げる。

「「「「うっ……………」」」」

生徒会長に頭を下げられて、篝達は流石に黙り込む。

「あの……………盛り上がってるところ悪いけど……………当の本人が聞いてないみたいんだけど……………」

とそこで、シャルがそう口を挟む。

見れば、先程まで足を止めていた簪が、一同にすっかり興味を無くした様に、再びピットへと引き上げていた。

「ちよっ!? 待ってくれよ、簪!」

一夏が慌てて後を追うが、簪は立ち止まるどころか振り向きもしない。

「何よアレ! これだけやられて無視なんて、図太い神経してるわね!」

「いや、違っよ……………多分、最初から僕達の話に全く興味が無かったみたい……………」

鈴が怒る様にそう言うと、シャルが簪の様子からそんな事を推察する。

「やれやれ……………無愛想も極まってんな……………」

「本当にゴメンナサイ。ウチの妹が……………」

神谷がそう言うと、楯無が一同に向かって再び頭を下げる。

「い、いえ、そんな……………」

「何も生徒会長が頭を下げなくても……………」

「いえ……………私は生徒会長として頭を下げてるんじゃないわ。あの子の姉として頭を下げてるの」

セシリアと箒が、若干恐縮していると、楯無はそう言い放つ。

「まっ、気にすんな、楯無。妹の方は暫く俺達に任せておきな」

そんな楯無に、神谷はそう言いながら片腕を上げた。

「……………お願い」

「おっ」

楯無がそれだけ言うと、神谷は短く返事を返し、簪と一夏達が消えたピットへと引き上げて行く。

「……………」

それを見ていた一同の中で、箒が再び楯無を見やる。

仲の良くない姉妹……………」

その姿に、自分と東の境遇を重ねる。

東がISを開発したと言う事で、箒は人生を狂わされた。

しかし、彼女には自分の専用機を買った恩が有る。

それに……………

臨海学校の時、生徒達に向かってゴメンと言った東の姿が、箒の脳裏に甦る。

昔は人嫌いで、自分と千冬、そして一夏と神谷以外の人間には興味を示さず、親の事も辛うじて認識できる程度だった彼女が、生徒達に向かってゴメンと言った……………

その意味は分からないが、端的に箒は、東が変わっている……………

そして変わろうとしている事を感じ取っていた。

それと同時に、今まで避ける様にして来た東の事を、もっと知りたいを思う様になったのである。

だから、目の前の自分と似た境遇の姉妹……………更識姉妹を放って置く事が、彼女には出来なかった。

「楯無さん……………妹さんとの仲直り……………私も協力させていただけませんか？」

「!?!? 箒ちゃん!?!?」

「「「「!?」「」「」」

篝のその言葉に、楯無とシャル達が驚いた様に視線を向ける。

「御存じだと思いますが、私にも姉が居ます……………楯無さんと同じ様に、今は少し疎遠になっているのですが……………前に会った時に……………私は姉が変わろうとしているという事を感じました」

そんな楯無に、篝はそう語り出す。

「そんな姉の姿を見て……………私はまた前見たいに仲良くなりたいと思いました。結局、話をする前に、姉はまた何処かへ行ってしまったのですが……………だから、楯無さんにも妹さんと仲良くして欲しいんです」

「篝ちゃん……………」

楯無は驚いた表情のままに篝の事を見つめる。

「じゃあ、僕も協力するよ」

と、それに続く様に、今度はシャルがそう言って来た。

「!? シャルちゃん!?」

「神谷は兎も角……………アイツに一夏を独り占めされるのは癪ね」

「仕方ありませんわ……………ココは一時休戦と致しましょう」

「異論は無い」

「あゝ！　じゃあアタシも〜!!」

更に続けて、鈴、セシリア、ラウラ、そしてピットの出入り口に居たティトリーもそんな事を言っただけ来る。

如何やら、彼女達も手伝ってくれる積りらしい。

「皆……………ありがとう」

「気にしないで下さい、楯無さん。僕達は……………グレン団の仲間じゃないですか」

と、シャルがそう言ったかと思うと、自分のISに何時の間にかマーカーキングして在った、グレン団のマークを見せる。

「アンタ、それ何時の間に？」

「この前の整備の時にちょっとね……………」

「呆れたな……………」

鈴の問いにシャルがそう答えると、ラウラがそう呟いた。

「さて、行くか……………」

篤がそう言つと、一同は簪達を追って、アリーナを後にし出す。

と、最後尾を行っていた楯無がふと立ち止まると、それに気づかず篤達はティトリーを加えて、ピットの中に消えて行く。

「仲間か……………」

先程シャルに言われた事を思い出す様に呟く楯無。

楯無は更識家の当主であり、IS学園の生徒会長である。

幼馴染の友達である布仏姉妹は居たが、自身の優秀な能力も有って並び立って共に事に当たる仲間と呼べる者は余り居なかった……………

だが、シャル達はそんな彼女を仲間だと言ってくれた。

その事がとても嬉しい。

と……………

「仲間のありがたさを知ったか？ 更識 楯無」

「!?!」

突然後ろから聞こえて来た声に、楯無が驚きながら振り返るとそこには……………

腕組みをして悠然と佇むシュバルツ・シュヴェスターの姿が在った。

「シュバルツ・シュヴェスター!?! (何時の間に!?!)」

対暗部用暗部としての訓練を受けている自分にさえ気づかれずに背後を取ったシュバルツに、楯無は驚くと共に警戒する。

報告によれば、彼女は一夏達に味方していたらしいが、この前は一夏に襲い掛かったのである。

正体が不明な以上、立場上も警戒せざるを得なかった。

「更識 楯無……………お前は何をしている？」

「えっ？」

しかし、シュバルツはそんな楯無の警戒を無視し、そう問い質して来る。

「お前の事を仲間と認めてくれた者達は、お前の為に必死になろうとしている……………だが、そのお前は如何だ？」

「だ、だって……………簪ちゃんは私の事を……………」

シュバルツの得体の知れない迫力に押され、思わず素直に答えそうになる楯無だったが……………

「愚か者おっ！！！」

「!？」

覆面を被っている顔で唯一露出している目をクワツと見開き、シュバルツは楯無にそう言い放つ。

「1度の拒絶で諦めるとは……………貴様それで良く更識の当主だ、I S 学園最強の生徒会長だと名乗れたものだな……………」

「あ、う……………」

一見すると無茶苦茶な理屈なのだが、シュバルツが言い放った言葉は有無を言わせぬ説得力が有り、楯無は狼狽する。

「更識 楯無……………貴様が本当に恐れているのは、妹を傷付ける事では無く、自分が傷付く事ではないのか？」

「!?!」

その言葉に、楯無は自分の心を見透かされた様な気持ちになる。

「己が傷付く事を恐れる者に……………真の絆は芽生えはせんぞ……………」

シュバルツがそう言い、楯無に背を向けたかと思うと立ち去り始め、途中でその姿が幻の様にスーッと消えてしまう。

「……………」

残された楯無は、只その場に佇んでいるだけだった……………

一方、その頃……

?????

「よろしいですか？ 螺旋王様？」

グアームがロージエノムに向かって畏まりながらそう言う。

「……………何用だ？ グアーム」

相変わらず頬杖の姿勢を崩さず、ロージエノムは無表情のままですう尋ねる。

「ハッ、先程ヨーロッパ戦線の連中から面白い報告が入りまして……螺旋王様の耳に入れておこうかと……」

「……………言ってみる」

「ハッ……………」

ロージエノムに許可されると、グアームはその『面白い報告』について申し上げる。

「……………との事です。如何為さいますか？」

「貴様に任せる……………」

「ハハッ！ ではその様に……………」

それだけ言うと、グアームは再び前線任務へと向かう。

「……………人間とは実に愚かな生き物よ……………それ程までに我が身が可愛いものか……………」

グアームが消えた後……………

ロージエノムはまるで嘲笑するかの様な笑みを浮かべて、そう呟いたのだった……………

第41話『……ターンプックが冴えないわね』（後書き）

新話、投稿させていただきました。

再び『むせる』簪の話に戻ります。

タッグマッチの申し込み締切日が迫る中、いよいよ基礎組みが完了した簪のIS。

しかし、スクラップ部品から組み上げるといふ無茶をただけあり、飛行が不可能というかなりの欠点を抱える事となる。

そこで簪は、機動性を上げる為に、ローラーダッシュ機能付きの脚部パーツを装着し、更に装甲を限界まで薄くするという大胆な改造に出る。

そうして組みあがった自分の専用機……

『スコープドッグ』をテストする簪。

しかし、まだまだ調整不足であったその機体は、テストでいきなり大破する。

そんな中、楯無と簪の姿に、自分と束の姿を重ねた筈は、自分も彼女達姉妹の仲直りに協力すると申し出た。

更にシャルも名乗りを挙げ、結局グレン団は総出で楯無と簪の仲の修復を始めようとするのだった。

では、ご意見・ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9786v/>

天元突破インフィニット・ストラトス

2012年1月6日16時51分発行